大宰府史跡

昭和56年度発掘調査概報



昭和57年3月

九州歴史資料館

大宰府史跡

昭和56年度発掘調査概報

昭和57年3月

九州歴史資料館

序

昭和56年度の大宰府史跡発掘調査は、条坊地区の２ヵ処，観世音寺地区の１ヵ処について実施せられた。条坊地区では掘立柱建物や柵列，また大溝が検出され，観世音寺地区では建物，庭園などの遺構と共に化教関係遺物も発見されている。

条坊の存否を確認するまでに至らなかったが、すでに存在が確認されている遺構と，今次検出の遺構との関連性を究明する上からも，条坊地区の発掘調査の必要性が痛感される。ともあれ今次の発掘調査によって，大宰府史跡についての新しい資料を追加できたことは，私どもの悦びとするところである。

昭和56年度は大宰府史跡発掘調査第２次５ヵ年計画の最終年次にあたる。私どもの作業は牛歩の感を免れないが，しかし大宰府史跡の重要性に思いを致し，今後とも発掘調査に遺憾なきを期したい。各位の御鞭撻，御叱正を仰ぐ次第である。

終りに，発掘調査の御指導を賜わった大宰府史跡発掘調査指導委員長竹内理三氏ならびに同委員各位に謝意を表したいと思う。

昭昭57年３月31日

九州歴史資料館長　田　村　圓　澄

例　言

1．本概報は昭和56年度に実施した大宰府史跡の発掘調査概要の報告である。ただし，第70次・74次調査は昭和55年度の事業であるが，未報告であるので併せて報告する。また第78次調査の概要については調査継続中であるので次回にゆずる。なお第79次調査は顕著な遺構は検出されなかったので報告は割愛した。

2．検出遺構については九州芸術工科大学沢村仁教授の指導を得た。

3．遺構・遺物の写真については学芸第一課石丸洋の撮影による。

4．本概報の執筆・編集については調査課の石松好雄・倉住靖彦・髙倉洋彰・横田賢次郎・森田勉・髙橋章が行った。また遺物・図面の整理については白本和典・田崎道子・井上トシ子・大田和子の協力を得た。

目　　次

序

Ⅰ　調査計画……1

Ⅱ　調査概要……3

1　概要……3
2　第70次調査……4
　検出遺構……4
　出土遺物……10
　小結……66
3　第74次調査……69
　検出遺構……69
　出土遺物……72
　小　　結……106
4　第75次調査……107
　検出遺構……107
　出土遺物……108
　小　　結……111
5　第76次調査……112
　検出遺構……112
　出土遺物……114
　小　　結……143
6　第77次調査……145
　検出遺構……145
　出土遺物……149
　小　　結……167

挿　図　目　次

第１図　大宰府史跡発掘調査地域図……折り込み
第２図　層位模式図……4
第３図　第70次発掘調査遺構配置図……折り込み
第４図　井戸実測図……折り込み
第５図　暗渠施設ＳＸ1831・ＳＸ1832実測図……10
第６図　ＳＤ1805出土土器実測図……11
第７図　ＳＥ1770出土土器実測図(1)……12
第８図　ＳＥ1770出土陶磁器実測図(2)……13
第９図　ＳＥ1775出土土器実測図……14
第10図　ＳＥ1780・ＳＥ1785出土土器・陶磁器実測図……15
第11図　ＳＥ1790・ＳＥ1795出土土器・陶磁器実測図……16
第12図　その他の遺構出土土器・陶磁器実測図……18
第13図　ＳＫ1788出土土器実測図(1)……20
第14図　ＳＫ1788出土土器実測図(2)……21
第15図　ＳＫ1788出土陶磁器実測図(3)……22
第16図　墨書土器実測図……23
第17図　緑釉陶器実測図……23
第18図　各層出土陶磁器実測図(1)……25
第19図　各層出土陶磁器実測図(2)……26
第20図　各層出土陶磁器実測図(3)……27
第21図　各層出土陶磁器実測図(4)……28
第22図　ＳＤ1825・ＳＤ1830出土土器実測図(1)……31
第23図　ＳＤ1825・ＳＤ1830出土土器実測図(2)……32
第24図　ＳＫ1757・ＳＫ1774・ＳＫ1787出土土器実測図……34
第25図　ＳＫ1772出土土器実測図(1)……35
第26図　ＳＫ1772出土土器実測図(2)……36
第27図　ＳＫ1800出土土器実測図(1)……38
第28図　ＳＫ1800出土土器実測図(2)……39
第29図　ＳＫ1800出土土器実測図(3)……40
第30図　ＳＫ1800出土土器実測図(4)……41
第31図　ＳＫ1800出土土器実測図(5)……42

第32図　ＳＫ1800出土土器・陶磁器実測図(6)……43
第33図　ＳＫ1800出土墨書土器・硯実測図(7)……45
第34図　ＳＸ1810・ＳＸ1815出土土器実測図……46
第35図　整地層・濁茶色土層出土土器・陶磁器実測図(1)……48
第36図　整地層・濁茶色土層出土土器・陶磁器実測図(2)……49
第37図　軒先瓦拓影・実測図……50
第38図　文字瓦拓影……51
第39図　土管拓影・実測図……52
第40図　瓦経拓影・実測図……54
第41図　木製品実測図……57
第42図　石製品実測図……59
第43図　石鍋実測図……60
第44図　円面硯・猿面硯拓影・実測図……61
第45図　硯実測図……62
第46図　銅銭拓影……64
第47図　金銅製銙帯実測図……65
第48図　ＳＥ1795出土銅鏡拓影・実測図……65
第49図　金製獣形裁文実測図……65
第50図　鋳型実測図……65
第51図　僧房地区奈良・平安時代（前・中期）遺構配置図……67
第52図　層位模式図……69
第53図　第74次発掘調査遺構配置図……折り込み
第54図　井戸実測図……折り込み
第55図　ＳＤ205出土土器・陶磁器実測図……73
第56図　ＳＤ205Ａ出土土器実測図(1)……75
第57図　ＳＤ205Ａ出土土器実測図(2)……76
第58図　ＳＤ205Ａ出土土器実測図(3)……77
第59図　ＳＤ205Ａ出土土器実測図(4)……78
第60図　ＳＤ205Ａ出土陶磁器実測図(5)……79
第61図　ＳＤ205Ｂ出土土器・陶磁器実測図……81
第62図　ＳＤ205Ｄ出土陶磁器実測図……82
第63図　ＳＤ207出土土器・陶磁器実測図……83
第64図　ＳＤ215Ａ出土土器実測図(1)……85

第65図　ＳＤ215Ａ出土土器・陶磁器実測図(2)……86
第66図　ＳＤ215Ａ出土土器・陶磁器実測図(3)……87
第67図　ＳＤ215Ｂ出土土器・陶磁器実測図……88
第68図　第38次調査ＳＤ 860出土人面土器実測図……88
第69図　ＳＥ1920出土土器・陶磁器実測図……89
第70図　ＳＥ1930・ＳＥ1935・ＳＥ1940出土土器・陶磁器実測図……91
第71図　ＳＫ1950出土土器・陶磁器実測図……93
第72図　ＳＫ1952・1954・1955・1973・1977・1983出土土器・陶磁器実測図……95
第73図　その他の遺構・層出土陶磁器実測図……97
第74図　黒色土層出土軒平瓦……98
第75図　ＳＤ205出土木製品……101
第76図　ＳＤ215Ａ・Ｂ出土木製品……103
第77図　各遺構出土石製品……104
第78図　銅銭拓影……104
第79図　金属製品実測図……105
第80図　第75次発掘調査遺構配置図……折り込み
第81図　各遺構出土土器実測図……108
第82図　ＳＢ1990柱穴掘り方出土丸瓦拓影・実測図……109
第83図　ＳＢ1990・ＳＢ2000柱穴掘り方出土平瓦拓影・実測図……110
第84図　第76次発掘調査遺構配置図……折り込み
第85図　層位模式図……113
第86図　ＳＤ320上層出土土器・陶磁器実測図(1)……115
第87図　ＳＤ320中層出土土器・陶磁器実測図(2)……117
第88図　ＳＤ320下層出土土器・陶磁器実測図(3)……119
第89図　ＳＤ320下層出土土器・陶磁器実測図(4)……120
第90図　ＳＤ320最下層出土土器・陶磁器実測図(5)……122
第91図　ＳＤ2010出土土器実測図……123
第92図　ＳＤ2011・ＳＤ2012出土土器・陶磁器実測図……124
第93図　ＳＤ2015Ａ出土土器実測図……126
第94図　ＳＤ2015Ｂ上層出土土器実測図(1)……128
第95図　ＳＤ2015Ｂ上層出土土器実測図(2)……129
第96図　ＳＤ2015Ｂ下層出土土器実測図(3)……130
第97図　ＳＫ2007出土土器実測図(1)……132

第 98 図　ＳＫ2007出土土器実測図(2)…… 133
第 99 図　各層出土土器・陶磁器・円面硯実測図…… 135
第100図　ＳＤ320出土木製品実測図(1) …… 140
第101図　ＳＤ320出土木製品実測図(2) …… 141
第102図　銅銭拓影…… 142
第103図　火箸実測図…… 142
第104図　石帯実測図…… 142
第105図　鞴羽口・坩堝実測図…… 143
第106図　第77次調査遺構配置図…… 146
第107図　井戸実測図……折り込み
第108図　ＳＢ715・ＳＸ2020出土土器実測図 …… 149
第109図　ＳＤ205出土土器・陶磁器実測図 …… 150
第110図　ＳＥ2025・ＳＥ2045・ＳＥ2055出土土器・陶磁器実測図…… 151
第111図　ＳＥ2030・ＳＥ2035出土土器・陶磁器実測図…… 152
第112図　ＳＫ2070出土土器実測図(1)…… 156
第113図　ＳＫ2070出土土器実測図(2)…… 157
第114図　ＳＫ2071出土土器実測図…… 158
第115図　ＳＫ2072出土土器実測図…… 160
第116図　ＳＫ2073・ＳＫ2074出土土器実測図…… 161
第117図　ＳＫ2060・ＳＫ2065・ＳＫ2083・ＳＫ2091出土土器・陶磁器実測図…… 164
第118図　ＳＫ2077・ＳＫ2078・ＳＫ2084出土土器・緑釉陶器実測図…… 165
第119図　銅銭拓影…… 167

図　版　目　次

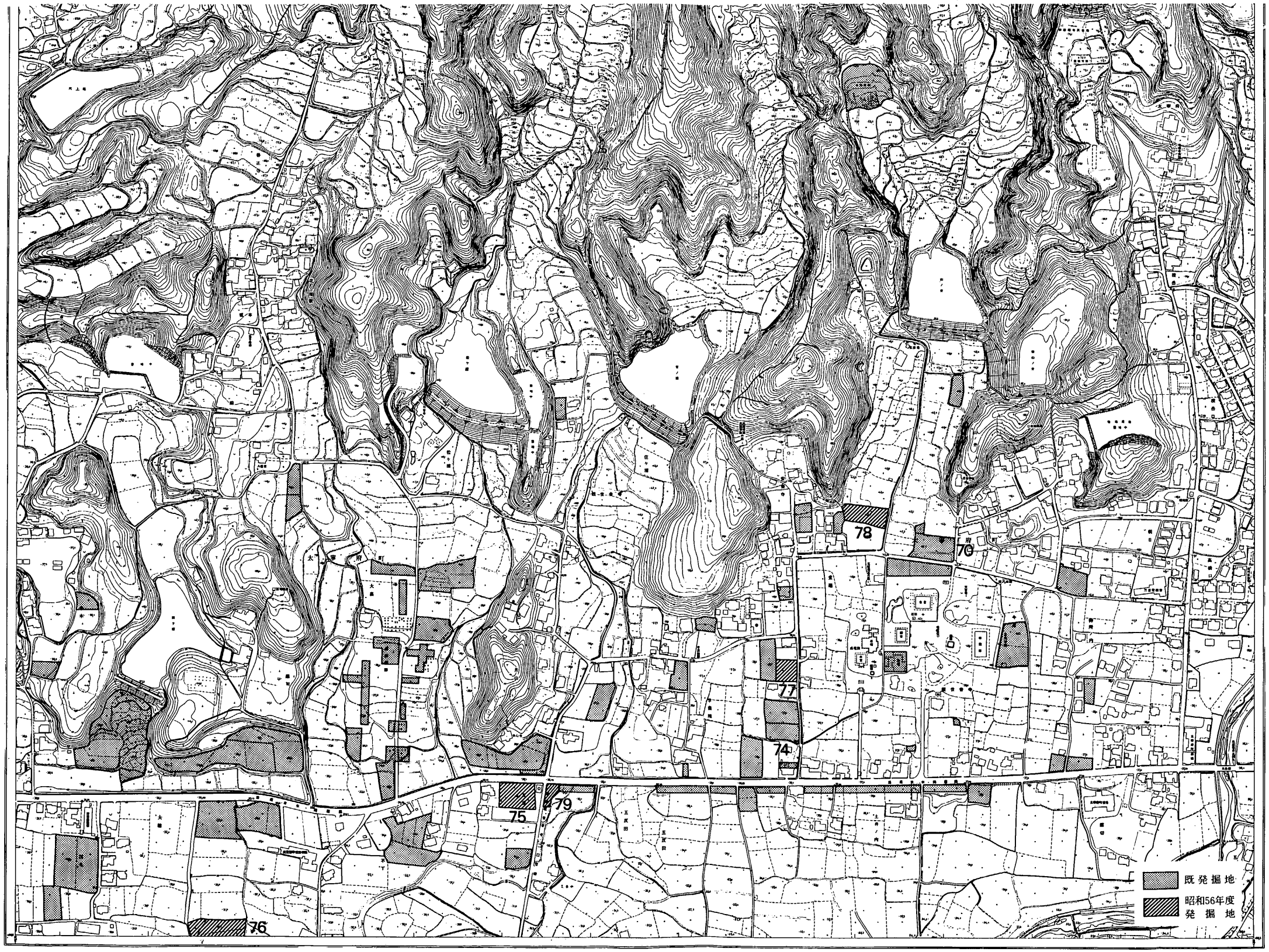
図版 1　第70次調査区最上層全景
図版 2　第70次調査区上層全景
図版 3　第70次調査区下層全景
図版 4　（上）柵状遺構ＳＡ1840
　　（下）同上柱根
図版 5　（上）掘立柱建物ＳＢ1730・ＳＢ1735全景
　　（下）地鎮遺構ＳＸ1815
図版 6　暗渠遺構群の全景

図版７　暗渠施設ＳＸ1831・ＳＸ1832
図版８　暗渠施設ＳＸ1833
図版９　（上）暗渠施設ＳＸ1834
（下）暗渠施設ＳＸ1835
図版10　（上）井戸ＳＥ1765全景
（中）井戸ＳＥ1760全景
（下）井戸ＳＥ1755全景
図版11　（上）（中）井戸ＳＥ1770全景
（下）井戸ＳＥ1775全景
図版12　（上）井戸ＳＥ1780全景
（中）井戸ＳＥ1785
（下）井戸ＳＥ1790
図版13　井戸ＳＥ1795全景
図版14　（上）土壙ＳＫ1781
（中）土壙ＳＫ1782・ＳＫ1783
（下）土壙ＳＫ1800
図版15　土壙ＳＫ1788全景と遺物の出土状態
図版16　（上）溝ＳＤ1805全景
（下）ＳＸ1478
図版17　（上）ＳＸ1690
（下）石組遺構ＳＸ1701
図版18　（上）第74次調査区全景
（下）調査区の東半
図版19　（上）調査区東半の溝群
（下）溝ＳＤ215Ａとその護岸の状況
図版20　（上）調査区西半の柱穴群
（下）掘立柱建物ＳＢ1970・ＳＢ1975全景
図版21　（上）井戸ＳＥ1920全景
（中）（下）井戸ＳＥ1925全景
図版22　（上）井戸ＳＥ1930・ＳＥ1935・ＳＥ1940全景
（中）井戸ＳＥ1930
（下）井戸ＳＥ1935
図版23　第75次調査区全景

図版24　（上）（下右）掘立柱建物ＳＢ1990全景
　　（下左）柵状遺構ＳＡ1999全景
図版25　掘立柱建物ＳＢ1995全景
図版26　掘立柱建物ＳＢ2000
図版27　（上）掘立柱建物ＳＢ1990の掘り方内礎板
　　（下）掘立柱建物ＳＢ1995の掘り方内礎板
図版28　掘立柱建物ＳＢ2000の掘り方内礎板
図版29　第76次調査区全景
図版30　溝ＳＤ320全景
図版31　溝ＳＤ2015全景
図版32　（上）調査区の南半
　　（下）護岸状遺構ＳＸ2013
図版33　第77次調査区全景
図版34　（上）掘立柱建物ＳＢ700東側柱の一部
　　（下）掘立柱建物ＳＢ715東側柱列
図版35　奈良期の土壙列ＳＫ2070・ＳＫ2071・ＳＫ2072
図版36　（上）築地状遺構ＳＸ2020全景
　　（下）溝ＳＤ205全景
図版37　（上）井戸ＳＥ2025全景
　　（中）井戸ＳＥ2030・ＳＥ2035全景
　　（下）井戸ＳＥ2030
図版38　井戸ＳＥ2040全景
図版39　井戸ＳＥ2045
図版40　（上）井戸ＳＥ2050全景
　　（中）（下）井戸ＳＥ2055
図版41　第70次調査ＳＤ1805出土土器・陶磁器
図版42　第70次調査ＳＥ1770出土土器・陶磁器
図版43　第70次調査ＳＥ1775・ＳＥ1785出土土器・陶磁器
図版44　第70次調査ＳＥ1795・ＳＥ1790出土土器・陶磁器
図版45　第70次調査ＳＫ1685・ＳＫ1707・ＳＫ1782・ＳＸ1738出土陶磁器
図版46　第70次調査ＳＫ1788出土土器・陶磁器
図版47　第70次調査ＳＸ1737・暗灰色砂層・茶灰色土下層出土土器
図版48　第70次調査各層出土陶磁器（１）

図版49　第70次調査各層出土陶磁器(2)
図版50　第70次調査各層出土陶磁器(3)
図版51　第70次調査各層出土陶磁器(4)
図版52　第70次調査ＳＤ1830出土土器・土製風招
図版53　第70次調査ＳＤ1830・ＳＤ1825出土土器
図版54　第70次調査ＳＫ1772出土土器・陶磁器
図版55　第70次調査ＳＫ1774・ＳＫ1787出土土器
図版56　第70次調査ＳＫ1800出土土器(1)
図版57　第70次調査ＳＫ1800出土土器(2)
図版58　第70次調査ＳＫ1800出土土器・陶磁器
図版59　第70次調査ＳＫ1800出土墨書土器
図版60　第70次調査ＳＸ1810・ＳＸ1815出土土器
図版61　第70次調査整地層・濁茶色土層出土土器
図版62　第70次調査整地層・濁茶色土層出土土器
図版63　第70次調査出土塩壺
図版64　第70次調査出土軒先瓦・土管
図版65　第70次調査出土瓦経
図版66　第70次調査出土木簡
図版67　第70次調査ＳＤ1805・ＳＥ1790・ＳＫ1769・ＳＫ1800出土木製品
図版68　第70次調査出土石製品
図版69　第70次調査出土硯(1)
図版70　第70次調査出土硯(2)
図版71　第70次調査出土金属製品・土製品
図版72　第74次調査ＳＤ205・ＳＤ205Ａ出土土器・陶磁器
図版73　第74次調査ＳＤ205Ａ出土陶磁器
図版74　第74次調査ＳＤ205Ｂ・ＳＤ205Ｄ出土陶磁器
図版75　第74次調査ＳＤ207出土土器・陶磁器
図版76　第74次調査ＳＤ215Ａ出土土器
図版77　第74次調査ＳＤ215Ａ出土陶磁器
図版78　第74次調査ＳＤ215Ａ出土土器および各層・各遺構出土の陶磁器
図版79　第74次調査ＳＥ1935・ＳＥ1940・ＳＫ1950・ＳＫ1952・ＳＫ1953出土陶磁器・竈
図版80　第74次調査出土漆紙文書
図版81　第74次調査出土木簡

図版82　第74次調査ＳＤ205・ＳＤ205(Ａ・Ｂ・Ｄ)・黒色砂質土層出土木製品
図版83　第74次調査ＳＤ215Ａ・Ｂ出土木製品
図版84　第74次調査出土軒平瓦・乾元大寶・金属製品・石製品
図版85　第75次調査出土丸瓦・平瓦
図版86　第76次調査ＳＤ320上層出土土器・陶磁器
図版87　第76次調査ＳＤ320中層・下層出土土器・陶磁器
図版88　第76次調査ＳＤ320出土土器・陶磁器
図版89　第76次調査ＳＤ2015Ａ出土土器
図版90　第76次調査ＳＤ2015Ｂ上層出土土器
図版91　第76次調査ＳＤ2015Ｂ上層・下層出土土器
図版92　第76次調査ＳＤ2010・ＳＤ2011・ＳＤ2012出土土器・陶磁器
図版93　第76次調査ＳＫ2007出土土器
図版94　第76次調査各層出土土器・硯・陶磁器・ＳＫ2007出土塩壺
図版95　第76次調査出土木簡
図版96　第76次調査ＳＤ320出土木製品(1)
図版97　第76次調査ＳＤ320出土木製品(2)
図版98　第76次調査出土金銅製箸・石帯・富壽神寶
図版99　第77次調査ＳＤ205出土土器・陶磁器
図版100　第77次調査ＳＥ2030出土土器・陶磁器
図版101　第77次調査ＳＥ2045・ＳＥ2055出土土器・陶磁器
図版102　第77次調査ＳＫ2070出土土器
図版103　第77次調査ＳＫ2071・ＳＫ2072・ＳＫ2074 出土土器
図版104　第77次調査ＳＫ2073出土土器・陶器
図版105　第77次調査ＳＫ2083・ＳＫ2065・ＳＫ2077・ＳＫ2084出土土器・陶磁器



第1図　大宰府史跡発掘調査地域図

Ⅰ 調 査 計 画

本年度の発掘調査は昭和52年度に立案した大宰府史跡発掘調査第２次５ヵ年計画の最終年次にあたる。この計画では観世音寺ならびに同子院跡および条坊地区の遺構を明らかにすることを主眼として発掘調査を進めてきた。昭和55年度までの発掘調査結果について振りかえってみると，まず観世音寺については，東面築地推定地および僧房跡について調査を行った。東面築地については同推定地が中世に大きく変革を受けており，目的とした築地遺構を検出することができなかった。しかしながら調査区のほぼ中央部で検出した南北溝から唐三彩の鍑の破片が出土したことは，本例がわが国における４遺跡目の出土であり，大きな収穫であった。僧房跡については昭和51年度に行った大房の調査につづいて，昭和55年度に小子房推定地について調査を行った。その結果については，今回報告するごとく，同地域も同じく中世に大きく変革を受けており，わずかに暗渠施設および周辺の土壙等の遺構のあり方から４棟の東西棟建物の存在が推定できるにとどまった。次に観世音寺子院跡については昭和53・54年度に２回にわたって推定金光寺跡の調査を行った。調査地は現在字名を「今光寺」といい，昭和28年には九州文化総合研究所によって一部調査が行われており，遺構の存在が確認されていた。今回の調査では当初はこの遺構を再確認することを目的としてトレンチを設定し，調査を行ったのであるが，意外に遺構が広範囲に及んでいることが判明したため，急拠全面調査を行うこととした。調査の結果礎石建物５棟が検出されるとともに，遺物の面においても墨書木札や陶磁器類など内容的にも豊富なものがあり，大きな成果をあげることができた。その中にはこの遺構が寺院であったことを想定させる仏具類などが含まれているが，その反面墨書木札の中にはすでに報告したごとく「さいふのいつみたゆふとの」・「十くわんとう四郎」などのように武士的人名を記した物も含まれており，新に居館跡的性格を持った遺構ではないかとの意見も提出されるにいたり，にわかには子院跡と断定することはできなくなった。この点については今後他の子院跡推定地の発掘調査を進めていくなかで，検討していきたいと考えている。次に条坊地区の調査については当該地域が未指定地であるため，これまでは計画的に発掘調査を行うことは困難な状況であった。ところが，今回の５ヵ年計画を策定するにあたって太宰府町当局から指定地前面を東西に走る県道山家～関屋線と御笠川との間にはさまれた地域について区画整理事業が行われることが明らかにされたため，この地域の事前調査を積極的に行うこととして，計画に加えることとした。調査を行うにあたっては，対象面積が広大な範囲に及ぶため，これまでに遺構が確認されている政庁前面地域を集中的に調査を行うこととし，史跡指定地内については条坊遺構解明の手がかりになると推定される蔵司前面地域を全面調査することとした。

まず蔵司前面の調査では3回にわたる調査によって，東西にのびる築地2条と奈良・平安期に属する建物4棟を検出した。しかしながら条坊遺構解明の手がかりとなる積極的な資料は得ることはできなかった。また政庁前面地域では朱雀大路推定地2ヵ所について調査を行った。調査地はいずれも南門南側の政庁中軸線上であるが，調査の結果は何ら遺構は検出されず，南門前面は一種の広場的要素を持った場所ではなかったかと推定されるにいたった。以上述べたような過去4年間にわたる調査成果をもとに，最終年度にあたる昭和56年度は次の個所について調査を行うこととした。

調査次数	調　査　地　区	調査面積(㎡)	調　査　期　間	備　　考
75	6ＡＹＩ－Ｂ	1,075	4月～6月	左郭五条二坊
76	6ＡＹＭ－Ｂ	1,300	7月～10月	右郭六条二坊
77	6ＫＫＺ－Ａ	1,050	11月～2月	観世音寺北面築地

まず第75次調査は条坊復原案からいくと左郭五条二坊にあたり，政庁東側にある月山の南にあたる。この地域では昭和48年度から49年度にかけて行った調査によって今回調査地の南側に掘立柱建物が存在することが確認されているとともに，北側では柵列によって囲まれた建物群が検出されている。したがって今回の調査では遺構の有無を確認するとともに，相互の関連についての知見を得ることを目的とした。

第76次調査は右郭六条二坊にあたり，蔵司の南面 200ｍのところである。この地域については昭和46年度に現在の県道山家～関屋線に接した地域について行った調査において奈良時代後半頃と考えられる南北にのびる幅12m ほどの大溝が検出されているが，今回の調査地はその南延長部にあたる。以上2カ所の調査は区画整理事業の事前調査をも兼ねている。

次に第77次調査として観世音寺北面築地推定地について調査を行うこととした。この旧観世音寺伽藍の北部については，これまでに大房，小子房推定地について調査を行っているが，当該地は背後の四王寺山からのびてくる丘陵の間にあり，谷地形となっているため，後世の氾濫が著しく，このため遺構はほとんど失われており，かろうじて大房を復原できたにとどまった。したがって北面築地についてもその遺存状況についてはかなり悲観的であった。

以上の計画については昭和56年5月20・21日に開催した大宰府史跡発掘調査指導委員会議において了承されたため計画どおり調査を実施することとした。

Ⅱ 調 査 概 要

1 概 要

昭和56年度は第75次調査（左郭五条二坊）として予定していた地域の表土除去作業をすでに昨年度に終了していたため，そのまま継続して調査を行うこととした。

この地域は後世の削平を受けていたため遺構面はきわめて浅く，したがって遺構検出作業は予定よりも早く終了した。検出した遺構は調査区中央部における３間×９間の東西棟建物と南辺部の３棟の掘立柱建物および柵列１条であり，遺構の密度も希薄であった。

この調査と並行して４月１日から第76次調査（右郭六条二坊）に着手した。この調査はすでに記したごとく幅12m 以上に及ぶ大溝の延長部であり，溝の深さも遺構面から約1.5ｍにおよんでいたため，その埋土の調査に長期間を要した。検出した遺構はこの大溝の延長部約25m と東西溝３条および建物１棟である。

この第76次調査の終了とともに第77次調査（観世音寺北面築地）に着手する予定であったが，当該地は排土置場がないため稲刈りを待って調査することとし，計画を変更して新たに学校院東辺部を加え，第77次調査として行うこととした。調査地は学校院と観世音寺との境界にあたるところで，これまでに第９・36・74次調査を行っており，南北溝および掘立柱建物，井戸などを検出している。調査の結果，南北溝の北延長部，掘立柱建物，井戸および築地状遺構などを検出し，12月初旬に調査を終了した。この調査終了とともに，当初の計画であった観世音寺北面築地推定地の調査に着手した。２月末日現在，この調査は継続中である。

検出した遺構は礎石建物２棟，掘立柱建物２棟のほか池をともなう庭園遺構などである。これらはいずれも14世紀中頃から16世紀代にかけてのもので，池の中から出土した遺物には位牌，卒塔婆，線香立てなどの仏教関係の遺物が含まれており，寺院跡の可能性が強い。このほか区画整理事業にともない第75次調査地の東側において小規模の調査を行った。

昭和56年度の発掘調査地を地区別に記すと下記のとおりである。

調査次数	調 査 地 区	調査面積（㎡）	調 査 期 間	備 考
75	６ＡＹＩ－Ｃ	960	810224～810501	左郭五条二坊
76	６ＡＹＭ－Ｂ	1,150	810401～810911	右郭六条二坊
77	６ＺＧＫ	450	810908～811208	学校院東辺部
78	６ＫＫＺ－Ｂ	1,017	811125～82	観世音寺北面築地
79	６ＡＹＩ－Ｃ	65	820210～820218	左郭五条二坊

2　第70次調査

昭和51年度に調査を実施し，僧房（大房）の遺構を確認できた第43次調査地域の北にあたる約1,150㎡が本次調査の対象地域である。第43次調査によって検出した建物は大房1棟だけであったので，今回はその背後に配されたであろう小子房・客僧房の検出を目的として調査を実施した。地番は筑紫郡太宰府町大字観世音寺字山ノ井845・846である。

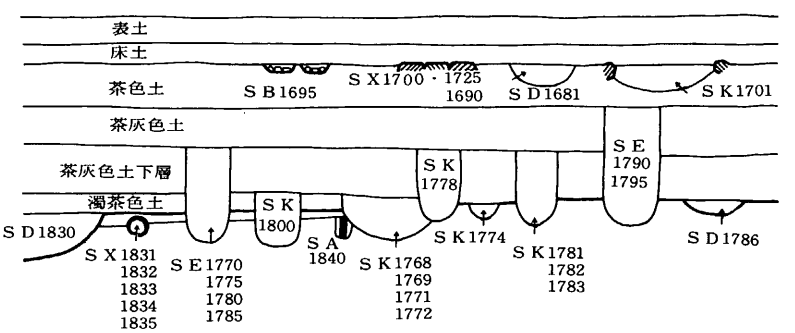
調査は昭和55年4月6日に開始した。表土床土を除去すると，すぐに江戸時代の終り頃か明治時代初頭頃の建物跡が検出された。これらの遺構を調査すると同時に，南側の一段低い地域を調査した。その結果，南側地域はすぐに地山面になり，古代・中世の遺構が検出された。北側地域と南側地域の段落ちの断面をみると，目的とする僧房跡の遺構面までには厚い層がかぶっていることが判明した。そのため，その間にある近世・中世の遺構を調査することになり，同9月にいたってようやく僧房が配されたであろう遺構面に達した。完全に削平されたためか，精査したにもかかわらず，僧房の建物跡は何等検出できなかった。しかし，規則正しい空間地域が存していることからこの地に僧房の建物跡が配置されたことは確実と考えられる。同12月3日に遺構実測・写真撮影等全ての作業を終了し，その後埋め戻し作業を行った。

検出遺構

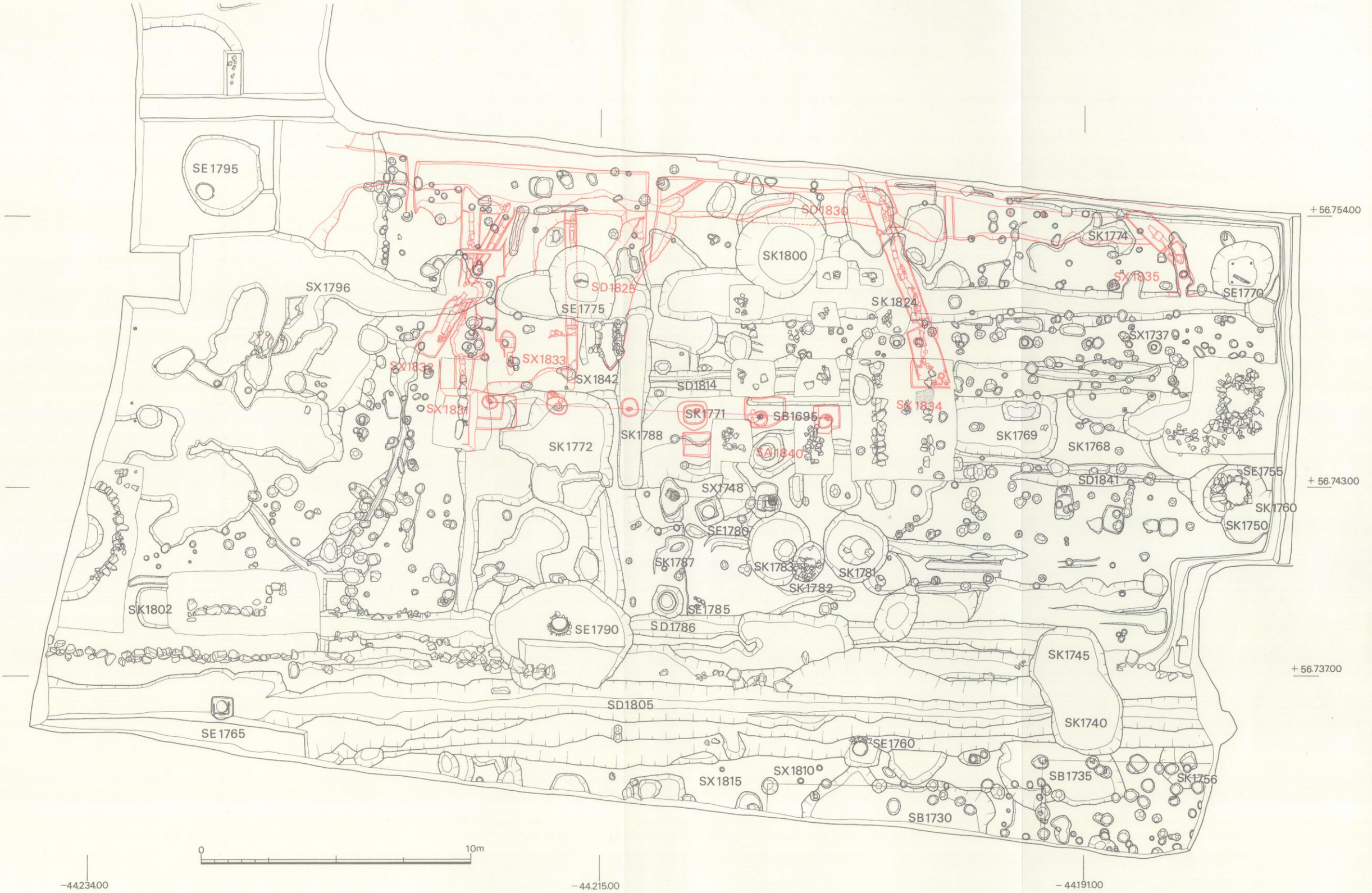
土層の関係（第2図）

調査地はＳＤ1805を境として北側部分は一段高くなる。南側部分では表土・床土を除去するとすぐに花崗岩バイラン土になり，そこに建物や土壙群が発見されたため，遺構を層位的に把握はできなかった。第2図に示した層位模式図は北側部分で検出した層や遺構群の相対的位置関係を示したものである。

まず，表土・床土を除去すると，茶色土層が現われ，その上に礎石建物ＳＢ1695の根石群や建物の側石と考えられるＳＸ1690・1700・1726や石組遺構ＳＸ1685等が発見された。これらの諸施設をもし一連の建物群とすれば，ＳＸ1700やＳＫ1701がＳＸ1698の上位にあたるため，江戸時代後期か明治時代初期と考えられる。また西部域は四王寺山から



第2図　層位模式図



第３図　第70次発掘調査遺構配置図

派生する谷筋にあたるため，土砂の流れにより茶色土層は深く削りとられていた。茶色土層からは室町時代の遺物が多く出土したが，これを取り去ると茶灰色土層に達する。茶灰色土層では鎌倉時代の土器や陶磁器が多量に発見された。この層を切り込んでＳＥ1790・1795やピット・土壙群が多く発見された。この下の層が茶灰色土層下層で，ここに切り込まれた遺構は非常に多く，ＳＫ1788やＳＥ1770・1775・1780・1785等があり，平安時代終末期のものを中心とする。濁茶色土層や整地層上の遺構が奈良・平安時代に属する。長方形の土壙が東西の連なるＳＫ1768・1769・1771・1772や土器を極めて多量に出土したＳＫ1800等が代表的な遺構である。濁茶色土層を除去すると整地層になり，ここで土管列ＳＸ1831・1832・1833・1834・1835やＳＤ1830を検出した。整地層を除去すると黒色系統の粘質土になり，ここに柵列ＳＡ1840が造られていた。７世紀後半代の遺構である。

以上，調査地で検出した遺構を，層位との関係から見れば，最上層（茶色土層），上層（茶灰色土層・茶灰色土下層），下層（濁茶色土層，整地層）と最下層（整地層下）の各遺構に大別できる。

以下，層位毎に遺構を説明していくが，最上層上の遺構のうち江戸時代以降のものは省略する。

最上層の遺構

掘立柱遺構

ＳＸ1748　発掘区中央部で検出した。茶灰色土層に掘り込まれた一対の掘立柱である。共に柱根が残っており，東側のものは径35cm，西側は径40cmである。また柱根下端には礎板として石を据えている。柱の心々距離は3.68m である。掘り方はどちらも約１m 前後の不整形なものである。この柱根に連続した柱穴は認められないため，鳥居状のものが想定されるが，柱が直立していることに疑問が残る。

溝

ＳＤ1805　発掘区南部にある東西溝である。溝底面は東端から西端にかけてゆるやかに傾斜しており，10m で７cmの高低差がある。溝の北側肩部には径30cm～60cmの自然石を配列し，護岸施設としている。石列は西半部が比較的良く残っていたが，全て南側に若干ずれていた。南側肩部には石は検出されなかった。溝幅は上端で約４m，下端で0.5m ～0.9m，深さ約1.5m である。溝中には黒色粘質土が堆積し，「文亀元年」銘の木簡が出土した。

上層の遺構

掘立柱建物

ＳＢ1730　ＳＤ1805の南側で検出した東西方向の掘立柱建物で，ＳＢ1735と重複している。桁行は５間で，柱間は約2.07m 等間である。梁行は東側で１間（1.8m）分を検出したが，さらに発掘区域の南側へ延びているため明らかでない。柱穴掘り方は円形で径0.4m～0.6mである。

ＳＢ1735　ＳＢ1730の東側で検出した。発掘区の東・南側へ延びるため，梁・桁行は明らかでない。検出した柱穴は桁行３間（柱間寸法約1.8m 等間）・梁行１間（1.9m）である。掘り方は径約0.5m ～0.6mの円形状のものである。

井戸

ＳＥ1755　発掘区の東端でＳＫ1750と切合い関係をもって検出した石組の井戸である。掘り方は円形に近い形状を呈し，東西径4.6ｍである。井戸上端で径0.84m を測るが，出入りがかなりある。石は花崗岩の自然石を用い，人頭大のものが比較的多く使用されている。井戸中に竹を立てていた。上端から約1.2ｍまで検出したが，崩壊の危険があるため完掘はしなかった。大宰府井戸分類のⅤに属する。

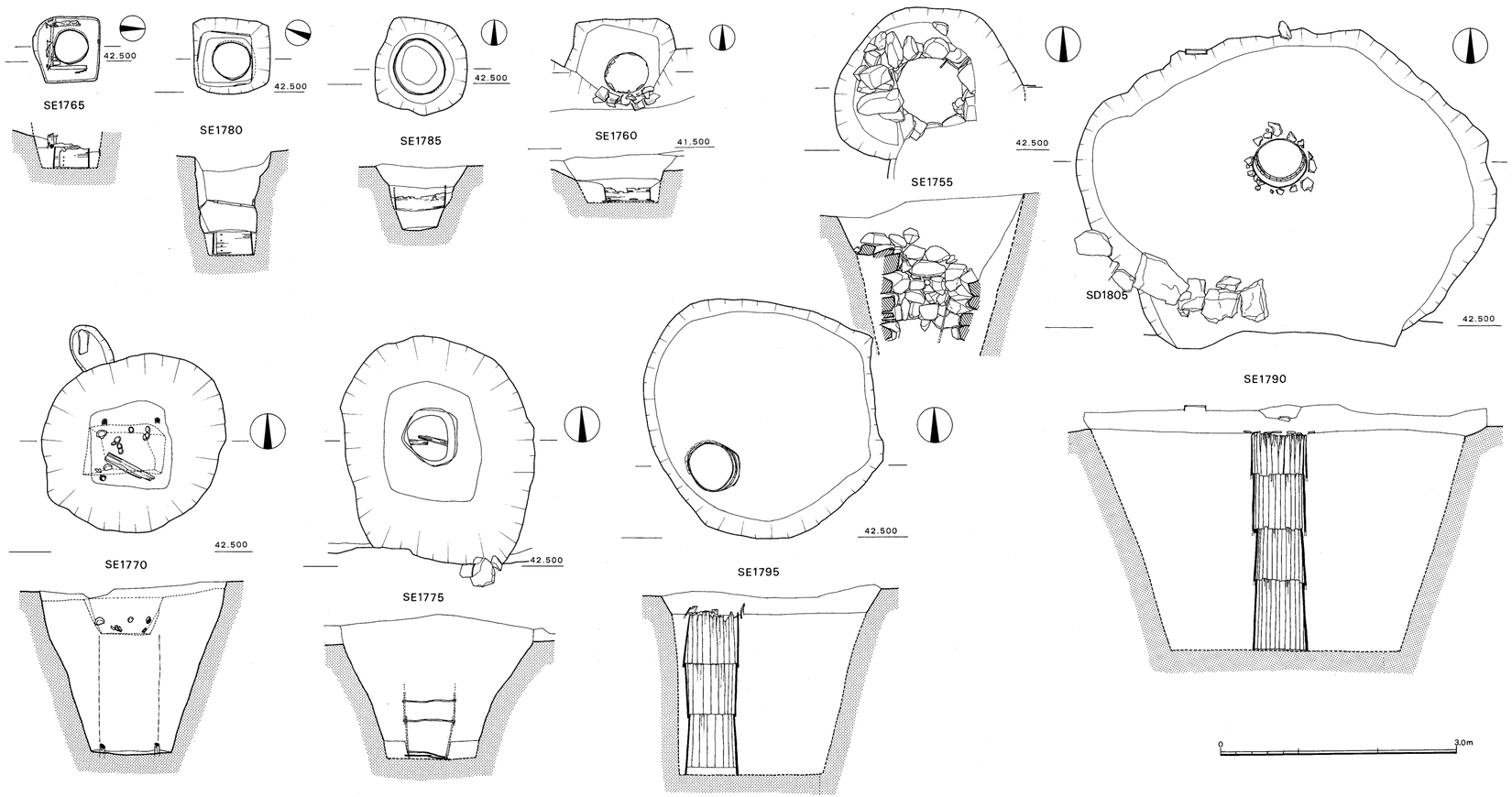
ＳＥ1760　ＳＤ1805の南肩で検出したもので，ＳＤ1805によって切られている。保存状態が悪く，最下底に曲物を残存するのみである。掘り方は北半分が残っており，そのプランからみて隅丸方形（１辺1.24m）を呈するものであろう。曲物は径56cm，現存高18cmの円筒形である。曲物の南上端部に平瓦数枚が配されている。

ＳＥ1765　ＳＤ1805の溝に切られている。掘り方は隅丸方形（約0.64m×0.8m）を呈するが南辺部のみ弓状に張り出している。井戸枠上部は南辺部に数枚の板材を残すのみで，既に欠損して詳らかでないが，井戸分類のⅡ－Ｂ－ｂに属す。最下底に曲物１（径44cm，高さ26cmの円筒形）を据えている。東・南・西部に横桟が残存する。

ＳＥ1770　発掘区の東北隅において，茶灰色土下層を切り込んで検出した井戸である。掘り方は円形に近い形状（径約2.20m）を呈し，掘り方底面までの深さは2.1ｍである。上層部において長方形状（1.0m ×0.6m）を呈し，深さ45cmの土壙状になった炭層を検出した。炭層内からは土器がまとまって出土した。井戸枠は既に欠失して明らかでないが，掘り方底面は隅丸方形を呈し，南東隅部をのぞいた３隅部に径６cmの隅柱が残存していた。このことから，方形縦板枠組のものと考えられる。

ＳＥ1775　茶灰色土下層を切込んで作られた井戸である。掘り方は南北に長い円形状（約2.8m ×2.4m）を呈し，掘り方底面までの深さは1.5m である。井戸枠は既に欠失し，明らかでないが，竹タガ三段を検出した。竹タガの最下段と中段の幅は約50cmであり，また最下底には幅６cm，長さ約50cmの板材が数枚検出された。これらのことから井戸構造は桶側様のものと考えられる。

ＳＥ1780　発掘区中央部で検出した井戸である。掘り方は隅丸方形(0.9m ×0.94m）を呈するが，各辺に若干の出入りがみられる。掘り方底面までの深さは1.24m である。上端部は既に欠損し，明らかでないが，掘り方中ほどに竹の横桟が残存しており，縦板を並べて方形の枠組みを作ったものと考えられる。最下底に曲物１（径49cm，高さ28cm）を据えている。また掘り方上層部でまとまって白磁が出土した。井戸分類のⅡ－Ｂ－ｂに属する。


42.500
SE1765
42.500
SE1780
42.500
SE1785
41.500
SE1760
42.500
SE1755
SD1805
42.500
SE1790
42.500
SE1770
42.500
SE1775
42.500
SE1795
0
3.0m

第4図　井戸実測図

ＳＥ1785　茶灰色土下層を切り込んで，ＳＥ1790の東側で検出した井戸である。掘り方は円形に近いプラン（東西1.14m，南北1.2m）を呈し，底面までの深さ0.82m である。掘り方は上端から約26cmのところで稜線がつき，下方になるにつれて幅が狭くなっている。最下底より約20cm上方に曲物１（径64cm，現存高17cm）が検出された。この曲物と掘り方の構造からみて，おそらく曲物を枠組とした井戸と考えられる。井戸分類のⅢに属する。

ＳＥ1790　ＳＤ1805と切り合い関係にあり，ＳＥ1790が先行する。掘り方は今回検出した井戸の中で，最も大きいものである。長円形（約3.8m×5.3m）の形状を呈し，底面までの深さ3.1m である。井戸枠は掘り方のほぼ中央に据えられ，桶側構造のものを4段検出した。上面には小石，丸・平瓦などが桶側の周囲に配されていた。最下段の桶側は保存が最も良好で，内径は上端で径56cm，下端66cm，高さ88cmである。板材は幅約６cm前後のものが多く，最上段のみ21枚で，他は全て22枚を組合せて桶側としている。井戸分類Ⅵ－Ａ類。

ＳＥ1795　発掘区西端で検出した円形の井戸である。この井戸は桶側様の枠を４段積み重ねて井戸側としている。掘り方は円形状（径約３ｍ）を呈し，底面までの深さ2.3ｍである。２段目の井戸枠は上端部が開き，下部は狭くなっている。最も保存の良好な最下段の桶側の内径は，上端で58cm，下端で66cm，高さ77cmである。井戸中から土器・鏡等が出土した。井戸分類のⅣ－Ａに属する。

土壙

ＳＫ1740・1745　発掘区東南部で検出した。井戸と考えられたので遺構面より約1.5ｍ掘り下げたが，井戸枠などは検出されず，出土遺物も少なかった。しかし，掘り方の形状からＳＫ1740・1745共に井戸の可能性が強い。

ＳＫ1750　発掘区東端部で検出した。ＳＥ1755，ＳＫ1760と切合っており，ＳＥ1755より先行するものである。ＳＥ1755が崩壊する恐れがあるため，ＳＫ1760と共に完掘しなかった。井戸の可能性が考えられる。

ＳＫ1781・1782・1783　茶灰色土下層に掘り込まれた土壙で，発掘区中央部の東南寄りにある。３つのうちＳＫ1781は東端に位置し，平面はほぼ円形（径2.4ｍ）に近く，深さは遺構面から約1.47m である。掘り方は２段掘りになっており，底面は円形で径0.7ｍである。井戸の可能性が強い。ＳＫ1782より先行するものである。ＳＫ1782はＳＫ1781、ＳＫ1783の間にあり，両者を切っている。上端部には拳大の石や瓦等が多数発見された。平面は長円形（1.5m×1.15ｍ）を呈し，深さ約0.8m である。底面は径約0.5m である。ＳＫ1783はＳＫ1781と同様な土壙である。上端径2.6m，下端径0.5m，深さ約１ｍである。井戸の可能性が強い。

ＳＫ1788　発掘区の中央部にある。茶灰色土下層に掘り込んだ南北方向に長い土壙である。南北幅6.8m，東西は中央部で幅約1.2m，深さは遺構面から約0.43m である。底面は平坦に近い。土壙中から多量の土師器が出土した。このような長い土壙が何の目的で掘られたものか定

かでないが，第38次（学校院地区）調査で検出したＳＫ830・835も同様な長方形土壙であった。

ＳＫ1802　発掘区の西南部で検出した。東側はＳＸ1700があるため明らかでない。検出した土壙の形状は隅丸方形を呈し，南北約1.5m，深さ約1.0m である。井戸になる可能性がある。

下層の遺構

溝

ＳＤ1786　ＳＤ1805の北側で検出した東西溝である。ＳＥ1790, ＳＫ1745, 1778から切られている。溝は茶灰色土下層を除去した後に検出した。溝中央部で上端幅約0.9m，下端幅約0.5m，深さ約0.16m である。溝の西端部には拳大の自然石が不規則に配されていた。埋土は暗灰色砂質土である。溝中から須恵器，土師器が出土したが，全て細片化していた。

ＳＤ1814　ＳＫ1768・1769・1771の北端部で検出した。東西溝であり，この土壙群によってＳＤ1841と同様に切られている。溝は約7.4ｍ検出したが，東・西端部は攪乱およびＳＫ1788に切られているため明らかでない。上端幅約0.4ｍ，下端幅約0.2ｍ，深さ約0.1ｍである。ＳＤ1841と平行して走る。

ＳＤ1825　ＳＸ1833の東側に位置する南北溝で，南から北へ流れる。埋土はＳＤ1830と同様に灰色の砂である。ＳＤ1830との切り合い関係を探るため注意深く調査を実施したが，切り合い関係はなく，一連の溝であることが判明した。暗渠施設があることから，当初からつくられたものではないと考えられる。この溝埋土上にＳＸ1842がつくられている。このＳＸ1842の北側はＳＥ1775やＳＫ1793によって切られているため明らかでない。このＳＸ1842はＳＤ1825の最終期に伴う施設であるが，どこまで上るかは明らかでない。ＳＸ1842北端から北側にかけて多量の焼塩壺の破片とともに「安居」の墨書銘を有する須恵器皿が出土した。

ＳＤ1830　暗渠施設ＳＸ1831～1835の北側を東から西へ流れる浅い東西溝である。濁茶色土層を除去して検出した。溝の北岸は発掘区域外になるため，その幅は明らかでない。また，溝の西方は土砂の流れのため破壊されている。溝の流れはよどむことはなかったようで，埋土は全て灰色の砂であった。この砂層中から須恵器，土師器が多数出土した。暗渠施設ＳＸ1834・1835はこの溝の部分にまでのびており，その相互関係が問題となる。このことについては小結の項でふれることにする。

ＳＤ1841　ＳＫ1768・1769の南端で検出した東西溝であり，この土壙によって切られている。溝は多少の出入りがあるが，上端で幅約0.4ｍ，下端幅約0.2ｍ，深さ約0.2ｍである。さらに東側に続くと思われるが，ＳＥ1755によって切られている。

土壙

ＳＫ1768・1769・1771・1772　発掘区中央部に東西方向に連なっている浅く大きな土壙群である。これらは茶灰色土下層を除去した後に検出した。ＳＫ1768は土壙群の東端にあたり，南北幅約2.8ｍ，深さ約0.06m である。また北半部が一段くぼみ，深さ約0.3ｍである。この土

壙はさらに東側に続いている。ＳＫ1769・1771の丁度中間部にＳＸ1690があり，未発掘のためその形状は明らかでないが，底面の高さなどから一連のものかとも考えられる。ＳＫ1769は東端で南北幅2.1m，深さ約0.37m，西端で幅約2.0m，深さ約0.23m である。ＳＫ1772はこの土壙群の西端部に位置し，ＳＫ1771との丁度中間にＳＫ1788が掘り込まれているため，その相互関係については十分明らかにしえなかった。南北幅約２.８ｍである。これらの土壙群は南北幅が約2.0m ～2.8m の間で東西に連続しており，また出土した土師器および埋土からみても，時期的に明確な差違は認め難く，短期間のうちに掘り込まれた土壙列であろう。

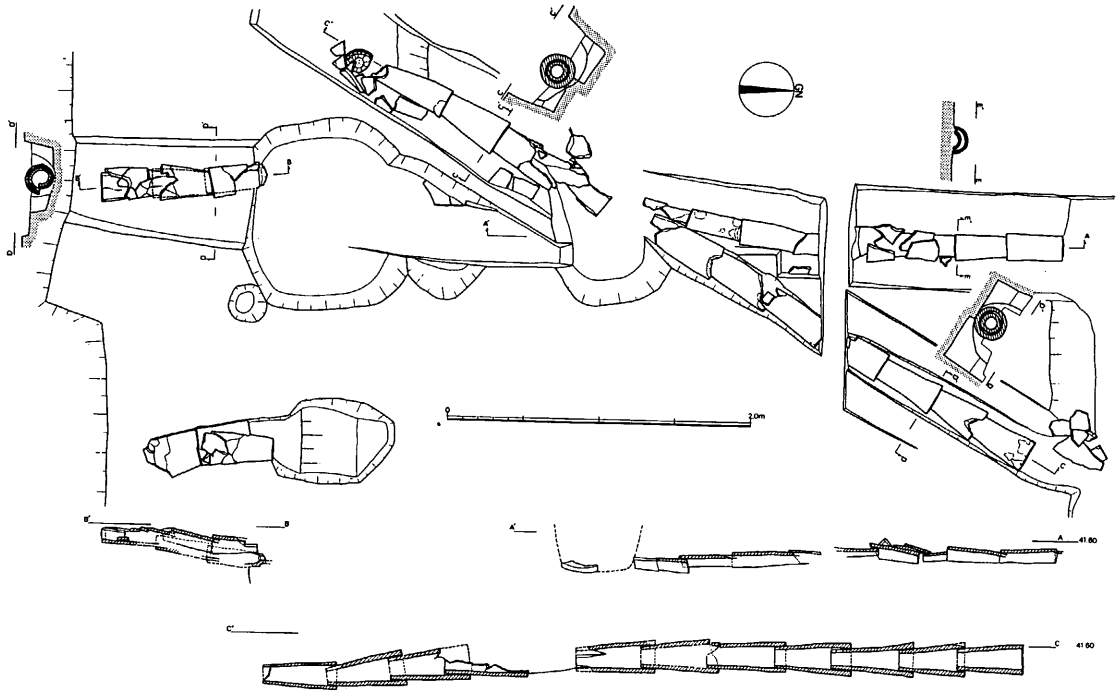
ＳＫ1800　発掘区中央部北端付近で検出した。ほぼ長円形を呈し，径3.3m ×3.6m，深さ約1.3ｍを測る。埋土上位にレンズ状の炭層がある。このような炭層を成す例は井戸埋土中によくみられる。埋める際に祭祀を行った時の痕跡と考えられる。この土壙中から極めて多量の土器が出土した。この土器は完形品が多く，また墨書銘を有する例が非常に多い。一括して投棄された土器と考えられる。土器編年上，貴重な資料となる。

鎮壇遺構

ＳＸ1810・1815　ＳＤ1805の南側，ＳＥ1960の西側に位置する。ＳＸ1815は花崗岩バイラン土に径約68cm×76cmの穴を掘り，その底に穴をうがった杯を入れ，蓋をして正位に埋めていた。ＳＸ1815も同様であるが，底部に搾孔はない。ＳＸ1810・1815は全く同一の器形であることから，同時に２個埋めたと考えられる。地鎮のためと考えられる。

暗渠施設

ＳＸ1831・1832・1833・1834・1835　発掘区北端部で５条の暗渠施設を検出した。整地層（黄灰色土）を掘込んで造られており，これらは各々ＳＤ1830と相互関係にある。ＳＸ1831は真南北に近い方位をとり，丸瓦を主体に縦列し，6.35m 分を検出した。使用された行基瓦および玉縁付丸瓦は，屋瓦を葺く工法で配列しており，北側から順に積重ねている。南端と北端では約０.５cmの高低差があり，水は南から北へ流れる設備となっている。出水口はＳＤ1830の南側肩部にあたる。ＳＸ1832はＳＸ1831の中央部を切って北東方から南西方向に検出した。これは截頭円錐形状を呈する土管を配列したもので，11個認められた。残存長6.95m である。北端と南端では約1.75cmの高低差があり，水はＳＸ1831とは逆の方向に流れている。取水口はＳＤ1830の南端部にあたる。ＳＸ1833は丸瓦を縦列したもので，ほぼ真南北方向に走る。中央部はＳＥ1775に切られており，残存南北間は長さ約４.３ｍである。ＳＸ1833はＳＸ1831の構造と若干異なり，下端部では丸瓦が配列されておらず，素掘りの溝である。また南半部は丸瓦の縦列を遮ぎった形で，平瓦が東西方向に認められた。これはＳＸ1831と平行に走っている。ＳＸ1834はＳＸ1833から約12m 隔てた東方で検出した。残存長約６.５ｍで，真南北の方位から約20度東に偏している。丸瓦を組合せたもので工法はＳＸ1831と同じである。北端と南端では約３.５cmの高低差があり，北から南にかけてわずかに傾斜している。ＳＸ1835は東端にあって残存長1.5



第５図　暗渠施設ＳＸ1831・ＳＸ1832実測図

ｍである。これはＳＸ1832と同様，截頭円錐形状を呈する土管を配列している。土管は南側から北側に傾斜しており，約１㎝の高低差がある。出水口はＳＤ1830の南端部にあたる。これら５条の暗渠施設は流れを異にしており，北から南に流れるもの（ＳＸ1832，1833，1834）と反対に南から北に流れるもの（ＳＸ1831，1835）とがある。

最下層の遺構

柵

ＳＡ1840　ＳＫ1771・1772の壙底で掘り方を４間分検出した。この柵列の東側はＳＸ1690ががあるため発掘できなかった。西端の掘り方は整地層を除去して検出した。このことから，この柵列は今回の調査で検出した遺構のなかでは最も古い時期に位置付けられる。検出したのは５間分であるが，東側へさらに１間分のびる可能性がある。建物になる可能性があるため周囲にトレンチを入れて精査したが，何等検出できなかった。よって柵列と確定した。柱間は各々約2.55ｍである。

出土遺物

最上層出土土器

ＳＤ1805出土土器・陶磁器（第６図，別表，図版41）

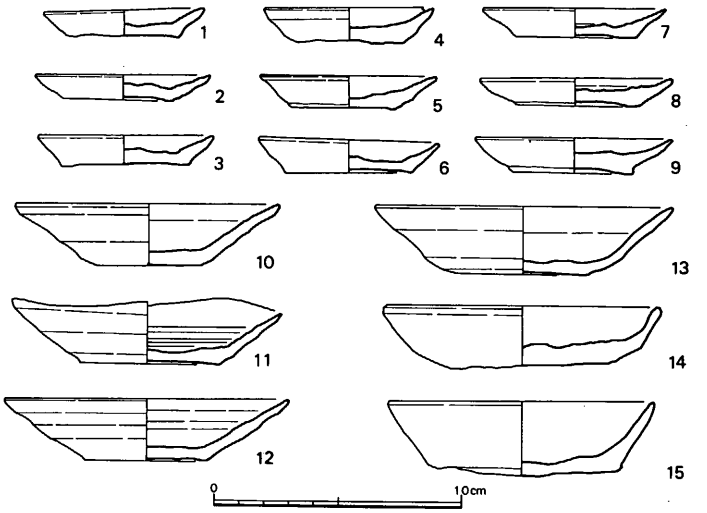
「文亀元年（1501）」銘の木簡と共伴した土器・陶磁器である。

土師器

全て糸切りである。皿・杯はヨコナデ調整だけで，ナデ仕上げはない。それ故外底の板状圧痕もない。

皿b（1～9） 口径 6.5cm～7.9cm，器高1.0cm～1.4cmである。口径に比して底径が小さい。つまり体部の開きが大きい特徴を有する。

杯a（14～15） 口径11.1cm・10.6cm，器高2.5・3.0cmである。



第6図 SD1805出土土器実測図

杯b（10～13） 口径10.6cm～11.9cm，器高4.1cm～5.5cmである。口径に比して底径が極端に小さなタイプである。11は強いヨコナデ調整により，内面は凹凸が著しい。

皿・杯とも16世紀前後の土器編年を確立する上での基準資料の一つとなろう。

青磁

椀 外面は口縁部直下に山形文を描き，その下に縦沈線を入れて蓮弁様に仕上げ，内面見込み部分に花文をヘラで描く。内底を欠失しているため文様の全体は不明であるが，山梨県新巻本村出土品中の「顧氏」銘椀と同様な文様になると考えられる。淡灰色の胎に淡緑青色の釉が厚く掛かる。図版41のa。

上層出土土器

SE1770出土土器・陶磁器（第7・8図，別表，図版42）

井戸掘方と井戸中出土とがあり，さらに後者は，井戸放棄時の祭祀の際にできた炭層出土と，それより下層（井戸中とする）出土とにわかれる。

土師器

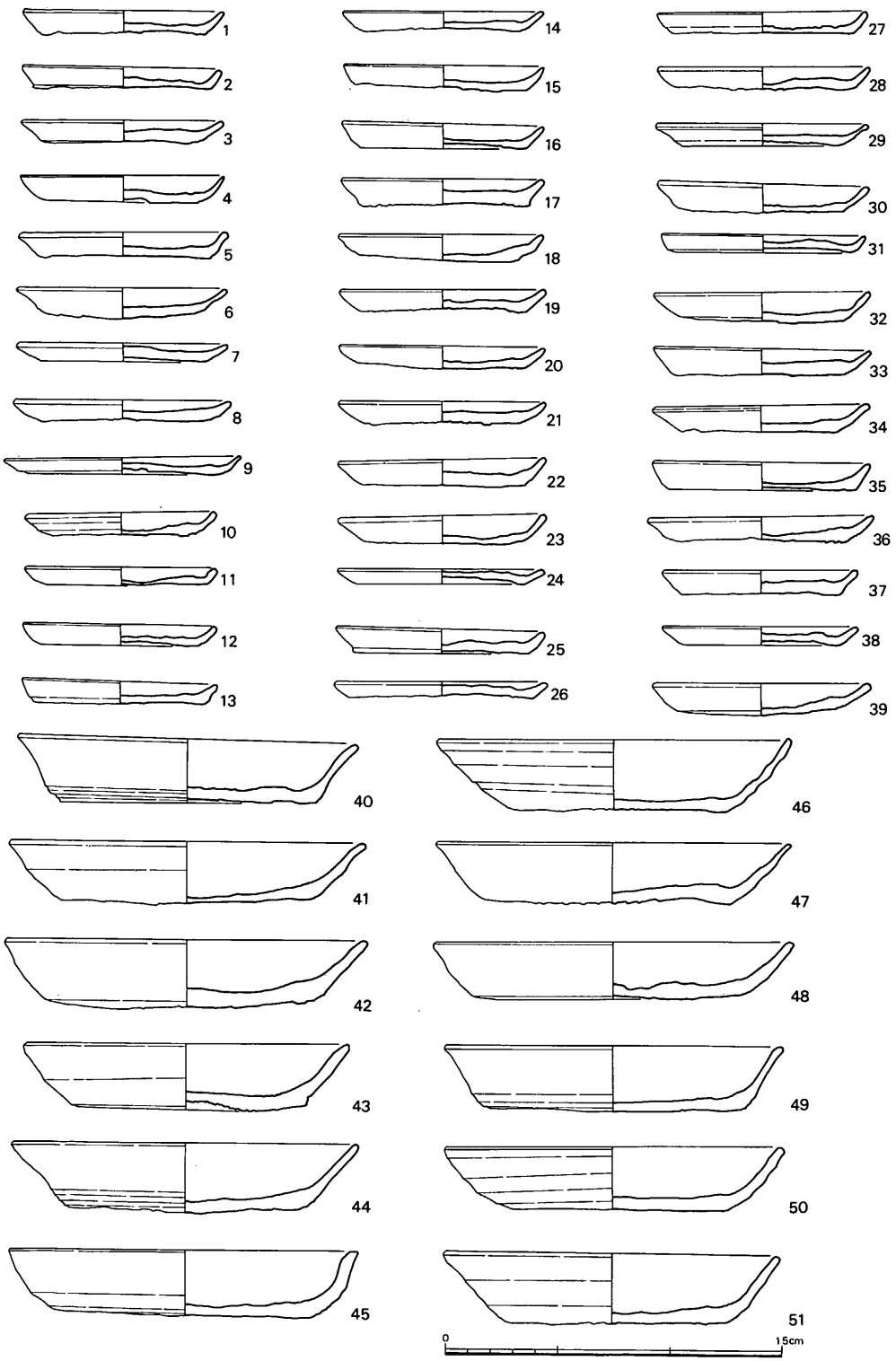
全て糸切りである。

皿a（1～39） 口径8.9cm～10.6cm，器高0.7cm～1.5cmである。灯火器として使用されたものも少なくない。1～9は井戸掘方，10～36は炭層，37～39は井戸中。

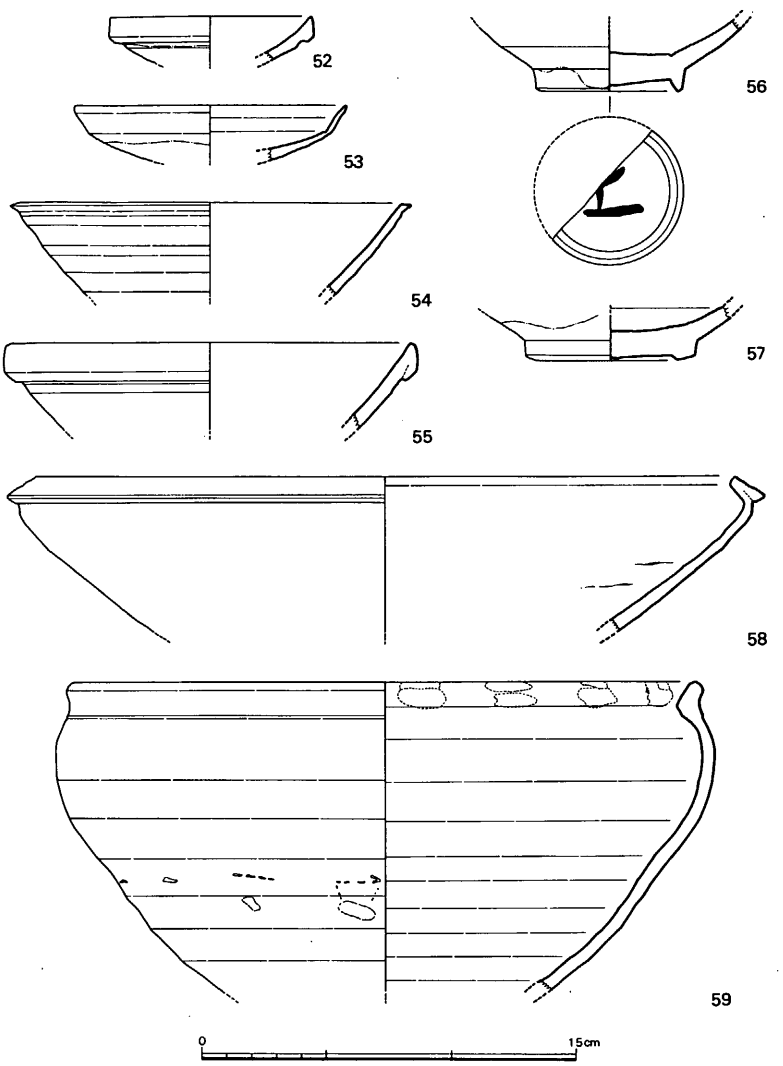
杯a（40～51） 口径15.0cm～16.1cm，器高2.5cm～3.2cmである。40～42は井戸掘方，43～48は炭層，49～51は井戸中。

陶磁器

白磁椀Ⅱ－1が3点，Ⅳ－1・aが5点，Ⅴ－2・bが1点，Ⅴ－3・aが1点，Ⅴ－4・a



第７図　ＳＥ1770出土土器実測図（１）



第８図　ＳＥ1770出土陶磁器実測図（２）

が３点，　Ⅷ－１が２点，Ⅷ－２が８点，Ⅷ－３が３点，ⅢⅡ－２が１点，Ⅵ－１・ａが４点，Ⅷ－１が２点，四耳壺片，龍泉窯系青磁椀Ⅰ－１が２点，Ⅰ－４が１点，ⅢⅢ－２・ｃが１点，同安窯系青磁椀Ⅰ－１・ａが４点出土した。

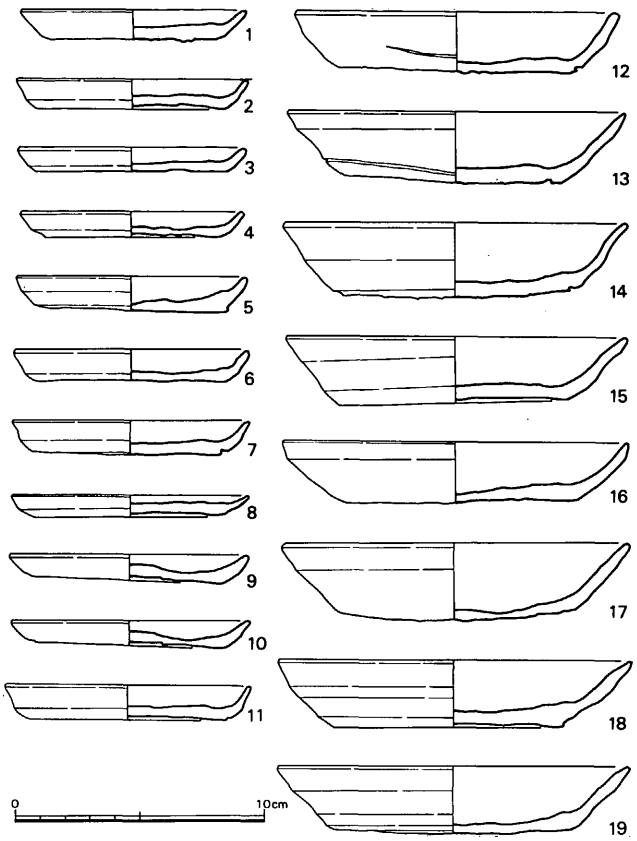
白磁

Ⅲ（52・53）　52は椀Ⅳ類と同一の器形・釉調・胎土を有する。Ⅱ－２類。53は体部上位で屈曲するⅥ－１・ａ類の典型例で，若干粗い暗灰色の胎に細い貫入を無数に伴なう黄色の釉がかけられている。

椀（54～57）　54は口縁端部を水平にしたⅤ－４・ａ類である。56はⅤ類の底部片で，高台見込み部分に「□（上カ）」の墨書銘がある。55・57はⅣ－１・ａ類である。52・54～57は井戸掘方，53は井戸中。

陶器

鉢（58・59）　58・59とも碁笥底風の底部になると考えられる。58は黄色の薄い釉がかけられている。胎土は精良でほとんど砂粒を含まない。粘土紐成形の痕跡が一部みられる。体部下半は回転ヘラ削り調整である。59は暗黄緑色の釉を薄く均一にかけている。胎土は精良でほと



第９図　ＳＥ1775出土土器実測図

んど砂粒を含まない。体部最大径直下，および口縁部内側面に白色の目跡がある。体部外面の胴部最大径より下方は，回転ヘヘラ削り調整である。58は炭層，59は井戸中。

ＳＥ1775出土土器・陶磁器

（第９図，別表，図版43）

土師器

全て糸切りである。

皿ａ（１～11）　口径9.0cm～9.7cm，器高0.9cm～1.4cmを測る。

杯ａ（12～19）　口径13.3cm～14.1cm，器高2.5cm～3.1cmである。12・13は底部を切り離すため糸を底部にあてる際，体部にふれたため体部の中位から底部にかけて傷が入っている。法量から12と13～19とに分かれ，破片も含めて後者がそのほとんどを占る。

陶磁器

白磁椀Ⅱ－１が２点，Ⅴ－１・ａが２点，Ⅴ－３・ａが１点，皿Ⅲが１点，Ⅷが１点，その他不明が１点，同安窯系青磁皿（高台付？）が１点出土した。

ＳＥ1780出土陶磁器（第10図）

この井戸からは土器がほとんど出土せず，白磁椀Ⅳ類が多数出土した。それも，ほとんどと言ってよい程で，破損したⅣ類をまとめて投棄したと考えられる。白磁椀Ⅱ－１が１点，Ⅳ－１・ａが22点，Ⅴ－２が１点，Ⅷ－２が１点，皿Ⅵが１点，越州窯系青磁椀が１点，および黄緑釉の四耳壺が出土した。

白磁

椀（14～16）　大きな断面三角形の口縁部をもつⅣ－１・ａである。いずれも体部外面は回転ヘラ削り，内面はコテ状工具による回転調整を行なっている。16の外底見込み部分は黒く焦げている。土饅頭状の焼台を使用したためであろう。この他に，Ⅷ－２類の破片のなかに，白

泥により区画をするものがある。

ＳＥ1785出土土器（第10図・図版43）

土器の出土量はわずかである。

瓦器

椀（1・2）　1は丸底の杯に高台を貼付した形態を有する。体部のヘラミガキは，体部中位より上部の部分が強いヨコナデのため凹み，その部分には及ばない。内底および体部下半は摩滅のためミガキを十分に把握できない。2は内底に重ね焼きしたためか輪状の焼付が残っている。また，体部下半には指頭圧痕の一部がヘラミガキの下に顕著に残る。今なお銀色の光沢を放つ。

ＳＥ1790出土土器・陶磁器（第11図，別表，図版44）

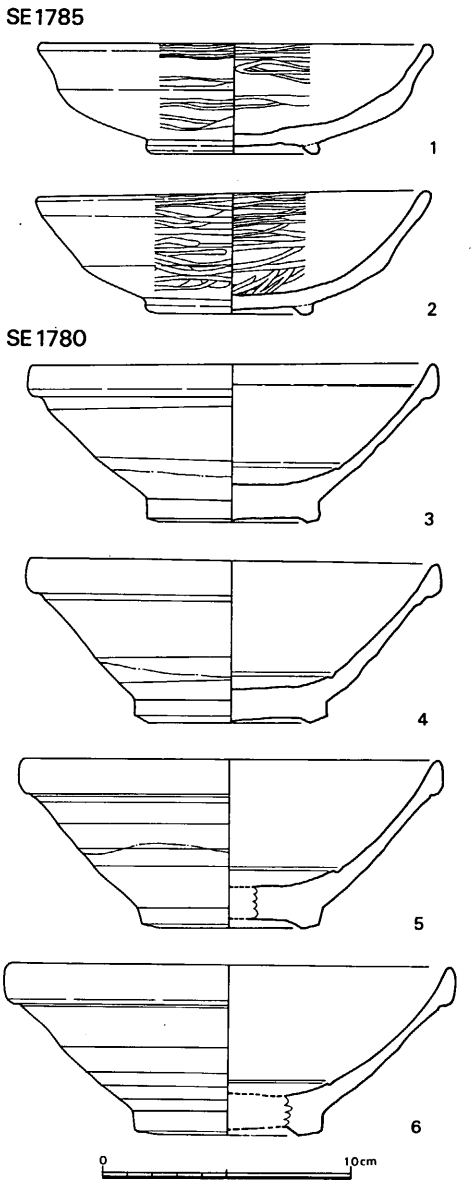
土師器

皿ａ（32～34）　口径8.3cm～8.5cm，器高1.2cm～1.5cmである。

杯ａ（35～38）　口径12.3cm～13.0cm，器高2.5cm～2.8cmである。35・36と37・38の2つに分かれ，後者は13世紀中頃，前者は14世紀前後の特徴を有している。13世紀後半頃まで，後者のタイプの杯が製作されていたためであろう。

陶磁器

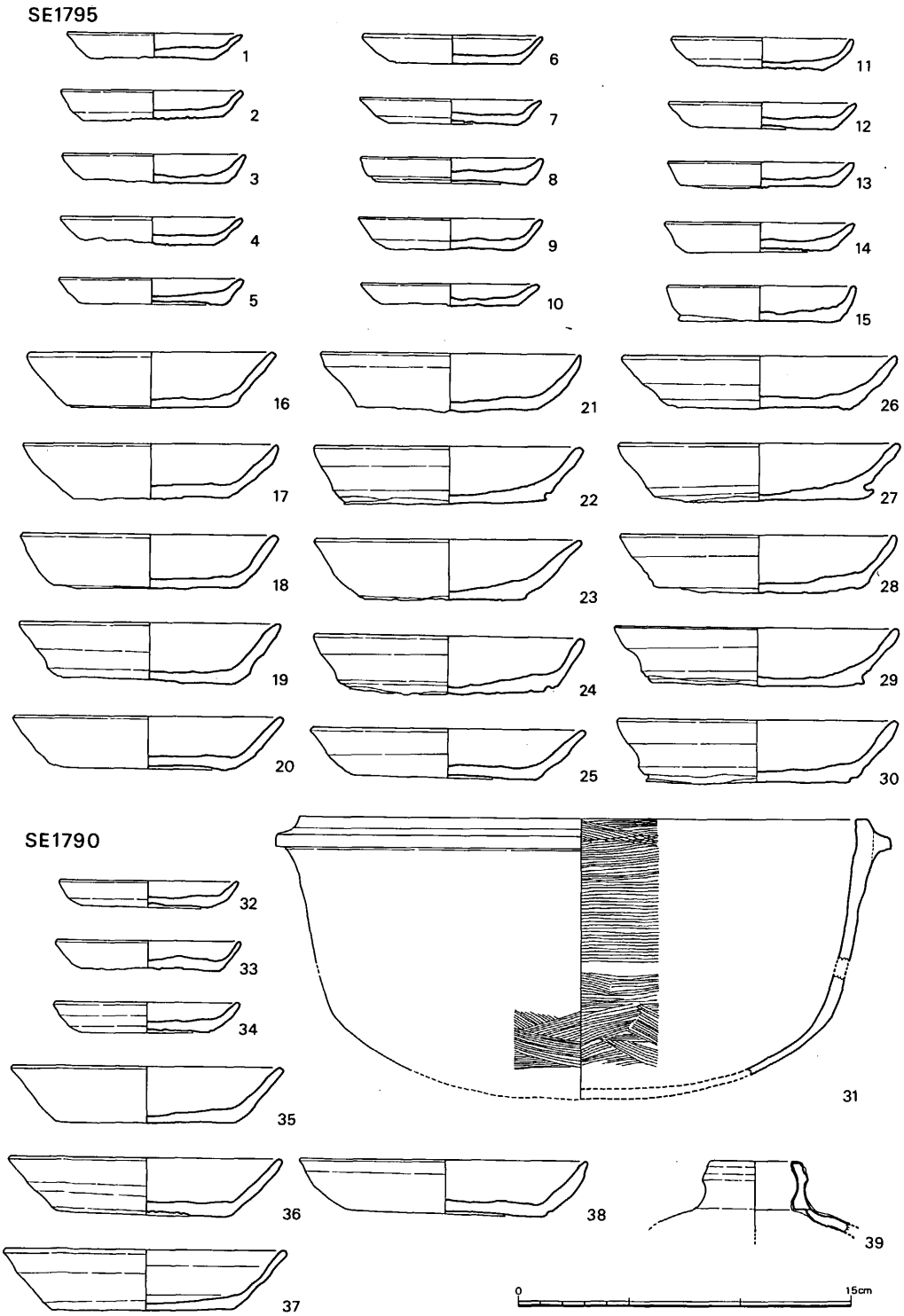
白磁椀Ⅳ－1・ａが1点，Ⅴ－2・ｂが2点，不明が2点，皿Ⅲが1点，Ⅸ－1が2点，Ⅸ－2が2点，四耳壺が1点，越州窯系青磁が5点，龍泉窯系青磁椀Ⅰ－1が1点，Ⅰ－2が1点，Ⅰ－5・ａが1点，Ⅰ－5・ｂが1点，Ⅲ－2が1点，同安窯系青磁皿Ⅰ－1・ｂが1点，および青白磁梅瓶が2点出土した。



第10図　ＳＥ1780・ＳＥ1785出土土器・陶磁器実測図

青白磁

梅瓶（39）　口径4.2cmを測る。灰白色の緻密な胎に深みのある青白色の紬を比較的厚くか



第11図　ＳＥ1795・ＳＥ1790 出土土器・陶磁器実測図

けている。口頸部は肩部端に載せ，釉で接合するようにしている。他にヘラにより文様を描いた胴部片がある。

ＳＥ1795出土土器・陶磁器（第11図，別表，図版44）

土師器

全て糸切りである。

皿ａ（１～15）　口径8.0cm～8.5cm，器高1.0cm～1.6cmである。

杯ａ（16～30）　口径11.4cm～12.6cm，器高2.4cm～2.9cmである。皿ａと共に14世紀前後の一括資料といえる。

鍋（31）　口径25.7cmの鍔付の鍋である。体部外面下位と内面は刷毛目，他はヘラナデ調整である。胎土は茶灰色を呈し，精良で砂粒は少ない。外面には煤が濃密に付着し，よく使用されている。鍔付の例としては古期に属する。

陶磁器

白磁椀Ⅱ－１が１点，Ⅳが６点，Ⅴ－１が４点，Ⅴ－２・ｂが１点，Ⅴ－４・ｂが１点，皿Ⅱ－１が１点，Ⅳが２点，Ⅸ－１が４点，Ⅸ－２が１点，四耳壺片が１点，龍泉窯系青磁椀Ⅰ－４が１点，Ⅰ－５・ａが１点，Ⅰ－５・ｂが８点，Ⅲ－２が１点，同安窯系青磁皿Ⅰ－１・ａが１点出土した。

ＳＫ1685出土陶磁器（第12図，図版45）

白磁

椀（３・４）　３は口径16.8cm，器高4.5cmに復原できる。幅広のいわゆる「蛇ノ目」高台を有するⅠ－１類である。白色緻密な胎土に若干緑味をおびた白色の釉が高台外側部分までかかり，外底は露胎となる。４は低い高台と大きな玉縁状口縁を有するⅣ－１・ａ類である。灰白色の胎土に若干青味をおびた灰白色の釉がかかる。

ＳＫ1707出土陶磁器（第12図，図版45）

青磁

椀（10）　28か29本単位の櫛状工具により体部内外面に文様を描いている。暗灰色の胎土に淡青緑色の釉をかけている。同安窯系青磁椀Ⅰ－１・ｂ類である。

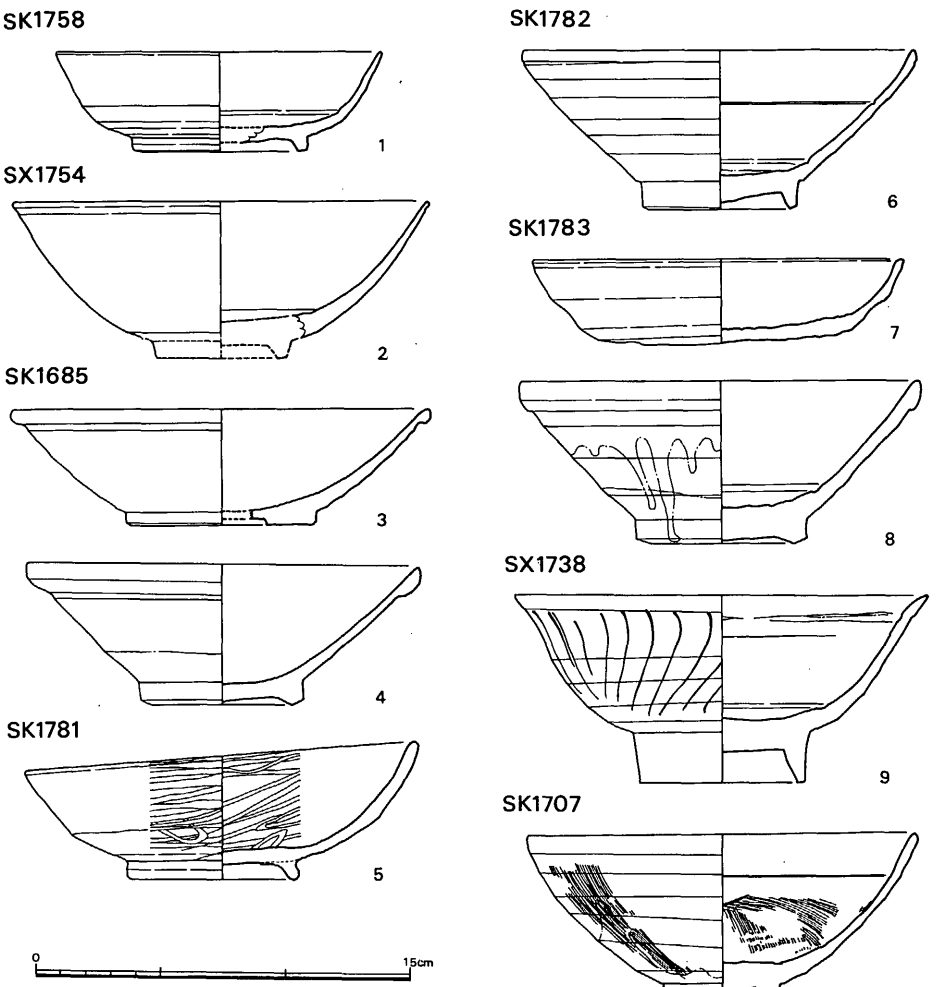
ＳＫ1758出土陶磁器（第12図）

青磁

皿（１）　口径13.0cm，器高4.0cmである。淡茶灰色の精良な胎土に淡黄緑色の釉がかかる。全面施釉後に畳付部分の釉を削り取っている。内底に白砂の目跡がある。体部中位以下は回転ヘラ削り調整である。越州窯系青磁である。

ＳＫ1781出土土器（第12図）

瓦器



第12図　その他の遺構出土土器・陶磁器実測図

椀（5）　内外ともに丁寧なヘラミガキをしている。体部屈曲部より下位に体部のカーブに沿って板状圧痕が残っている。本来板状圧痕はナデに伴い平坦な部分にしか生じないものである。このように弯曲した板状圧痕がみられるということは，体部下半を押し出して成形（押し出し技法）したことの証左になる。丸底の杯によくみられる現象である。

ＳＫ1782出土陶磁器（第12図，図版45）

白磁

椀（6）　体部が直線的に外上方へ延び，内底の釉を環状にカキ取るⅧ－２類である。この種のタイプでは稀な玉縁風口縁を有している。灰色の胎土に淡黄色の釉がかけられている。高台先端部分は淡赤茶色を呈し，化粧土がかけられたことが知れる。このように高台先端部分に化粧土をかけた例は本次調査出土品のなかでは数多い。

ＳＫ1783出土土器・陶磁器（第12図）

土師器

杯ａ（７）　口径14.9cm，器高3.4㎝である。底部切り離しはヘラ切りである。内底部にナデ，外底部に板状圧痕がある。

白磁

椀（８）　灰色の胎土に淡黄灰色の釉がかかる。体部外面は回転ヘラ削り調整である。Ⅳ－１・ａ類。

ＳＸ1738出土陶磁器（第12図，図版45）

白磁

椀（９）　細く高い高台と外反する口縁部とからなる。体部内面最上位の沈線は片切り彫り風で幅が広いが，一周はしない。体部内面削りの際生じた傷かも知れない。体部外面にはヘラ先で縦沈線を入れている。灰白色の胎土に淡く緑味をおびた透明釉がかかる。Ⅴ－２・ｂ類。

ＳＸ1754出土陶磁器（第12図）

青磁

椀（２）　輪状高台を有し，全面に施釉する越州窯系青磁椀Ⅰ－２類である。暗灰色を呈し，緻密な胎土に淡黄緑色の釉をかけている。内底に白色砂の目跡がある。高台削り出しの際のヘラ削りが体部最下位付近にみられる。他の部分の調整は釉のため明らかでない。

ＳＫ1788出土土器・陶磁器（第13・14・15図，別表，図版46）

土師器

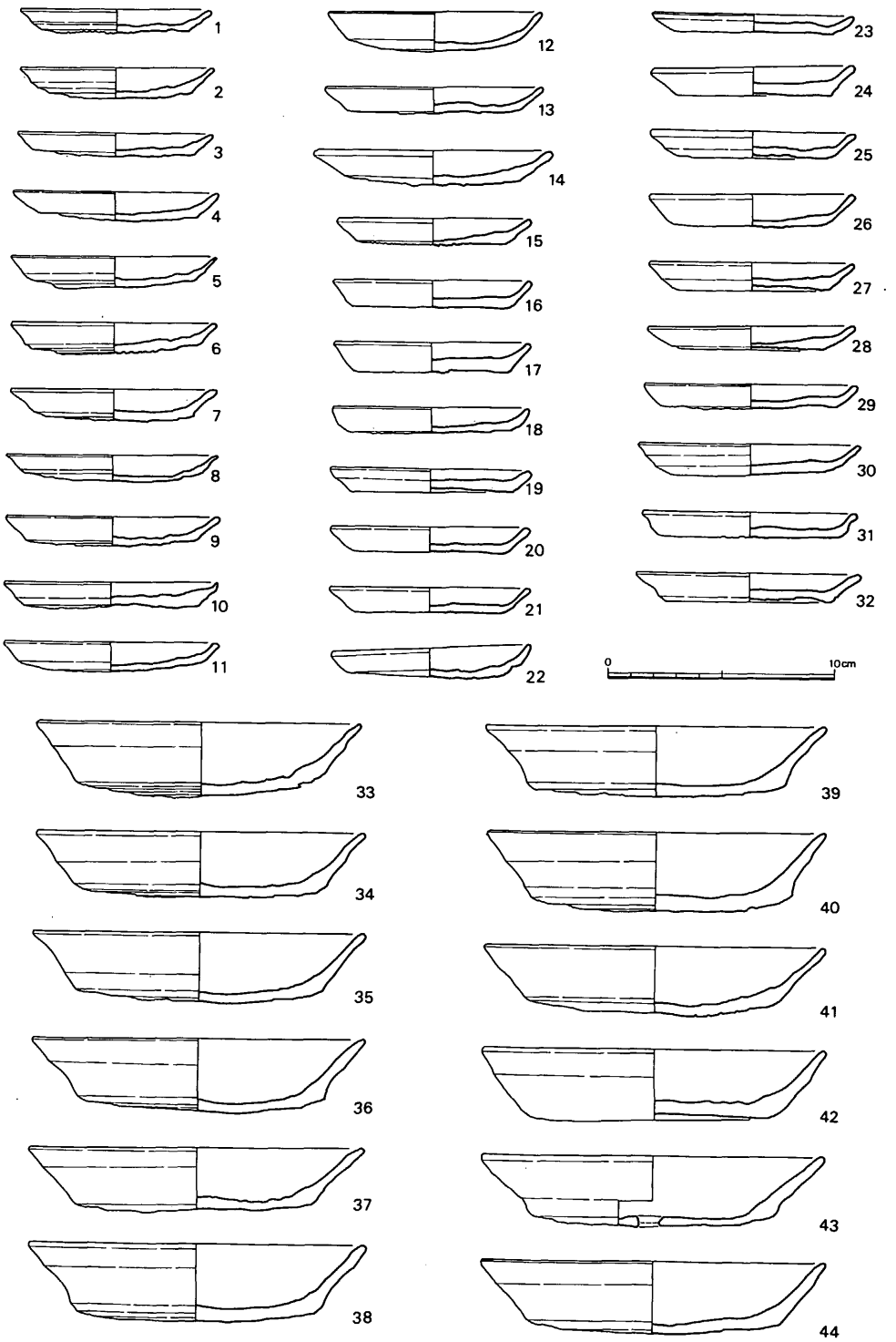
糸切りとヘラ切りが出土したが，皿ａは糸切りが多く，杯ａはヘラ切りが多い。

皿ａ（１～32）　１～14はヘラ切りで，口径8.4㎝～10.5cm，器高1.0cm～1.5cmである。古期に属する14を除くと，口径・器高の平均値は9.1cm・1.3cmになる。15～32は糸切りで，口径8.6cm～9.9cm，器高1.0cm～1.4cmである。平均値は口径9.0cm，器高1.2cmで，ヘラ切りとほとんど同一の法量である。

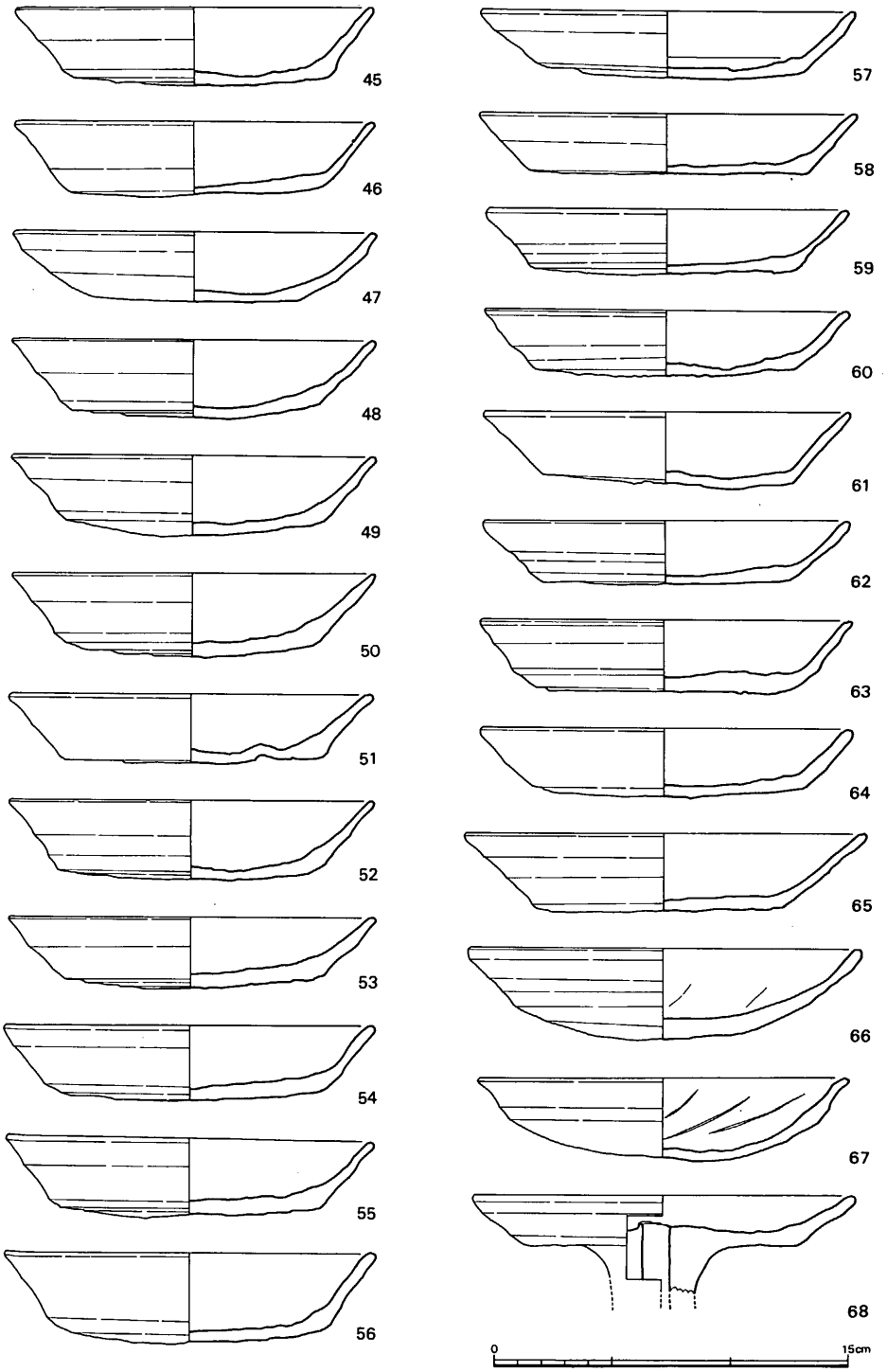
杯ａ（33～65）　33～58はヘラ切りである。口径14.3cm～15.9cm，器高2.8cm～3.6cm，平均値は口径15.1cm，器高3.2㎝である。59～65は糸切りである。口径15.3cm～16.9cm，器高 2.6㎝～3.3cm，平均値は口径15.6cm，器高2.9cmである。単純に平均値だけを比較すると，ヘラ切りの方が口径は小さいが，器高は高く，糸切りは口径を増すが，器高を減じている。また，33・34は皿ａ14とともに古期に属するのかもしれない。

丸底の杯（66・67）　口径16.5・15.4cm，器高3.8・3.4cmである。コテ状の工具で器面調整した跡が顕著に残っている。この時期を境として消えて行く器形であるが，他遺構に比すと極端に出土点数が少ない。

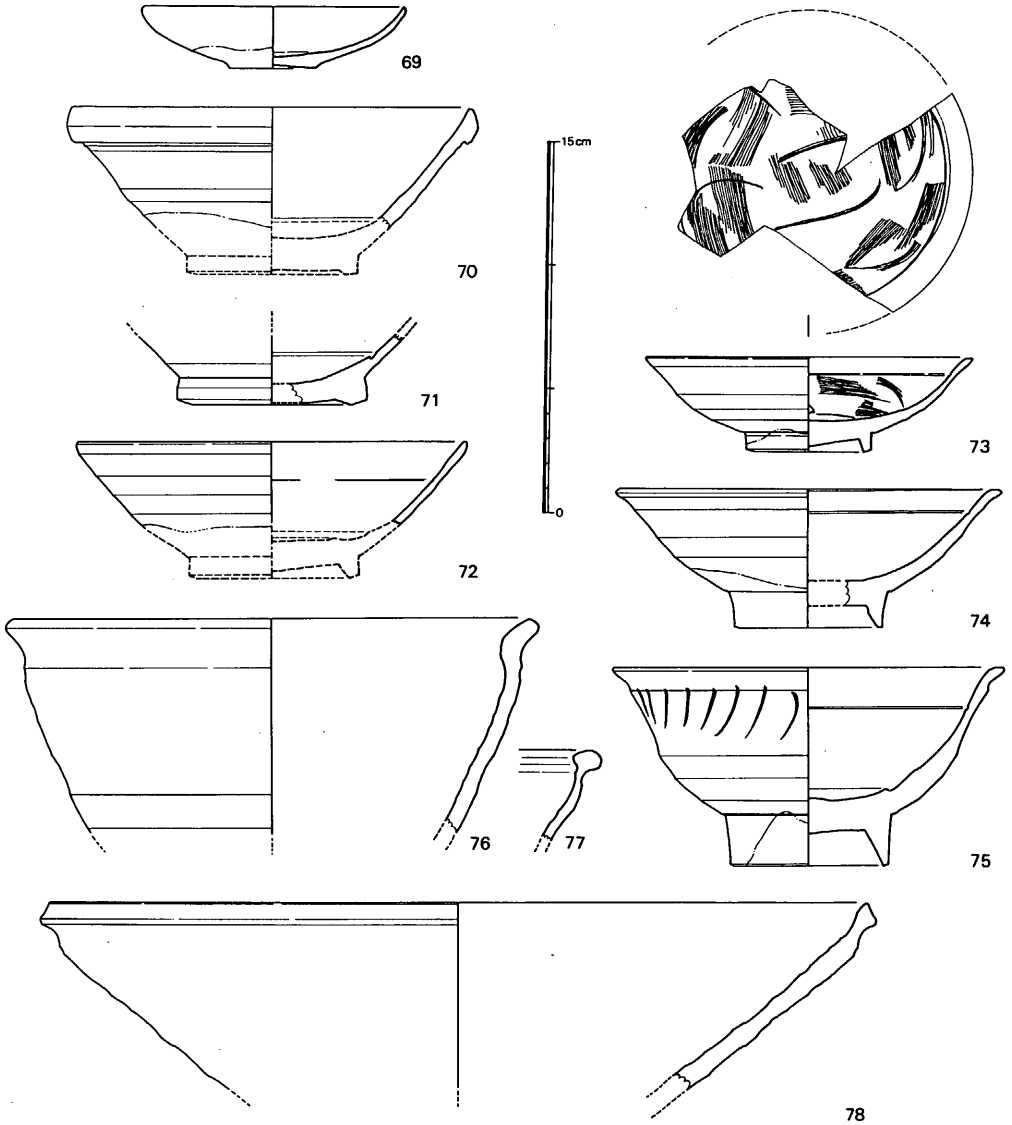
器台（68）　丸底の杯を杯部・脚部とするタイプで，杯・脚部とも丸底の杯と同様にヘラミ



第13図　ＳＫ1788出土土器実測図（１）



第14図　ＳＫ1788出土土器実測図（2）



第15図　ＳＫ1788出土陶磁器実測図（３）

ガキをする。器台としたが，用途は明らかでない。

須恵質土器

鉢（76～78）　３点とも暗灰色を呈する。76は口径21.3cmである。体部下半を回転ヘラ削り調整する。77は断面隅丸方形状の口縁を有する小片で，胎土は非常に精良である。78は小片からの復原であるため正確な口径は知り得ない。砂礫を比較的多く含む。おそらくは片口を有する捏鉢になると思われる。土師器の擂鉢や捏鉢でよくみられるように，これも鍋として使用され

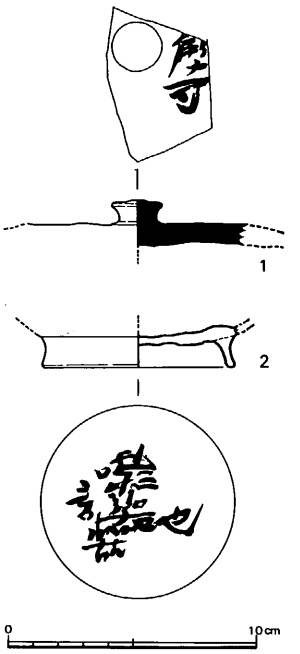
たようで，内面に焦げつきがみられる。

陶磁器

白磁椀Ⅱ－１が３点，Ⅳ－１・ａが12点，Ⅴ－２・ａが３点，Ⅴ－２・ｂが１点，Ⅴ－４・ａが１点，Ⅵ－１・ｂが２点，Ⅷ－２が２点，不明が10点，皿Ⅵ－１・ｂが１点，壺か水注片が１点出土した。

白磁

椀（70～75）　70・71は玉縁口縁を有するⅣ－１・ａ類である。70の玉縁は折り返しであることが断面で明瞭に観察できる。72はⅧ－２類の破片である。73は器高が低く，皿形に近い。沈線と櫛描により文様を構成している。体部外面は回転ヘラ削りを行っている。白色緻密な胎土に淡青白色を呈する良質の釉がかけられている。外底には円形（淡黄色を呈する）の焼台の焦げつきがみられる。12世紀初頭の年号を有する経塚群から同種のものが発見された例がある。Ⅷ－１・ｂ類。74は高く細い高台と口縁部を端反りにするⅤ－２・ａ類である。75は体部外面を片切り彫りにより縦線を入れたⅤ－２・ｂである。体部外面を回転ヘラ削りしている。特に中位以下の削りが顕著である。外底に淡黄色を呈する焼台の跡が残っている。

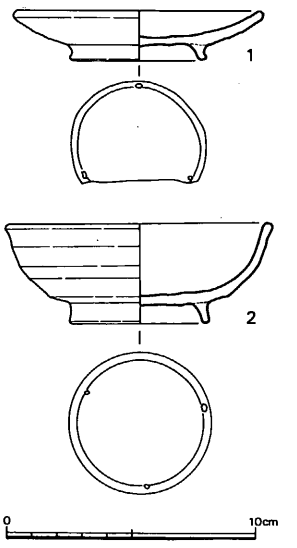


第16図　墨書土器実測図

墨書土器（第16図・図版47）

明確な遺構に伴う土器ではないが，重要な資料であるので報告する。

１は擬宝珠状の撮を有する須恵器杯蓋で，その天井部に「□(観カ)寺」墨書銘がある。ＳＸ1798出土。２は土師器椀の底部片で，外底に文字が書かれているが，判読できるのは「器」「也」だけである。ＳＫ1800と同一の形態を有する。暗灰砂層出土。図版47のａは８世紀後半代の土師器杯底に「山北」の墨書銘がある。床土出土。



第17図　緑釉陶器実測図

緑釉陶器（第17図，図版47）

１・２とも土師質緑釉である。１は口径9.0cm，器高2.0cmである。口縁部付近は緑色であるが，他の部分は銅分が少ないためか透明釉がかかっている。重ね焼きをしたようで，外底に３足の目跡があり，内面にも１個しか残っていないが，目跡がある。胎土

は灰白色を呈し，軟質である。茶灰色土下層出土。2は銅分の少ない淡緑色の釉が全面にかかっている。1と同様に外底に3足の目跡がある。胎土は精良で，ほとんど砂粒を含まない。茶灰色土層出土。

各層出土陶磁器（第18～21図，図版48～51）

茶灰色土下層より上層出土の陶磁器を報告する。唐・五代の白磁は出土点数が少ないことから，細片であっても図化した。

中国陶磁

唐・五代の陶磁

白磁

椀（1～6）　白磁椀Ⅰ類である。1～4は口縁部を折り返して小さな玉縁状口縁をなす。3・4は体部外面を回転ヘラ削り調整しているのが観察できるが，1・2については明らかでない。5・6は「蛇ノ目」高台を有する底部を中心とした破片で，高台畳付を含め底部は露胎である。しかも，畳付に付着した釉を取るためか，畳付部を手持ちヘラ削りしている。1～6ともに大方は白色緻密な胎土である。4の釉は灰白色をおびているが，他は黄色味をおびた透明釉である。全て茶灰色土下層出土。

壺（7）　断面四角形の高台は若干外方へふんばる。白色の胎土は若干粗い。そのためか外面は白化粧土をした後に淡黄白色の透明釉を体部最下位付近にまでかけている。茶灰色土下層出土。

越州窯系青磁

椀（8～11）　8・11は典型的なⅠ－1，Ⅱ－2・c類である。9・10の形態はⅡ－2・dに良く似ている。しかし，精良な胎土，全面施釉といった特徴はⅠ類に属する。特に10は「蛇ノ目」高台を有し，細かい貫入を内外面に伴うオリーブ色の釉を有していることからⅠ類に属することは疑いない。しかし，9はこれまでに出土した越州窯系青磁とは相違した釉調（濃緑色）を有しており，俄かに越州窯系とは決め難い点がある。11はⅡ類の通例どおり，釉下に白化粧土を有する。茶灰色土下層出土。

皿（12・13）　12は全面施釉後に高台畳付部分の釉を削り取って露胎としている。椀Ⅰ－2類とセットになる形態である。13は体部が外に返り，口縁部を外反させる。灰色緻密な胎に淡黄緑色の釉をかけている。12は床土直下，13は茶灰色土下層出土。

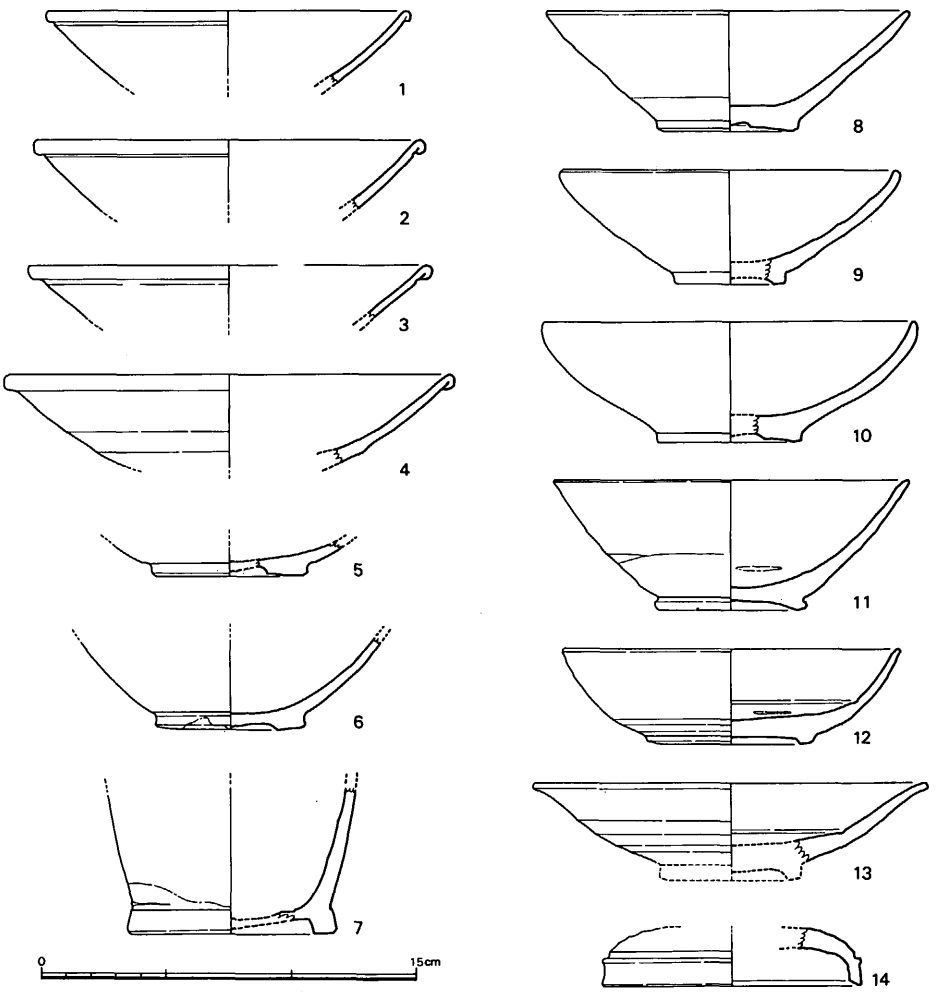
合子（14）　器高の低い合子の蓋である。淡茶灰色の緻密な胎に黄緑色の釉が全面にかかる。茶色土層出土。

宋代以降の陶磁

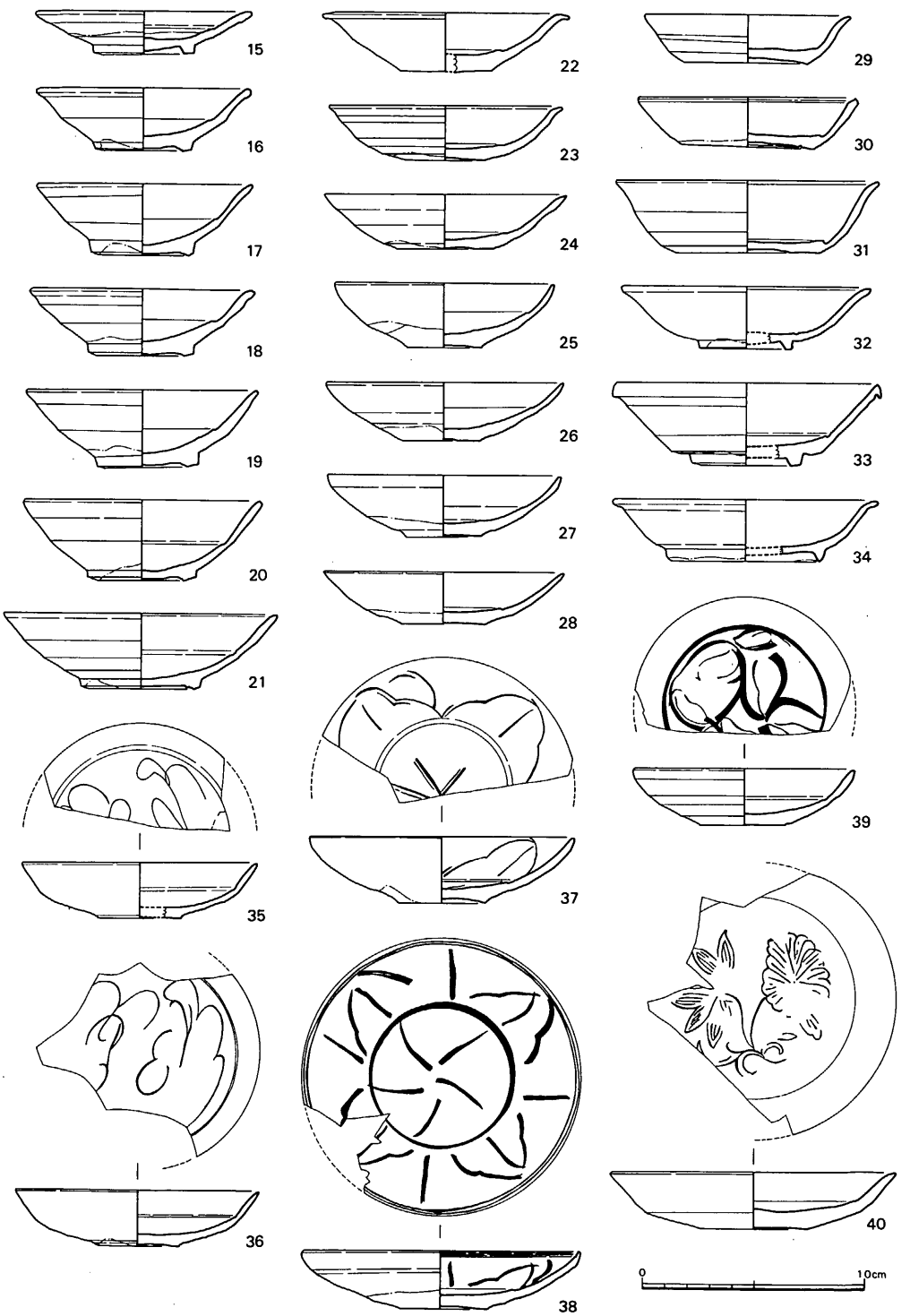
白磁

皿（15～40）　15は見込み部分の釉を環状にカキ取るⅢ類である。椀Ⅷ類と同様な高台を有

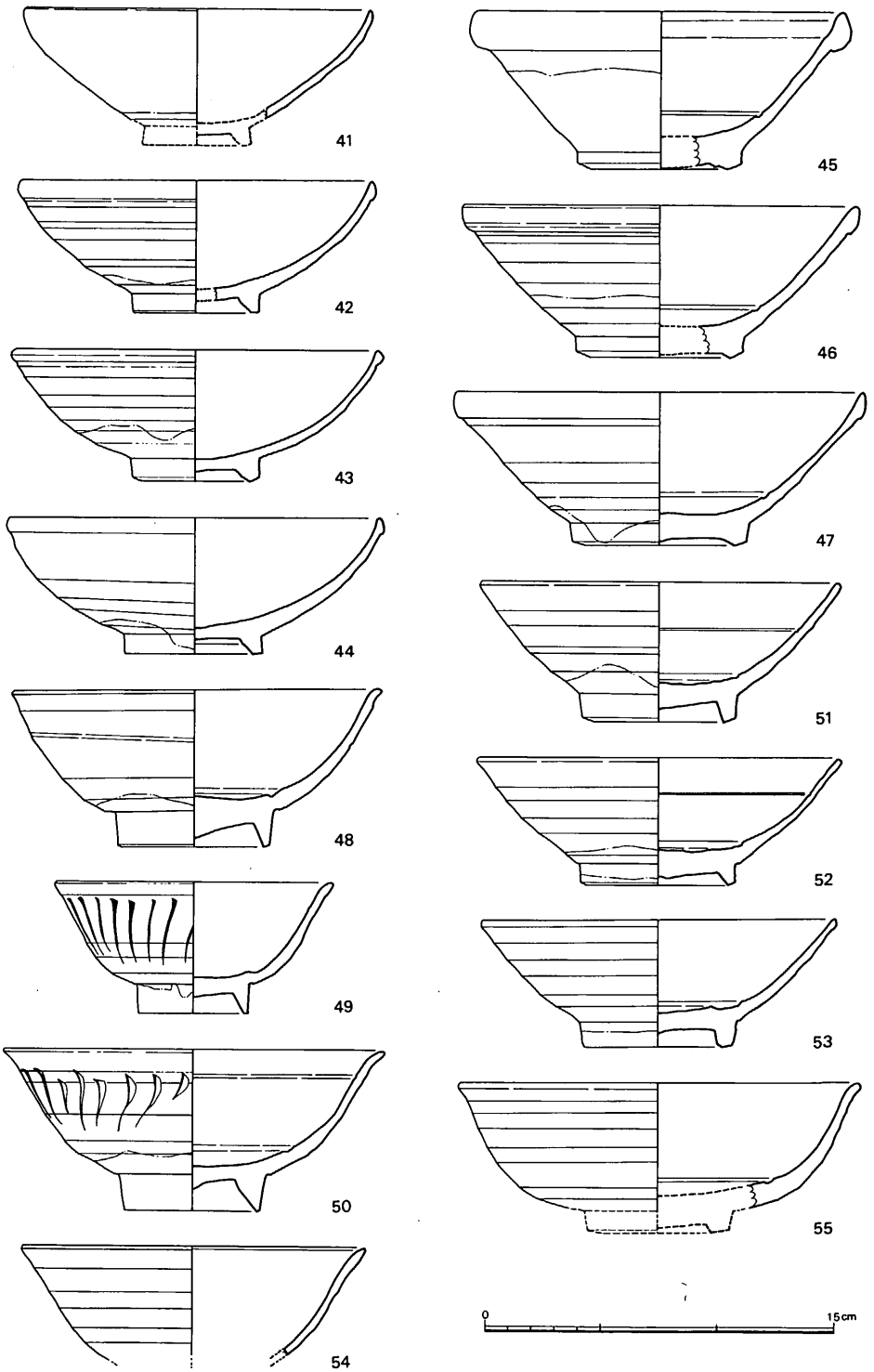
する。16～21は椀Ⅳ－１類と相似した胎と釉および高台を有する。17・18の外底に円形の焼台の跡がある。22はⅣ－１・ａである。23・24は内底と体部の境に段をもち，体部を内弯ぎみに仕上げ，体部外面を回転ヘラ削りするⅤ類に属する。25～27はⅣ－１・ａ類28はⅤ－１・ｂ類である。29～32はいわゆる「口禿げを有する白磁」である。29・31は底部まで釉がかかるⅨ－１類，30は体部最下位近くまで施釉するⅨ－２類である。33は高台をもつⅨ類で，類例は極めて乏しい。釉は高台周辺までかけられる。34はこれまで述べてきた陶磁からは時期的にかなり遅れるもので，16世紀代の山城や館から一般的に発見されているタイプである。全面施釉後に尖りぎみの高台端部付近の釉をカキ取り，その周辺に砂粒が付着する。いわゆる砂底といわれ



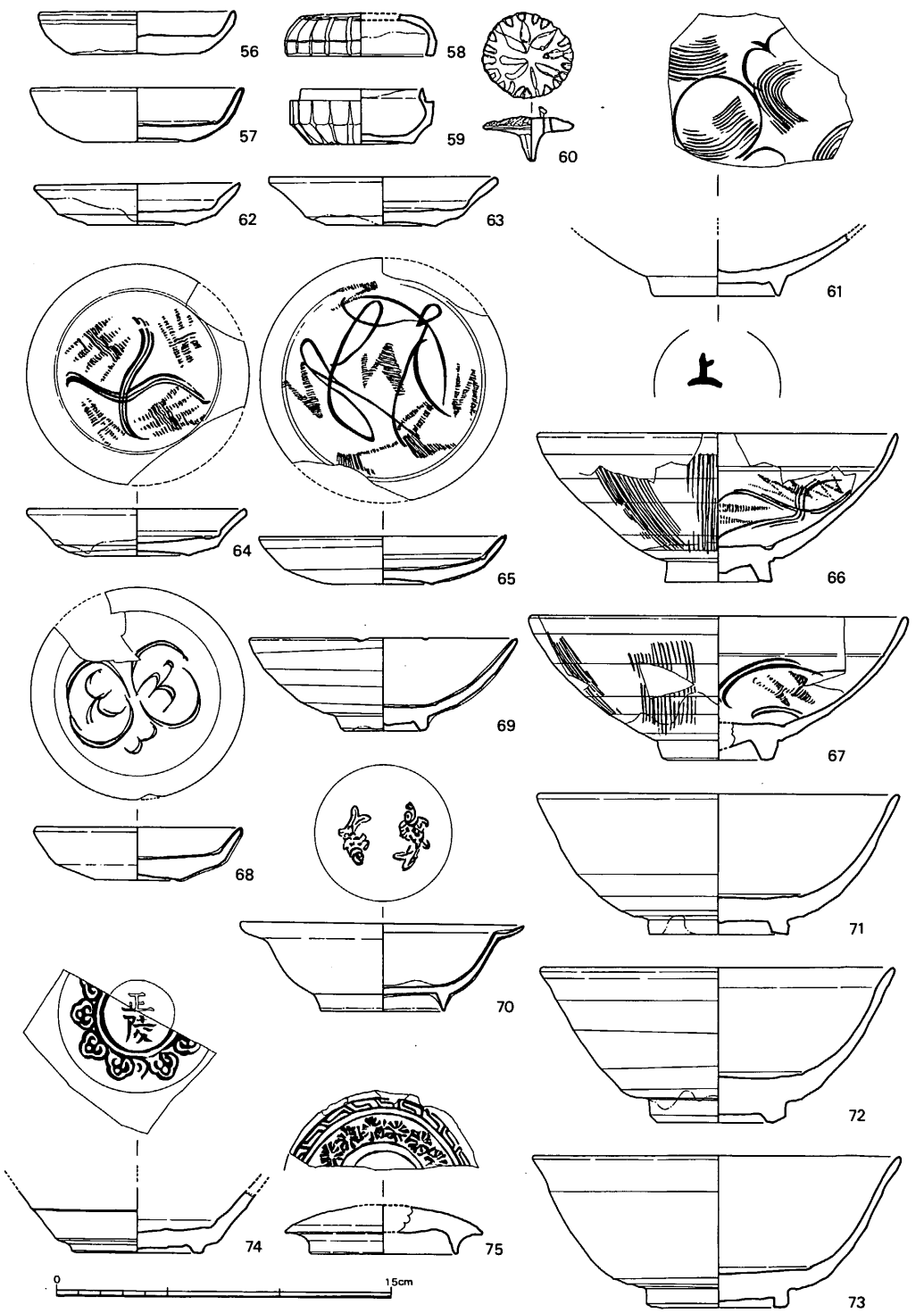
第18図　各層出土陶磁器実測図（１）



第19図　各層出土陶磁器実測図（2）



第20図　各層出土陶磁器実測図（3）



第21図　各層出土陶磁器実測図（4）

ているものである。35・36は体部中位で屈曲する。胎土は精良で白黄色の釉が均一にかけられている。内面見込み部分にヘラ描きの花文を有する。37・38は見込みに花文様を片切り彫り風に描くⅧ－1・b類である。描かれている文様は越州窯系青磁の後期に属する鉢の文様と共通する点が多く，その影響化のもとにこのような装飾がなされたと考えられる。39・40はⅦ類に比して厚手のものであり，釉も灰白色か透明の釉が外底を除いて全面に均一にかかるタイプである。39は見込み部分にヘラにより，40はスタンプにより花文様を描く。15～28・35～37・39は茶灰色土下層，30・31・38・40は茶灰色土，29は茶色土，32～34は床土出土。

椀（41～55）　41～44は高台見込み部分を平担にするため2度削りをしている。このため高台内側に若干段がつく。体部は41のように直線的に外上方へ延びる例もあるが，大方は内弯する。Ⅱ類に属する。42～44は口縁部を小さな玉縁状に仕上げるもので，Ⅱ類のなかでは圧倒的に多い例であるが，41は内反り風に仕上げている。このような例は少い。釉は薄く，また淡黄色を呈する。大部分は細かい貫入を内外面ともに伴う。胎土は比較的粗い。45～47は低く厚い高台と大きな玉縁状口縁を有するⅣ類である。45・47の外底には焼台跡があり，その部分は淡黄褐色に焦げている。胎土は灰白色を呈し，硬質に焼成されている。外面の施釉部分は45のように上位まで，46は中位，47は高台部分と一定していないが，46と47の中間例が数多い。48～50は細く高い高台を有するⅤ類に属し，48はⅤ－1類，45・50はⅤ－2・b類である。49・50の外面の文様は片切彫風である。胎土は灰白色を呈し，また釉も灰色味をおびた白色を呈する例が多いが，焼成不良のため，黄灰白色を呈する場合もある。51～53は見込み部分の釉を環状にカキ取り，重ね焼きするⅧ類である。図示したものは内面の体部と底部との境に段をつくり，その段に沿って釉をカキ取り口縁部を外反させないⅧ－2類である。また，重ね焼きの際高台畳付部分が体部内面に釉着しないための配慮か，高台先端部分に白化粧土をかけている。第70次調査出土例ではのとんどがこのような白化粧土が観察できた。54は口縁部の釉をカキ取り伏せ焼きするⅨ類である。出土白磁のなかでは絶対量は少い。55は灰白色の厚い胎土に灰色透明な釉をかける。口縁部を外反させる例が圧例的であるが，沖縄県石垣市美崎町ビロースク遺跡出土例のように口縁部を曲げないものもある。14世紀後半から15世紀前半代の遺構から少数ではあるが出土する。厚い高台と内弯する体部の特徴から明代初頭のものと考えられる。41～44・46～50は茶灰色土層下層，45・52～54は茶灰色土層，51は茶色土層，55は床土出土。

青白磁

皿（56・57）　白色緻密な胎に淡青白色の釉をかけている。外底は露胎で回転ヘラ削り調整を行なう。57の外底には淡黄色を呈する焼台の跡があり，また口縁部に油煙が付着しており，灯火器として使用されていたことが知れる。茶灰色土層出土。

合子（58・59）　上・下二段からなる蓮弁文を型造りにより成形している。58の天井部にも花文の一部が残存しているが，小範囲のため明らかでない。白色緻密な胎に，明るい青白色の

釉がかかる。58は茶灰色土下層，59は茶灰色土層出土で，層は相違しているが，セットになると考えられる。

蓋（60）　天井部に先端を欠失しているが，紐掛け突起があり，また体部に穿孔が１つある。天井部を型に入れ，他の部分は回転を利用することなく成形している。白色緻密な胎に青白色の釉がかかる。穿孔や紐掛け突起等があることから水注の蓋と考えられる。

椀（61）　形態上から青白磁としたが，釉は黄色味をおびた透明釉である。内面にヘラと櫛により文様を入れる。外底見込み部分に「上」銘の墨書がある。58・61は茶灰色土層，56・57・59・60は茶灰色土層出土。

青磁

龍泉窯系青磁

皿（68）　内面に花文を有し，小型の皿で，Ⅰ－２・ｂ類である。外底露胎部分に円形の重ね焼きの跡が明瞭に残っている。茶灰色土層出土。

杯（70）　細く立つ高台先端部分の釉を削り取って露胎とし，厚く釉をかけるⅢ類である。内底に双魚文が貼付されている。Ⅲ－４・ｂ類。

小椀（69）　輪花を有するもので，Ⅰ－４類である。茶灰色土層出土。

椀（71～73）　断面四角形の高台を有するものである。73の内底に四角形の枠に囲まれたスタンプ文字があるが，不鮮明で判読し難いが，おそらくは「金玉満堂」であろう。Ⅰ－１類。

高麗陶磁

椀（74）　内面は白象嵌の如意頭文と２重圏線，黒象嵌の「正陵」銘がある。体部外面下位に白象嵌の沈線が１条，それより上位に白土・赤土による象嵌文様があるが，一部しか残存していないため不明。灰白色の胎に灰色の強い緑色の釉を全面にかけている。畳付部分に砂粒が付着している。「正陵」は恭愍王妃魯国大長公主（1373没）の陵名である。本来正陵用官納品であるべきものが我国へどうしてもたらされたのか疑問なところである。床土出土。

合子（75）　身受け部を露胎とする他は釉をかけている。雷文帯と菊花文および圏線は白象嵌，菊花文間の縦線を黒象嵌している。胎土は淡茶灰色，釉は灰色味の強い緑色を呈する。床土出土。

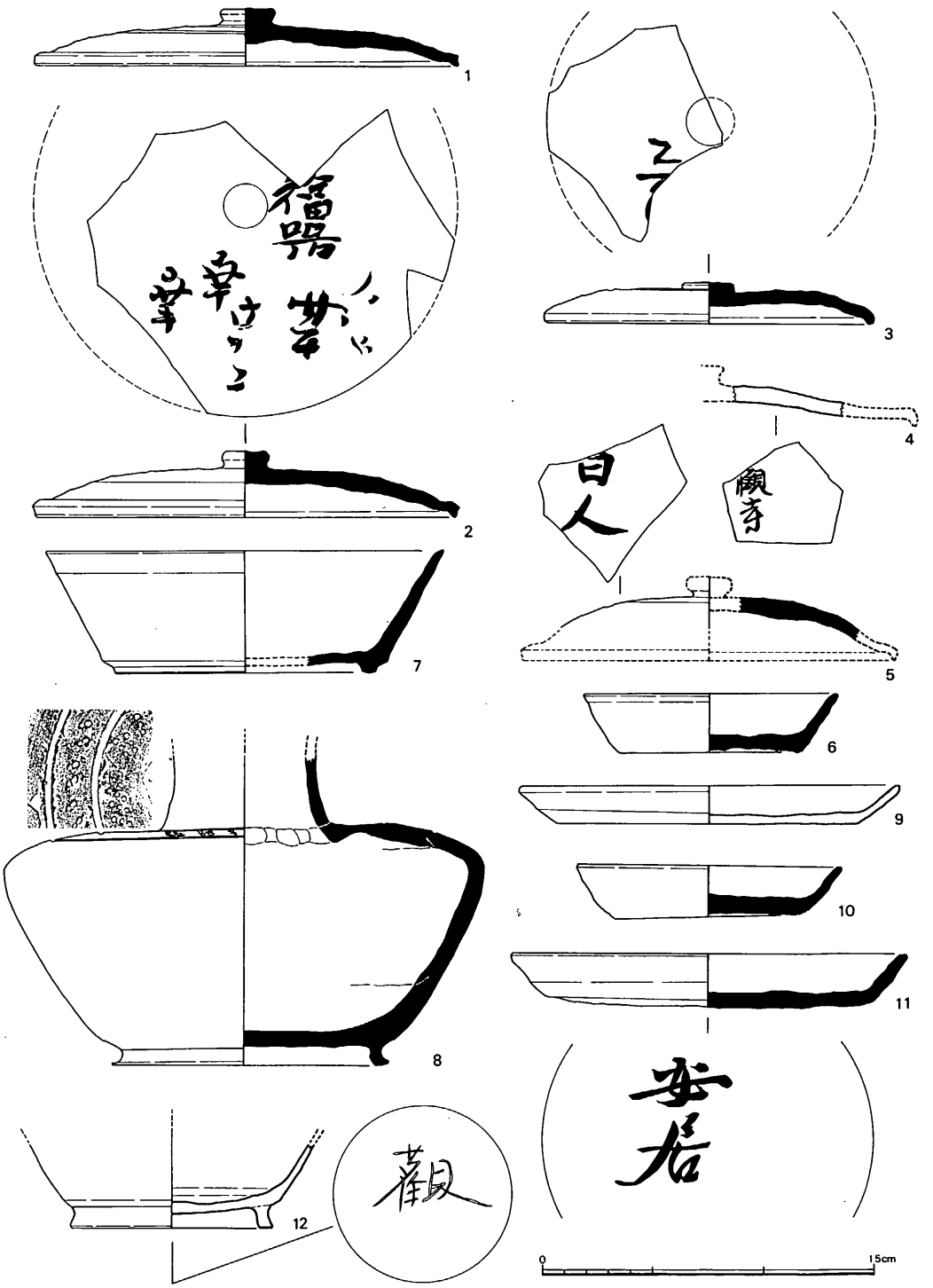
下層出土土器

ＳＤ1825出土土器（第22・23図，別表，図版53・63）

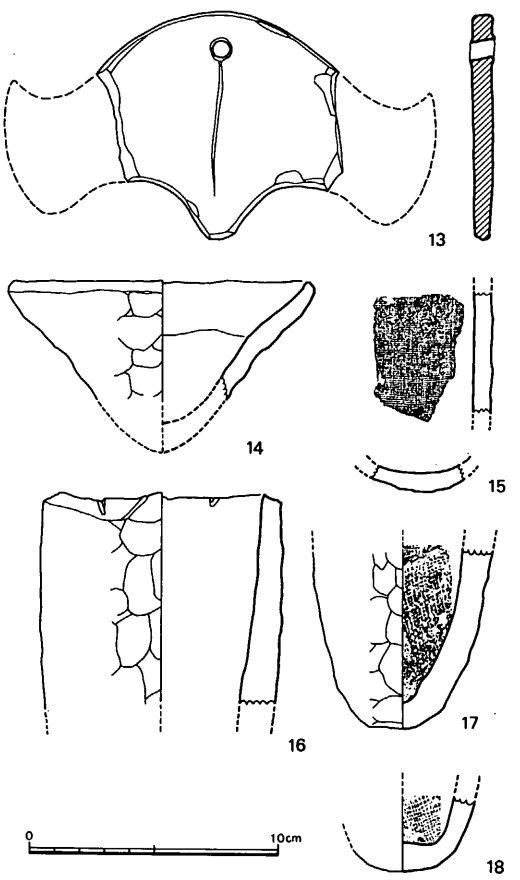
須恵器

杯（10）　口径も器高も低い小形品である。底部はヘラ切りのままで再調整はしていない。

皿（11）　「安居」の墨書銘を有する。安居とは夏（雨期）の間に一定の場所に集まり，互いに研鑽修道することをいう。官寺である観世音寺からの出土は「天下をして安和に，朝廷をして無事ならしめん」ために，安居が行なわれた可能性を示す資料といえる。



第22図　ＳＤ1825・ＳＤ1830出土土器実測図（1）



第23図　ＳＤ1825 ・ＳＤ1830
出土土器実測図（2）

土師器

椀（12）　体部下半および外底部をヘラ削り調整している。外底部に「観」の針書文字がある。

塩壺（16～18）　内面に粗い布目がある型造りの焼塩壺である。底部片である18は黒灰色を呈し，強い火熱をうけたことがわかる。いずれも胎土中に砂粒を多く含む。17は砂粒とともに絹雲母を多量に含む。

ＳＤ1830出土土器（第22・23図，別表，図版52・53・63）

須恵器

杯蓋（1～3 ・ 5）全て天井部を回転ヘラ削り調整をしている。2の天井部には「冂福器」および判読困難な墨書銘がある。5の天井部に「口人」，3の天井部に墨書があるが意味不明。

杯（6 ・ 7）　ヘラ削り等の再調整はない。7の外底部に墨書があるが，判読困難である。

壺（8）　粘土紐を巻きあげて成形し，その痕跡が部分的に観察できる。頸部と体部の接合方法は，頸部を体部端上に載せ，その付近を指押えで剝離しないようにしている。肩部に沈線を2条入れ，2区画し，その中に2本を1単位として刺突文を入れている。また体部外面はヘラヨコナデにより調整しているため，カキ目状の痕が残っている。

風招（13）　縦92cm，厚さ0.8cmの板状のもので，杏葉形に近い形態であるが，両側の先端部を欠失している。上端近くの中央部に吊金具を通す0.7cmの孔がある。この下に沈線が1本片面だけつけられている。器面はヘラ削り調整，端部は面取りしている。胎土は精良で，焼成は堅緻である。

土師器

杯蓋（4）　「冂観寺」の墨書銘がある。内天井部にはヘラミガキの痕跡が一部残る。

皿（9）　体部下位および外底部を回転ヘラ削り調整し，体部内面をヘラミガキしている。ヘラミガキは器面摩滅のため部分的にしか観察できない。

塩壺（14・15）　14は笠形を呈する。内面はナデ仕上げしているため布目があるかどうか明らかでない。外面には指頭痕が多い。15は円柱状の焼塩壺の胴部片である。布目は非常に小さく，1㎝四方に緯糸が25～26本，経糸が73本前後である。布目の小さいものには胎土中に砂粒が少ないものが多い。

ＳＫ1757出土土器（第24図，別表）

須恵器

杯蓋（1）　天井部はヘラ切り後再調整をしていないが，撮貼付時についたのか乱雑な指頭痕が残っている。

杯（2～5）　全てヨコナデ・ナデ調整で，またヘラ切りのままでヘラ削りはしていない。4・5の外底には板状圧痕がある。5は器を動かして内底をナデたためか，板状圧痕が2方向についている。2・5は口縁部に油煙が付着していることから灯火器として使用したことが知れる。

皿（6・7）　外底部は未調整である。7の内底は平滑であり，墨が付着していることから硯として使用されたと思われる。

ＳＫ1774出土土器（第24図，別表，図版55）

須恵器

杯蓋（8～13）　8～11・13は天井部を回転ヘラ削り調整している。12は未調整。11は縁部が屈曲する。13の天井部に「福器」銘の墨書がある。

杯（14）　ヨコナデ・ナデ調整だけである。

ＳＫ1787出土土器（第24図，別表，図版55）

須恵器

杯蓋（15・16）　15はヘラ切りのままであるが，16は回転ヘラ削り調整をしている。内天井部に「有有匚」銘の墨書があり，この横にも文字があるが，判読はできない。

杯（17～19）　ヨコナデ・ナデ調整だけである。外底は不規則なヘラナデがみられる。

皿（20）　外底部はヘラ切りのままである。内底はヨコナデ・ナデが消えるまですられている。硯として使用したためであろう。

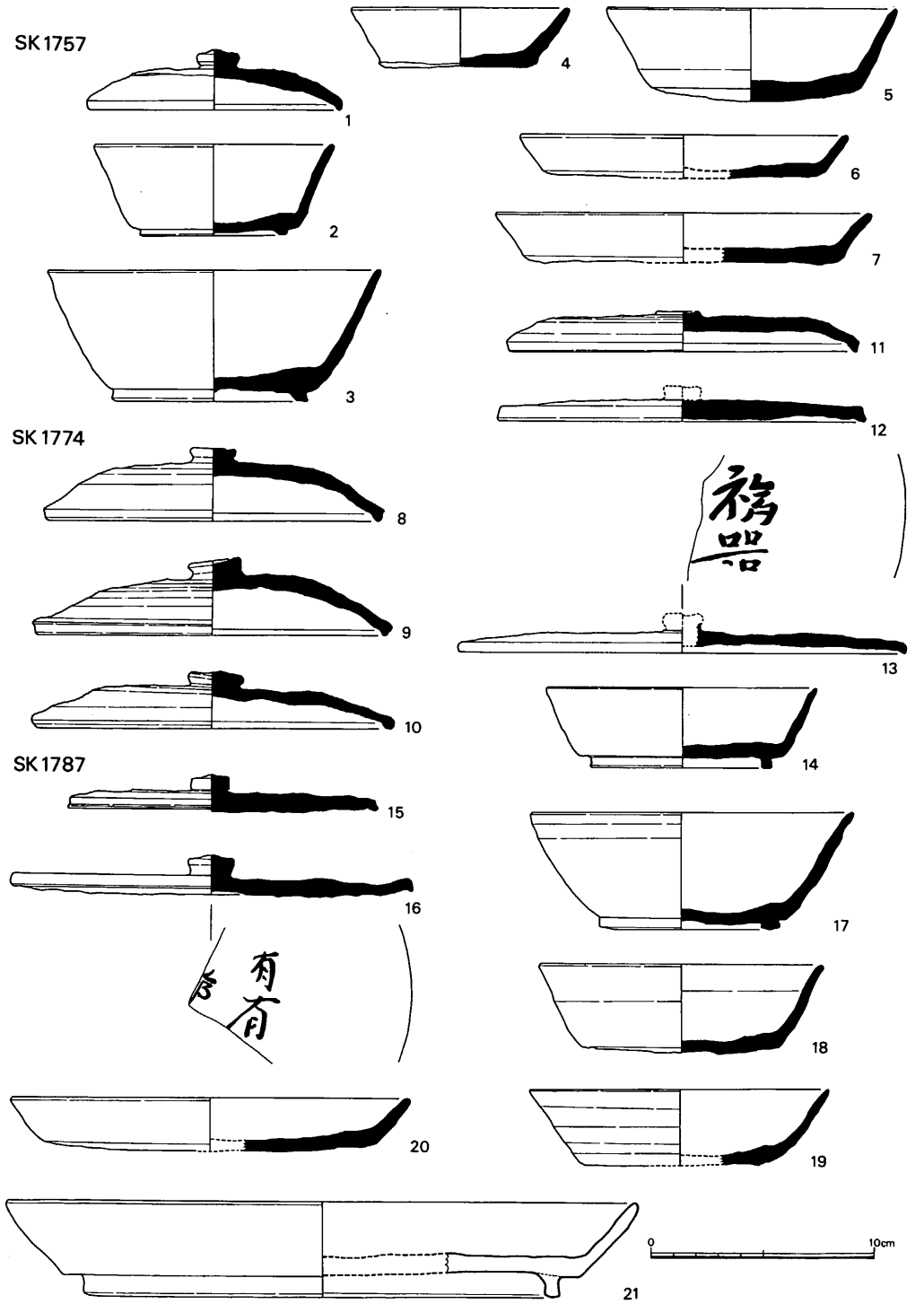
土師器

盤（21）　外底部を丁寧に回転ヘラ削りし，体部および内底部をヘラミガキしているが，器面風化のため，ミガキは部分的にしか残っていない。

ＳＫ1772出土土器・陶磁器（第25・26図，別表，図版54）

土師器

全てヘラ切りである。33～35は土壙最下から出土した。本来この土壙に伴うのではなく，古期の土壙がＳＫ1772によって削られ，その一部が残ったのかも知れない。



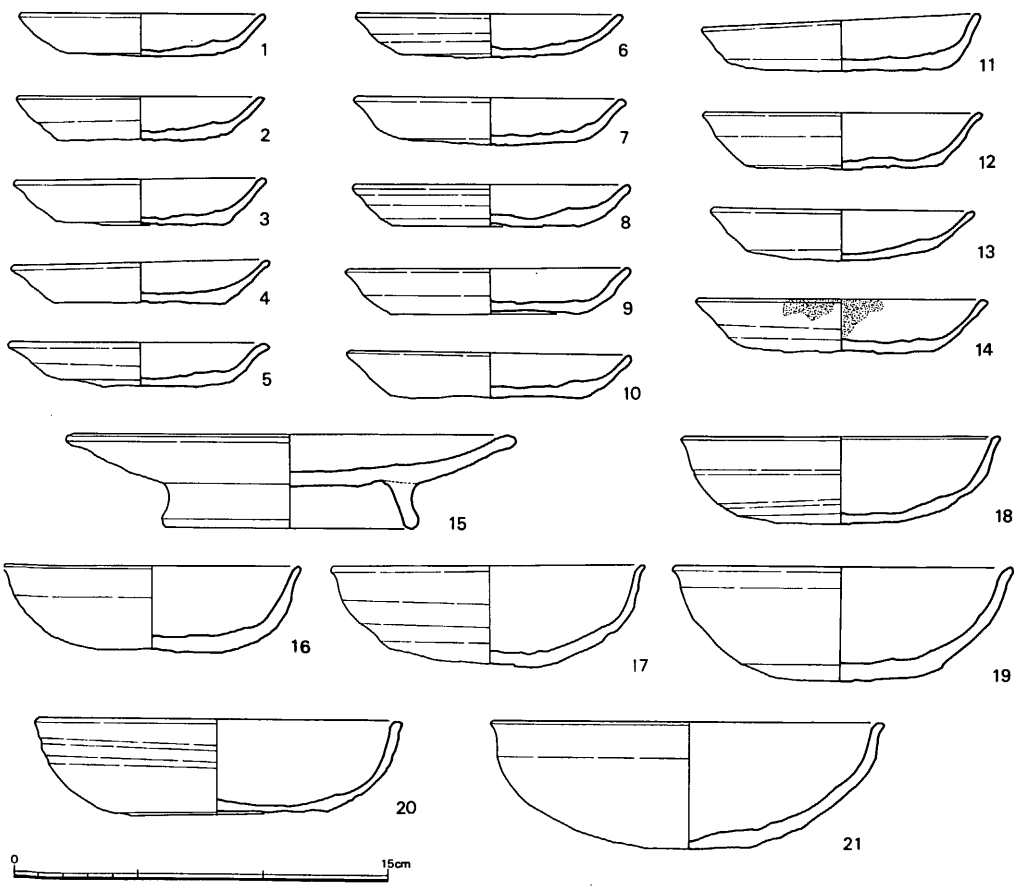
第24図　ＳＫ1757・ＳＫ1774・ＳＫ1787出土土器実測図

皿ａ（１～14）　口径９.９㎝～11.６㎝，器高1.７㎝～2.４㎝を測る。４・14の器表には煤が付着していることから，灯火器として使用されたことがうかがわれる。法量的には口径10㎝前後と11㎝前後とに分けられ，２型式を含む。

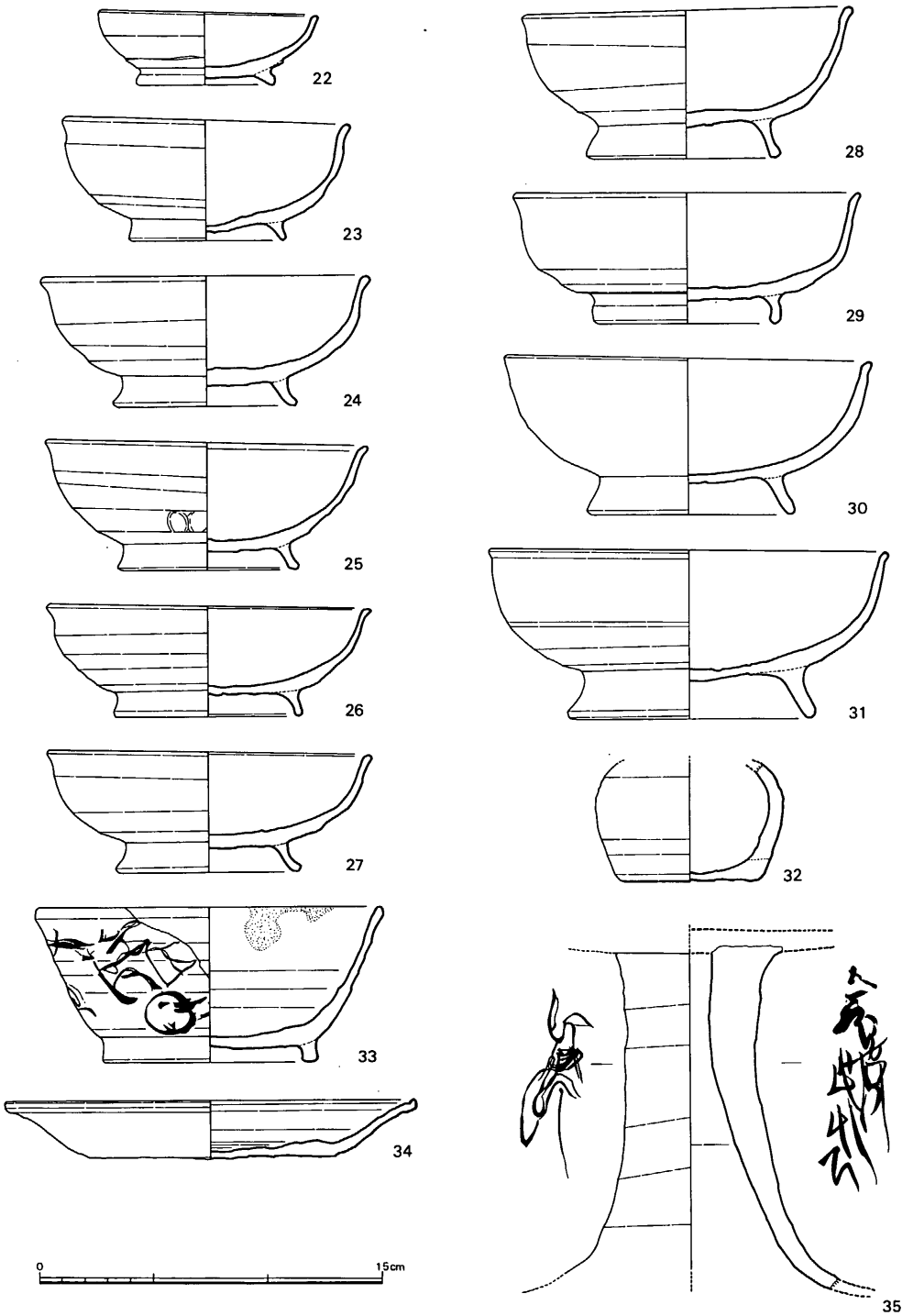
皿ｃ（15）　口径17.９㎝，器高３.８㎝の大形の皿である。本来この土壙埋没時期に属するものではないのかも知れない。

無高台椀（16～21）　口径12.０㎝～15.８㎝，器高３.４㎝～５.１㎝である。17・19・21は体部内面下半をヘラミガキしている。高台付椀の一部にも共通する技法である。

椀（22～31・33）　22は口径９.６㎝，器高３.２㎝の小椀である。体部外面はヨコナデ，内面は摩滅のため調整は不明であるが，他例から内面はヘラミガキ仕上げをしていたと考えられる。23～31は口径12.６㎝～17.６㎝，器高４.９㎝～７.４㎝である。24～26・30の内面体部下半はヘラミガキを行なう。33は外底および体部最下位部分を回転ヘラ削り調整を行なっている。外底見込



第25図　ＳＫ1772出土土器実測図（１）



第26図　ＳＫ1772出土土器実測図（２）

み部分に「上」銘の墨書がある。また，口縁部および体部上半の一部に油煙が付着していることから灯火器として使用されたことが知れる。

皿（34）　杯蓋の口縁部を有する。底部はヘラ切り後ナデ調整をしている。

高杯（35）　脚部を残すだけである。筒部に墨書があるが，文字か絵かの判断は困難である。

壺（32）　小壺の体部だけ残存している。体部上半をヘラ削りしている他はヨコナデ調整である。内底にナデ，外底に板状圧痕がある。

陶磁器

越州窯系青磁椀Ⅰ－2が7点，Ⅱ類が2点，不明が1点，袋物の破片が1点および日本製の灰釉陶器の甕片が1点出土した。

ＳＫ1800出土土器・陶磁器（第27～33図，別表，図版56～57）

この土壙からは極めて多量の土器が出土した。また，完形品が多く，しかも，灯火器として使用された杯や椀が多いことから，何等かの祭事が行なわれた後に一括して投棄されたものと考えられる。

土師器

杯・椀・鉢ともにヨコナデ・ナデ調整だけである。また，底部切り離しはヘラ切りである。

杯（1～73）　製作技法により1～71と72・73とに分かれる。口径10.9cm～12.7cm，器高2.7cm～3.7cmである。1～71は口径，器高の平均値はそれぞれ11.9cm，3.3cmで，平均値が示す法量部分に土器は集中している。72・73は手捏の土器である。72は底部を円盤状につくり，その上に粘土紐をのせ，紐の端部を相互に接合している様子が観察できる。

椀（41～113）　41～111は口径13cm・14cm前後の小・中形品と15cm以上の大形品とがあり，前者が圧倒的に多い。112は体部に丸味を有し，またラセン状の沈線を有する稀なもので，おそらくは金属器を模倣して製作したと考えられる。113は114の高足の鉢の小形品であろうが，一応椀とした。

脚付鉢（114）　高さ8.2cmの高い脚部を有する。体は直線に外上方へ延び，そのまま口縁部を丸く仕上げる。大形の椀をさらに大形化した成形法である。

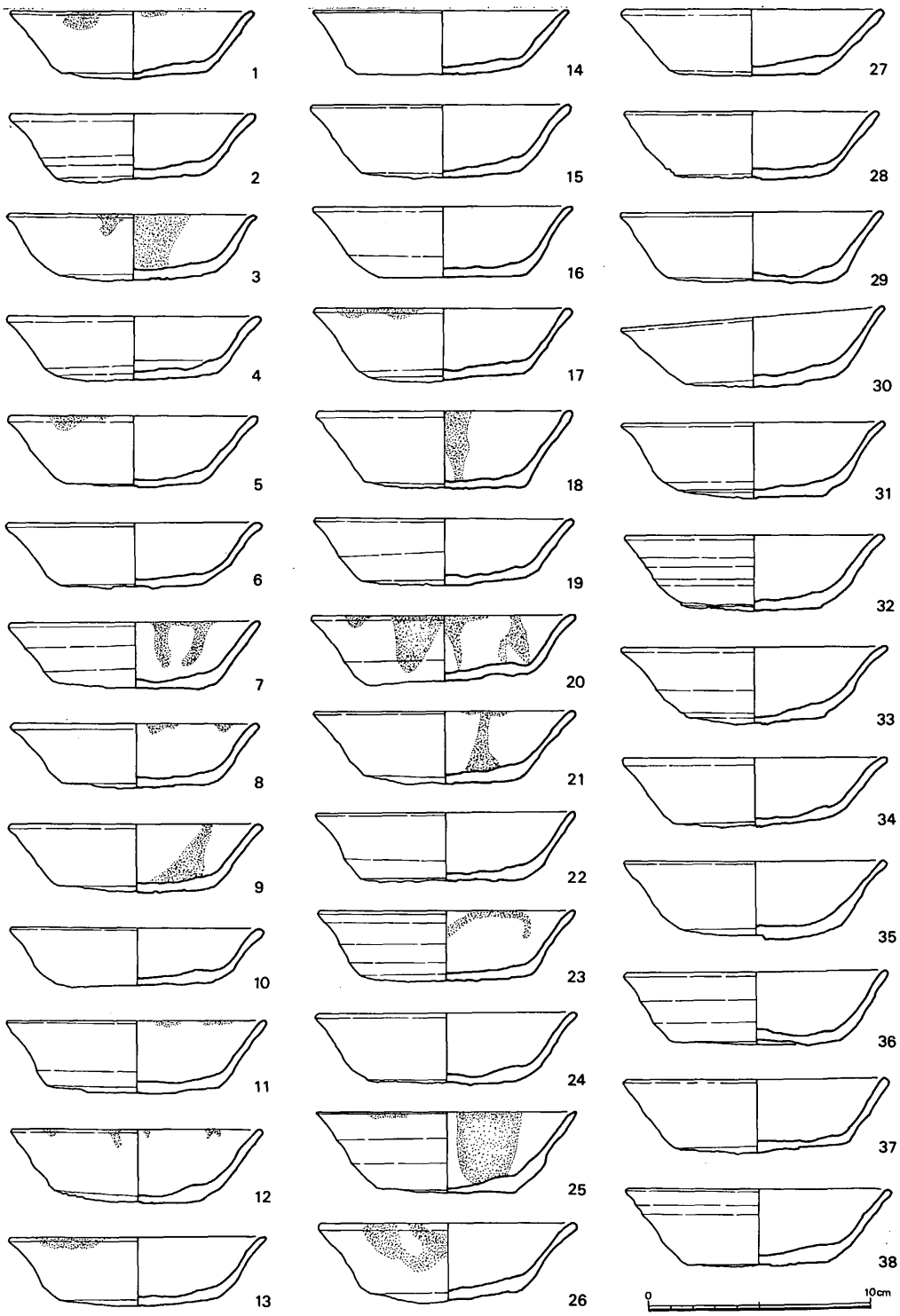
甕（126・127）　126・127ともに体部内面は縦方向のヘラ削りを行なっている。127は体部に粘土紐の痕跡が顕著である。126の体部下半には格子叩き目がある。両者とも内面には焦げ付きが残っている。

鉢（128）　粘土紐成形による。外面には煤が付着し，内面には焦げ付きがあることから鍋として使用されたことがわかる。

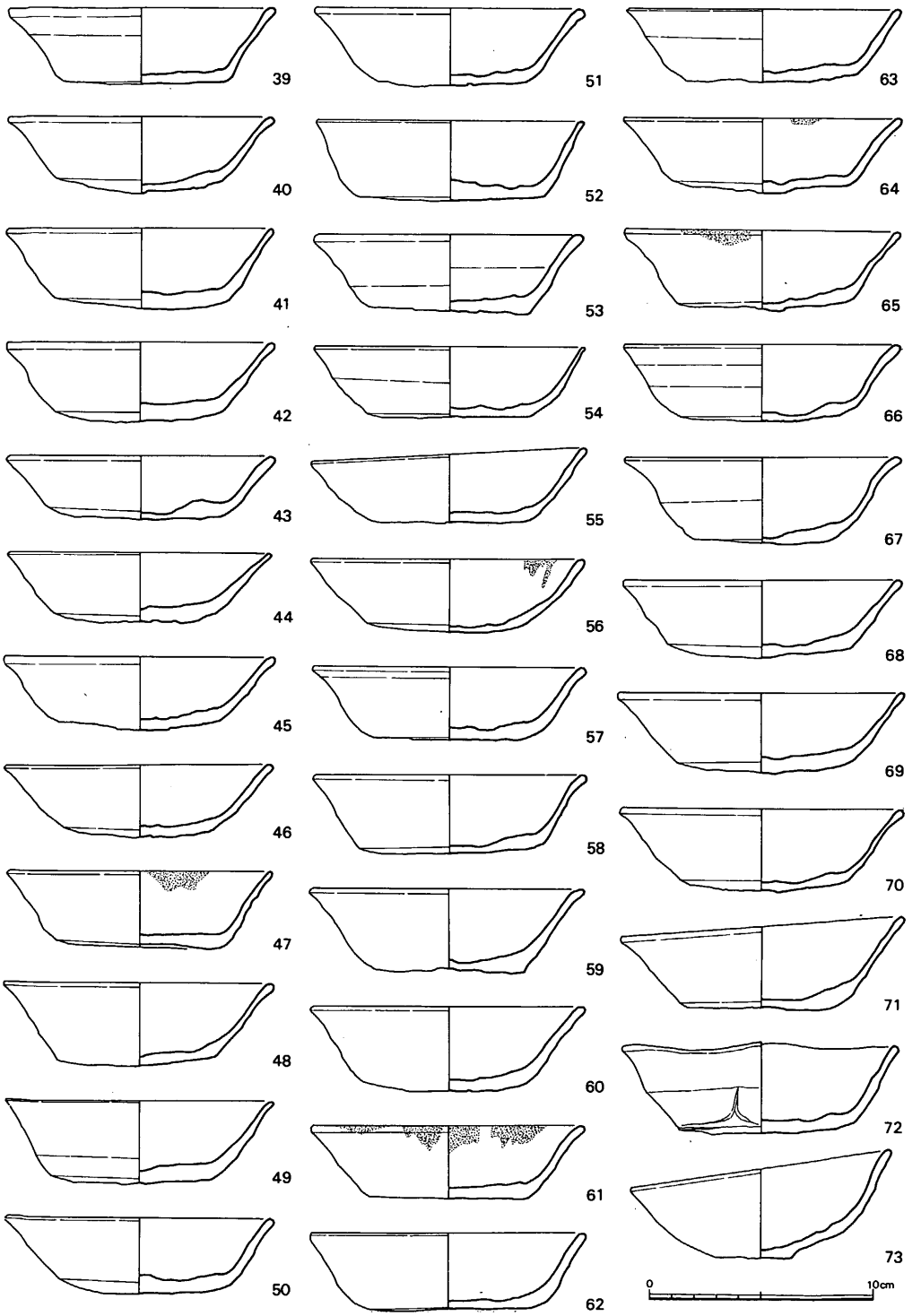
黒色土器

内面のみを燻したＡと内外面を燻したＢとがある。

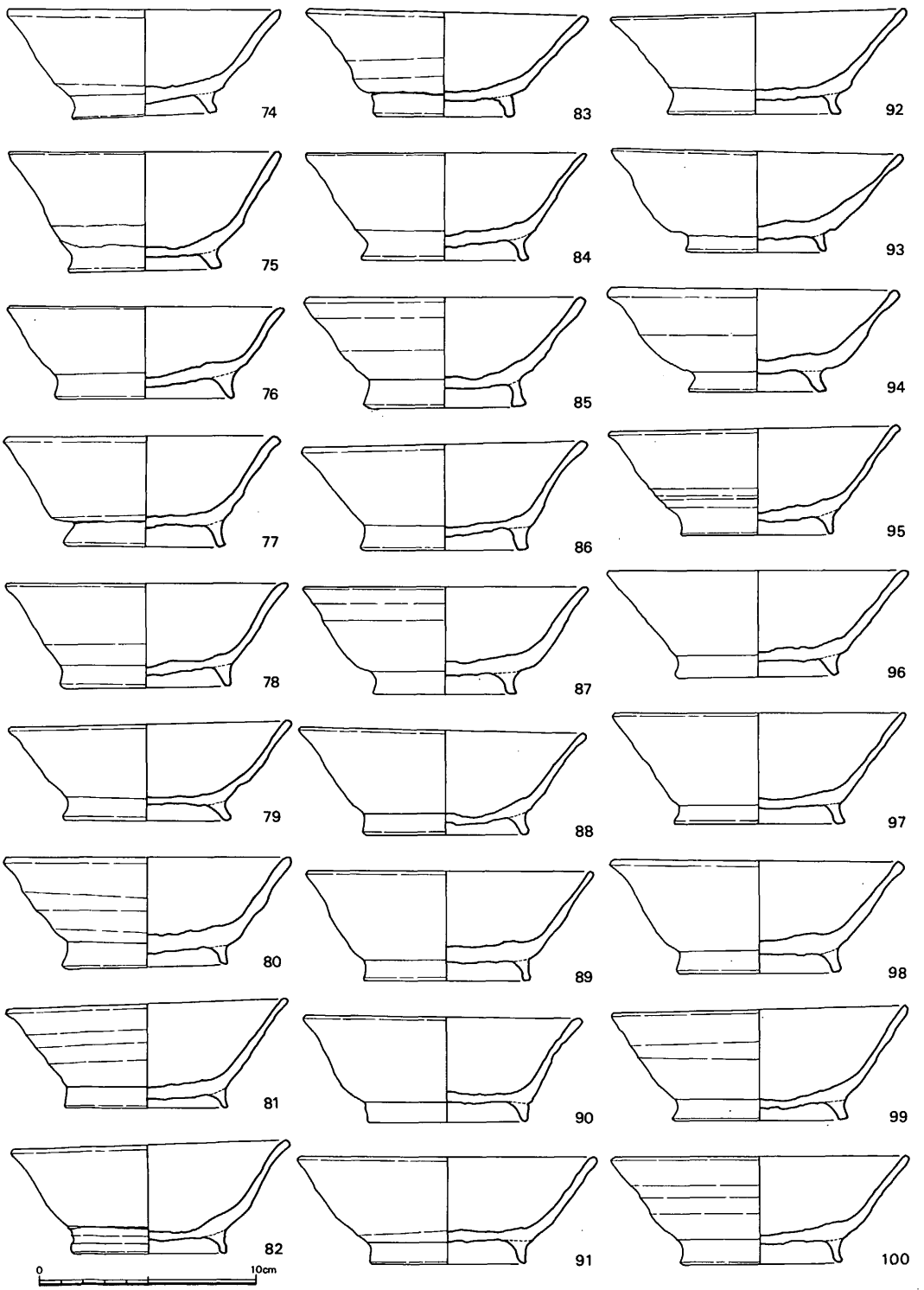
黒色土器Ａ



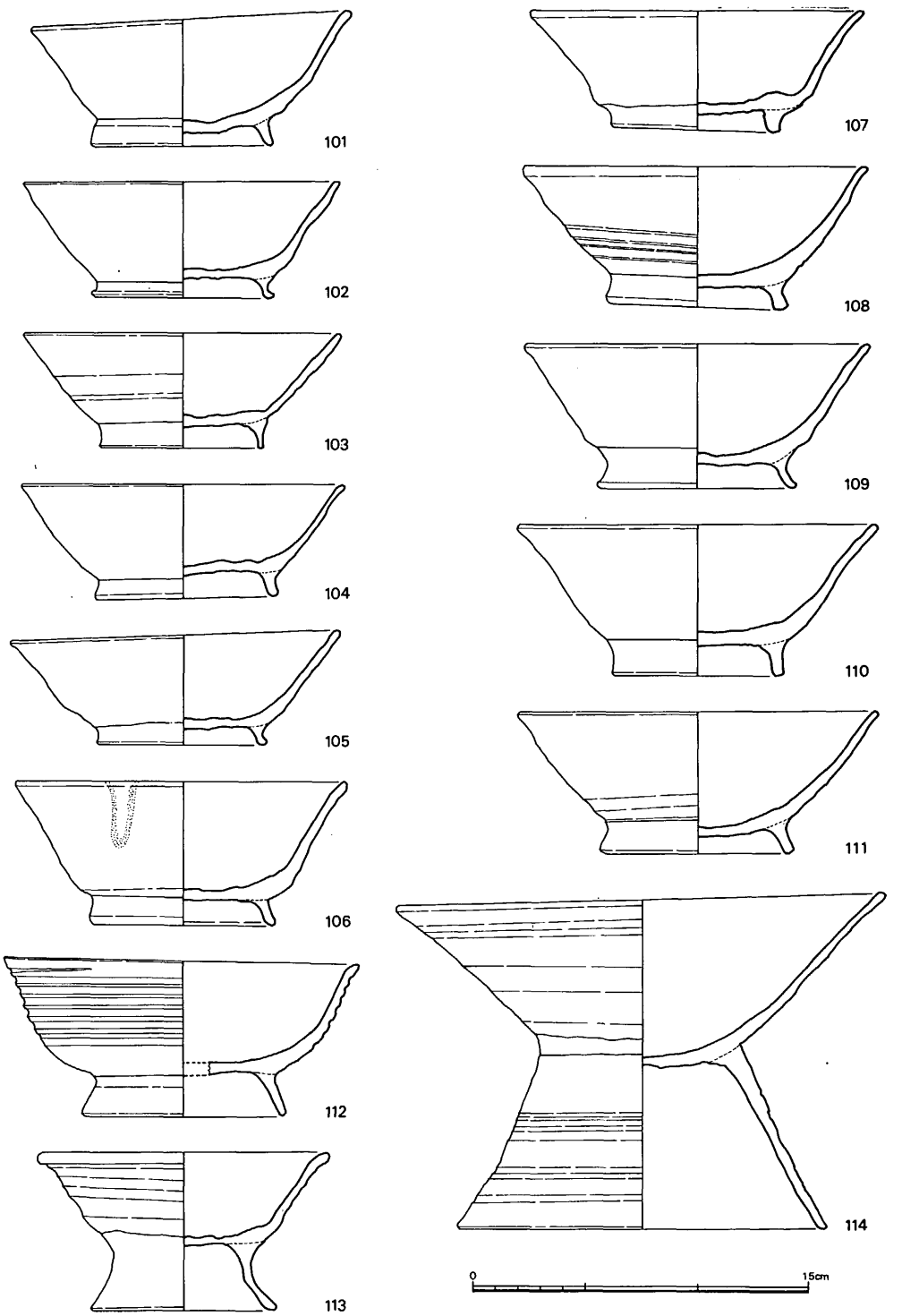
第27図　ＳＫ1800出土土器実測図（１）



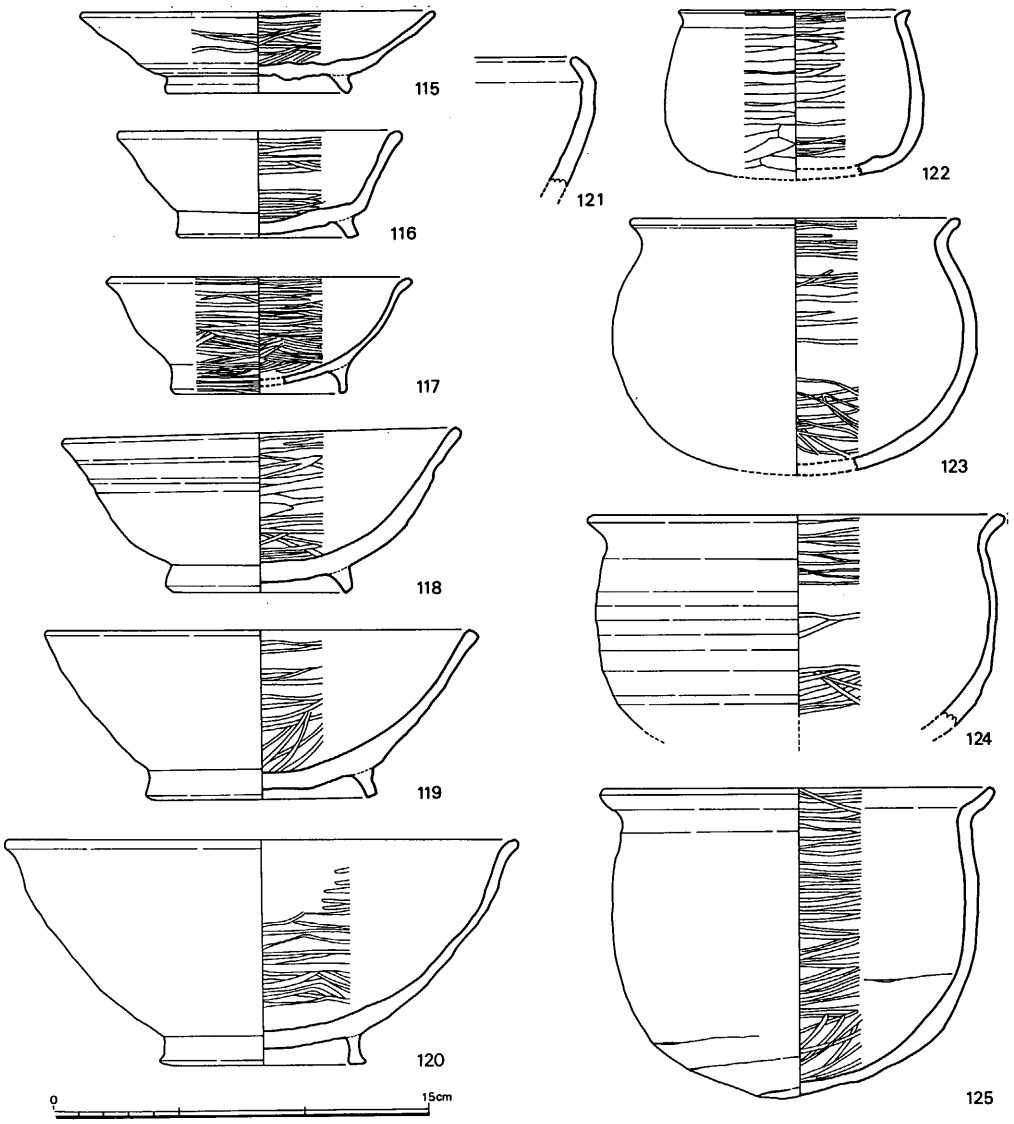
第28図　ＳＫ1800出土土器実測図（２）



第29図　SK1800出土土器実測図（3）

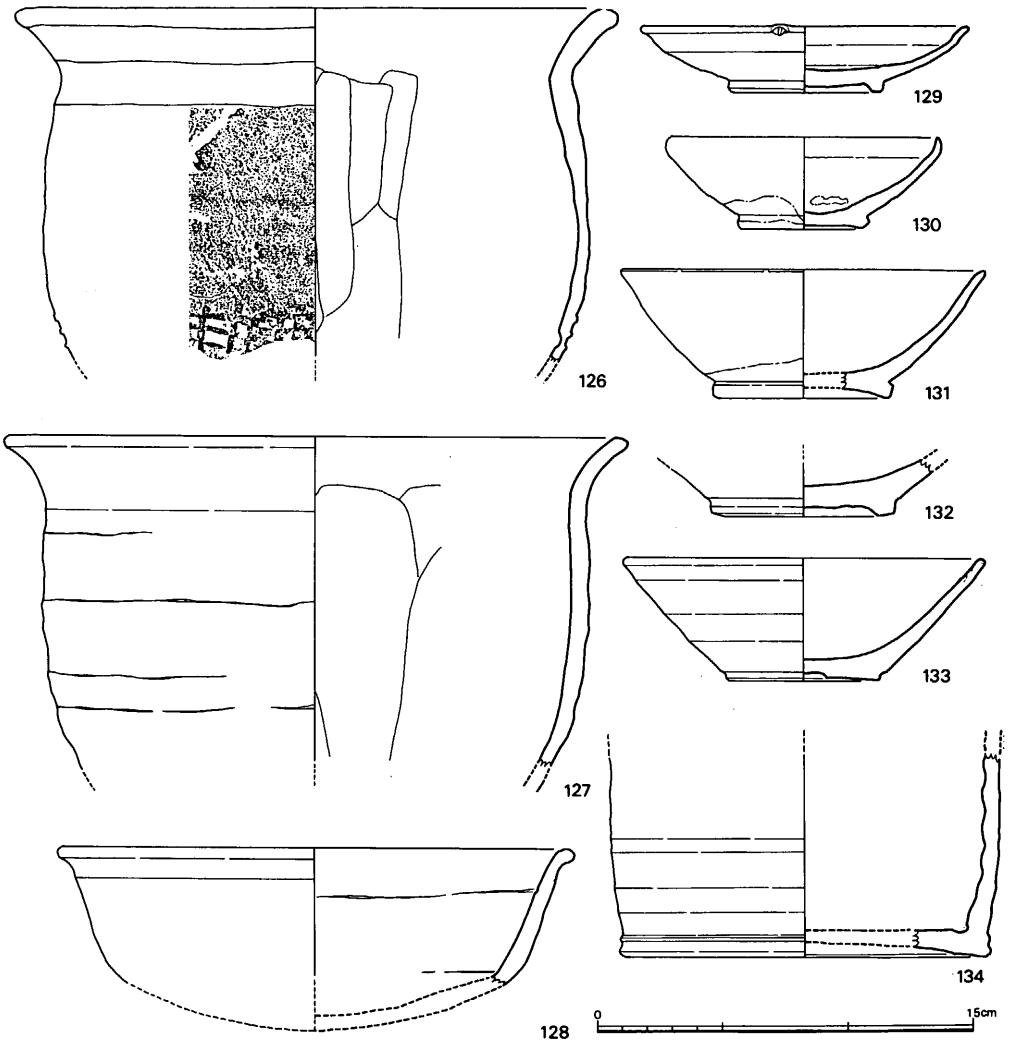


第30図　ＳＫ1800出土土器実測図（4）



第31図　ＳＫ1800出土土器実測図（５）

椀（116・118～120）　116は土師器椀の小形品と相似している。内面の燻しのほとんどはとれ，一部に観察できるだけである。118～120の体部は丸味をもち，さらに120は口縁部を若干外反させている。118の内面に径約8.3cm×7.4cmの長円形の「あたり」がみられ，器を積ねて焼成したためと推定される。119の外底には「上」銘の墨書がある。120の内外面には漆かと考えられる黒色を呈し，光沢のあるものが付着している。漆容器として使用されたのかも知れない。



第32図　ＳＫ1800出土土器・陶磁器実測図（6）

鉢（121）　鉄鉢形を呈する。外面の屈曲部以下は回転ヘラ削りを行ない，屈曲部以上の口縁部は内面と同様に丁寧なヘラミガキを行なっている。

壺（122）　口径9.2cmの小壺である。外面体部下半をヘラ削りする他はヨコ方向のヘラミガキを行なう。このミガキの部分に炭素を吸着させている。全面にわたって燻されていないため，黒色土器Ａとした。

甕（123～125）　体部上半から弯曲し球形に近い123・124と上半が直立ぎみの125とがある。３者ともに体部下位は成形時の指頭痕が残っている。ヨコナデ調整した後に，内面は底部をジグザグ状に，他はヨコナデ方向にヘラミガキを行なっている。

黒色土器B

皿（115）　ヘラミガキは体部内面を密に行なっているが，内底や体部外面は粗である。内底のナデは強く，またそれと同時に生じる外底の板状圧痕の凹凸も著しい。

椀（117）　体部に丸味を有し，口縁部を外反させる。器面のヘラミガキは非常に丁寧で，外底にまで行なっている。外底にまでヘラミガキをする例は大宰府出土品のなかでは極めて稀である。燻しも非常に良好で，銀色の光沢を放つ。

緑釉陶器

皿（129）　口径14.1cm，器高2.7cmである。体部外面を回転ヘラ削り調整している。口縁部には外側からヘラ状工具で押え輪花としている。残存しているのは2つであるが，復原すると4つになる。釉は底部畳付部までかけられているため，畳付部および体部見込み部に重ね焼き跡が明瞭に残っている。胎土は暗灰色，釉は濃緑色を呈する。非常に美しい焼き上がりである。

陶磁器

白磁Iが1点，越州窯系青磁椀I－1が4点，I－2が5点，II－2・cが1点，II－2・dが1点，II－3が1点，II類の不明が1点および水注・壺片が出土した。

白磁

椀　「蛇ノ目」高台を有する通例のものである（図版58のa）。その他に口縁部を外反させる深い器形の小片も出土している。このような類例は少ない。

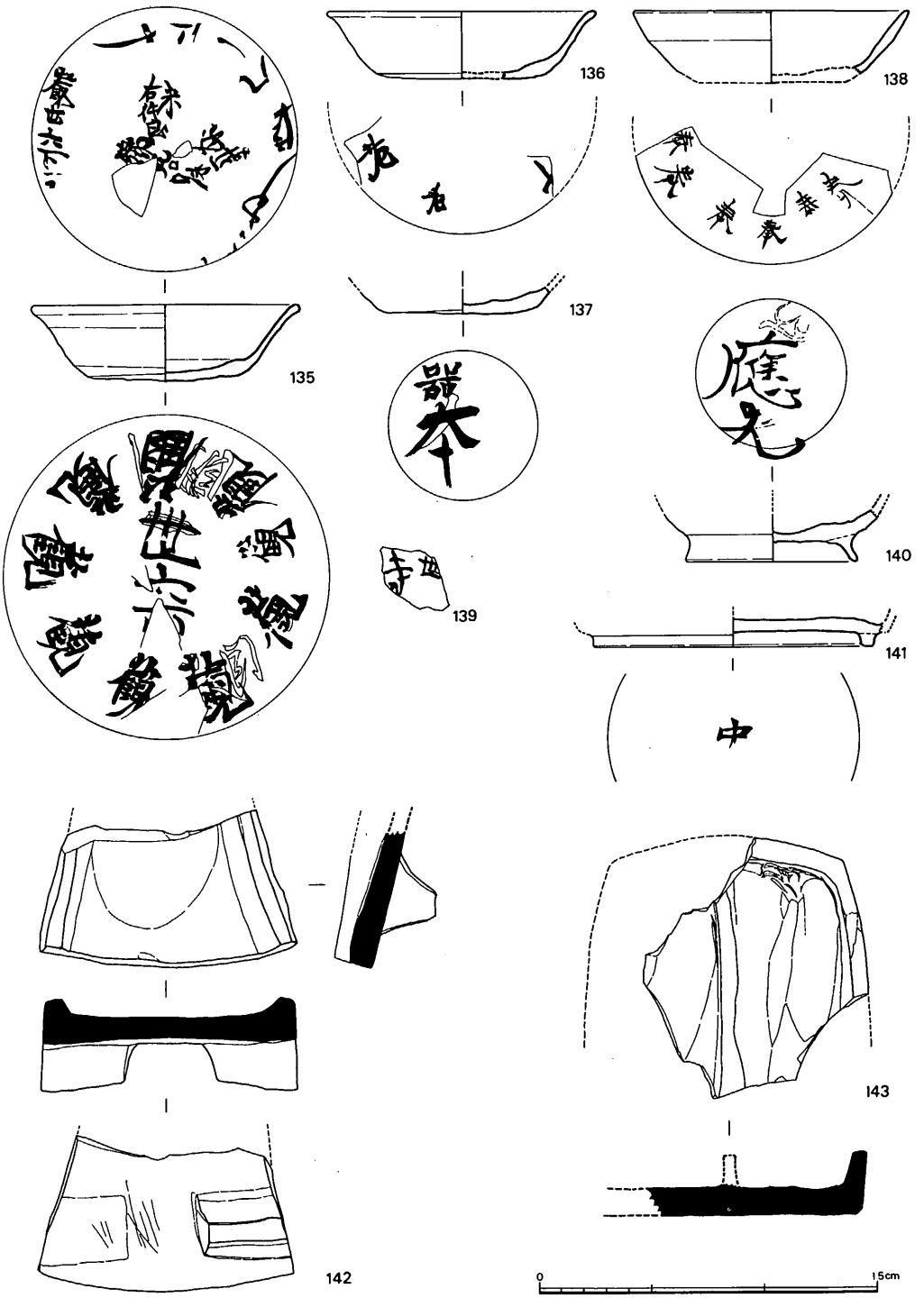
青磁

椀（130～133）　全て越州窯系の青磁である。130は口径10.6cm，器高3.7cm，底径4.9cmである。白化粧土の上に淡黄緑色の釉をかけている。内底の目跡は5個，外底は糸切り離しのままである。II－2・d類。131は口径14.6cm，器高5.2cm，底径6.8cmである。130と同様に白化粧土の上に淡黄色の釉をかけている。外底はヘラ削り調整され，糸切り痕は完全に消えている。II－2・c類。132は高台畳付部を露胎とし，ここに目跡がある。I－2類である。133は口径14.1cm，器高4.9cm，底径6.0cmである。全面施釉した後に畳付部分の釉を一部カキ取り，焼台に載せて焼成している。この畳付部分に7個の目跡がある。胎土は淡灰茶色を呈し，オリーブ色の釉がかかる。内外面ともに細かい貫入を伴う。典型的なI－1類である。土師器が多量に出土したのに比して出土量は少い。

壺（134）　外面下位は回転ヘラ削り，他はヨコナデである。外面は火のまわりがよく，充分に還元されて濃緑色を呈するが，内面は緑黄色に焼成されている。外底は露胎で暗赤褐色を呈する。

墨書土器

墨書のある土器は杯片に多く，他の器形のものには少ない。また，墨書文字から意味を読みとれる例は少ない。135は外面底部に「世音」それを囲むように側面に「観」を列記し，全体と



第33図　ＳＫ1800出土土器・硯実測図（7）

して「観世音」と読めるよう書いている。内面は判読困難な部分が多く，判読できたのは「米」「右伴白（曰）」「観世音」だけである。136は体部外面に「老」，137は外底に「器本」，138は体部外面に「奉」，139は外底に「□世音」，149は内底に「應(光カ)□」，141は外底に「中」銘がある。141はＳＫ1800の時期に伴うものではなく，奈良時代の土器が入ったものである。

硯

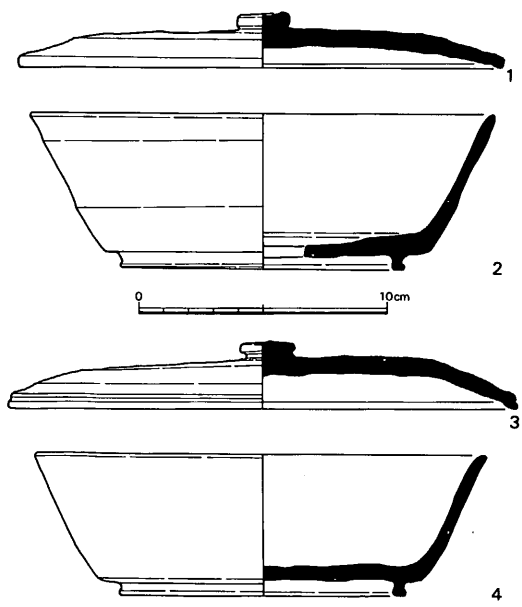
風字硯（142・143）　いずれも須恵製である。142は脚付風字硯の端部付近が残存している。最大幅11.4cmである。胎土中には，わずかに砂粒を含むが，比較的精良で，焼成も堅緻である。143は突帯により左右に分割された二面硯で，中央突帯部分は剝離し，欠失している。器面が荒れているため細砂粒が表面に浮き出ている。暗灰色を呈し，焼成は堅緻である。142・143ともに内外面をヘラ削り調整している。

円面硯　硯面と圏台の一部を残す円面硯の破片１点がある。外堤の下位に凸帯をめぐらし，外堤と凸帯上に耳状のものを貼付する。茶灰色土下層出土（図版69のａ）。

ＳＸ1810出土土器（第34図，別表，図版60）

須恵器の蓋と身がセットとして出土した。

杯蓋（１）　口径19.2cm，器高2.2cmである。断面三角形に近い口縁部と偏平な撮を有する。天井部は回転ヘラ削り調整，天井部内側はナデ調整を行なっている。胎土中は砂粒が少なく精良である。焼成は軟質で灰白色を呈する。



第34図　ＳＸ1810・ＳＸ1815出土土器実測図

（２）　口径18.6cm，器高6.3cmである。外底は回転ヘラ削り調整を行なっている。内底を穿孔しているが，孔形は不整然としており，一定の方向から力を加えたとは思われない。しかし，検出時には，破片を存していなかったので，穴を穿ったことは確かである。胎土は蓋と同様に精良であるが，焼成は不完全で軟らかい。外面は黒灰色，内面は灰白色を呈する。

ＳＸ1815出土土器（第34図，別表，図版60）

ＳＸ1810の西側に近接した地点から出土した。これも須恵器の蓋と身がセットをなして出土した。

杯蓋（３）　口径20.2cm，器高2.7cmである。口縁部は端部をつまみ出しているた

め，外面に１条の凹線が入ったようになる。撮は頂部が若干尖りぎみになるが，偏平な部類に入る。天井部は回転ヘラ削り調整を行なう。胎土は精選され，砂粒は少ない。焼成は軟質で，淡灰色を呈する。

杯（４）　口径18.1cm，器高5.7cmである。ＳＸ1810出土の杯の高さを減じた形態で，体部の立ち上がり，高台の貼付部分と形状も変化はない。しかし，外底の回転ヘラ削り調整は器面風化のため明らかでない。胎土は精良で，ほとんど砂粒を含まない。焼成は軟質で，外面は黒色，内面は灰白色を呈する。

整地層出土土器（第35・36図，別表，図版61・62）

整地層から出土した遺物は少なく，図化できたのはかろうじて図示した３点だけである。

須恵器

杯蓋（１）　内傾する口縁部と偏平な撮を有する。天井部を回転ヘラ削りする他はヨコナデ・ナデ調整である。整地層出土品のなかでは最も新期に属する。８世紀初頭頃と考えられる。

高杯（２）　杯部底部を回転ヘラ削りし，他はヨコナデ・ナデ調整である。杯部内面には灰を被っている。

長頸壺（３）　口縁部だけの破片である。

濁茶色土層出土土器・陶磁器（第35・36図，別表，図版61・62）

須恵器

杯蓋（４～８）　４は返りを有し，偏平な撮を有する。天井部を回転ヘラ削りしている。５・６は小形の蓋で擬宝珠状の撮がつく。天井部はヘラ切りのままである。７・８は天井部を回転ヘラ削り調整している。

杯（９～17）　９～14は高台を有するもので，小形の９～11と大形の12～14とがある。底部は高台貼付時のヨコナデを除くと全て未調整である。15～17は無高台の杯で，16の外底には板状圧痕がある。17は灯火器として使用。底部は全て未調整。

皿（18）　体部は外に大きく傾く。底部はヘラナデ状の粗い調整をしている。

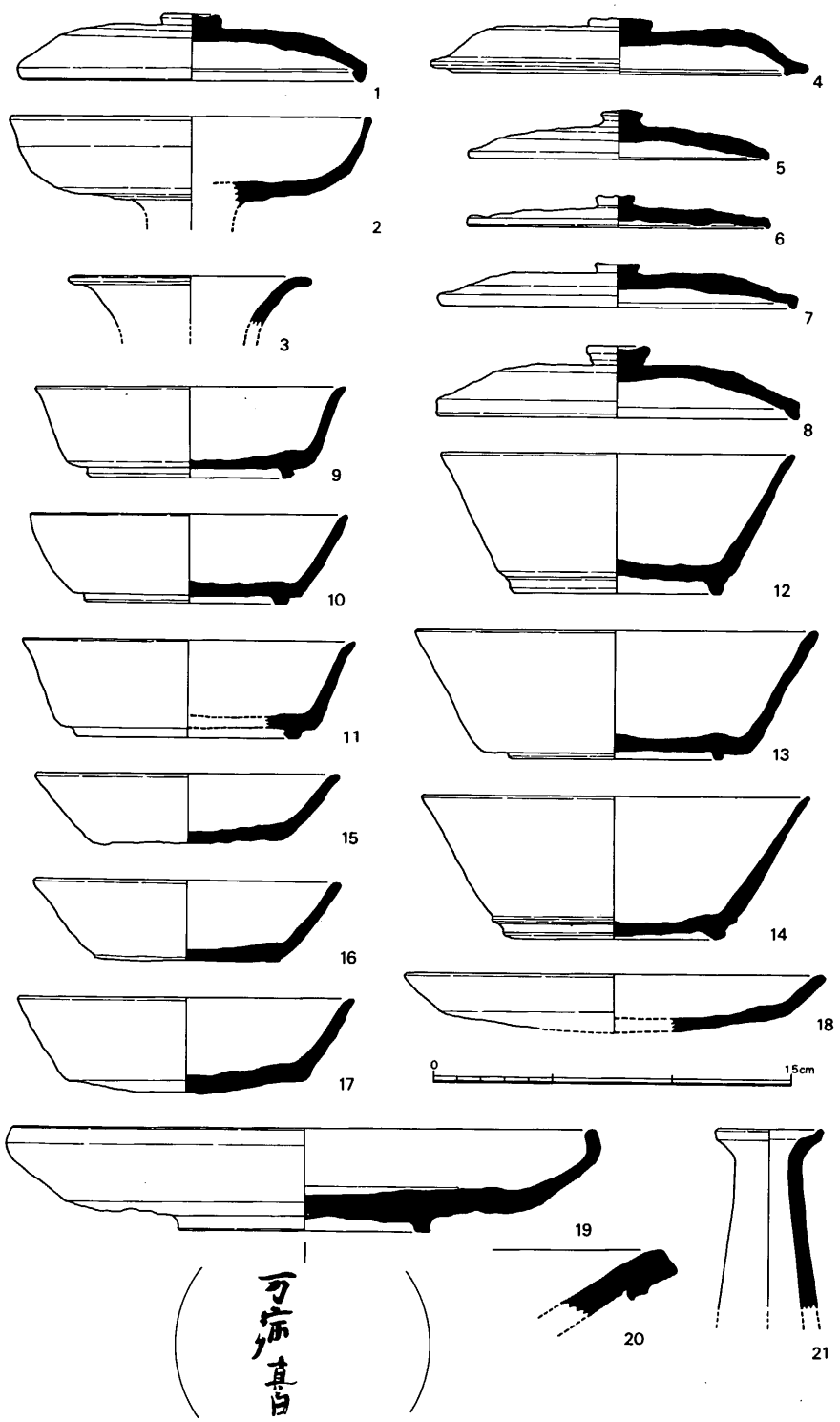
盤（19）　口縁部を内弯させ，断面四角形の高台を貼付している。底部は回転ヘラ削り調整をしている。内面は平滑で，朱が付着していることから朱墨をすったものと考えられる。外底に「冂万□真白」銘の墨書がある。

甕（20）　外面に端部が凹状を呈する突帯を１条巡らしている。

土師器

杯（22～24）　22・24は体部外面最下位および底部を回転ヘラ削りしているが，23は体部外面中位以下および底部を回転ヘラ削りしている。22・24は体部をヘラミガキしている。23は灯火器として使用。

皿（25・26）　25はヘラ切り離しのままであるが，26は丁寧な回転ヘラ削り調整を行う。

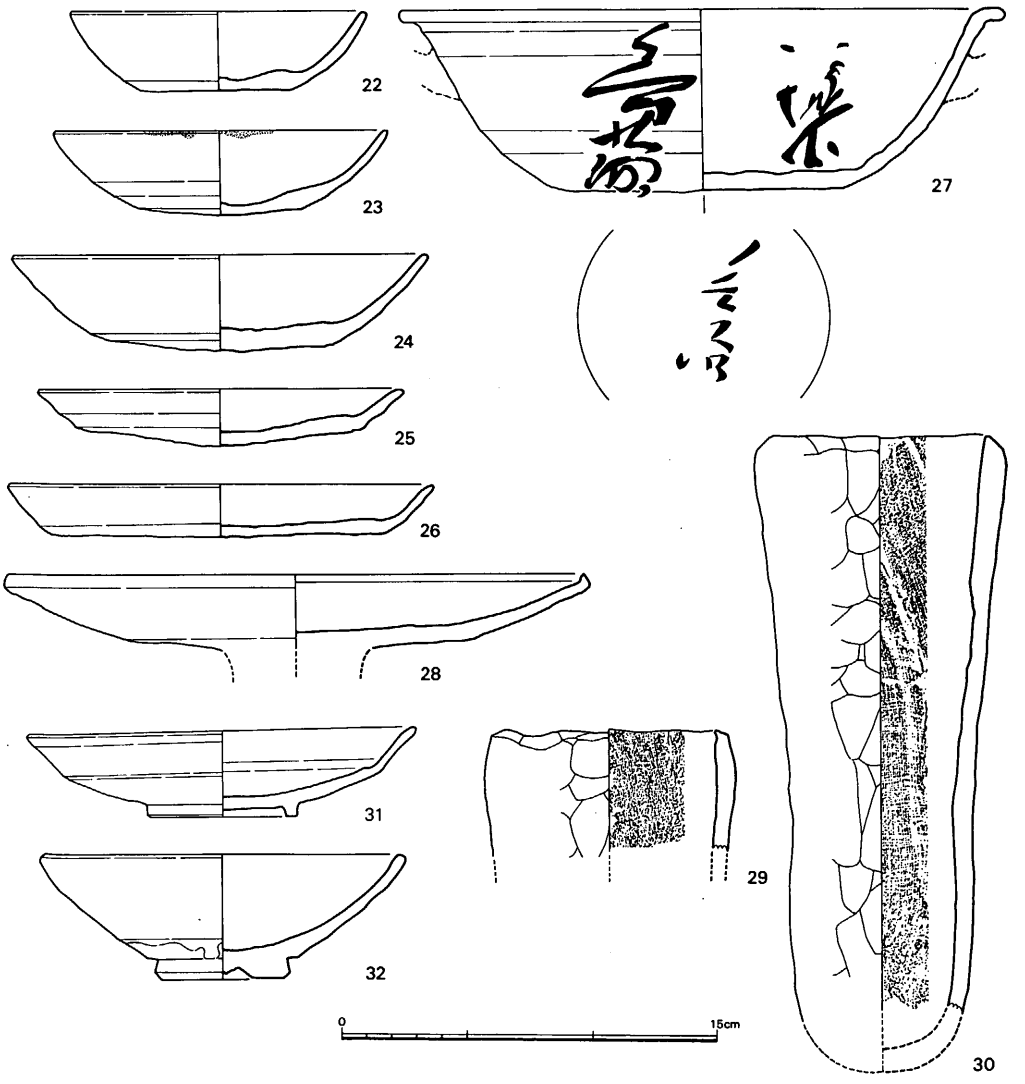


第35図　整地層・濁茶色土層出土土器・陶磁器実測図（1）

高杯（28）　杯蓋の形態を有する高杯で，内外面ともにヘラミガキしている。

鉢（27）　双耳の鉢である。体部外側中位以下を回転ヘラ削りしている。体部内面・外面および底部に墨書があるが，判読は困難である。胎土は精良で，砂粒は少ない。焼成は良好で，明茶色を呈する。

塩壺（29・30）　型に布をかぶせ，粘土紐を巻き，外側から手でしぼって成形している。このため外側は指頭痕が顕著である。両者とも布目は粗い。砂礫と共に絹雲母を多く含み，特に30は著しい。



第36図　整地層・濁茶色土層出土土器・陶磁器実測図（2）

灰釉陶器

瓶（21）　胎土は暗灰色を呈し，釉は淡緑色を呈する。胎土中に小さな黒粒を多く含む。

白磁

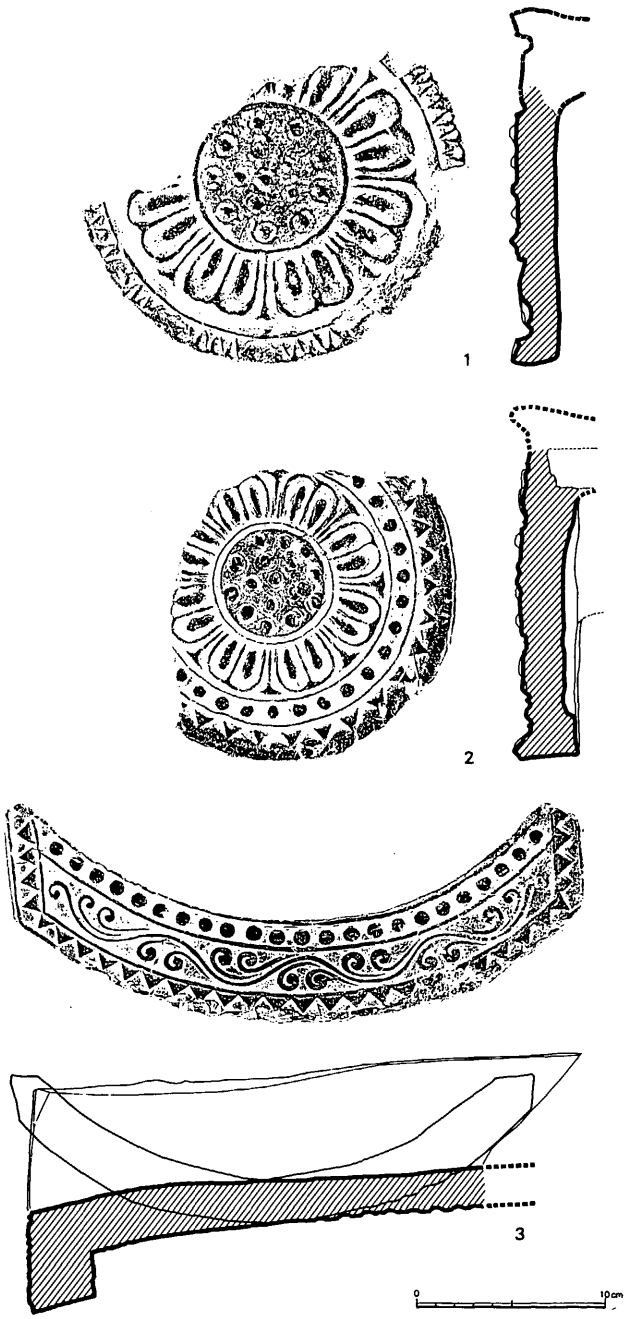
皿（31）　口径15.5cm，器高3.5㎝。体部中位で屈曲し，その部分は不明瞭ながら稜線を有する。胎土は非常に精良で純白緻密である。釉色は釉だまり部分では若干黄色をおびるが，純白に近い。高台端まで施釉し，ヘラで畳付部分の釉を削りとっている。椀Ⅰ類に伴う皿である。

青磁

椀（32）　口径14.6cm，器高5.0㎝である。体部下位を回転ヘラ削りしている。底部は「蛇ノ目」高台を有する。胎土は暗灰色，釉は貫入を伴う淡黄緑色を呈する。越州窯系青磁椀Ⅱ－1類である。

瓦類　（第37・38図，図版64）

この調査では多量の瓦が出土した。最も多数を占めるのは丸・平瓦であり，軒先瓦は343点ある。その内訳については巻末の一覧表に示した。軒丸瓦は197点で，表3－24の老司Ⅰ式が127点と圧倒的に多く，全体の64.5%を占める。また軒平瓦でも146点のうち，表3－1の老司Ⅰ式が63点で



第37図　軒先瓦拓影・実測図

全体の43%を占めている。これらは主に調査区東半部の土壙から出土した。今回の調査で出土した瓦類の中で最も注目すべきは第37図に示した大和の川原寺の軒丸瓦が1点含まれていることである。調査区北よりにあるＳＥ1795付近の中世遺物を含む層から出土したもので，約3分の1ほどを欠いている。瓦当径19.4cmで，内区は径の大きな中房に圏線をともなう蓮子１＋５＋９を配する。複弁八弁蓮華文で，弁は強く反転する。外区は面違い鋸歯文である。瓦当厚は2.2cmでやや薄い。瓦当裏面はヘラ削り調整を行っており，やや中凹みになる。側縁は面取り風にヘラ削りを施している。胎土は砂粒をほとんど含まず，全体的に灰色を呈し，焼成はやや軟質である。この瓦を奈良国立文化財研究所において川原寺出土のものと比較検討した結果，601－Ｃ類と同笵であることが判明した。次に文字瓦では総点数142点のうちに第38図に示したものが106点あり，圧倒的に多い。斜格子の叩きの中央部に三重の長方形の枠を設け，その中に楷書で「観世音寺」と左文字で入れる。この瓦は東面回廊の調査の際にも出土しており，出土数49点のうち27点あり，同じ傾向を示している。この他，熨斗瓦が3点ある。いずれも平瓦を生乾きの段階で分割したもので，凸面の叩きは格子目のものと縄目のものがある。凹面はいずれも布目を残している。側縁はヘラ削りによりていねいに調整するものと，調整を加えずに凹面からの分割面を残したままのものがある。

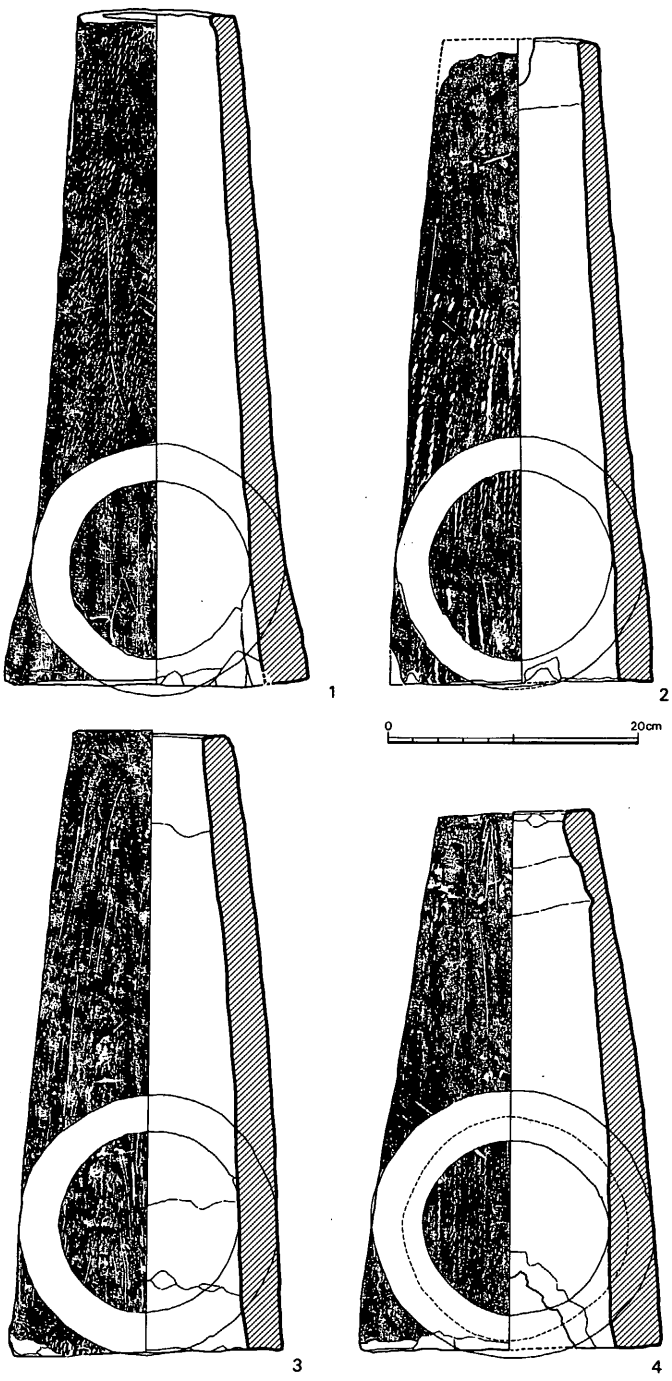


第38図　文字瓦拓影

土管（第39図１～４，図版64）

暗渠施設５条（ＳＸ1831～1835）を検出した。このうちＳＸ1832・1835は截頭円錐形を呈する土管列である。ＳＸ1832は最も保存状態が良く，11点が連結して検出された。ここではＳＸ1832の土管について観察した状況を記述する。なお第39図に示したものは，出土した土管の中で保存状態が最も良好で，かつ形態，法量などに特徴がみられるものである。またＳＸ1832の土管列は北側から1～11の番号を付し，土管計測値は表で示した。

11点のうち８点が黒色で，他３個は暗灰色を呈する。表をみると大部分は全長50cm～54cm前後であるが，第39図４は出土した土管のうちで最も短く，長さ43.9cmである。またこれの厚さは上端3.1cm 下端4.2cmで 他の土管に比べて厚く作られている。これは土管の中位から下端にかけて厚くなっており，下端部中央に粘土板を重ね合せた線が認められることなどから，中央部から下端部にかけ粘土を補足したものと考えられる。このような例は他に１点認められる。



第39図　土管拓影・実測図

出土した土管の上端径，下端径の平均値は，12.7cm，22.5cmとなる。土管を連結する場合，この上端径12.7cmは，内径とほぼ同じ数値で接する。下端部から約21cmのところで内径12.7cmとなり，この付近で連結する。しかし第39図－1・4のように長・短の土管もあり，一様ではない。

内面は全て細い布目痕を有している。また糸切り痕および模骨板痕を残しているものも数点みられる。第39図1・2・4のように，内面上端部から約4cm～8cm位のところで浅い稜線が認められ，その特徴は①布目は下端から上端まで糸の筋が通っている，②稜線から下方は黒色で上端は灰色を呈する，③粘土を補足したように凸帯状になるものもあり，指ナデ調整していることである。このような特徴を指摘できるが，なぜこのような稜線がつくのか明らかにしえない。この他第39図3のように内面の上端部，下端部を丁寧にヘラ削り調整しているものもある。外面は全て縄目の叩き

を擦り消し，上端から下端にかけて丁寧に縦方向の削り調整を行っている。第39図3は外面下端部に「卅一」のヘラ描きが認められる。胎土には若干の砂粒を含み，焼成は硬質。これらの土管の内面および破損した部分には粘土板合せ目の跡が明らかに残っており，また内面一部に板状痕が残っているものも認められることから，桶巻き作りの製作技法を用いていると思われる。

土管は第45次（観世音寺東辺部）調査でも出土しており，今回出土したものと，形状・法量ともに同類である。第45次調査の土管は極めて丁寧な調整が施されていたため，製作技法に判りにくい点が多く，今後の問題とされていたが，今回の数本の土管出土によってその製作技法が明らかになった。土管の類例は平城京跡（左京一条三坊十五・十六坪出土），基肄城跡，四王寺経塚，興善寺（熊本県八代市興善寺町）などで知られる。

No	挿図番号	上端径(cm)	下端径(cm)	長さ(cm)	厚さ(cm) 上端	厚さ(cm) 下端
1		欠	19.3	52.3	1.5	2.3~2.4
2		11.6	23.8	49.4	2.7~3.0	3.8
3		13.0	欠	53.7	3.1	3.3
4		欠	欠	欠	欠	3.2
5		欠	22.2	50.2	2.4	2.4
6		12.2~13.9	23.0	52.5	2.1~2.5	2.8~3.3
7	第39図－2	欠	23.2	54.3	1.8	3.5
8	〃 3	13.3	21.9	50.7	2.3	2.9
9	〃 1	12.9	24.5	54.8	2.3	3.4
10	〃 4	12.7	23.9	43.9	3.1	4.2
11		12.8	21.1	52.4	1.6	3.2

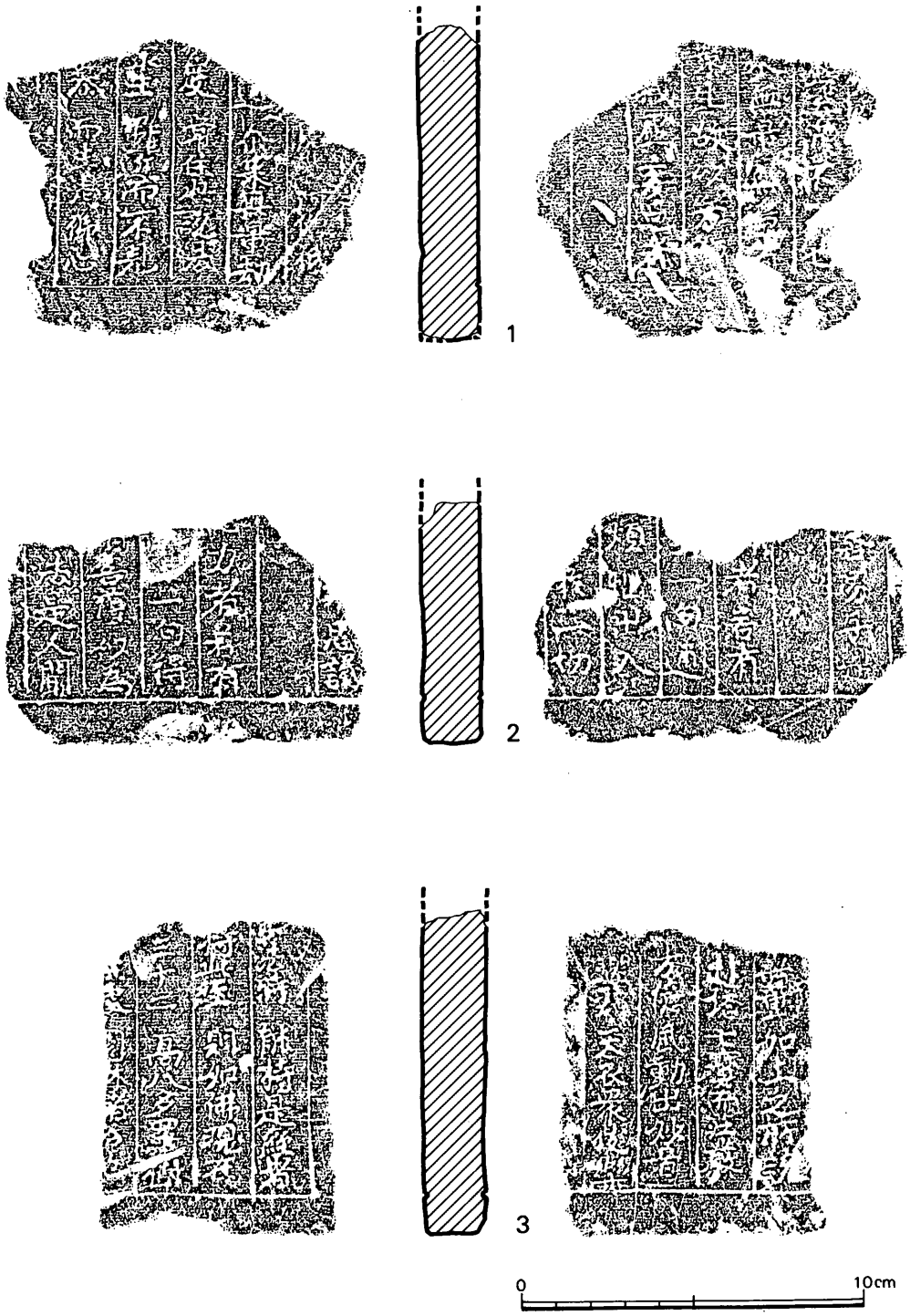
ＳＸ1832土管計測値表（上端径は外径である。）

瓦経（第40図，図版65）

１はＳＸ1700の東側部分，２はＳＤ1805を覆う層から発見した。１は妙法蓮華経巻六如来寿量品第十六の一部である。破片は右側縁と下縁を残し，左下隅部にあたる。表面は長行の最後の部分，裏面は偈頌の最初の部分である。通例どおり長行部分は17字，偈頌部分は４段20字を入れている。縦罫線の幅は約1.7cmである。 胎土中に若干砂粒や絹雲母を含むが，精良である。焼成はやや軟質で淡灰茶色を呈する。２は無量義経巻十功徳品第三の一部である。破片は左下隅部で左側縁と下縁が残っている。ヘラにより縦罫線が引かれ，その間にヘラにより一行17字の経文が書かれている。罫線の幅は約1.7cmである。胎土は微砂粒や絹雲母を含むが，比較的精良である。焼成はやや軟質で，淡灰色を呈する。１・２ともに厚さは1.7cm～1.8cmである。３は妙法蓮華経巻六分別功徳品第十七の部分である。既報告分であるが，参考のために図示した。(註1)

木簡（図版66）

木簡は，ＳＥ1775から１点，ＳＥ1790から２点，ＳＥ1795から１点，ＳＫ1800から７点およびＳＤ1805層から２点の合計13点が出土した。木簡学会の分類に従ってこれらを型態的に見ると，019型式・031型式・032型式・033型式・039型式・059型式がそれぞれ１点ずつ，他の７点はすべて081型式に分類できる。また墨書について見ると，文字とみなされるものが５点，断片的な墨痕が見られるのみで文字を想定できないものが６点，形態的には明らかに木簡であるが，墨痕は全く認められないものが２点，に分類できる。



第40図　瓦経拓影・実測図

以下，代表的なものについて若干の所見を述べながら報告する。

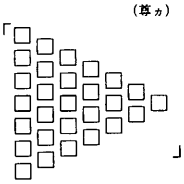
（1）　□□観世音井

ＳＥ1775から出土。上下両端は折られており，現状では長さ7.5cm，幅1.5cm，厚さ0.1cmを測る。全体的に墨が薄く，不明文字の右半は「見」らしく見え，見部の文字であることは推定できるが，左半には墨痕が全く認められず，それ以上の想定はできない。「世」字のみを草書体で記している。「井」は菩薩の意であろう。

（2）・「南无□□

南无□□□

南无五大力□（尊カ）」

「  」

ＳＥ1790から出土した呪符で，頭部が若干欠損し，表裏両面とも腐植などによる損傷が著しいが，ほぼ原形を保つ。長さ16.4cm，幅6.3cm，厚さ0.4cm。表面右端行の「无」字の右下には樹皮で点綴した痕跡と推定される小孔が見られ，孔内には樹皮が残存しているが，これ以外にかかる痕跡は認められない。表面左端行の欠損文字は一般に「尊」ないし「吼」字が考えられるが，残存墨痕から推定して前者の可能性が大である。中央行の２字は「大日」と推定され，とすれば，これには「如来」の２字が続くのであろう。右端行は全く明らかでない。裏面では上半部に墨痕が見られるが，全体的に不明瞭である。墨痕の状況から見て，いずれも同一文字であり，また最上段では横に７字，最下段では１字というように逆三角形的に記されていると推定される。文字に完全なものは皆無であるが，「咒」あるいは「鬼」のいずれかと考えられ，最終画を点で止めているものが多いことからすれば，「忌」と記される後者であろう。

（3）「糯米」

ＳＫ1800から出土。頭部が少々欠損しているが，ほぼ原形を保つ。長さ11.9cm，幅1.8cm，厚さ0.2cm。墨痕は薄いが，２字を判読できる。これ以外に墨痕は認められない。

（4）　□五十余座祈祷成就圓満所」

ＳＤ1805から出土した。上端が折損しているため原形は不明。下端より6.4cmのほぼ中央に釘穴と推定される小孔がある。現存長31.5cm，幅4.7cm，厚さ0.5cmであるが，原形は現状よりかなり長くなると考えられる。墨はほとんど消失しているが，その痕跡部が四周に比して若干盛り上っているので判読できる。全体的に楷書体で記している中で「圓」字のみを草書体で記している点が注目されるが，これがいかなる意味を有するのかは明らかでない。また50余座が具体的には何を指すのかも明らかでない。

（5）　文亀元年

ＳＤ 1805 から出土した。右端および下端は原状を保つとみなしうるが，左上端は明らかに切断されている。現存長8.8cm，幅2.3cm，厚さ0.3cmを測る。この４字以外に墨痕は全く認められないので，本来の内容・意味などは明らかでない。ちなみに，文亀元年は西暦1501年に当り，２月29日に明応10年が改元された。

（6）　ＳＥ1795から出土したもので，下端以外の三辺はほぼ原状を保つとみなしうる。長さ4.3cm，幅4.0cm，厚さ0.4cmを測る。墨痕の方向は不規則であり，文字とはみなしがたく，また何らかの絵と解することも困難であろう。したがって，これの意味および墨書の目的などは全く明らかでないが，想定しうる一例をあげると，筆の穂先を整えるためになでつけるようにして書いたことが考えられる。

（7）　ＳＫ1800から出土したもので，折れかかってはいるが，ほぼ完形とみなしうる。長さ12.8cm，幅1.2cm，厚さ0.3cm。表裏とも墨痕は全く認められないが，この型式のものとしては大宰府史跡における初例である。

以上，出土木簡のうち，判読できるものおよび特徴的なものについて報告したが，これら以外はいずれもわずかな墨痕が見られる程度のものや全く見られないものであるため省略した。また，木簡の意味を広義に解し，いわゆる墨書木札をも含めて報告したことを付記しておく。

木製品（第41図，図版67）

主にＳＫ1800・ＳＫ1769・ＳＥ1790およびＳＤ1805から出土した。出土点数はそれほど多くない。

コケシ状木製品（１）　長さ17.5cm，直径２.５cmの棒の先端部近くに周囲から抉りを入れ偏平な頭部を作り出す。柄部のほぼ中央に一方から抉りを入れる。この抉りのある面の裏面は平面に削っており，断面がカマボコ形を呈する。松の柾目材，ＳＫ1800出土。

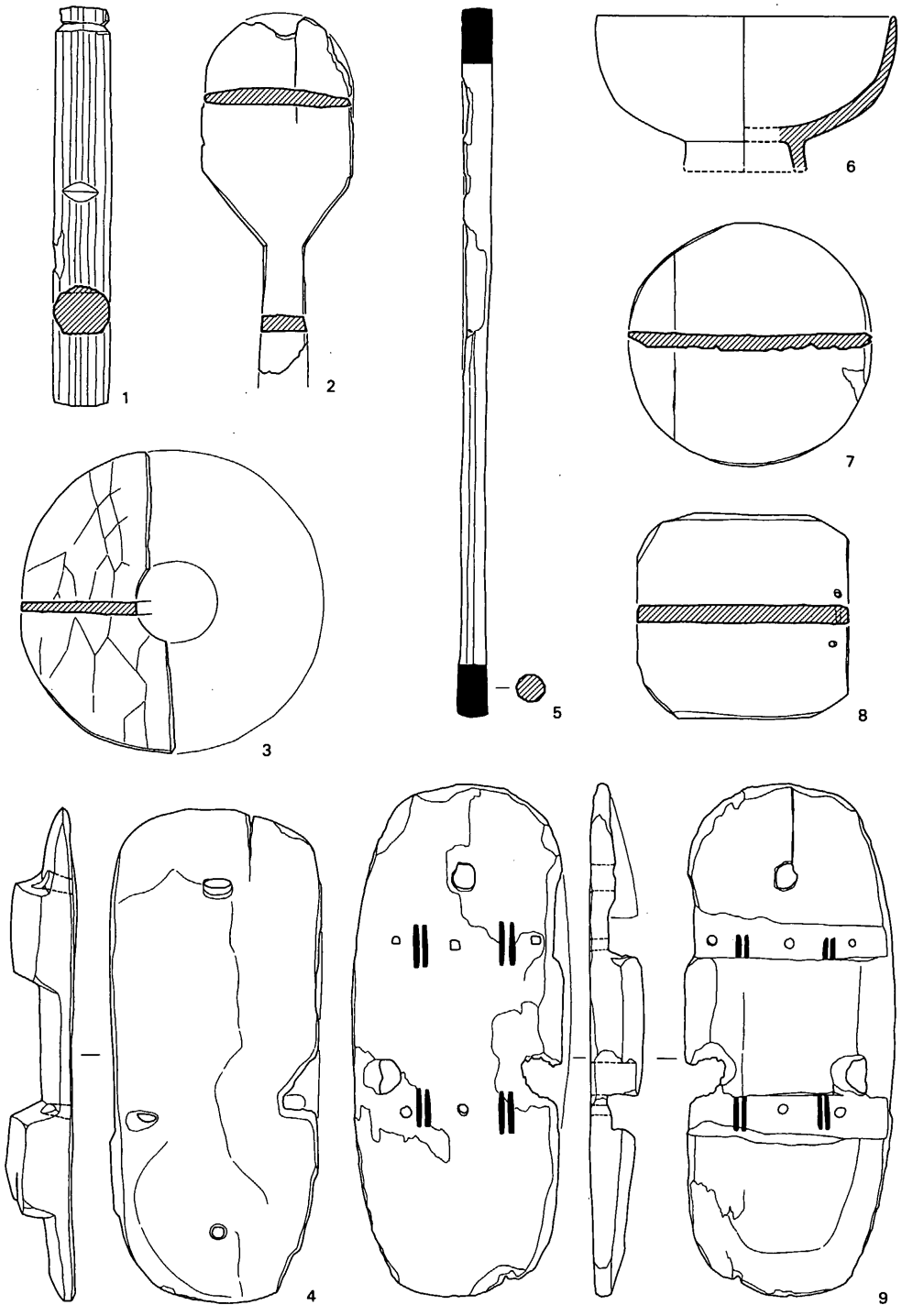
杓子（２）　身の先端部は半円形で頸部は斜め方向に直に削る。表は平面に削り，裏面は中央をやや甲高に削っている。柄は途中で折損しているが，やや末広がりになる。ＳＫ1800出土。

有孔円板（３）　杉の板材を用い，中央に円孔を穿つ。周側縁に木釘の痕跡はない。断面は中心部がやや厚くなる。半分を欠失しているが，直径は15.5cmほどになる。ＳＫ1800出土。

下駄（４）　広葉樹の一木から台歯を作り出す連歯の下駄で，台部は隅丸長方形をなす。鼻緒孔は中央に穿つ。台上面は「足ずれ」が観察でき，左足用と考えられる。台尻近くにも径0.5cmほどの孔を穿っている。

棒状木製品（５）　長さ31cm，径１.２cmの断面が円形をなす棒である。両端とも木口から２cm位の所まで黒漆を塗っている。中央部は腐植が進み，やや細くなっている。ＳＫ1769出土。

漆器椀（６）　２分の１ほどの破片であるが，口径13cm，高さ７cmほどに復原できる。全面に黒漆を塗っている。材は針葉樹で，横木取り。このほかに黒および朱漆をぬった容器の破片



第41図　木製品実測図 ($\frac{1}{3}$)

が数点ある。ＳＤ1805出土。

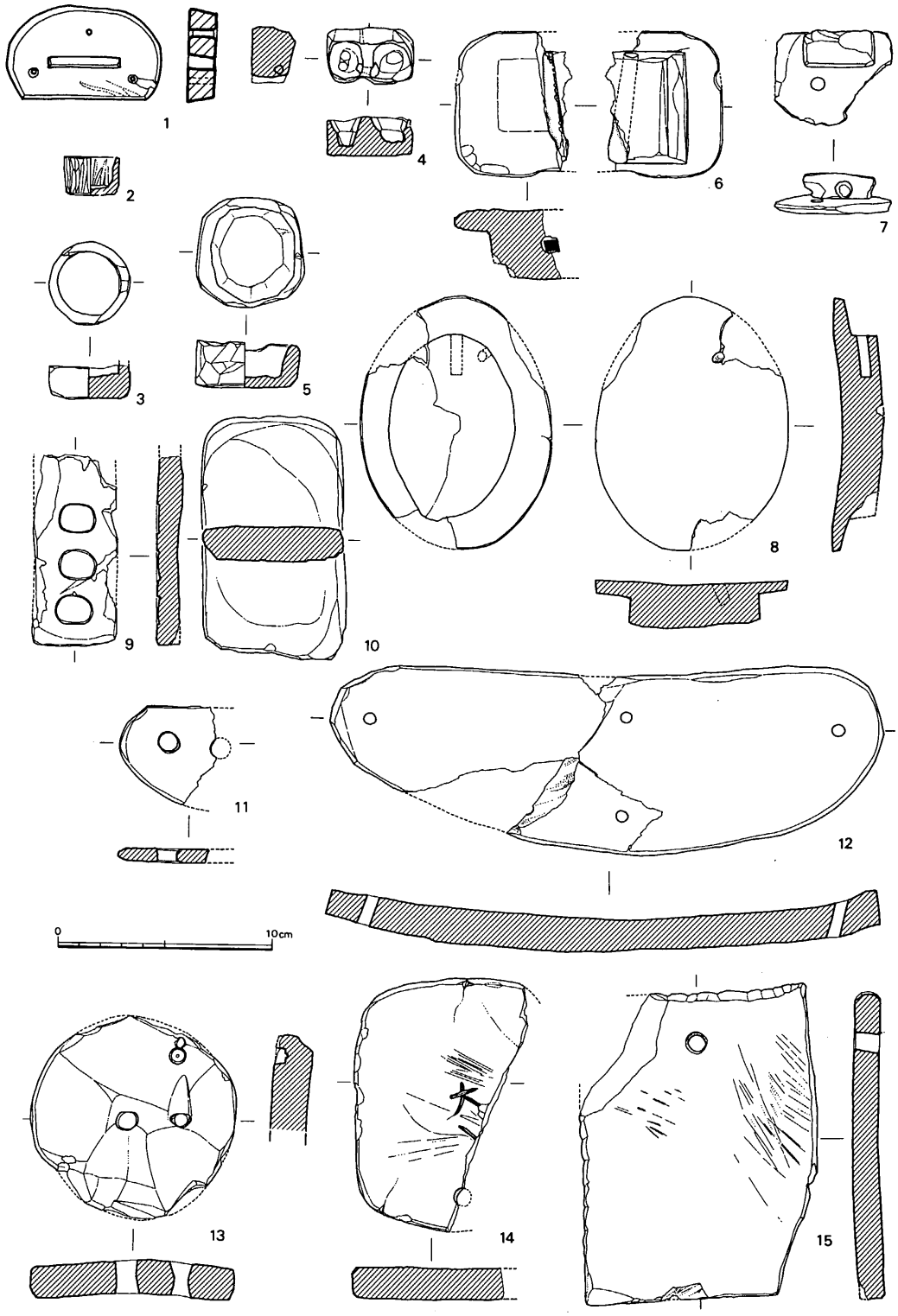
小型円板（７）　直径10.7cm，厚さ0.8cmの小型円板で，曲物容器の底板とも考えられるが，周側縁に木釘痕は認められない。片面の腐植が著しい。

方形板（８）　一辺が９cmほどの正方形をなし，やや厚い板の四隅を切り落した物である。一辺の側縁にそって２個の小さな穴を穿っている。ＳＤ1805出土。

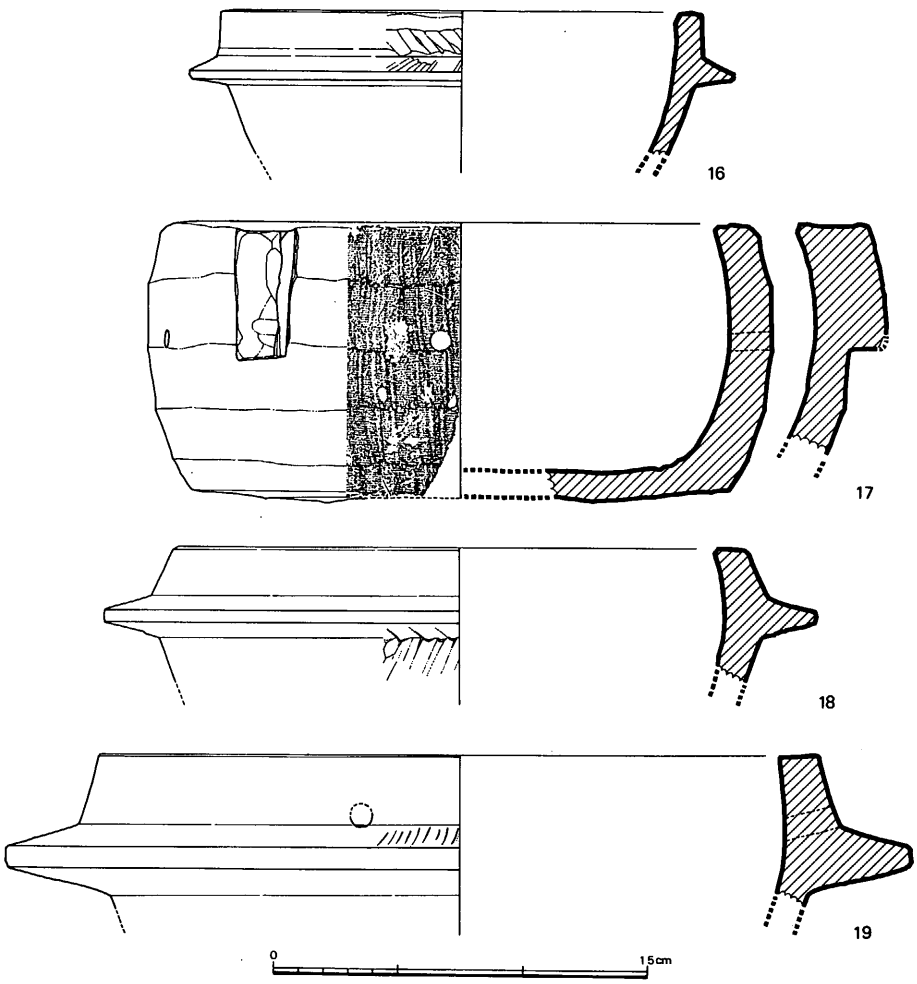
下駄（９）　台が小判形をなす差し歯の下駄で，腐植が著しく，歯は前・後とも欠失している。台上面には歯を固定するための痕跡が明瞭に残っている。前・後とも長さ1.7cm，幅0.3cmほどの対をなす板状の楔を左右対称に打ち込み，さらに前歯には３個所，後歯には２個所に円形の木釘を打ち込む。ＳＤ1805出土。

石製品（第42・43図，図版68）

１は蛇紋岩製の石帯で，丸鞆に相当する。中央部に1.7cm×0.2cmの長方形孔を有し，帯への装着のためのかがり穴を３ヵ所穿っている。縦幅2.2cm，横幅3.6cm，厚さ0.65cmである。黒色土層出土。２は口径2.6cm，高さ1.8cm，底径2.3cmを測る。杯形を呈する小さな滑石製品で，内・外面には丁寧に削り調整を行っている。黒色土層出土。３は円形状の浅い容器である。口縁部はほとんど欠損しているが，一部の残存から復原口径3.8cm，器高1.9cm，底径3.5cmを測る。４は茶灰色土下層から出土したもので，径約1.5cmの円形状を呈する穴を２連している。穴の深さは1.3cm，1.1cmである。５は器壁がやや厚い杯形を呈する容器である。口径約4.9cm，器高2.1cm，底径4.4cmを測る。６は凸型の滑石製品である。凸部は２段から成る方形のプランを呈し，現存辺5.2cmを測る。断面部に釘と思われる鉄製品を有し，径0.8cmの孔を穿っている。全体に丁寧な調整が施されている。７はスタンプ状を呈する滑石製品で，長方形の把手が付き，把手下端のほぼ中央に径0.5cmの穿孔が認められる。また台状部にも径0.6cmの孔を穿っており，丁寧に削り調整を行っている。ＳＥ1770出土。８は楕円形を呈する凸形の滑石製品で，長径11.8cm，短径8.9cmを測る。突出する高さは約1.2cmで，貫通していない孔が２ヵ所認められる。茶灰色土下層出土。９は厚さ約1.2cmで，長方形を呈する滑石板に楕円形をした穴が３ヵ所配されている。楕円形の穴は長径1.8cm，短径1.3cm，深さ0.1cmで，円形の中央部は若干高くなっており，丁寧に磨かれている。茶灰色土下層出土。10は砂岩質の砥石である。一面のみ研面が認められる。ＳＫ1706出土。11・12は石庖丁形を呈する滑石製品である。11は厚さ0.6cmで，周囲を摩って尖らせている。径0.9cmの孔が２ヵ所認められる。ＳＫ1772出土。12は中央部で長径25.7cm，短径8.2cmを測る。径0.5cm～0.6cmの孔が４ヵ所認められる。内面は丁寧に磨かれており，外面は削り調整を行っている。煤の付着が多い。黒色土層出土。13は径9.5cm，厚さ1.5cmを測る。正円に近い有孔円板で，孔は２ヵ所設けられている。また外周近くには径0.7cmの貫通しない孔が１ヵ所認められる。全体に灰白色を呈し，外部は削り調整を行っており，煤が付着している。ＳＫ1782出土。14は隅丸方形を呈する滑石製品で，外周から



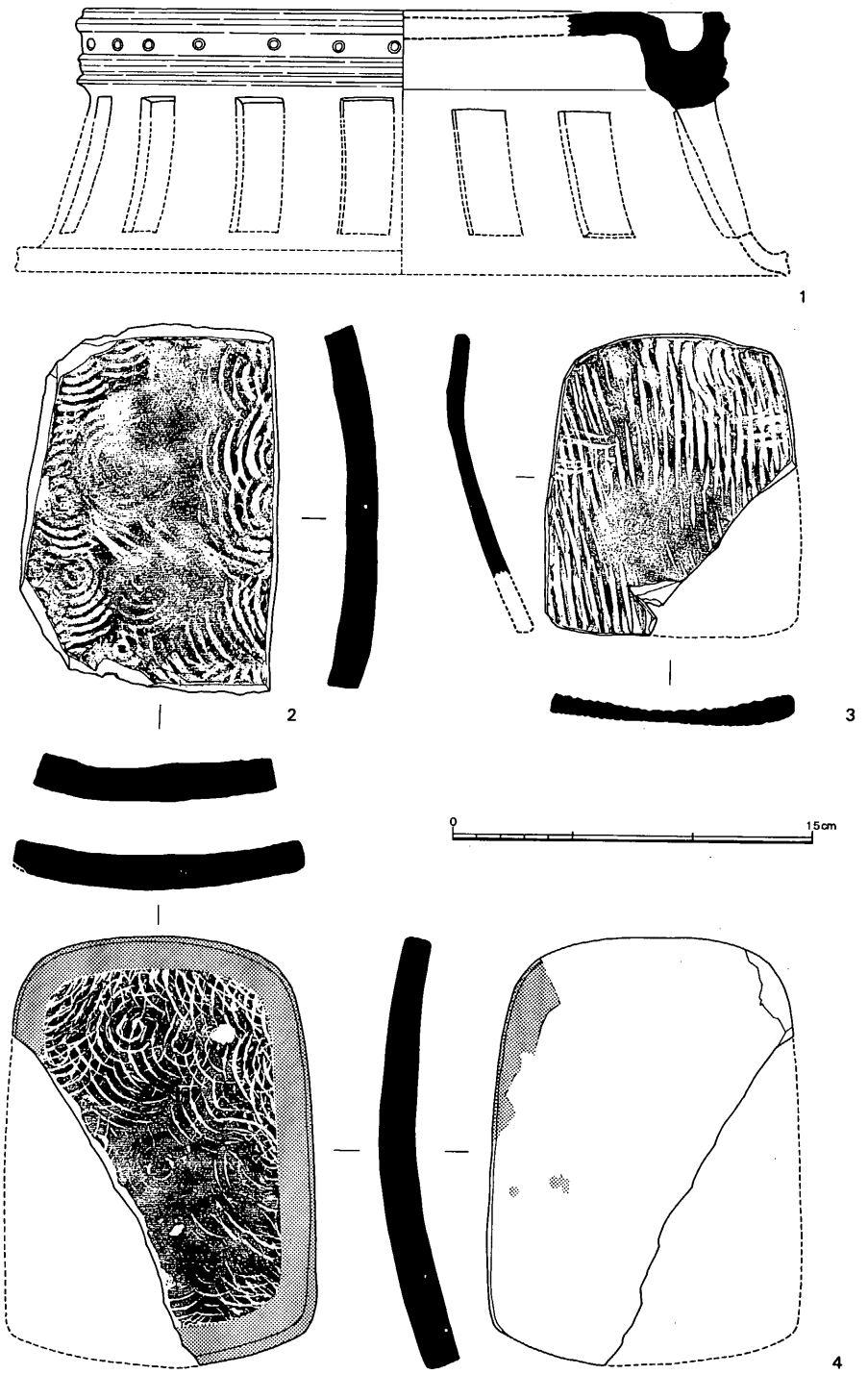
第42図　石製品実測図



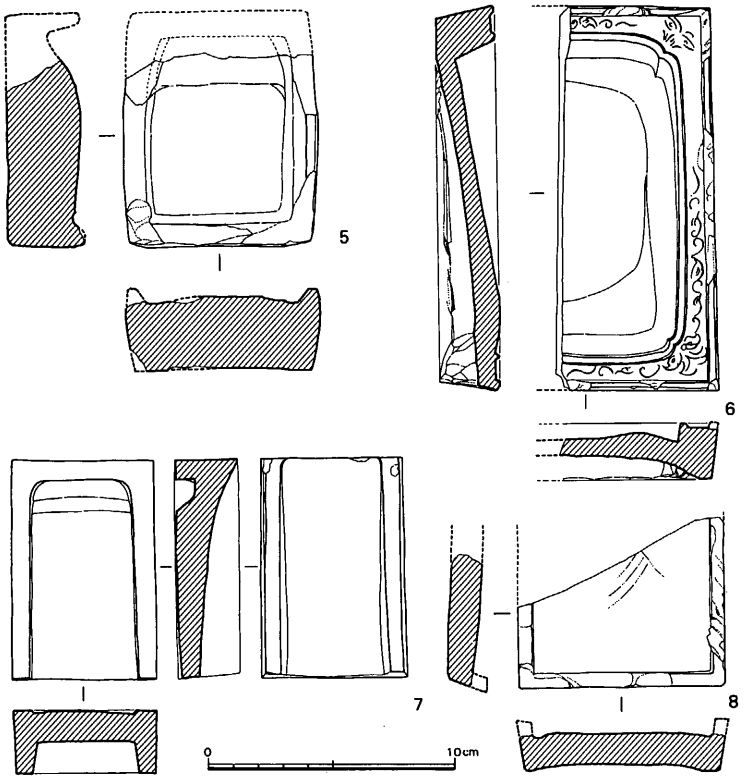
第43図　石鍋実測図

1.2cmのところに孔が1ヵ所認められる。中央部には「大□」のヘラ描きを有する。茶灰色土下層出土。15は長方形を呈する滑石製板で，四周の側面は弧状に抉り，削りによって調整されている。滑石板の右下端を削り取っている。上端中央部付近に穿孔が認められる。

石鍋（16～19）　全て滑石製である。16は復原口径19.4cmで，底部は欠失している。口縁部から約1.9cm下方に鍔を有する。削り調整が認められる。内面は磨滅が著しい。茶灰色土下層出土。17は約½の断片であるが，復原口径23.1cm，器高11.0cm，底径21.5cmである。体部から口縁部にかけてやや内弯し，若干の出入りはあるが，口縁部から長さ5.1cm，幅1.8cm，高さ1.5cmの取手を，4ヵ所復原できる。また体部中央ぐらいに径0.7cmの孔が2ヵ所認められる。内面は磨滅が著しく，底面に削り調整がみられる。外体部はノミ状のものによる縦方向の削りが



第44図　円面硯・猿面硯拓影・実測図



第45図　硯実測図

明瞭に認められる。茶灰色土下層出土。18は復原口径23.0cmで，口縁部から2cm下方に高さ1.9cmの鍔を有している。外体部は削り調整が認められる。茶灰色土下層出土。19は復原口径29.0cmで口縁部上面は平坦である。口縁部から2.8cm下方に厚さ2.8cm，高さ3.0cmの鍔を有し，丁寧な削り調整を行なっている。鍔の上部には直径0.9cmの孔が穿たれている。ＳＫ1782出土。

硯（第44・45図，図版69・70）

材質によって陶硯（1～4）・瓦硯（5）・石硯（6～8）に分けられる。1は須恵器の円面硯である。陸部と外堤，それに圏台の一部が残る。陸部と圏台はヨコナデにより1体につくられ，硯面は平坦で，深い海部をつくる。外堤はある程度成形された後貼付けられ，陸部と同じ高さとなっている。外堤の側面には2条の凸帯をつけ，その間に竹管を用いて円文が周囲にスタンプされる。圏台は裾広がりのものと推定され，幅約2cmのヘラによる透孔が約2.5cm間隔であけられている。濁茶色土層出土。2～4は須恵器の甕片を転用・成形した，通称猿面硯と呼ばれるものである。2は11cm×15cm，厚さ1.2cmの甕片の内側を硯面として使用している。側面は打ち欠いたままで成形されていない。内面は同心円文，外面には平行の叩きを持つ。3は器肉の薄い甕片を利用し，打ち欠いて大まかな形を作ったのち，側面はすって風字形に成形されている。大きさは縦12.5cm，横10.0cmで，厚さ0.7cm。内面には同心円文の叩き目，外面には平行の叩き目があり，硯面とした内面には墨痕がみられる。茶灰色土下層出土。4は丁寧な作りのもので，側面は円味をもっている。18.0cm×12.5cmで，厚さ1.5cmである。硯面とした内面の周囲には幅約1.0cmで漆を塗った跡が黒く残っているが，大部分が剝離している。側面

および裏面にも全面に漆を塗っており，側面については残存状態が良好であるが，裏面についてはわずかに残るのみである。内面には同心円文の叩き目があり，外面には正格子の叩き目がある。ＳＸ1829出土。５は瓦製で，方形を呈するものである。海部を欠いている。全体はナデにより成形されている。胎土には砂粒を多く含み，器面は黒色を呈する。床土下層出土。６は灰黒色を呈するやや軟質の石質の長方形硯である。長さ15.5cm。縁部の隅は桜花状に削り出し裏面は中央を削り取って，両側面を脚状にしている。幅1.5㎝の周縁には線刻の唐草文がある。ＳＫ1782出土。７は完形で，長さ8.6㎝，幅5.6㎝，高さ2.6㎝の長方形硯である。黒灰色を呈するやや軟質の石で，幅0.8㎝の縁部は陸部よりわずかに高いだけで，後方には設けられていない。裏面は６と同様に削り取って脚状にしている。茶灰色土層出土。８は黒灰色を呈する比較的硬質の石を使用している。長方形の硯であるが，残りが悪く，縁部は欠失している。裏面は削りとって凹面をなす。茶灰色土層出土。

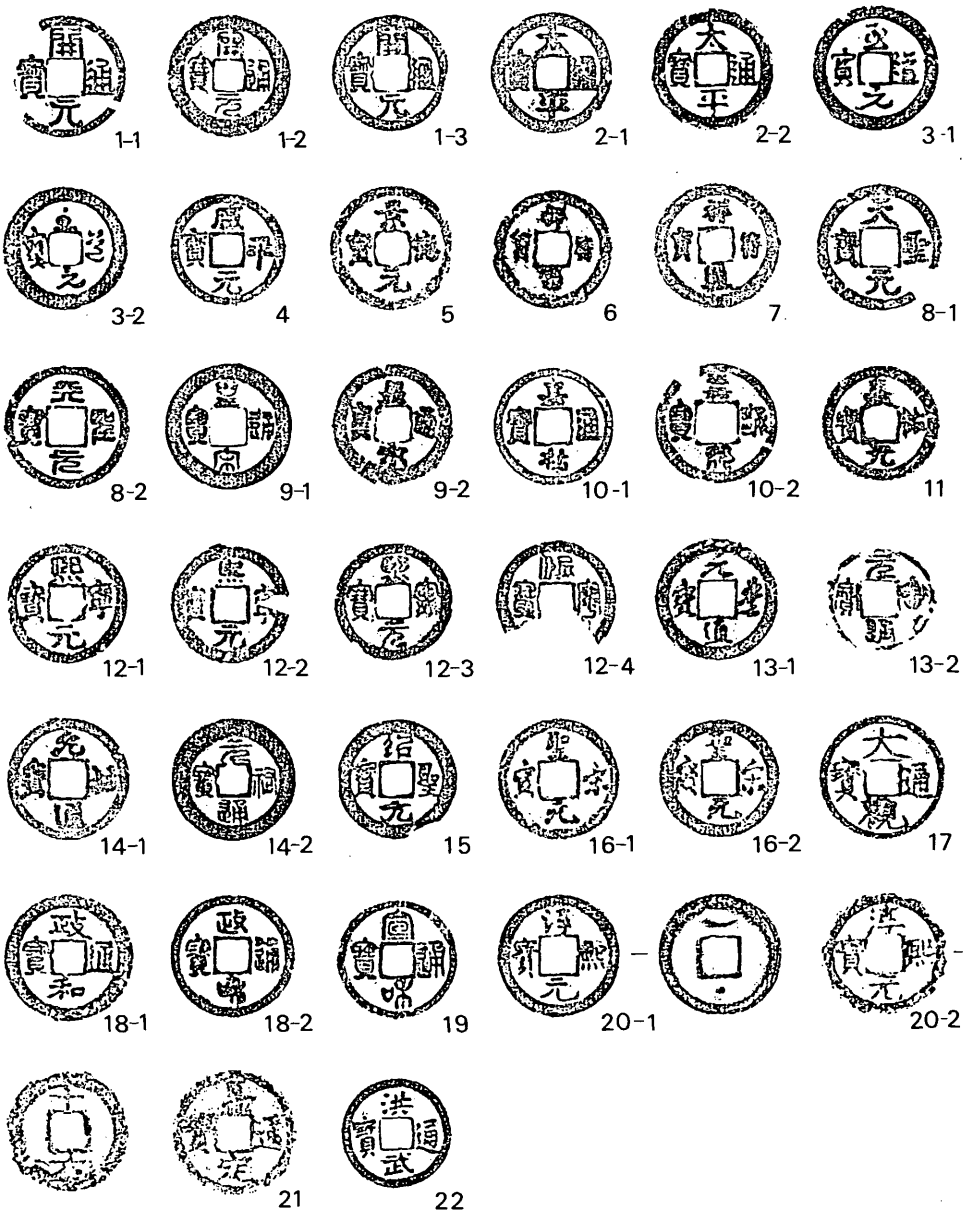
その他に石製と長方形硯（後方部の縁部を持たない）や滑石製の風字硯１点などがある。

銅銭（第46図）

銅銭は，開元通寶から洪武通寶までの22種，62点が出土し，このほかに破損などのために判別不能なものおよび断定できないものが８点と寛永通寶４点が出土した。

挿図番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22			
銭名 / 出土遺構・層位	開元通寶	太平通寶	至道元寶	咸平元寶	景徳元寶	祥符元寶	祥符通寶	天聖元寶	皇宋通寶	嘉祐通寶	嘉祐元寶	熙寧元寶	元豊通寶	元祐通寶	紹聖元寶	聖宋元寶	大観通寶	政和通寶	宣和通寶	淳熙元寶	嘉定通寶	洪武通寶	寛永通寶	不明	合計
ＳＤ1681														1											1
ＳＥ1770																							2		2
ＳＫ1704																			1						1
ＳＫ1714		1	1														1								3
ＳＫ1715		4																							4
ＳＫ1722				1											1			1							3
ＳＫ1723		1																							1
ＳＸ1686					1	1		1		1	1			2								4		2	13
攪乱土	1																								1
黒色粘土								1																1	2
茶色土	2							1	2			1	1	1		1				2				3	14
茶灰色土	1							1				2	1			2					1				8
暗灰砂			1	1																					2
茶灰色土下層		1						1				1						1							4
その他		1					1		1	2		1	2				1	1		1			2	2	15
計	4	8	2	2	1	1	1	5	3	3	1	5	4	4	1	3	2	3	1	3	1	4	4	8	74

それらの銭種，出土遺構・層位および各遺構・層位別の出土点数については表に示し，各銭種1点ずつの拓影を第46図にかかげた。表ではとくに区別しなかったが，拓影は同一銭種であっても銭名文字の異なるものおよび背面に文字・記号の見られるものについてもそれぞれをかかげた。排列は初鋳年代順であるが，寛永通寶は割愛した。

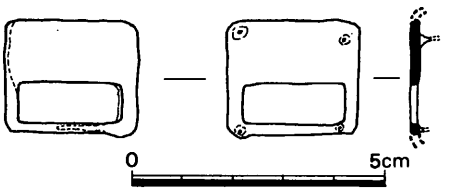


第46図　銅銭拓影

金銅製銙帯（第47図，図版71）

方形に近い横長の巡方の表金具である。裏面は腐蝕が進んで，すでに裏金具は残存せず，表・裏金具を留める鋲だけが四隅にわずかに残っているだけである。縦2.3cm，横2.6cm，厚さ約0.2cmを測る。長方形孔は縦0.8cm，横1.8cmである。表面は鍍金され，比較的残りは良い。

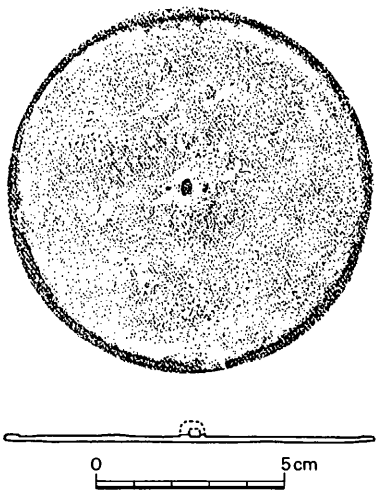
銅製銙帯の類例として，第65－２次調査から巡方１点，大宰府条坊遺跡の調査で鉈尾１点が出土している。これらは腐蝕が著しいため，鍍金されていたかどうかは不明である。



第47図　金銅製銙帯実測図

銅鏡（第48図，図版71）

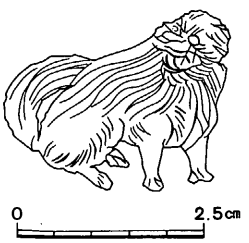
径9.74cm×9.91cm，外縁厚1.65cmである。鈕は頭部を欠き，基部で0.7cmを測る。表に直交ぎみの線刻がある。遺存状態は良好で表は今も光沢を放つ部分がある。ＳＥ1795出土。



第48図　ＳＥ1795出土銅鏡拓影・実測図

金製獣形裁文（第49図，図版71）

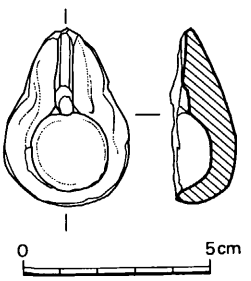
獅子を形どった裁文。極めて薄い金製板（厚さ0.25mm）に毛彫鏨で線刻しており，特に体部の関節間はやや太い線で表現し，全体を調和している。頭端の一部に欠損しているところがあり，何物かに連結していたものと思われる。前足から頭部までの高さ2.25cm，胸端部から尾端部まで2.8cmである。獅子は後座の姿勢で，前脚をやや外開きに踏ん張っている様は，いかにも獅子ならではの貫録といえよう。茶色土層から出土した。



第49図　金製獣形裁文実測図

土製品（第50図，図版71）

鋳型　完形に近い鋳型である。胎土には細砂粒を含むが，比較的精製されている。范型から推定される形態は，球形のものに棒状のものを取りつけた形である。ただし，棒状部分は湯口になるのかもしれない。球形の直径は2.0cm，棒部の径は約0.3cmを測る。范の器面および周辺部分は高熱のため灰白色ないし赤褐色を呈する。



第50図　鋳型実測図

仏頭　型造りされた仏頭。磨滅のため明瞭ではないが，鼻・口などを識別できる。

小　結

本次調査により検出した遺構は江戸時代終り頃か明治時代初頭の建物跡を始めとして，室町時代，鎌倉時代，平安時代末期，奈良・平安時代の各種遺構を検出したが，主目的とした小子房・客僧房の建物跡を直接示す痕跡は残存していなかった。しかし，奈良・平安時代（末期は除く）の遺構だけを拾うと，第51図のように僧房の建物を配するに十分な空間地域を得ることができる。この空間地域を南からA・B・C地区とする。A地区とB地区を画する遺構はSD1786である。この溝はN—1°30′—Eの方向を有し，講堂の方向と合致する。B地区とC地区との境にはSK1768・1769・1771・1772およびSD1814・1841がある。この土壙群は東西に連結するように掘削されている。これは南・北に建物など建造物があったため，これを避けるように掘られたためと考えられる。このような例は第77次調査検出遺構にもみられる。C地区の北端はSD1830やSX1831・1832・1833・1834・1835の北端が基準となる。

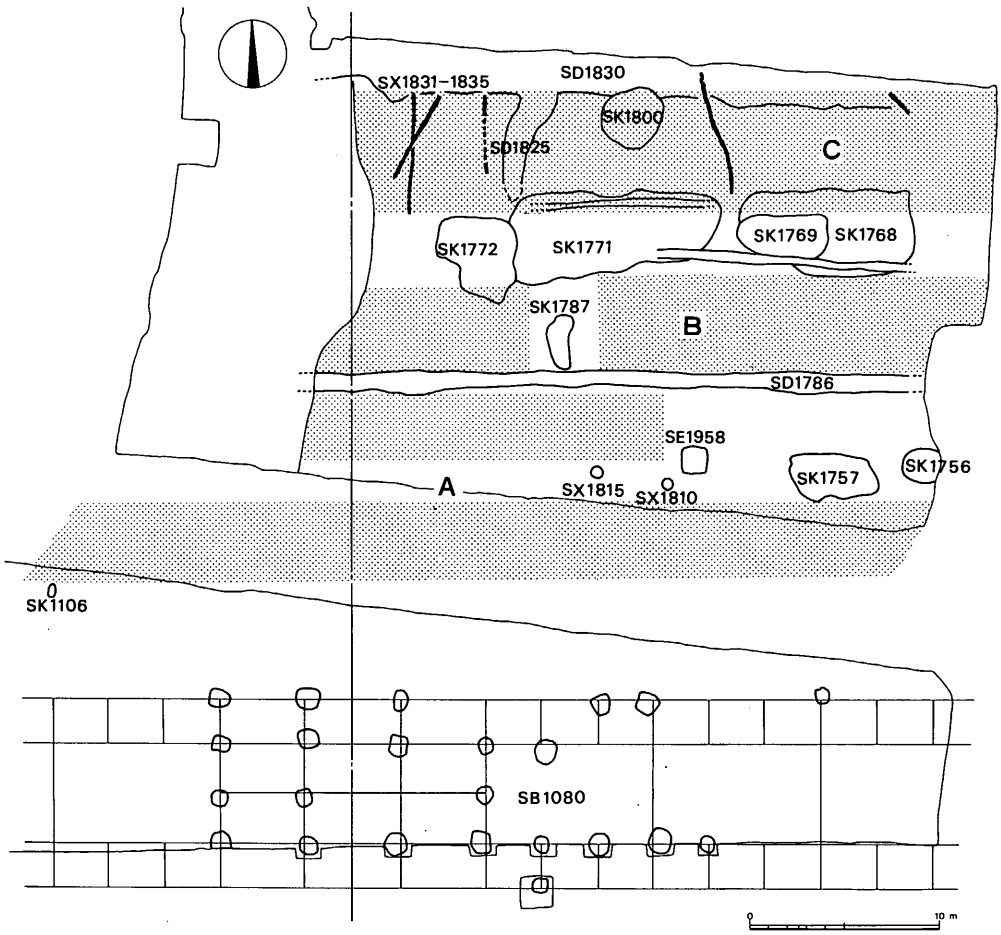
次に，地区毎に許容できる空間地を探ることにする。

A地区では，その南半部は現在の道路の下になるため明らかでないが，この道路下に奈良・平安時代の遺構はないものと仮定すると，A地区の南端は奈良時代の土器が一括して出土したSK1106のラインになる。このラインとSD1786との間は10m弱となる。またSK1106とSB1080との間には，根石掘り方の可能性があるSX1100の他に建物の跡はなかった。SX1100は2個の浅い穴しかなく，建物になるかどうか明らかでないため，ここでは一応除外して考える。A地区の中央部に地鎮と考えられるSX1810・1815，SE1758やSK1756・1757がある。これを避けて東西方向の空間地を求めると，南半部では幅4m強，北半部では幅3m弱の細長い空間地がとれる。

B地区では，SK1787があるため中央部分と東側部分とにわかれ，中央部分は幅約4.5m，東側部分は幅約5mを取ることが可能である。

C地区では，暗渠施設5本のうちSX1831が古いことから，これを重視して幅を求めると約6.5mとなる。この地区はSK1800や暗渠施設の他に濁茶色土層とした一種の整地層があり，種々の改変を受けた地域である。まず，暗渠施設を設けると同時に整地が行われる。次いで暗渠施設のうちSX1831が廃されて，SX1832が設けられる。この改修とどのような時期的な関係にあるかは明らかでないが，SD1825が開鑿され，これにSX1842が付加される。これらは8世紀代の地業と考えられるが，平安時代前期（9世紀中頃）にSK1800が掘られ，多量の土器が投棄される。

以上のように，この地区には暗渠施設が設けられると同時に，9世紀中頃までに幾度か改修が行われていることが知れる。一般に暗渠施設は回廊か築地に伴う例が多い。観世音寺の回廊は講堂に付くことが判明しているので，ここでは築地の可能性があり，延喜5年の「観世音寺



第51図　僧房地区奈良・平安時代（前・中期）遺構配置図

資財帳」によると，北面築地は長さ57丈（171m）であるが，仁和２年（886）には無と記している。とすると，ＳＫ1800はその出土土器から９世紀中頃と推定されることから，この記述とうまく符合する。このように築地を想定した場合，北門が配置されたであろう部分にＳＸ1831・1832・1833が存することになり，若干の問題が生じてくる。同時に東・西面築地の長さが65丈（195m）であることから，現在推定されている南大門の位置が約15m 程南へ移動することになる。また「資財帳」には記載がない西門・東門を加えると南大門は更に南になる。南大門の発掘調査がなされていない現在，早急な結論は避けるべきであり，一応Ｃ地区に築地を配することは，若干の問題点を含むにしても，可能であることを指摘するにとどめる。

最後に瓦のことについて若干ふれておこう。今次調査で出土した文字瓦の中で「観世音寺」銘の物が圧倒的に多量であったことはすでに述べたとおりである。この銘の文字瓦は調査区中央部の土壙群から検出したが，この中で比較的時期を限定できる物にＳＫ1772がある。この土

壙からは多量の土師器が出土したが，これらの土師器の特徴からこの土壙は11世紀の前後に比定されている。また昭和52年に行った東面築地跡の調査においても文字瓦の出土量はわずか49点であったが，そのうちの約60%をこの瓦が占めていた。このことは11世紀前半代にかなり多量に製造されたものと考えられる。瓦を多量に必要とすることについては大規模修理ないし新たな建造が考えられるが，11世紀代におけるこのような造作記事をひろってみると，長暦元年(1037) の史料に見える大僧房造作修理と康平７年（1064）の火災による焼失後の再建が考えられる。僧房の再建についての具体的年代は明らかにし得ないが，康和４年（1102）には僧房が大風により顛倒したことが見えており，この間に再建されたものと考えられる。この二つの僧房に関する造作を土師器の年代観と照し合せると，この瓦は若干のずれがあるが，前者の造作修理にともなって製造されたと考えることも可能である。もちろん土師器の編年観も確定的なものではなく，今後の資料の増加を俟ってさらに検証を行なっていく必要がある。

註

註１ 宮小路賀宏「太宰府周辺の経塚」「西日本文化」60　1970

註２ 奈良国立文化財研究所「川原寺発掘調査報告」1960.3
なお，この瓦の同定にあたっては奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部第三調査室の方々の協力を得た。

3　第74次調査

本次調査地域は，条坊復原案によると観世音寺との境界を含む学校院東辺部にあたり，昭和46年に調査を実施し，学校院関係の掘立柱建物1棟と古代・中世の井戸2基，古代末から中世にわたって埋没した溝5条を検出した第9次調査地域の南側部分にあたる。そこで，今回の調査では，学校院関係の建物の検出はもとより，第9次調査で検出した南北溝の追求を主たる目的とした。その結果，学校院関係の建物は検出されなかったが，目的の一つとした南北溝ＳＤ205・207・208・210・215のうち，ＳＤ208は調査区北端部で消え，ＳＤ215には新旧の流れがあることがわかり，ＳＤ215Ａ・Ｂとした。さらにＳＤ205はＳＤ210（今回の報告ではＳＤ205Ｄとする）を含んでしまい，かつ古代から幾度も流路を変えて中世に埋った溝であることが判明した。地番は筑紫郡太宰府町大字観世音寺学業204である。

調査は，昭和46年1月12日に開始し，同年3月19日終了した。調査面積は560㎡である。

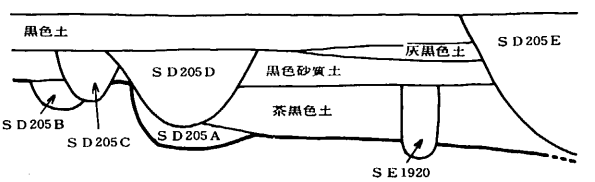
検出遺構

土層の関係

発掘西半部分は，床土の下の層である暗灰色土層を除去するとすぐに花崗岩バイラン土になり，それが遺構面となっていた。東半部は谷筋にあたるため，氾濫による流路の変更や錯綜した堆積土層が見られた。　図示した層位模式図は、これらの溝や堆積土層のなかでＳＤ205に関連するものを整理した。このなかのＳＤ205Ｅは検出溝のなかではもっとも新しく，また，学校院と観世音寺間を通す排水路としての役割りを終えた後に，自然流路として形成されたものと考えられる。　ＳＤ205として良いのかどうか躊躇するが，一応ＳＤ205の末期の流れとして判断した。黒色土層はＳＤ205Ｅ以外のほとんど全ての溝を覆う。灰黒色土層は発掘区南側部分に堆積している層で，北側部分にはない。茶黒色土層は平安時代後期に堆積した層であるため，これに切り込む遺構はそれ以降となる。ＳＤ205ＡはＳＤ205が古くから流れていたことを示す溝で，幾度かの流れの変更のなかにあっても，完全に削除されることなく，部分的ではあるが，溝堆積土を残していた。

掘立柱建物

ＳＢ1970　発掘区西南部にＳＢ1975と重複して検出した掘立柱建物で，南北2間(3.55ｍ)×東西5間(9.10ｍ）の東西棟である。梁行の柱間寸法は1.78ｍの等間であるが，桁行は東西距離9.1ｍを5間の柱間で割っ



第52図　層位模式図

た数値（1間が1.82mとなる）と実際の柱穴間の距離に若干の出入りが認められる。柱の掘り方は径30cm～40cmである。

ＳＢ1975　ＳＢ1970から東北方に約0.6mずれて検出した掘立柱建物である。建物は南北2間（3.7m）×東西4間（7.4m）である。柱間寸法は梁・桁行共に1.85m等間で，柱の掘り方は径30～40cmである。

柵

ＳＡ1960　発掘区の西端部で検出した南北方向の柱穴列である。柱間寸法に多少の出入りはあるが，0.82m等間で，南北方向に9間分を検出した。柱の掘り方はほぼ円形状を呈し、径30cm～40cmである。この柱列はさらに南北方向へ延びる可能性がある。

ＳＡ1965　ＳＢ1970・1975の西側で5間分を検出した南北柱穴列である。北側から3個の柱穴には柱根が残っており，その柱間寸法は柱の心々距離で1.9mを測る。柱の太さは径15cm前後である。掘り方は円形状のプランを呈し，径30cm～50cmである。この柵列はＳＢ1970方向にほぼ一致することから，この建物に付属する目隠塀と考えられる。

ＳＡ1987　ＳＡ1965の東側で4間分を検出した南北柱穴列である。柱間寸法は1.6m～1.8mで等間ではない。掘り方は径30cm～40cmである。ＳＢ1975に伴うと考えられる。

溝

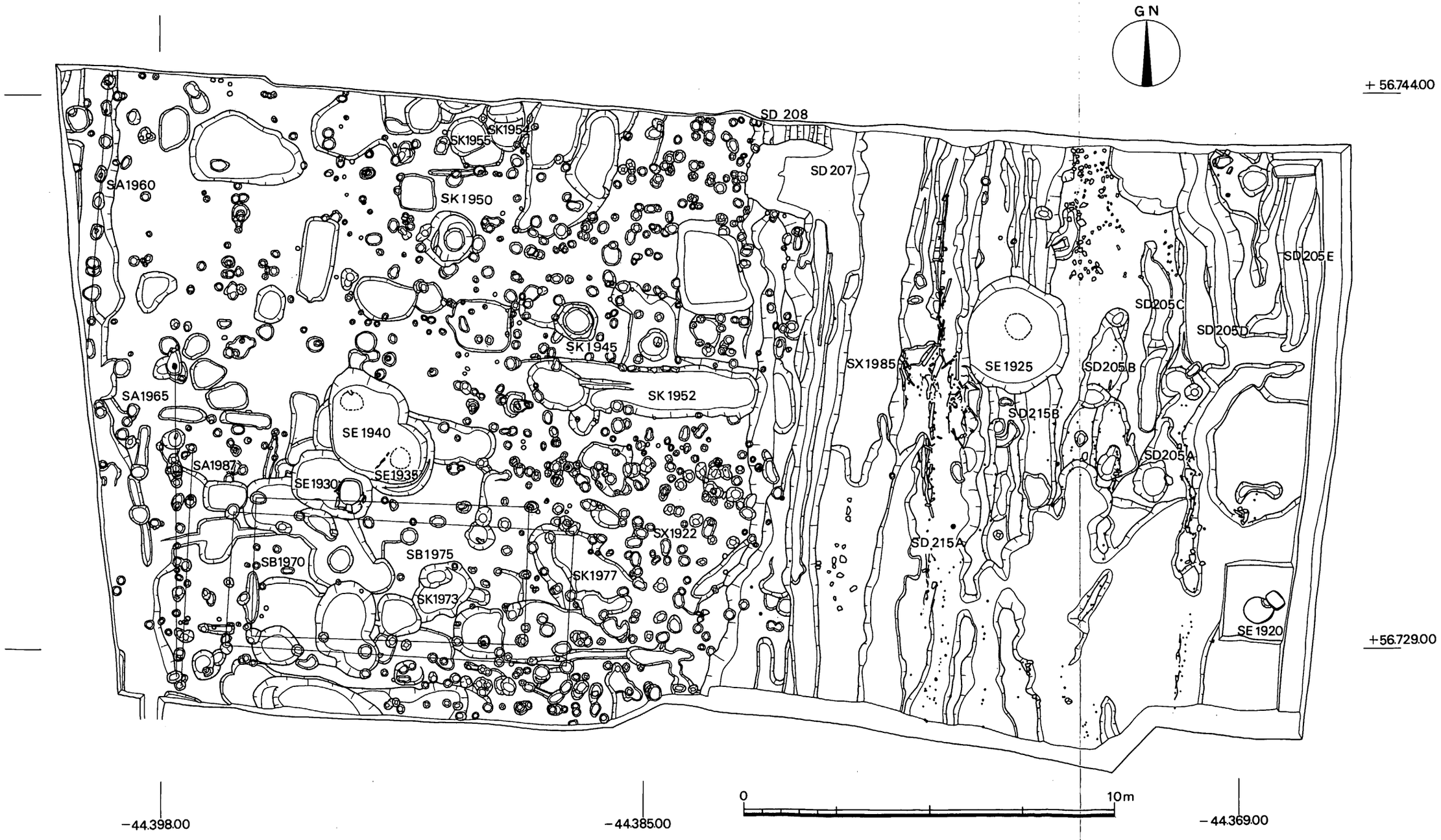
ＳＤ205　ＳＤ205はＡ～Ｅまで5本の溝を確実に把握できた。これらの溝の埋没時期は平安時代から室町時代まで長期にわたっている。この溝の埋土と考えられる茶黒色土層・黒灰色砂質土層・灰黒色土層については，それらに伴う溝の肩は検出できなかった。

ＳＤ205Ａは，ＳＤ205開鑿当初に流れていた溝の東岸部分が抉られてできたものと考えられる。この抉られた部分に堆積した腐植土層を今回検出したと考えられる。錯綜した層がこのＳＤ205Ａを覆うため，出土遺物のなかには若干の混入が認められる。しかし，出土した遺物のほとんどは10世紀代に属するものであり，しかも「延長五年」銘の木簡も出土した。この溝は部分的にしか遺存していなかったが，ＳＤ205開鑿時を知る手掛りとなるとともに土器編年上重要な資料を得たことになる。

ＳＤ205Ｂは，ＳＤ205とした部分の最も東に流れる溝である。ＳＤ215Ｂ・ＳＤ205Ｃとともに南半部は錯綜した堆積土層のために明確にしえなかった。出土した遺物から鎌倉時代に埋没したと考えられる。

ＳＤ205Ｃは，ＳＤ205Ｂの西側を流れ，鎌倉時代末から室町時代初めの頃の遺物を出土した。

ＳＤ205Ｄは，第9次調査報告ではＳＤ210とした溝である。第9次調査検出部分では南北に流れていたが，本次調査では流れを東に向け，発掘区西端中央部分で東へ抜けていったと考えられる。SD205Cおよび黒灰色砂質土層を切っていることから，室町時代に流れていたと推察できる。



第53図　第74次発掘調査遺構配置図

ＳＤ205Ｅは，黒色土層を切って流れる。僅かに発掘区東西隅をかすめる程度である。

ＳＤ207　大略南北に流れるが，その方向は真南北ではなく，西南に傾く。埋土は腐植土が大部分であった。幅0.8m～1.4m。

ＳＤ208　最近の撹乱により南端は知りえないが，発掘区北端付近で消え，南へは延びていない。

ＳＤ215　ＳＤ215ＡとＳＤ215Ｂとにわかれ，この岐点は第９次調査地域南端部付近である。

ＳＤ215Ａは，ＳＤ207と同様に若干西南に流れる。流れにより西肩部が崩壊したためか，流れの中央部分に簀が組まれ，溝が西に偏するのを防いでいる。簀が組まれた後まもなく埋没したと考えられ，簀の西側埋土出土の土器と東側埋土出土の土器とが接合する場合もある。双方の埋土は腐植土層が大部分である。簀を組む以前の幅は1.8m～2.5m、簀を組んで以後の東側溝幅は1.0～1.5mである。出土遺物はＳＤ207と同一時期で，極めて多量に出土した。完形品が多いことから一括して投棄された土器を多く含むものと考えられる。

ＳＤ215Ｂは，南北に流れる溝であるが，南半部は明確にできなかった。ＳＥ1925によって切られることおよび出土遺物から鎌倉時代に埋没したと考えられる。幅1.3m～1.8m。

井戸

ＳＥ1920　ＳＤ205の埋土と考えられる茶黒色土層に切り込んでつくられた井戸である。掘り方は円形を呈する。上面は径約0.72mであるが、下方になるにつれ幅広くなり、下端は径0.82mを測る。深さ1.9m。上面から深さ約1.58mのところで東肩寄りに径約32cm、深さ32cmの穴が掘られている。井戸枠は検出されず，素掘りの井戸とも思われるが，この掘り方から推定すると，曲物を使用した井戸とも考えられる。また掘り方の上端東肩で曲物が検出されたが，ＳＥ1920に属するものではない。

ＳＥ1925　ＳＤ215Ａ・Ｂを切込んでつくられた井戸である。掘り方に若干の出入りはあるが，ほぼ円形に近いプランを呈し，上端径2.8m、深さ3.38mである。井戸枠は掘り方のほぼ中央に据えられており，桶側構造のものを９段検出した。上端幅74cm，下端80cmで，１段から８段までの深さ3.14mである。最上段の桶板は５枚のみ残存していた。板材は幅６cm～８cm，長さ54cm，厚さ２cm前後のもので，これまで検出されている桶側構造の板材に比較すると，最も短い短冊形をしている。大宰府検出井戸のⅣ－Ａ類に属する。

ＳＥ1930　この掘り方はＳＥ1935．1940に切られており，長円形状（東西に長く，径約2.32m）を呈している。掘り方底面までの深さ約1.4mである。井戸枠は掘り方の東隅寄りに据えられており，一木を刳り貫いた枠と板材を組み合せた構造である。井戸枠は南側約$\frac{1}{3}$ぐらいのところで割截されており，南側の枠は南方向へ若干傾いている。北側枠と南側枠の西南隅部は幅約20cmの板材で方形状に井戸枠をつくっている。また東南隅部の継ぎ目の部分には平瓦を当てて補強している。井戸枠は丁寧に削り調整が行われており，西側壁の中央部に一辺約10cmの方形を呈する

孔が穿たれている。刳り貫き井戸枠は東西径62cmで，南北径80cm，深さ約104cmである。大宰府付近で，刳り貫きの井戸構造を検出した例には市の上遺跡，大宰府条坊の七条七坊推定地（太宰府町通古賀字半田）などがある。

ＳＥ1935　ＳＥ1930・1940と切合い関係をもって検出した井戸で，三基のなかでは最も新しい。掘り方はほぼ円形に近く，上端径約2.1mで，深さ4.26m である。井戸枠は掘り方のほぼ中央に据えられ，桶側構造のものを４段検出した。上端径64cm，深さ292cmを測る。最上段の桶枠板は腐植が著しい。桶側は裾開きするものであるが，最下段の桶枠は上端部が開き，下端部はやや狭くなっている。また最下段の桶枠板と湧水面の間に平瓦が詰められていた。また最上段桶枠の北側から南西方に板材が配されていた。これは何の目的で並べられたものなのか明らかでないが，ＳＥ1940の掘り方埋土の土圧を防ぐための施設とも解される。大宰府検出の井戸のⅣ－Ａ類に属する。

ＳＥ1940　ＳＥ1935に切られているため，東南隅部の掘り方については明らかでない。掘り方は南北方向に長く掘られ，上端で南北長2.86m，東西2.14m，深さ2.36m である。井戸枠は掘り方の北側寄りに据えられていた。円形の桶側構造のものを２段検出した。上段のものは腐蝕が著しく，板材数枚を残すのみである。下段は比較的よく残存しており，上端径62cm，下端70cm，高さ112cmである。板材は幅8cm～9cmのものが多く，下端近くに４cm×６cmの方形の孔が２ヶ所穿たれている。大宰府検出の井戸のⅣ－Ａ類にあたる。

土壙

ＳＫ1945　発掘区中央部の北半部で検出した不整円形の土壙（径1.25m ×1.05m，深さ1.0m）である。掘り方は２段掘りで，底面は砂層で，円形状のプラシを呈する。検出時には多くの湧水があった。このことから井戸の可能性が強い。

ＳＫ1950　ＳＫ1945の北西側で検出した不整円形の土壙（径1.4m ×1.5m，深さ1.5m）である。ＳＫ1945と同様な土壙であり，これも井戸の可能性が強い。

出土遺物

ＳＤ205出土土器・陶磁器（第55図，別表，図版72）

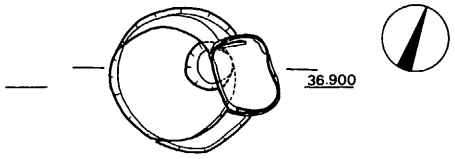
前述したようにＳＤ205は長期にわたって流れ，また流路を変えているため埋土に時期差が認められる。そこでまとまった土器群と重要と思われる資料を報告する。

土師器

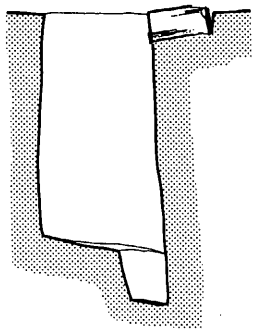
皿ａ（１～６）　口径8.8cm～9.2cm，器高1.2cm～1.6cmである。６は灯火器として使用。

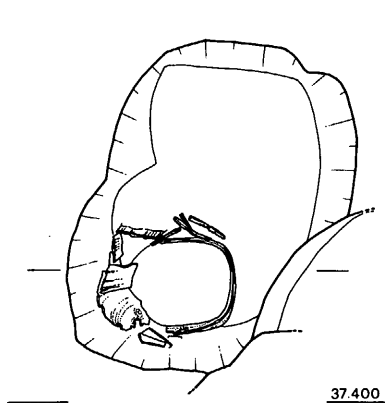
杯ａ（７～13）　法量により７～12と13に分かれる。７～12は口径10.6cm～11.5cm，器高2.0cm～2.3cmである。13は口径10.9cm，器高3.4cmである。茶黒色土層出土。

椀（15）　口径15.0cm，器高6.3cmである。体部内面中位以下をヘラミガキするタイプである。

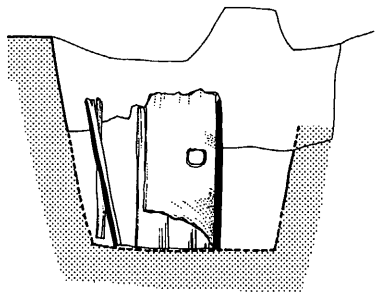


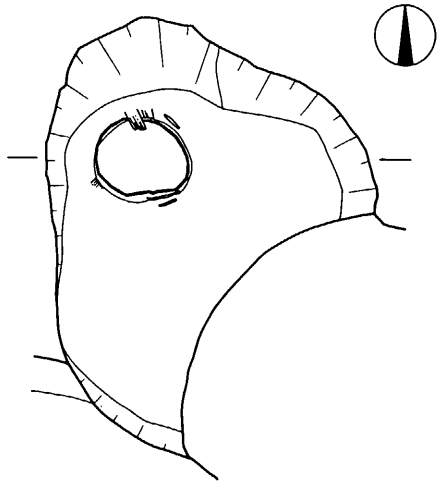
SE1920



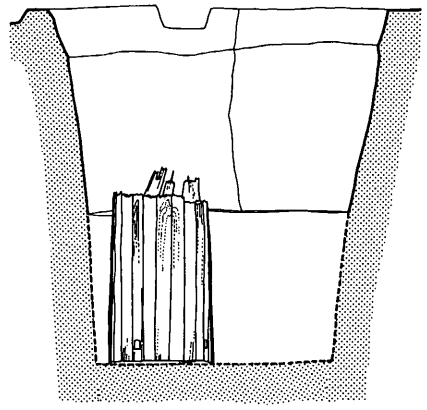


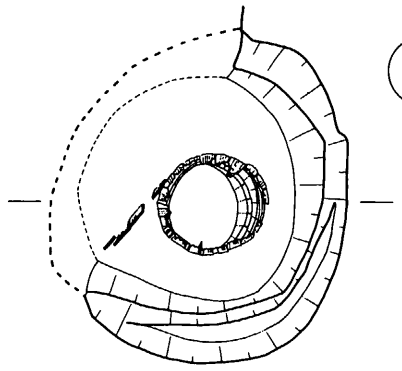
SE1930



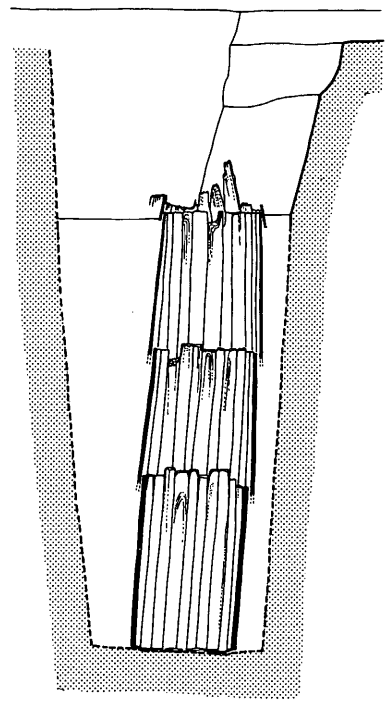


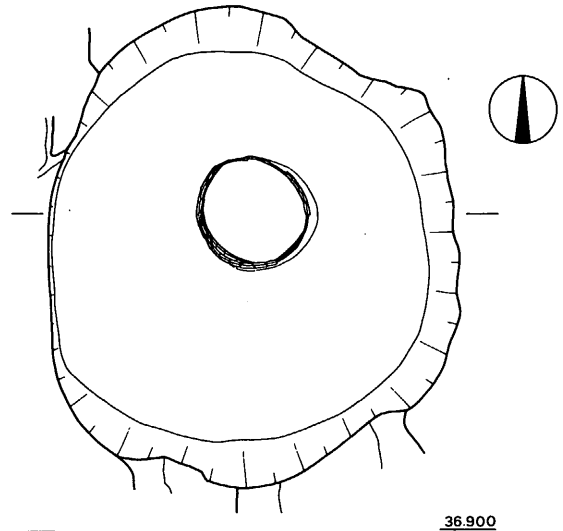
SE1940



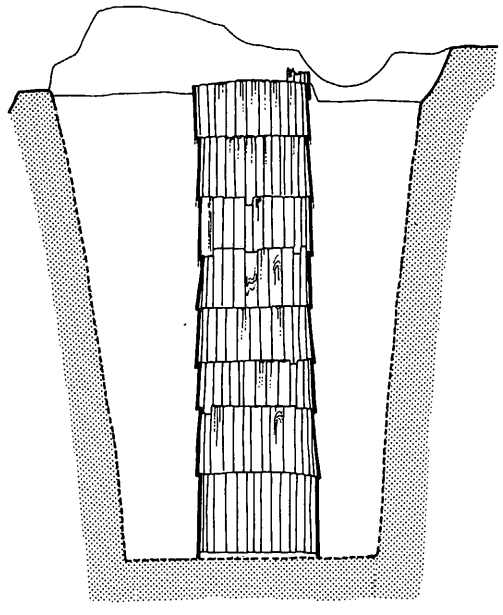


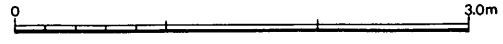
SE1935





SE1925





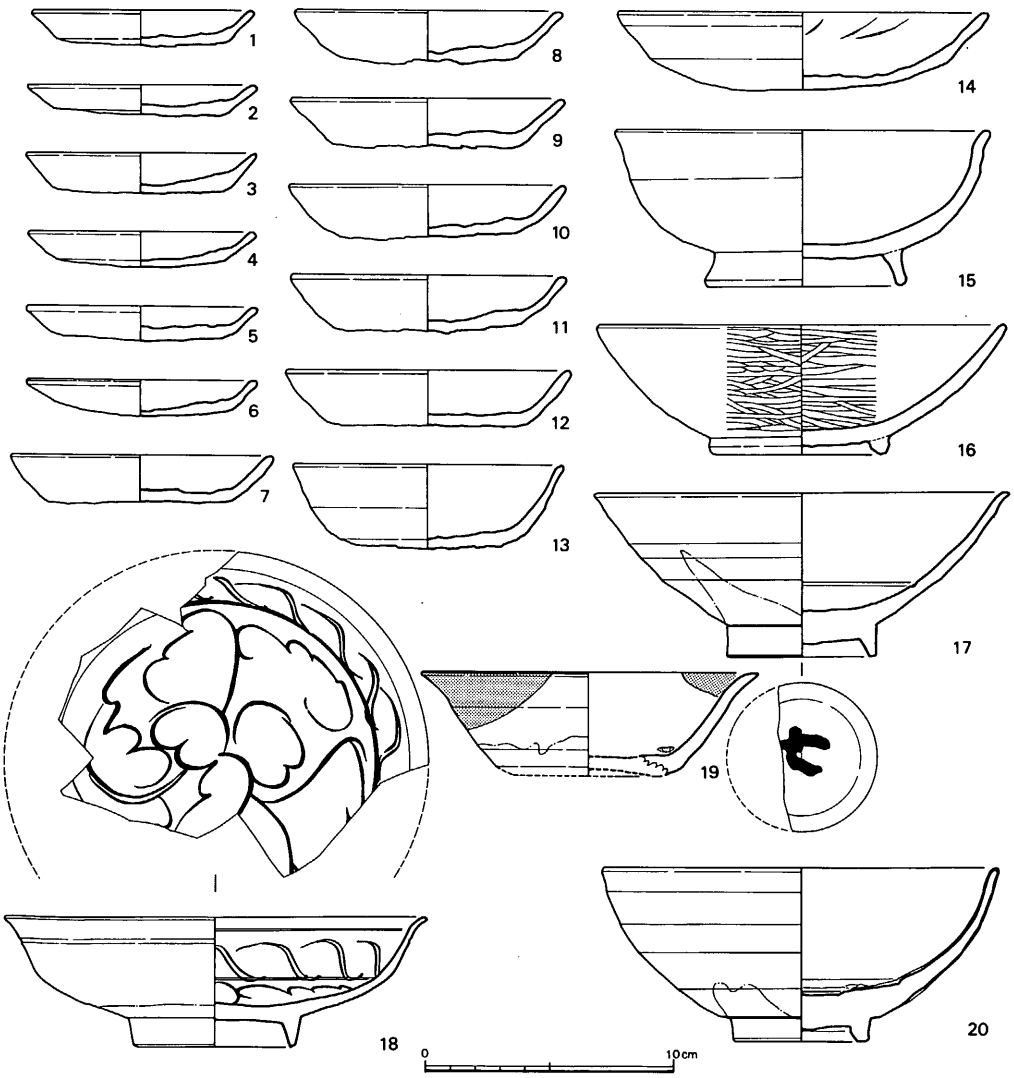
第54図　井戸実測図

茶黒色土層出土。

丸底の杯（14）　口径14.7cm，器高3.2cmである。内面をヘラミガキし，器面を平滑にしている。内面にコテアテ痕がある。茶黒色土層出土

黒色土器

椀（16）　内外面を丁寧にヘラミガキし，真黒色に燻している。丸底の杯と同一の成形技法である。瓦器椀と区別しがたく，あるいは瓦器とすべきかも知れない。茶黒色土層出土。



第55図　ＳＤ205出土土器・陶磁器実測図

白磁

椀（17）　口径16.5cm，器高6.6cmである。V－3・c類。外底見込み部分に「七」銘の墨書がある。灰黒色土層出土。

皿（18）　口径17.2cm，器高5.2cmを測り，体部内面にヘラ描き文様を伴う。胎土は若干黄色味をおびた淡灰色を呈し，釉は黄色をおびる。内外とも小さな貫入を伴う。白化粧土をかけている。体部外面は回転ヘラ削り調整を行う。底部と体部との境に段を有し，それを境として文様が異なる。黒灰砂質土層出土。

青磁

杯（19）　口径13.4cm，器高4.2cmに復原できる。釉は薄く，白味をおびた黄色，胎土は淡灰色を呈する。口縁部から体部中位にかけて褐彩がある。内底に重ね焼きの目跡がある。化粧土を有する。長沙窯系の可能性がある。出土層・地点からＳＤ205Ａに伴う可能性が大きい。

椀（20）　口径15.8cm，器高7.0cmである。胎土は暗灰色を呈し，淡黄緑色の厚い釉がかかる。また，釉は貫入を伴い，黄色の禾目を伴う。体部外面は回転ヘラ削り調整である。釉を取ることなく重ね焼きにしたために，内底見込み部の釉が環状に剝離している。胎・釉ともに稀有な例である。灰黒色土層出土。

ＳＤ205Ａ出土土器・陶磁器（第56～60図，別表，図版72，73）

この溝から「延長五年（927）」銘を有する木簡が出土した。そこで，多量に出土した土師器を器形・手法により分類して報告する。

須恵器

甕　二重口縁を有するもので，頸部は完存に近いが，口縁部の大部分および胴部の⅔程を欠失する。復原すると口径34.2cm，器高67.5cm，胴部最大径65.5cmになる。粘土帯を積み上げ，叩き締めて成形している。体部における粘土帯の単位は，底部からそれぞれ約16cm・11cm・20cm・14cmの高さに分かれる。しかし外面の叩き目と内面の当て具を重視すると胴部中位11cm・20cmの単位は１つとなる。胴部上位の当て具は２種ある。まず始めに径約６cmの中に14本の放射線状文を入れたものを使用し，次に平行線条文を使用している。口頸部は体部端上に粘土帯を載せ，叩き締めた後口縁部を成形し，頸部上位の叩き目は残るが，他の部分はヨコナデ仕上げをしている。体部の胎土は精良で，ほとんど砂粒を含まないが，口頸部は若干砂礫を含む。

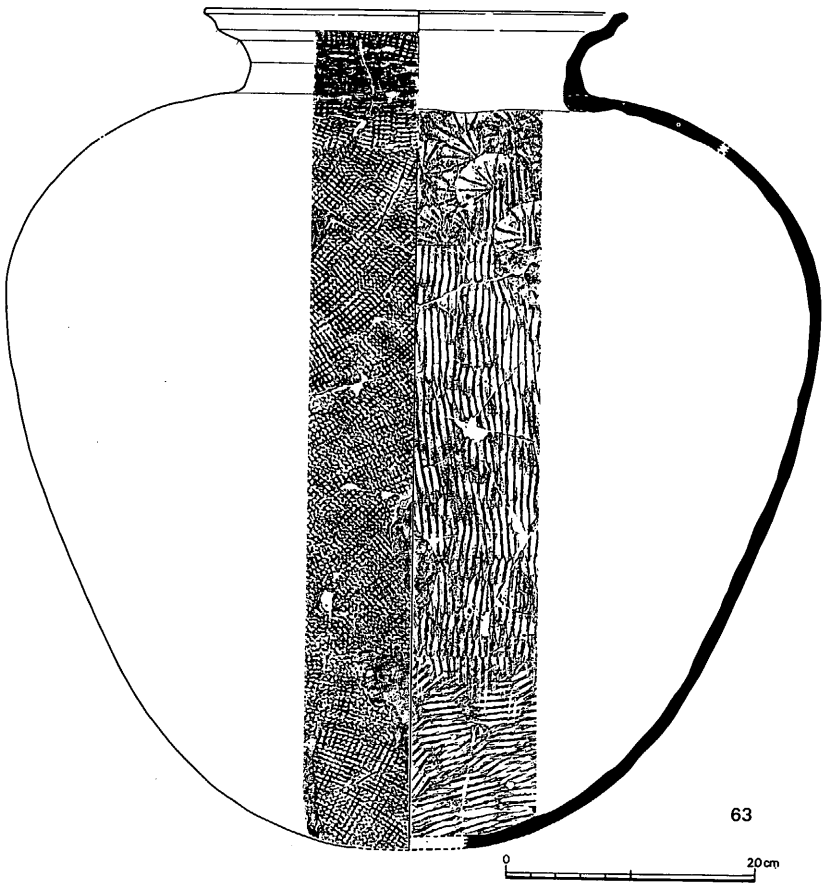
土師器

小型品は全てヘラ切りである。

杯（１～15）　法量により１～６（Ⅰ）と７～13（Ⅱ）に分かれる。Ⅰは口径11.2cm～12.4cm，器高2.0cm～2.4cm。Ⅱは口径10.7cm～12.3cm，器高2.8cm～3.1cmである。Ⅰは10世紀中頃のＳＫ674段階に近い数値，Ⅱは10世紀前後のＳＫ678段階にあたる。

椀（14～25・27～32）　体部が弯曲する14～25（Ⅰ）と，直線的に立ち上がる27～30（Ⅱ），

それに体部内面中位以下をヘラミガキする31・32・37（Ⅲ）に分かれる。37は体部下位を回転ヘラ削りしている。ⅢはⅠに共通する器形であるが，内面の器面調整に独特な特徴があり，またこのような調整法を有する例はこの期から出現するようである。さらに土師質緑釉陶器の器形と手法に相似する。Ⅱは観世音寺小子房検出のＳＫ1800出土の土器群よりも器高を減じたもので，皿Ⅱに対応する。Ⅰは体部に丸味を有するが，未だ口縁部が外反しない。しかし，18のように若干その兆しがみられる例も含む。この18が皿ａの１と組み合い，ＳＫ674段階に属すると思われる。



第56図　ＳＤ205Ａ出土土器実測図（１）

無高台椀（26）　口径15.2cm，器高5.2cmである。丸味を持つ底部に板状圧痕がある。

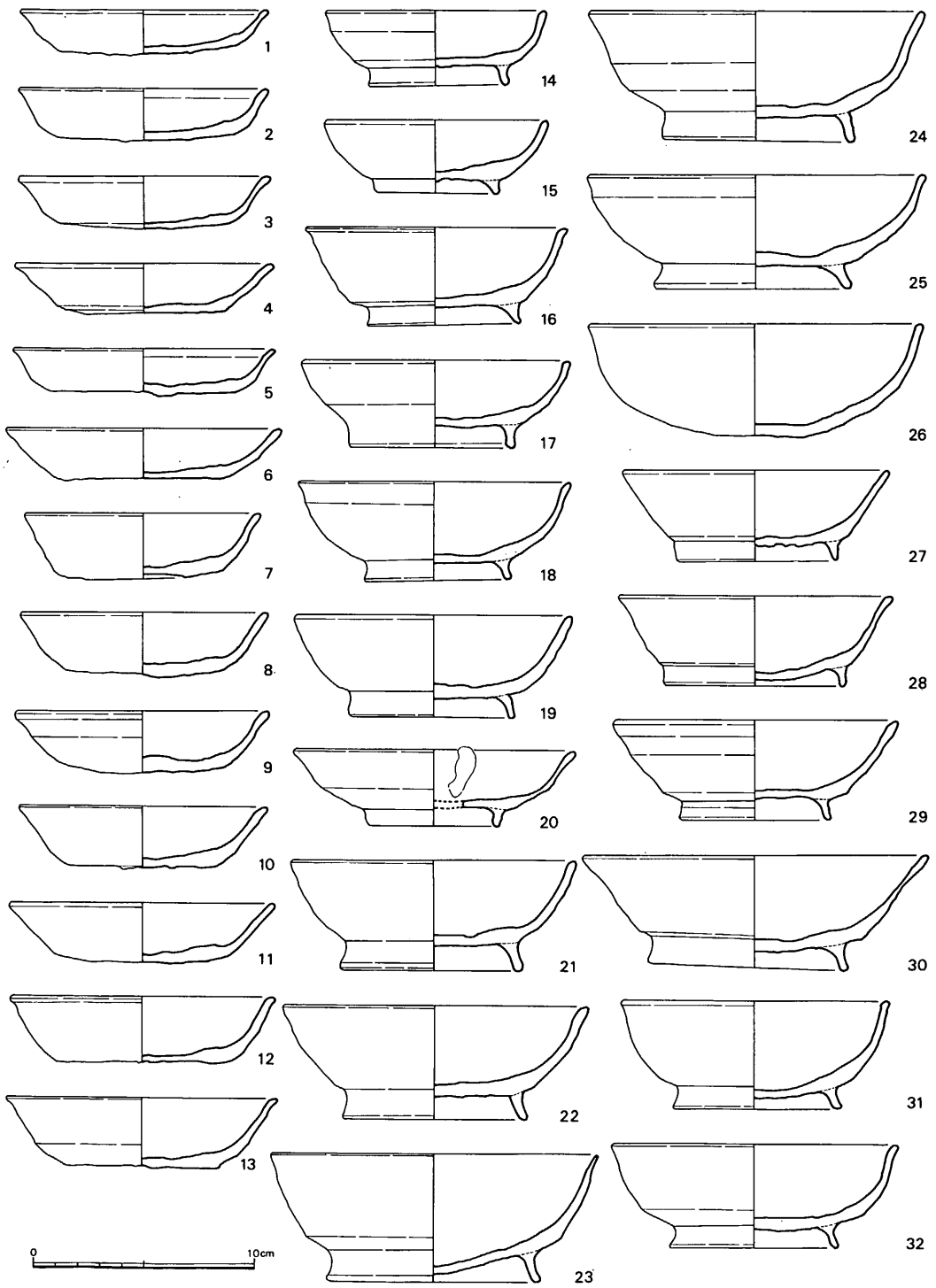
皿ａ（33）　口径12.4cm，器高1.4cmである。

皿ｃ（34・35）　口径14.6・16.2cm，器高2.7・3.1cmである。

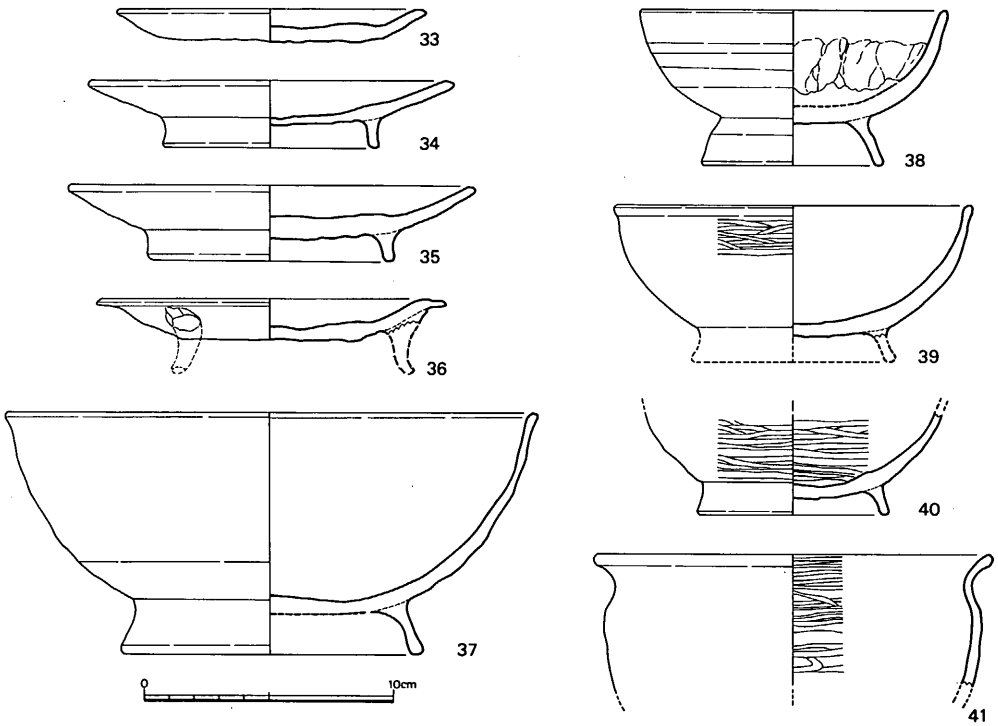
脚付皿（36）　３脚付の皿で，口径14.0cmを測る。

鉢（42）　口径23.7cmを測る。内外面ともに器面が剝離・風化しているため調整法は明らかでない。外面には煤が濃密に付着し，内面には焦げ付きがある。鍋として使用。

甕（43～47）　内面の調整は，44・45・47はヘラ削り，43・46はヨコナデ・ナデである。45・46の外面中位以下には叩き目がある。いずれも煮沸具として使用。



第57図　ＳＤ205Ａ出土土器実測図（2）



第58図　ＳＤ205Ａ出土土器実測図（３）

黒色土器

椀（38～40）　内面だけを燻した38・39と内外面を燻した40とがある。39は体部外面上位にもヘラミガキしている。漆容器として使用したためか，38の内面には漆が厚く付着している。

甕（41）　口径15.9cmに復原できる小形の甕で，内面をヘラミガキし，黒色に燻している。

緑釉陶器

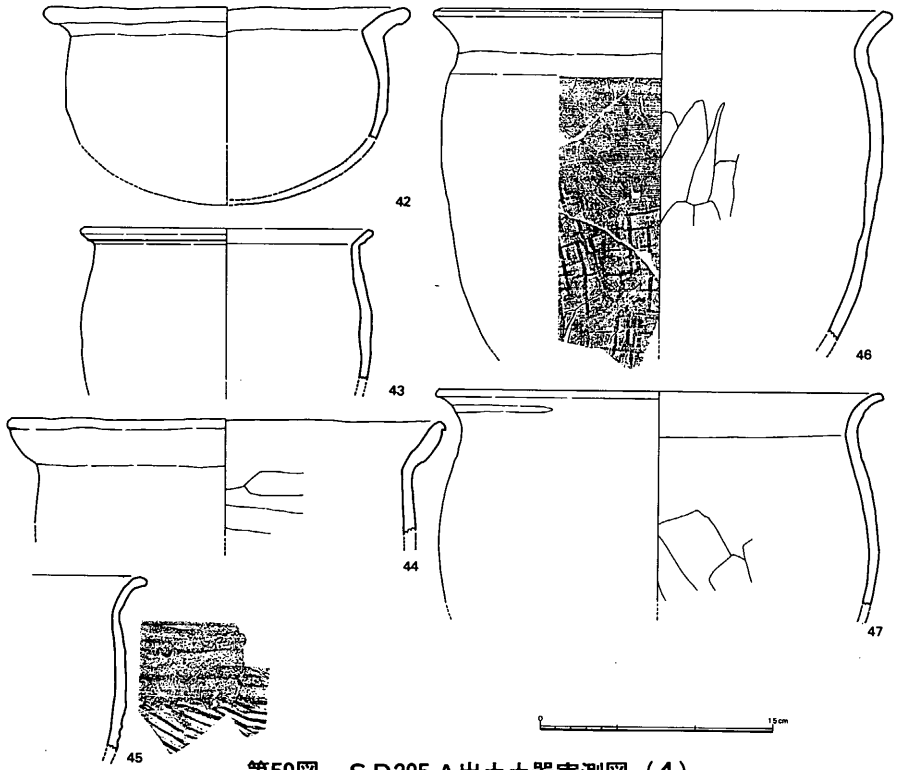
皿（48・49）　両者とも胎土は灰白色を呈し，須恵質に近い焼成である。48は口径13.2cm，器高2.6cmである。体部外面屈曲部以下を回転ヘラ削りしている。外底部分を除いて黒緑色の釉を薄く均一にかけている。49は畳付部分を凹ませるタイプで，全面に黒緑色の釉をかけている。また，内面に３条の沈線を巡らす。全てヨコナデ調整である。

陶磁器

越州窯系青磁椀Ⅰ－１が２点，Ⅰ－２が23点，不明が２点，Ⅱ－２・ａが１点，Ⅱ－２・ｄが１点，Ⅱ－３が３点，不明が８点，皿が１点，杯が１点，鉢が１点，水注が１点，長沙窯系青磁が２点出土した。

青磁

皿（50）　口径14.1cm，器高3.5cmである。体部外面を回転ヘラ削りしている。淡黄緑色の釉



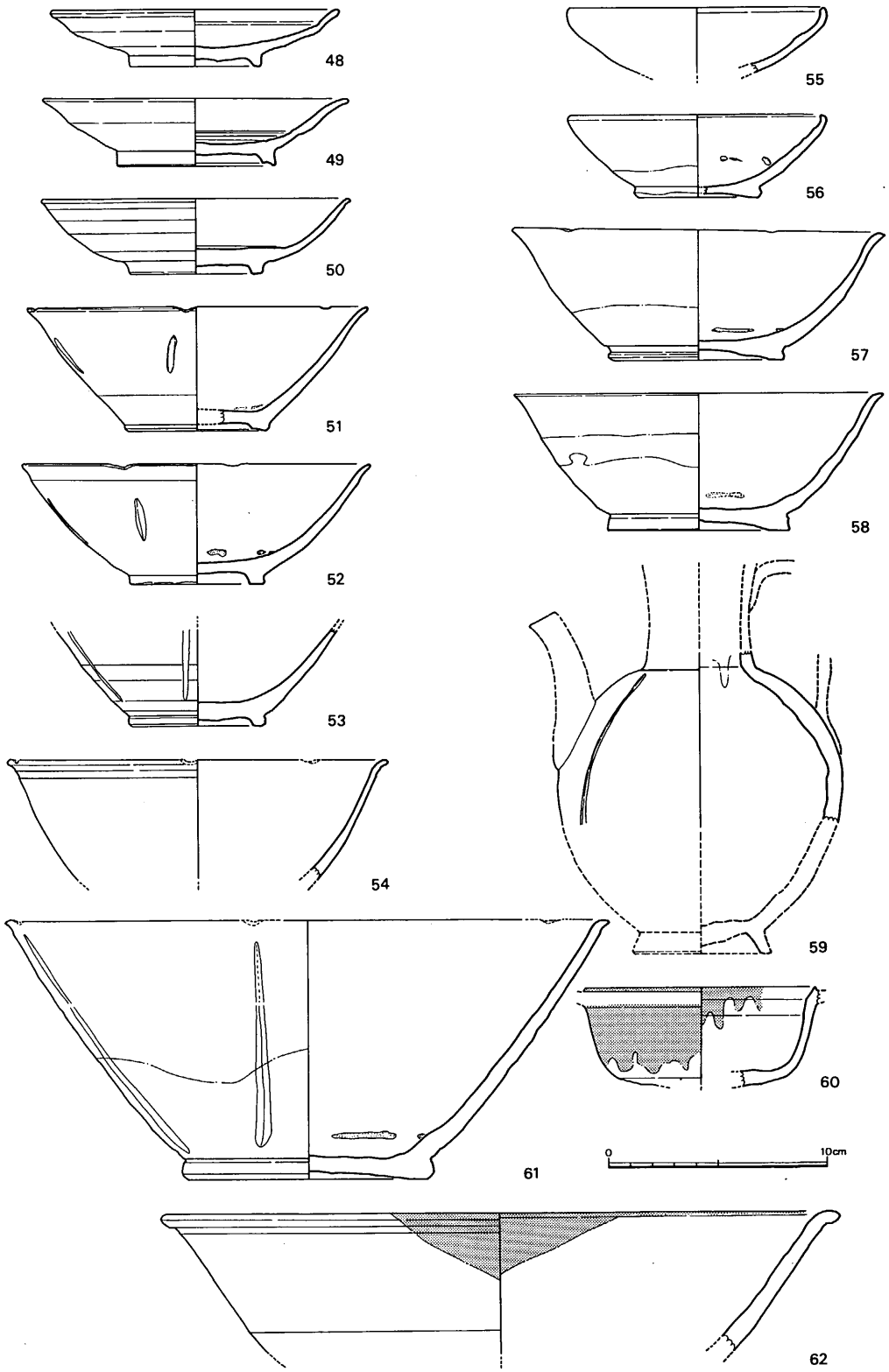
第59図　ＳＤ205Ａ出土土器実測図（4）

を全面にかける。高台畳付部分は，重ね焼きのため釉を削り取っている。また，内面には白色の目跡があり，復原するとその数は８～９個になる。越州窯系青磁。

椀（51～58）　全て越州窯系青磁である。51～54はⅠ－２類である。口縁部を薄く引き出し，外反させる例が多い。淡黄緑色を呈する美しい釉がかかる。いずれも重ね焼きのための目跡ががあり，52は８個を数える。55はⅠ類であるが，「蛇ノ目」高台か輪状高台か明らかでない。56～58は化粧土を有し，淡黄緑色の釉をかけるⅡ類である。56はⅡ－１・ｄ類で，外底は糸切り痕をヘラナデにより消している。57・58はⅡ－２・ｂ類である。

鉢（61・62）　口径27.6cm，器高11.9cmに復原できる。椀Ⅱ類を大形化した形態を有し，また胎土，釉調，成形法も椀Ⅱ類と同一である。越州窯系。62は口径31.0cmに復原できる大形のものである。体部外面下半を回転ヘラ削りしている。器面は風化し，釉は白色味をおびた黄緑色を呈する。口縁部付近に褐釉をかけている。胎土・釉調ともに越州窯系青磁椀Ⅱ類に相似しているが，褐彩を伴う点を重視すると長沙窯系の可能性が生じてくる。

水注（59）　第77次調査出土品と接合した。九大蔵の伝筑紫野市大門出土例を参考として復原図示した。縦沈線を入れ，体部を６分割する。胎土は茶灰色を呈し，やや黄色味をおびた緑灰色の釉がかかる。越州窯系。



第60図　ＳＤ205Ａ出土陶磁器実測図（5）

60は口縁部に突帯様のものを巡らし，どのような全形になるか明らかでない。茶灰色を呈する胎土に黄白色を呈する釉を薄くかけ，その上に口縁部から体部にかけて褐釉をかけている。62と同様に長沙窯系の可能性がある。

ＳＤ205B出土土器・陶磁器（第61図，別表，図版74）

土師器

全て糸切りである。

皿a（1～10）　口径8.4cm～10.0cm，器高1.0cm～1.3cm。9は灯火器として使用している。

皿b（11）　口径9.0cm，器高1.4cmである。断面三角形に近い低い高台を有する。

皿（12）　体部を内弯させた特異な皿で，口径6.8cm，器高1.2cmを測る。

杯a（13～20）　口径14.5cm～16.2cm，器高2.7cm～3.6cmである。皿とともに糸切り開始期に属する一群である。

白磁

椀（27～29）　27は大きな玉縁口縁を有するⅣ－1・a類，28は典型的なⅤ－4・b類，29は見込みの釉をカキ取るⅧ－2類である。

皿（21～26）　21はⅡ－2類，22はⅥ－1・a類，23～24は見込みの釉を環状にカキ取るⅢ類である。25は見込み部分の釉をカキ取った小形のもので，あるいは小椀かも知れない。高台見込み部分に「上」銘の墨書がある。26は内面見込み部分にヘラにより文様を描いたⅧ－1類である。

蓋（30）　天井部がやや凹んだ小壺の栓形の蓋である。天井部に白濁色を呈する釉がかけられている。「大治五年（1130）」銘を有する経筒が出土した山田経塚の中にこの類の蓋がある。

青磁

椀（33）　体部内面に片切彫により花文を描いた龍泉窯系青磁椀Ⅰ－2・b類である。

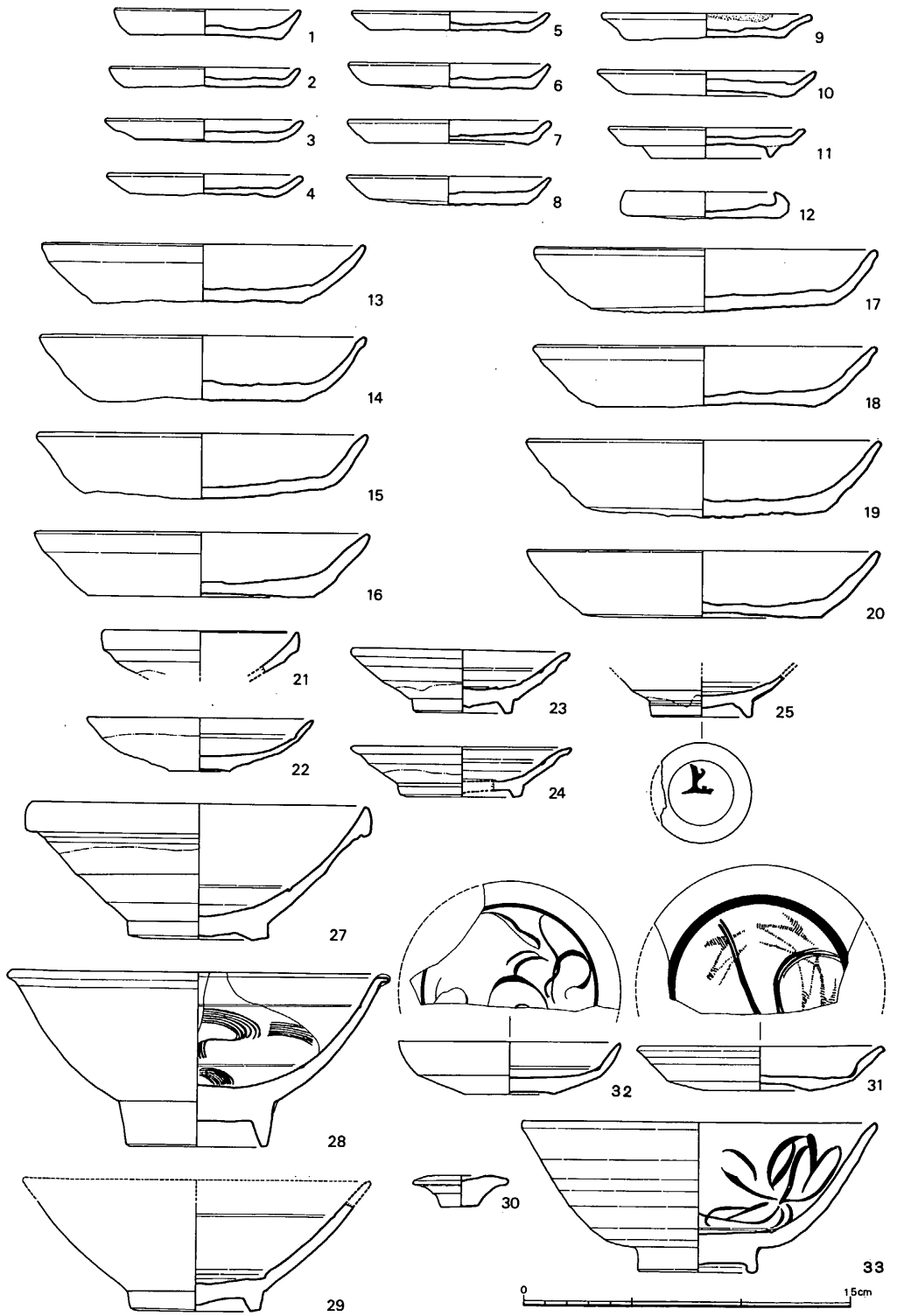
皿（31・32）　31は内面にヘラと櫛状工具により文様を描き，外面だけを露胎とした同安窯系皿Ⅰ－2・b類である。32は片切彫により文様を描いた龍泉窯系皿Ⅰ－2類である。

高麗青磁

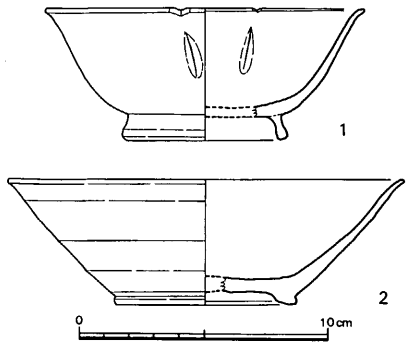
椀　内面見込み部分に白象嵌による2重の圏線と如意頭文を配置し，体部に白象嵌による雲と白・黒象嵌による鶴をあらわしている。体部外面には白象嵌による3条の圏線を巡らしている。外底見込み部分に凹凸のあるヘラによる手持ち削りがある。外底に砂礫の目跡が残り，内底に4足の焼台跡があり，釉が剝離している。胎土は暗灰色を呈し，釉は灰青色を呈する。高麗末期に近い頃のものと考えられる。溝の南端部から出土したことと，他の出土遺物からみると，これはSD205堆積層からの混入品と考えられる。

ＳＤ205D出土陶磁器（第62図，図版74）

層位からみると，この溝はＳＤ205の流れのなかでは新期に属する。しかし，埋没時期を明確



第61図　ＳＤ205Ｂ出土土器・陶磁器実測図



第62図　ＳＤ205Ｄ出土陶磁器実測図

にしうるようなまとまった遺物は出土せず，また発掘範囲のなかでは出土点数は少ない。そこで，重要と考られる遺物を選んで報告する。

緑釉陶器

椀（1）　体部は丸味を有し，口縁部を外反させる金属器を模倣した形態を有する。口縁部に5個所抉りを入れて輪花とし，その抉りに対応する位置の胴部にヘラ押えによる凹縦線を入れている。須恵質の焼成で暗灰色を呈する。釉は全面に施され，濃緑色を呈する。$\frac{1}{3}$程残存しているが，復原すると，口径12.6cm，器高5.3cm，　高台径6.6cmになる。

青磁

椀（2）　全面施釉後高台畳付部分の釉をカキ取って露胎とする越州窯系青磁椀Ⅰ－2類である。体部中位から下方を回転ヘラ削りしている。胎土は灰色を呈し，淡灰緑色の釉がかかる。見込み部分に白色の小さな目跡がある。

ＳＤ207出土土器・陶磁器（第63図，別表，図版75）

土師器

全てヘラ切りである。

皿ａ（1～16）　1～15は口径8.4cm～9.2cm，器高0.8cm～1.5cm，16は口径9.8cm，器高1.7cmである。2は底部に穿孔がある。16は1～15よりも先行時期のものである。

丸底の杯（17～27）　口径14.4cm～15.8cm，器高3.6cmである。図示しなかったが，口径17.4cm，器高3.7cmを測る大形品も出土している。全て内面をヘラミガキする。外面屈曲部以下には乱雑な指頭圧痕が残る。18・21・24の内面にはコテ状工具痕が残っている。

瓦器

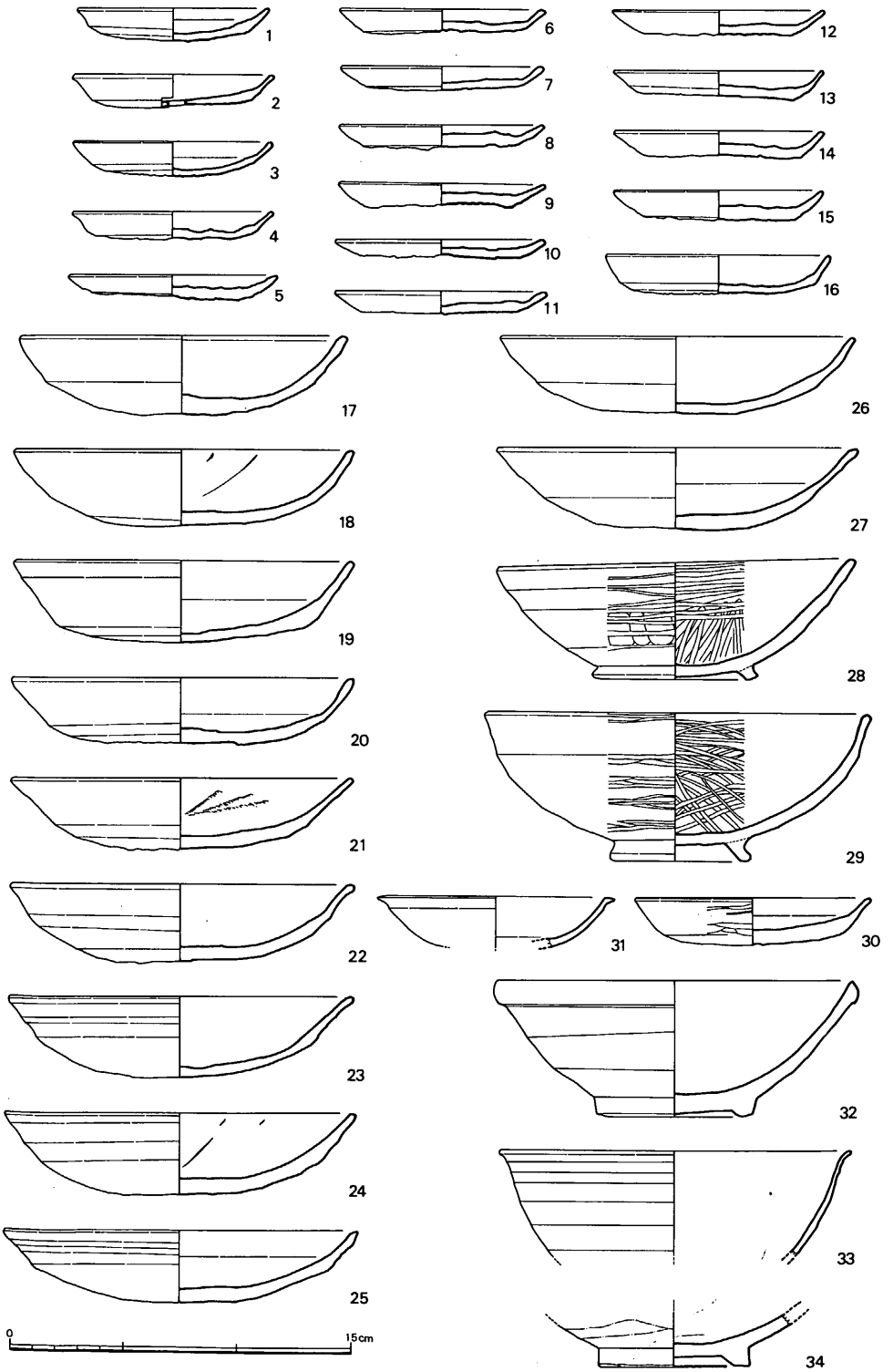
椀（28・29）　丸底の杯と同一の成形法によるため，体部下半には指頭圧痕があり，特に28は顕著である。

皿（30）　内底と体部外面をヘラミガキし，体部内面はヨコナデのままである。胎土は精良で，ほとんど砂粒を含まない。

白磁

皿（31）　口径10.4cmである。口縁端部は平坦な面を成す。淡灰色の胎土に淡黄色の透明釉がかかる。青白磁に多くみられる器形である。

椀（32～34）　32はⅡ－1・ａ類，33はⅤ類，34はⅡ類である。32の高台内には淡黄色を呈する焦げ付きがある。33はⅤ類としては非常に器肉が薄く，精良な造りである。34は白化粧土を有する。



第63図　ＳＤ207出土土器・陶磁器実測図

ＳＤ215A出土土器・陶磁器（第64～66図，別表，図版76～78）

極めて多量の土器が出土した。護岸のために箭を組んでいる。この箭の東側と西側および箭より上位から出土したものをそれぞれＳＤ215A東・ＳＤ215A西・ＳＤ215A 上層として報告する。出土した土師器は全てヘラ切りである。

ＳＤ215A東

土師器

皿ａ（１～20）　口径8.6cm～9.8cm，器高1.0cm～1.6cmである。３・８・11・20は灯火器。

丸底の杯（21～40）口径13.5cm～15.7cmである。内面を全てヘラミガキしている。24・25・29・31・34・38～40の内面にはコテアテ痕がある。37は灯火器として使用。平仮名文字が書かれているものも出土した（図版76のａ）。

瓦器

皿（41）　口径10.2cm，器高2.3cmである。形態は小形の丸底の杯と類似するが，ヘラミガキの仕方が相違し，瓦器皿の方が丁寧である。

椀（42～45）　口径15.6cm～17.2cm，器高5.0～～5.9cmである。体部のヘラミガキは全て丁寧である。胎土は精良であり，また燻しも良好で，黒色を呈する。

陶磁器

越州窯系青磁を除くと，白磁か青白磁である。出土点数は非常に多い。

青磁

合子（46）　口縁端より内側は施釉されてない。白色の胎に小さな貫入を伴なう淡青色の釉がかかる。

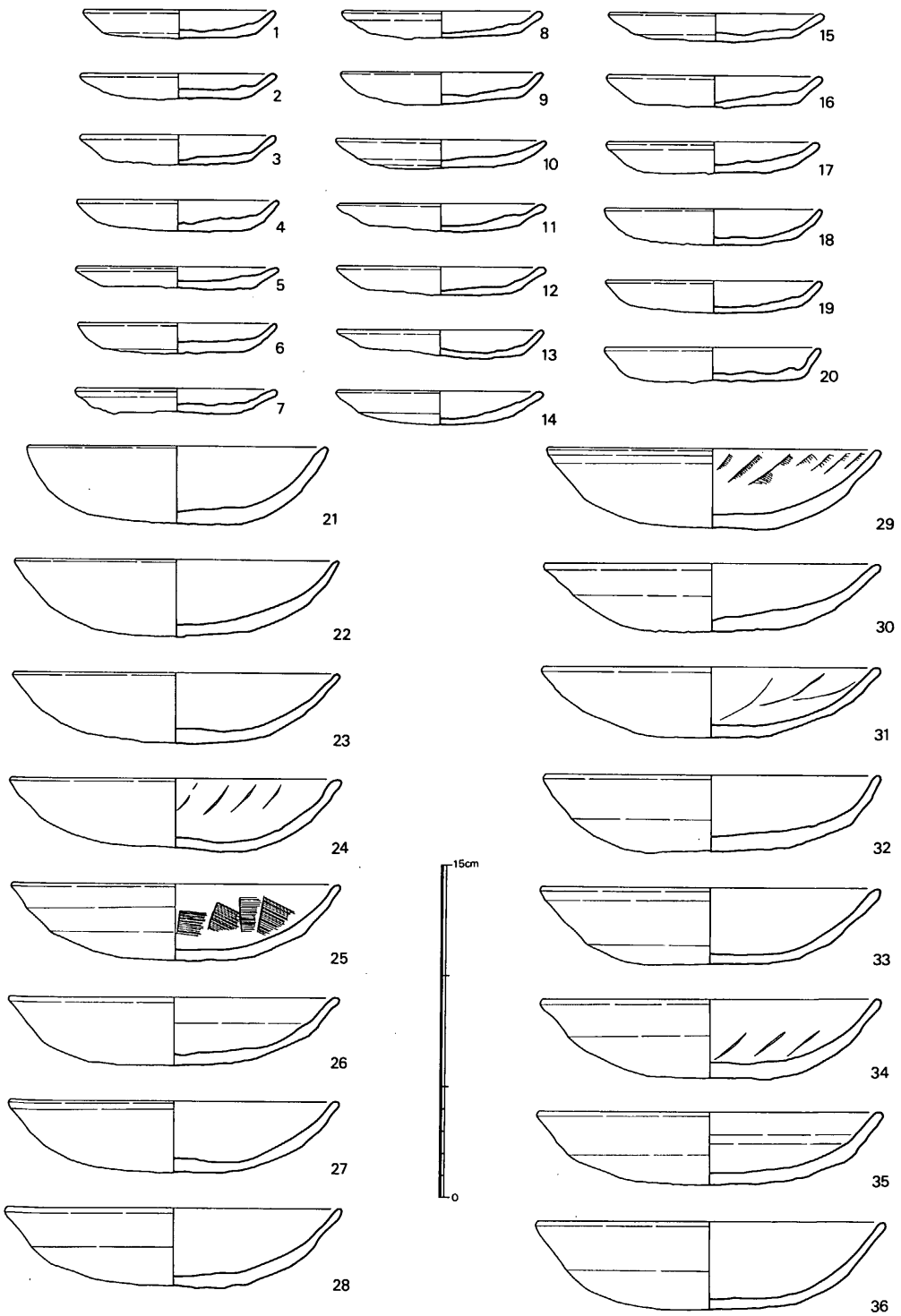
白磁

皿（47～49）　47はⅡ－１類，48・49はⅤ類である。

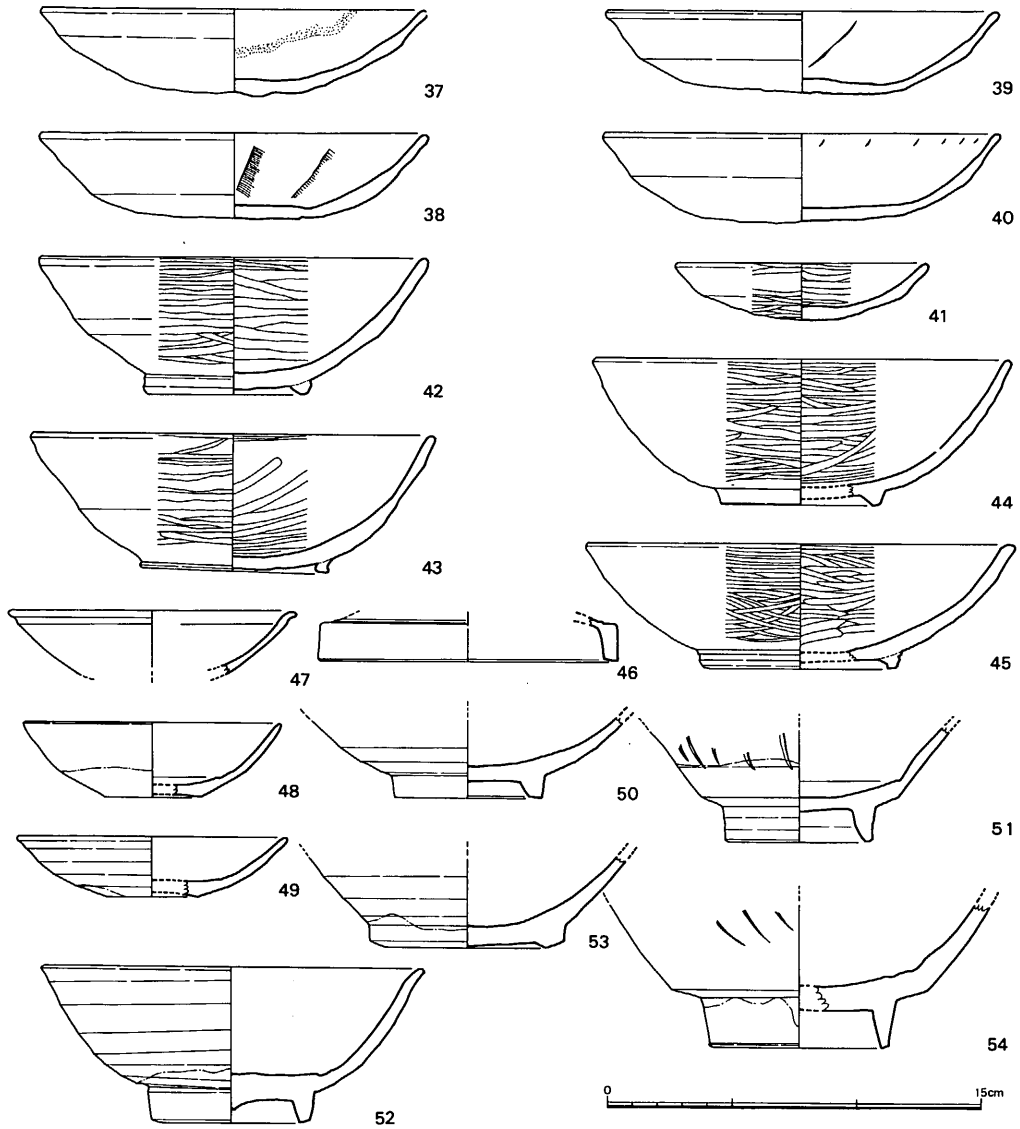
椀（50～54）　50はⅡ－１類，51はⅣ－１・ａ類，52はⅤ－１類である。52の外底面には焼台痕である淡黄褐色を呈する円形の焦げつきがある。53・54は未分類分である。体部下端近くに鋭い稜線をなし，また細く高い高台を有する。両者とも体部外面に片切彫りによる縦線を入れる。淡黄色味をおびた灰白色の胎土に透明釉をかけている。小さな貫入を無数に伴う。

青白磁

四耳壺　白色緻密な胎土に若干緑味をおびた釉をかけている四耳壺片（図版77のｂ）で，これと同一個体と考えられる破片（図版77のａ,ｃ,ｄ）がＳＤ215A上層から出土した。肩部と胴部の境に一条の隆線を巡らす。この隆線より上位の肩部にヘラによる蓮弁文状の文様を描いている。削りの深い部分は淡緑色を呈する。胴部は４本の縦沈線を入れることにより３本の隆線を浮き出している。底部は比較的厚い高台を削り出す。よく似た破片が黒色土層から出土（図版77のｅ）しているが，胎土・釉調ともに粗雑である。



第64図　ＳＤ215Ａ出土土器実測図（１）



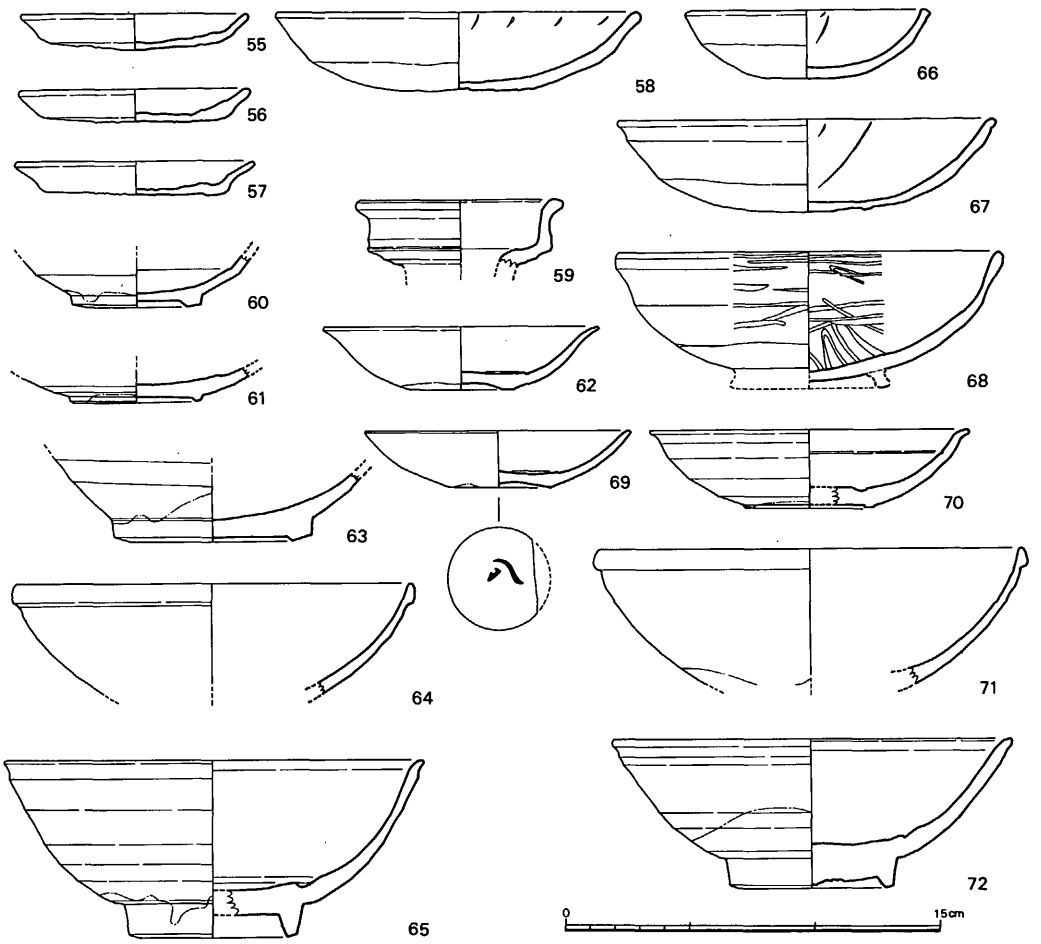
第65図　ＳＤ215Ａ出土土器・陶磁器実測図（2）

ＳＤ215Ａ西

箱の内側になるため，出土した遺物はそれほど多くはない。

皿ａ（55～57）　口径9.2cm～9.5cm，器高1.3cm～1.5cmである。

丸底の杯（58）　口径14.6cm，器高3.1cmである。内面をヘラミガキしている。また，コテアテ痕が残る。



第66図　ＳＤ215Ａ出土器・陶磁器実測図（３）

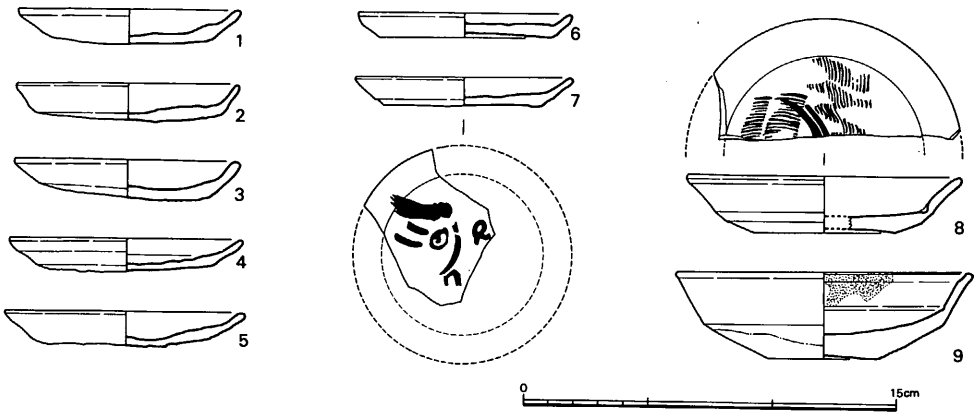
青磁

壺（59）　口径8.3cmの小さな口縁部の残片である。淡灰色の胎土にくすんだ灰緑色の釉がかかってる。口縁端部は釉をカキ取っている。この露胎部分は赤褐色を呈する。越州窯系の長頸壺と考えられる。

白磁

皿（60～62）　60はⅡ－１類，61はⅦ－１類，62はⅤ類である。60の外底には黄褐色の焦げつきがある。

椀（63～65）　63はⅣ－１・ａ類，64はⅡ－１類，65はⅤ－１類に入るが，青白色を呈する美しい釉がかけられ，また，口縁部の成形にⅤ類とは若干相違した特徴がみられる。外底には焼台の跡（円形の黄褐色の焦げ付き）がある。



第67図　ＳＤ215Ｂ出土土器・陶磁器実測図

ＳＤ215Ａ上層

上層からは，極くわずかであるが，混入品と考えられる糸切りの皿や青磁片が出土した。

土師器

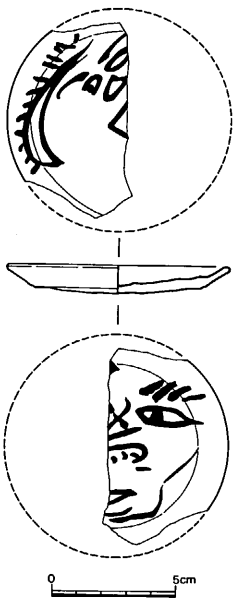
丸底の杯（66・67）　67は口径9.7cm，器高2.8cmの小形品である。67は口径15.3cm，器高3.4cmである。両者ともヘラミガキし，器面を平滑にしている。またコテアテ痕もある。

瓦器

椀（68）　最上層からの出土であるので，明確にＳＤ215Ａに伴うかどうかはわからない。口径15.6cmである。外面屈曲部以下に指頭痕が数多くみられる。ヘラミガキは幾分粗である。

白磁

皿（69・70）　69はⅤ類で，外底部に「八」銘の墨書がある。口径12.7cm，器高3.1cmに復原できる大形品で，低く小さい高台を削り出している。白色の胎土に白色の釉をかける。



第68図　第38次調査ＳＤ860出土人面土器実測図

椀（71・72）　71はⅡ－１類，72はⅤ－１類である。72はⅤ類としては高台が低い。

ＳＤ215Ｂ出土土器・陶磁器（第67図，別表，図版78）

土師器

皿ａ（１～７）　１～５はヘラ切りで，口径9.0cm～9.6cm，器高1.4cm～1.6cmである。６・７は糸切りで，口径8.6cm・8.8cm，器高1.0cm・1.2cmである。７の外底に人面が墨書されている。第38次調査ＳＤ860の上層からも同種の人面墨書土器（第68図・図版78—ａ）が出土している。この土器は口径9.0cm，器高1.2cmで，ヘラ切りによる切り離しである。

青磁

皿（８・９）　８は同安窯系青磁皿Ⅰ－２・ｂ類，９は龍泉窯系青磁皿Ⅰ－３・ａ類である。９は体部内面に油煙が付着していることから，灯火器として使用されたことが知れる。

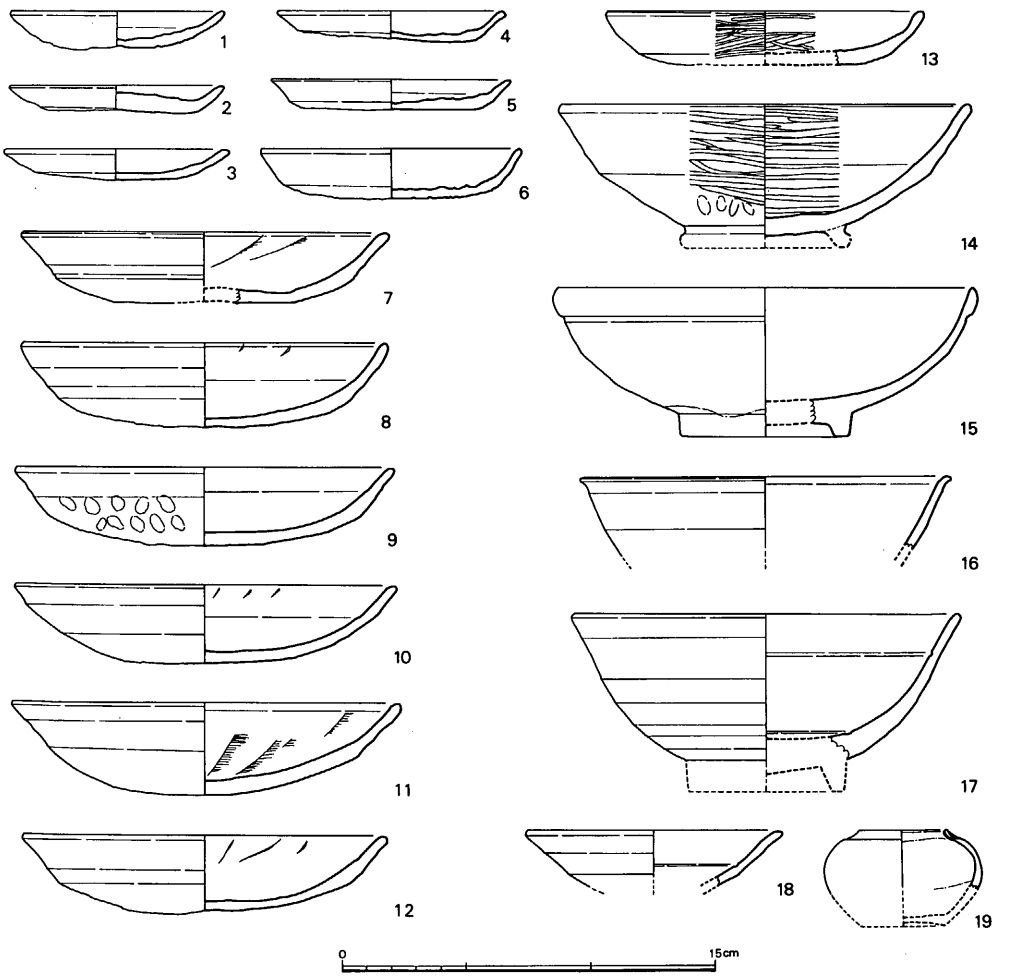
ＳＥ1920出土土器・陶磁器（第69図，別表）

土師器

全てヘラ切りである。

皿ａ（１～６）　法量により１～５と６とに分かれる。１～５は口径8.5cm～9.6cm，器高1.0cm～1.6cm，６は口径10.4cm，器高2.0cmである。６は１～５に先行する型式である。

丸底の杯（７～12）　口径14.6cm～16.4cm，器高2.9cm～3.7cmである。全て内面はヘラミガ



第69図　ＳＥ1920出土土器・陶磁器実測図

キ，外面下位には指頭圧痕がある。9を除いてコテアテ痕がある。

瓦器

杯（13）　体部最下位を回転ヘラ削りしている。内・外面ともに丁寧なヘラミガキがある。非常に精良な胎土で，焼成もよく，黒色の光沢を放つ。

椀（14）　体部下半には指頭圧痕が乱雑に残っている。内面のヘラミガキは特に丁寧である。胎土は精良で，ほとんど砂粒を含まない。器肉内部にまで燻しが浸透し，黒色土器風な焼き上がりである。

陶磁器

白磁椀Ⅱ－1が4点，Ⅳ－1・aが1点，Ⅴ－1が1点，Ⅴ－2・aが1点，不明が1点，皿Ⅵが1点，Ⅱ－1が1点出土した。その他に，最上層から同安窯系青磁皿Ⅱ－1・aが出土したが，他からの混入と考えられる。

白磁

椀（15～17）　15はⅡ－1類であるが，この類のなかでは玉縁状口縁は大きい方である。16はⅤ－2・a類，17はⅤ－1類である。

皿（18）　Ⅱ－1類である。

小壺（19）　白灰色の胎土に貫入を伴う淡黄色の釉がかかる。ＳＤ205Ｂからこの種の蓋である栓形蓋が出土している。

ＳＥ1930出土土器（第70図，別表）

土師器

椀（1）　口径12.8cm，器高9.6cmである。体部内面中位以下だけにヘラミガキをしている。外底に板状圧痕がある。

黒色土器

椀（2）　口径12.8cm，器高4.7cmである。内面だけを燻した黒色土器A類である。体部内面全部をヘラミガキするが，上位部分のミガキは明瞭でない。

ＳＥ1935出土土器・陶磁器（第70図，別表，図版79）

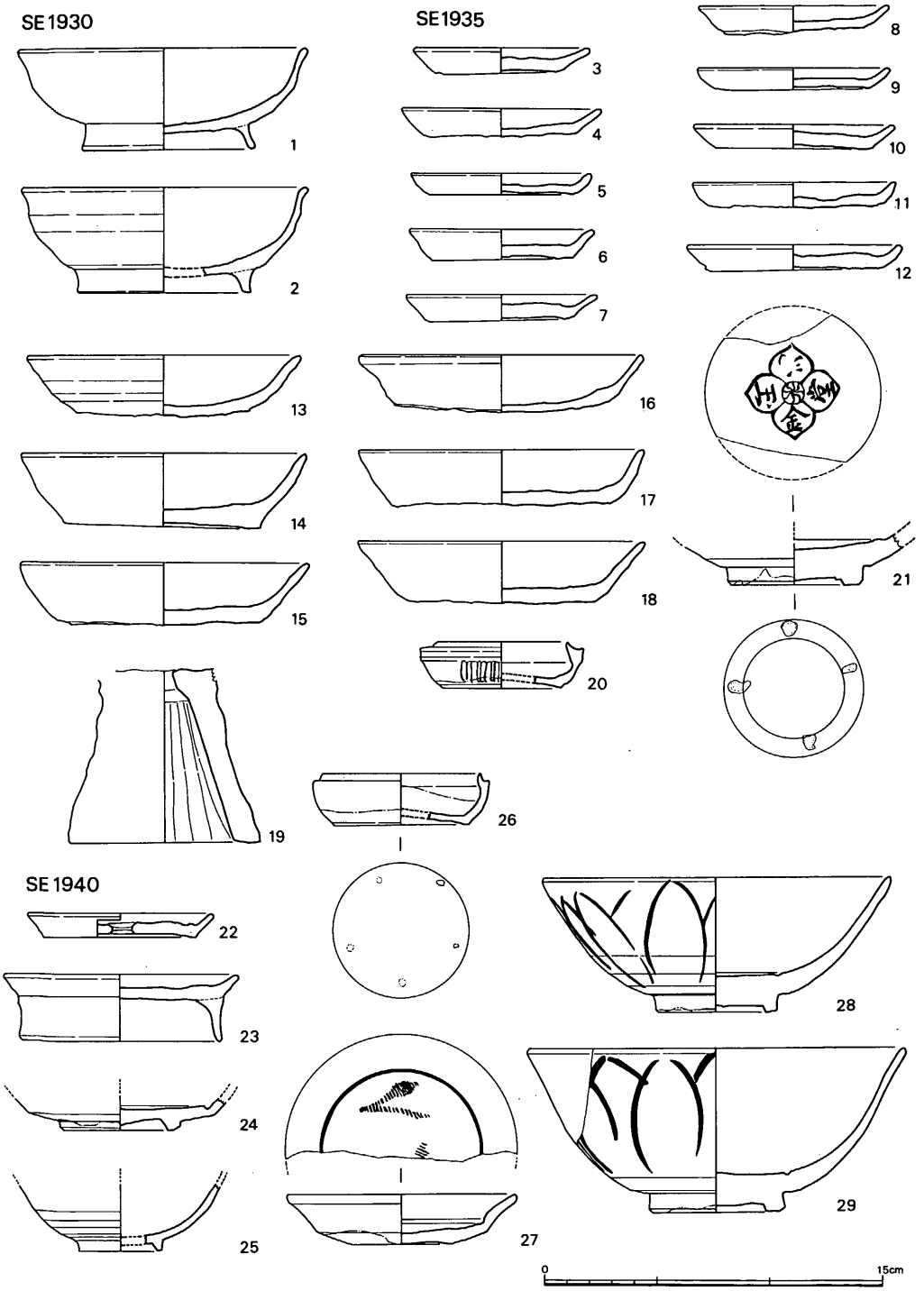
土師器

全て糸切りである。

皿a（3～12）　口径7.6cm～9.4cm，器高1.0cm～1.4cm。3は灯火器として使用している。

杯a（13～18）　口径12.0cm～12.8cm，器高2.5cm～3.2cmである。

器台（19）　粘土塊を指押えで截頭円錐形につくり，糸切りした後に底部からヘラをさし込み，脚部内部の粘土を切り取って成形している。それ故に，脚端には糸切り痕があり，外面には指頭圧痕が著しく，内面は横方向のヘラ削り痕が残っている。類例のない造り方である。胎土は精良で砂粒はほとんど含まない。焼成も良好で灰白色を呈する。



第70図　ＳＥ1930・ＳＥ1935・ＳＥ1940出土土器・陶磁器実測図

陶磁器

白磁椀Ⅳ－1・aが2点，Ⅴ－4・aが1点，Ⅸが1点，不明7点，皿Ⅱ－1が1点，Ⅵ－1・aが1点，Ⅸ－1が5点，Ⅸ－2が2点，袋物が1点，龍泉窯系青磁椀Ⅰ－1が2点，Ⅰ－5・aが1点，Ⅰ－5・bが9点，Ⅰ－5・cが1点，同安窯系青磁椀Ⅰ－1・aが3点，皿Ⅰが3点，それに青白磁合子が1点出土した。

青白磁

合子（20）　型造りにより体部外面中位に連子状文を浮き出している。蓋受け部と体部下半と底部は露胎としている。十分に還元されなかったためか釉は淡黄色ガラス質である。

青磁

椀（21）　龍泉窯系青磁椀Ⅰ－1類の見込み部分に施文された如意頭文内に「金」「玉」「満」「堂」という吉祥句を入れたスタンプ文様がある。外底畳付部分に4個の目跡がある。ＳＥ1940と切り合った部分からの出土であり，あるいはＳＥ1940に伴うのかも知れない。

ＳＥ1940出土土器・陶磁器（第70図，別表，図版79）

土師器

全て糸切りである。

皿a（22）　口径8.3cm，器高1.1cm。底部中央に穿孔がある。

皿c（23）　口径10.4cm，器高3.0cm。脚部は高さ2.0cmあり，この種の中では高い方である。

陶磁器

白磁椀Ⅵ－1・aが3点，Ⅴ－4・bが1点，皿Ⅷ－1が1点，四耳壺1点，不明4点，未分類1点，龍泉窯系青磁椀Ⅰ－1が1点，Ⅰ－2・bが4点，Ⅰ－5・aが3点，Ⅰ－5・bが1点，Ⅰ－5・dが1点，皿Ⅰが1点，同安窯系青磁椀Ⅰ－1・aが2点，皿Ⅰ－1が2点出土した。

白磁

杯（24）　玉縁状の口縁を有するタイプのなかにこのような器形を見い出すことができるので，その類かも知れない。灰色の胎に淡黄灰色の釉がかかる。

青白磁

小椀（25）　白色の緻密な胎土に青白色の釉を全面にかけている。体部外面は回転ヘラ削り調整をしている。丁寧なつくりである。

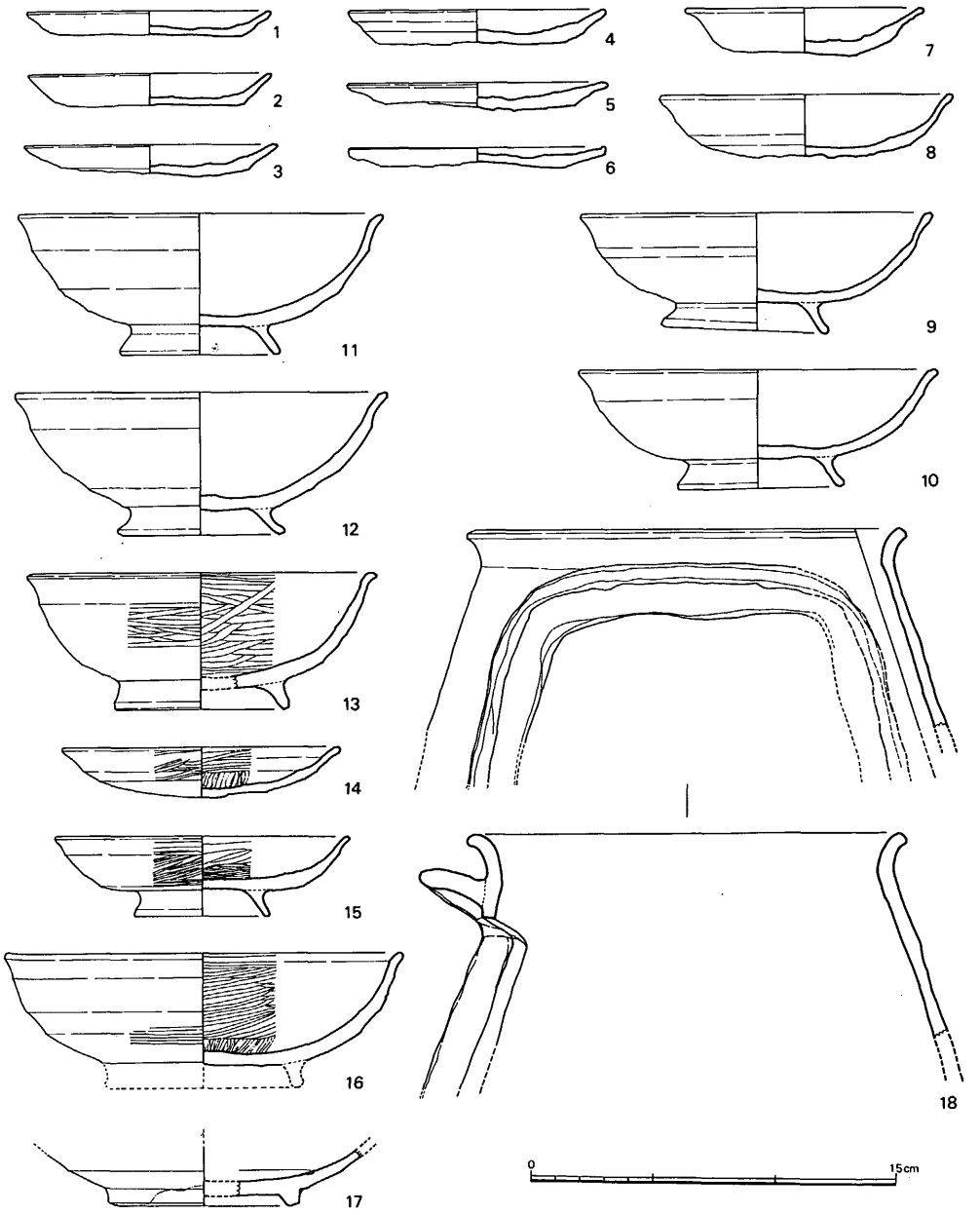
合子（26）　体部外面中位より下方と内面中位から蓋受け部は露胎である。胎土は精良で白色を呈する。釉は青白色である。外底には目跡が2個残っているが，復原すると5個になる。

青磁

椀（28・29）　高台は断面四角形を呈し，間弁を有するヘラ描き蓮弁文を描いたⅠ－5・a類である。暗灰色の胎土に淡黄緑色の釉がかかる。龍泉窯系である。

皿（27）　体部下位にまでしか施釉しないタイプで，内面に櫛状工具でジグザグ状の文様を描いている。Ⅰ－1・b類。同安窯系である。

ＳＫ1950出土土器・陶磁器（第71図，別表，図版79）



第71図　ＳＫ1950出土土器・陶磁器実測図

土師器

全てヘラ切りである。

皿a（1～5）　口径10.0cm～10.7cm，器高1.1cm～1.4cmである。

皿（6）　口径10.6cm，器高0.9cmを測る。口縁部の形状から蓋かと考えられる。この期によく出土する例であるが，対応する身が不明なため皿として報告してきたものである。

杯（7・8）　口径9.8cm・12.1cm，器高2.0cm・2.5cmである。8は丸底であることから無高台椀とすべきかも知れない。

椀（9～12）　口径14.4cm～15.3cm，器高4.9cm～5.9cmである。体部外面は指頭痕が乱雑に残っている。9・10の内面はヘラミガキされている。丸底の杯と同種の製作技法である。

黒色土器

椀（13・16）　13は内面のみ燻している。外面のヘラミガキは体部中位だけである。16は内外面とも黒色に燻している。内面のヘラミガキは丁寧で密に行なっている。胎土のミガキは風化のため一部にしか見られない。

皿（14・15）　内外とも真黒色に燻している。胎土は精良で，ヘラミガキも丁寧である。

竈（18）　体部上位の破片で全形は復原できない。甕形の上部をつかい，体部を切り取り，その周囲に高い鍔を付け，焚き口部をつくっている。ナデ調整を行なっている。砂礫を多く含む。焼成は良好で，淡茶色を呈する。

陶磁器

白磁椀Ⅳ－1・bが1点，Ⅴ－4・bが2点，皿Vが1点および青白磁椀が3点（同一個体片）が出土した。すべて上層からの出土である。

青白磁

椀（17）　白色の胎土に淡緑色の釉をかけている。同一個体片と考えられる口縁部も出土しており，それから復原すると，体部はあまり丸味を持つことなく立ち上がり，口縁部を薄く引き出す。外底には茶褐色を呈する円形の焦げ付きがある。

ＳＫ1952出土陶磁器（第72図，図版79）

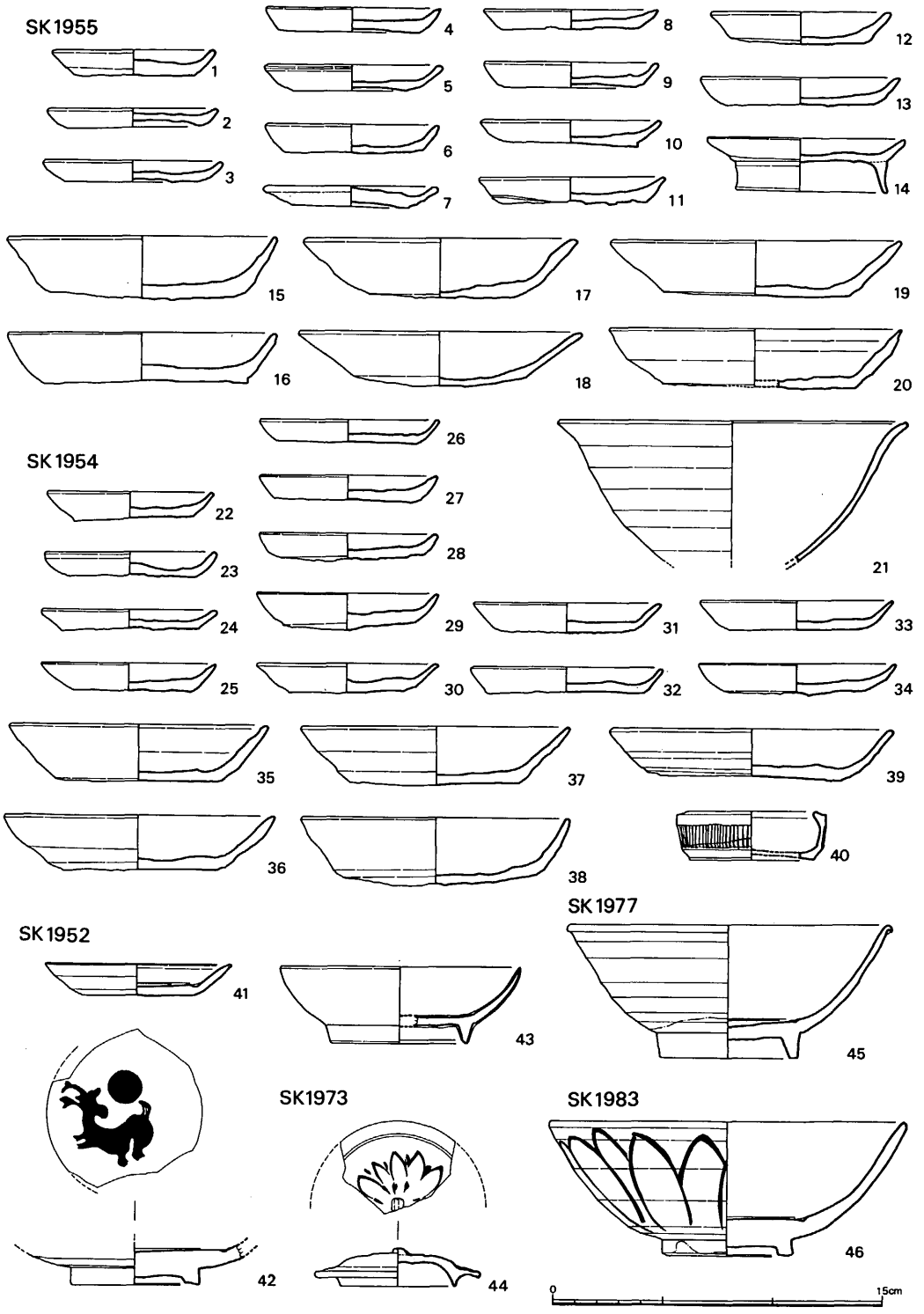
白磁

皿（41）　口径8.5cm，器高1.5cmである。口縁部を露胎とする他は全面に施釉する。Ⅸ－1・a類である。

青磁

椀（42）　断面四角形の高台を有する龍泉窯系青磁椀Ⅰ－1類である。内底に鹿と円文を組み合せた文様をスタンプしている。灰色の胎土に淡黄緑色の釉がかかる。

杯（43）　口径11.0cm，器高3.5cm。全面施釉後高台先端部の釉を削り取り，その露胎部分は赤褐色を呈する。淡灰色の胎土に灰色味をおびた淡緑色の釉が厚くかかっている。Ⅲ類である。



第72図　ＳＫ1952・1954・1955・1973・1977・1983出土土器・陶磁器実測図

ＳＫ1954出土土器・陶磁器（第72図，別表）

土師器

全て糸切りである。

皿ａ（22～34）　口径7.6cm～8.8cm，器高1.0cm～1.5cmである。

杯ａ（35～39）　口径11.8cm～12.8cm，器高2.5cm～3.1cmである。

青白磁

合子（40）　型造りにより体部中位に連子状文を浮き出す。体部下半と蓋受け部を露胎としている。釉中に鉄分が多すぎたためか釉は淡緑色を呈する。ＳＥ1935出土例と酷似している。

ＳＫ1955出土土器・陶磁器（第72図，別表）

土師器

全て糸切りである。

皿ａ（１～13）　口径7.4cm～9.0cm，器高0.9cm～1.5cmである。

皿ｃ（14）　口径9.5cm，器高2.5cmである。1.4cmの高い高台を有している。

杯ａ（15～20）　口径12.2cm～13.2cm，器高2.2cm～2.9cmである。17・18の体部は大きく外方へ開いている。この期の土器群のなかではあまり例がない。

白磁

椀（21）　伏せ焼きのために口縁部を露胎とするいわゆる「口禿げ」である。体部外面を回転ヘラ削り調整している。白色の胎土に灰白色の釉をかけている。Ⅸ類。

ＳＫ1973出土陶磁器（第72図，図版79）

青白磁

蓋（44）　小さな台形状の撮がつく小壺の蓋で，口径7.5cm，身受け部の返り径5.3cm，器高1.7cmに復原できる。天井部に型造りによる花文が浮き出ている。濁白色を呈するやや粗い胎土に緑味をおびた透明釉がかかる。身受け部以内に釉はなく，露胎である。大きな貫入を伴う。

ＳＫ1977出土陶磁器（第72図）

白磁

椀（45）　口径14.8cm，器高6.1cm。細く直立する高台を有し，口縁部は体部先端を曲げて端部に丸味を持たせている。体部外面は回転ヘラ削り調整を行っている。外底に淡黄褐色を呈する円形の焦げ付きがあり，丸味をもった焼き台を使用したことが知れる。灰色の胎土に若干緑味をおびた灰色の透明釉がかかる。口縁部の形状は若干相違するが，Ⅴ－３・ａ類に入る。

ＳＫ1983出土陶磁器（第72図）

青磁

椀（46）　体部外面に間弁のあるヘラ描き連弁文を描く。龍泉窯系青磁椀Ⅰ－５・ａ類である。体部外面は回転ヘラ削り調整を行っている。灰白色の胎土に淡黄緑色の釉をかけている。

その他の遺構・各層出土陶磁器（第73図，図版78）

白磁

椀（1・2）　1は見込み部分の釉を環状にカキ取るⅧ－2類である。外底に「上」銘の墨書がある。床土出土。2はⅤ－1類。外底に墨書がある。黒色土層出土。

水注（3）　胎土は灰白色を呈し，釉は灰色をおびた白色である。把手貼付部付近に鉄釉がかけられている。床土出土。

青白磁

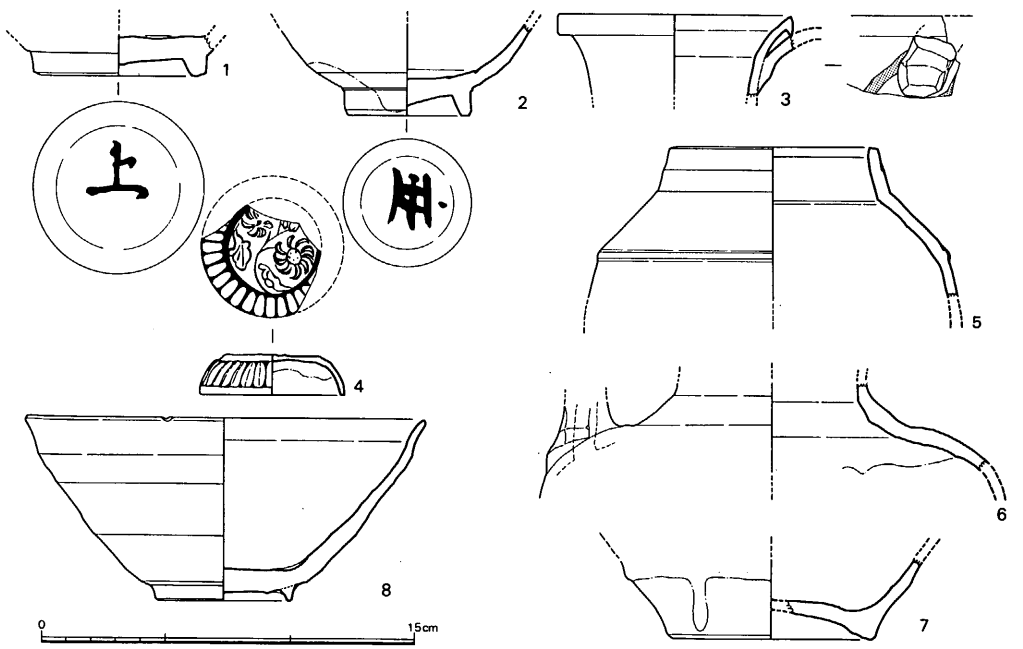
合子（4）　型造りにより体部に蓮弁文，天井部に菊花文を浮き出している。胎土は緻密で灰白色を呈し，釉は空色をおびた透明釉である。

陶器

壺（5）　灰白色の胎土を有し，緑黄色の釉がかかる。口縁部の釉はヘラによってカキ取られている。黒色土層出土。

水注（6・7）　白色を呈する精良な胎土に黄緑色の釉がかかる。ＳＸ1923出土。

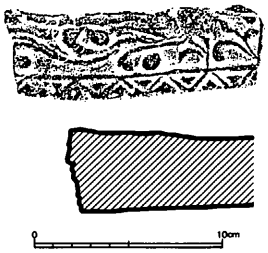
椀（8）　口径16.0cm，器高7.3cmである。底部を糸切り離した後に小さな高台を貼付している。体部外面下位を回転ヘラ削りしている。胎土は灰白色を呈し，貫入を多数含む灰釉がかかる。口縁部に輪花状の刻みがあるが，意識的なものかどうか明らかでない。瀬戸の灰釉陶器であろう。ＳＸ1923出土。



第73図　その他の遺構・各層出土陶磁器実測図

瓦類（第74図，図版84）

出土した瓦類は軒丸瓦24点，軒平瓦26点のほか，文字瓦42点，文様塼7点，鬼瓦である。軒先瓦の内訳については巻末の一覧表に示したが，きわだった特徴は認められない。第74図に示したものは新種である。約2分の1ほどの破片で，内区文様は磨滅のため判然としないが，向って右から左へ流れる唐草文を配している。外区上縁は素文で，下縁は界線によって三角形に画した中に交互に向きあった凸鋸歯文様のものを配する。顎は直線顎で，弧深は非常に浅く平板な感じを与える。胎土は荒い砂粒を含んでいる。文字瓦には「平井」・「平井瓦」・「平井瓦屋」・「賀」・「賀茂瓦」・「佐」・「安」・「安楽之寺」・「観世音寺」などがある。



第74図
黒色土層出土軒平瓦

漆紙文書（図版80）

ＳＤ205から出土した須恵器の杯の内底に付着していた。いわゆる「フタ紙」として用いられたのか，あるいは他の何らかの理由によって付着したのかは明らかでない。紙背を付着させているため肉眼でも墨痕を認めうるが，それは必ずしも明瞭ではない。参考に付載した赤外線テレビの画面写真にも見えるように，3字分の文字が見られるが，右側の文字は2字が重複し，1字は「ネ」偏の文字，また左上の文字は「見」部と推定される。

木簡（図版81）

木簡は，ＳＤ205Ａから1点，ＳＤ205Ｂから4点，ＳＤ207から1点，ＳＤ215Ａから1点，ＳＤ215Ａ東から1点および灰黒色土層から1点の合計9点が出土した。これらの型態を木簡学会の分類に準拠して分類すると，033型式が2点，061型式が1点，他の6点はすべて081型式となる。次に，これら9点の墨書について見ると，判読の可不可はともかくとして文字とみなしうるものが7点，断片的な墨痕が見られるにすぎないものが1点，型態的には木簡の一種とみなしうるが，墨痕は全く認められないものが1点，となる。

以下では若干の所見を述べながら代表的なものについて報告する。

（1）・「延長五年 ［米■帳］ 」

・「 □ ［収所ミ 米■帳］ 」

ＳＤ205Ａから出土した題簽で，表裏両面の腐植は著しいが，題簽部はほぼ完形とみなすことができ，その法量は長さ7.0cm，幅3.2cm，厚さ0.5cmである。軸部の大部分を欠いているが，長さ2.6cm，幅1.0cm，厚さ0.2cmが残存している。軸部の基部には折られたような痕跡が見られるが，その両面は調整されており，当初より薄く作られたのかあるいは二次的に削り取られたのかは明らかでない。墨の遺存状態はあまり良くなく，第1字は部首が「𠂇」もしくは「𠂆」と推定され，旁は第1画と若干の部分が見えるのみで，これだけで特定の文字を判定することは困難である。第2字はかなり簡略化されているが，「長」字の特徴を看取できるので，まず「□長五年」と判読できた。出土遺構や

共伴遺物などから10世紀前半代という時期が想定され，当該時期でこれらの条件を満たすものとしては延長５年以外に見られない。ちなみに延長５年は西暦927年である。下半部は左行の位置から見て割注式に２行が記されていたと考えられるが，右行ではかすかに墨痕らしきものが見られる程度である。左行中位の抹消された文字はそれの左上と中央下に若干ながら突出した墨痕が見られ，またきわめてかすかではあるが，墨に濃淡の差が見られるので，抹消されたのは「下」字ではないかと推定される。裏面では，上半部が腐植のためかすかな墨痕が一，二見られる程度で，全く判読できないが，下半部の右行は明瞭である。左行の墨はかなり薄いが，表面と同じく「米■帳」と判読できる。両面とも下半部の右行が同じであり，また題簽というこれの性格から見ても，表裏両面が同文であった可能性は大きく，「延長五年 収所・米■帳 」が本来の墨書であったと考えられる。「収所」は機関の名称のようでもあるが，いまだそれについての知見はない。また「米■帳」は米帳となるが，その具体的な内容は明らかでない。抹消された文字が「下」であったとすれば，米の下行に関するものであろうか。

（２）「南无大般若心経」

ＳＤ205Ｂから出土。頭部が若干欠損しているが，ほぼ完形である。長さ20.8cm，幅1.5cm，厚さ0.4cm。主頭に作り，頭部には２個の切り込みをいれ，下端を尖らせている。いわゆる卒塔婆形をしており，笹塔婆の一種であろうか。頭部は表裏両面とも墨で塗りつぶしているが，その意味は明らかでない。大般若心経については知見がなく，今後の研究課題である。また経典名に南無という帰命を付す例は南無妙法蓮華経があるが，この南无大般若心経は珍しい例である。なお，墨痕は全く認められないが，これと同形のものが同じ溝から出土している。

（３）・□　な□□□　□

・木　木

ＳＤ205Ｂから出土したもので，表面右端はほぼ原状を保つが，上端は切れ目をいれた後で折られている。現存長16.2cm，最大幅3.5cm，最大厚さ0.5cmを測る。第１字は「木」偏の文字のようであるが，断定はできない。「な」以下は明らかに仮名文字であり，二，三の想定はできるが，にわかには判断しがたい。裏面の２文字は，その筆致から見て，釈文のような「木」ではなく，「木」偏を示すのかもしれないが，現状では旁が見えない。

（４）「一

ＳＤ205Ｂから出土した。上端は原状を保ち，現存長10.1cm，幅3.5cm，厚さ0.3cmを測る。上端より1.6cmのほぼ中央には釘穴と推定される小孔があり，下端右半には刃跡の線が見える。墨痕は横棒だけで，常識的には「一」字と解されるが，意味は明らかでない。

（５）　□

倶舎□（八カ）　□

ＳＤ207から出土した。四辺とも二次的に切断されているので，原形は明らかでないが，現存

長8.3cm，幅1.9cm，厚さ0.2cmを測る。「倶」字の偏は「亻」偏のようにも見えるが，墨の遺存状態を見ると，いずれとも判断しがたい。裏面では下端近くにわずかな墨痕が見られるので，本来は墨書されていたのであろう。倶舎宗に関連するものと推定されるが，断片であるため詳細については明らかでない。

（6）　□

ＳＤ215A東から出土。四辺とも損傷し，腐植も著しいので，原形は不明であるが，現状では長さ6.5cm，幅3.9cm，厚さ0.3cm。墨痕はかなり明瞭であり，現状では「命」字に近似すると考えられるが，断定できない。ただ，「命」字とすれば，最終画である縦棒の中位左側に横方向の点が見られるので，必ずしも重視しなくてよいのかも知れないが，なお問題が残る。

（7）

灰黒色土層から出土した。左右２片に割れ，下半部が欠損しているので，原形は明らかでないが，現存長8.9cm，幅3.6cm，厚さ0.6cmを測る。上端を谷状に切り込んでいるのは珍しく，大宰府史跡では初例であるが，これはいわゆる木簡ではないのかもしれない。肉太の墨痕はかなり明瞭であるが，肝心な部分が欠損しているので判読できない。

以上，出土木簡のうち代表的なものについて述べたが，点数が少なかったわりに重大な内容を有するものが含まれていたことは注目すべきであろう。とくに，（1）は大宰府史跡出土の紀年銘としては，現在のところ，最古のものであり，また（2）や（5）のような仏教に関連するものが見られるが，これらは府学校よりも東隣の観世音寺との親近性を示している。これらがいずれから廃棄されたかについては慎重に判断しなければならないが，11世紀代の学校院と観世音寺との境界相論ひいては大宰府条坊制における両者の境界線そのものを考える上においても十分に考慮されるべきものであろう。

木製品

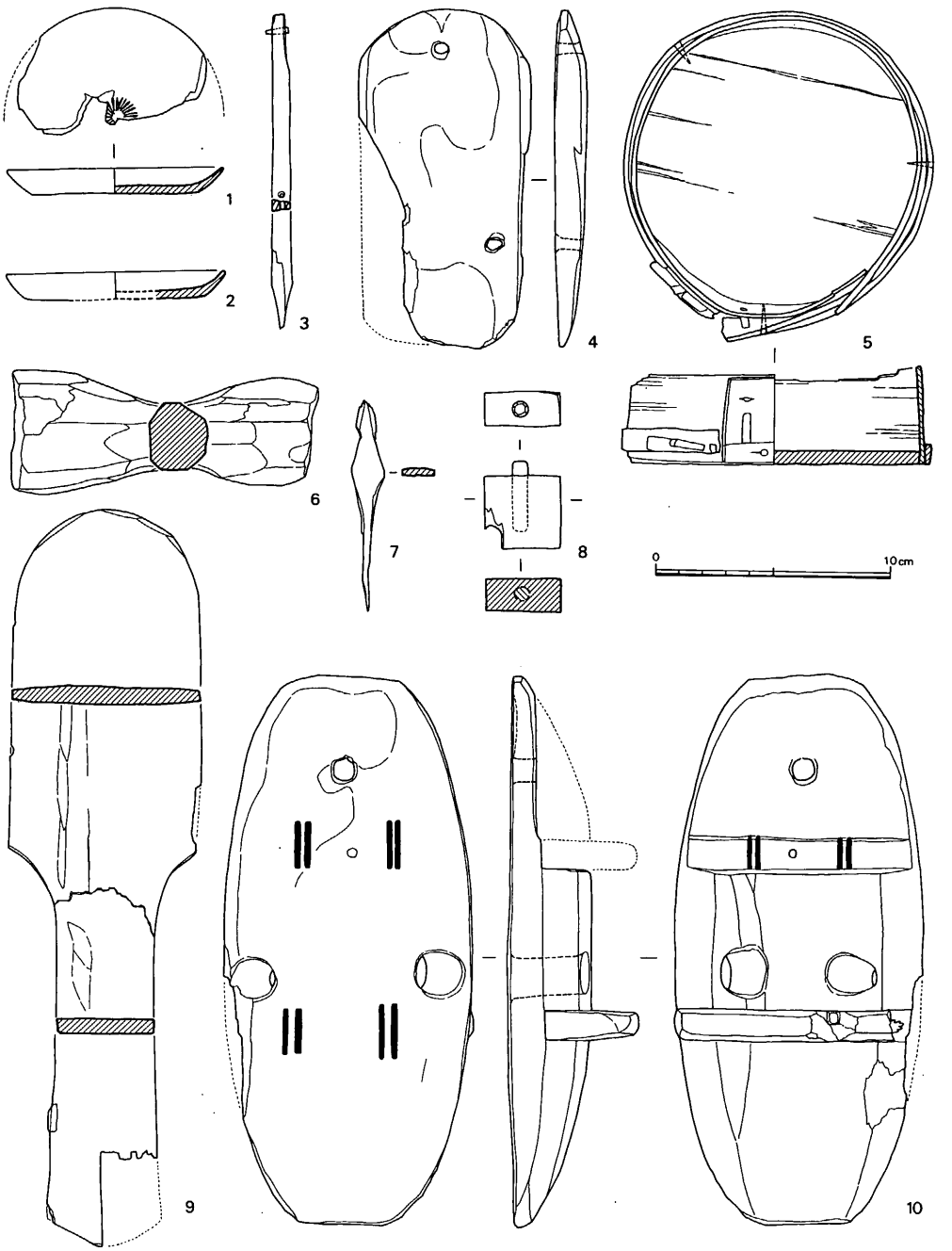
今回の調査では比較的多くの木製品が出土した。これらは調査区東側で検出した南北溝のＳＤ205およびＳＤ215A・Ｂから出土したものが多い。

ＳＤ205出土木製品（第75図，図版82）

漆器皿（１・２）　いずれも口径9.5cm，高さ1.1cmの黒漆塗りの皿である。１は内面見込み中心部に朱漆で菊花文が描かれている。いずれも横木取り。

木釘のある細板（３）　断面がやや台形をなす細板の頭部近くに，木目方向と同じに木釘をさし込んでいる。末端部は四面から削り先端を尖らす。中央部よりやや下の方に木釘と直交するように円孔を穿つ。

下駄（４・10）　小形の下駄で台の頭部は円形に作っている。台尻は両隅を切り落したような形状を呈する。歯は前後とも完全に磨滅しており，台部にも及んでいる。台の左側は一部が削り落とされている。台上面の「足ずれ」から左足用と思われる。10は針葉樹の柾目材を加工



第75図　ＳＤ205出土木製品

した差し歯の下駄である。台は小判形を呈する。台上面には前後とも歯を固定するための長さ2cm，幅0.2cmの板状楔が対をなして打ち込まれている。前歯にはさらに中央部に楔を打ち込む円形の穴が穿たれている。鼻緒孔は火箸により穿孔しており，後方の2個の孔は外側から内側に向って斜めに穿孔している。前歯は欠落し，後歯は磨滅が著じるしい。

曲物容器（5） 底板は直径12cmほどで，小形のものである。側板は高さ4cm分が残っている。重ね合せ部の一部に刻み目を入れている。下端に1cmほどの箍を巻き，3方向から木釘を打ちこんでいる。縫いは2段分の痕跡が残っている。

槌の子（6） 広葉樹を加工したもので，腐植が激しく，両端は原形をとどめないほどである。中央部は細く削り，断面は八角形を呈する。

蜥形木製品（7） 薄板を加工したもので，頭部は先端がやや尖り気味の長円形をなす。胴部は菱形をなし，尾部は中央部から末端にかけて細く削り出している。

木栓のある方形板（8） 一辺が3.3cmの正方形をなす厚さ1.5cmの厚い板材に一方の木口から木目方向に0.5cmの木栓を差し込んでいる。木栓の頭部は面取りを行なっている。

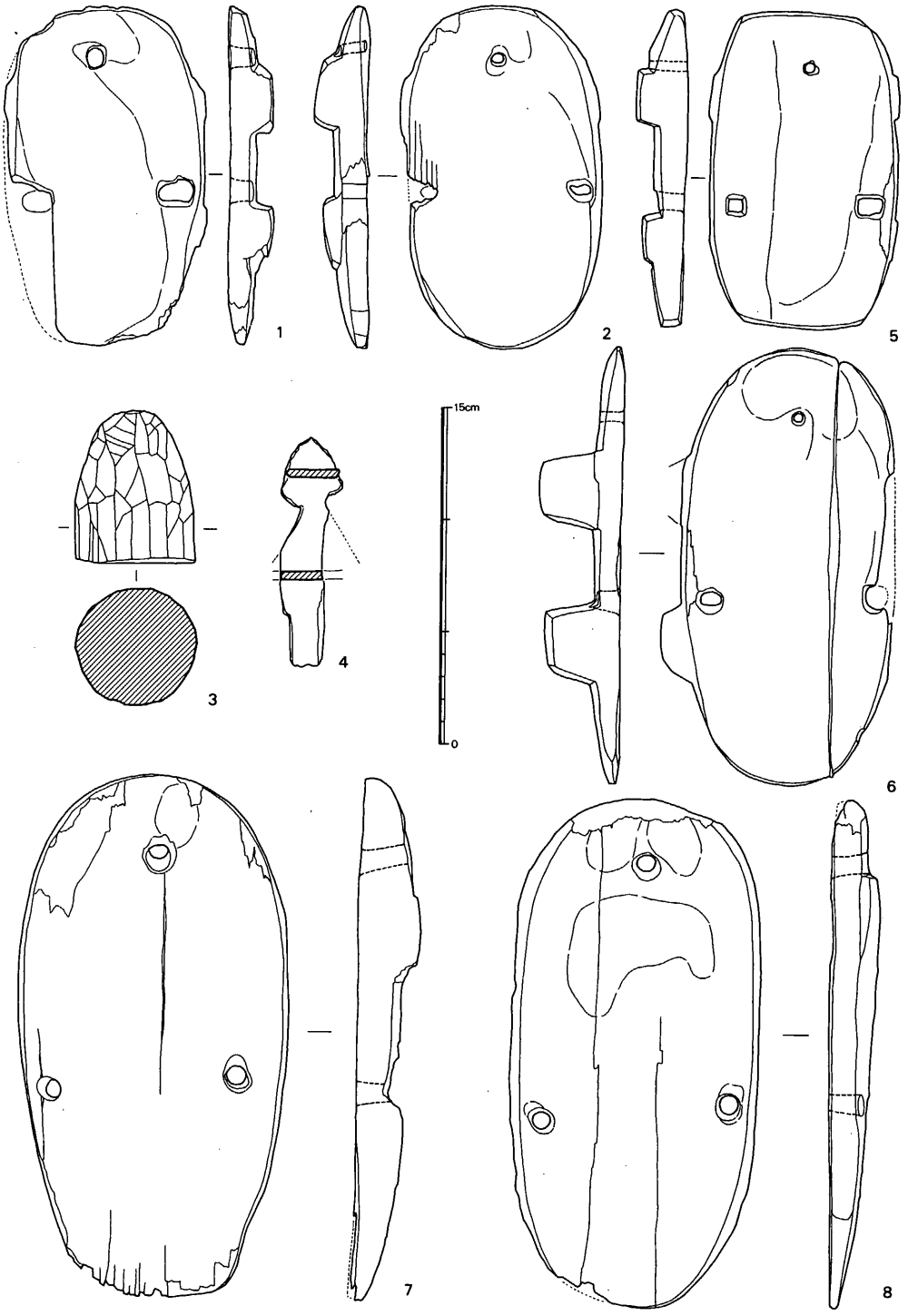
杓子（9） 大型の杓子で身の先端は半円形につくる。断面は中央部をやや厚くする。頸部は撥形に削り，柄尻をやや幅広くして，端部を圭頭に作る。頸部で折れている。

SD215A・B出土木製品（第76図，図版83）

下駄（1・2・5～8） 杉の板目材を加工した小型の下駄である。台は小判形を呈する。両者とも歯は前・後ともに均等に磨滅している。大きさ・形状からみて，両者は対をなす物と思われる。SD215A出土。5～8は，いずれも台と歯を一木からつくり出す連歯の下駄。5は小型で台頭と台尻をやや直線的につくる。後方の2孔の鼻緒孔は方形に穿っている。前後の歯は鋸びきでつくり出しており，台と歯の境にその痕跡が残っている。台よりも両側にわずかに広がる。前後ともに均等に磨滅している。SD215B出土。6～8は台の上面が小判形を呈する大型の下駄である。6は歯が両側に広がり，その下端は台幅よりも広くなる。指先部分の「足ずれ」が顕著である。SD215A西出土。7・8は杉の板目材を加工したもの。いずれも鼻緒孔は黒く焦げており，焼火箸で穿孔しているようである。7の歯は鑿で切り出したものでジグザグの痕跡が残っている。両者とも歯の痕跡をとどめないほどまでに磨滅しており，台尻までにもおよんでいる。7はSD215A東，8はSD215B西出土。

砲弾形木製品（3） 直径が5cmほどの広葉樹の心材を砲弾形に削り出した物である。先端部は小刻みに丸く削っている。末端は直に削り落としている。SD215A出土。

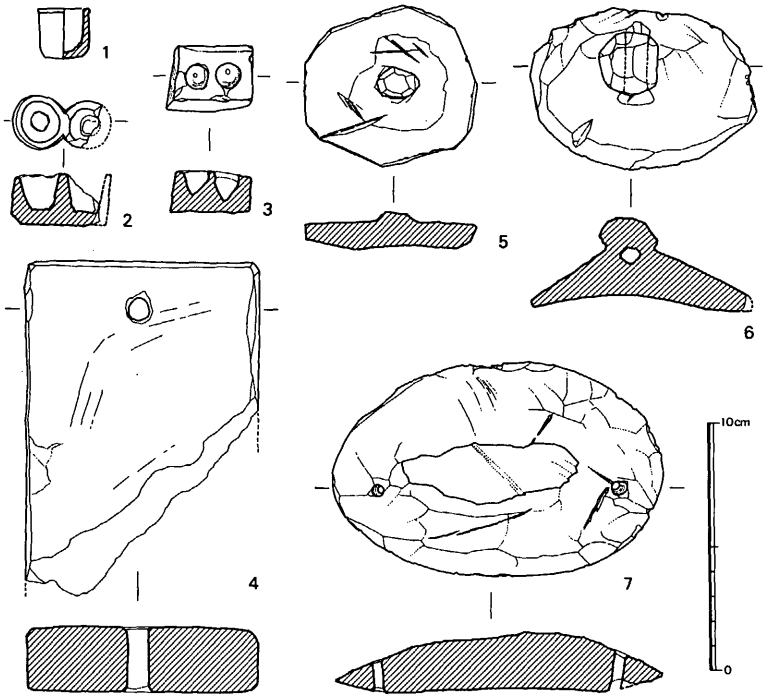
人形様木製品（4） 杉の柾目板を加工した物である。頭部は先端を尖り気味にし，側縁部は表裏から面取りを行っている。頸部の抉りは左右で均衡を欠いている。肩部はなで肩状に斜めに削る。体部の左右及び末端部はともに割れているため幅・長さとも不明である。SD215A出土。



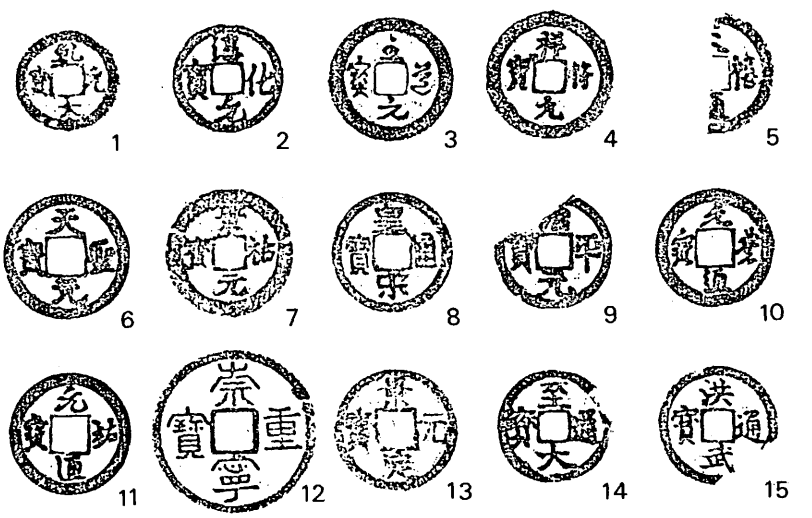
第76図　ＳＤ215Ａ・Ｂ出土木製品

石製品（第77図，図版84）

石鍋片の再加工品が多い。１は口径2.1cm，器高2.0cm，底径1.5cmを測る。口縁部のみが六角形を呈し，厚さ0.2cmの縁取りを有し，その下端を弧状に抉っている。外体部および底面を丁寧に削り調整を行っている。内面調整はやや粗い。ＳＤ205出土。２は１を横に連結した形状を呈し，内面はやや粗い削り調整である。３は方形状の台に宝珠形を思わせる穴が２ヶ所穿たれている。穴の口径0.9cm，深さ1.0cm～1.2cmで，上面は磨滅している。４は札状の石板で長方形を呈し，短辺9.3cm，長辺13.4cmである。短辺中央部に径 0.8cmの孔が穿たれており，何かにぶら下げたものであろう。表裏共に磨滅しており，一部に煤が付着している。５は



第77図　各遺構出土石製品



第78図　銅銭拓影

円形状を呈する滑石製品で，上部には円形の平坦な撮が付く。底部中央は未調整で,煤が付着している。6は蓋状を呈する滑石製品で，径2.0cm～2.5cmの丸味を有する撮が付く。撮の下方には径 0.7cmの孔が穿たれている。7は長円形を呈する円盤状の製品で，周囲は薄くなり，やや尖り気味である。両端から約1.5cmのところに，径0.4cmの孔が穿たれている。上部中央は未調整で煤が付着しており，他は全て削り調整によっている。

挿図番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15			
出土遺構・層位＼銭名	乾元大寶	淳化元寶	至道元寶	祥符元寶	天禧通寶	天聖元寶	景祐元寶	皇宋通寶	治平通寶	元豊通寶	元祐通寶	崇寧通寶	景定元寶	至大通寶	洪武通寶	寛永通寶	その他	合計
ＳＤ２０５Ｂ			1															1
ＳＤ２０５	1																	1
ＳＤ２０５（黒灰色砂質土層）						1		1			1		1					4
ＳＤ２０５（茶黒土層）		1		1		1												3
ＳＫ１９５２							1											1
ＳＫ　９７３					1													1
ＳＸ１９３４											1							1
暗灰色土層									1					1				2
黒色土層											1	1					1	3
その他				1						1					1	1	1	5
合計	1	1	1	2	1	2	1	1	1	1	3	1	1	1	1	1	2	22

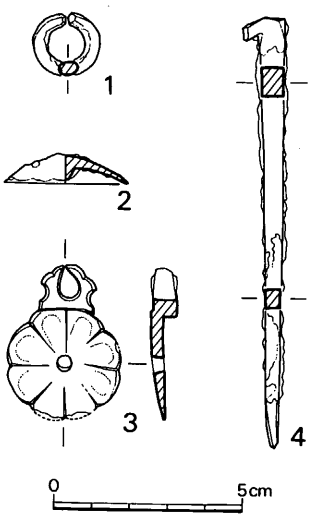
銅銭（第78図，図版84）

銅銭は，天徳２年（958）に鋳造された最後の皇朝十二銭である乾元大寶および淳化元寶から洪武通寶までなどの15種，19点が出土し，このほか寛永通寶が１点，破損のために銭種を判別ないし断定できないものが２点出土した。乾元大寶の大きさは垂直が2.06cm，水平が2.06cm，厚さが0.145cmである。これらの銭種，出土遺構・層位および各遺構，層位別の出土点数については表に示し，各銭種の拓影を第78図にかかげた。その排列は初鋳年代順であるが，寛永通寶は図から割愛した。

金属製品（第79図，図版84）

金環（１）　銅環の上に金メッキしたものである。外径1.8cm，内径1.0cm，ＳＤ205Ａ出土。

銅製飾金具（２・３）　２は笠形状の銅製飾金具である。全体に脆く，周囲は欠損している。裏面中央部には何かに装着したと思われる凸帯がある。復原径3.3cm，高さ0.8cmである。３は八弁菊花文を呈する円板とその上端部に雲形状を呈する吊部とを連結した銅製飾金具である。菊花文中央部には径 0.4cmの鋲孔を穿っている。裏面は吊部下端に段が認められる。ＳＤ215



第79図　金属製品実測図

A出土

釘（4）　全長11.4cm，上端部幅0.85cm，下端部幅0.5cmの角釘である。頭部は強く打ちつけたためか潰れている。鉄製。　ＳＤ205Ｂ出土。

小　結

本次調査では，学校院関係の建物跡は発見されなかった。しかし，当初からこの地域に建物は配されなかったとは断定できない。第９次調査検出の掘立柱建物ＳＢ200の柱穴の掘り方は浅く，当該地が相当削平されていることを示している。今回の調査地域は第９次調査地域よりもレベルが低く，掘立柱建物が往時にあったとしても，既になくなっている可能性を有しているからである。

次に溝ＳＤ205・ＳＤ207・ＳＤ215Ａは第9次調査時の成果に加えて，新知見を得たので，若干の考察を行う。

ＳＤ205はＳＤ205Ａの検出により，その開鑿は平安時代中頃まで遡ることが明確になった。さらに推察するならば，この溝は学校院と観世音寺の境界として，自然流路を整形し，南北に流れる溝として奈良期につくられた可能性をも有している。ＳＤ205Ａを切って茶黒色土層が堆積し，ここから出土する遺物は10世紀から11世紀頃のものが多い。また12世紀代に属する遺物は少ないが，出土した。しかし，これらの遺物はＳＥ1920との関係から混入と考えられる。このような遺物の出土状況からSD205Ａ埋没後別の場所に流れを変えたのではなく，ＳＤ205Ａの一部を残して依然として同一場所を流れていたと考えられる。この茶黒色土層が堆積した後に，ＳＤ205の一部はＳＤ215Ａに移る。この時点でＳＤ208が開鑿され，ＳＤ215Ａと平行するように走る。ＳＤ205のような大溝がＳＤ215Ａのような小溝に全ての流れを移したとは考え難く，ＳＤ205の流れの本体は東側へ移動したものと考えられる。この後，ＳＤ215ＡはＢに移り，東にＳＤ205ＢからＣ・Ｄと順次東へ移動して行く。

これらの結果から，大宰府政庁中軸線と観世音寺仮中軸線から得られた１町約 108.4m の数値をもとに，政庁方４町，学校院方２町とする従来の考え方では学校院と観世音寺の境界はＳＫ1945の西端付近を走ることになり，ＳＤ205Ａとの関係がつかめない。ＳＤ205Ａは明確ではないが，検出時の東肩付近の数値は政庁中軸線から東へ約450m になる。つまり，１町約108.4ｍとした場合，学校院は方２町といった数値ではうまくのらず，と同時に，観世音寺は方３町とする復原も無理であり，それよりも狭くなる。

これらのことから，政庁・学校院・観世音寺の地割りは，１町（約108.4）をもとにした復原とは別に，新たなる視点で復原を試みる必要があり，今後の大きな課題となる。



第80図　第75次発掘　査遺構配置図

4　第75次調査

本次調査地域は昭和49年に調査を実施し，掘立柱建物２棟を検出した第32次調査地域の北側部分にあたり，また柵列に囲まれた掘立柱建物群からなる月山東官衙地区に南接する。したがって，今回の調査では遺構の有無を確認することはもとより，第32次調査を含めて考えられる日吉地区官衙を解明する手掛りを得ることを主たる目的とした。

条坊復原案によると，この地は左郭五条二坊に相当する。地番は筑紫郡太宰府町大字観世音寺字日吉254—1である。

調査は，昭和56年2月24日に開始し，同年５月１日に終了した。調査面積は約960㎡である。

検出遺構

床土の下がすぐに花崗岩のバイラン土であり，また既に大きく削平されていた。遺構は極めて希薄で，掘立柱建物４棟，柵列１条，それに土壙を検出しただけであった。

掘立柱建物

ＳＢ1990　発掘区南端中央部から西にかけて検出した３間×９間の建物である。南側桁行部分と西側の梁行部分は発掘区域外になる。桁行両側４間分（東側の１間分は未発掘）の柱間は各々2.55m，中央５間分の柱間は各々2.7m である。梁行の柱間は各々2.2m である。北桁行部分の柱穴のうち東北隅のものを除くと，全て石を詰めて，柱の礎板としている。中央柱間部分には別の浅い穴があり，それを切っている。この穴の性格は不明。また，ＳＡ1999と切り合っているが，その部分に別の撹乱穴があり，相互の関係は不明瞭であるが，ＳＢ1990がＳＡ1999を一部切っていた。南へ拡がるＳＸ1993，ＳＸ1989に切られている。

ＳＢ1995　発掘区南西部で検出した。さらに発掘区の南へ延びるため，桁行は明らかでない。梁行は３間で，柱間は約2.0m 等間である。礎板として石を柱穴内に詰めているものもある。ＳＢ2000，ＳＸ1992を切り，ＳＢ2001，ＳＫ1991に切られている。

ＳＢ2000　発掘区中央で検出した。３間×９間の建物である。桁行の両側４間分の柱間はそれぞれ2.4m，中央部分の柱間と梁行の柱間はそれぞれ2.2m である。ＳＢ1990とは逆に中央５間分が狭くなっている。柱穴に石や瓦を敷いているが，他の建物群に比べると瓦を敷いた例が多い。使用された瓦は，平瓦は縄目，丸瓦は擦り消しである。ＳＢ1995とＳＫ1991に切られる。

ＳＢ2001　発掘区東南部で検出した。梁行３間分を検出しただけである。南へ延びて南北棟になると考えられるが，南側部分の調査を俟たないと正確なる性格は明らかでない。

柵

ＳＡ1999　ＳＢ2000の西側で南北に走る。４間分を検出したが，さらに南へ延びると考えられる。柱間は2.4m 等間である。ＳＸ1993によって切られる。

出土遺物

床土を除去するとすぐに地山面になっているため，出土した遺物は少ない。

ＳＢ1995出土土器（第81図，別表）

須恵器

杯蓋（１）　身受けの返りを有するもので，天井部を回転ヘラ削りしている。

ＳＢ2001出土土器（第81図，別表）

須恵器

杯蓋（２）　身受けの返りを有するが，１に比べると大きく退化している。天井部に板状圧痕があるが，手持ちヘラ削り調整によってその大部分は消されている。

ＳＫ2002出土土器（第81図，別表）

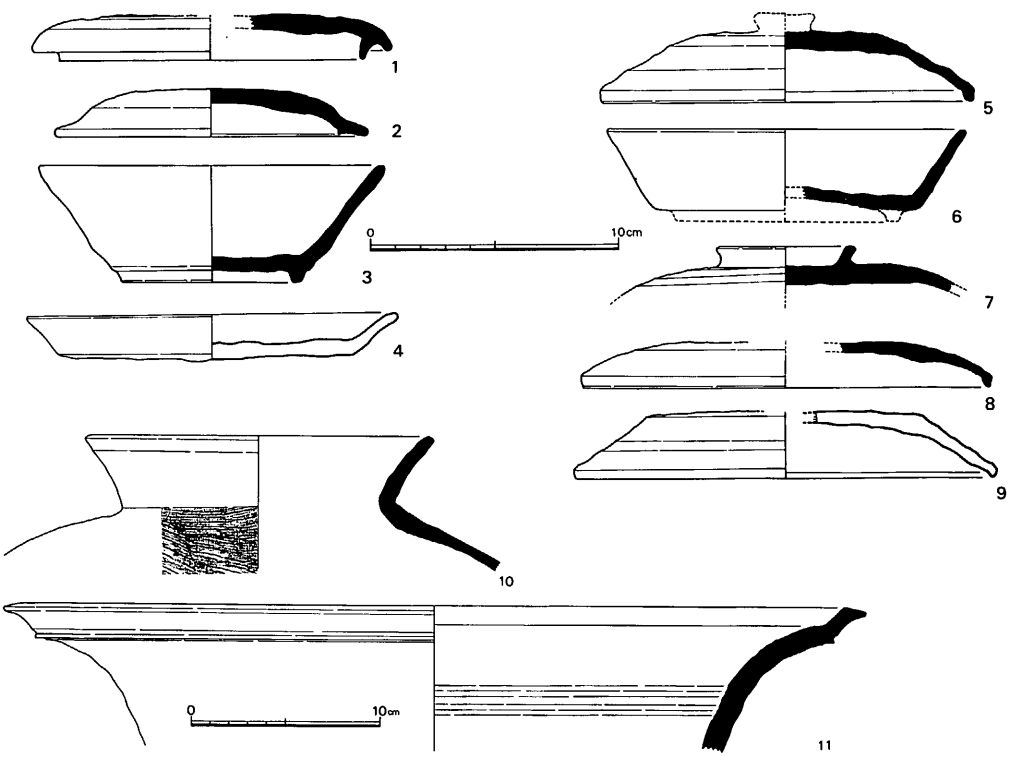
須恵器

杯蓋（５）　天井部を丁寧に回転ヘラ削りしている。

杯（６）　高台部が完全に欠落したもので，底部はヘラ切りのままである。

ＳＸ1989出土土器（第81図，別表）

須恵器



第81図　各遺構出土土器実測図

杯蓋（７・８）　７は輪状の撮を有する。天井部を丁寧にヘラ削りしているが，焼成時に灰や砂粒を被っているため焼き上がりは悪い。８の天井部は回転ヘラ削りしている。

甕（11）　口径45.6cmに復原できる広口のもので，口縁端は平坦な面をなす。頸部と口縁部との境に小さいが，シャープな断面三角形の突帯を巡らしている。内外面ともに板状工具でヨコナデ調整をしている。特に内面は強く行っているため幾重にも条線が走っているように仕上がっている。

ＳＫ1993出土土器（第81図，別表）

須恵器

杯（３）　断面四角形の低い高台と，体部が大きく外方へ開く体部からなる。ヨコナデ・ナデ調整だけである。

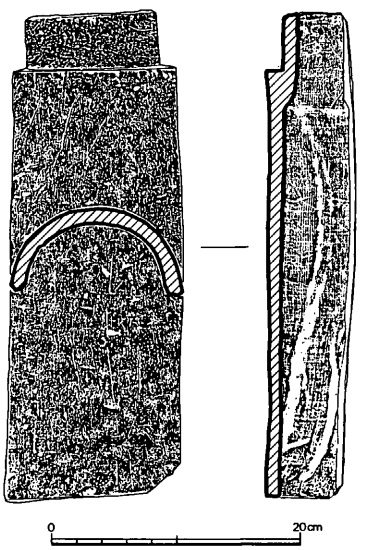
甕（９）　口径10.4cmである。体部外面に非常に小さな平行叩き目がある。内面のあて具痕はナデにより消されている。焼成は軟質で，茶褐色を呈する。

土師器

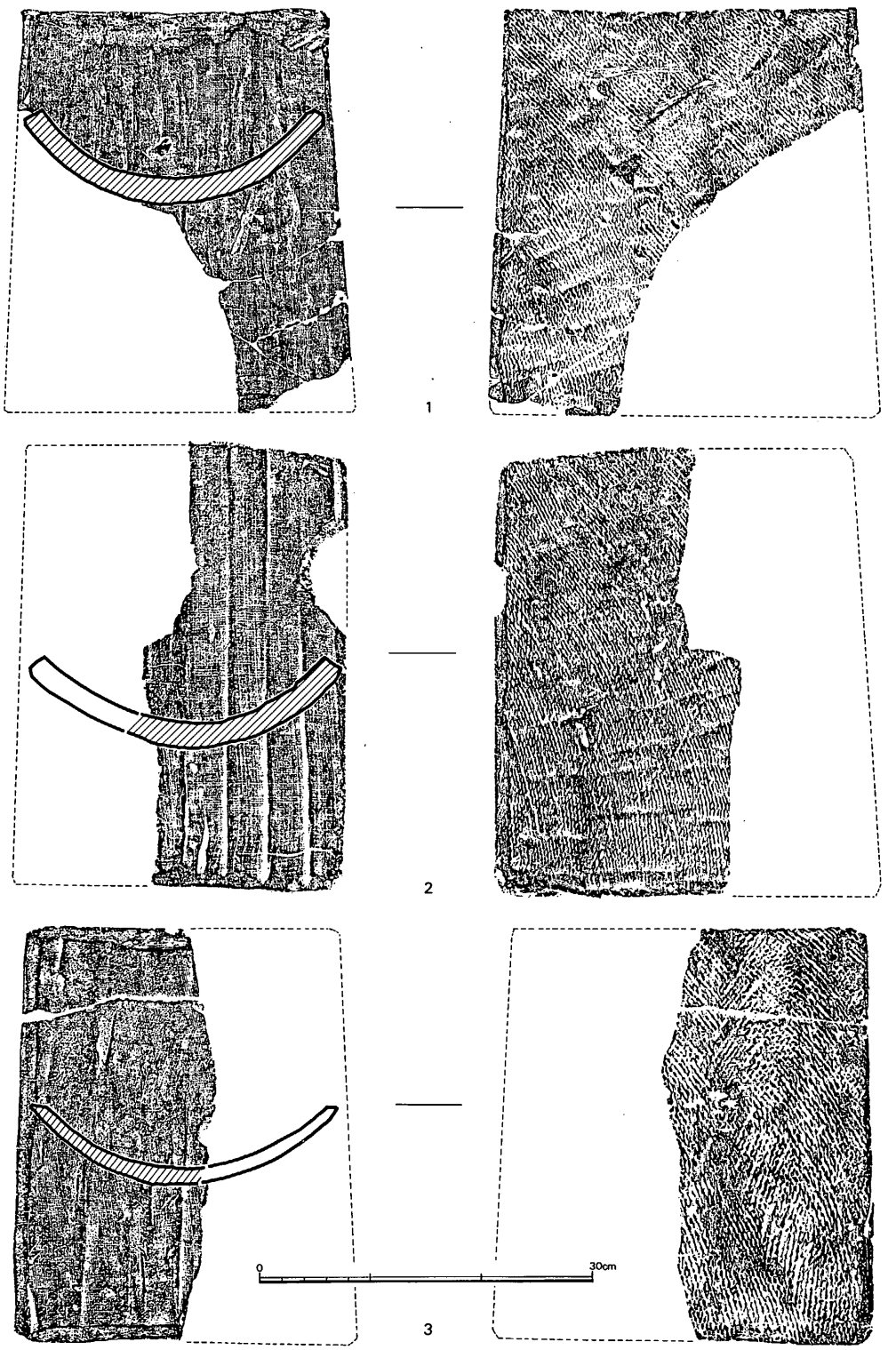
皿（４）　器面剝離が著しく，器面の調整は不明瞭で，かろうじて底部を回転ヘラ削り調整していることが知れるだけである。

瓦類（第82・83図，図版85）

この調査で出土した瓦類は軒丸瓦８点，軒平瓦４点で，量的にはきわめて少く，特に出土傾向等について述べることはできない。ただこれまでの調査結果によると，政庁の前面地域からは老司Ⅱ式の軒先瓦が比較的多く出土する傾向にあり，今回の調査における出土量はごくわずかではあるが，その傾向の一端を示しているものと考えられる。またこの調査で出土した瓦類の中には，掘立柱建物ＳＢ1990およびＳＢ2000の柱穴掘り方から検出した丸・平瓦がある。これらは柱穴掘り方の底部近くに礎板状に敷かれたものである。丸瓦は玉縁付丸瓦で粘土紐巻きつけ技法によるものである。凸面の叩き目は横方向のナデによって消している。平瓦はすべて粘土紐による桶巻き技法によるもので，凸面の縄目叩きは円弧を示すものと，たすきがけに叩打した物とがある。両側縁は凹面・凸面ともに面取りするものと凹面のみを面取りするものとがある。両端部は凹面のみ面取りを施している。また四隅をわずかに切り落すものがある。この平面には縦方向に半截したものが数点あり，割熨斗の可能性がある。



第82図
ＳＢ1990柱穴掘り方出土丸瓦拓影・実測図



第83図ＳＢ1990・ＳＢ2000柱穴掘り方出土平瓦拓影・実測図

小　結

本次調査で検出した遺構は，第32次調査で検出したＳＢ591・596と共に，日吉地区官衙として使用されていた可能性が濃厚になった。そこで，検出した建物を検討することによって，まとめとする。

(1)　切り合いと方位からみた各建物の時期建物の方位を知ることができるＳＢ1990，ＳＢ2000と，ＳＡ1999をあわせて検討する。ＳＢ2000は北側の桁行部分がよく柱位置を知れる。南側の桁行方向と合わせてその方位を求めると，グリッドノースよりも西へ41′43″振っている。これを直角にし，梁行方向を求めると検出柱位置と合致する。ＳＢ1990は柱位置を直接知りえないが，ＳＢ2000をもとに建物方向を求めると，ＳＢ2000の方向とうまく合う。多少のずれがあったとしても，大略ＳＢ2000と方位を合わせているといえる。また，ＳＡ1999はＳＢ2000の方向と一致する。そこで，ＳＢ2000はＳＡ1999を伴ってもっとも古く，また方位を重視すると，ＳＡ1999を廃した直後にＳＢ1990が造営されたと考えることができる。建物相互の切り合いは遺構の項で述べたのでここでは略す。

以上を整理すると，次のようになる。

ＳＢ2000 ↗ ＳＢ1990
ＳＡ1999 ↘ ＳＢ1995→ＳＢ2001

最も古期に属するＳＢ2000とＳＡ1999は西へ41′43″振っていることは前述した。朝堂院形式として初めて成立する政庁第２期の中軸線が西へ34′24″振っていることが注意される。若干のずれがあるにしても，政庁中軸線と相互関係にあることが方位をもとにすると指摘できる。

(2)　梁行３間の建物

検出した建物の梁行は全て３間である。この梁行３間の建物は大宰府史跡のこれまでの調査では例が少なく，わずかに２棟だけである。第15次調査（政庁回廊東北隅）で検出したＳＢ360と第36・77次調査（学校院東辺部）で検出したＳＢ700である。ＳＢ360は回廊ＳＣ340の下位にあり，回廊の成立時期を８世紀初頭と考えており，この建物は遅くともその頃までに造られたことが知れる。ＳＢ700では柱穴から長頸壺が出土しており，その特徴から８世紀後半代と考えられる。

ＳＢ2000の柱穴から出土した土器や瓦は政庁第２期開始期とあまり隔らない時期が考えられる。また，ＳＢ1990を切っているＳＸ1989・1993出土遺物は８・９世紀代の特徴を有するものばかりである。このようにみてくると，梁行３間の建物群は古い時期に位置付けられる。

以上の(1)，(2)の特徴を合わせ考えると，日吉地区建物群は政庁第２期の成立期に接した時期に建物がつくられ始め，その方位から政庁建物群と密接な関係を有する「官衙」と考える。

5　第76次調査

本次の調査地点は，蔵司から約 200m 隔った南方に位置し，条坊復原案による右郭の六条二坊にあたる。蔵司の前面の県道山家一関屋線の南側では，昭和46年度に実施した第14次（大楠地区）・第17次（不丁地区）調査で，南北方向の大溝および礎石建物等が検出され，この地域にも官衙区域が広がっていることが判明したことから，この一帯の関連遺構の究明が急がれていた。現在進行中である太宰府町による土地区画整理事業の進展は，今回の調査の一つの大きな契機ともなった。

今回の調査の主たる目的は，本調査地が先の第14次調査で検出した南北方向の溝の延長線上にあたることから，この溝の行方を確認することにあった。発掘調査は約1000㎡について実施した。昭和56年４月１日に着手し，９月中旬に表土を残して一応埋め戻しを終了した。地番は太宰府町大字観世音寺字大楠325番地である。

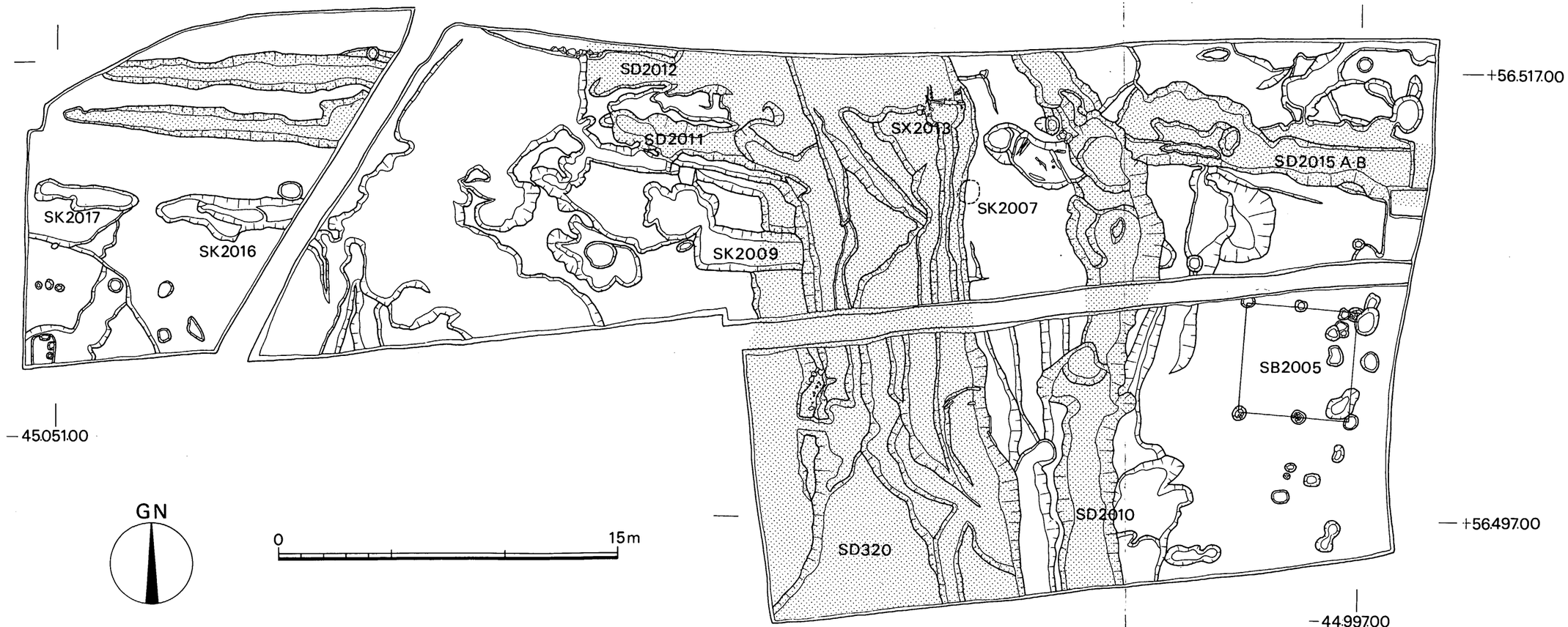
調査の結果，第14次調査で検出した大溝は，この地域までほぼ真南に延びていることが確認されるとともに，新たに奈良期の東西溝１条が検出されたことにより，東側地域に何らかの遺構の存在の可能性が指摘されるに至った。

検出遺構

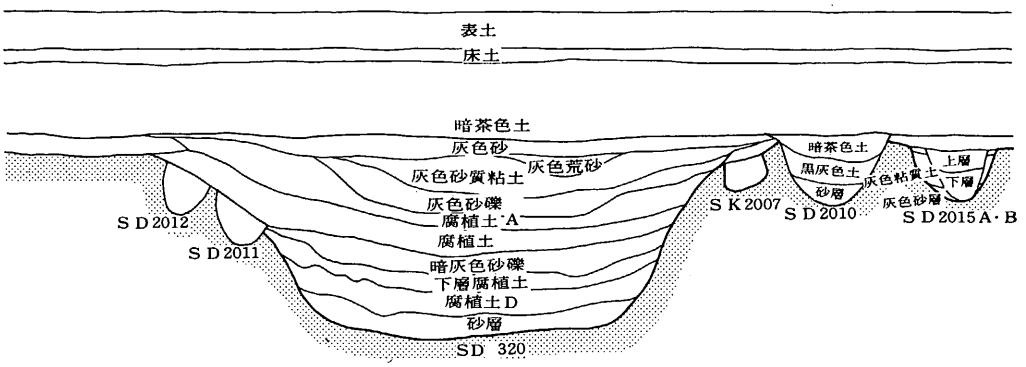
調査の結果検出した主要な遺構は，建物１棟，溝５条，土壙４である。溝５条のうち，１条は第14次調査検出の大溝（ＳＤ320）と連続するものである。これらは全て奈良から平安期に属し，中世以降の遺構は検出されなかった。

土層の関係

県道から南側の一帯は，県道から約 300m の所をほぼ東西に流れる御笠川に向って，地形的にゆるやかに下降している。本調査地の約15m 南側では約２m の段差がみられるが，これは当時の御笠川の氾濫原であったことを示している。この段差が古代の流路であったかは定かでないが，本調査地が現在の流路とも余り隔らない距離にあることからすると，南北溝（ＳＤ320）はおそらくこの御笠川に流れこんでいた可能性は強い。今回検出したＳＤ320 の溝肩が第14次調査に比較して不明確で蛇行しているのはこの地域が排水口に近いため，幾度かの氾濫を受けたことに起因している。発掘区の東・西端部付近では表土・床土を除去後，わずかの暗茶土層を除くと地山面が露出するが，この地山面はＳＤ320 に向ってゆるやかに下降し，溝上では暗灰色土，茶灰色土，暗茶色土の３層が約70cmの厚さで堆積していた。これら３層はＳＤ320 をはじめとする他の主要な遺構が完全に埋没し，その機能をなくしてしまった後堆積したものであり，暗茶色土層中には中世以降の遺物は認められなかった。また最も新期の遺構であるＳＤ2010はＳＤ320 廃絶後に造られた溝であるが，この埋土の上層には暗茶色土層が入る。



第84図　第76次発掘調査遺構配置図



第85図　層位模式図

ＳＤ320 の埋土は砂層・砂礫層・腐植土層が交互に堆積した様相を呈している。そのことは幾度かの流れおよびその溜りの状況を示している。この溝からの出土遺物は多量にのぼり，そのとり上げについては層序に従って細かく分けたが，遺物の項では，埋土を大きく上層（灰色砂層・灰色荒砂層・灰白色荒砂層・灰白色砂質粘土層・腐植土A層・腐植土層），中層（暗灰色砂礫層・下層腐植土層），下層（腐植土D層），最下層（砂層）の４層として記述した。

上層埋土の腐植土層を除去後西方から延びてくる２条の溝ＳＤ2011・2012が検出された。ＳＤ320 の東肩部で検出したＳＫ2007はＳＤ320 の流れによって攪乱を受け，層位的には明確にし得なかったが，ここからは奈良期に属する土器片がまとまって出土した。東西方向のＳＤ2015Ａ・Ｂは暗茶土層を除去後に検出したもので，ＳＤ320との層位的新旧関係はＳＤ2010の流れによって攪乱されているため判然としない。この溝からは奈良期に属する多量の土器が出土しているので，ＳＤ2015とほぼ同時期に存在したと考えられる。ＳＢ2005については他の遺構との直接的な層位関係をつかめないが，暗茶土層除去後に検出されたものであることからすると，中世以前に存在したものである。

建　物

ＳＢ2005　発掘区の東南部で検出したもので，上面を削平され，柱穴の残存状態は悪く，規模については不明であるが，東西２間分，南北１間分を検出した。東西の柱間は2.40m （８尺）等間，南北は4.80m （16尺）を測る。柱穴底部には根石状の小石，瓦，塼が入っていた。掘り方は径50cmの円形を呈する。

溝

ＳＤ320　発掘区のほぼ中央部で検出したもので，前記の第14次調査の南北溝の延長である。溝肩はやや不明瞭で蛇行しているが，幅約13.0m，深さ約1.60m を測る。埋土は砂層・砂礫層・腐植土層が交互に堆積している。南半分の東肩にわずかに箘が残存し，また，北東隅部で丸太と杭、箘が組まれたＳＸ2013が検出された。

ＳＤ2010　ＳＤ320 の東側に位置する南北方向の溝で，蛇行した流路をとっている。ＳＤ320 の廃絶後に造られ，溝肩は明瞭でないが，幅約2.5m ～4.0m，深さ約0.40m ～1.60m である。溝底は南へいくに従い下がっている。埋土は暗茶土・黒灰色粘質土・砂層の３層に分かれる。

ＳＤ2015 Ａ・Ｂ　発掘区の東北部で，ＳＤ2010の東側にある東西方向の溝である。同位置で重複する溝で，新・古期の２時期に分けたが，出土遺物には時間的差違がほとんどみられないので，短期間に存在した溝と考えられる。溝幅はＡ・Ｂとも約3.0m で，深さは古期溝(Ａ)は約0.80m，新期溝(Ｂ)は約0.60m である。

ＳＤ2011　ＳＤ320 の西側に位置する東西方向の溝である。発掘区の西端からＳＤ320 に流れ込む形となっている。溝は西端部で自然消滅しているが，これはこの地域の遺構面が一段高くなっており，上面を削平されたためと考えられる。幅約1.0m～2.0m，深さ約0.45m で，ＳＤ320 と交わった部分では，底部がわずかに残る程度である。

ＳＤ2012　ＳＤ2011の北側 1.5m を平行に走る東西方向の溝である。幅，深さともＳＤ2011と同規模のものである。これはＳＤ2011と同様ＳＤ320 に流れ込んでいる。

土　壙

ＳＫ2007　ＳＤ320 の東肩にある径約 1.0m のほぼ円形を呈する土壙で，上面はＳＤ320 によって削られているが，ここからは奈良期に属する土師器・須恵器などがまとまって出土した。

ＳＫ2009　ＳＤ320 で検出したもので，東側はＳＤ320 によって切られているため全体の形状は不明であるが，東西に長い土壙である。長さ 5.0m，幅 2.0m，深さ約 0.3m を測る。時期的にはＳＤ2011・2012とほぼ同時存在のものであろう。

ＳＫ2016　発掘区西端部付近で検出した東西に長い土壙である。大きさは長さ6.5m，幅1.5m，深さ約0.3m のものである。ここからは若干の土器片が出土した。

ＳＫ2017　ＳＫ2016の西側で検出したもので，規模は長さ4.5m，幅1.5m，深さ約0.2m の浅い土壙である。若干の土器片が出土した。

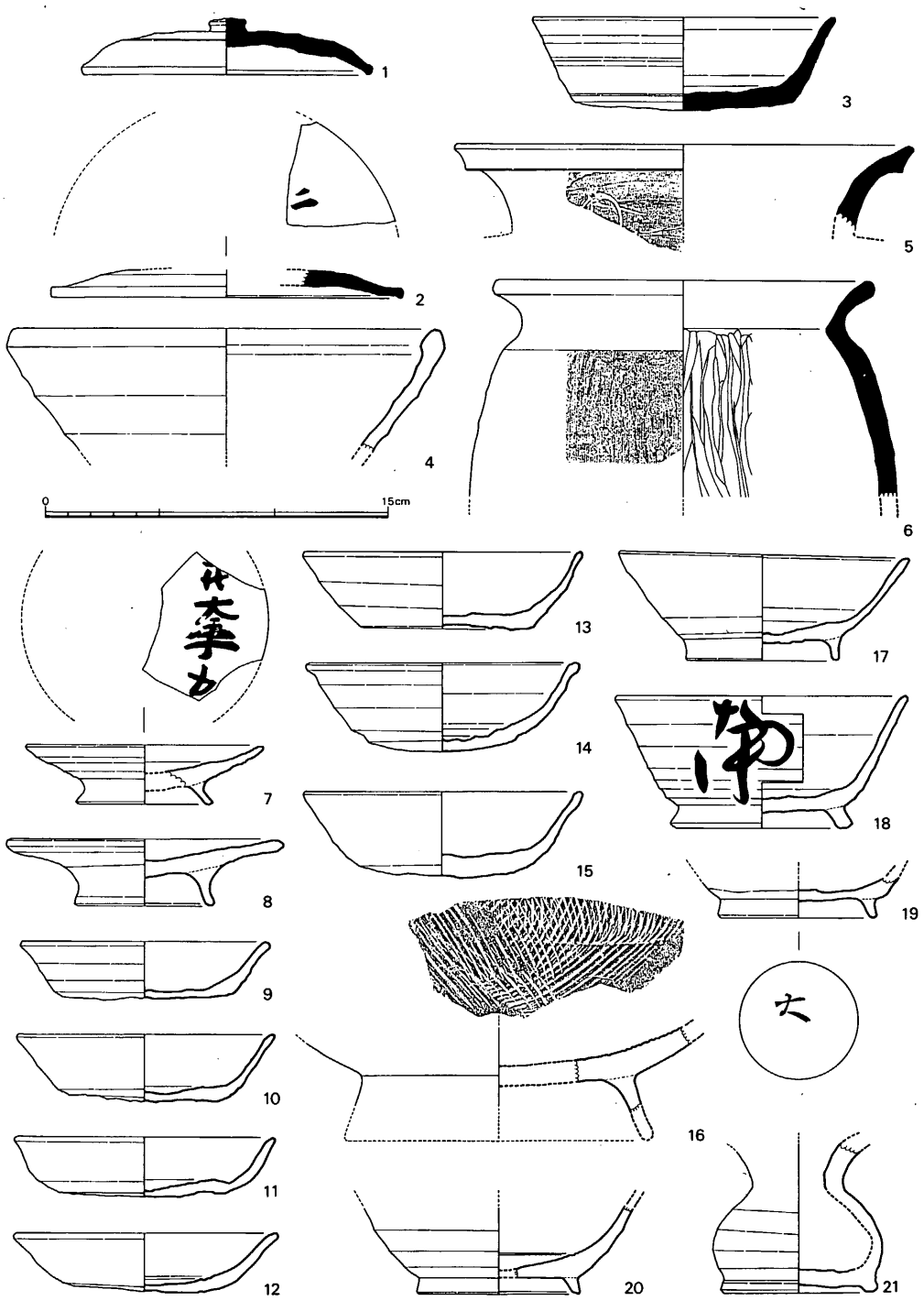
ＳＸ2013（木組遺構）　ＳＤ 320 の東北隅部で検出した。これは溝の底部近くに設けられている。溝肩から約1.0ｍのところに肩に平行する形で杭が打たれ，それには自然木の小枝で簀を組んでいる。この簀は約1.2ｍ分検出したが，これはさらに北側にのびている。この簀と直交する形で，径20cmの自然木の丸太を置き，両端を杭で固定している。丸太の下には20～30cm の石が置かれて，その丸太を支えている。その性格については不明である。

出土遺物

ＳＤ320 出土土器（第86～90図，別表，図版86～88）

前記したように，埋土を大きく４層に分け，それに従って記述する。

上層出土土器



第86図　ＳＤ320上層出土土器・陶磁器実測図（１）

須恵器

杯蓋（1・2）　器高がやや高くなるもので天井部はヘラ削りし，体部との境はそれほどの稜を有さない。口縁端部は断面三角形をなすが，鈍く丸味を帯びる。2は小片であるが，天井部に「二」の墨書がある。

杯（3）　底部はヘラ切りのみで，未調整である。直線的にのびる体部は口縁を若干外反させる。体部中位に浅い沈線状のものがみられる。

甕（5・6）　5は口縁部片で，外反する口縁は端部近くで肥厚させる。外面の頸部から口縁部にかけてヘラの陰刻がある。6は胴の張らない長胴のもので，「く」字状に外反させた口縁部を肥厚させ，端部は丸くおさめる。体部の外面に平行叩きがあり，口縁部はヨコナデで，体部と口縁部の境には鈍い稜をもっている。内面は上方への削りがみられる。

その他に，内面の叩きに例の少ないものが1点ある。同心円文の叩きであるが，その中心に文字様のものがある。外面は正格子の叩き目を有する(図版86のb)。

摺鉢　円板状の底部に逆円錐形の体部がつくものである。底部と体部の一部が残る。底部の内・外面には径 0.3cm前後の刺突された穴がある。底部復原径12.6cmである（図版86のa)。

須恵質土器

鉢（4）　復原口径18.4cm。斜め外方にのびる体部は口縁部でわずかに内弯し，肥厚させる。内外面ともヨコナデであるが，内面は摺ったため器面がなめらかになっている。

土師器

皿c（7・8）　口径10.4cm～12.0cm，器高2.6cm～2.9cm。高台は外に開き，8は器肉が厚く，口縁端部は厚く丸味をもっている。7の内面には口縁に沿って「□大□□(半カ)」の墨書がある。

杯（9～13）　口径10.9cm～12.1cm，器高2.5cm～3.3cm，底径6.6～7.7cm。13を除いて他はヘラ切りで，内底はナデ調整。外底に板状圧痕を有する。13はやや大形でヘラ切り。内底のナデ調整は行なわない。

椀（14・15・17～19）　14・15は無高台の椀で，口径12.0cm・12.2cm，器高3.7cm・3.8cmである。いずれもヘラ切り。内底はナデ調整。15は板状圧痕を有する。17～19は高台を有し，口径12.7cm～12.8cm，器高4.9cm～5.8cm。17は直立する高台で，内底はナデ調整し，外底には板状圧痕を有する。18は外に開き，体部から口縁部へは直線的にのびる。体部の外面には「南」の墨書がある。19は底部片で，外底に「大」の墨書がある。

鉢（16）　高台を有する鉢の破片である。全形を知り得ないが，内面に下ろし目がある。

青磁

壺（21）　越州窯系青磁で口縁部を欠失しているが，いわゆる唾壺である。低い高台の端部に7個の目跡がある。体部の中位までをヘラ削りしている。内外面ともに淡青色の釉が施釉されている。胎土は暗灰色を呈し，緻密である。

緑釉陶器

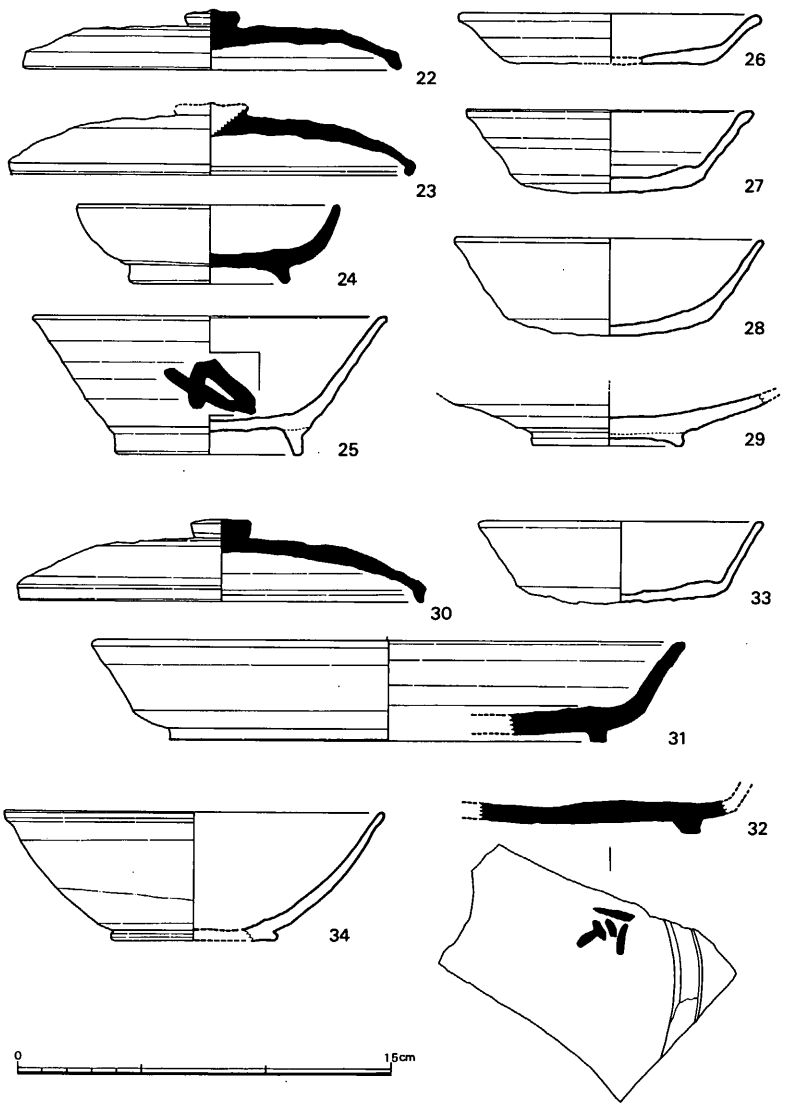
椀（20）　緑釉の椀である。体部の外面はヘラ削りしているが，他はヨコナデである。内底に沈線1条を有する。胎土は淡茶色を呈する。土師質である。釉は全面にかけられ，黄緑色を呈する。

中層出土土器

中層出土の土器を出土時の取り上げ方の違いによってさらに細分し，ここでは中層1・2として記述する。

中層1出土の須恵器

杯蓋（22・23）　口径15.3cm・16.3cmのもので，いずれも天井部はヘラ削りしているが，体部との境は余り明瞭でない。口縁の端部は丸味をもっている。



第87図　ＳＤ320中層出土土器・陶磁器実測図（2）

杯（24）　浅い杯部に低い高台を貼付する。口径16.6cm，器高 3.2cm。内底はナデ調整。外底には板状圧痕を残す。

中層1出土の土師器

杯（26～28）　口径11.4cm～12.5cm，器高2.1cm～4.0cm，底径6.9cm～8.1cm。ヘラ切り。内底はナデ調整を行なう。27・28には板状圧痕がある。いずれも底部と体部の境は明瞭でない。

椀（25）　直立する高台で，体部は高台部から斜め外方にほぼ直線的にのびる。内外面ともヨコナデで，内底はナデ調整を行う。外面体部には判読できないが，墨書がみられる。

中層1出土の灰釉陶器

皿（29）　灰釉の高台付皿である。内外面ともヨコナデで，底部中心部には糸切りの痕跡が残る。内面は施釉されているが，外面は露胎である。

中層2出土の須恵器

杯蓋（30）　器高が高く，天井部はヘラ削りで，体部との境は明瞭さを欠く。口縁部は断面嘴状を呈し，端部は尖った感じである。

杯（31・32）　31は大形の杯で，復原口径23.8cm，器高 4.1cm。底部はヘラ削りするが，体部との境は明瞭でなく，体部下位にはヘラ削りのための稜がつく。32は底部の小片で，幅広の低い高台をもつ。「今」の墨書がみられる。

中層2出土の土師器

杯（33）　口径11.4cm，器高 3.3cm，底径 8.2cm。底部はヘラ切りで，内底はナデ調整する。

中層2出土の青磁

椀（34）　越州窯系青磁椀Ⅱ－2・c類である。体部下半から底部は露胎で，内底に重ねの痕跡を残す。

下層出土土器

須恵器

壺蓋（35）　器高の低いもので，口縁部は直に引き出す。口径10.5cm，器高 2.1cm。天井部はヘラ削りで，外面には自然釉がふき出す

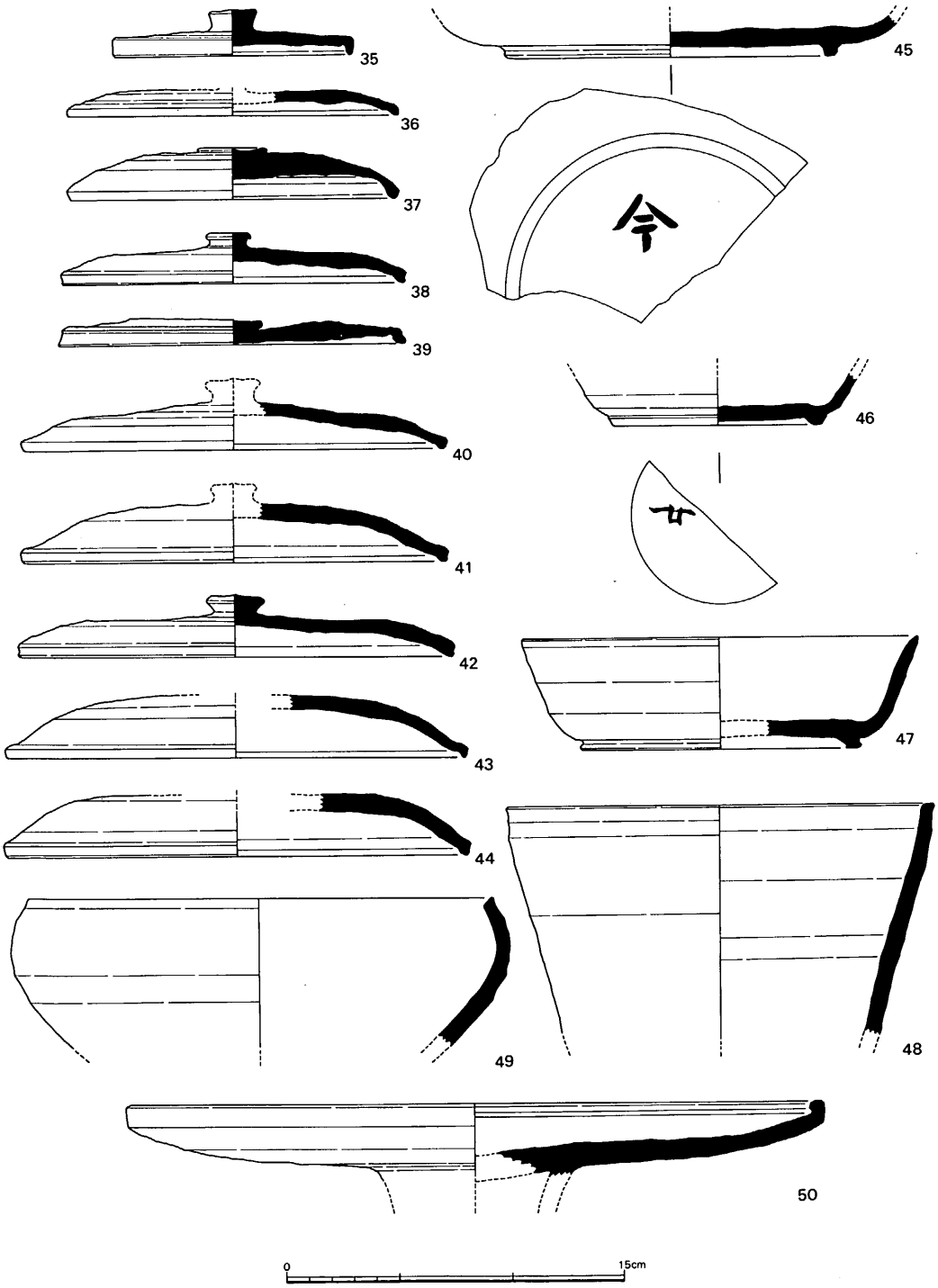
杯蓋（36～44）　口径14.2cm～15.4cm，器高1.2cm～2.3cmの小形と口径18.5cm～19.3cm，器高2.7cm～3.6cmの大形がある。天井部はいずれもヘラ削りしているが，小形の36～39は天井部と体部の境にやや明瞭さを欠く。大形のものは外面の口縁端部付近に凹線を入れ，嘴状にする。

杯（45～47）　大形の杯で，底部には断面四角形の低い高台を付ける。底部はヘラ削り調整をする。体部下位は丸味をもち，底部と体部の境は明瞭でない。外底には「今」の墨書がある。32と酷似している点が注意される。46はヘラ削りした底部に低い高台を付ける。外底には「□（廿カ）」の墨書がある。47は幅広の低い高台で，外面の底部から体部下位をヘラ削りしている。

壺（48）　広口壺の口縁部片である。復原口径19.0cmを測る。直線的にのびた口縁部を端部近くでやや内弯させ，端部は平らにする。

鉢（49）　丸底の鉢である。復原口径20.6cmを測る。体部から口縁部まで同じ器肉で，口縁部は大きく内弯し，端部は平らたくおさめる。明瞭でないが，体部の上位までヘラ削りをしているようである。

高杯（50）　杯部のみ残し，わずかに脚部の痕跡が知れる。復原口径30.8cmを測る。体部外



第88図　ＳＤ320下層出土土器・陶磁器実測図（3）

面はヘラ削り、内面底部は不定方向のヘラ削りを行ない，断面四角形の口縁部は直に上方に引き出し、端部はやや丸味をおびる。

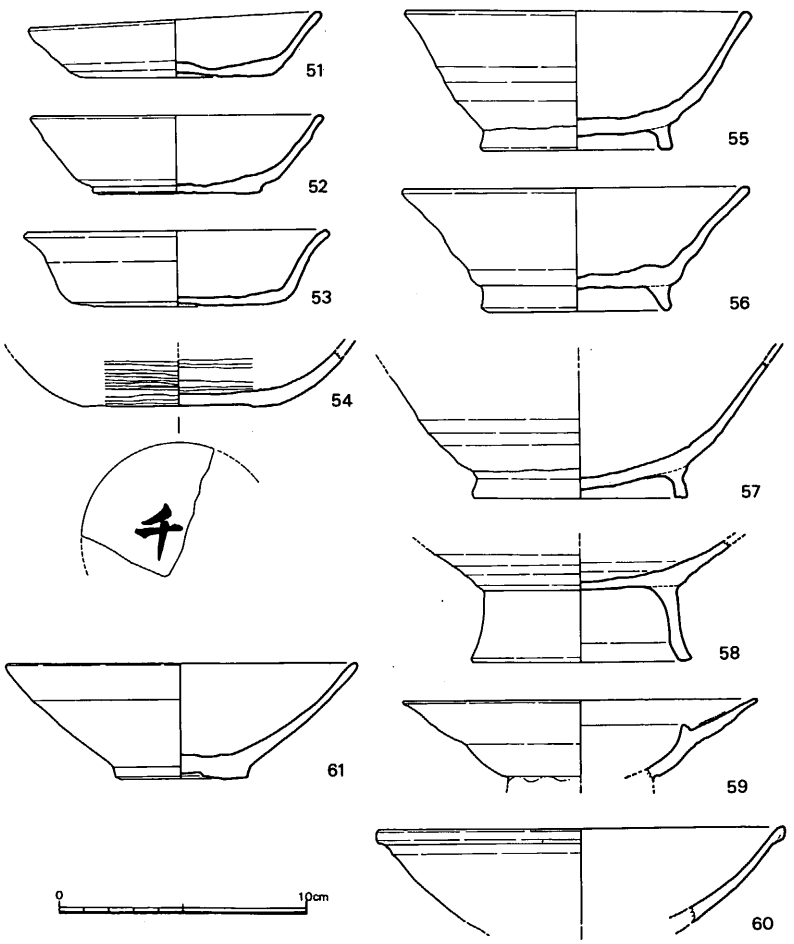
土師器

杯（51～54）　口径11.6cm～12.2cm、器高2.4cm～3.2cm，底径6.8cm～8.6cm。底部はヘラ切り、内底はナデ調整し、板状圧痕を有する。54は精製された胎土で、底部はヘラ削りし、体部の内外面および内底にはヘラミガキを施している。外底には「千」の墨書がある。

椀（55～58）　55・56の口径は13.8cm・14.0cm、器高5.0cm・5.6cm。直立する高台で、体部は高台貼付部からほぼ直線的にのびる。57は口縁部を欠失するが、やや大形のもので，内底に煤が付着している。58は高い高台を有する椀で，出土点数はきわめて少ない。

白磁

托（59）　体部から口縁部が朝顔形に大きく開く形態のもので，小片であるため全形を知り得ないが，ここでは托として報告する。体部外面の下位には高台部と思われる直の削り出しが残っている。口縁部は若干外へ屈曲するため体部の境が明瞭となっている。この屈曲部の内面には断面三角形の凸帯を削り出し，受部状にしている。胎土は乳白色の精質なもので，純白に近い釉は高台部と思われる部分を除



第89図　ＳＤ320下層出土土器・陶磁器実測図（4）

いて全面に施釉される。胎土，釉調からⅠ類に属する。

椀（60）　白磁椀Ⅰ－1類である。底部を欠損するが，口縁部は折れ曲がり，小さな玉縁となる。胎土は精良で，釉は純白に近い白色を呈する。

青磁

椀（61）　越州窯系青磁椀Ⅰ－1類。いわゆる蛇ノ目高台で，全面に施釉しているが，畳付部は削りとられているが，重ねの目跡を残す。胎土は精良で釉は灰緑色を呈する。

最下層出土土器

須恵器

杯蓋（62～71）　口径13.8cm～16.3cm，器高1.9cm～2.8cmと，大形になる69～71のように口径19.5cm～22.6cm，器高2.0cm～4.0cmがある。概して器高は高く，天井部はいずれもヘラ削りし，体部との境は比較的明瞭となる。63を除いて断面三角形の口縁部はシャープである。64の内面には口縁に沿って「上毛□」の墨書があり，また62・70の内面は器面が滑らかであり，墨の付着がみられるので硯として転用されたのであろう。71は最も大きく，外面の削りは天井部から口縁付近まで行なっている。

皿（72）　口径14.3cm，器高 2.6cm，底径11.0cmである。底部はヘラ切りで，未調整である。

杯（73・74）　断面四角形の低い高台を持ち，体部は高台貼付部から斜め外方に直線的にのびる。底部はヘラ切り未調整で，体部はヨコナデ，内底はナデ調整をする。

鉢（75）　口径29.7cm，器高 8.5cm，底径13.9cmに復原できる。平底の底部はヘラ削りし，直線的な体部はその中位までをヘラ削りし，他はヨコナデで仕上げる。断面四角形の口縁部は体部の器肉と余り変らず，直上に引き上げるために，内面には凹線が入る。

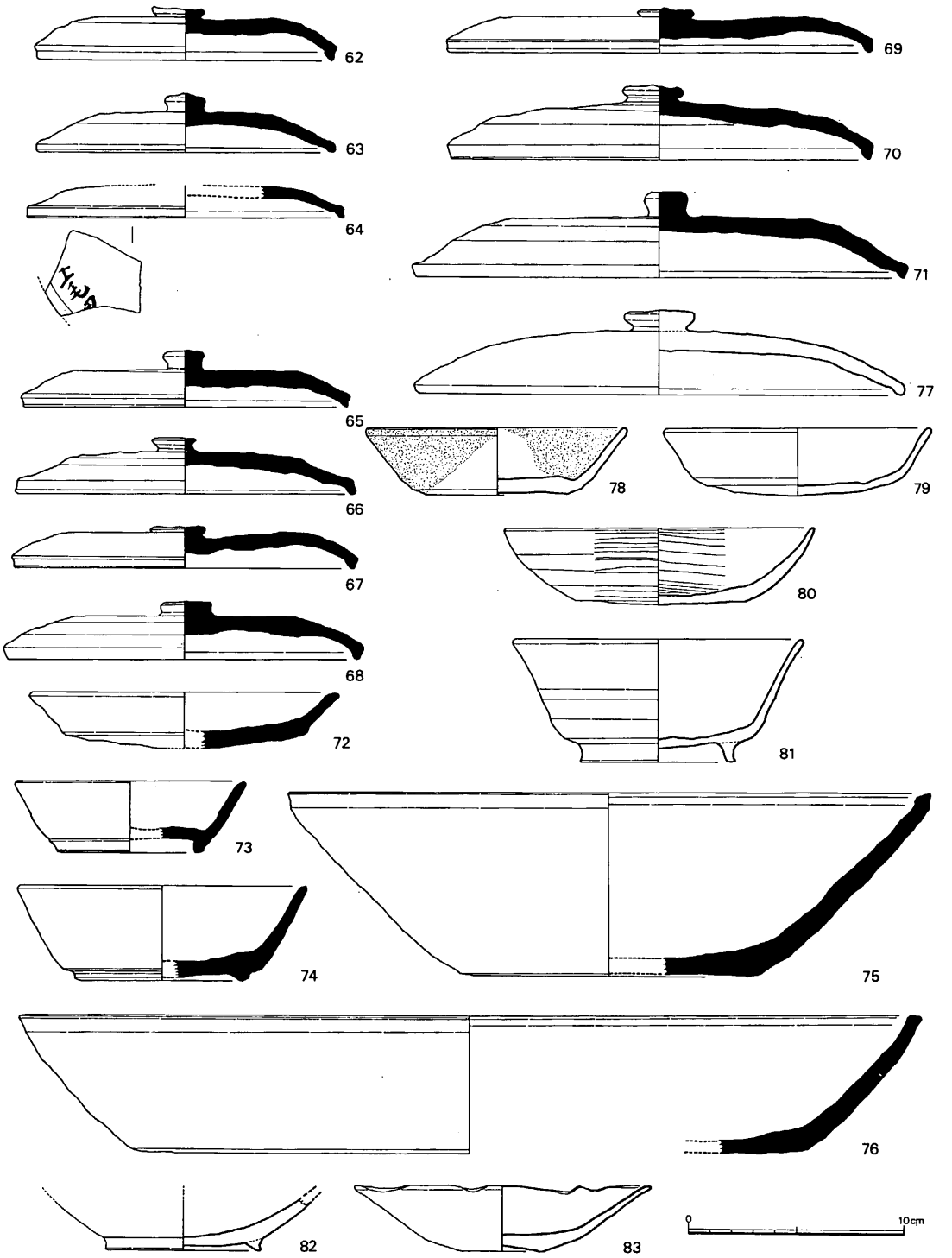
盤（76）　小片であるが，口径41.7cm，器高 6.4cm，底径31.4cmに復原できる。底部はヘラ切りで，他はヨコナデし，内底はナデ仕上げしている。口縁の器肉は若干感じる程度で，端部は平らにしている。

土師器

杯蓋（77）　口径22.4cm，高さ 4.0cmの大形である。天井部はヘラ削り後ミガキを施し，他はヨコナデするが，内面はその後口縁部付近までヘラミガキで仕上げる。体部と口縁部の境には内面にわずかに凹線を入れるだけで明瞭さを欠いている。胎土は緻密で精良な土器である。

杯（78～80）　口径12.2cm～14.2cm，器高3.2cm～3.6cm，底径7.7cm～9.6cmである。78・79の底部はヘラ切り，他はヨコナデ，内底はナデ調整をしている。78の内外面には著しい煤の付着がみられる。80は胎土・調整とも精良な土器で，外面は底部から口縁部までヘラ削りし，外底を除いた全面をヘラミガキする。

椀（81）　底部はヘラ切りで，直立した断面四角形の高台を付ける。体部の立ち上がりは高台貼付部からやや隔った所にあり，体部上位でやや外反する。



第90図　ＳＤ320最下層出土土器・陶磁器実測図（5）

竈　鍔部の少片である。上面ニヘラで「春岑」と判読できる陰刻がある(図版88のａ)。

緑釉陶器

椀（82）　胎土は淡茶色を呈する精製された軟質の土師質のものである。ふんばった感じの低い高台を貼り付け，底部は丸味をもつ。暗緑色の釉が全面に施される。

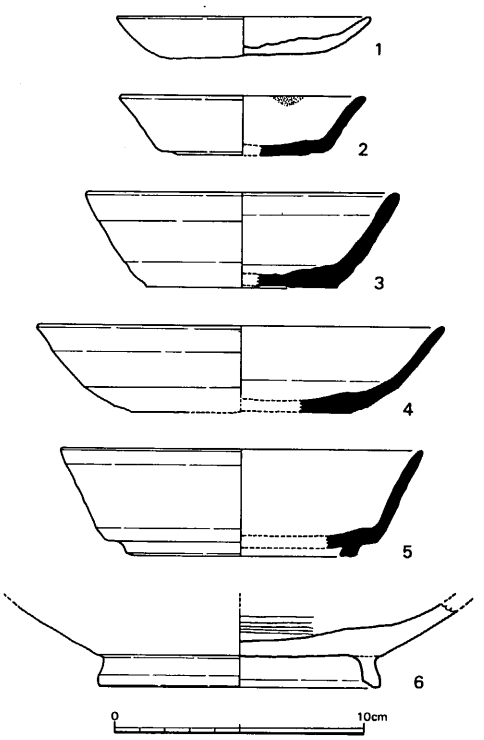
青　磁

杯（83）　越州窯系青磁の輪花のある杯である。輪花は３個所残る。平底の底部から体部中位までをヘラ削りした他はヨコナデで成形する。底部端は釉を削りとり，その部分には重ね焼きの目跡がある。

ＳＤ2010出土土器（第91図，別表，図版92）

須恵器

杯（２～５）　無高台（２～４）は口径9.8cm～16.3cm，器高2.4cm～3.8cm，底径6.6cm～8.8cmである。いずれも形態的には土師器に類似している点が注意される。底部はヘラ切りで，２の口縁部には煤の付着がみられる。３は体部下位をヘラ削り調整し，内底はヨコナデ後ヘラミガキ様のものを行っている。４は体部外面の下位をヘラ削りし，内底はナデ調整する。５は幅広の低い高台を貼付し，体部は高台貼付部からやや隔った所に立ち上がりがある。



第91図　ＳＤ2010出土土器実測図

土師器

杯（１）　口径10.1cm，器高 1.6cm，底径 6.8cm。底部はヘラ切りで，板状圧痕を有する。

鉢（６）　全形は不明であるが，ややふんばった高台で内面に凹線を入れている。底部から体部残存部まではヘラ削りしている。内面はヘラミガキを施している。

ＳＤ2011・2012出土土器（第92図，別表，図版92）

出土量が少ないのでまとめて図示したが，ＳＤ2011出土のものは２・８・11・12で，他はいずれもＳＤ2012から出土したものである。

土師器

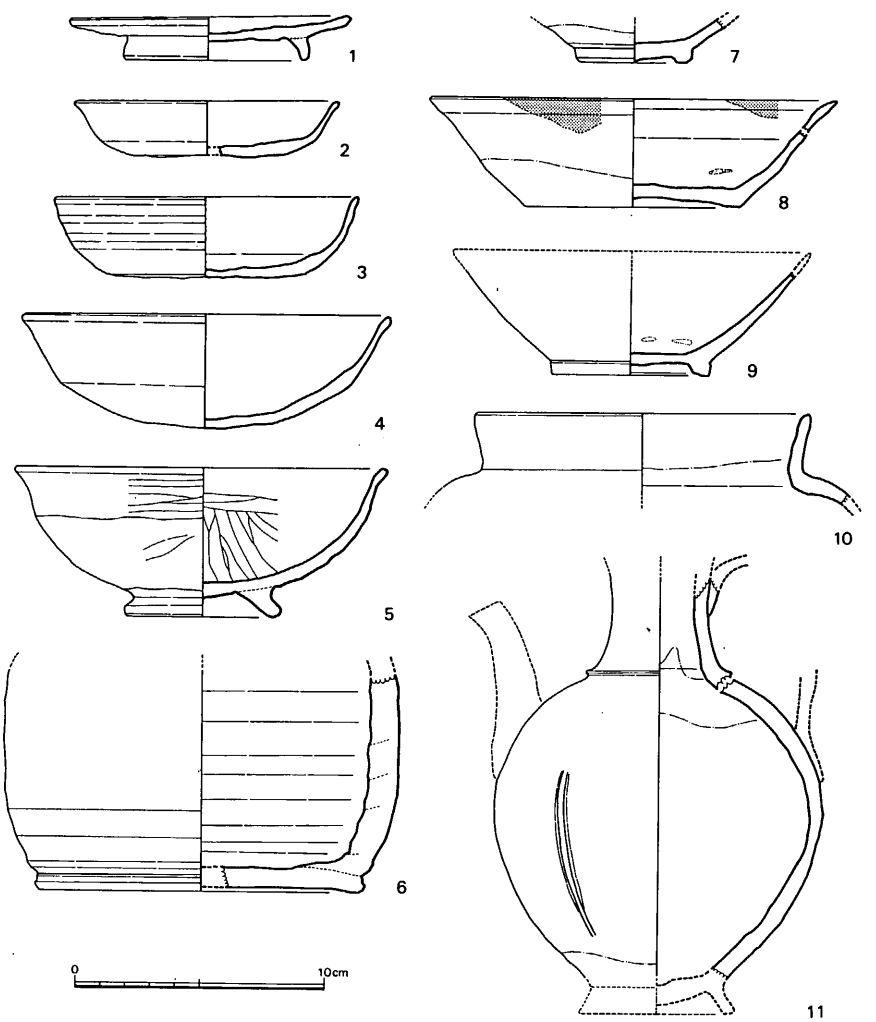
皿ｃ（１）　口径10.3cm，器高 1.7cm。直立した高台を貼付するが，調整については軟質なため不明である。

杯（２・３）　口径10.6cm～12.2cm，器高2.3cm～3.2cm，底径6.2cm～8.0cm。ヘラ切りで，

3は板状圧痕を有する。底部と体部の境が明瞭ではなく，内弯する体部を口縁部でわずかに外反させる。

椀（4・5） 4は無高台の椀で，口径14.8cm，器高 4.6cmに復原できる。底部はヘラ切りであるが，軟質なため体部との境が不明瞭である。板状圧痕を残す。

5は内外面を黒色に燻した黒色土器B類の椀である。径の小さいふんばった高台を持つ。体部の下位は指押えにより成形している。内外面は幅広のヘラミガキがある。



第92図　ＳＤ2011・ＳＤ2012出土土器・陶磁器実測図

緑釉陶器

壺（6） 平底で，胴の張らない壺片である。外面の底部および体部はヘラ削り調整を行っている。体部の断面に粘土紐の痕跡が認められる。胎土は精製された須恵質のもので，外面にかろうじて緑釉が残っている。

白磁

椀（7） Ⅰ類の椀である。高台の径からすると小形の椀であろう。削り出された高台は面取

りされているが，成形は雑である。施釉はうす目で，純白に近い。体部下位と底部は露胎となっているが，化粧土が認められる。

青磁

杯（8）　ＳＤ2011と2012出土のものを図上復原した。胎土は淡茶灰色のやや粗いものである。釉は全体に灰緑色を呈するが，内面はやや黄色味が強い。口縁部には褐斑がある。外面の底部と体部下半は露胎になっているが，化粧土を認めうる。内底に重ねの目跡がある。褐斑を重視すれば，長沙窯系のものであろうか。

椀（9）　越州窯系椀Ⅰ－2類である。内外面の全面に施釉されているが，高台畳付部は削りとられている。内底と畳付部に重ねの目跡がある。

壺（10）　短頸壺の小片である。直立気味の口縁部と丸味のある肩部が知れる。胎土は密で黄色味の強い灰緑色の釉がかけられるが，内面の肩部付近は露胎となる。胎土と釉調から越州窯系のものであろうか。

水注（11）　ＳＤ320 出土の頸部片とあわせて図上復原した。瓜胴で，釉は灰緑色を帯び，胴部の下位と内面は露胎となっているが，内面の上部には釉が垂下している。越州窯系。

ＳＤ2015Ａ出土土器（第93図，別表，図版89）

溝埋土は上層（灰色粘質土層）と下層（灰色砂層）の2層に分けられる。1～6は灰色粘質土層出土，7～11は灰色砂層出土である。上・下層に分けて図示したが，記述の都合上それにとらわれず記した。

須恵器

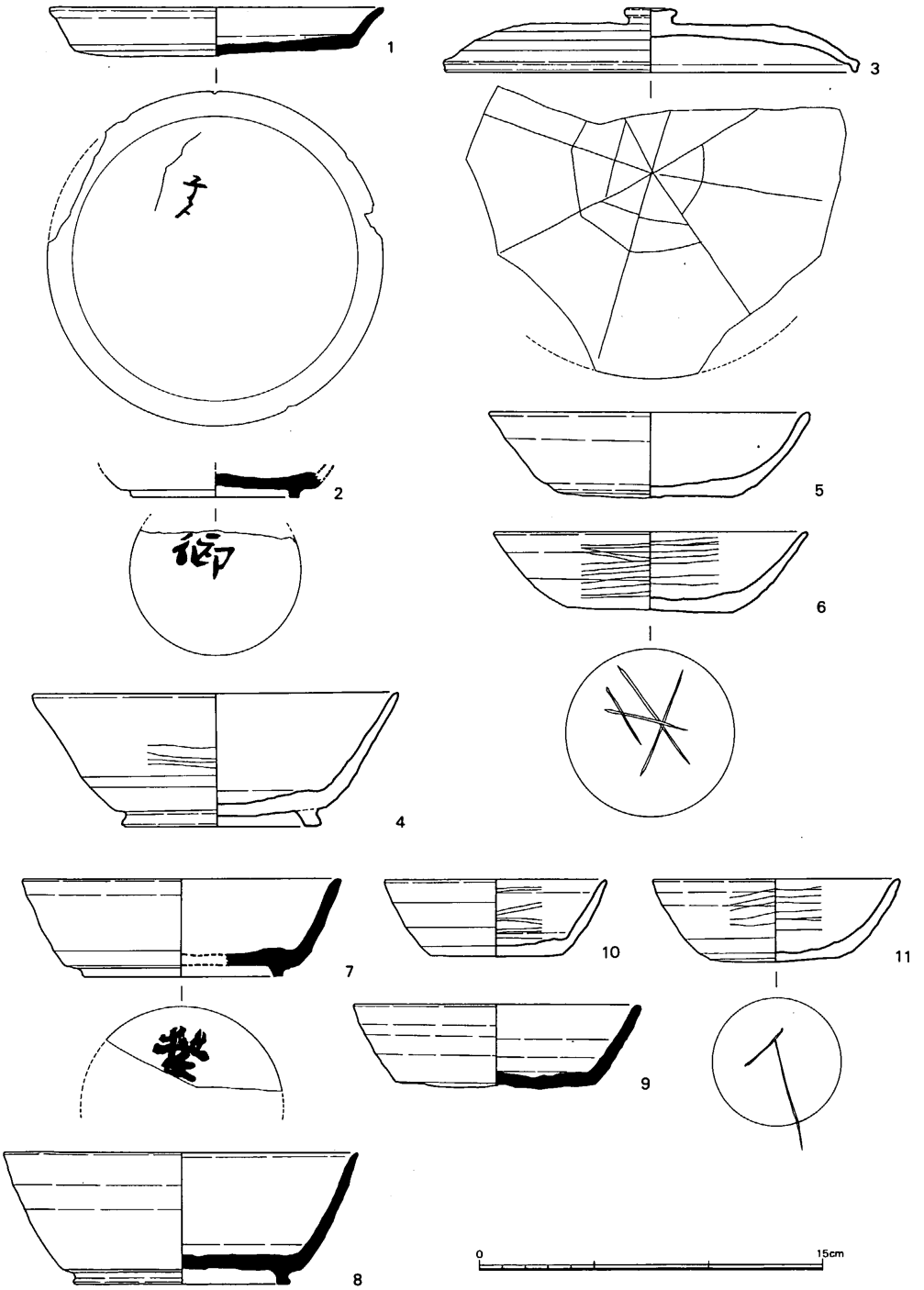
皿（1）　口径14.6cm，器高 2.2cm，底径12.0cm。底部はヘラ切り離しのままである。内底の中心部はナデ調整を行なう。外底には「子□（人カ）」の墨書がある。

杯（2・7～9）　2は細く低い高台のもので，体部の立ち上がりは高台からやや離れた位置にある。外底には明瞭に「御」の墨書が判読できる。7は低い高台に直線的な体部をもつもので，全体の$\frac{1}{3}$が残っている。外底には「□（華カ）」の墨書がある。8はやや大形のもので，高台部近くで体部の立ち上がりがある。9は無高台の杯で，外底はヘラ切り離しの後中心部分にナデ調整を施しており，その部分には円形状に墨痕がみられ，硯に転用したのであろうか。

土師器

杯蓋（3）　口縁部内外面はヨコナデ，天井部から体部はヘラ削り後ヘラミガキを施している。ミガキについては軟質なため明瞭でない。内面には線刻の幾何学文様がみられる。線刻の交点は器体の中心に位置し，その部分には小さなくぼみがある。

杯（5・6・10・11）　5・6は口径13.8cm・14.1cm，器高7.3cm・7.7cm，底径3.5cm・3.8cm。10・11は口径9.8cm・10.8cm，器高5.7cm・5.8cm，底径3.4・3.7cmを測る。5はヘラ切りで板状圧痕を有する。体部はヨコナデで，内底中心部はナデ調整を施している。6・11は外面の



第93図　ＳＤ2015Ａ出土土器実測図

底部および体部下位までヘラ削りを行った後，ヘラミガキを旋している。外底にはいずれもヘラの陰刻がある。10は外底から口縁部付近までヘラ削りしており，他はヨコナデで，内底中心部はナデ調整している。体部の内面および口縁部の内外面はヘラミガキを施す。

椀（4） 口径16.0cm，器高6.9cm，底径8.7cm。底部から体部下位はヘラ削り，他はヨコナデで，外底を除いた全面にヘラミガキを施している。

このほか墨書土器片2点があり，うち1点は「□二」と判読できる(図版89の a・b)。
(昨カ)

SD2015B出土土器（第94～96図，図版90・91）

多量の須恵器・土師器が出土したが，埋土の違いによって大きく上・下の2層に分けて遺物を取り上げたので，それに従い記述する。

上層の須恵器

壺蓋（1） 口径 8.8cm，器高 2,2cm。口縁部を直角に折り曲げる。いわゆる短頸壺の蓋である。天井部から口縁屈曲部までをヘラ削りし，他はヨコナデおよびナデ調整している。

杯（2～5） 2の底部はヘラ切り離しのままで，体部はヨコナデ，内面はナデ調整している。口縁部内面に煤の付着がみられる。3の底部はヘラ削り調整後についた細い板状圧痕がある。4は幅広の低い高台を有し，立ち上がりの屈曲部には比較的明瞭な稜をもつ。5の底部および体部下位はヘラ削り，他はヨコナデおよびナデ調整をしている。高台は外に開き，体部は高台部から斜め外方にやや丸味をもって立ち上がる。

皿（6） ヘラ切り離しの底部は未調整で，他はヨコナデによって仕上げる。

壺（7） 壺の底部片である。外面の底部から体部はヘラ削り調整を行い，底部には円文の叩き目がある。内底にはナデ調整後体部との接合をするためのヘラ押し痕がある。

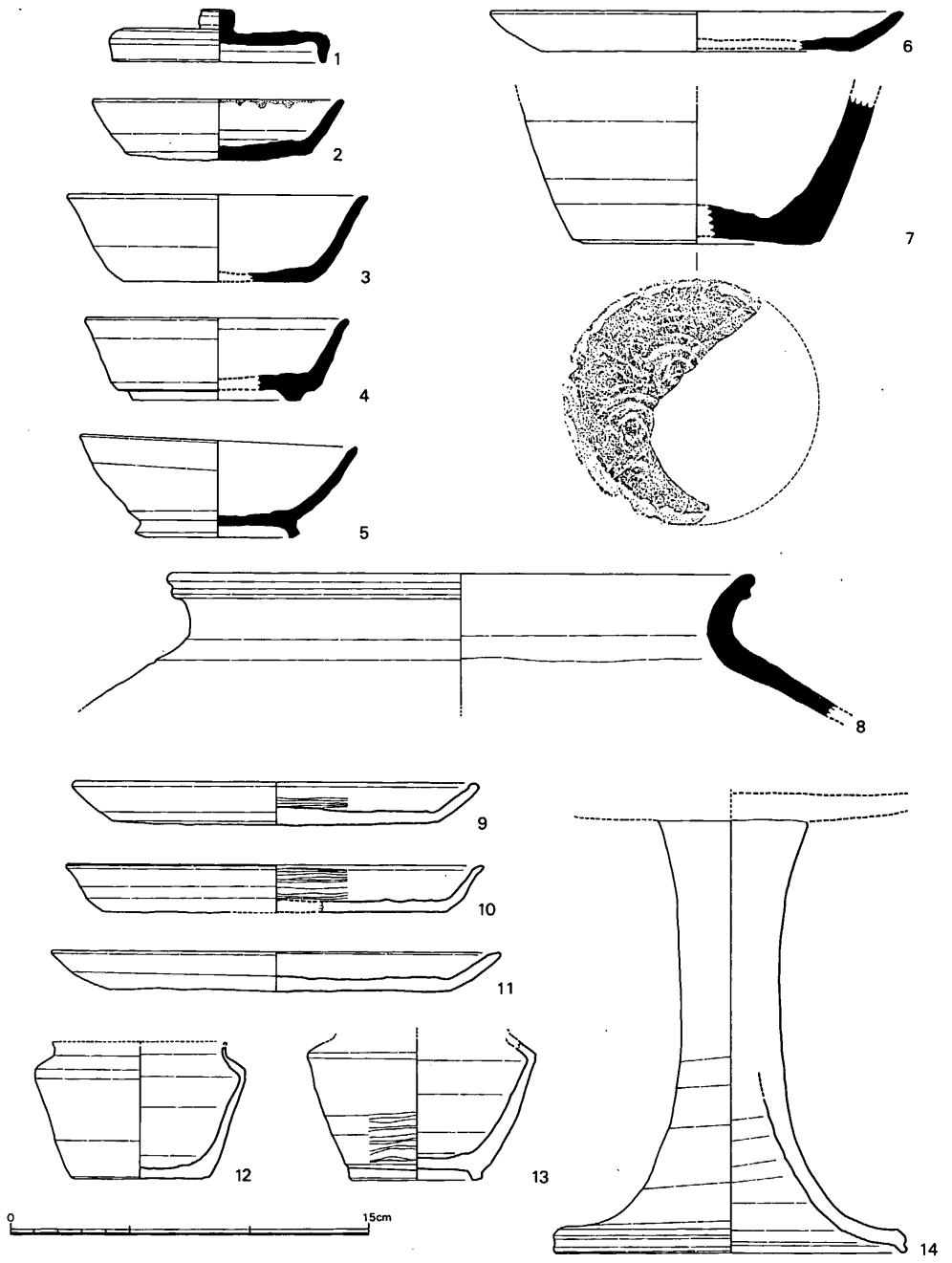
甕（8） 口縁部および体部の一部が残っているが，口縁部外面には凸帯を貼付している。体部外面は正格子の叩目，内面は同心円文の叩目がある。

上層の土師器

皿（9～11） 9・11は口縁部内面に凹線をもつもので,11は口径が若干大きい。 9は外面の底部および体部下位はヘラ削り，他はヨコナデを行ない，内面はヘラミガキを施す。11は外面底部から口縁部付近までをヘラ削りしている。内面はヨコナデ後ヘラミガキを施す。10は外面の底部から体部下位をヘラ削りし，内面はヨコナデ後ヘラミガキを施す。

壺（12・13） 広口短頸の小型壺である。12は無高台で，13は短く外にふんばる高台をつける。いずれも口縁部を欠失する。外面は底部から体部中位までをヘラ削りし，他はヨコナデである。13は不明瞭であるが，体部の外面はヘラミガキを施している。12も恐らくミガキを施しているものと思われるが，軟質なためその痕跡はみられない。

高杯（14） 高さ18cmの脚部をのこすのみである。脚下位は喇叭状に大きく開き，端部は嘴状につまみ出す。

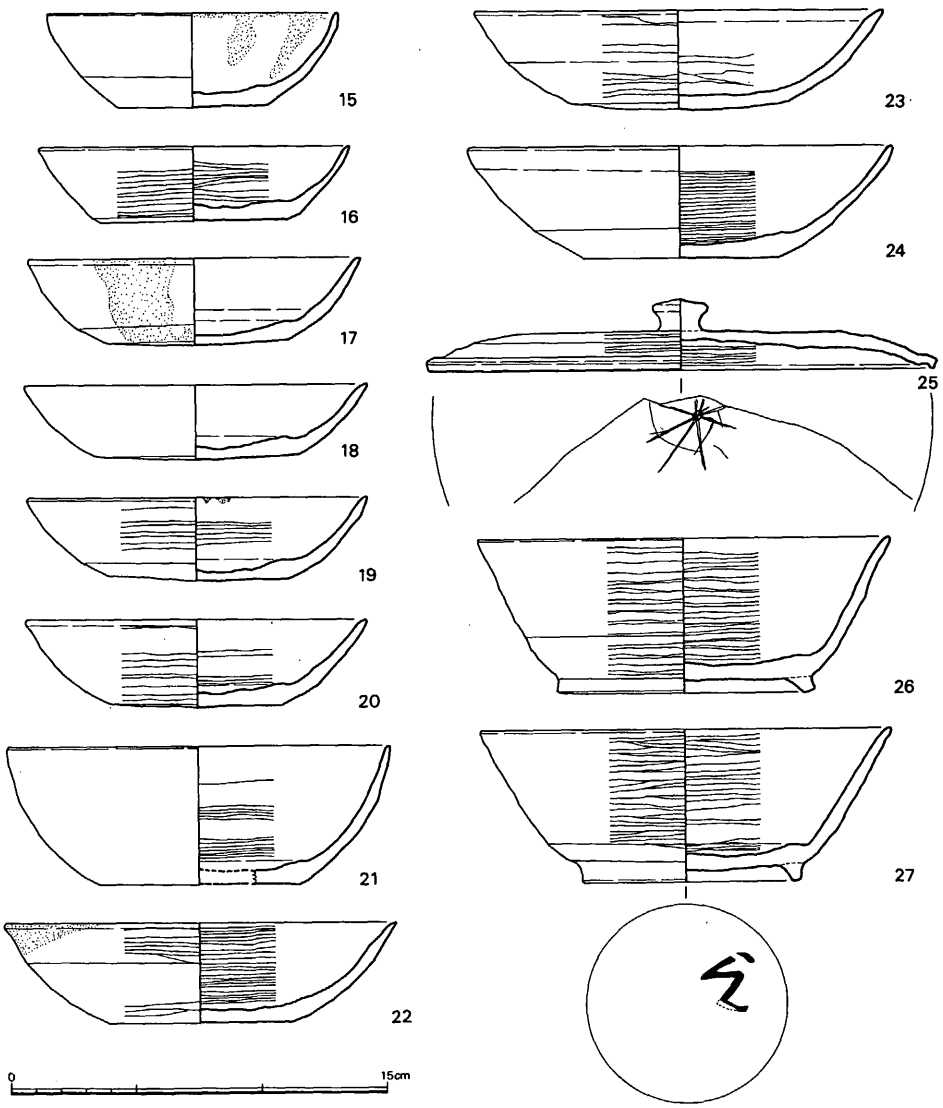


第94図　ＳＤ2015Ｂ上層出土土器実測図（１）

杯（15～24）　口径11.6cm～13.6cm，器高3.0cm～3.8cm，底径11.6cm～13.6cmのものと，口径15.2cm～16.9cm，器高4.0cm～5.5cm，底径7.2cm～8.8cmの大形のものがある。18を除いた他

は内外面にヘラミガキを施している。15～17・19・20は外面の底部から体部下位をヘラ削りしている。18は底部のみヘラ削りし，他はヨコナデである。21は他に比較して器高が高く，体部は内弯し，椀形を呈する。外面は底部から口縁部付近までヘラ削りしている。22・23は体部中位まで，19は体部下位までをヘラ削りしている。

杯蓋（25）　復原口径20.3cm。天井部はヘラ削り，他はヨコナデである。口縁部を除いて内外面にヘラミガキを施す。内面の中心部に放射状の線刻文様がある。第93図３に類似する。



第95図　ＳＤ2015Ｂ上層出土土器実測図（２）

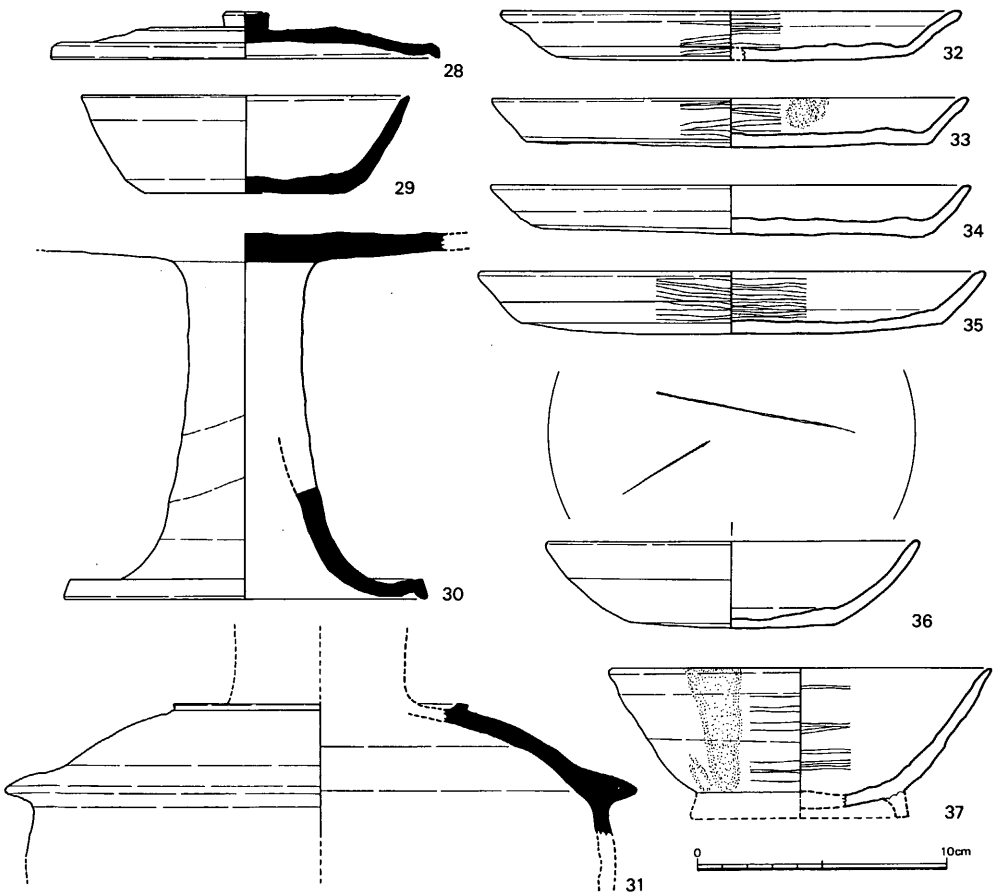
椀（26・27）　両者は口径，器高とも全く同じで，口径16.4cm，器高6.2cmを測る。外面の底部および体部下位をヘラ削りし，外底を除いた内外面をヘラミガキする。低くふんばった高台で，体部は高台貼付部からほぼ斜め外方に直線的にのびる。判読不明であるが，27の外底には墨書がある。高台畳付部に板状圧痕がみられる。

塩壺　内面に布目を有する塩壺の小片が数点ある。布目は粗いものが多い(図版91の a)。

下層の須恵器

杯蓋（28）　器高が低く，天井部と体部の境は明瞭でなく，屈曲させた口縁部はにぶい嘴状になっている。

杯（29）　小片である。体部下位に若干丸味があるが，直線的にのびる体部をもつ。全体に磨滅が著しいので，明らかではないが，底部はヘラ削りしているようである。また底部にヘラ記号状のものがみられる。



第96図　ＳＤ2015Ｂ下層出土土器実測図（３）

高杯（30）　脚部と杯部の一部をのこす。脚の下部は喇叭状になり，端部は断面三角形を呈し，体部との境には明瞭な稜をもつ。

壺（31）　肩部のみの小片である。全体の形状は不明であるが，肩部はやや丸味をもち，体部との境界に断面三角形の凸帯をめぐらし，頸部接合付近に断面四角の凸帯を貼付している。

下層の土師器

皿（32～35）　口径18.4cm～20.3cm，器高2.0cm～2.5cm，底径14.0cm～16.8cm。34を除いて内外面をヘラミガキしている。32～34は底部から体部下位までをヘラ削りし，35は体部中位までをヘラ削りしている。33は体部の一部に油煙の付着がみられる。

杯（36）　外面の底部から体部中位までをヘラ削りし，他はヨコナデである。底部の内・外面にヘラの刻文がある。また口縁部の内外面に油煙が付着している。

椀（37）　高台部は欠失しているが，痕跡が残り，体部は高台貼付痕からほぼ直線的に斜め外方にのびる。体部の内外面にはヨコナデ後ヘラミガキしている。

ＳＫ2007出土土器（第97・98図，別表，図版93・94）

須恵器

杯蓋（１～３）　口径12.9cm～17.2cm，器高2.3cm～2.9cmのものである。いずれも器高が低く，口縁部はわずかにつまみ出した形のものである。端部は丸味をもっている。１の天井部は回転ヘラ削りし，２・３の天井部はヘラ切り後未調整のままである。

杯（４・５）　底部から体部下位までをヘラ削りし，体部から口縁部はほぼ直線的にのび，端部を若干外反させる。５の底部の境は明瞭さを欠く。外底には「野」の墨書が残る。

壺蓋（６）　口径15.0cm，器高 3.5cm。天井部はヘラ削りし，天井部から体部は直角に折り曲げ，外反気味の口縁部は端部を平らにしている。

壺（７）　壺の体部片である。胴部最大径は上位にあり，体部の下位はヘラ削りしている。丸味のある体部から肩部にかけてはヨコナデ調整である。

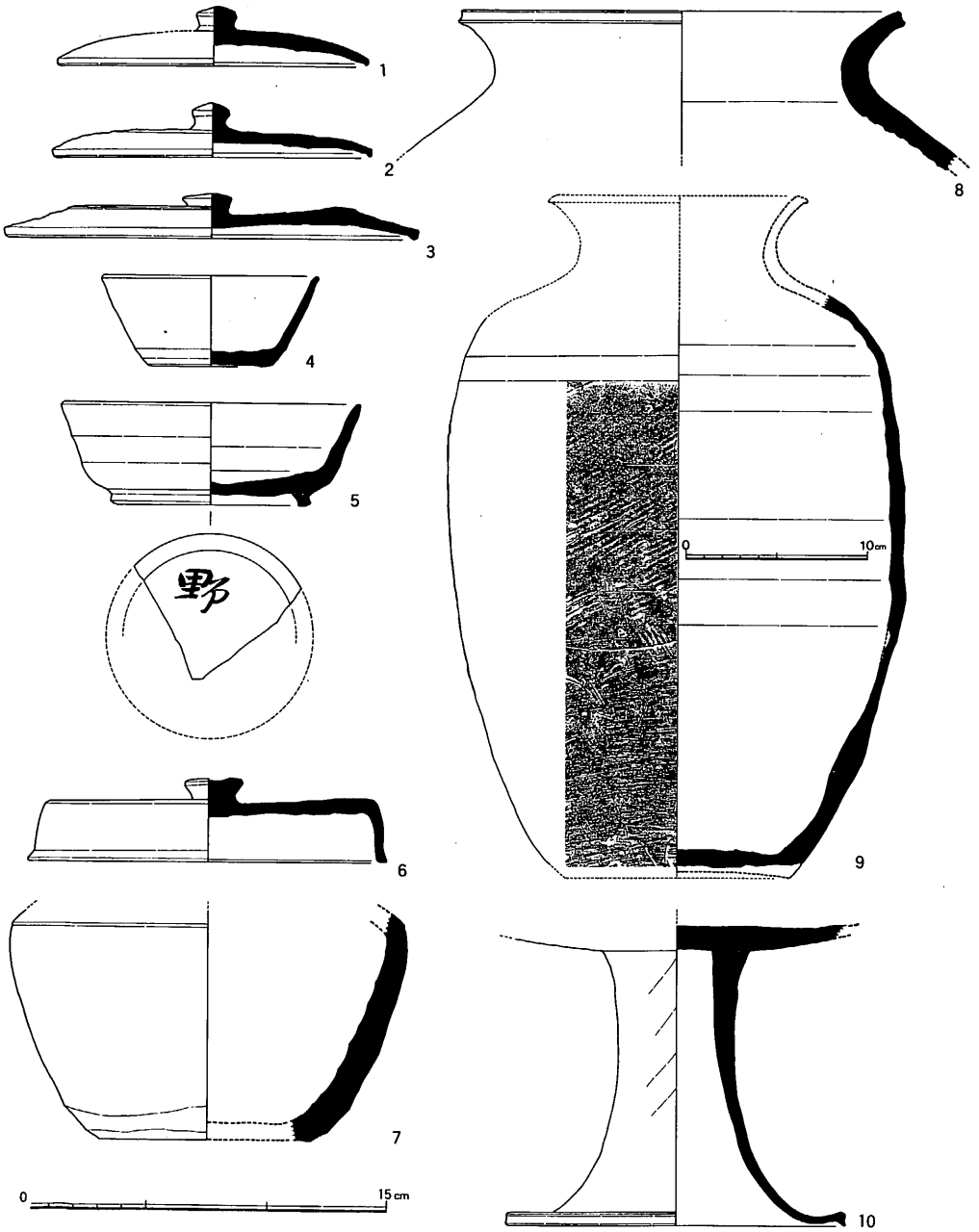
甕（８・９）　８は甕の口縁部と肩部片である。口縁部を「く」字状に屈曲させ，平らにし端部には凹線を入れる。外面は正格子の叩きを，内面には同心円文の叩き目を有する。９は長胴の甕で，口縁部を欠失する。全体に器肉は薄い。胴部の最大径は中位にあり，径24.6cmを測る。体部の中位以下はヘラ削りをし，その後斜めの叩きを有する。体部中位以上はヨコナデ後斜めの叩きを有する。内面の下位は縦方向のナデ，上位はヨコナデである。内面の底部および下位には白い付着物がある。底部は欠失しているが，平底になるものと考えられる。

高杯（10）　脚部と杯部の一部が残っている。脚部下位は喇叭状に開き，端部は嘴状にし，屈曲部には明瞭な稜をもつ。全面ヨコナデで，筒部はねじりを加え成形する。

土師器

皿（11～13）　口径17.6cm～17.7cm，器高2.0cm～2.6cm，底径13.7cm～15.1cm。11の底部は

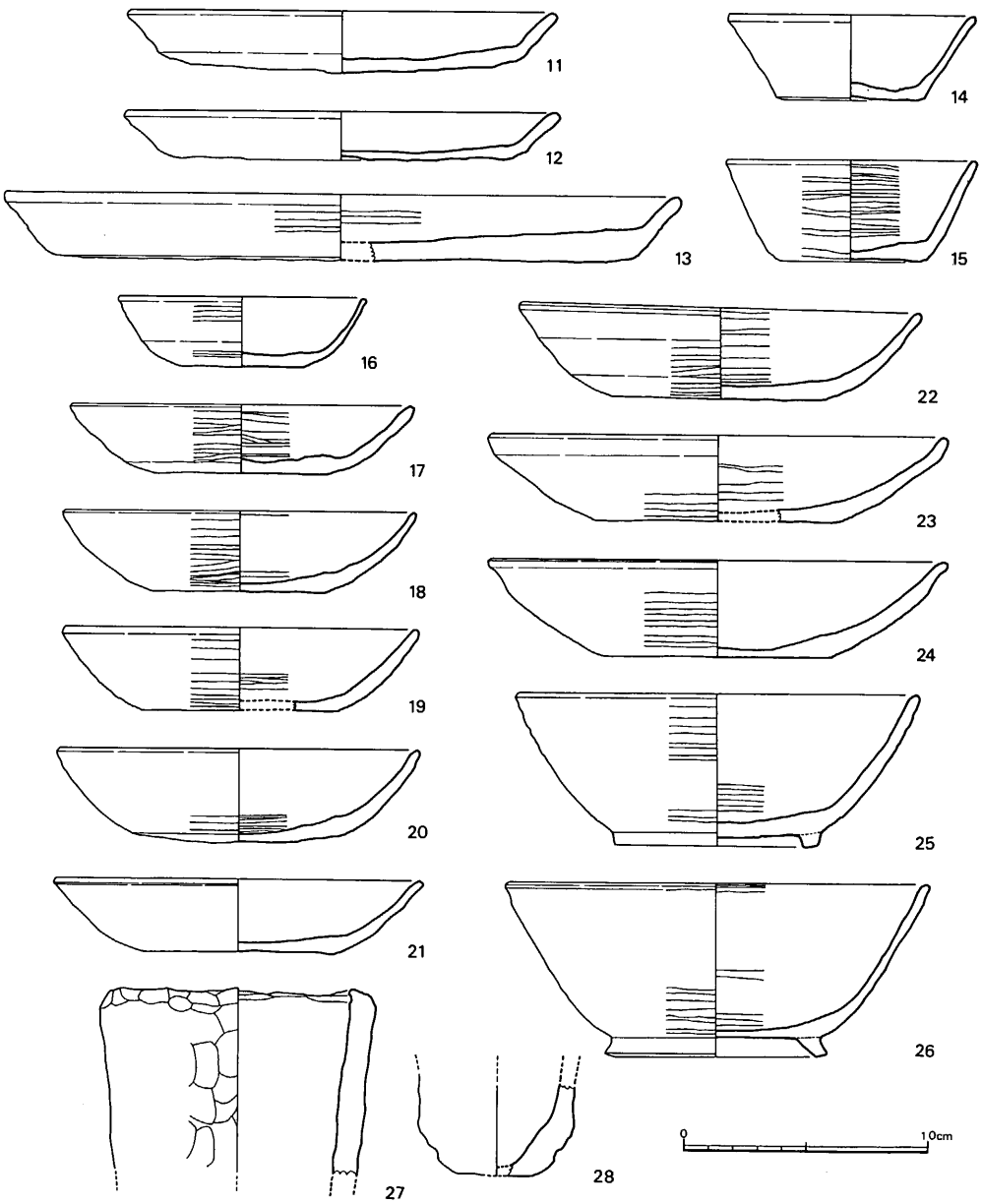
ヘラ削り，12は底部から体部下位までをヘラ削りしている。13は大形のもので口径27.5cmを測る。底部はヘラ削りし，内外面は丁寧にヘラミガキをしている。



第97図　ＳＫ2007出土土器実測図（１）

杯（14～24）　形態的には大きく14・15と16～24の２つに分けられる。前者は口径10.1～10.2cm，器高3.5cm～4.2cm，底径 6.1cm。16は小形，23・24は大形のものである。後者は口径10.1cm～18.7cm，器高2.9cm～4.2cm，底径5.1cm～10.1cmのものである。14を除いていずれも底部から体部下位までをヘラ削りし，全面をヘラミガキする。

椀（25・26）　口径16.5cm～17.3cm，器高6.3cm～7.1cm。底部から体部下位をヘラ削りし，



第98図　ＳＫ2007出土土器実測図（２）

その後で内外面をヘラミガキする。25は低い四角形の高台で，体部は高台部からやや内弯気味に立ち上がる。26はふんばった高台で，ほぼ直線的な体部をもつ。

塩壺（27・28）　27は口縁部片で，復原口径は約11.0cmである。全体は指押えによって成形している。内面には全体に磨滅のため不明瞭であるが，布目がわずかに認められる。また口縁端部付近に製作時についた型の痕跡と思われる凹線がみられる。28は底部片で，指押さえの凹凸があるが丸味をもっている。内面は磨滅のため布目の有無については不明である。いずれも，全体には赤茶色を呈するが，器面は黒化している(図版94のａ)。

各層出土土器（第99図，別表，図版94）

須恵器

硯（５～７）　いずれも円形の陸部とその周囲に海部を持ち，周縁に外堤をめぐらす円面硯である。硯面を支える圏台は完存しないが，裾広がりのものであろうか。３点とも圏台にはヘラによる透孔があり，その一部が認められる。６には十字形透孔を配しているが，５・７については十字形であるのか方形を呈するのかは不明である。５・６の陸部と圏台はヨコナデにより１本につくられているが，５の上面は平坦で，６は丸味をもつ。７の陸部はヨコナデで形をつくった後に粘土を貼付して，上面が平坦となる陸部を作っている。また５・７の外堤は陸部よりもやや低く，その下端には断面三角形の凸帯を１条めぐらす。６の外堤は欠失して不明であるが，下帯に凸帯が同じくめぐる。６の陸部はすられているため器面が滑らかで，硯面および陸部，外堤に墨痕がみられる。５は茶灰色土層，６は暗茶色土層，７は灰色砂層土である。

土師器

杯（８）　口径10.5cm，器高3.6cm，底径6.5cm。底部と体部下位をヘラ削りし，内外面を丁寧にヘラミガキする。茶灰色土層出土。

椀（９・10）　９は口径17.0cm，器高6.3cm。底部と体部の下位をヘラ削りし，不明瞭であるが，内外面をヘラミガキする精良な土器である。10は黒色土器Ｂで，内外面をヘラミガキする。外底および内面の見込みにヘラによる線刻文がある。茶灰色土層出土。

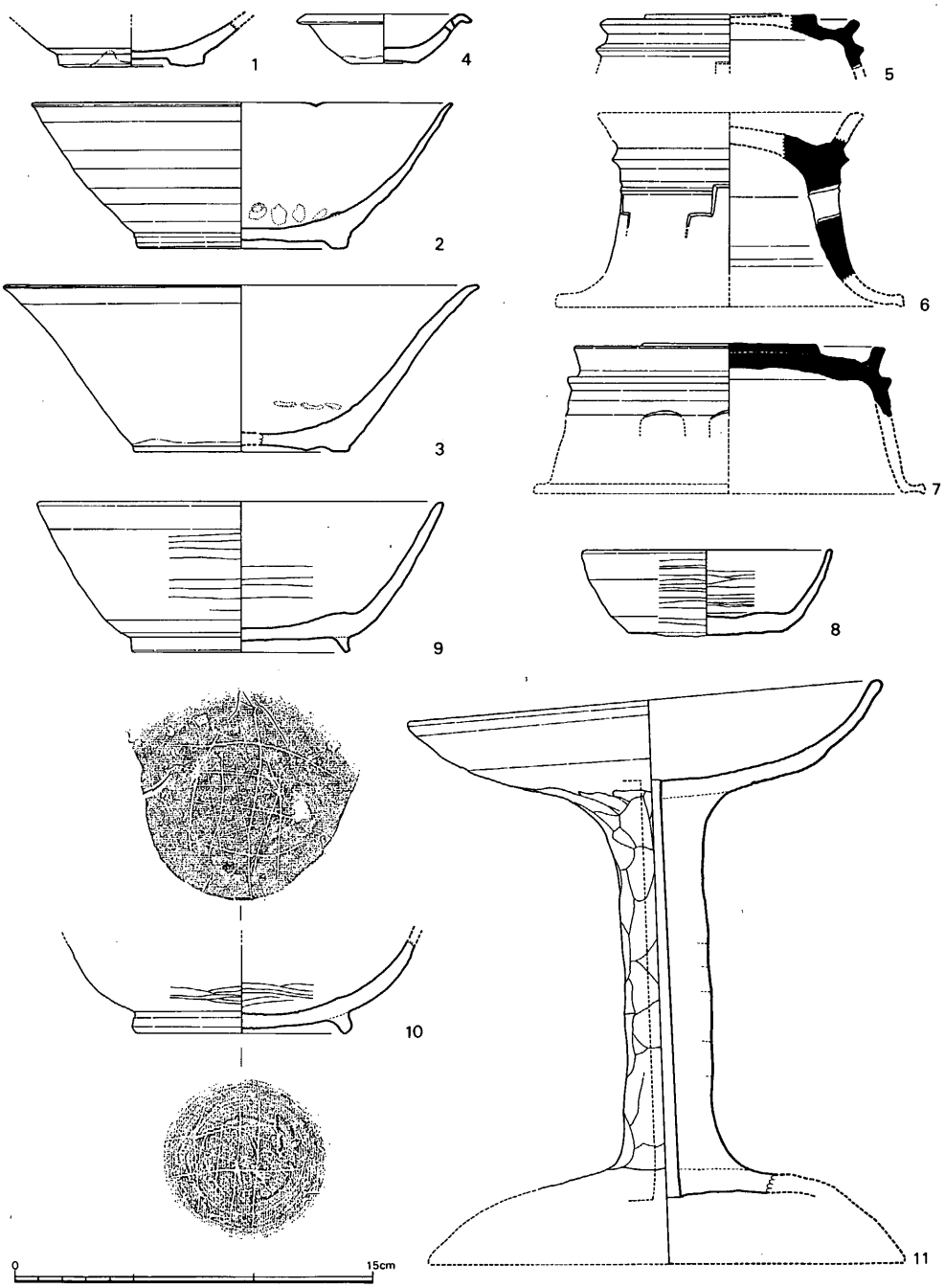
器台（11）　杯部と脚部が同じ形態を持っているため上下の関係が不明な器台である。筒部は径1.0cmの棒に粘土をまきつけて作られたもので，指による成形のため凹凸が著しい。杯部および脚部は丸底の杯と同じ成形・技法によっている。茶灰色土層出土。

白磁

椀（１）　白磁椀Ⅰ－１類である。暗灰色砂層出土。

青磁

杯（４）　平底のもので，口縁部を「く」字状に外反させる。体部上位に円形の穿孔がある。内外面に黄灰色の釉を薄目に施す。体部下位と底部は露胎である。形態および釉調に類例がないので，国産か，外国産のものか判じ難いが，ここでは青磁として報告する。



第99図　各層出土土器・陶磁器・円面硯実測図

椀（2・3） 越州窯系青磁椀で，2はⅠ－2類，3はⅡ類のものである。全面施釉でうすく引き出された口縁には輪花がある。釉がカキ取られた高台畳付部は露胎となり，そこには重ねの目跡がある。また内面見込みにも重ねの目跡がある。暗灰色砂層出土。3は底部に1条の削りを入れ，高台状のものを造り出している。体部の下位および底部は露胎で畳付部と内面見込みに重ねの目跡を残す。暗灰色土層出土。

瓦類

この調査では多量の瓦が出土した。その大部分は丸・平瓦である。軒先瓦は161点である。その内訳については巻末の一覧表に示した。軒丸瓦では73点のうち，別表3－18の鴻臚館式が29点で40%，別表3－28の老司式系統のものが13点で18%であり，この両者で全体半数以上を占める。軒平瓦は88点ある。そのうち，別表4－3の老司Ⅱ式が28点で32%，別表4－15の鴻臚館式が46点で52%を占める。これらの瓦の大部分は南北大溝SD320の埋土から検出したものであり，政庁あるいは蔵司から流入したものであろう。試みに蔵司地区における出土状況と比較してみると，軒丸瓦では総点数425点のうち鴻臚館式系統のものが144点で34%，老司式系統のものが148点で35%である。軒平瓦では総点数363点のうち鴻臚館式系統のものが70点で19%，老司式系統のものが126点で35%であり，軒丸瓦・軒平瓦とも鴻臚館式および老司式が圧倒的に多いことが知られ，ほぼ同じような傾向を示している。特に蔵司を中心とする政庁前面域では第75次調査の項でも指摘したごとく老司Ⅱ式のセットの軒先瓦が多く出土する傾向にあることは注目しておくべきであろう。このほか文字瓦が123点ある。「平井」・「平井瓦」・「平井瓦屋」・「佐」・「賀」・「賀茂瓦」・「筑」・「前」などで，特にきわだった傾向は認められない。

木簡（図版95）

木簡は，SD 320から11点，SK2007から2点，SD2011から1点，SD2012から1点および腐植土層から2点の合計17点が出土した。これらを木簡学会の分類によって型態分類すると，032型式が2点，033型式が1点見られるほかはすべて081型式に属する。このほか，061型式と065型式のものがそれぞれ1点ずつ出土したが，これについては後述する。次に，両者あわせた19点の墨書について見ると，判読できないものを含めて文字とみなしうるものが6点，断片的な墨痕が見られるのみで，文字を判読できないものが10点，型態的には明らかに木簡であるが，墨痕は全く認められないものが3点，となる。

以下，出土木簡のうち代表的なものについて報告するが，未解決の問題点も少なくはないので，それについては若干の所見を述べて後考を俟ちたい。

（1）・遠遠遠＝□

・君　君

SD 320から出土したもので，上下両端が折損しているため原形は明らかでないが，現状で

は長さ7.2cm，幅1.4cm，厚さ0.2cmを測る。なお，墨書の位置から見て，現状の左右両端は二次的に割截された可能性も考えられる。表面は「遠」字の習書と推定されるが，現状最下端に墨痕の一部が見える文字はおそらく「遠」字ではないだろう。裏面は現状から「君」字と推定したが，右端に片寄りすぎているようにも思われる。その筆致を見れば，右側にいわゆる部首を意識しているようでもあり，政庁地区正殿後方築地東北隅（第26次調査）におけるＳＫ514から出土したものに例が見られるように，この「遠」字が筑前国遠賀郡を意識したものであったとすれば，それは「郡」字であった可能性を考えられる。

（2）・□□□伏」

・□　□」

ＳＤ320出土。上端は欠損しているが，他の三辺はほぼ原状を保つと考えられ，長さ9.1cm幅2.4cm，厚さ0.3cmを測る。第2字は「水」偏もしくは「言」偏，「亻」偏などの文字と考えられるが，現状の旁からは具体的な文字を想定できない。第3字は不鮮明であり，しかも部分的に墨が消失しているが，「寂」字に近似している。これらに対して，第4字は比較的明瞭であり，最終画の点が省略されてはいるが，「伏」字であろう。裏面は断片的な墨痕が見られるのみで，文字は判読できない。

（3）　「佐□」

ＳＤ320から出土したもので，2枚の長方形の材を樹皮（樹種は不明）で綴じ合わせており，本来は曲物の側板の一部と推定される。2枚の現存長は13.0cmと22.0cm，幅・厚さは両片ともそれぞれ1.9cm・0.2cm，である。また，上側板の下端から上側板では5.5cm，下側板では10.4cmの位置にもそれぞれ綴穴と考えられる小孔がある。墨痕は綴目直下の下側板にあり，第2字は肉眼ではほとんど確認できないが，赤外線テレビでは「𠂆」という墨痕を認めうる。これは「千」字の異体字かとも考えられるが，その組合の「佐千」という語句の意味は明らかでない。

（4）・□

・□□

ＳＤ320から出土したもので，半月形をなし，現存の弦長は6.1cm，最大幅1.7cm，厚さ0.4cmを測る。円弧は半径3.6cmの正円の円周上に完全に合致し，これは本来的には円形であったと考えられる。その場合，用途的には曲物の底板ないし蓋などが想定されるが，このように小さなものが存在するのかどうか検討を要する。墨痕は表裏両面に認められるが，両面とも墨が薄く，また欠損部にかかるため，具体的な文字を想定できない。

（5）・□□
（雀カ）

・□□□

ＳＫ2007から出土した。原状を保つとみなしうるのは表面の右端のみで，とくに下端は焼けて炭化している。現状では，長さ8.6cm，最大幅2.2cm，最大厚さ0.8cmを測る。表面の墨痕のう

ち，第１字は「雀」字のように見えるが，その場合の部首すなわち「隹」は「任」と記されているので，省略しすぎのようでもあり，断定できない。第２字はわずかな墨痕が見えるのみである。裏面には３字分の墨痕が見えるが，第１字と第３字はその一部が見えるのみであり，第２字も「水」偏の文字のようであるが，墨が薄いために判読できない。

（６）・□□□や未ヒ末□

・□□や　□
（カカ）

ＳＤ2012から出土。表面左端と右端の上半はほぼ原状とみなしうるが，上端は切れ目をいれた後で折っているので，その切断が本来のものかどうかはにわかに断定できない。現存部は，長さ9.7cm，幅1.9cm，厚さ0.9cmである。墨痕は表裏両面に見られ，とくに表面の第２～４字と裏面の第１～３字は同字と考えられる。表面の第４字までは第５字以下と筆致を異にしており，仮名文字もしくはそれにきわめて近い草書体である。第１字に適切な仮名文字を想定できないが，草書体とすれば，「人」偏あるいは「亻」偏・「水」偏などに属する文字，なかでも「御」「何」「得」などの文字が想定される。第２字は一見「ろ」のようにも見えるが，それにしては線があまりにも複雑である。左下に流した後であらためて起筆したかのように見え，また最後をあたかも丸めるかのようにして止めた後で第３字に移っており，草書体の「為」字に近似するので，「ゐ」字かとも考えられる。このように，第１・２字については一応の想定ができるが，にわかには断定できない。第３字は「う」字あるいは「か」字のいずれかと考えられるが，その筆致から見て後者の可能性が大きいだろう。表面ではこの４文字が１つの語句をなすようであるが，第１字が裏面に見えないので，あるいは裏面に対応する第２～４字の３文字で１つの語句をなしたのかもしれない。なお，裏面では上端の切断された部分にこの文字が記されていた可能性も考えられないことではないが，表面では第２字が第１字から連なるように記されているのに対し，裏面ではそのような痕跡が全く認められず，明らかに第１字から起筆されているので，その可能性はないだろう。下半部では，「未」と「末」を明確に書き分けている点が注目されるが，全体を判読できないので，その意味は明らかでない。

（７）　腐植土層から出土したもので，墨痕は全く認められないが，型態からは明らかに木簡の一種とみなしうる。若干の欠損は見られるが，ほぼ原形の判明するものであり，圭頭に作り，上半部の左右両側にはそれぞれ７個の切り込みを入れ，下端は尖らせている。長さ15.4cm，幅1.4cm，厚さ0.2cmを測り，本来はいわゆる笹塔婆的なものかと推定される。

以上，出土木簡のうち代表的なものについて述べたが，このほかの墨痕の認められる９点はいずれも断片的なものであり，それらから具体的な文字を想定することはできない。そのうちの３点は現状では接合しないが，材質や墨痕の状況などから見れば，本来は同一個体に属した可能性を想定できるものである。なお，第14次調査の際に南北大溝（ＳＤ 320）から５点の木簡を検出したが，習書１点のほかはいずれも断片であった。

木製品（第100・101図，図版96・97）

木製品は主にＳＤ 320 の各層から出土したが，なかでも腐植土から出土したものが多い。

木栓状木製品（１～３）　１～３は圭頭形に削り，両側にＶ字形の抉りを入れる。先端は楔形に尖らす。裏面はいずれも平面をなす。１・３は扁平な板材であるが，２は角材を加工したものである。

楔形木製品（４）　頭部を長円形に削り，末端は四方から削りを入れて尖らせている。断面は方形を呈する。

卒塔婆形木製品（５）　頭部は四方から削りを入れ楔形に尖らす。途中２ヵ所に四方向から抉りを入れる。抉りと抉りの間の一面には下方から削りを入れ，フラットな面を作り出している。下半部は四隅を面取りした方形状をなす。

題箋　（６・７）　厚さ 0.5 cmほどの板目材を加工したもので，いずれも軸部を欠いている。頭部は圭頭形に削る。墨痕は認められない。６は腐蝕がやや進んでいる。

鍬状木製品（８）　広葉樹を加工したもので，片側に２段のくりこみを入れる。末端は幅広で，斜め方向に削る。把手部には斜め方向に２個の穴を穿っている。

削掛け（９）　圭頭形に削り，下端部を剣先状に尖らしている。圭頭の両側辺には１回の切込みを入れる。厚さ 0.3 cmほどの薄板である。

把手状木製品（10）　厚さ 0.7 cm幅 1.7 cmの材の２ヵ所に上下から抉り込みを入れ，その中間部に下側のみゆるやかな曲線を描く抉りを入れる。両端部は角を削り落とす。断面は縦に長い六角形を呈する。

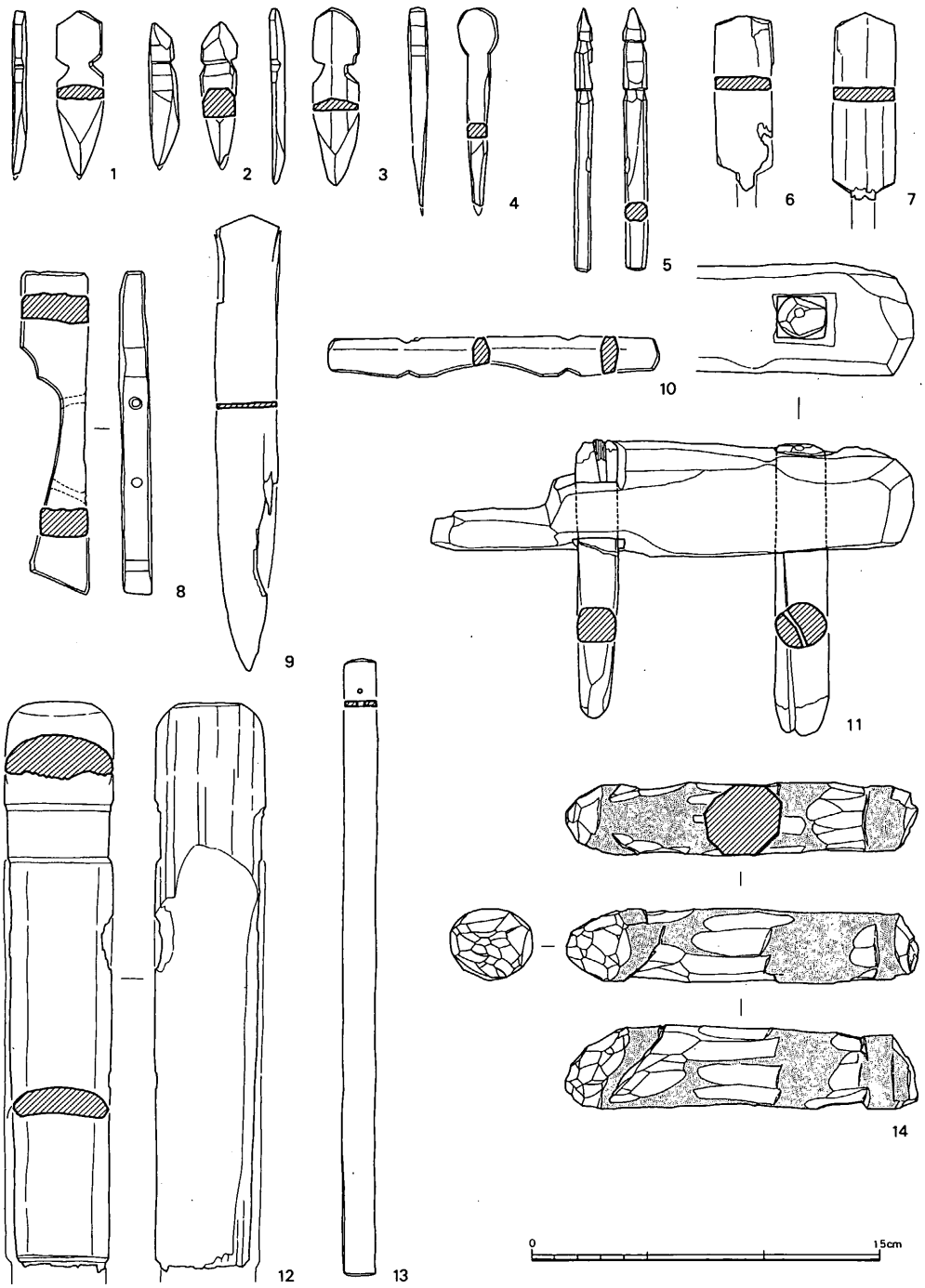
代掻（11）　断面方形の材を台木として方形の穴を穿ち，歯をさし込んだものである。歯は２本残っているが，うち１本は自然木の板を利用したもので，他の１本は削って加工したものをさし込んでいる。これには頭部に楔を打ち込んでいる。いずれも末端部は磨滅している。台木の折損した方には方形の穴が歯と直角にあけられており，柄の着装のためと考えられる。

刀鞘（12）　先端部は円頭形に作り，先端より約４cmの所に幅２cmほどのくい込みを入れる。裏面は削りを施しているが，先端から約６cmほどまでは破截面を残している。

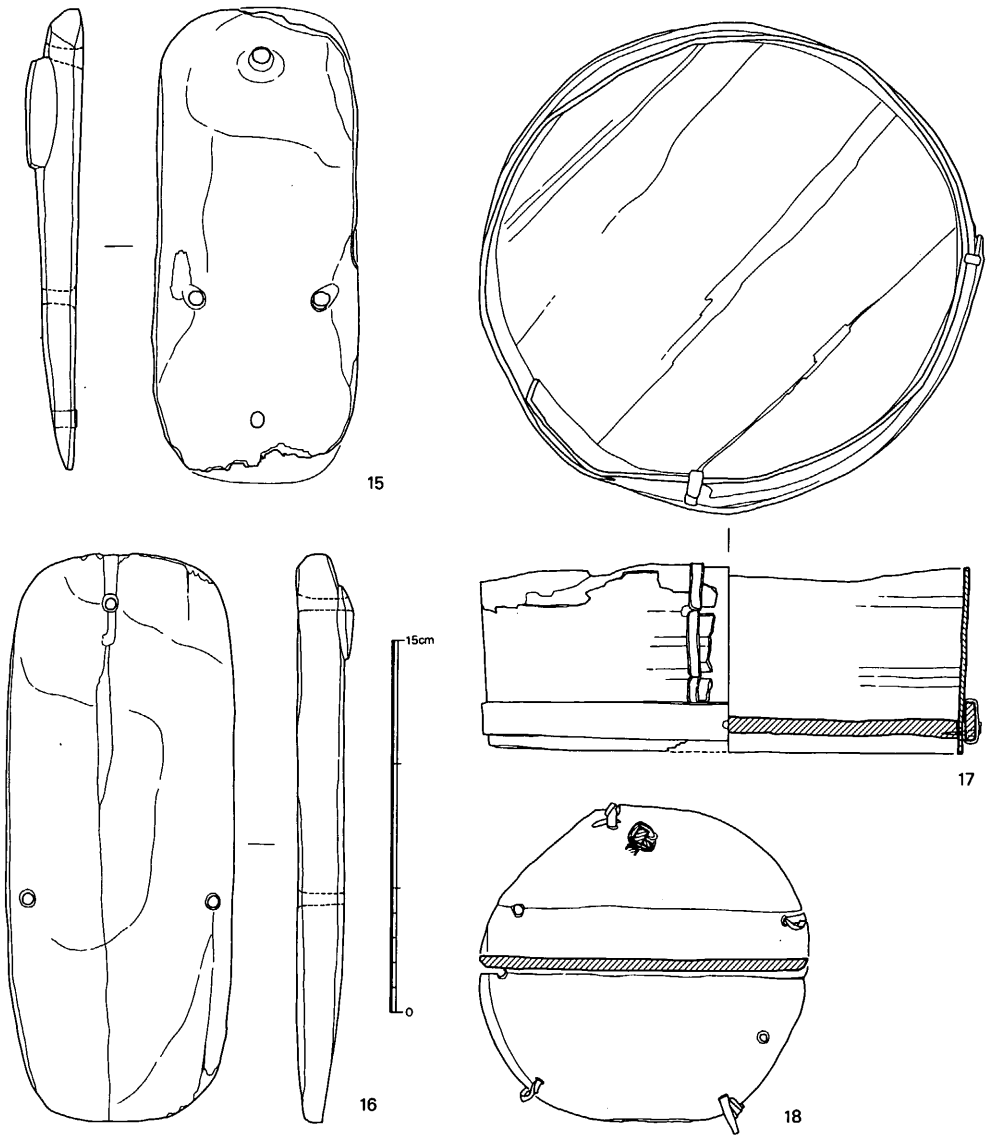
短冊状木製品（13）　長さ26.5cm，幅1.3cmで先端は円頭形に削り，下端は直に切断している。先端より1.4cmの所に径0.2cmほどの穴を穿っている。表裏とも墨痕ないし刻線等は認められないが，物指しの可能性も考えられる。

陽物形木製品（14）　表皮がついたままの広葉樹を加工したもので，一端は円錐状にまるく削り，先端部に近く側面から上面にかけて細い抉りを入れ亀頭状にしている。末端はななめに荒く削り落し，末端部近くに抉りを入れている。中央部は荒く削る。削りを施していない部分にはすべて樹皮が残っている。長さ15cm，径 3.2 cm。

下駄（15・16）　隅丸長方形を呈する２枚歯の下駄で，前幅と後幅は同じである。15は広葉



第100図　ＳＤ320出土木製品実測図（１）



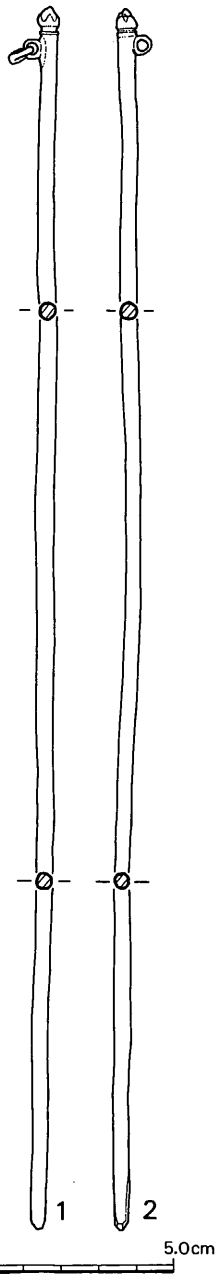
第101図　ＳＤ320出土木製品実測図（2）

樹，16は針葉樹，いずれも歯の磨滅が著しく，後歯は痕跡すらとどめていない。15の台尻に径0.6cmほどの木栓がさし込まれているが，用途不明。16の前歯はやや左に偏して穿たれている。

曲物（17）　直径20cmの底板に高さ7.5cmほどの側板を4ヵ所で固定している。側板内面に刻み目は認められず，3段に縫っている。下端に幅1.5cmの箍を巻く。底板の表裏に不規則の切り目がある。

曲物底板（18）　直径13.2cmの底板で，針葉樹の柾目材。7個所に円孔があるが，うち4ヵ

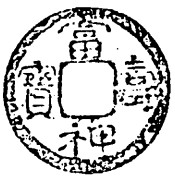
所には樺皮が残っている。また，１ヵ所には側板との縫いが観察できる。表面の一部に曲線の切り目が入っている。



第103図　火箸実測図

銅銭（第102図）

銅銭は富壽神寶と寛永通寶がそれぞれ１点ずつ出土した。前者はＳＤ2012から出土したもので，その大きさは垂直が2.26cm，水平が2.25cm，厚さが0.175cmである。弘仁９年（818）に鋳造されたが，皇朝十二銭としては４番目にあたり，平安時代に入ってからは最初のものである。奈良時代の３銭に比して品質が粗悪になり，ほとんど通用しなかったと言われているが，そのような銅銭が当地で出土したことは注目される。



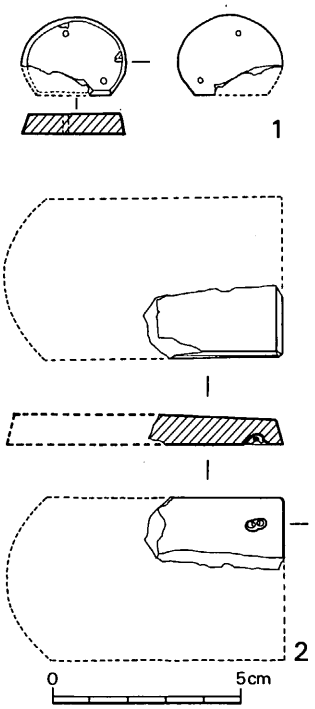
第102図　銅銭拓影（実大）

金属製品（第103図，図版98）

金銅製箸（１・２）金銅製の箸２点が出土した。１・２共に全長32.3cm，径0.45cmである。頭部は末開蓮花形を呈し，その下端には径0.5cmの鎖を通すための輪が付いている。１には鎖１個が連結している。１・２共に頭部には金箔が若干認められる。箸の下端はやや尖り気味である。１はＳＤ2011，２はＳＤ320から出土。

石製品（第104図・図版98）

石帯・白玉帯（１・２）１はＳＤ320の暗灰色砂礫層中から出土した。これは帯の中間を飾る丸鞆で，長さ2.8cm，幅2.1cm，厚さ0.4cmを測る。裏面に２ヵ所のかがり穴が穿っている。表面および側面はよく磨かれ，光沢を放っている。２はＳＤ2011の腐植土から出土した。乳白色の白玉製で，¼程の断片である。現存の中央部で厚さ0.7cmを測るが，後部にかけて徐々に厚味を増している。裏面にはかがり穴が１ヵ所認められる。これまでの調査で出土した白玉帯には，第43次（観世音寺推定僧房跡）



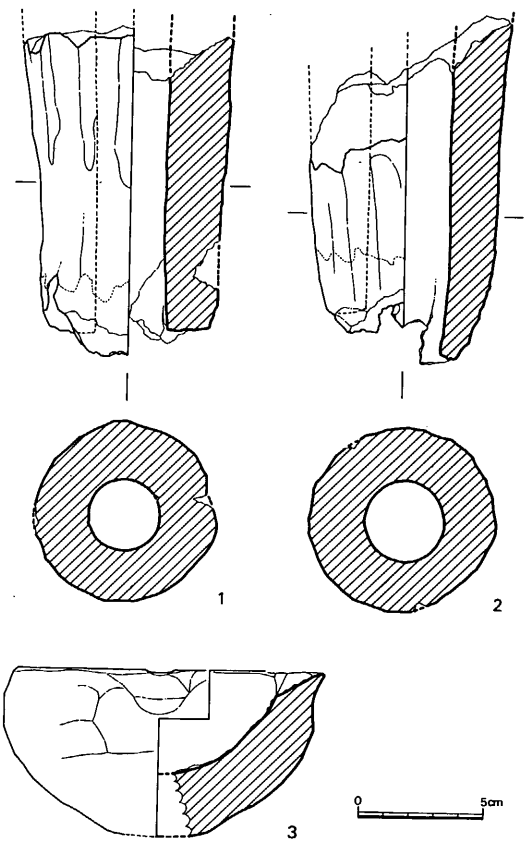
第104 図　石帯実測図

の調査において帯の末端部を飾る鉈尾がある。今回出土のものは，この鉈尾の前方部に類似しており，大宰府では２例目の出土となる。

土製品（第105図）

鞴羽口（１・２）　１は基部を欠失し，先端部は火熱を受けて暗灰褐色を呈する。外面は削り調整し，胎土には砂粒を多く含む。外径7.3cm，内径2.8cm，現存長13.0cmである。茶灰色土出土。２は先端部がやや狭くなり，火熱を受けて一部ガラス化し，銅滓が付着している。外面は削り調整し，胎土には大粒の砂粒を含む。外径7.4cm，内径3.1cm，現存長14.0cm。ＳＤ2010出土。

坩堝（３）　角状の口縁を持った丸底の坩堝である。口縁部には片口状のやや尖った注ぎ口がつく。器壁は厚く，外面は指頭押えの調整で，全体に淡茶灰色を呈する。内面は銅滓が付着し，黒色化している。胎土には砂粒を多く含む。復原口径11.6cm，復原器高 6.7 cm。ＳＤ2015Ｂ出土。



第105図　鞴羽口・坩堝実測図

小　結

検出遺構と遺物についての概略は以上述べたとおりであるが，さらに，昭和46年度に実施した第14次調査の所見を含め，ここで整理し，いくつかの問題点なりを記して結びとしたい。

はじめに第14次調査の結果について，若干その概要を記しておこう。第14次調査検出の大溝ＳＤ 320 は幅約12m，深さ約２ｍで，約39m 分を検出し，これはほぼ真南北に方位をとっていた。東岸には木杭と丸太による護岸施設も一部残存していた。大溝の最下層埋土である砂礫層中からは奈良期の土器が多く出土し，溝中から５点の木簡が発見された。

今回検出した主要な遺構である５条の溝について，位置関係と年代観をまとめてみたい。

まず位置関係をみると，南北大溝ＳＤ320の心は政庁南門の心から約 196ｍのところに位置する。これは第14次調査地点での溝心より約 2.0ｍ西へずれている。第14次調査地と本調査地とは約 100ｍの距離があり，溝肩に多少出入があったことを考慮すれば，2.0ｍのずれは

さほど問題とはならず，ほぼ真南北に方位をとる溝と考えても大過なく，むしろ若干西へずれることは，政庁の軸線が真北よりやや東偏していることからすると，それに合わせたとも考えることが可能である。

東西溝ＳＤ2015は幅約 3.0ｍで，12.0m 分を検出したが，やや北寄りの方位をとっている。これは南門の心より，約 196m南に位置している。この溝がさらに東へ延びることは確実で，方位について云々するのは早計であるが，北寄りの方位をとっていることは前記したＳＤ 320と同様に，政庁の軸線に合わせたとも考えられる。

ＳＤ 320が掘られた年代については，溝の最下層埋土中から出土した須恵器，および土師器に奈良期（８世紀代）のものが多くを占めていることなどを考慮すれば，少なくともこの頃には既に存在していたと考えられる。その廃絶については，上層埋土中に平安後半代（11世紀中頃）までの遺物を含んでおり，またこれは平安末（11世紀後半～12世紀前半代）の溝ＳＤ2010に切られていることから，おそくとも11世紀後半代にはその機能を失い，完全に埋没したと考えられ，第14次調査結果とも一致している。

ＳＤ2015については新・旧二時期に分けたが，埋土中から出土した遺物には年代的相違はほとんどみられず，単なる埋土の違いによるものとも考えられる。

埋土中から出土した土器は８世紀後半代に位置付けられるものである。

ＳＤ 320とＳＤ2015との関係は，ＳＤ2010 によって攪乱されているため直接知れないが，出土遺物や位置関係からみて，奈良期に同時存在し，ＳＤ 320に流れ込んでいたと考えられる。

ＳＤ2011・2012は出土した遺物から同時存在とみられ，またこれらがＳＤ 320に流れ込んでいたことは層位関係により明らかである。

この２条の溝からの出土遺物は少ないが，ＳＤ2011から，皇朝十二銭の一つである「富壽神寶」１点と，銅製の箸１点が出土したことは特記される。銅製の箸はＳＤ 320からも１点出土し，形状からして対になるものである。このことは，ＳＤ 320との関連を裏づける一つの資料であろう。年代についてはＳＤ 320溝埋土との関係から平安期のもので，埋土中から出土した土師器に，10世紀後半代のものがみられるので，廃絶の年代はこの頃に求められる。

政庁前面については官衙の存在する可能性が既に指摘されており，今回報告の日吉地区で新たに掘立柱建物６棟が検出されたことにより，不丁地区を含めたこの地域一帯に官衙が広がっていたことがさらに強くなってきた。

ＳＤ 320はほぼ真南北にのびていることが判明し，新たに，奈良期の東西溝ＳＤ2015が検出されたことは，ＳＤ 320の東側地域に不丁地区の官衙群がのびてくる可能性が出てきた。

そしてＳＤ 320の西側には，これまでの調査で顕著な遺構が検出されていないことを考慮すれば，ＳＤ 320の目的は第一義的には政庁の周囲の水を御笠川へ流すことであったと思われるが，これら官衙区域の西を限る重要な役割もあったのではなかろうか。

6　第77次調査

第77次調査は学校院東辺部の約450 ㎡について行った。これまで学校院東辺部の調査は第９・36・74次調査として実施している。ことに第９・74次調査地は今回の調査地の南方にあり，観世音寺と学校院との土地相論文書によって知られる境界の推定地におおむね相当し、それに関連すると考えられる溝・道路状遺構などが検出されている。また今回の調査地は第36次調査地の東側に接する。第36次調査では学校院の施設に相当すると思われる掘立柱建物６棟が検出されている。こうした過去の調査の結果から，今回の調査は学校院の建物の東への拡がりの追求，第９・74次調査で明らかにされつつある観世音寺との境界のいっそうの解明，などを目的として実施した。地番は太宰府町大字観世音寺字学業206-6 である。

調査は昭和56年９月８日に開始した。表土の直下に遺構面があり，９月12日には早くも遺構の検出にはいった。途中約半月を要して第76次調査地の埋め戻しを行ったが，11月16日には遺構の検出を終了した。その後写真撮影・実測図作成ののちに若干の補足調査を行い，12月８日にすべての調査を完了した。

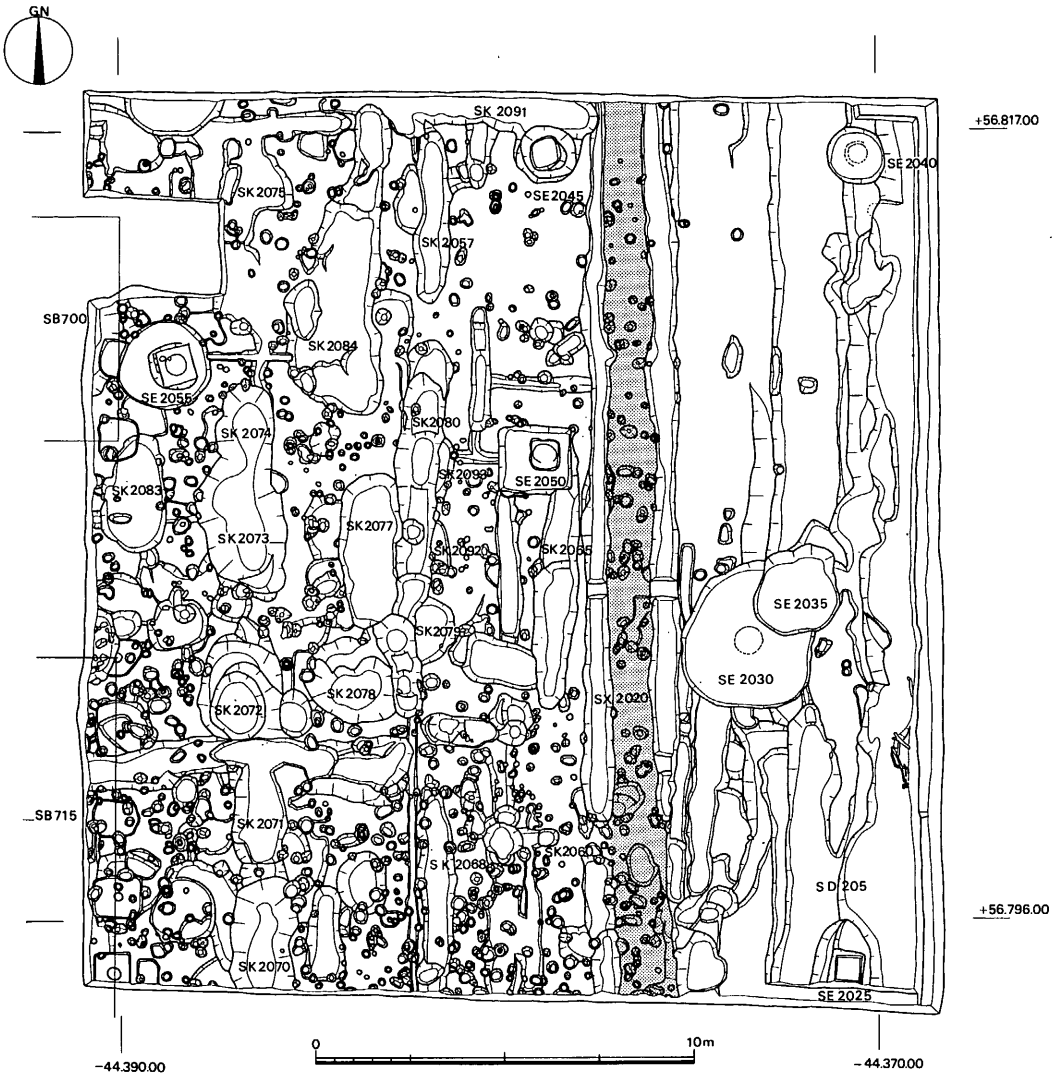
検出遺構

第77次調査では掘立柱建物２，溝２，築地状遺構１，井戸７，土壙・柱穴多数を検出した。これらの遺構の大半は旧耕作土・床土の直下で検出され，遺構の時期を層位的に区別することはできなかった。遺構の大部分を占める柱穴には，建物を復原しうる例を欠くので，以下にそれ以外の主な遺構について述べる。

掘立柱建物

SB700　発掘区の西辺部で柱掘方２個を検出した。その主要部はすでに第36次調査で検出しており，２間×６間以上の東西棟建物であることを考え，その柱間寸法を桁行1.95m（６尺５寸），梁行3.0 m （10尺）に復原していた。しかし西側の梁部は井戸ＳＥ726・740 によって切られ，梁行２間としたのは積極的な根拠に基づくものではなかった。今回検出した柱掘り方２個は東側の梁部に相当する。いずれも一辺の長さ１m前後の方形を呈し，深さ約0.5mをはかる。両者の柱間間隔は約２m である。したがって梁行は３間（柱間寸法６尺５寸）に訂正されるべきで，その結果３間×７間の東西棟建物であることが確定した。なお第36次調査で柱掘り方埋土上層から須恵器長頸壺が出土しており，時期を考える参考になる。

SB715　発掘区の西南隅で柱掘り方５個を検出したが，やはり第36次調査で調査されている。当時は１間以上×４間以上の南北棟の建物と推定されていたが，今回の検出によって梁行が２間であることを確認した。柱間寸法を桁行・梁行とも2.1 m （７尺）とする２間×４間以上の南北棟の建物になる。柱掘方には大小があるが，おおよそは一辺１m前後の方形である。



第106 図　第77次調査遺構配置図

溝

ＳＤ205　ＳＤ205は第９次・第74次調査で検出されており，今回の検出によって溝の総延長約100m を確認したことになる。溝はゆるやかな傾斜面に１段の幅1.7m ～1.9m ほどの肩部を設け，そこからさらに溝本体を掘り込んでいる。一部に護岸のための笘が残存するが，その面からみて溝の流れはさらに東にある。

築地状遺構

ＳＸ2020　２条の溝とその間の幅約1.0m ～1.25m の空間地からなる遺構で，溝ＳＤ205 の西側に並んで南北に走る。２条の溝のそれぞれの外側が地山であるのに対し，その間の空間地は積

み土からなる。これは，溝をある程度含む範囲をいったん掘込み地業状に掘り下げ，積み土を置いた後に両側溝を改めて設けたとしか考えられない。積み土は版築状をなすものではないが，茶灰色の粘質土を堅く積み上げている。こうした構造や，その位置が学校院の東限付近とみられることから，この遺構を築地として考えることも可能であろう。

井戸

ＳＥ2025　溝ＳＤ205 に切り込んでつくられた井戸で，その下底の内側の辺長約60cmをはかる方形横桟を残すのみであった。横桟は幅5.5cm，厚さ3cmの板材で組まれ，その周囲に方形プランの掘り方が認められた。発掘中に内部に倒れ込んだ板材を検出しており，方形縦板からなる井戸に復原される。井戸内からは青磁・白磁・土師器・木製品が出土した。

ＳＥ2030　ＳＤ205 の西岸を切り込んでつくられた井戸で，ＳＥ2035からは切られている。掘り方は径3.4m～4.0mの不整円形プランにつくられ，約2.5mの深さをなす。その中央に厚さ３cm～４cm，幅10cm前後の板材を桶様にめぐらした枠が３段残存する。１段目はその上半を削平されているが，下端内径72cmをはかり，板材21枚を使用している。２段目は上端内径62cm・深さ約80cm・板数20枚，３段目は上端内径65cm・深さ99cm・板数22枚を，それぞれ数える。井戸の分類からいえばⅣ－Ａ類に相当する。

ＳＥ2035　2.2m ～2.3m 前後の円形に近いプランの掘り方をもつ井戸で，桶様の枠にめぐらされたと思われる竹材を検出した。しかしすでに板材を抜き取られ，危険をともなうため全掘にいたらなかった。

ＳＥ2040　やはりＳＤ205の西岸に位置するが，ＳＤ205によって切られている。掘り方のプランは直径1.5mの正円をなし，深さ約2.4mをはかる。内部には厚さ３cm～４cm，幅８cm前後の縦板を桶様にめぐらした板枠が３段残存する。下端径約62cmをはかる１段目はその上半を削平され，東半分を抜き取られている。その抜き取られた範囲とＳＥ2040・ＳＤ205 の位置関係からみて，抜き取りはＳＤ205 の構築に関係すると思われる。周囲に竹タガが残存し，直径68cmをはかる。２段目は上端内径49cm・深さ約95cm，板数20枚からなる。一般に桶様枠は裾開きとなるが，３段目は逆に上端が外方に開いている。上端内径58cm・下端内径43cm・深さ84cm・板数18枚である。Ⅳ－Ａ類に分類される。

ＳＥ2045　直径1.7m 前後に復原されるほぼ円形プランの掘り方の井戸で，深さ約1.45mが残存していた。しかし板材はすでにすべて抜き取られている。掘り方の下底が約70cmの方形をなすことから，方形縦板の枠であったと推定される。なお掘り方中から多量の白磁・土師器・瓦類が出土したが，抜き取り後の所産で，ＳＥ2045の下限を示す遺物である。

ＳＥ2050　ＳＫ2065に後出する。一辺の長さ1.7m ～1.8m のほぼ正方形プランの掘り方が深さ約1.75mまで残存していた。掘り方の上端から約50cmの深さに一辺約75cmの正方形の掘り込みがみられ，その三方にわずかながら縦板の一部が残っていた。縦板の上端から底までは深さ約

1.2mをはかるが，板枠は完全に抜き取られ，わずかに直径65cmほどの竹タガが3段残っていたにとどまる。こうした痕跡から上部に縦板で方形の井戸枠を組み，その下部に円形枠を組み合せたもので，Ⅱ－A類に相当する。

SE2055　円形掘り方の中に，Ⅱ－A類に分類される井戸枠がつくられている。掘り方は直2.35m～2.45mの円形プランを呈し，深さ2.2mをはかる。上部の方形枠は内法の辺長約95cm，残存の深さ約80cmをはかる。側板には厚さ3cmほどの縦板を並べるが，その半分以上には竹を4～5片に裁断して立てている。竹の裏には厚さ5mmほどの薄板が控えに立てられている。その内側には上下二段の横桟がわたされ，隅に丸太材を入れて支えている。東西の横桟は角材を用い，両端の下部に切り欠きを設け，自然木を利用した南北の桟と組み合せている。下部の桶様の枠は2段からなる。上段は上端内径53cm・深さ約53cm・枚数19枚，下段は上端内径47cm・深さ約53cm・板数17枚をはかる。上下段ともに厚さ約1cmほどの薄板を用いている。側板に竹材を利用した井戸枠の例は観世音寺東面築地東辺部の調査で検出したSE1184がある。

土壙

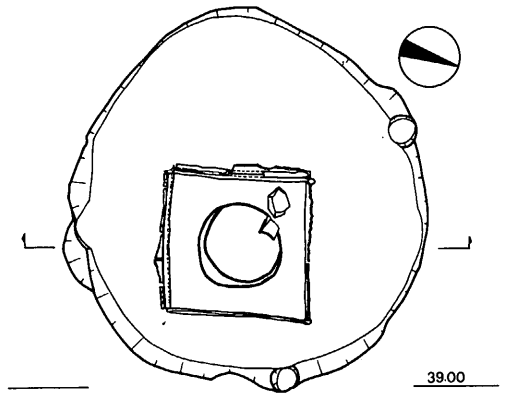
SK2070・2071・2072・2073・2074・2075　調査区の西辺近くに奈良時代の遺物を出土する土壙が集中するが，それらはおおむね南北方向に帯状に列をなしている。いずれも平面プランは不整形であるが，南北に伸びている。しかもSK2072とSK2073の間には直接的なつながりがみられないが，他の土壙はその端部がわずかにすぼまる程度で直接につながり，あるいはSK2074とSK2075のように小溝で連続させている例もみられる。さらにこれらの土壙群は掘立柱建物SB700・715の東側の柱掘り方からおおよそ1.5m～2.5mを隔てて位置し、建物はその東には及ばない。こうした点からみて，これらの土壙群は何らかの意味で相互に関連し，かつまた掘立柱建物の東を限るものであろう。

SK2068・2079・2092・2093・2057　前記の土壙群の東約3mにやはり南北に並ぶ一連の土壙群があり，出土遺物の時期も近い。その形状は一定しないが，SK2068・2057のように南北に細長い溝状のものが含まれるなど，小規模になる。二列の南北に並走する土壙群の間に同時期の遺構はみられない。

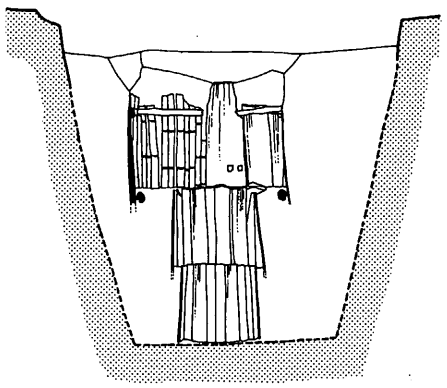
SK2060　東西に方位をとる隅丸長方形の土壙でその西半分を別の円形土壙によって切られている。残存長約1.0m，幅0.45～0.55mをはかる。0.1m前後の浅い土壙で，残存部の東半分は約0.2mと一段深くなる。その深まりを中心に土壙のほぼ全体から完形の土師器多数を検出した。

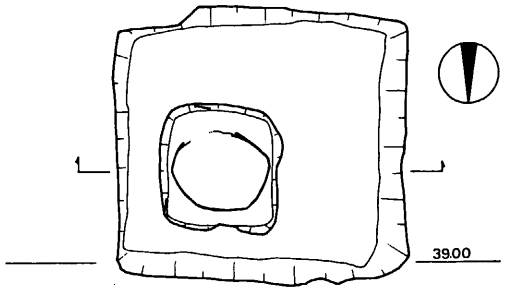
SK2065　SE2050に切られた土壙で，長さ7.3m・最大幅1.2m・深さ0.5mほどの細長い形状を呈する。約3mの間隔で西側に位置するSK2080と方位をほぼ等しくしており，関連すると思われる。

SK2077　長さ約4m・幅1.7mほどの丸味の強い長方形の土壙で，SK2080に切られる。多量の土師器・須恵器（大壺2個体分を含む）・瓦片などにまじって獣骨が出土している。

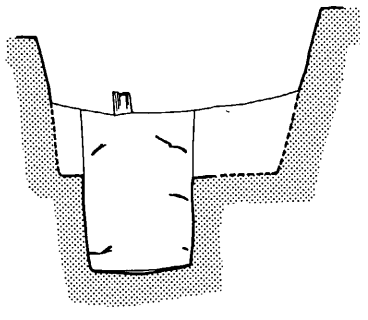


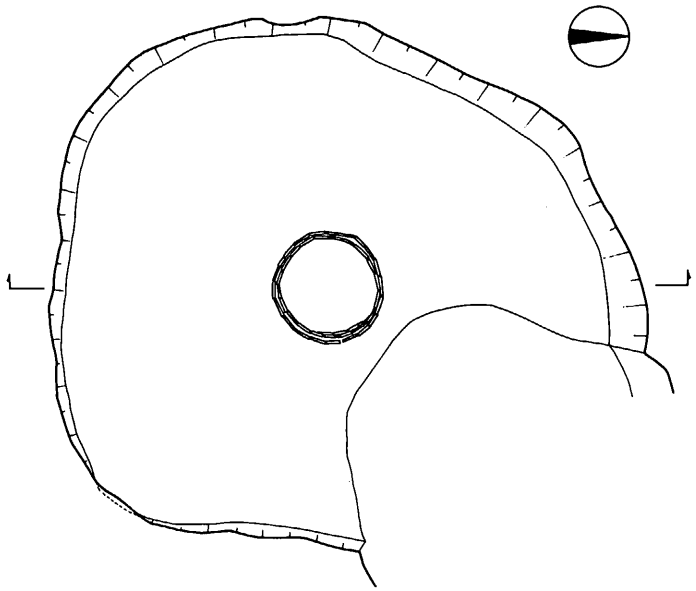
SE2055



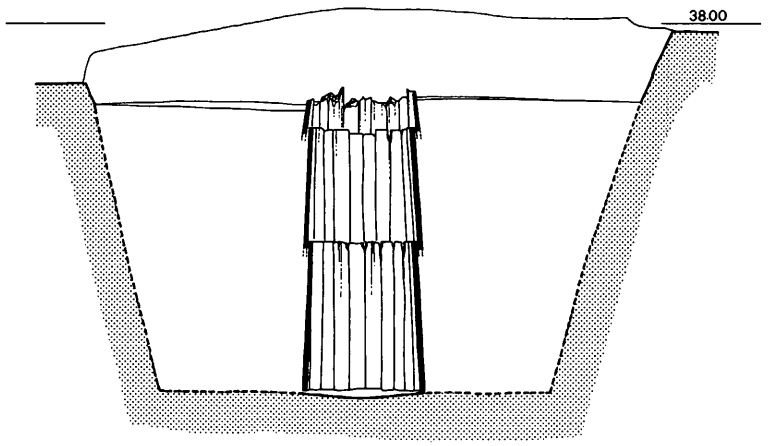


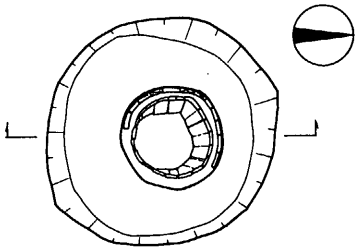
SE2050



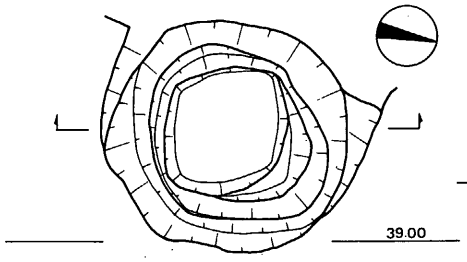


SE2030

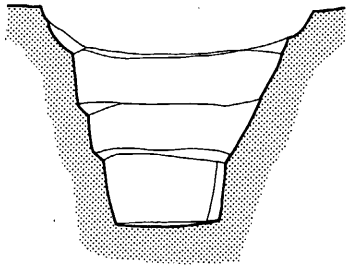


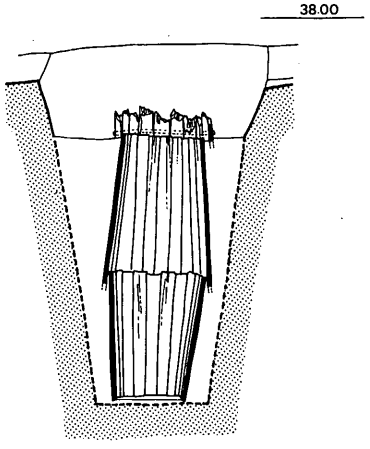


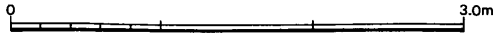
SE2040



SE2045



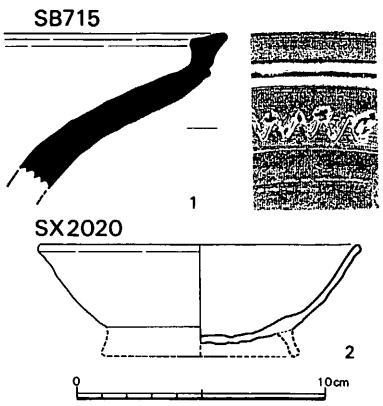




第107図　井戸実測図

ＳＫ2078　ＳＫ2077の南に位置する。長径2.3m・短径1.7mほどの不整形な長円形プランの土壙で，内部から土師器・緑釉陶器・鉄斧・銅銭などが出土している。

ＳＫ2083　長さ3.15m・幅1.3m～1.65m・深さ0.25m前後をはかる長円形状の土壙で，ＳＢ700の柱掘り方を切る。土壙内からはその南半を主体に多数の完形の土師器を検出した。



第108図
ＳＢ715・ＳＸ2020出土土器実測図

出土遺物

ＳＢ715出土土器（第108図）

須恵器

甕（１）　ＳＢ715の東北隅掘立柱掘り方から須恵器大壺の口縁部片が１点出土している。口頸部は大きく外反しつつ立ち上がり，口縁端部近くで直立するように上方に折れ，端部はその上端を平坦につくるが，やや内傾している。ほとんど砂を混じえない胎土を硬質に焼成している。淡い小豆色を呈するが，口縁上端を含め内面残部のほとんど全面に白色の自然釉がかかっている。外面には雑な波状文が１条で描かれている。小破片のために口径を復原するにはいたらなかった。

ＳＸ2020出土土器（第108図）

土師器

椀（２）　ＳＸ2020の基壇状積み土からはかなりの土師器・須恵器片が出土している。それらはおおむね奈良時代に属する土器であったが，細片化していて図示できない。２に示した椀は口径を復原しうる唯一の土器で，出土土器の下限を示す。口径12.9cm，底径7.5cmに復原され，底部外端に接して高台の付けられていた痕跡がみられる。

ＳＤ205出土土器・陶磁器（第109図，別表，図版99）

土師器・陶磁器・瓦類などが出土したが，溝にしては出土量が少ない。

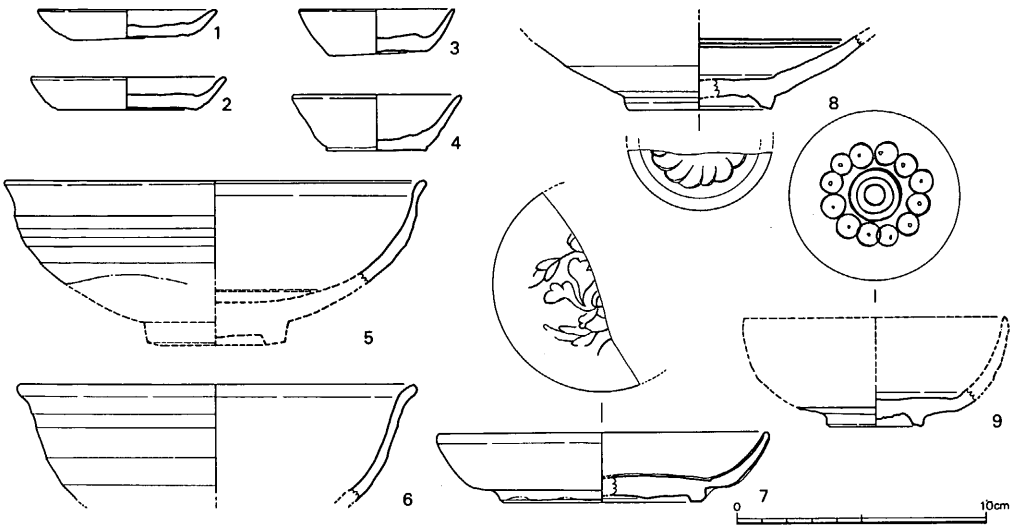
土師器

皿ａ（１・２）　口径7.1cm・7.9cm，器高1.2cm・1.3cmである。

皿ｂ（３・４）　口径6.1cm・6.9cm，器高1.8cm・2.3cmである。

白磁

椀（５）　体部が大きく開く椀である。体部外面はヘラ削りし，外反させた口縁部の内面はヘラ削りで仕上げている。体部と口縁部の境は稜を成す。灰白色の胎土にやや青味をおびた灰白釉がかけられている。



第109図　ＳＤ205出土土器・陶磁器実測図

青磁

皿（６）　龍泉窯系の皿で，口縁部を除いた外面はヘラ削りされ，内面見込みには草花文がスタンプされている。底部を除いた全面に黄緑色の釉が厚目に施されている。

椀（６）　外反させた口縁部はやや肥厚気味で，端部を丸くする形態的特徴を有する。外面の体部はヘラ削りされ，白灰色の胎土には淡緑色の釉が施されている。

高麗青磁

椀（８・９）　内外面をヘラ削りしており，内面込みには段を有する。高台畳付部は斜めに削り，見込みには花弁状の貼付け文様があり，内面には白象嵌を３条巡らす。全面に施された釉は灰緑色を呈する。９は小形の椀で，底部のみを残す。全面にヘラ削りされ，見込みは段を成す。高台の内部には刺突状のヘラ痕がある。全面に灰色味の強い緑色の釉が施されているが，畳付部はカキ取られている。見込みにスタンプされた三重の同心円文とその周囲に円文12個が配され，白象嵌されている。周囲の円文の中心には黒象嵌の点がある。体部下位にも白象嵌の圏線１条がめぐる。

ＳＥ2025出土土器・陶磁器（第110図，別表）

井戸枠最下段の横桟のみの残存にとどまるため，土師器・陶磁器の出土量は少ない。

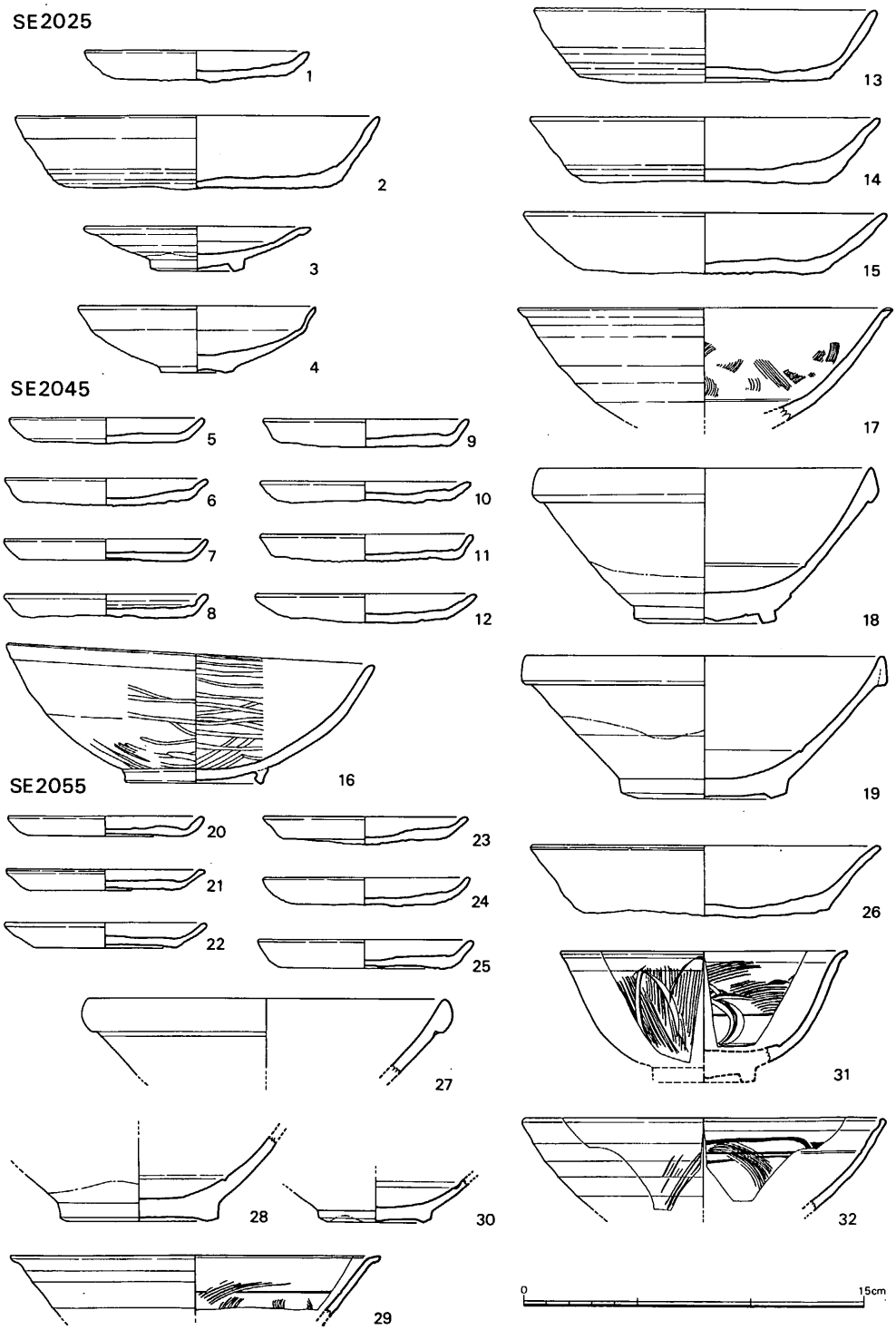
土師器

皿ａ（１）　口径10.0cm，器高 1.4 cmである。底部は糸切りされ，板状圧痕がみられる。

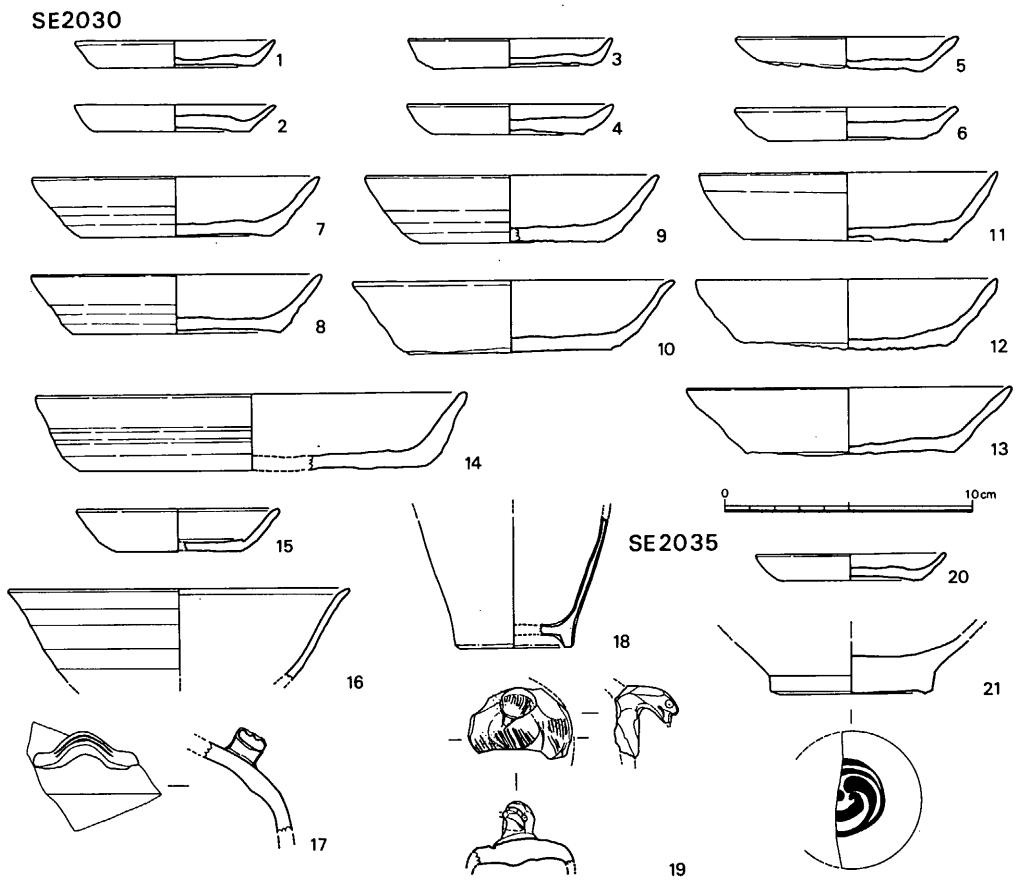
杯ａ（２）　口径16.2cm，器高 3.3 cmである。底部は糸切りされ，板状圧痕がみられる。

白磁

皿（３・４）　３はⅢ類のもので，本来見込みの釉をカキ取るものであるが，これにはカキ



第110図　ＳＥ2025・ＳＥ2045・ＳＥ2055出土土器・陶磁器実測図



第111図　ＳＥ2030・ＳＥ2035出土土器・陶磁器実測図

取りがなく，出土点数は非常に少ない。4はⅥ－1・a類で基本的には平底であるが，内面を削って高台風にしている。その他に白磁椀Ⅵ類とⅤ－4・b類の小片が出土している。

ＳＥ2030出土土器・陶磁器（第111図，別表，図版100）

広い井戸掘り方から多くの土師器が出土したが，ほとんどは小破片である。図では6のみが井戸上層からの出土で，他はすべて井戸中から出土した。

土師器

底部はすべて糸切りされ，板状圧痕がみられる。

皿a（1～6）　口径8.0cm～9.0cm，器高1.1cm～1.3cmである。

杯a（7～13）　口径11.6cm～13.0cm，器高2.4cm～2.9cmである。

大杯（14）　口径17.4cm，器高3.1cmである。

陶磁器

白磁椀Vが1点，Ⅸが1点，皿Ⅸ－1が1点，不明が2点，水鳥1点，龍泉窯系青磁椀Ⅰ－5・aが1点，Ⅰ－5・bが2点，杯Ⅲ－4・bが1点，壺が1点，同安窯系青磁椀Ⅰ－1・bが1点，青磁四耳壺1点がある。

白磁

皿（15）　Ⅸ－1類のものである。口縁部に厚く油煙が付着している。

椀（16）　Ⅸ類のものである。いわゆる口禿で，外面は口縁端部までヘラ削りしている。

水鳥形合子（19）　水鳥を形どったもので，その全形については知り得ないが，ここでは合子の蓋として報告する。頭部，翼などにはあたかも水面を泳ぐ水鳥の様にきわめて写実的な表現がみられる。スタンプされた目先端部を欠失しているが，細く長い嘴は表情豊かである。胎土は黒い粒子を含む濁白色のやや粗いもので，外面にはやや青味をおびた白色の釉がかけられ，頭頂部と翼には褐斑がある。全体の成形はヘラとナデにより仕上げられており，頭頂部と翼部には羽根の表現をヘラで刻線を入れる。内面は露胎でヨコナデ痕がみられることから，体部をつくった後，頭部を貼付けたものである。

壺（17・18）　18はいわゆる砧形の青磁であろう。高台径は4.8㎝に復原される小形のものである。器肉は全体に薄手に作られ，胎土は暗灰色を呈し，黒い粒子を含む緻密なものである。粉青色の釉が全面に施され，とくに外面には厚く施されている。高台畳付部および端部は露胎となっている。貫入はみられない。17は四耳壺の肩部片である。耳1個が残存し，その上面には2条の凹線を入れる。肩部と体部の境には稜をもつ。胎土は灰色を呈し，黒い粒子を含む。外面には淡青色釉が厚目にかかり，貫入を伴う。内面の肩部以下は露胎となる。

ＳＥ2030出土土器・陶磁器（第111図・別表）

ＳＥ2030に切り込む井戸で，井戸枠はすでに抜き取られていた。危険をともなうため全掘にいたらず，遺物の出土は少ない。

土師器

皿ａ（20）　口径7.6cm，器高1.1cmの小形の皿で，底部は糸切りされ，かすかながら板状圧痕をみとめることができる。

白磁

椀（21）　Ⅵ－1・a類である。高台の見込みは若干ケズるだけで，そこには尾の長い右巻きの三つ巴文の墨書がある。

ＳＥ2045出土土器・陶磁器（第110図・別表，図版101）

井戸枠はすべて抜き取られていたが，埋土中から多量の土師器および瓦器・陶磁器・瓦類が出土した。井戸の下限を示す資料である。

土師器

皿ａ（5～12）　口径8.6cm～9.8cm，器高0.7cm～1.3cmである。底部は糸切りにされ，板状

圧痕がみられる。

杯a（13～15）　口径15.1cm～16.0cm，器高2.7cm～3.2cmである。底部は糸切りされ，板状圧痕がみられる。

瓦器

椀（16）　丸味をもってつくられた体部に小さな高台のつけられる椀で，器面の3分の2ほどは白色を呈するが，他の部分は黒色をなす。器表の内外をヘラミガキしている。底部から体部の下半にかけて板状圧痕がみられ，丸底の杯に共通した特徴を示す。

陶磁器

白磁椀Ⅳ－1・aが1点，Ⅳ－1・bが1点，Ⅴ－1が1点，Ⅴ－2・aが1点，Ⅴ－4・aが2点，Ⅴ－4・bが6点，Ⅴ－3・aが4点，Ⅷ－2が3点，不明が9点，白磁皿Ⅵが1点，Ⅷが2点（内1点は無文），龍泉窯系青磁椀Ⅰ－1が1点，同安窯系青磁椀Ⅰ－1・bが2点，その他に黄釉と青磁の壺片がある。

白磁

椀（17～19）　17はⅤ－4・b類のものである。体部の内外面をヘラ削りしている。内面は1回の削り幅が広く，2回に分けて削っている。櫛目は短かく施文している。18はⅣ－1・b類のもので，体部の中位以下は露胎となるが，その部分には白化粧土を施す（底部を除く）。19はⅣ－1・aで，白灰色の釉には小さな貫入を全面に伴う。

ＳＥ2055出土土器・陶磁器（第110図，別表，図版101）

井戸埋土・井戸枠中から多量の土師器・陶磁器・瓦類が出土したが，小破片が多い。図示した例は28・32が井戸埋土上層から，他は井戸中からの出土である。

土師器

皿a（20～25）　口径8.7cm～10.1cm，器高0.7cm～1.5cmの範囲にあるが，口径9.0cm・器高1.1cm前後の例が多い。糸切りされた底部には板状圧痕がみられる。

杯a（26）　口径15.4cm，器高3.2cmである。底部は糸切りされ，板状圧痕がみられる。

陶磁器

白磁椀Ⅳ－1・aが15点，Ⅴ－3・aが2点，Ⅴ－3・bが1点，Ⅴ－4・aが3点，Ⅴ－4・bが4点，Ⅷ－2が1点，不明が5点，白磁皿Ⅱ－1が2点，Ⅲが3点，Ⅵ－1・aが2点，Ⅷ－1が1点，不明が1点，龍泉窯系青磁椀Ⅰ－2が1点，Ⅰ－3が1点，Ⅰ－6・bが1点，不明が1点，同安窯系青磁椀Ⅰ－1・bが2点，Ⅰ－aが1点，同安窯系青磁皿Ⅰが1点，越州窯系青磁椀Ⅰ－2が2点ある。

白磁

皿（30）　Ⅱ－1類で，高台部の外面までを施釉する。

椀（27～29）　27・28はⅣ－1・a類のものである。灰白色の釉には貫入を伴なう。29はⅤ

—4・b類で，内面の体部上位に沈線1条をめぐらす。

青磁

椀（31・32）　31は龍泉窯系椀Ⅰ—6・b類である。体部の内外面はヘラケズリされた後，密な櫛目を入れ，外面には蓮弁文，内面には草花文が片切彫りされている。釉はやや厚目で，くすんだ緑色を呈する。32は外面に櫛目，内面に櫛目と丸刀彫り風の文様がある点，同安窯系Ⅰ—1・b類とすることができるが，外反させた口縁部の内面に凹線を入れ，端部を平坦にすることにやや異った特徴がみられる。胎土は暗灰色で，釉は淡緑色を呈する。

ＳＫ2070出土土器（第112・113図，別表，図版102）

須恵器・土師器が出土した。ことに土師器の出土量が多い。

須恵器

杯蓋（1～4）　いずれも½～¼ほどの破片で，口径16.6cm～17.7cmに復原される。天井部はヘラ削りされ，3にはナデ調整が加えられている。1・4は硯に転用されている。

杯（5・6）　無高台の杯で，体部は直線的というよりもわずかに内弯しつつ立ち上がるが，口縁部付近でやや外反気味となる。ヘラ切り離しされた外底は未調整のままである。5の外底には3方向の条線がみられ，板状圧痕の可能性がある。

皿（7）　体部の内外と内底はヨコナデ・ナデで調整されているが，外底はヘラ切り離しのままである。

硯（22）　円面硯の小破片。陸部の径が6.7cm，海部の外側をめぐる外堤の径が10.8cmほどに復原される小形の硯である。脚部に透孔を有するが，残りの悪さから間隔は不明である。

土師器

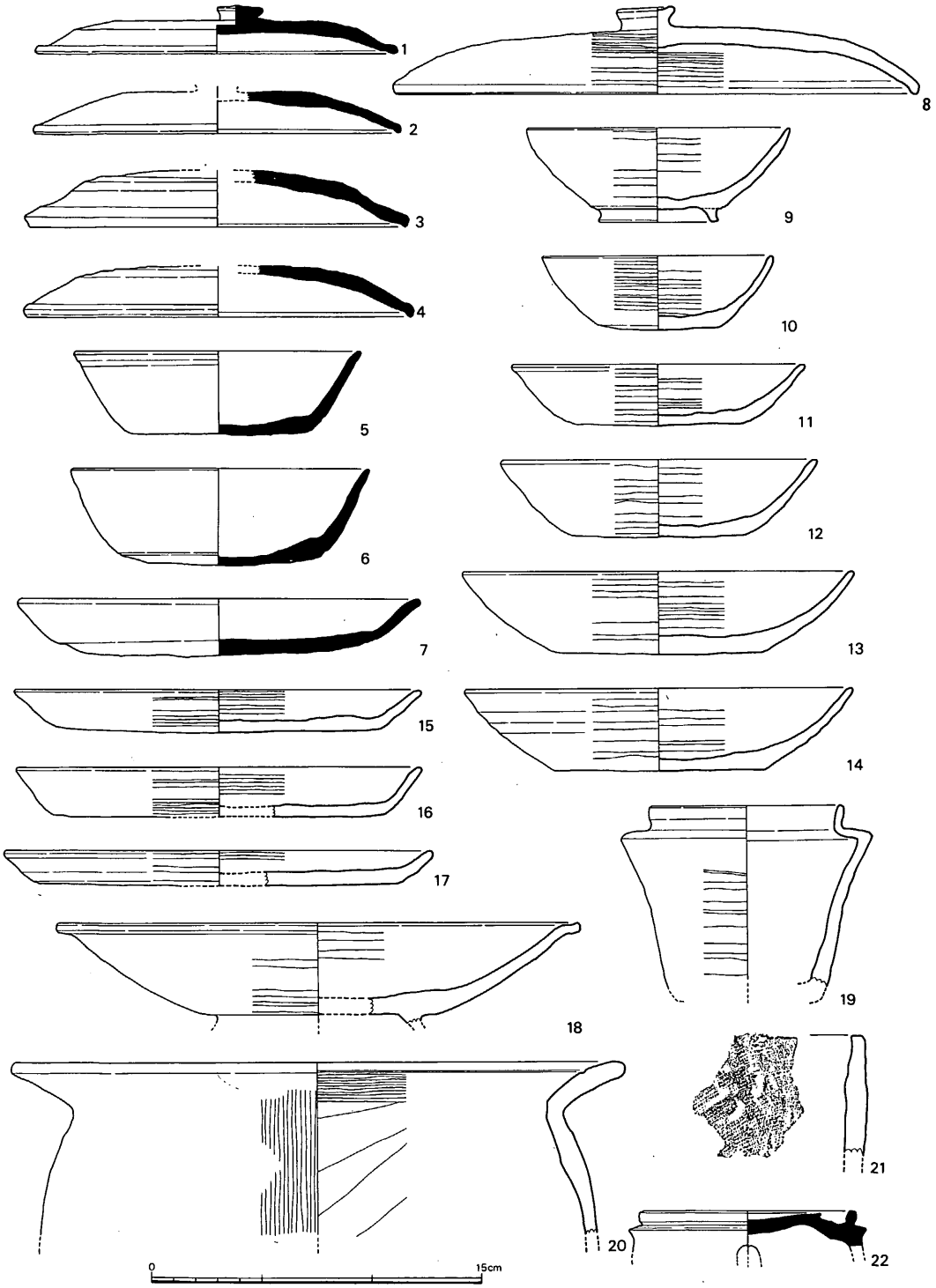
多量の土師器が出土したが，その多くは赤茶色を呈する。比較的硬く焼成した例が多いことも共通している。

杯蓋（8）　大形の杯蓋で，口径23.8cmである。ヘラ切り離しされた天井部はヘラミガキおよび横ナデ調整されている。その他の部分も同様に横ナデ調整し，さらにヘラミガキを加えている。そのため天井部と体部との境が不明瞭となり，全体に丸味の強い形態をなす。口縁端部の内側には浅い沈線がめぐらされ，端部の形状を断面三角形にしている。

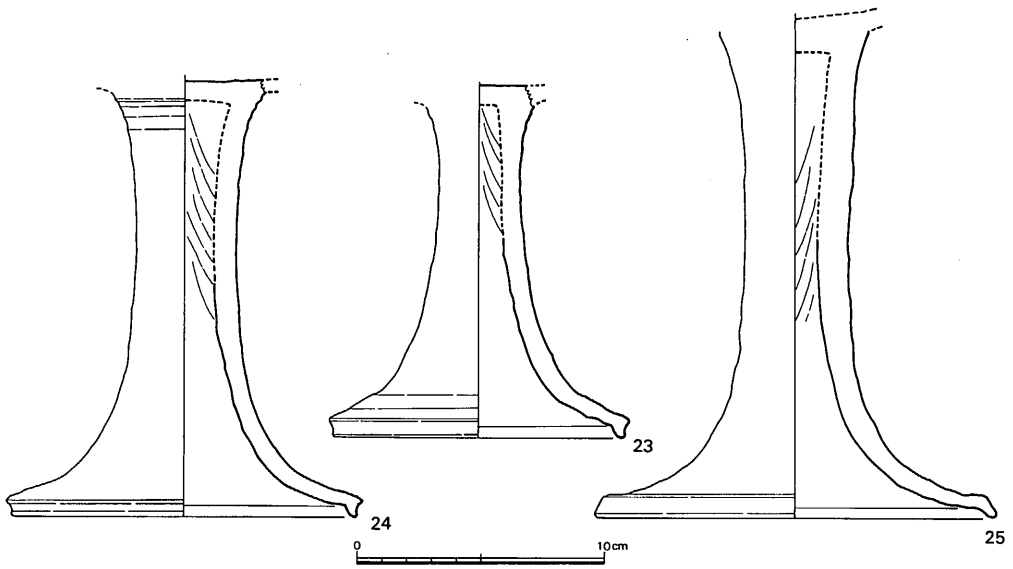
杯（10～14）　口径10.4cm～17.9cm，器高2.8cm～4.3cmである。器形に大小はあるが，いずれもヘラ切り離しされた底部から内弯気味に体部が立ち上がる。体部は横ナデで調整した後にヘラミガキを加えている。

椀（9）　小形の椀で，やや内彎気味に立ち上がる体部は口縁近くですぼまり，丸味を強めている。内外ともにヘラ削りおよび横ナデの調整がみられる。底部の端から3mm～5mmほど内側に，外向する高台が付けられている。

皿（15～18）　15～17は口径18.3cm～19.4cm，器高1.6cm～2.3cmの無高台の皿である。いずれ



第112図　ＳＫ2070出土土器実測図（１）



第113図　ＳＫ2070出土土器実測図（2）

も外底をヘラ切り離しにし，内底・体部をヘラミガキしている。15・16は他と色調が異なり，15は赤味の強い茶褐色，16は淡茶黄色を呈する。これに対し18はヘラ切りされた底部の内外に大きく外向する低い高台のつく皿に復原される。口径23.6cm，高台を除いた器高 4.2cm。体部はわずかに内弯しつつ大きく外方に拡がり，口縁端部付近で外方に折れ曲がる。端部の上面には幅 5 mmほどの凹帯がめぐらされ，杯蓋の端部を思わせる。体部の内外はヘラミガキされている。観世音寺大房跡のＳＫ1106ではほぼ同じ口径をもつ大形の椀を共伴しており，あるいは蓋として復原すべきかも知れない。

坩（19）　口径8.9cm，肩部径10.7cm，器高8.9cmほどに復原される坩の小破片である。鋭く屈折する肩部に短かい口頸部が直立する。内外ともに横ナデ調整されているが，体部外面は下に向かうにしたがってヘラミガキが強くなる。

甕（20）　淡茶色を呈するが，口縁端部付近は赤茶色をなす。口縁部内外面および体部外面は刷毛目調整が施され，体部内面は粗くヘラ削りされている。

高杯（23～25）　大・中・小の三種類が数点出土している。いずれも脚部のみで，これに対応する杯部については不明である。23は脚端径11.6cm，脚高13.3cmを測る。大きく拡がる脚部の端部外面は幅広の凹みがめぐらされたような形状をなす。24は脚端径13.8cm，脚高14.9cmで，23と同形をなす。25は脚端径16.0cm，脚高19.3cmの大形の例で,脚の端部の稜が不明瞭となり，やや内向していた下端部が大きく外に向かって拡がっている。いずれも横ナデで調整している。

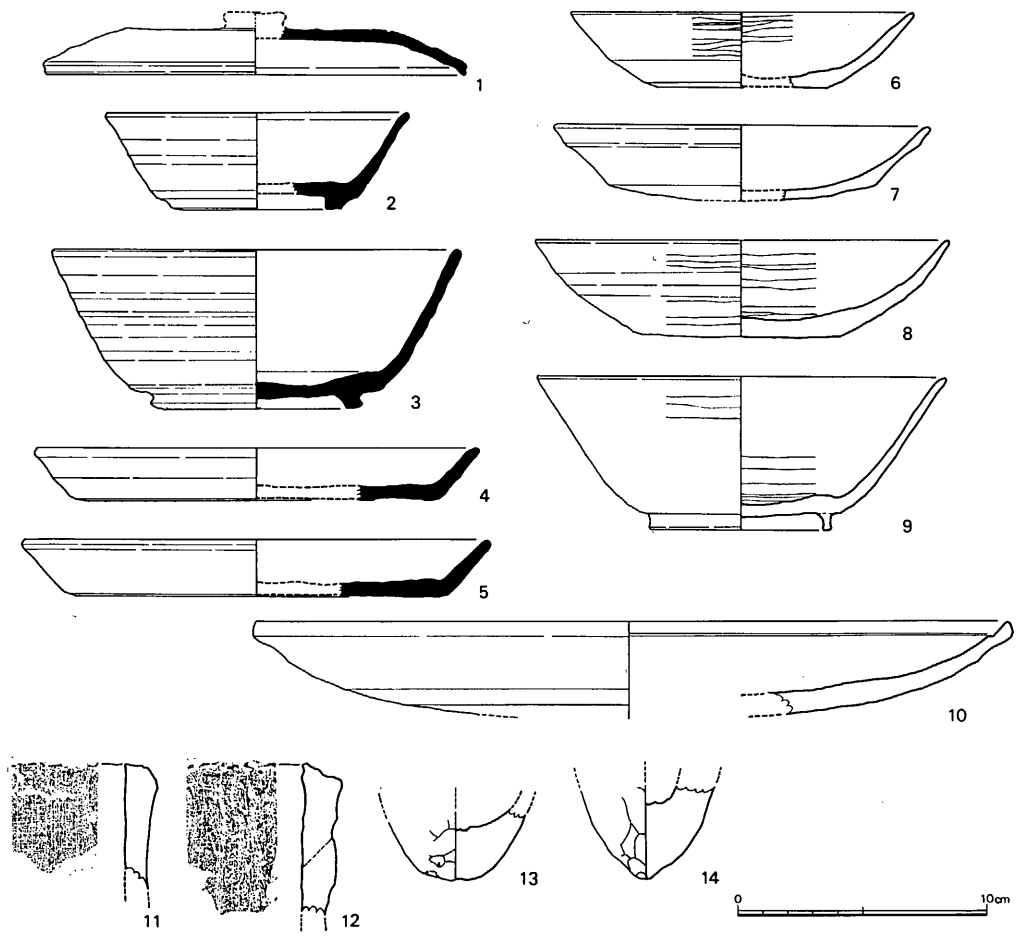
塩壺（21）　口縁部の小片で，口径を復原できない。外面に指押えの成形痕，内面に型抜きの布痕がよく残っている。布目は拓影の左上端付近で1㎝単位経糸18本・緯糸8本を数える。右側ではいっそう目が細かくなる。雲母を含まない胎土を堅緻に焼成している。

ＳＫ2071出土土器（第114図，別表，図版103）

須恵器・土師器が出土したが，ことに土師器の出土量が多い。

須恵器

杯蓋（1）　天井部をヘラ削りし，体部を含めて全体に横ナデ調整を加えている。外縁下端部は明瞭に断面三角形をなす。天井部にはつまみの貼り付け痕が残り，つまみを有する蓋であることを知る。硯として転用されたため，天井部内面はナデが消えるまでに平滑になり，一部に墨の付着がみられる。



第114図　ＳＫ2071出土土器実測図

杯（2・3）　いずれも低い高台を有する杯である。高台はヘラ切り離しされた底部の外端よりもやや内側に付けられる。全体をナデで仕上げている。2は小形の杯で，直線的に立ち上る体部は口縁部近くでわずかに外反する。高台も内側にすぼまっており，外見上は体部と高台とが一体となっている。8の体部はやや内弯気味に立ち上がる。高台も低いながら大きく外向して付けられている。

皿（4・5）　口径17.8cm・18.8cm，器高2.2cm・2.3cmに復原される皿の小破片で，ヘラ切り離された底部を含め全体をナデで調整している。

土師器

出土した土師器は，土壙が連続することもあり，ＳＫ2070出土土師器と色調・胎土・焼成など同様の特徴をもつ。

杯（6～8）　口径13.8cm～16.8cm，器高3.0cm～3.9cmである。磨滅のため調整の不明瞭な7を含め，いずれも体部の内外面をヘラミガキしている。底部はヘラ切り離しされている。6・8は平坦な底部とやや内弯気味に立ち上がる体部からなるのに対し，7の底部はやや丸味をもち，体部の形状も異なっている。

椀（9）　平坦にヘラで切り離され，底部と直線的に立ち上がる体部からなる。体部は内外面ともにヘラミガキされる。底部外端のわずかに内側に直立する細く低い高台が付けられる。

高杯（10）　高杯の杯部片で，口径30.3cmに復原される。外面にはヘラ削り痕が残るが，そこを含め残部の全体にヘラミガキが認められる。口縁部内面には沈線がめぐらされている。土壙がＳＫ2070と連続することから，そこで出土した脚部との関係が考えられるが，暗茶色を呈する色調に差違がみられる。

塩壺（11～14）　11・12は口縁部の小片で，赤茶色～灰茶色を呈する。外面には成形の指頭圧痕，内面には布痕が残る。布目はいずれも1㎠単位で経糸30本前後・緯糸15本を数える。微粒を含む胎土を堅緻に焼成している。11の胎土には絹雲母が含まれ，12の外面の一部には布痕が認められる。13・14は底部片で，ことに14は尖り底をなしている。調整・胎土・色調などは11・12に共通している。

ＳＫ2072出土土器（第115図，別表，図版103）

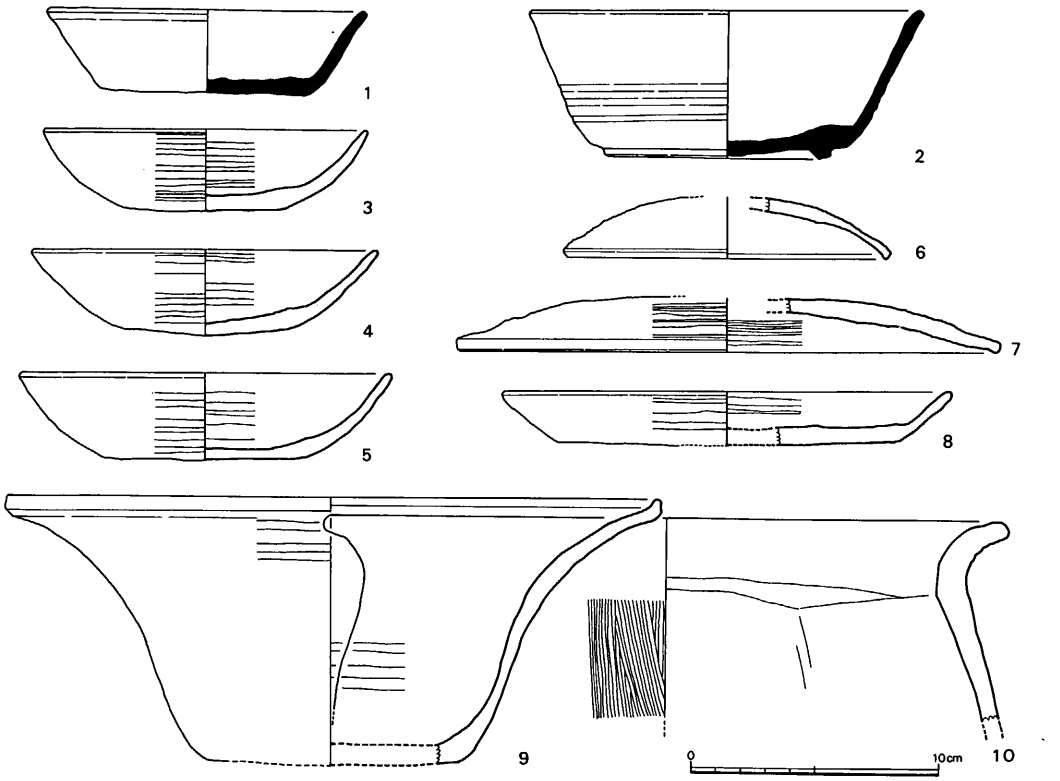
須恵器・土師器が出土したが，量的に土師器が多い。

須恵器

杯（1・2）　1は無高台の杯で，直線的に立ち上がる体部は口縁近くでわずかに外反する。外底にかすかに条線がみられ，板状圧痕の可能性がある。2は底部外端のやや内側に低い台形高台を有する。両例ともに底部はヘラ切り離しされ，体部の内外を横ナデ調整している。

土師器

杯蓋（6・7）　6は口径13.2cmに復原される。小形の蓋で，天井部から体部にかけての丸



第115図　ＳＫ2072出土土器実測図

味が強い。体部外面をヘラミガキしているが，内面はナデで調整されている。７は口径21.7cmに復原される大形の蓋で，６ほどではないが丸味をもち，天井部と体部との境が不明瞭になっている。全体にヘラミガキがみられる。

杯（３～５）　口径13.1cm～15.0cmである。いずれもヘラ切り離しされた底部からやや内弯する体部が立ち上がり，内底・体部をヘラミガキで仕上げている。５の外底には細線で「〆」状に陰刻されている。

皿（８）　口径18.0cmの皿で，ヘラ切り離しされた外底を含め全体をヘラミガキで仕上げている。

鉢（９）　大形の鉢で，口径26.0cm，器高10.8cmほどに復原される。体部は強く外反し，また口縁端部をつまみあげている。内面に油煙状の黒色物が付着している。器表に磨滅がみられるが，全体をヘラミガキしたことが観察される。高台の有無は明らかでないが，観世音寺大房出土例にはいずれも高台を付けている。

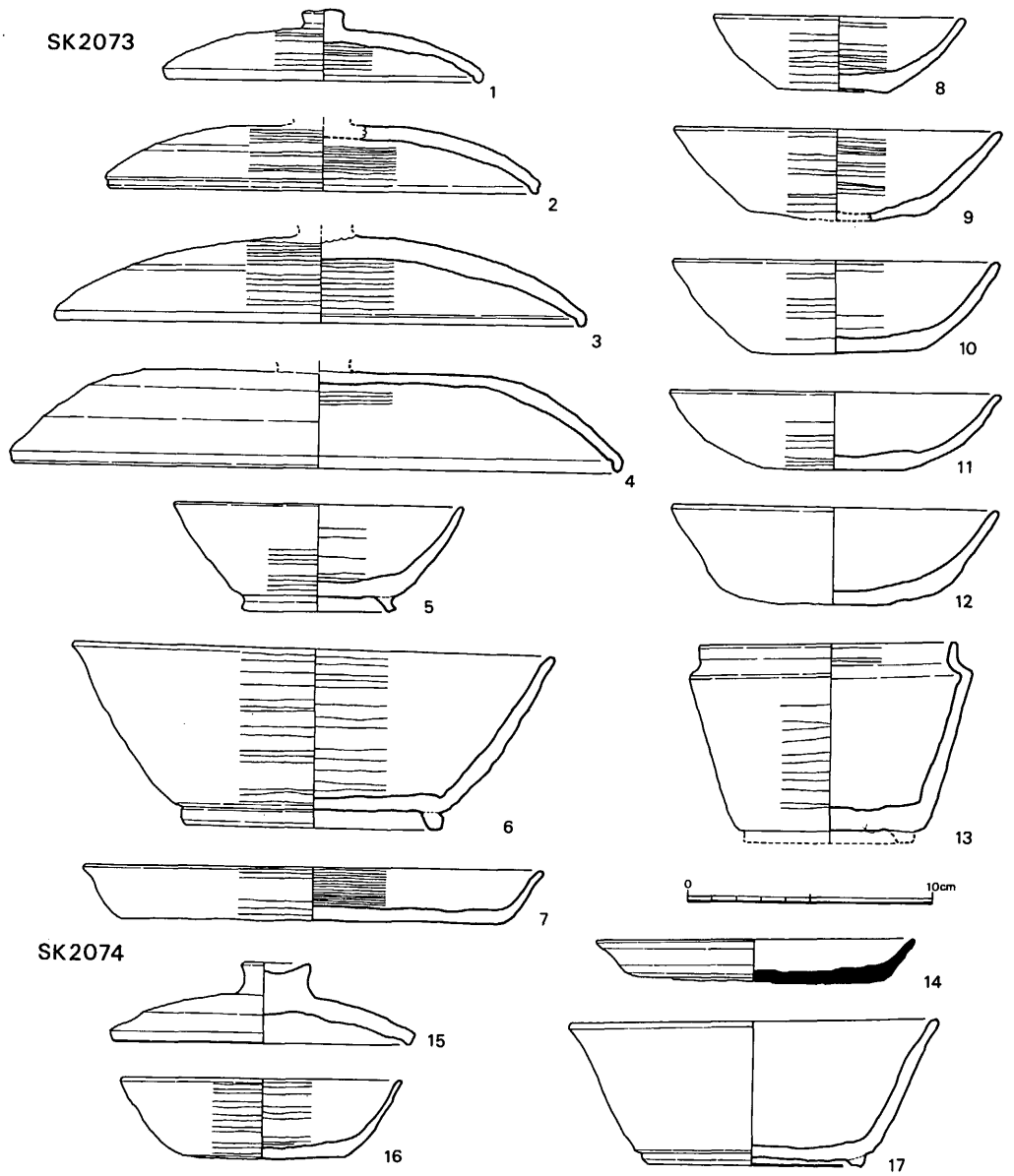
以上の３～９を含めた出土土師器の色調・胎土・焼成などはＳＫ2070・2071に共通している。

甕（10）　淡い茶褐色を呈する甕で，口縁部に横ナデ調整がみられるが，胴部の外面を刷毛

目で調整し，内面はヘラ削りを施している。

ＳＫ2073出土土器（第116図，別表，図版104）

須恵器・土師器・緑釉陶器が出土した。土師器の出土量が多いのに対し，須恵器は図示しうるような個体を欠いている。土師器の製作上の手法はやはりＳＫ2070に共通している。



第116図　ＳＫ2073・ＳＫ2074出土土器実測図

土師器

杯蓋（1～4）　いずれもつまみを有する蓋で，口径は12.8cmから24.8cmまであり，器形の大小バラツキが著しい。ヘラで切り離された天井部を含め全体にヘラミガキを施しているため，天井部と体部との境は明瞭でない。また口縁下端部を断面三角形状に作っている。3は他に比べて赤味が強く，胎土の粗砂も目立つが，丁寧なヘラミガキで器表を整えている。4はつまみが剝離しているが，その剝離の範囲に板状圧痕が残っている。それに対応して天井部内底にはナデがみられる。

杯（8～12）　口径10.3cm～13.4cm，器高3.1cm～4.0cm。8～11は平坦にヘラ切りされた底部から内彎気味に体部が立ち上がり，外底を除いた全面をヘラミガキしている。9の底部は他にくらべてやや平坦さを欠くが，底部と体部とを境する稜は明瞭に認められる。8の内底のヘラミガキは内底の中心から渦状に施されており，暗文風になっている。8の外底には「＋」字状に，10の外底には「米」字状に，それぞれ細線の陰刻がみられる。これらに対し，12は凹凸の著しい外底から直線状の体部が立ち上がり，横ナデ・ナデで調整している。

椀（5・6）　5は口径11.9cm，器高4.4cmの小形品。直線的に立ち上がる体部は口縁近くでわずかに内彎する。体部内面は全体に凹状につくられ，丸味をもつ。内底・体部はヘラミガキされている。底部の外端よりもわずかに内側に大きく外向する高台がつくられ，外底・高台をナデで調整している。6は口径19.6cm，器高7.4cmの大形の椀で，体部の立ち上がりは直線的である。外底から体部下半にかけては回転ヘラ削りされ，内底・体部の内外面をヘラミガキしている。底部と体部との境は明瞭な稜をなし，部分によって相違するが，底部外端から2mm～5mm内側に低い高台を貼付している。

皿（7）　口径18.7cm，器高2.2cmの皿で，外底をヘラで切り離し，器表の全体を丁寧にヘラミガキしている。

坩（13）　坩はＳＫ2070から小片が出土している。それにくらべて13は口径10.5cm，肩部径11.5cmと横に大きくなるが，高台を除いた器高は逆に7.7cmに減じている。胴部が直線的につくられる器形をとり，安定感がある。体部内面を横ナデ調整しているが，口縁部内面および外面の全体はヘラケズリで仕上げられている。高台は残らないが，外底に明瞭な剝離痕があり，高台を有していたことが知れる。

ＳＫ2074出土土器（第116図，別表，図版103）

ＳＫ2074はくびれ部をもって別遺構としているが，ＳＫ2073と連続する土壙で，出土土器の特徴も共通している。

須恵器

皿（14）　口径13.0cmの皿で，砂粒をほとんど含まない胎土を堅緻に焼成している。外底をヘラ切り離しし，内底・体部を横ナデ・ナデで仕上げている。

土師器

蓋（15）　完形の椀蓋で，天井部には口径にくらべて接合部の径3.3cm，高さ1.4cmと不釣合に大きなつまみがつけられている。天井部外面はヘラ削りされ，体部外面および内面に横ナデの調整がみられる。

杯（16）　小形の杯で外底は平坦にヘラ切り離しされ，内弯気味に立ち上がる体部および内底をヘラミガキしている。

椀（17）　ヘラ削りされた底部に低い高台を付けた椀で，直線的に立ち上がる体部が口縁近くでやや外反し，器形を大きくしている。磨滅のため不明瞭であるが，体部および内底をヘラミガキした可能性が強い。

ＳＫ2060出土土器（第117図，別表）

隅丸長方形の土壙中から多数の完形の土師器が出土した。その他に小片であるが，白磁椀・越州窯系青磁が伴出しており，白磁椀Ⅷ－２類に内底見込みをカキ取りにした例が含まれている。

土師器

皿ａ（１～８）　底部のヘラ切り離し法にヘラ切り，糸切りの両様がある。ほとんどの底部に板状圧痕がみられる。１・２はヘラ切りの例で，口径9.4cm～10.1cm，器高1.4cm～1.5cmである。３～８は糸切りされており，口径8.8cm～9.5cm，器高0.9cm～1.4cmである。

杯ａ（９～11）　口径15.1cm～15.7cm，器高2.6cm～3.1cmである。底部はすべて糸切りされ，９を除いて板状圧痕がある。

丸底の杯（12・13）　口径15.2cm～16.9cm，器高3.3～3.5cmである。いずれもヘラ切り後に底部を丸く突き出している。内面はミガキによって滑らかに調整されている。

ＳＫ2065出土土器（第117図，別表，図版105）

土師器・陶磁器・瓦類が出土した。陶磁器はいずれも小片で，同安窯系青磁椀Ⅰ－２・ｂ類１点を除いて，他はすべて白磁であった。

土師器

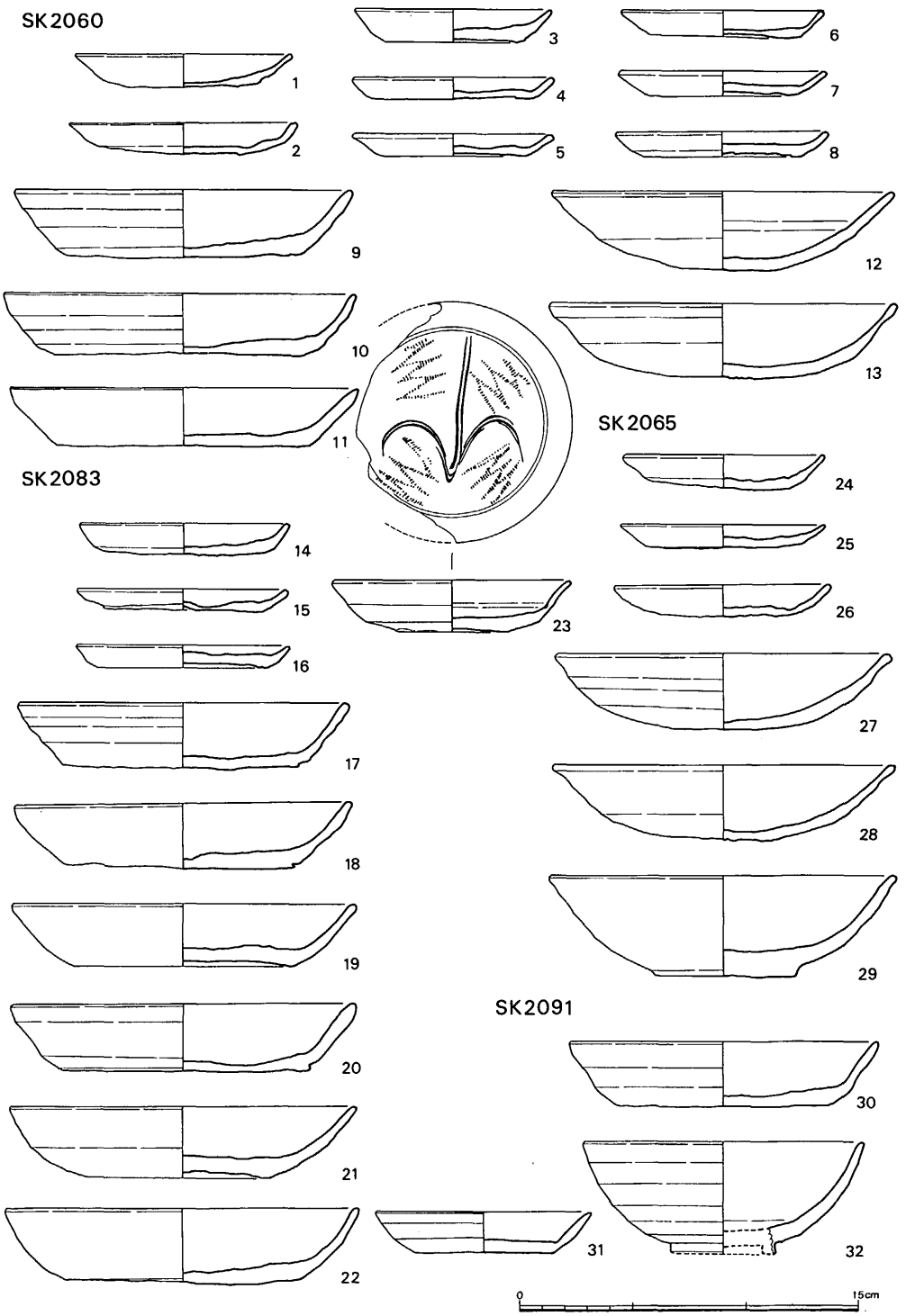
皿ａ（24～26）　口径8.9cm～9.6cm，器高1.1cm～1.5cmである。底部はヘラ切りされ，板状圧痕がみられる。

丸底の杯（27・28）　口径15.0cm～15.1cm，器高3.3cm～3.4cmである。底部をヘラ切りした後に丸く押し出しており，わずかに指頭圧痕が残っている。内面は滑らかにみがかれている。

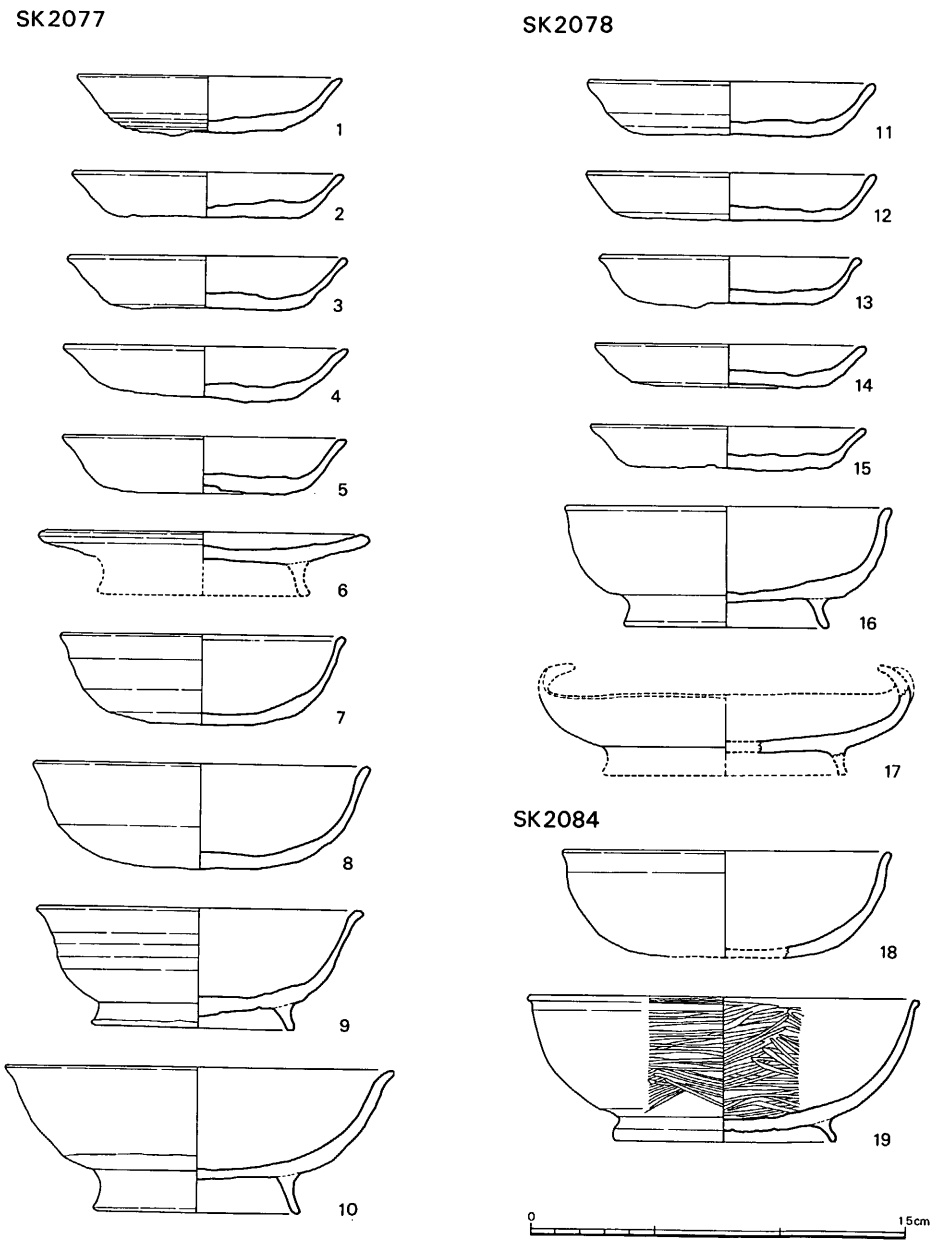
椀（29）　平坦な底部から内弯する体部が立ち上がるが，その境は約５mmほど直立気味になり，円板貼付状をなす。無高台の椀であるが，外見は高台椀を思わせる。底部は糸切りされている。

ＳＫ2077出土土器（第118図，別表，図版105）

土師器・須恵器・瓦類が多量に出土した。須恵器は多くの破片が出土したが，そのおおよそ



第117図 ＳＫ2060・ＳＫ2065・ＳＫ2083・ＳＫ2091出土土器・陶磁器実測図



第118図　ＳＫ2077・ＳＫ2078・ＳＫ2084・出土土器・緑釉陶器実測図

は大壺２個体分に相当する。他に越州窯系青磁２点，白磁１点の小片が出土した。

土師器

皿ｃ（６）　口径13.3cmの高台皿で，高台を欠損しているが，器高2.6cm前後に復原できる。

杯ａ（１～５）　口径10.6cm～11.4cm，器高1.8cm～2.3cmの小形の杯である。底部はすべて

ヘラ切りされている。

椀（7～10）　無高台・有高台の両例があるが，椀部の器形は共通している。いずれも底部をヘラ切りされている。7の口縁部内側には煤が付着している。

ＳＫ2078出土土器・陶器（第118図，別表）

土師器

杯a（11～15）　口径10.5cm～11.6cm，器高1.7cm～2.2cmで，底部をヘラ切りしている。

椀（16）　口径13.1cm，器高4.9cmの小形の椀で，外向する細い高台をつけている。

緑釉陶器

皿（17）　口径15cmほどに復原される有高台の耳皿の小片が出土している。外面の釉はほとんど剝離しているが，黄緑色を呈する。外底・内面は濃緑色を呈し，一部は銀化している。外底には目跡が残っている。

ＳＫ2083出土土器・陶磁器（第117図，別表，図版105）

土壙中から積み重ねたような状態で完形の土師器が出土した。その他に陶磁器や瓦類も出土した。

土師器

皿a（14～16）　口径8.7cm～9.5cm，器高0.9cm～1.3cmで，すべて底部を糸切りしている。

杯a（17～22）　口径14.1cm～15.6cm，器高2.7cm～3.4cmで，すべて糸切りしている。

青磁

皿（23）　同安窯系の皿で，Ⅰ－2・b類に分類される。体部と見込みの境は段をなし，内面のそれは沈線状となる。内面見込みにはヘラと櫛で文様を描いている。施釉は全面にみられるが，外底のそれをカキ取っている。口径10.7cm，器高2.3cm。

ＳＫ2084出土土器（第118図，別表，図版105）

不整形の土壙から土師器・瓦類などが出土した。土師器以外では，白磁・黒釉陶器・灰釉陶器の小片が各1点出土した。

土師器

椀（18）　口径13.2cm，器高4.4cmに復原される無高台の椀で，底部はヘラ切りしている。

黒色土器

椀（19）　黒色土器B類の椀で，口径15.6cm，器高5.8cmである。ほとんど砂粒を含まない胎土を硬質に焼成し，内外面を真黒色に燻している。体部のヘラミガキは内外ともに緻密に施されている。

ＳＫ2091出土土器・陶磁器（第117図，別表）

土師器・瓦類が出土している。

土師器

杯a（30）　口径13.8cm,器高2.9cmである。糸切りされた底部には板状圧痕がみられる。

白磁

皿（31）　Ⅸ－1・a類である。いわゆる口禿げと称される皿である。口縁部の外面には釉カキ取りの際のキズがついている。

青磁

椀（32）　龍泉窯系の小椀Ⅰ－4類である。外面は口縁端部までヘラ削りするが、体部は丸味をもっている。淡黄緑色の釉には小さな貫入を伴なう。

瓦類

この調査で出土した瓦類は，軒丸瓦11点，軒平瓦6点のほか，文様塼2点である。その内訳については巻末の一覧表に示した。出土量が少ないにかかわらず，軒丸・軒平とも老司Ⅰ式に集中していることは，観世音寺からの流入であろう。文様塼のうち一点は三角形の唐花文塼である。

木簡

木簡はＳＤ205から2点が出土した。039型式と059型式に属する小断片であり，両者とも一応は墨痕が認められるが，墨は薄く，しかもきわめて断片的でもあるので，それから具体的な文字を想定することは不可能であり，ここでは出土したことを報告するにとどめておこう。

銅銭（第119図）

銅銭は合計6点が出土した。その内訳は，ＳＫ2078から皇宋通寶が1点，ＳＫ2090とＳＸ2063から元豊通寶が1点ずつ，ＳＤ205から元祐通寶が1点，このほかＳＤ205とＳＸ2094から出土した各1点は破損しているため銭名を確定しえない。銭名が判明する4点についてはその拓影を図示した。



第119図　銅銭拓影

小結

第9・36・74次さらに今回の第77次調査で学校院東辺部の主要部分の調査を終了した。

4回の調査で学校院の施設と考えられる掘立柱建物を計7棟検出した。このうち第36次調査で検出したＳＢ700・715については，今回の調査でその東側部分を確認し，ＳＢ700は3間×7間の東西棟建物，ＳＢ715は2間×4間以上の南北棟建物であることが判明した。この2棟が建物群の東辺に位置している。両棟とも掘立柱の掘り方は深く，その東側で全く柱掘り方を確認できなかったことからみて，これより東には建物が存在しなかったと判断して誤りあるまい。

学校院の東限に関して第74次調査で有効な成果を得ているが，今回の調査でも，それに先行

する時期を含めて手懸りをえている。

まず注目されるのは南北方向に並ぶＳＫ2070からＳＫ2075にいたる奈良時代の土壙列である。出土の土器は第43次調査のＳＥ1081・ＳＫ1084，第76次調査のＳＫ2007・ＳＤ2015出土のそれと共通した特徴をもち，奈良時代後半期に位置づけられる。東限の建物であるＳＢ700は柱掘り方から長頸壺が出土しており，奈良時代後半頃に考えられている。ＳＢ715の柱掘り方からも1点の須恵器が出土しているが，器形的に時期の細分はむつかしい。しかし，ＳＢ700とＳＢ715は方位の振れや東側の柱筋の通りからみて同時に併存した可能性があり，ＳＢ715出土の須恵器の時期も矛盾するものではない。つまりこの２棟の建物は奈良時代に属する可能性が強い。その東に南北に並ぶ土壙列は，位置的にみてこれらの建物と無関係ではない。第70次調査で建物の所在推定地に接して並んだ土壙列が検出されたことも参考になる。建物は少なくとも土壙に先行するであろうから，建物の時期を奈良時代後半頃としても大過なかろう。

これらの土壙列は政庁中軸線からほぼ４町のラインにあり，従来考えられてきた政庁を方４町，学校院を方２町とする見解に立てば，まさに東の境界に相当する。しかし土壙列が東の境界となることは，それがあくまで土壙であり溝などの区画を意味する施設とは相違しており，建物との位置関係からみても無理がある。その点からすれば築地状遺構ＳＸ2020はよりいっそう学校院と観世音寺を区画する施設として有力である。築地と断定するには根拠がやや弱くＳＸ2020を築地状遺構としたが，これを築地と判断してもほぼ誤りないと考えている。その築地基壇積み土からは細片化していたが奈良時代に属する土師器・須恵器が出土している。比較的破片の大きな土師椀を第108図2に示したが，これは10世紀前後に降せうる資料であった。基壇積み土に掘り込まれた柱穴は，確認し難い例が多く，この椀をそうした柱穴にともなうと考えて除外すれば，築地は奈良時代に属する可能性もある。この築地を境に東側には柱穴群が及んでおらず，学校院と観世音寺の境界の施設として最適に思われる。

第９・74次調査で検出された溝ＳＤ205は今回の調査でも検出された。今回の調査区の北端から第74次調査区の南端まで測れば，ＳＤ205は長さ約100m を確認したことになる。前２回の調査ではＳＤ205に大きな撹乱がみられた。今回の調査でも南半は乱れていたが，北半の遺構の残りは良好であった。溝の西岸のみを調査したにとどまるが，溝肩は南北方向に直線をなし，その西に幅約２ｍの，これも直線状のテラスが確認された。先の築地状遺構ＳＸ2020とも約 2.5 ｍの間隔をもって平行している。この溝が建物・築地などと一連の計画の中で開鑿された可能性を思わせる。ＳＤ205は井戸ＳＥ2040を切っている。ＳＥ2040からの遺物の出土はなかったが，井戸枠が桶でつくられており，平安時代末～鎌倉時代よりも古く位置づけられない。溝の出土遺物もまたそうである。しかし第74次調査で知られるようにＳＤ205は何度も改修・掘り直しが行なわれている。こうした点を考慮すれば，築地との平行を重視して，その開鑿が奈良時代まで遡る可能性を指摘しておきたい。

別　　表

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
第70次調査								
SD1805								
				土師器　Ⅲb				
1	1	6.5	4.6	1.0		○		
2	2	7.0	4.7	1.0		○		
3	3	7.0	5.1	1.2		○		
4	4	7.1	4.5	1.2		○		
5	5	7.1	4.4	1.3		○		
6	6	7.2	5.2	1.3		○		
7	7	7.3	4.8	1.2		○		
8	8	7.7	4.9	1.3		○		
9	9	7.9	4.9	1.4		○		
				杯a				
1	14	11.1	6.2	2.5		○		
2	15	10.6	7.5	3.0		○		
				杯b				
1	10	10.6	4.1	2.3		○		
2	11	10.7	5.6	2.4		○		
3	12	11.4	4.9	2.5		○		
4	13	11.9	5.5	2.8		○		
SE1770								
				土師器　Ⅲa				
1	1	8.9	7.3	1.1		○	○	○
2	2	8.9	7.9	1.0		○	○	
3		8.9	7.1	1.3		○	○	○
4	3	9.0	6.9	1.0		○	○	○
5	4	9.1	7.1	1.0		○	○	○
6	5	9.3	7.1	1.1		○	○	
7	6	9.4	7.1	1.4		○	○	○
8	7	9.4	7.3	0.9		○	○	○
9	8	9.7	7.5	0.9		○		○
10	9	10.6	9.0	1.0		○	○	○
11	10	8.6	6.0	1.0		○	○	
12	11	8.7	7.1	0.9		○	○	○
13	12	8.7	7.0	1.0		○	○	○
14	13	8.7	7.7	1.1		○	○	○
15	14	9.0	6.8	0.8		○	○	○
16	15	9.0	7.6	1.1		○	○	○
17	16	9.1	7.3	1.1		○	○	
18		9.1	7.1	1.0		○	○	○
19	17	9.1	7.5	1.2		○	○	○
20	18	9.2	7.1	1.2		○	○	○
21	19	9.2	7.4	0.9		○	○	○
22	20	9.2	7.4	1.0		○		○
23	21	9.3	6.9	1.0		○	○	○
24		9.3	8.2	1.0		○		○

番号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
25	22	9.3	7.2	1.2		○	○	○
26	23	9.3	7.0	1.3		○	○	○
27	24	9.3	7.4	0.7		○	○	○
28	25	9.4	7.9	1.1		○	○	
29		9.5	7.4	1.2		○		○
30		9.5	7.7	0.9		○	○	○
31		9.5	8.2	1.2		○	○	○
32	26	9.5	8.2	1.0		○	○	○
33	27	9.5	8.0	1.0		○		○
34	28	9.5	8.1	1.0		○		
35	29	9.5	6.9	1.0		○	○	○
36	30	9.5	7.4	1.3		○	○	○
37	31	9.6	7.8	0.8		○	○	○
38		9.7	8.2	1.2		○	○	○
39	32	9.7	7.3	1.3		○	○	○
40	33	9.7	7.4	1.2		○	○	○
41	34	9.7	6.8	1.2		○	○	○
42	35	9.7	8.3	1.3		○	○	○
43	36	10.1	7.2	1.0		○	○	○
44	37	8.7	7.0	1.1		○		
45	38	8.8	6.9	0.9		○	○	○
46	39	9.7	7.0	1.5		○	○	○
杯a								
1	40	15.2	11.4	2.9		○		
2		15.8	11.2	3.2		○	○	○
3	41	15.9	11.1	2.8		○	○	○
4	42	16.1	12.4	3.1		○	○	○
5	43	14.5	10.5	3.0		○	○	○
6	44	15.4	10.8	3.2		○	○	○
7	45	15.6	11.5	2.9		○	○	
8	46	15.8	9.6	3.2		○	○	○
9	47	15.9	11.0	2.7		○	○	○
10	48	16.1	11.8	2.5		○	○	○
11	49	15.0	11.7	3.0		○	○	
12	50	15.1	9.6	2.9		○	○	○
13	51	15.0	9.8	3.2		○	○	○
SE1775								
土師器　皿a								
1	1	9.0	7.2	1.2		○	○	○
2	2	9.0	8.6	1.2		○	○	○
3	3	9.1	7.6	1.0		○	○	○
4	4	9.1	7.2	1.2		○	○	○
5	5	9.2	7.8	1.4		○	○	○
6	6	9.3	7.5	1.3		○	○	○
7	7	9.4	7.5	1.4		○	○	○
8	8	9.5	8.5	0.9		○	○	○
9	9	9.5	7.6	1.0		○	○	○

番号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
10	10	9.6	7.6	1.0		○	○	○
11	11	9.7	7.9	1.4		○	○	○
杯a								
1	12	13.3	9.1	2.5		○	○	○
2	13	13.6	8.8	3.1		○	○	○
3	14	13.6	9.9	3.0		○	○	○
4		13.7	9.4	2.5		○	○	○
5		13.7	8.8	2.8		○	○	○
6	15	13.8	9.2	2.9		○	○	○
7	16	13.9	9.0	2.5		○	○	○
8	17	13.9	9.0	3.0		○	○	○
9	18	14.1	9.3	2.6		○	○	
10	19	14.1	8.8	2.8		○	○	
SE1785								
瓦器 椀								
1	1	15.8	7.0	4.4				
2	2	15.8	6.8	5.0				
SE1790								
土師器 皿a								
1	32	8.3	5.7	1.2		○	○	○
2	33	8.4	6.2	1.3		○	○	○
3	34	8.5	5.9	1.5			○	○
杯a								
1	35	12.3	8.1	2.6		○	○	○
2	36	12.3	8.8	2.6		○	○	○
3	37	12.8	8.3	2.8		○	○	
4	38	13.0	9.0	2.5		○	○	○
SE1795								
土師器 皿a								
1	1	8.0	5.7	1.2		○	○	○
2	2	8.1	6.2	1.2		○	○	○
3	3	8.1	6.3	1.2		○	○	○
4	4	8.2	5.6	1.2		○	○	○
5	5	8.2	6.4	1.2		○	○	○
6	6	8.2	5.8	1.3		○	○	○
7	7	8.2	6.0	1.3		○	○	○
8	8	8.2	6.7	1.3		○	○	○
9	9	8.2	6.0	1.4		○	○	○
10	10	8.3	6.4	1.0		○	○	○
11	11	8.3	5.9	1.4		○	○	○
12	12	8.5	6.4	1.2		○	○	
13	13	8.5	7.0	1.2		○	○	
14	14	8.5	6.4	1.3		○	○	○
15	15	8.5	7.2	1.6		○		
杯a								
1	16	11.4	7.3	2.5		○	○	○
2	17	11.5	7.2	3.6		○		○

番号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
3	18	11.8	7.9	2.5		○	○	○
4	19	11.9	8.0	2.7		○	○	○
5	20	12.2	7.8	2.4		○	○	○
6	21	12.2	8.0	2.6		○	○	○
7	22	12.2	9.3	2.6			○	
8	23	12.2	7.4	2.8		○	○	○
9	24	12.6	8.9	2.8		○	○	○
10	25	12.3	8.4	2.5		○	○	○
11	26	12.4	8.2	2.6		○	○	○
12	27	12.4	9.6	2.7		○	○	○
13	28	12.4	8.8	2.8		○	○	○
14	29	12.5	9.4	2.7		○	○	○
15	30	12.6	9.3	2.9		○	○	○
SK1788								
土師器 皿a								
1	1	8.4	6.5	1.0	○		○	○
2	2	8.5	5.7	1.3	○		○	○
3	3	8.6	7.2	1.1	○		○	○
4	4	8.9	6.9	1.3	○		○	
5	5	8.9	7.1	1.3	○		○	
6	6	9.0	7.8	1.4	○		○	○
7	7	9.0	7.0	1.4	○		○	○
8	8	9.2	7.8	1.1	○		○	○
9	9	9.3	7.6	1.3	○		○	
10	10	9.4	7.7	1.1	○		○	○
11	11	9.4	8.2	1.3	○		○	
12	12	9.4	7.6	1.8	○		○	
13	13	9.6	7.5	1.2	○		○	
14	14	10.5	7.9	1.5	○			○
15	15	8.6	5.6	1.2		○	○	○
16	16	8.6	6.8	1.2		○	○	
17	17	8.6	6.7	1.3		○	○	○
18	18	8.7	7.2	1.1		○	○	○
19	19	8.8	7.0	1.0		○		
20	20	8.8	6.4	1.1		○	○	
21	21	8.8	6.6	1.1		○	○	○
22	22	8.8	7.6	1.3		○	○	○
23	23	8.9	7.9	1.0		○	○	
24	24	8.9	6.8	1.2		○	○	○
25	25	9.0	6.5	1.3		○	○	○
26	26	9.0	5.7	1.4		○	○	
27	27	9.1	7.7	1.3		○		○
28	28	9.2	6.3	1,1		○	○	○
29	29	9.4	7.8	1.1		○	○	○
30	30	9.8	7.9	1.4		○	○	○
31	31	9.4	8.0	1.1		○	○	○
32	32	9.9	8.0	1.2		○	○	○

番号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
杯a								
1	33	14.3	10.9	3.3	○		○	○
2	34	14.4	10.3	2.9	○		○	○
3	35	14.6	10.8	3.1	○		○	○
4	36	14.6	10.8	3.2	○		○	○
5	37	14.7	10.4	2.8	○		○	○
6	38	14.7	10.4	3.4	○		○	○
7	39	14.8	11.0	3.1	○		○	
8	40	14.8	11.4	3.5	○		○	○
9	41	14.9	11.3	3.0	○		○	○
10	42	15.0	10.3	3.1	○		○	○
11	43	15.0	10.6	3.1	○		○	
12	44	15.0	11.2	3.2	○		○	○
13	45	15.0	10.2	3.4	○		○	○
14	46	15.2	10.2	3.4	○		○	
15	47	15.3	8.7	3.0	○		○	○
16	48	15.3	10.4	3.3	○		○	○
17	49	15.3	11.0	3.5	○		○	○
18	50	15.3	10.9	3.6	○		○	
19	51	15.4	10.9	2.9	○		○	○
20	52	15.4	11.3	3.4	○		○	
21	53	15.5	10.9	3.0	○		○	○
22	54	15.6	11.8	3.2	○		○	○
23	55	15.6	10.9	3.3	○		○	○
24	56	15.6	11.9	3.9	○		○	○
25	57	15.8	11.2	2.9	○		○	○
26	58	15.9	11.7	2.6	○		○	○
27	59	15.3	14.9	2.8		○	○	○
28	60	15.4	10.9	2.8		○	○	○
29	61	15.4	10.5	3.0		○	○	○
30	62	15.5	10.3	2.7		○	○	○
31	63	15.8	9.9	3.1		○	○	○
32	64	15.7	11.5	2.9		○	○	○
33	65	16.9	10.2	3.3		○	○	○
丸底の杯								
1	66	16.5		3.8	○			○
2	67	15.4		3.4	○		○	○
SD1825								
須恵器　皿								
1	11	17.8	14.8	2.5	○		○	
杯								
1	10	12.0	8.3	2.2	○			
SD1830								
須恵器　杯蓋								
1	1	19.2		2.6				
2	2	19.0		3.0				
3	3	14.9		1.9				

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
杯								
1	6	11.5	8.4	2.6	○			
2	7	18.0	12.0	5.6	○			
土師器　皿								
1	9	17.2	13.6	1.8				
SK1757								
須恵器　杯蓋								
1	1	11.4		2.7	○			
高台付杯								
1	2	10.7	6.6	4.1	○		○	
2	3	14.8	8.8	8.0	○		○	
杯								
1	4	9.8	7.1	2.8	○		○	○
2	5	12.9	9.3	4.2	○		○	○
皿								
1	6	14.6	12.6	2.0	○		○	
2	7	16.9	14.3	2.3	○		○	
SK1774								
須恵器　杯蓋								
1	8	15.1		3.3				
2	9	15.6		3.5				
3	10	16.0		2.5				
4	11	13.6		1.8				
5	12	16.3		(1.6)				
6	13	20.0		(1.7)				
高台付杯								
1	14	12.0	8.1	3.6			○	
SK1787								
須恵器　杯蓋								
1	15	13.7		1.7	○			
2	16	17.8		1.9	○			
			高台付杯					
1	17	14.4	8.0	5.2	○		○	
杯								
1	18	12.8	8.8	4.0	○		○	
2	19	13.4	3.5	8.2	○		○	
皿								
1	20	17.9	14.9	2.4	○			
土師器　盤								
1	21	18.2	23.2	4.2	○			
SK1772								
土師器　皿a								
1	1	9.9	6.0	1.8	○		○	○
2	2	10.0	7.1	1.8	○			○
3	3	10.2	6.8	1.8	○		○	○
4	4	10.4	6.9	1.7	○			○
5	5	10.6	6.8	1.8	○		○	○

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
6	6	10.7	7.2	1.7	○		○	○
7	7	10.9	7.4	1.9	○		○	○
8	8	11.1	7.5	1.8	○		○	
9	9	11.4	7.6	1.8	○		○	○
10	10	11.4	8.0	1.8	○		○	○
11	11	11.1	8.9	2.1	○		○	○
12	12	11.1	7.7	2.4	○		○	○
13	13	11.4	7.6	2.1	○		○	○
14	14	11.6	7.2	2.2	○		○	
皿c								
1	15	17.9	10.3	3.8	○		(○)	
無高台椀								
1	16	12.0		3.4	○		○	○
2	17	12.6		4.0	○		○	○
3	18	12.7		3.5	○		○	○
4	19	13.6		4.6	○		○	○
5	20	14.7		3.8	○		○	○
6	21	15.8		5.1	○			
椀								
1	22	9.6	6.0	3.2				
2	23	12.6	6.8	5.3	○		○	○
3	24	14.4	8.0	5.7	○			○
4	25	14.0	7.9	5.6	○			
5	26	14.2	8.2	4.9	○			○
6	27	14.2	8.1	5.2	○		○	○
7	28	14.4	8.5	6.5	○		○	
8	29	14.9	8.1	5.7	○		○	
9	30	15.9	9.0	6.8	○			○
10	31	17.6	10.8	7.4	○		○	
SK1772（下層）								
土師器　椀								
1	33	15.2	9.4	6.8			○	
皿								
1	34	18.0	10.6	2.5	○		○	○
SK1800								
土師器　杯a								
1	1	10.9	6.5	3.0	○		○	○
2	2	11.0	6.5	2.7	○		○	○
3		11.0	5.6	3.0	○		○	○
4	3	11.3	7.1	3.0	○		○	○
5	4	11.3	7.1	3.0	○		○	
6		11.3	7.7	3.0	○		○	○
7	5	11.3	6.0	3.1	○		○	○
8	6	11.3	6.5	3.1	○		○	○
9		11.3	7.0	3.2	○		○	○
10	7	11.3	7.1	3.2	○		○	
11	8	11.4	7.1	2.8	○		○	

番号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
12		11.4	7.0	2.9	○		○	○
13	9	11.4	6.8	3.1	○			○
14	10	11.5	7.1	2.7	○		○	
15		11.5	6.9	2.8	○		○	○
16	11	11.5	7.8	3.2	○		(○)	○
17	12	11.5	7.0	3.0	○		○	○
18		11.5	7.4	3.3	○		○	○
19	13	11.6	6.8	2.9	○			○
20	14	11.6	7.7	2.9	○			
21		11.6	6.2	3.0	○		○	○
22	15	11.6	7.0	3.1	○		○	○
23	16	11.6	6.5	3.2	○		○	○
24		11.6	6.6	3.2	○			
25	17	11.6	7.0	3.4	○		○	
26	18	11.6	7.3	3.5	○		○	○
27		11.7	7.6	2.8	○		○	○
28	19	11.7	7.2	2.9	○		○	○
29	20	11.7	6.9	3.1	○		○	○
30		11.7	6.1	3.2	○		○	○
31	21	11.7	7.0	3.2	○		○	○
32	22	11.7	7.2	3.2	○		○	○
33		11.7	7.4	3.2	○		○	○
34	23	11.7	7.7	3.2	○		○	○
35	24	11.7	7.2	3.3	⊙		○	○
36		11.7	7.5	3.3	○		○	○
37	25	11.7	6.3	3.6	○		○	○
38	26	11.7	6.8	3.6	○		○	○
39		11.8	6.5	2.8	○		○	○
40	27	11.8	6.9	3.0	○		○	○
41	28	11.8	7.4	3.0	○		○	○
42		11.8	7.6	3.0	○		○	○
43	29	11.8	7.7	3.1	○		○	○
44	30	11.8	6.7	3.2	○			○
45		11.8	6.5	3.3	○		○	
46	31	11.8	6.4	3.4	○		○	○
47	32	11.8	6.6	3.4	○		○	○
48		11.8	6.8	3.4	○		○	○
49	33	11.8	6.1	3.5	○		○	○
50	34	11.9	7.2	2.9	○		○	○
51	136	11.9	7.6	3.0	○		○	
52		11.9	6.7	3.1	○		○	○
53	35	11.9	7.2	3.2	○		○	
54	36	11.9	7.6	3.2	○		○	○
55		11.9	6.3	3.3	○		○	○
56	135	11.9	6.9	3.3	○		○	○
57	37	11.9	8.1	3.4	○		○	
58	38	11.9	6.9	3.5	○		○	○

番号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
59		11.9	7.0	3.5	○		○	
60	39	11.9	7.2	3.5	○		○	○
61	40	11.9	7.2	3.5	○		○	○
62	41	11.9	7.4	3.5	○			
63		11.9	7.0	3.6			○	
64	42	11.9	7.2	3.6	○		○	
65	43	12.0	6.8	2.8	○		○	○
66	44	12.0	7.0	3.0	○		○	○
67		12.0	7.4	3.1	○		○	○
68	45	12.0	7.1	3.1	○		○	○
69	46	12.0	6.6	3.2	○		○	
70		12.0	6.5	3.5	○		○	○
71	47	12.0	7.2	3.5	○		○	
72	48	12.0	7.0	3.6	○		○	○
73		12.0	7.7	3.6	○		○	
74	49	12.0	7.1	3.7	○		○	
75	50	12.1	7.3	3.4	○		○	
76		12.1	8.2	3.4	○		○	○
77	51	12.1	6.5	3.5	○		○	○
78	52	12.1	8.4	3.5	○		○	
79		12.1	7.5	3.6	○		○	○
80	53	12.2	7.0	2.9	○		○	
81	54	12.2	7.2	3.1	○		○	○
82		12.2	7.4	3.1	○		○	○
83	55	12.2	7.5	3.1	○		○	
84	56	12.2	6.7	3.2	○		○	○
85		12.2	8.0	3.2	○			
86	138	12.2						
87	57	12.2	7.2	3.3	○		○	○
88	58	12.2	7.7	3.4	○		○	○
89		12.2	7.2	3.6	○		○	
90	59	12.2	6.6	3.6	○		○	○
91	60	12.2	7.4	3.4	○		○	
92		12.2	7.2	4.0	○		○	
93	61	12.3	7.0	3.1	○		○	○
94	62	12.3	7.5	3.1	○		○	○
95		12.3	8.2	3.2	○			
96	63	12.3	7.0	3.3	○			
97	64	12.3	7.5	3.3	○		○	○
98		12.3	6.8	3.5	○		○	○
99	65	12.3	7.6	3.5	○		○	○
100	66	12.4	6.9	3.4	○		○	○
101		12.4	6.9	3.3	○		○	○
102	67	12.4	6.8	3.7	○			
103	68	12.5	8.0	3.4	○		○	
104		12.5	7.3	3.1	○		○	○
105	69	12.5	7.5	3.6	○		○	

番号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
106	70	12.6	7.4	3.7	○		○	○
107		12.6	7.0	3.5	○		○	
108	71	12.7	7.7	3.7	○		○	○
109		12.8	8.6	3.6	○		○	
110	72	12.3	7.8	4.0	(○)		○	
111	73	11.7	3.5	3.8			○	
椀								
1	74	12.6	6.7	4.5			○	○
2	75	12.7	7.0	5.1			○	○
3	76	12.8	8.2	4.3			○	○
4		12.8	7.8	4.8			○	
5	77	12.8	7.3	5.0			○	
6	78	12.9	7.5	4.5			○	○
7	79	12.9	7.7	4.6			○	○
8	80	12.8	7.5	4.7	○		○	○
9		12.9	6.9	4.5			○	○
10	81	12.9	7.4	4.8	○		○	
11	82	12.9	7.2	4.9			○	
12		13.0	6.1	4.6			○	
13	83	13.0	6.5	4.9			○	
14	84	13.0	7.9	5.0	○		○	○
15	85	13.0	7.5	5.2			○	
16		13.0	7.4	5.3			○	○
17	86	13.2	7.6	4.9	○		○	○
18	87	13.2	6.8	5.0	○		○	
19		13.3	7.1	4.2			○	
20	88	13.3	7.7	4.8	○		○	○
21	89	13.3	7.4	5.0	○		○	
22	90	13.4	7.4	4.8			○	○
23		13.4	6.0	4.8			○	
24	91	13.4	7.1	5.2			○	
25	92	13.5	8.0	4.6			○	
26	93	13.5	6.4	4.7	○		○	
27	94	13.5	6.4	4.8			○	
28	95	13.5	7.2	5.0	○		○	○
29		13.5	8.2	6.1			○	○
30		13.5	8.9	5.0	○		○	
31		13.6	7.7	4.5			○	
32	96	13.6	7.7	4.6			○	
33	97	13.6	7.6	5.1	○		○	○
34	98	13.6	7.6	5.2			○	
35	99	13.6	8.2	5.2	○		○	○
36	100	13.7	7.5	5.0	○		○	○
37		13.7	7.7	5.1	○		○	○
38		13.8	6.5	4.9			○	
39		13.8	8.4	5.1	○		○	○
40		13.9	7.8	5.3			○	

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
41	101	14.0	7.8	5.7			○	○
42	102	14.2	8.2	5.0			○	
43	103	14.2	7.2	5.2	○		○	○
44		14.2	7.6	5.2			○	○
45	104	14.3	8.2	5.1	○		○	○
46		14.3	7.9	5.4			○	
47		14.4	8.1	5.2	○		○	○
48		14.5	7.6	5.5			○	○
49	105	14.7	7.6	4.9	○		○	○
50	106	14.7	8.1	6.4			○	
51	107	14.8	7.4	5.4			○	○
52		14.9	8.0	4.5			○	
53	108	15.3	7.9	6.0			○	
54	109	15.4	9.0	6.5	○		○	
55	110	16.0	7.7	6.8	○			
56	111	16.1	8.2	6.5			○	○
57	112	15.8	9.2	7.1			○	
58	113	13.1	8.0	7.1			○	
杯								
1	114	21.4	16.2	14.9	(○)		○	
黒色土器A　椀								
1	116	11.5	7.1	4.3				○
2	118	15.8	7.3	6.4			○	
3	119	16.8	9.3	7.8				
4	120	20.2	8.3	9.1				
壺								
1	122	9.2		(6.9)				
甕								
1	123	12.9		(10.4)				
2	124	16.1						
3	125	15.4		12.4				
4	126	23.1						
5	127	24.4						
黒色土器B　皿								
1	115	14.0	7.2	3.3			○	○
椀								
1	117	11.8	6.6	4.8				
須恵器　鉢								
1	128	20.2						
SX1815								
須恵器　杯蓋								
1	3	20.2		2.7				
杯								
1	4	18.1	11.6	5.7				
SX1810								
須恵器　杯蓋								
1	1	19.2		2.2				

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
杯								
1	2	18.6	11.4	6.3			(○)	
整地層								
須恵器　杯蓋								
1	1	14.5		2.8				
濁茶色土層								
須恵器　杯蓋								
1	4	14.0		2.3				
2	5	12.5		2.0				
3	6	12.6		1.3				
4	7	14.9		1.8				
5	8	15.3		3.0				
高台付　杯								
1	9	13.0	8.7	3.9	○			
2	10	13.4	8.5	3.8	○		○	
3	11	14.0	9.3	4.2				
4	12	14.7	8.8	6.0	○		○	
5	13	16.7	9.0	5.5	○		○	
6	14	16.3	9.4	6.0	○		○	
杯								
1	15	12.6	7.8	3.0	○		○	
2	16	12.8	7.7	3.5	○		○	○
3	17	14.0	10.0	4.0	○		○	
皿								
1	18	(17.3)		(2.5)	○		○	
盤								
1	19	24.2	10.6	4.3	○		○	
土師器　杯								
1	22	11.9	5.9	3.2				
2	23	13.2	6.5	3.4				
3	24	16.6	9.7	3.9				
皿								
1	25	14.6	11.6	2.3	○			
2	26	17.0	13.2	2.1			(○)	
鉢								
1	27	24.0	10.8	7.4			○	
第74次調査								
SD205								
土師器　皿a								
1	1	8.8	6.8	1.5	○		○	○
2	2	9.0	6.8	1.2	○		○	○
3	3	9.0	7.1	1.6	○		○	○
4	4	9.1	6.7	1.5	○		○	○
5	5	9.2	6.9	1.4	○			
6	6	9.2	7.1	1.5	○		○	○

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
杯								
1	7	10.6	7.4	2.0	○		○	○
2	8	10.8	7.1	2.1	○		○	○
3	9	11.0	7.4	2.0	○		○	○
4	10	11.1	7.3	2.2	○		○	○
5	11	11.0	7.4	2.3	○		○	○
6	12	11.5	8.0	2.3	○		○	○
7	13	10.9	5.9	3.4	○		○	○
丸底の杯								
1	14	14.8		3.2	○			○
椀								
1	15	15.0	8.1	6.3	○			
黒色土器B　椀								
1	16	14.4	7.2	5.2	○			○
SD205A								
土師器　杯a								
1	1	11.2	8.1	2.1	○		○	
2	2	11.2	7.9	2.4	○		○	○
3	3	11.3	7.6	2.4	○		○	○
4	4	11.6	7.2	2.3	○		○	
5	5	11.8	8.3	2.0	○		○	○
6	6	12.4	7.8	2.3	○		○	○
7	7	10.7	7.4	2.8	○		○	○
8	8	11.2	7.3	2.9	○		○	○
9	9	11.4	7.7	2.9	○		○	○
10	10	11.2	6.5	2.8	○		○	○
11	11	12.0	8.0	2.8	○		○	
12	12	12.0	7.9	3.0	○		○	○
13	13	12.3	7.0	3.1	○			○
椀								
1	14	9.9	6.3	3.5	○		○	
2	15	10.1	5.5	3.3	○			
3	16	11.8	6.9	4.5				○
4	17	12.1	7.5	4.0	○		○	
5	18	12.1	6.6	4.5			○	○
6	19	12.6	7.5	4.5	○		○	○
7	20	12.8	5.9	3.5			○	
8	21	13.0	8.2	5.1	○			○
9	22	13.8	8.4	5.2	○		○	○
10	23	14.8	9.7	5.8	○		○	
11	24	15.1	8.8	5.9	○		○	○
12	25	15.3	8.9	5.2	○		○	
13	27	11.8	7.3	4.2	○		○	○
14	28	12.4	8.3	4.2	○		○	○
15	29	12.7	6.9	4.6			○	
16	30	15.6	9.0	5.1	○		○	○
17	31	11.9	7.7	5.0				○

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
18	32	12.9	7.7	4.8				
19	37	21.4	12.1	9.8				
無高台　椀								
1	26	15.2		5.2			○	(○)
皿a								
1	33	12.4	7.6	1.4	○		○	○
皿c								
1	34	14.6	8.6	2.7	○		○	○
2	35	16.2	9.9	3.1	○		○	○
脚付　皿								
1	36	14.0	7.1	1.7	○		○	○
黒色土器A　椀								
1	38	12.2	7.3	6.3				
2	39	14.3						○
SD205B								
土師器　皿a								
1	1	8.4	6.9	1.3		○	○	○
2	2	8.8	7.5	1.0		○	○	
3	3	9.0	6.6	1.0		○	○	○
4	4	9.0	6.9	1.0		○	○	
5	5	9.1	7.1	1.0		○	○	○
6	6	9.2	7.4	1.2		○	○	○
7	7	9.3	7.3	1.1		○	○	○
8	8	9.4	7.2	1.3		○	○	○
9	9	9.5	7.3	1.2		○	○	○
10	10	10.0	7.4	1.2		○	○	○
皿c								
1	11	9.0	5.6	1.4			○	○
皿								
1	12	6.8	7.7	1.2		○	○	○
杯a								
1	13	14.5	9.6	2.7		○	○	
2	14	15.0	9.4	3.1		○	○	
3	15	15.1	10.8	3.0		○	○	○
4	16	15.4	10.4	2.8		○	○	
5	17	15.7	11.2	3.0		○	○	○
6	18	15.8	10.0	2.8		○	○	
7	19	15.9	10.9	3.6		○	○	
8	20	16.2	11.0	2.9		○	○	
SD207								
土師器　皿								
1	1	8.4	7.8	1.4	○		○	○
2	2	8.8	7.0	1.4	○		○	○
3	3	8.8	7.1	1.5	○		○	○
4	4	8.9	7.3	1.2	○		○	○
5	5	9.0	7.0	1.1	○		○	○
6	6	9.0	7.0	1.1	○		○	○

番号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
7	7	9.0	7.1	1.1	○		○	○
8	8	9.0	6.9	1.1	○		○	○
9	9	9.0	6.6	1.1	○		○	○
10	10	9.1	7.2	0.8	○		○	○
11	11	9.2	7.0	1.0	○		○	○
12	12	9.2	6.5	1.1	○		○	○
13	13	9.2	6.8	1.1	○		○	○
14	14	9.2	6.9	1.2	○		○	○
15	15	9.2	6.8	1.3	○		○	○
16	16	9.8	8.6	1.7	○		○	○
丸底の杯								
1	17	14.4		3.5	○			
2	18	14.9		3.4	○			
3	19	14.9		3.6	○			○
4	20	15.0		2.9	○			○
5	21	15.1		3.2	○			○
6	22	15.1		3.4	○		○	
7	23	15.1		3.6	○			○
8	24	15.4		3.6	○			
9	25	15.5		3.2	○			○
10	26	15.5		3.4	○			
11	27	15.8		3.6	○			
12		17.4		3.7	○		○	
瓦器 椀								
1	28	15.7	5.1	7.3				
皿								
1	30	10.3	7.8	2.1	○			
SD215東								
土師器 皿a								
1	1	8.6	6.8	1.3	○		○	
2	2	8.8	6.8	1.2	○		○	○
3	3	8.8	6.5	1.4	○		○	○
4	4	8.8	7.3	1.4	○		○	○
5	5	8.9	6.9	1.0	○		○	
6	6	8.9	6.3	1.4	○		○	○
7	7	9.0	6.2	1.1	○		○	○
8		9.0	6.7	1.1	○		○	○
9	8	9.0	6.8	1.2	○		○	○
10	9	9.0	7.2	1.5	○		○	○
11	10	9.3	6.9	1.2	○		○	○
12	11	9.3	7.0	1.3	○		○	○
13	12	9.3	7.0	1.3	○		○	○
14	13	9.3	7.3	1.3	○		○	○
15	14	9.3	7.2	1.5	○		○	○
16		9.4	8.0	1.5	○		○	○
17	15	9.5	7.5	1.3	○		○	○
18	16	9.5	7.1	1.4	○		○	○

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
19	17	9.5	7.5	1.4	○		○	○
20	18	9.5	7.3	1.7	○		○	○
21	19	9.6	7.7	1.4	○		○	○
22	20	9.6	7.7	1.6	○		○	○
23		9.8	6.8	1.6	○		○	○
丸底の杯								
1	21	13.5		3.5	○			
2	22	14.5		3.5				
3	23	14.6		3.2	○			○
4	24	14.6		3.3	○			
5	25	14.7		3.5	○			○
6	26	14.8		3.1	○			
7	27	14.8		3.3	○			○
8	28	14.8		3.6	○			○
9	29	14.9		3.6	○			
10	30	15.0		3.1	○			○
11	31	15.0		3.2	○			○
12	32	15.0		3.5	○			○
13	33	15.1		3.5	○			○
14	34	15.1		3.6	○			○
15	35	15.4		3.3	○			○
16	36	15.4		4.0	○			○
17	37	15.5		3.5	○			○
18	38	15.5		3.5	○			
19	39	15.6		3.3	○			○
20	40	15.7		3.6	○			○
瓦器　皿								
1	41	10.2		2.3				
椀								
1	42	15.6	6.7	5.5				
2	43	16.3	7.6	5.5				
3	44	16.8	6.4	5.9				
4	45	17.2	8.1	5.0				
SD215A　西								
土師器　皿								
1	55	9.2	7.0	1.5	○		○	○
2	56	9.3	7.4	1.3	○		○	○
3	57	9.5	7.2	1.3	○		○	○
丸底の杯								
1	58	14.6		3.0	○			○
SD215A　上層								
土師器　丸底杯								
1	66	9.7		2.8				○
2	67	15.3		3.4				
瓦器　椀								
1	68	15.6						

番号	挿図番号	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
SD215B								
土師器 皿a								
1	1	9.0	6.5	1.4	○		○	○
2	2	9.0	7.4	1.4	○		○	○
3	3	9.0	6.8	1.6	○		○	○
4	4	9.2	7.0	1.4	○		○	○
5	5	9.6	6.5	1.4	○		○	○
6	6	8.6	7.0	1.0		○	○	○
7	7	8.8	6.4	1.2		○	○	○
SE1920								
土師器 皿a								
1	1	8.5	5.5	1.6	○		○	○
2	2	8.6	6.3	1.0	○		○	
3	3	9.0	6.6	1.2	○		○	○
4	4	9.2	7.1	1.2	○		○	○
5	5	9.6	7.2	1.2	○		○	○
6	6	10.4	7.6	2.0	○		○	○
丸底の杯								
1	7	14.6		2.9	○			(○)
2	8	14.6		3.4	○			○
3	9	15.0		3.2	○			○
4	10	15.2		3.2	○			○
5	11	15.4		3.7	○			○
6	12	16.4		3.1	○			○
瓦器 杯								
1	13	12.8	10.1	2.2	○			
黒色土器B 椀								
1	14	16.5	(6.8)	5.8				
SE1930								
土師器 椀								
1	1	12.8	7.7	4.6				○
黒色土器A 椀								
1	2	(12.8)	(7.8)	(4.7)				
SE1935								
皿a								
1	3	7.8	5.5	1.1		○		
2	4	8.8	6.6	1.2		○	○	○
3	5	8.0	6.4	1.0		○	○	○
4	6	8.2	6.1	1.4		○	○	○
5	7	8.4	6.4	1.2		○	○	
6	8	8.4	5.9	1.3		○	○	○
7	9	8.5	6.7	1.0		○	○	○
8	10	8.9	7.1	1.1		○	○	○
9	11	8.9	7.4	1.2		○	○	○
10	12	9.5	8.0	1.1		○	○	
杯a								
1	13	12.0	7.7	2.7		○	○	○

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
2	14	12.7	8.8	3.2		○		
3	15	12.8	9.0	2.8		○	○	○
4	16	12.6	9.5	2.5		○	○	○
5	17	12.6	9.6	2.5		○	○	○
6	18	12.8	8.2	2.7		○	○	○
SE1940								
皿a								
1	22	8.3	6.9	1.1		○	○	
皿c								
1	23	10.4	9.0	3.0			○	
SK1950								
土師器　皿a								
1	1	10.0	7.5	1.1	○		○	○
2	2	10.0	7.7	1.4	○			○
3	3	10.3	7.8	1.3	○			
4	4	10.6	7.7	1.5	○			○
5	5	10.7	7.8	1.2	○			
皿								
1	6	10.6	7.3	0.9	○			○
杯								
1	7	9.8	5.2	2.0	○			
2	8	12.1	8.6	2.5	○		○	○
土師器　椀								
1	9	14.4	6.9	4.9				○
2	10	14.5	6.9	4.9				○
3	11	15.1	6.6	5.8				
4	12	15.3	6.9	5.9				
黒色土器A　杯								
1	13	14.4	7.2	5.7				
黒色土器B　皿								
1	14	11.5	8.5	2.1	○			○
2	15	12.1	5.5	3.3				
杯								
1	16	16.4	8.1	5.6	○			
SK1954								
土師器　皿a								
1	22	7.6	5.5	1.2		○	○	○
2	23	7.9	5.9	1.2		○	○	○
3	24	8.0	6.3	1.0		○	○	○
4	25	8.0	5.4	1.3		○	○	○
5	26	8.1	6.4	1.1		○	○	○
6	27	8.1	6.6	1.2		○	○	
7	28	8.1	6.4	1.3		○	○	○
8	29	8.1	5.6	1.7		○	○	○
9	30	8.2	5.2	1.3		○	○	
10		8.4	5.8	1.1		○	○	○
11	31	8.5	5.9	1.4		○	○	○

番号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
12	32	8.7	7.0	1.2		○	○	
13	33	8.7	5.8	1.4		○	○	
14		8.8	6.9	1.3		○	○	○
15	34	8.8	6.2	1.5		○	○	○
杯a								
1	35	11.8	7.7	2.6		○	○	○
2	36	12.2	7.2	2.5		○	○	
3	37	12.2	7.7	2.7		○	○	○
4	38	12.2	8.8	3.1		○	○	○
5	39	12.8	8.8	2.4		○	○	○
SK1955								
土師器 皿a								
1	1	7.4	5.6	1.2		○	○	○
2	2	7.8	6.0	0.9		○		○
3	3	7.9	5.9	1.0		○	○	○
4	4	7.9	6.2	1.1		○	○	○
5	5	7.9	5.2	1.2		○	○	
6	6	7.9	6.2	1.3		○	○	○
7	7	8.0	5.4	0.9		○	○	○
8	8	8.0	6.0	0.9		○	○	○
9	9	8.0	6.0	1.0		○	○	○
10	10	8.3	6.1	1.2		○	○	
11	11	8.3	6.7	1.2		○	○	○
12	12	8.3	6.1	1.5		○	○	○
13		8.5	6.6	0.8		○	○	○
14	13	9.0	6.6	1.3		○	○	○
皿c								
1	14	9.5	6.9	2.5			○	
杯a								
1	15	12.2	8.3	2.9		○	○	○
2	16	12.3	9.4	2.2		○	○	○
3	17	12.4	6.8	2.7		○	○	○
4	18	12.9	7.8	2.5		○	○	○
5	19	13.2	8.5	2.6		○	○	○
6	20	13.2	8.9	2.7		○	○	○
第75次調査								
SB1995								
須恵器 杯蓋								
1	1	14.5						
SB2001								
須恵器 杯蓋								
1	2	12.6		1.9			○	○
SK2002								
須恵器 杯蓋								
1	5	15.0		(3.6)				

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
高台付杯								
1	6	14.2	(9.0)	(3.7)				
SX1989								
須恵器　杯蓋								
1	8	16.4						
2	9	16.9						
SX1993								
須恵器　高台付杯								
1	3	13.9	7.3	4.8	○		○	
第76次調査								
SD320（上層）								
須恵器　蓋								
1	1	12.7		2.5				
2	2	(15.4)						
杯								
1	3	13.3	9.7	4.2	○		○	
皿c								
1	7	(10.4)	(6.0)	(2.6)				
2	8	12.0	6.0	2.9	○		○	
土師器　杯								
1	9	10.9	7.5	2.5	○		○	
2	10	11.2	6.6	2.9	○		○	
3	11	11.4	7.3	2.6	○		○	
4	12	11.5	6.8	2.6	○		○	
5	13	12.1	7.7	3.3	○			
無高台椀								
1	14	12.0	6.7	3.8	○		○	
2	15	12.2	7.5	3.7	○		○	○
椀								
1	17	12.7	6.6	4.9			○	○
2	18	12.8	8.1	5.8			○	
（中層1）								
須恵器　杯蓋								
1	22	15.3		2.4				
2	23	16.3		(2.9)				
高台付杯								
1	24	16.6	6.4	3.2	○		○	○
土師器　椀								
1	25	14.2	7.6	5.6			○	
杯								
1	26	12.2	7.6	2.1	○		○	
2	27	11.4	6.9	3.3			○	
3	28	12.5	8.1	4.0	○		○	○
（中層2）								
須恵器　杯蓋								
1	30	16.3		3.3				

番号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
盤								
1	31	(23.8)	(17.4)	(4.0)			(○)	
土師器　杯								
1	33	11.3	8.1	3.3	○		○	
(下層)								
須恵器　壺蓋								
1	35	10.5		2.1				
杯蓋								
1	36	(14.6)						
2	37	14.5		2.3				
3	38	15.2		2.2				
4	39	15.4		1.2				
5	40	18.5						
6	41	(18.6)						
7	42	19.3		2.7				
8	43	(20.4)						
9	44	(20.4)						
高台付杯								
1	47	17.6	12.4	5.0	○		○	
土師器　杯								
1	51	11.6	7.4	2.4	○		○	
2	52	11.7	6.8	3.2	○		○	
3	53	(12.2)	(8.6)	(3.0)	○		○	
椀								
1	55	13.8	7.8	5.6			○	
2	56	14.0	7.7	5.0	○		○	
(最下層)								
須恵器　杯蓋								
1	62	13.8		2.4				
2	63	14.0		2.8				
3	64	(14.7)						
4	65	15.2		2.6				
5	66	15.8		2.6				
6	67	15.7		1.9				
7	68	16.3		2.7				
8	69	19.5		2.0				
9	70	19.5		3.4				
10	71	22.6		4.0				
皿								
1	72	14.3	11.0	2.6	○		○	
高台付杯								
1	73	10.7	6.8	3.4	○		○	
2	74	13.5	8.1	4.4	○		○	
鉢								
1	75	(29.7)	(13.9)	(8.5)			(○)	
盤								
1	76	(41.7)	(31.4)	(6.4)	○		○	

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
土師器　杯蓋								
1	77	22.4		4.0				
杯								
1	78	12.2	7.9	3.2	○		○	
2	79	12.4	9.6	3.2	○		○	
3	80	14.2	7.7	3.6	○			
椀								
1	81	13.4	7.2	5.7	○		○	
SD201D								
須恵器　杯								
1	2	(9.8)	(6.6)	(2.4)	○			
2	3	(12.5)	(7.6)	(3.8)	○			
3	4	16.3	8.8	3.5	○		○	
高台付杯								
1	5	(14.6)	(9.3)	(4.3)			○	
SD2011・2012								
土師器　Ⅲc								
1	1	10.3	7.5	1.7	○			
杯								
1	2	10.6	6.2	2.3	○		○	
2	3	12.2	8.0	3.2	○		○	○
無高台椀								
1	4	14.8		4.6	○			○
黒色土器B　椀								
1	5	14.9	6.0	6.0				
SD2015A								
須恵器　Ⅲ								
1	1	14.6	12.0	2.2	○		○	
高台付杯								
1	2		7.4		○		○	
2	7	13.9	8.8	4.3	○		○	
3	8	15.6	9.5	5.8	○		○	
杯								
1	9	12.6	8.8	3.6	○		○	
土師器　杯蓋								
1	3	18.1		2.9				
杯								
1	5	14.1	7.7	3.8	○		○	○
2	6	13.8	7.3	3.5	○			
3	10	9.8	5.8	3.4	○		○	
4	11	10.8	5.7	3.7	○			
椀								
1	4	16.0	8.7	6.9			○	
SD2015B（上層）								
須恵器　壺蓋								
1	1	8.8		2.2				

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
皿								
1	6	(17.3)	(13.0)	(1.7)				
杯								
1	2	10.5	7.8	2.6	○		○	
2	3	12.6	6.8	3.7			○	
高台付杯								
1	4	11.0	7.0	3.5				
2	5	11.6	6.9	4.0			○	
土師器　杯蓋								
1	25	20.3		3.0				
皿								
1	9	17.0	13.4	1.7				
2	10	17.6	14.4	2.0			○	
3	11	18.9	14.3	1.7			○	
杯								
1	15	11.6	5.8	3.8			(○)	
2	16	12.4	7.4	3.0				
3	17	13.2	7.2	3.4				
4	18	13.6	8.0	3.0			(○)	
5	19	13.6	7.2	3.4			○	
6	20	13.6	6.8	3.5				
7	21	(15.2)	(7.8)	(5.5)				
8	22	15.6	7.2	4.0				
9	23	16.2	8.8	4.0				
10	24	16.9	7.7	4.5				
椀								
1	26	16.4	10.2	6.2				
2	27	16.4	8.7	6.2			(○)	
(下層)								
須恵器　杯蓋								
1	28	15.4	1.9					
杯								
1	29	13.0	8.0	4.0				
土師器　皿								
1	32	18.4	14.0	2.0				
2	33	19.0	15.8	2.0				
3	34	19.3	15.1	2.0			○	
4	35	20.3	16.8	2.5			○	
杯								
1	36	15.0	8.1	3.5			○	
椀								
1	37	15.3					○	
SK2007								
須恵器　杯蓋								
1	1	12.9		2.5				
2	2	13.3		2.3				
3	3	17.2		1.9				

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
壺蓋								
1	6	15.0		3.5				
杯								
1	4	9.0	5.2	3.8	○		○	
高台付杯								
1	5	12.4	8.4	4.3	○			
土師器　皿								
1	11	17.6	15.1	2.6	○			
2	12	17.7	13.7	2.0	○		○	
3	13	(27.5)	(23.5)	(2.8)	○			
杯								
1	14	10.1	6.1	3.5	○			
2	15	10.2	6.1	4.2	○			
3	16	10.1	5.1	2.9	○		○	
4	17	14.1	6.8	2.9	○			
5	18	14.5	7.1	3.3	○			
6	19	(14.6)	(8.0)	(3.5)	○			
7	20	(14.8)	(8.7)	(3.9)	○			
8	21	15.1	7.7	3.0	○			
9	22	16.4	8.7	3.8	○			
10	23	(18.7)	(10.1)	(3.6)	○			
11	24	18.7	9.4	4.0	○			
椀								
1	25	16.5	8.4	6.3	○			
2	26	17.3	9.2	7.1	○			
(上層)								
土師器　杯								
1	8	10.5	6.5	3.6			○	
椀								
1	9	17.0	9.0	6.3				
第77次調査								
SD205								
土師器　皿a								
1	1	7.1	4.9	1.2		○	○	○
2	2	7.9	5.8	1.3		○	○	○
皿b								
1	3	6.1	4.0	1.8		○	○	○
2	4	6.9	4.1	2.3		○	○	○
SE2025								
土師器　皿a								
1	1	10.0	7.8	1.4		○	○	○
杯a							○	
1	2	16.2	12.3	3.3		○	○	○
SE2030								
土師器　皿								
1	1	8.0	6.0	1.1		○	○	○

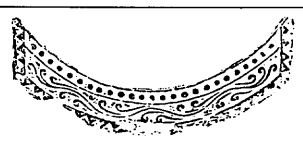
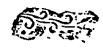
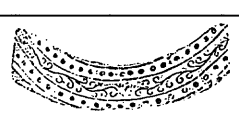
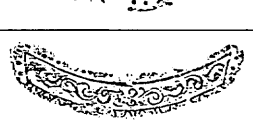
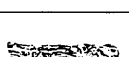
番号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
2	2	8.1	6.3	1.1		○	○	○
3	3	8.2	6.5	1.2		○	○	○
4	4	8.3	6.1	1.2		○	○	○
5	5	8.9	6.6	1.3		○	○	○
6	6	9.0	6.4	1.3		○	○	○
杯a								
1	7	11.6	7.7	2.4		○	○	○
2	8	11.7	8.3	2.4		○	○	○
3	9	11.8	7.4	2.8		○	○	○
4	10	12.0	8.2	2.8		○	○	○
5	11	12.1	8.3	2.8		○	○	○
6	12	13.0	8.5	2.7		○	○	○
7	13	13.0	8.2	2.9		○	○	○
大杯								
1	14	17.4	14.0	3.1		○	○	○
SE2035								
土師器 皿a								
1	20	7.6	5.8	1.1		○	○	○
SE2045								
土師器 皿a								
1	5	8.7	7.2	1.2		○	○	
2		8.6	6.9	0.7		○	○	○
3	6	8.9	7.3	1.2		○	○	○
4	7	9.0	7.7	1.0		○	○	
5	8	9.0	7.8	1.1		○	○	○
6		9.1	7.3	0.9		○	○	○
7	9	9.1	7.7	1.3		○	○	○
8	10	9.3	7.5	1.0		○	○	○
9	11	9.4	8.2	1.2		○	○	○
10	12	9.8	7.1	1.3		○	○	
杯								
1	13	15.1	11.0	3.2		○	○	○
2	14	15.5	10.8	2.8		○	○	○
3	15	16.0	10.7	2.7		○	○	○
瓦器 椀								
1	16	16.1	6.2	5.7				○
SE2054								
土師器 皿a								
1	20	8.7	6.9	0.7		○	○	
2	21	8.8	6.9	0.9		○	○	○
3	22	8.9	6.3	1.1		○	○	○
4		9.0	8.0	1.0		○	○	○
5	23	9.1	7.2	1.2		○	○	○
6	24	9.2	7.2	1.2		○	○	○
7	25	9.4	7.6	1.2		○	○	
8		9.7	6.8	1.1			○	○
9		10.1	7.5	1.5		○	○	○

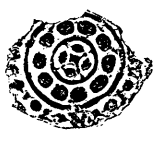
番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
杯								
1	26	15.4	11.3	3.2		○	○	○
SK2070								
須恵器　杯蓋								
1	1	16.6		2.2	○			
2	2	16.8			○			
3	3	17.1			○			
4	4	17.7			○			
皿								
1	7	18.3	14.6	2.6	○		○	
杯								
1	5	13.0	8.5	3.8	○		○	
2	6	13.6	9.1	4.5	○		○	
土師器　杯蓋								
1	8	23.8		4.0				
皿								
1	15	18.3	14.5	2.0	○		○	
2	16	18.4	15.1	2.3	○		○	
3	17	19.4	16.1	1.6	○			
杯								
1	10	10.4	5.7	3.4	○			
2	11	13.4	7.7	2.8	○			
3	12	14.4	8.0	3.6	○			
4		16.7	9.5	4.3	○			
5	13	17.9	9.3	3.8	○		○	
6	14	17.6	9.6	3.8	○		○	
椀								
1	9	12.0	5.5	4.3	○		○	
SK2071								
須恵器　杯蓋								
1	1	16.8		2.6				
皿								
1	4	17.8	14.5	2.2	○		○	
2	5	18.8	15.3	2.3	○		○	
杯								
1	2	12.3	6.8	3.9	○		○	
2	3	16.5	8.5	6.4	○		○	
土師器　杯								
1	6	13.8	6.8	3.0				
2	7	15.2	16.8	3.0				
3	8	16.8	7.9	3.9				
椀								
1	9	16.5	7.3	6.2				
SK2072								
須恵器　杯								
1	1	12.9	8.4	3.9	○			
2	2	15.9	9.2	6.0	○			

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
土師器　杯蓋								
1	6	13.2			○			
2	7	21.7			○			
皿								
1	8	18.0	13.5	2.2	○			
杯								
1	3	13.1	6.4	3.2				
2	4	14.0	6.6	3.5			○	
3	5	15.0	8.1	3.5				
鉢								
1	9	26.0	10.1	(10.8)				
SK2073								
土師器　蓋								
1	1	12.8		2.9				
2	2	17.5						
3	3	21.5						
4	4	24.8						
皿								
1	7	18.7	15.6	2.2	○		○	
杯								
1	8	10.3	4.5	3.1				
2	9	13.3	7.2	3.8				
3	10	13.2	7.2	3.9				
4	11	13.4	5.8	3.2				
5	12	13.3	9.6	4.0			○	
椀								
1	5	11.9	6.3	4.4				
2	6	19.6	10.7	7.4				
坩								
1	13	10.5	7.8	7.7				
SK2074								
須恵器　皿								
1	14	13.0	10.0	1.7				
土師器　蓋								
1	15	12.4		3.3				
杯								
1	16	11.4	6.6	3.3				
椀								
1	17	15.1	8.7	5.9				
SK2060								
土師器　皿a								
1		9.4	6.3	1.4	○			○
2	1	9.5	7.0	1.5	○		○	○
3	2	10.1	8.8	1.4	○		○	○
4	3	8.8	6.2	1.4		○	○	
5	4	9.0	7.0	0.9		○	○	○
6	5	9.0	6.4	1.0		○	○	○

番号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
7	6	9.0	6.7	1.1		○	○	○
8	7	9.3	6.7	1.1		○	○	○
9		9.2	6.5	1.4		○	○	○
10	8	9.5	7.0	1.1		○	○	○
杯a								
1	9	15.1	10.7	3.1		○		
2	10	15.7	11.0	2.8		○	○	○
3	11	15.5	11.2	2.6		○		○
丸底の杯								
1	12	15.2		3.5	○			
2	13	15.5		3.3	○			○
3		16.9		3.5	○		○	○
SK2065								
土師器　皿a								
1	24	8.9	7.1	1.5	○		○	○
2	25	9.0	6.9	1.1	○		○	
3	26	9.6	6.4	1.4	○		○	○
丸底の杯								
1	27	15.0		3.4	○			
2	28	15.1		3.3	○			○
椀								
1	29	15.4	6.3	4.5			○	
SK2077								
土師器　皿c								
1	6	13.3	8.6				○	
杯a								
1	1	10.6	6.5	2.3	○		○	○
2	2	10.9	7.2	1.8	○		○	
3	3	11.2	7.7	2.1	○		○	
4	4	11.4	7.5	2.2	○		○	
5	5	11.4	8.0	2.3	○		○	
無高台椀								
1	7	11.5		3.6	○		○	
2	8	13.5		4.2	○		○	
椀								
1	9	13.0	8.0	4.9	○		○	
2	10	15.6	8.3	5.9	○		○	
SK2078								
土師器　杯a								
1	13	10.5	8.2	2.0	○		○	○
2	14	10.8	7.9	1.7	○		○	
3	15	11.0	8.2	1.7	○		○	
4	11	11.5	8.0	2.2	○		○	
5	12	11.6	9.5	1.9	○		○	○
椀								
1	16	13.1	8.2	4.9	○		○	○

番　　号	挿図番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
SK2083								
土師器　皿a								
1		8.7	7.3	0.9		○	○	○
2		9.3	7.8	0.9		○	○	
3		9.3	7.6	1.1		○	○	○
4	14	9.3	8.0	1.3		○	○	○
5	15	9.4	7.0	1.0		○	○	
6	16	9.5	7.3	1.0		○	○	○
杯a								
1		14.1	10.2	3.4		○	○	
2		14.5	10.1	2.7		○	○	
3		14.5	10.2	3.1		○	○	○
4		14.6	11.0	2.9		○	○	○
5	17	15.0	10.5	3.0		○	○	○
6	18	15.0	10.3	3.0		○	○	○
7	19	15.3	9.6	2.8		○	○	○
8	20	15.3	11.1	3.0		○	○	
9	21	15.4	8.5	3.2		○	○	○
10		15.6	9.9	3.2		○	○	○
11	22	15.6	10.6	3.4		○	○	○
SK2084								
土師器　無高台椀								
1	18	13.2		4.4	○			
黒色土器B　椀								
1	19	15.6	8.9	5.8				○
SK2091								
土師器　杯a								
1	30	13.8	9.8	2.9		○	○	○

	軒平瓦	70			74			75			76			77		
		点数	%	出土遺構・層位	点数	%	出土遺構・層位	点数	%	出土遺構・層位	点数		出土遺構・層位	点数	%	出土遺構・層位
1		63	42.9	SK1745 SK1777 茶灰色土層 SK1758 SK1782 茶灰色土下層 SK1769 SX1790 暗灰色砂層 SK1771 SK1800 濁茶色土層 SK1772 SD1805 SX1823 SD1830 SX1827 SD1841	6	22.2	SK1968 黒色土層B SK1982							3		SX2037 床　土 暗茶褐色砂質土層
2		4	2.7	SD1786 茶灰色土下層 濁茶色土層												
3					1	3.7	SK1950			SX1989 茶褐色土層 SX1993	28	31.8	SD320 暗灰色土層 SD2010 黒色土層 SD2011 SD2015			
4		7	4.8	SK1727 茶色土層 SK1745 茶灰色土層 SK1758 茶灰色土下層	4	14.8	SX1986 黒茶色土層 黒色土層B									
5		6	4.1	SE1770 濁茶色土層 SK1800 SD1830	1	3.7	SK1968									
6		1	0.7	茶灰色土下層												
7											1	1.1	灰色砂礫土層			
8					1	3.7	暗灰色土層									
9		1	0.7	茶灰色土層												
10					1	3.7	黒色砂質土層									
11		14	9.5	SE1785 床　土 茶色土層 茶灰色土層 茶灰色土下層												
12					1	3.7	黒色砂質土層									
13					1	3.7	黒色砂質土層									
14		6	4.1	SE1770 床　土 SX1827 茶灰色土下層												
15		7	4.8	SX1737 茶灰色土層 SD1773 茶灰色土下層 暗灰色粘土層 濁茶色土層	4	14.8	SE1930 黒色土質				46	52.3	SD320 茶灰色土層 SD2010 灰白色砂礫土層 SD2015			
16		33	22.4	SK1750 SK1801 床　土 SK1757 SD1805 茶灰色土層 SK1769 SX1823 茶灰色土下層 SK1772 SD1830 暗灰色砂層 SD1773 濁茶色土層												
17		1	0.7	SK1750	1	3.7	床　土				9	10.2	SD320 暗灰色砂層 SD2015 暗茶色土層 茶灰色土層			
18											1	1.1	SD320			
19					3	11.1	SD205 A 砂層I 黒色砂質土層				1	1.1	SD320			
20					1	3.7	黒色砂質土層									
21											1	1.1	茶灰色土層			
22					2	7.4	黒色土層									
	不　明										1	1.1		2		
	合　計	147	100		27	100					88	100		6		

	軒丸瓦	70			74			75			76			77		
		点数	%	出土遺構・層位	点数	%	出土遺構・層位	点数	%	出土遺構・層位	点数	%	出土遺構・層位	点数	%	出土遺構・層位
1		5	2.5	SD1773 茶灰色土層 SD1830 茶灰色土下層												
2								1		SX1989						
3											1	1.4	SD320			
4		3	1.5	SK1800 茶灰色土層 茶灰色土下層							3	4.1	SD320			
5											1	1.4	SD320			
6		3	1.5	茶灰色土下層 暗灰色粘土層							1	1.4	SD320			
7											3	4.1	SD320			
8		1	0.5	SK1788	1		黒色粘土層				2	2.7	茶灰色土層 暗茶色土層			
9		3	1.5	SK1788 茶色土層 茶灰色土下層												
10					1		SK1950				1	1.4	暗灰色砂層			
11											4	5.5	SD320			
12					1		SE1935									
13		2	1.0	茶灰色土層 茶灰色土下層	2		SK1968 黒色土層B							1		SK2084
14		1	0.5	床 土	2		SE1935 床 土									
15		5	2.5	茶灰色土下層 茶灰色土層	1		黒色土層							1		SD205
16		2	1.0	SX1736 SE1780	1		灰黒色土層									
17		2	1.0	床 土 茶灰色土	1		黒色粘土層									

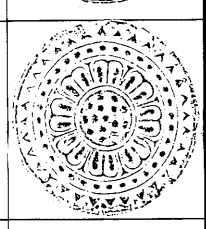
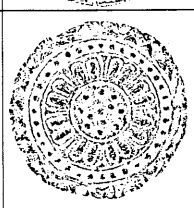
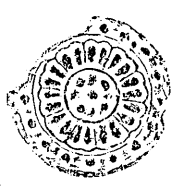
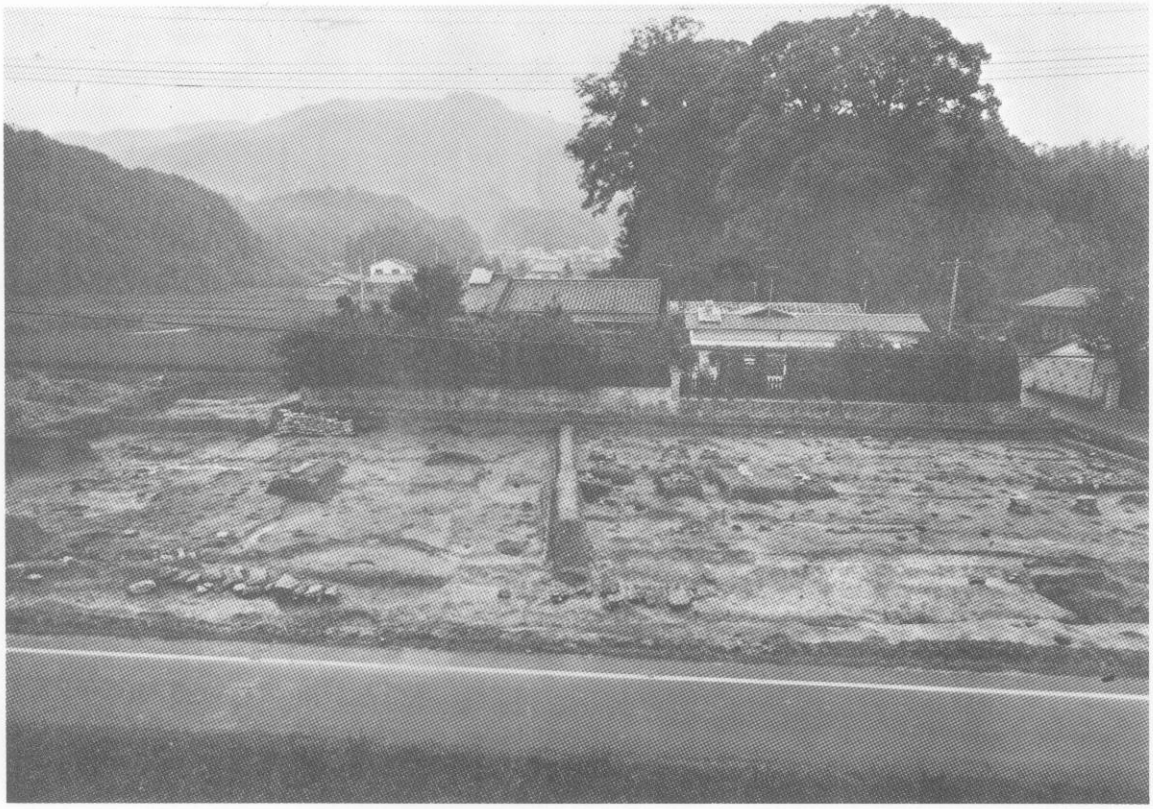
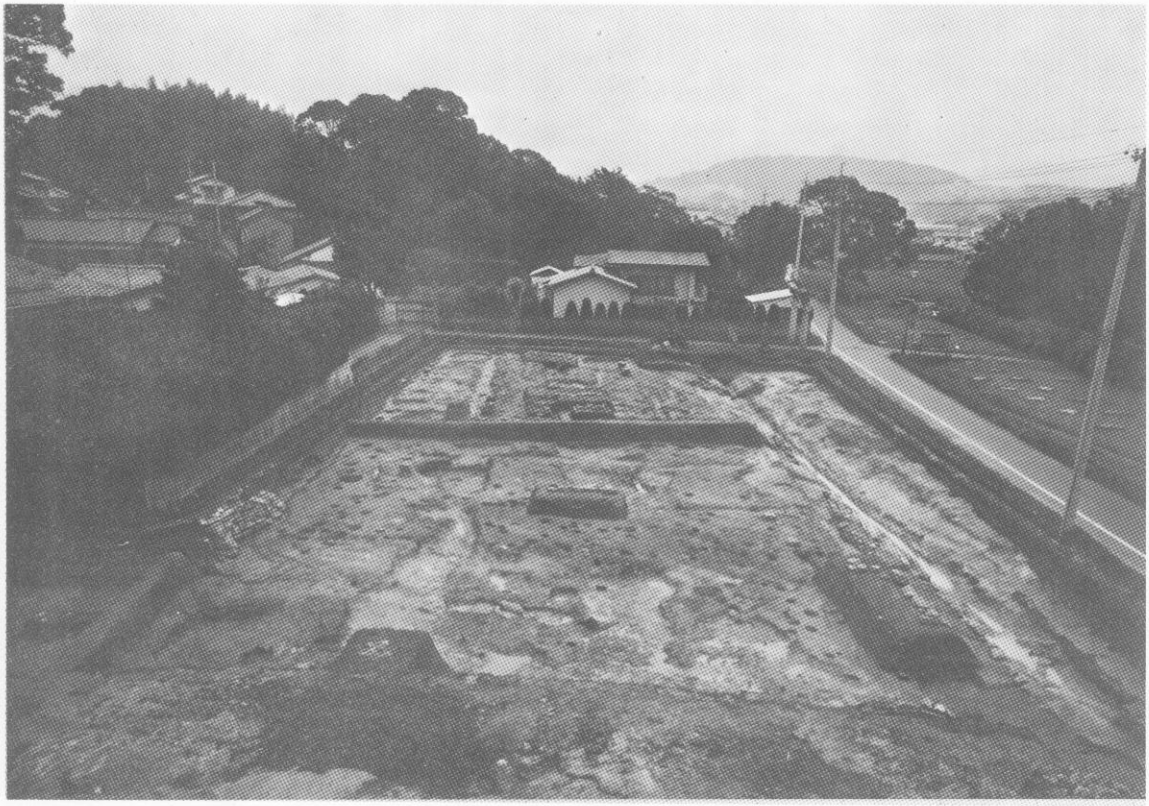
	軒丸瓦	70			74			75			76			77		
		点数	%	出土遺構・層位	点数	%	出土遺構・層位	点数	%	出土遺構・層位	点数	%	出土遺構・層位	点数	%	出土遺構・層位
18		6	3.0	SD1830　茶灰色土下層	3		SD207　砂層Ⅰ SK1983				29	39.7	SD320 SD2011 SD2012 SD2015			
19		2	1.0	SE1755 SK1769				1			5	6.8	SD320 SD2010			
20																
21		6	3.0	SB1735（柱穴） SD1786　茶灰色土下層 SK1800 SK1824 SD1826												
22		1	0.5	黒色土層												
23		9	4.6	SK1772　床　土 SD1825　茶灰色土層 茶灰色土下層												
24		127	64.5	SX1737 SE1785 SK1819 SK1740 SD1786 SX1821 SK1745 SK1787 SD1822 SX1754 SK1788 SK1825 SK1757 SE1790 床　土 SK1768 SK1792 茶灰色土層 SK1769 SK1793 茶灰色土下層 SE1780 SK1800 黒茶色土層 SK1781 SK1801 暗灰色砂層 SK1782 SK1805 濁茶色土層	3		灰黒色土層 黒色土層B	1		床　土				6		SD691　赤茶色土 SX2028 SX2036 SX2048 SX2049
25								3		床　土	3	4.1	SD320　暗灰色土層B	1		SD691
26		4	2.0	SK1800　茶灰色土 濁茶色土												
27											1	1.4	SD320			
28		3	1.5	SK1800.　茶灰色土下層 SX1823	2		SE1935 SK1953	1		SB1995	13	17.8	SD320			
29											2	2.7	茶灰色土層 暗灰色土層B	1		SK2073
30											4	5.5	SD320　床　土 SB2005（掘方）暗茶色土層 暗灰色土層B 茶灰色砂層			
31		3	1.5	SX1744　茶灰色土下層 SX1737										1		SK2083
32		8	4.1	SK1782　床　土 SE1780　茶灰色土下層 暗灰色粘土層	2		灰黒色土層 黒色砂質土層	1		床　土						
33					1		SD215									
34					1		黒色土層B									
	不　明	1			2						2	2.7				
	合　計	197	100		24			8			73	100		11		

図　　版

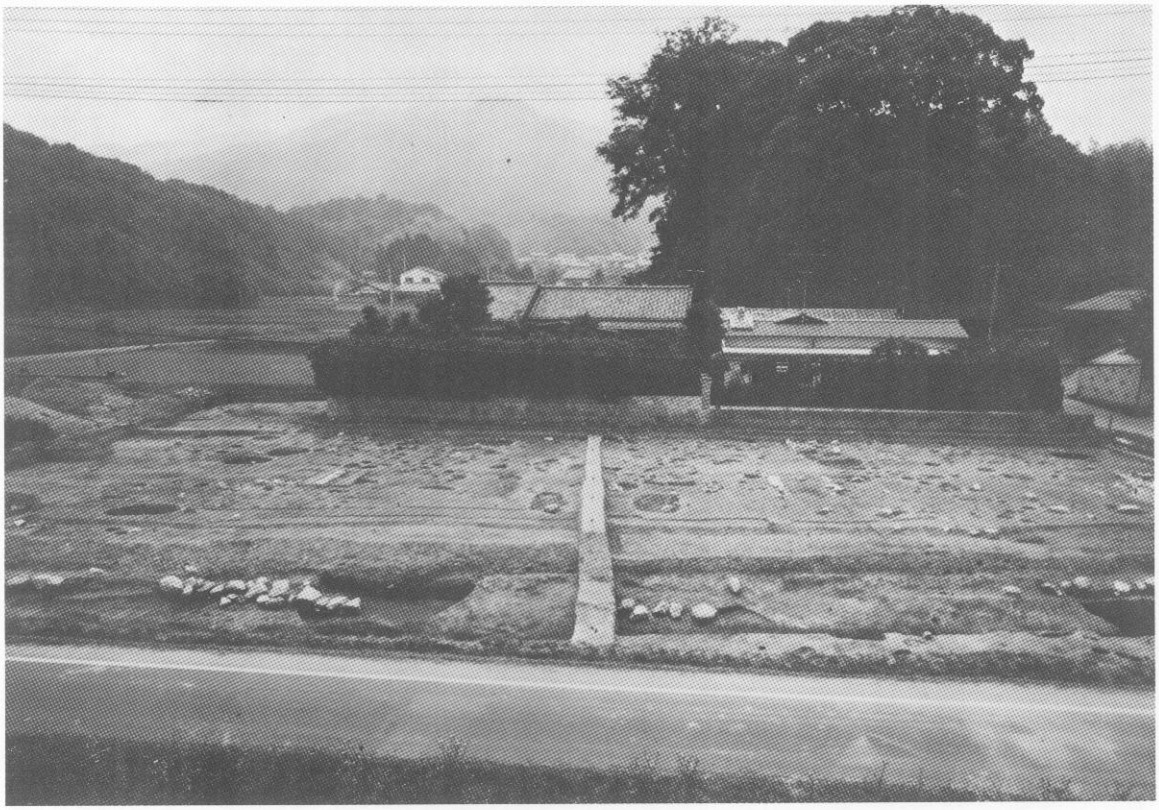


第70次調査区最上層全景（南から）

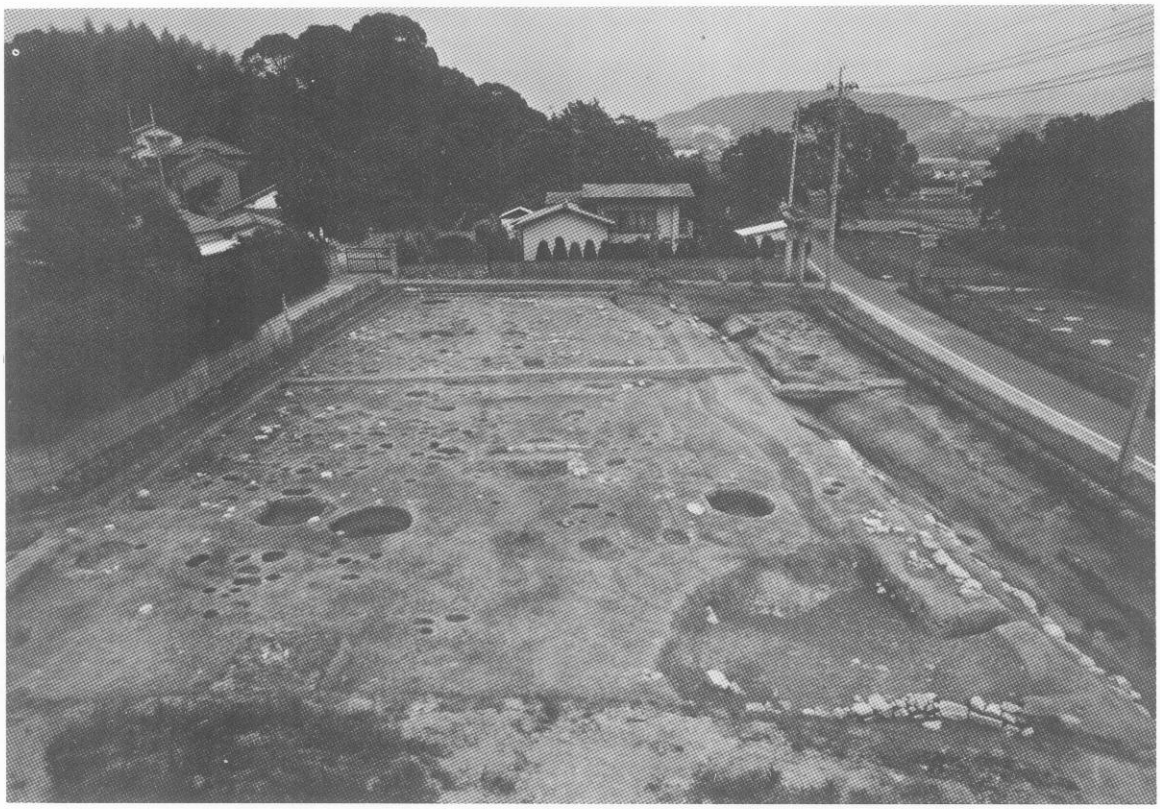


第70次調査区最上層全景（西から）

図版2



第70次調査区上層全景（南から）



第70次調査区上層全景（西から）



第70次調査区下層全景（南から）

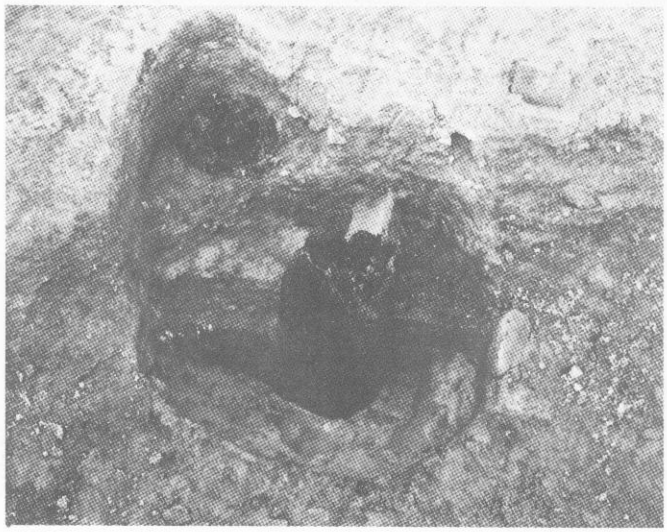


第70次調査区下層全景（西から）

図版4



柵状遺構ＳＡ1840
（東から）



同上　柱根
（南から）

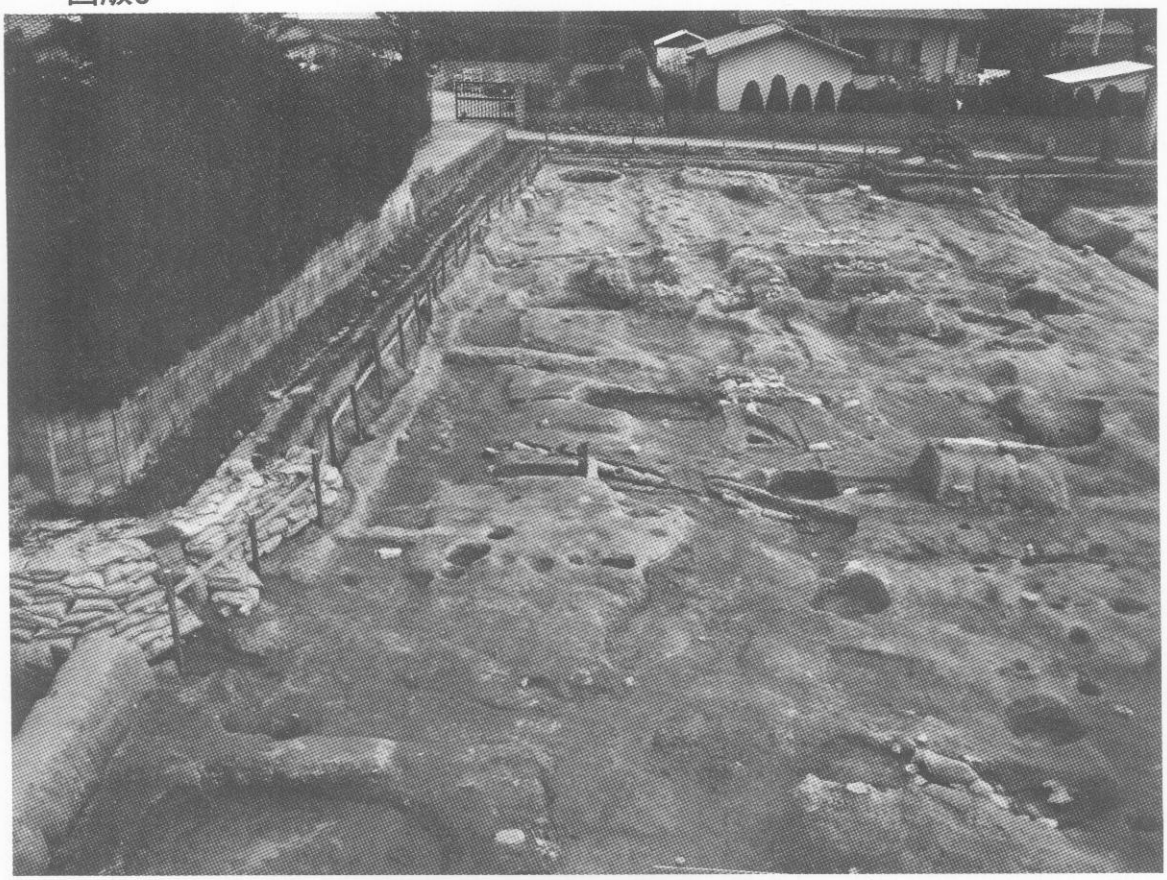
（上）掘立柱建物ＳＢ1730・
ＳＢ1735全景
（東から）

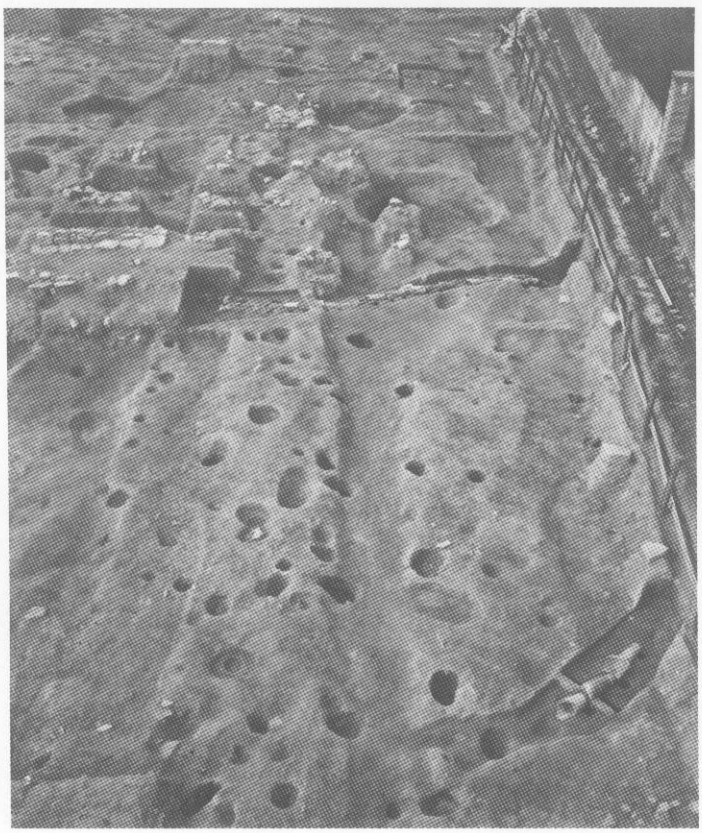


（下）地鎮遺構ＳＸ1815
（北東から）









暗渠遺構群の全景

（上）西から

（下）東から



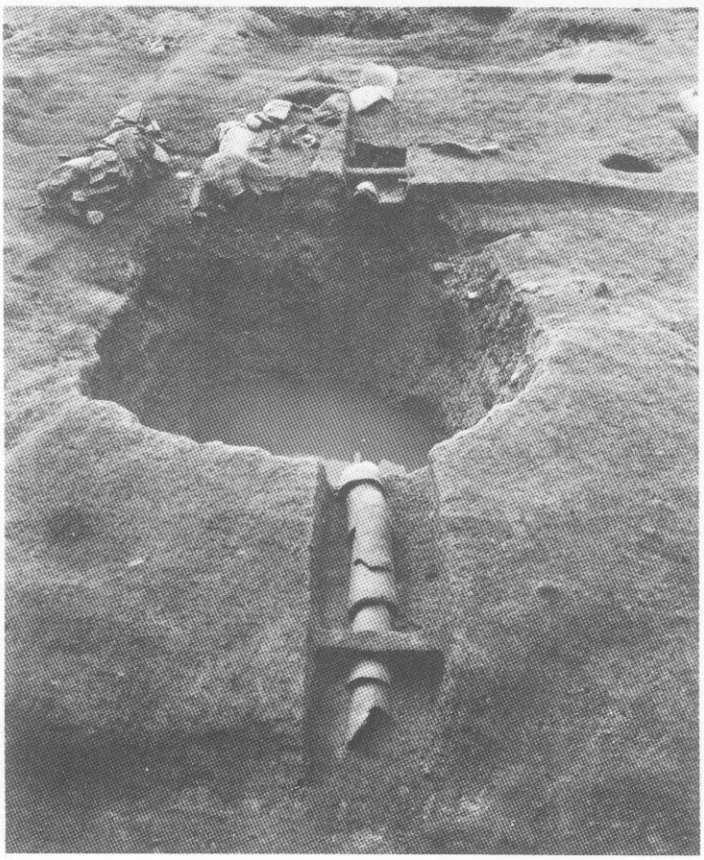
暗渠施設ＳＸ1831(上下方向)・
ＳＸ1832(斜め方向)
(北から)



暗渠施設ＳＸ1831(上下方向)・
ＳＸ1832(斜め方向)
(南から)

図版8

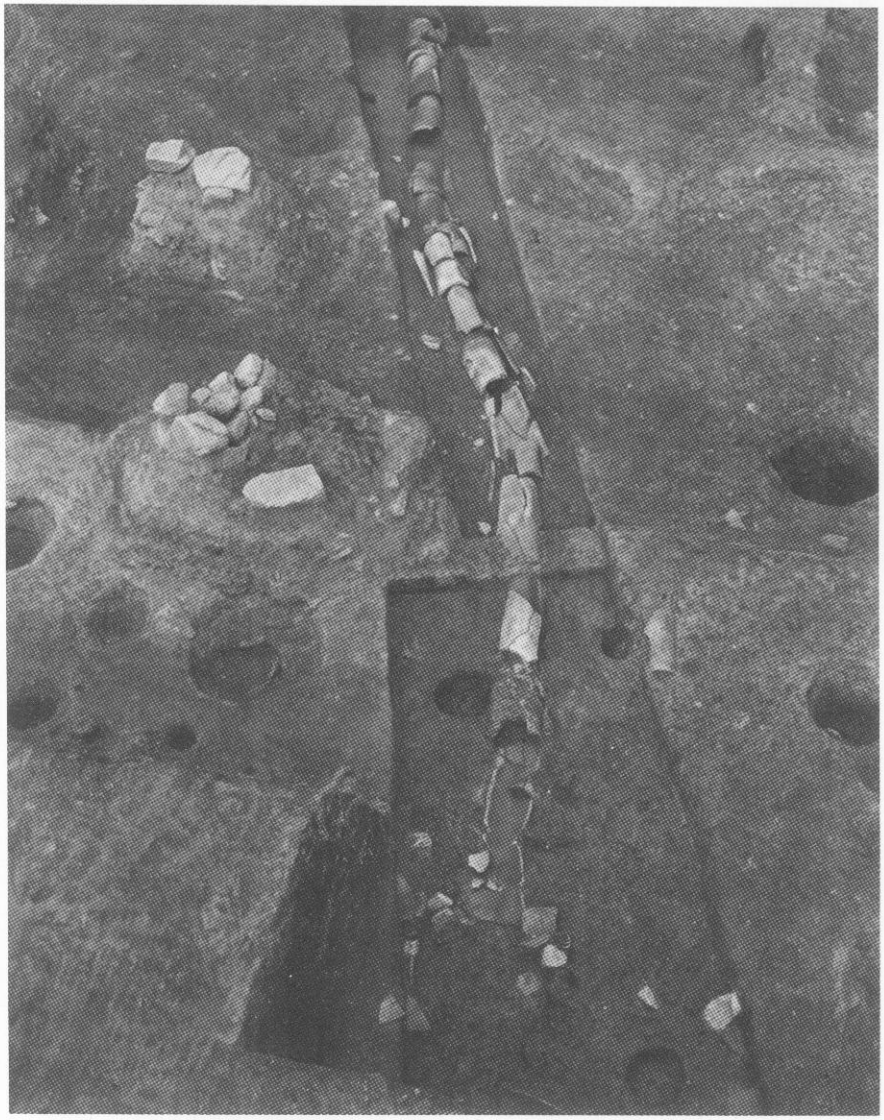




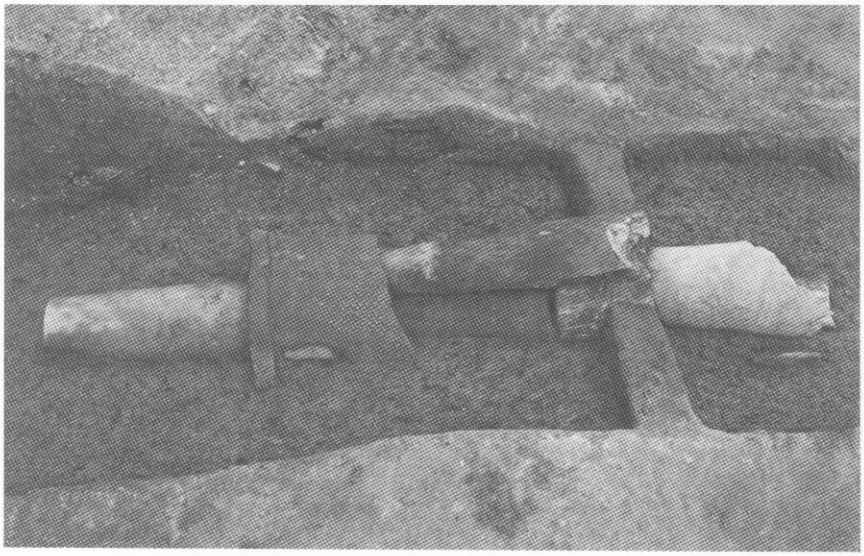
（上）暗渠施設ＳＸ1833（東から）
上方はＳＸ1831・ＳＸ1832

（下）暗渠施設ＳＸ1833（北から）

暗渠施設ＳＸ1834
（南から）



暗渠施設ＳＸ1835
（西から）



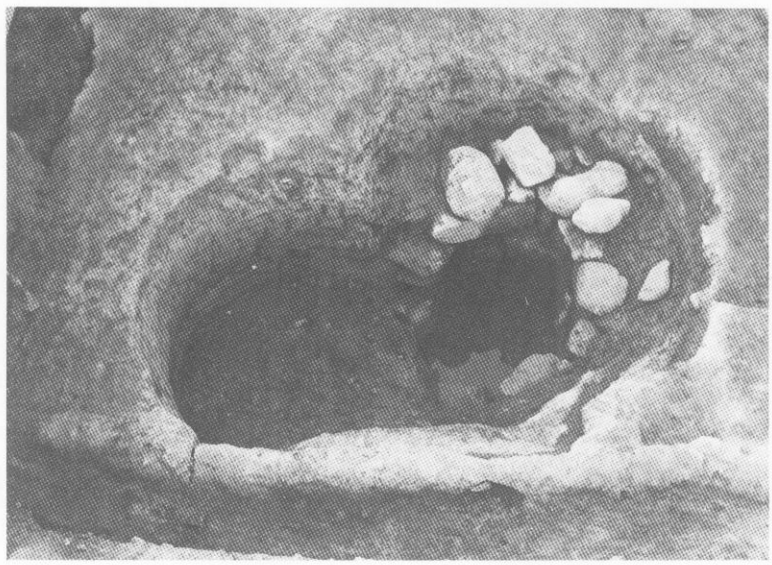
図版10



井戸ＳＥ1765全景
（北から）



井戸ＳＥ1760全景
（北から）



井戸ＳＥ1755全景
（東から）
左は土壙ＳＫ1750

井戸ＳＥ1770全景
（西から）



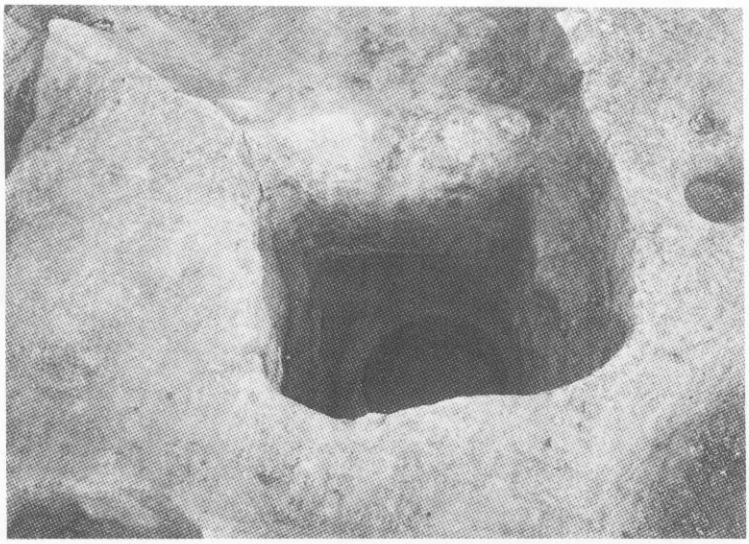
井戸ＳＥ1770
（南から）



井戸ＳＥ1775全景
（東から）



図版12



井戸ＳＥ1780全景
（西から）

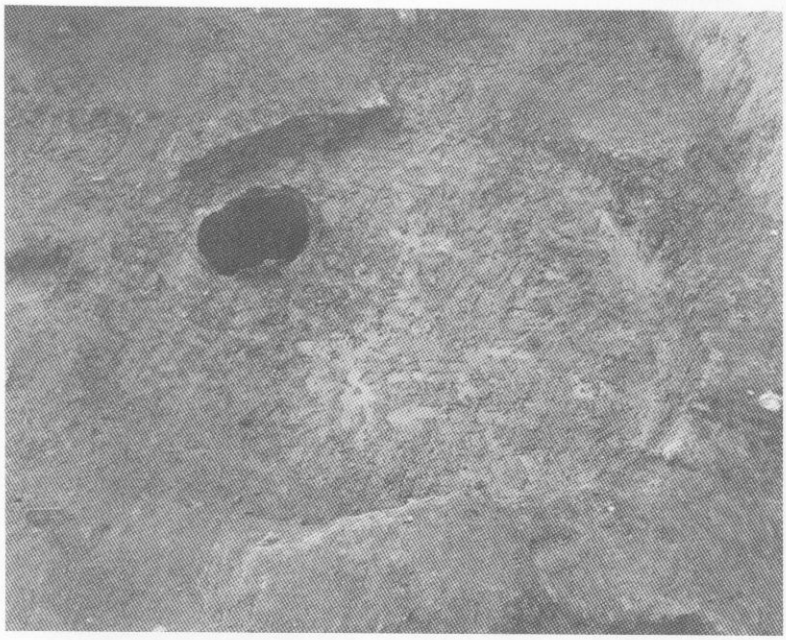


井戸ＳＥ1785
（北から）

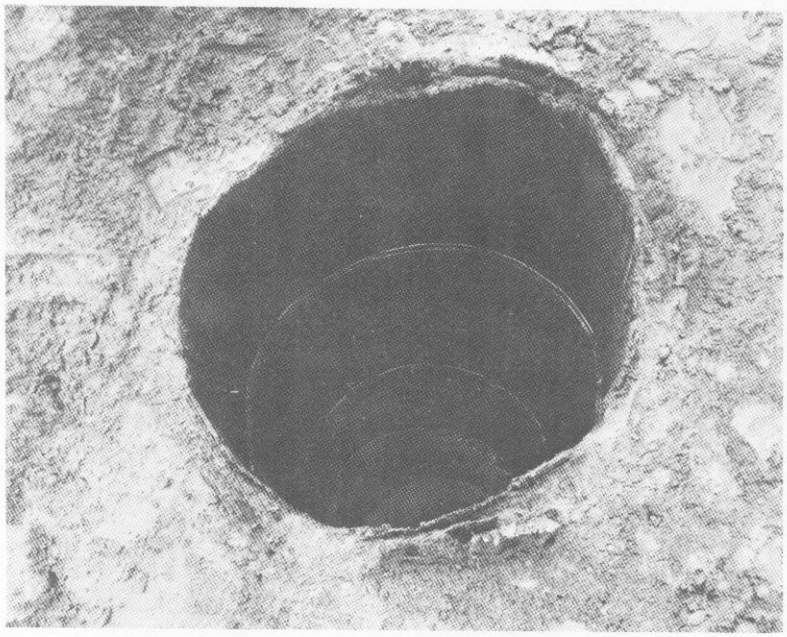


井戸ＳＥ1790
（北から）

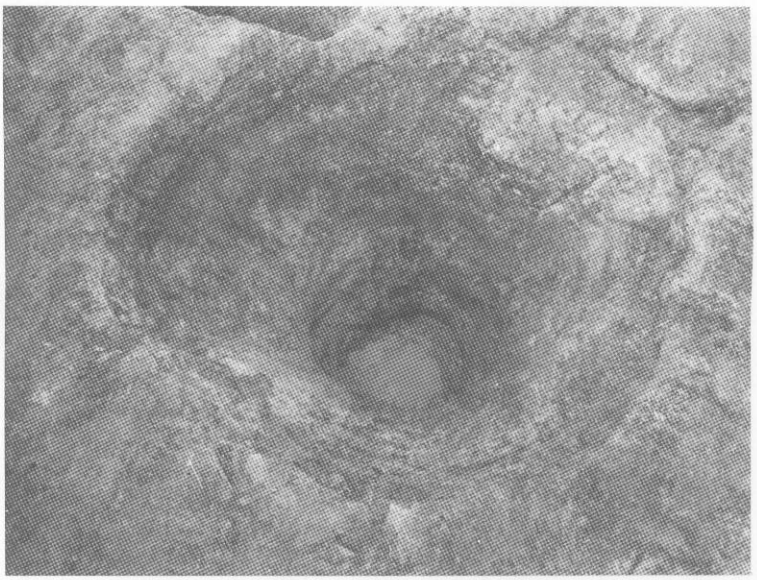
井戸ＳＥ1795全景
（東から）



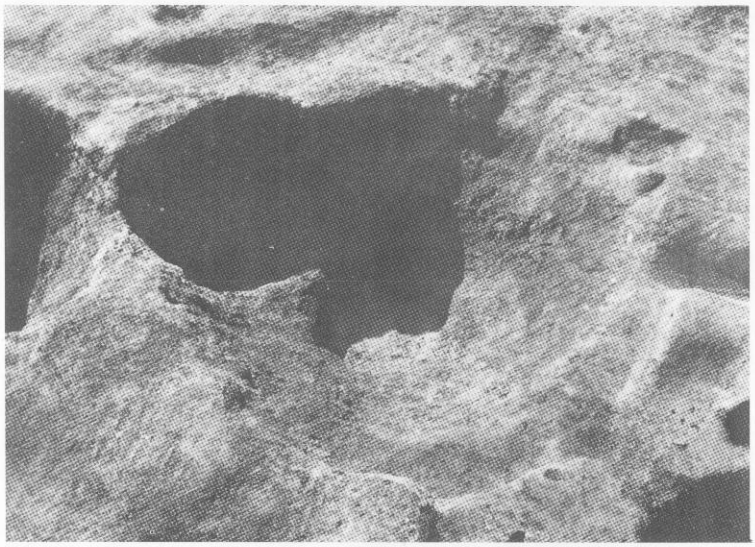
井戸ＳＥ1795
（東から）



図版14



土壙ＳＫ1781
（東から）



土壙ＳＫ1782・
ＳＫ1783
（北から）



土壙ＳＫ1800
（南から）

土壙ＳＫ1788全景
（南から）

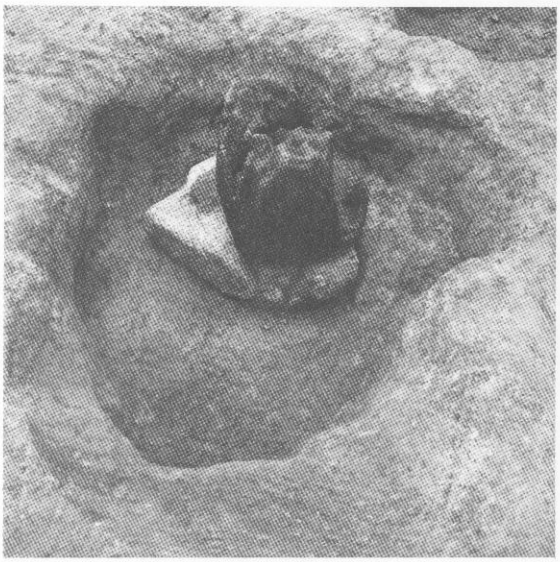


遺物の出土状態
（西から）





溝ＳＤ1805全景（西から）

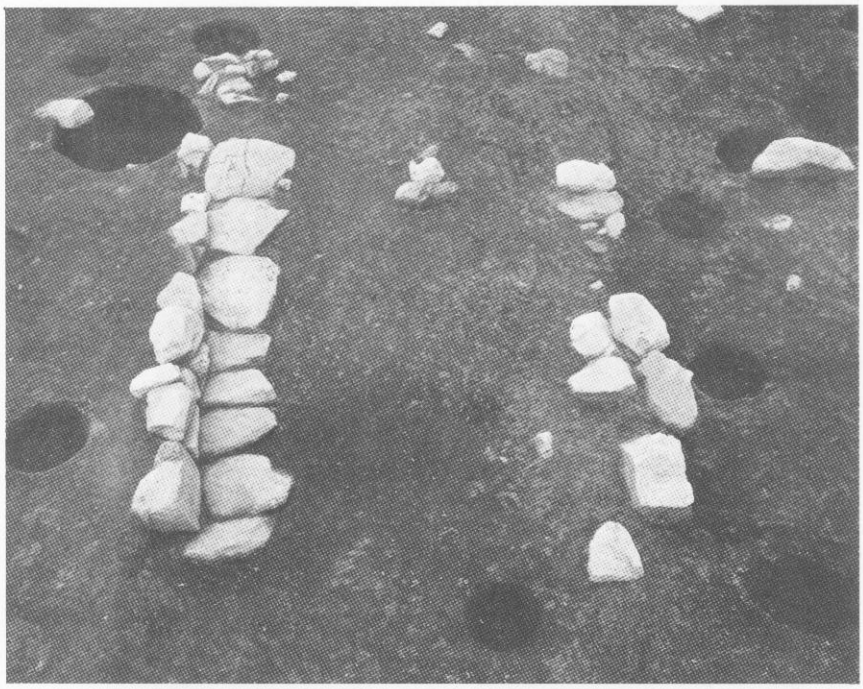


ＳＸ1478（西）
（西から）



ＳＸ1478（東）
（南から）

ＳＸ1690
（南から）



石組遺構ＳＸ1701
（北から）





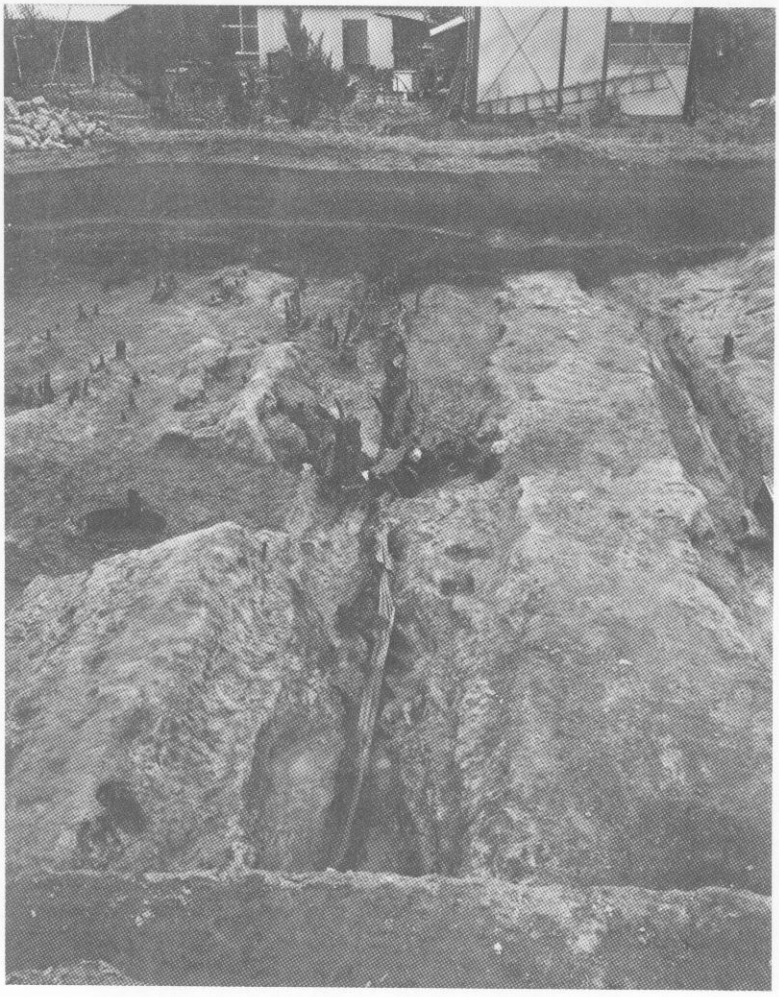
第74次調査区全景（西から）



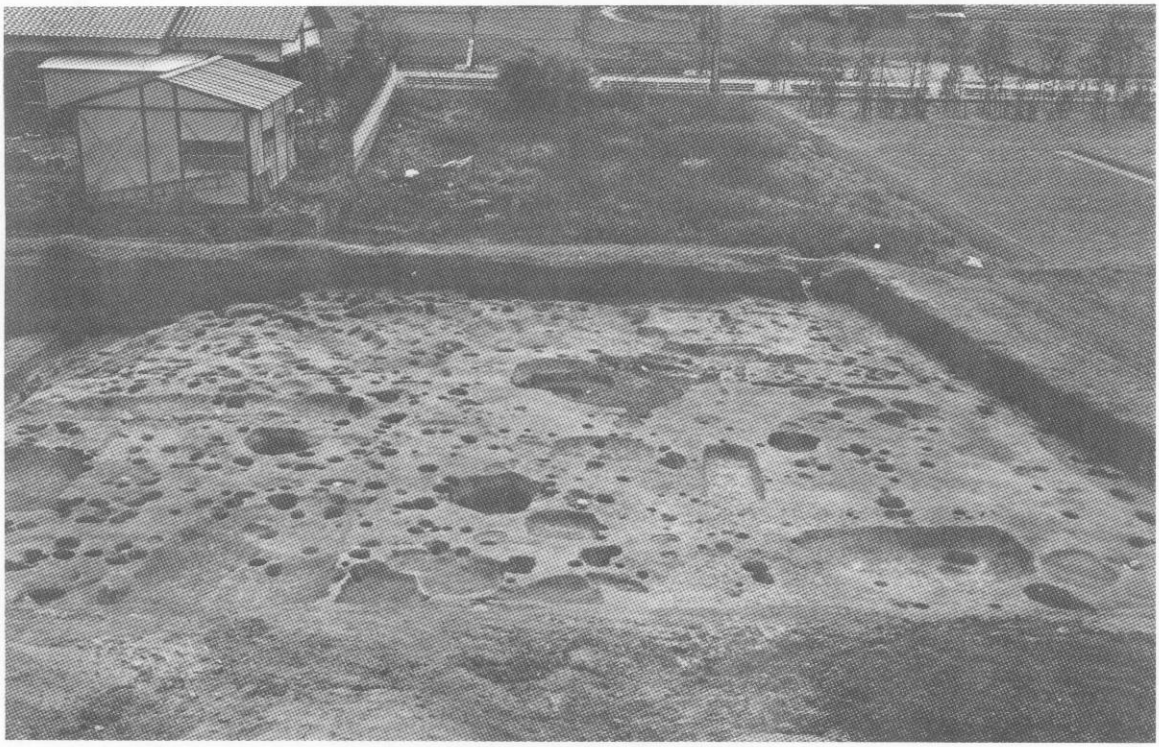
調査区の東半〔中央に道路状遺構ＳＸ1985および側溝ＳＤ207(西)・ＳＤ215Ａ(東)がみえる。〕
（北から）



（上）調査区東半の溝群
（左からＳＤ205・ＳＤ215
・ＳＤ207）
（北から）



（下）溝ＳＤ215Ａとその
護岸の状況
（北から）



調査区西半の柱穴群



掘立柱建物ＳＢ1970・ＳＢ1975全景（西から）

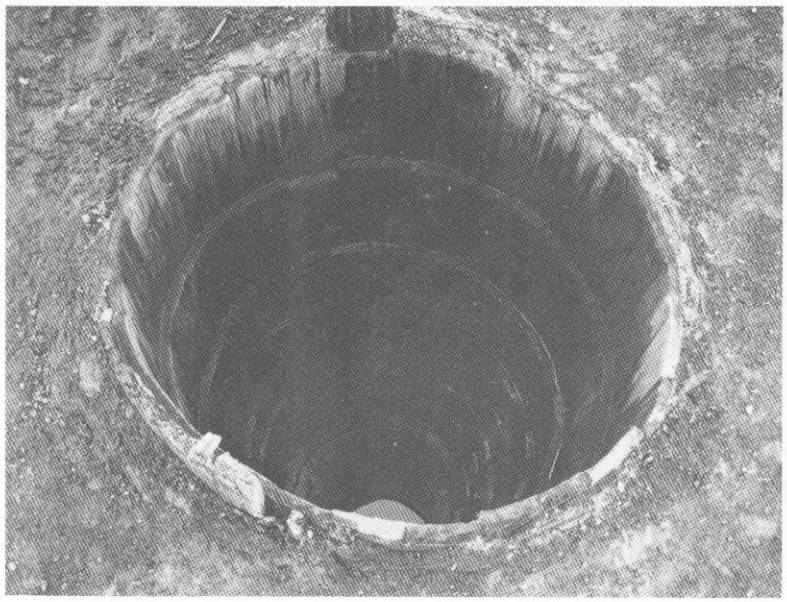
井戸ＳＥ1920全景
（西から）



井戸ＳＥ1925全景
（北から）



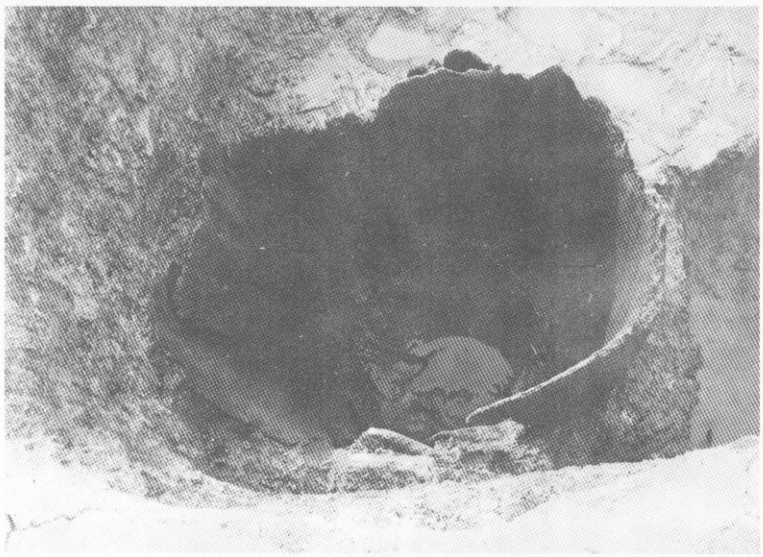
井戸ＳＥ1925
（北から）



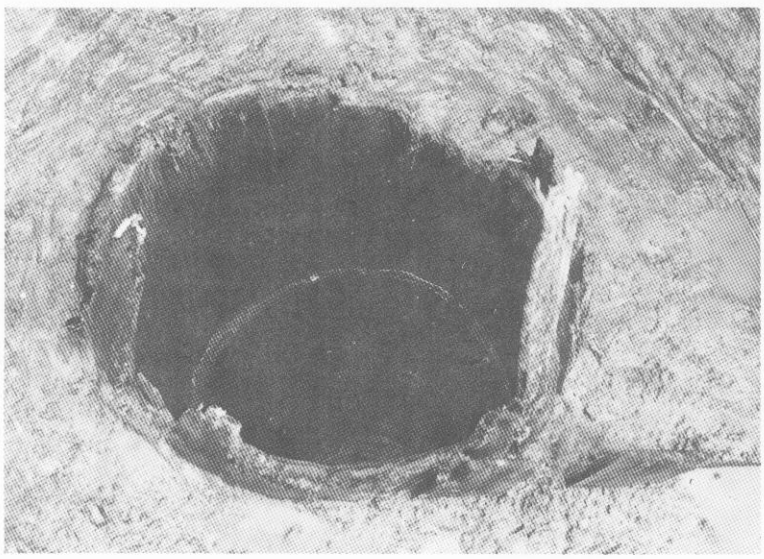
図版22



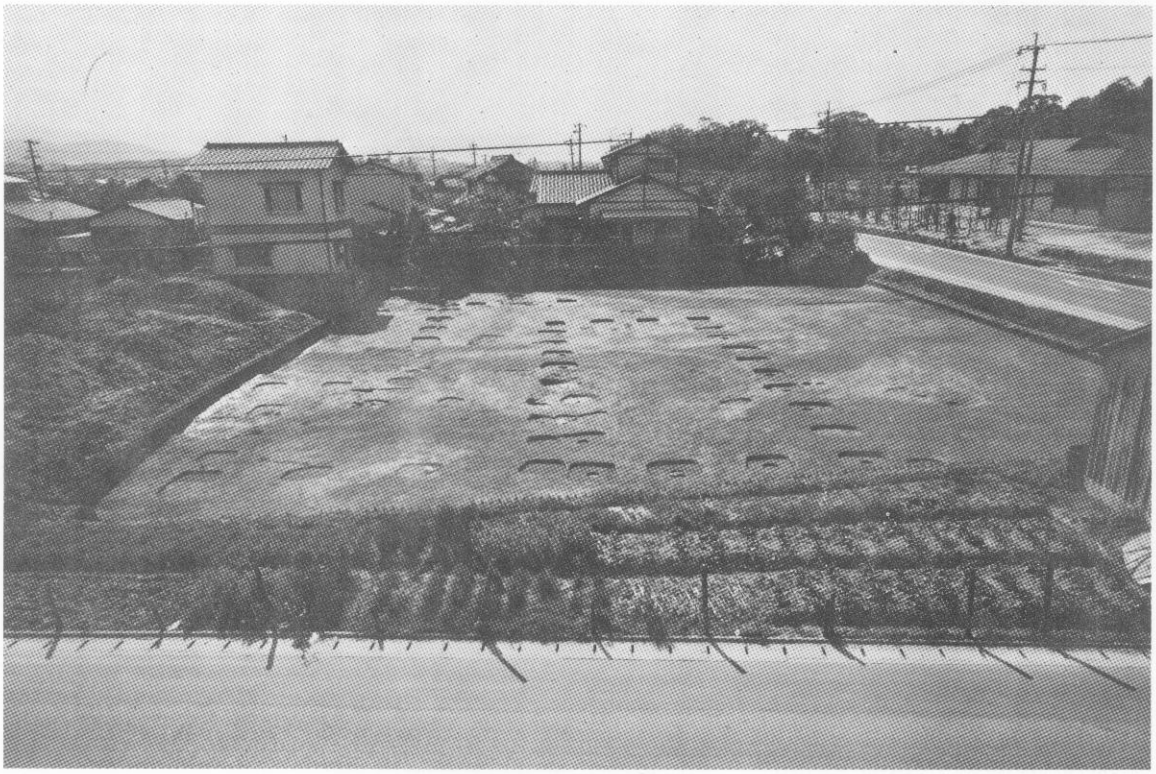
井戸ＳＥ1930・1935・
1940全景
（西から）



井戸ＳＥ1930
（東から）



井戸ＳＥ1935
（北西から）



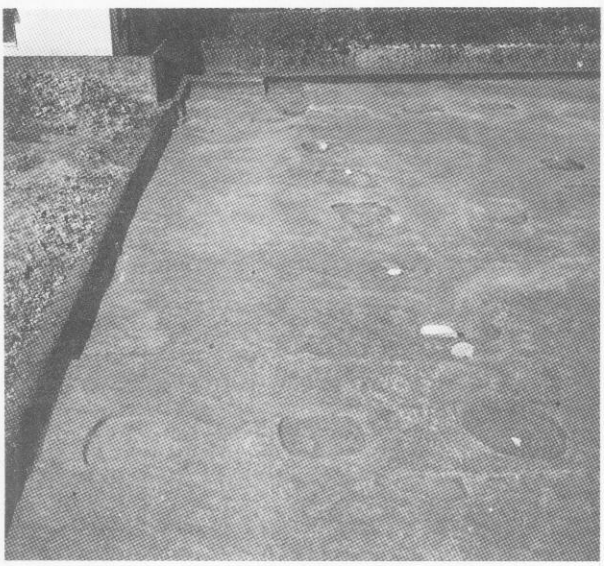
第75次調査区全景（東から）



第75次調査区全景（西から）







（上）　掘立柱建物ＳＢ1990全景（手前はＳＢ2000）（北から）

（下右）掘立柱建物ＳＢ1990全景（東から）

（下左）柵状遺構ＳＡ1999全景（北から）



掘立柱建物ＳＢ1995全景（東から）



掘立柱建物ＳＢ1955全景（南から）

図版26



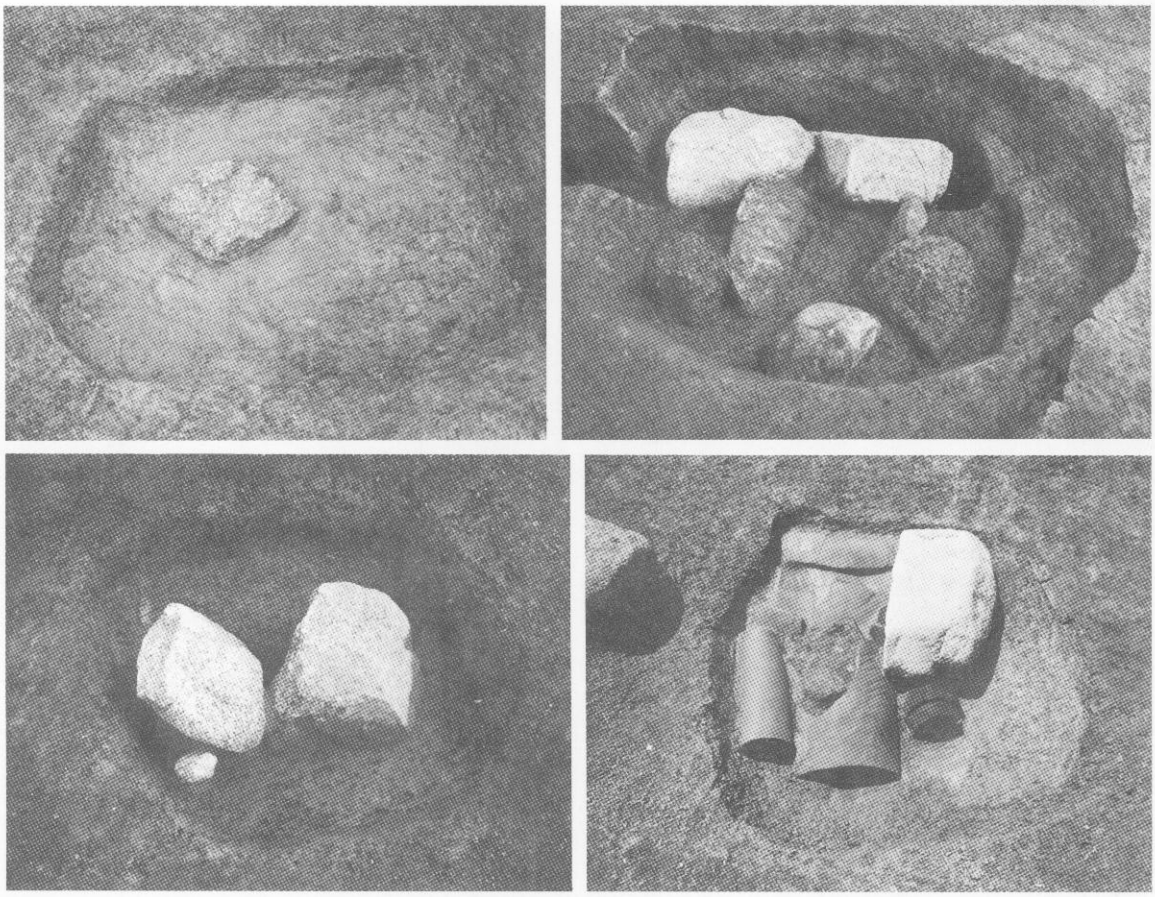
掘立柱建物ＳＢ2000
（南から）



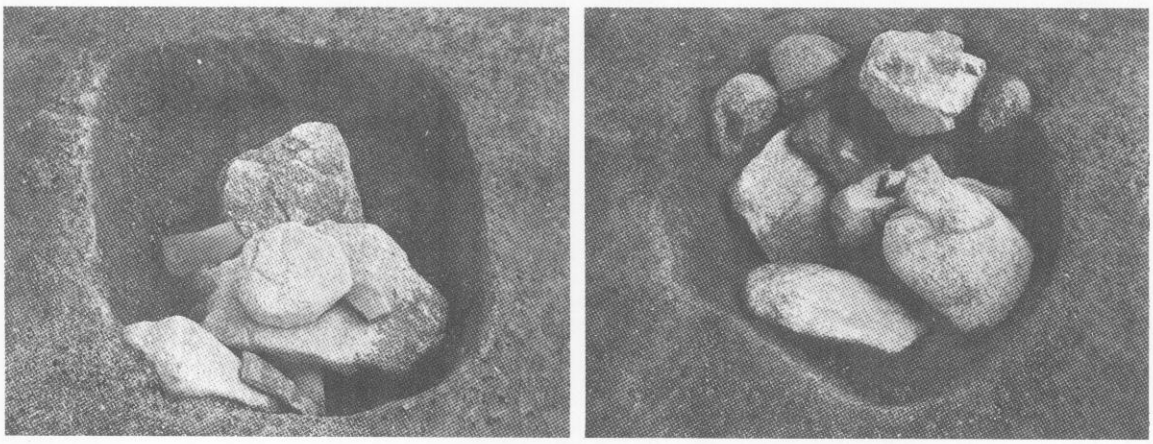
（西から）



（東から）

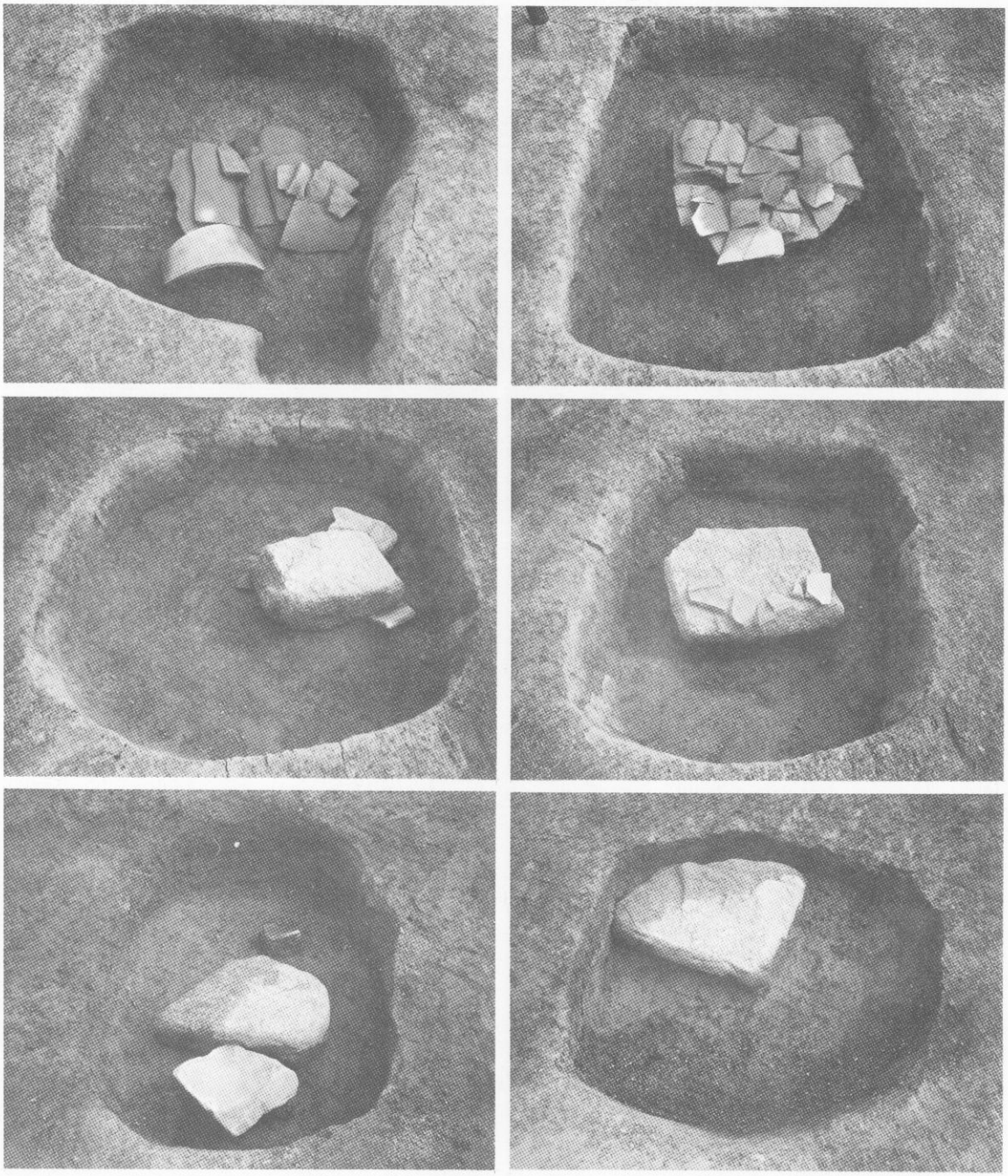


掘立柱建物ＳＢ1990の掘り方内礎板

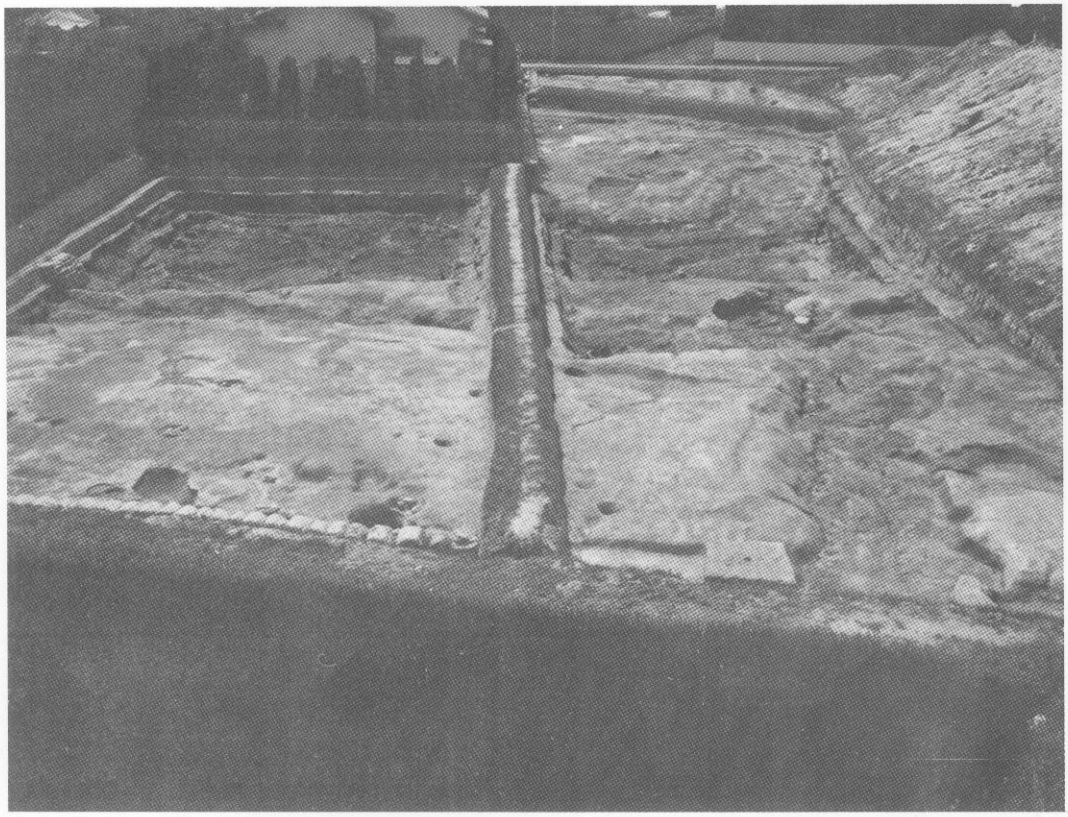


掘立柱建物ＳＢ1995の掘り方内礎板

図版28



掘立柱建物ＳＢ2000の掘り方内礎板

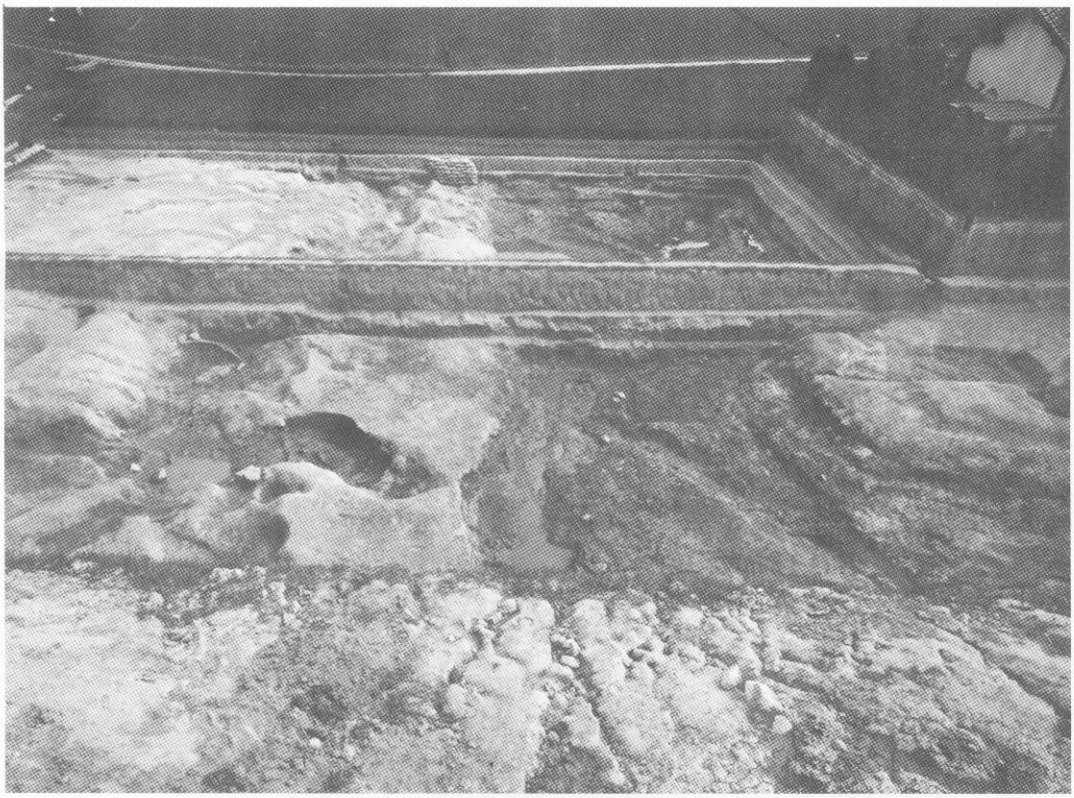


第76次調査区全景（東から）

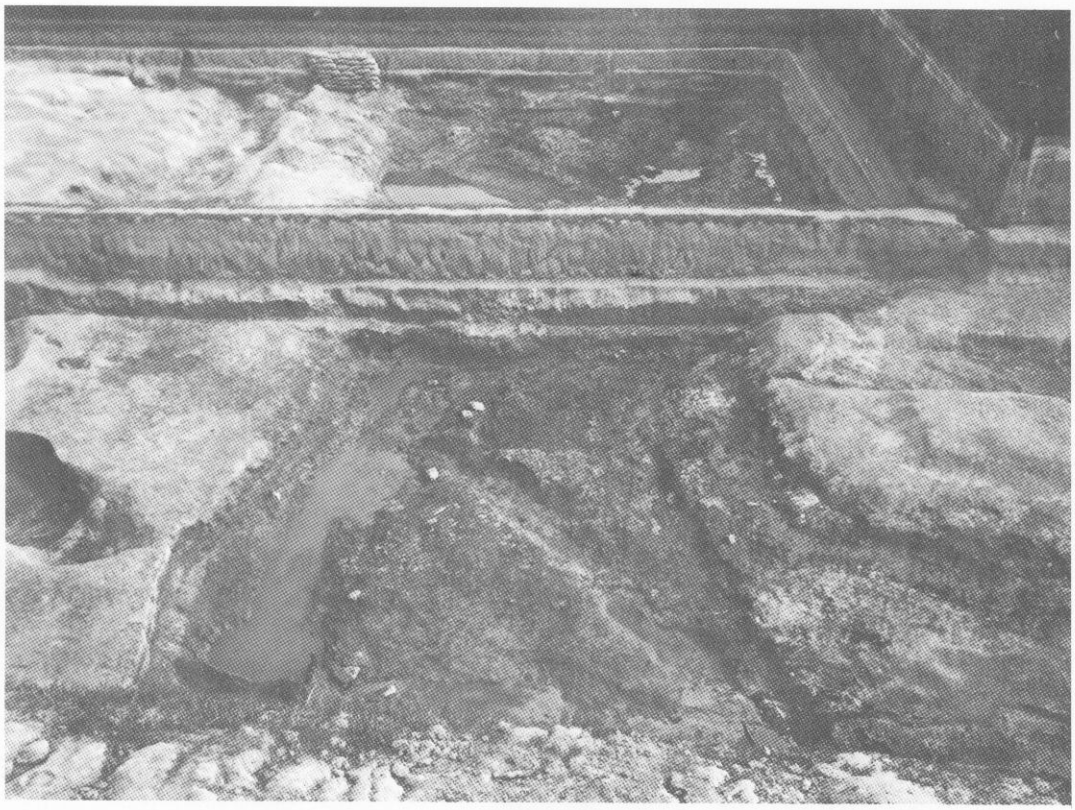


第76次調査区全景（西から）

図版30



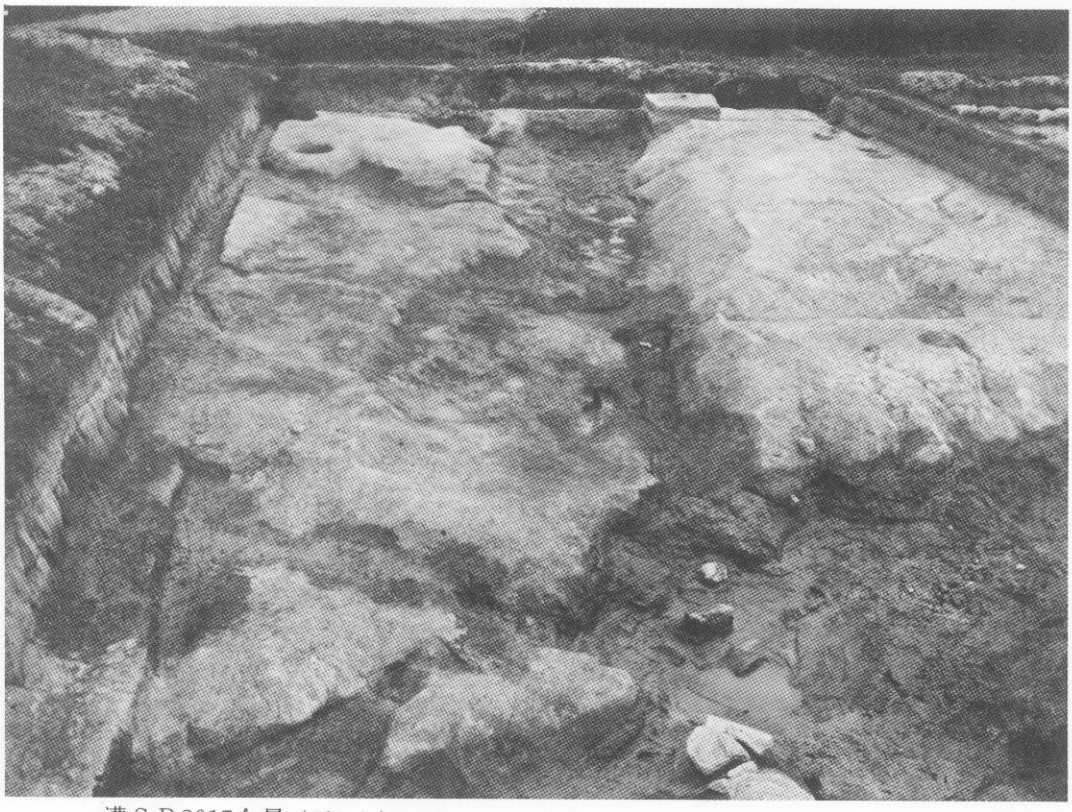
溝ＳＤ320全景（北から）



溝ＳＤ 320近景（北から）



溝ＳＤ2015全景（東から）



溝ＳＤ2015全景（西から）

図版32



調査区の南半（東から）



護岸状遺構ＳＸ2013（東から）

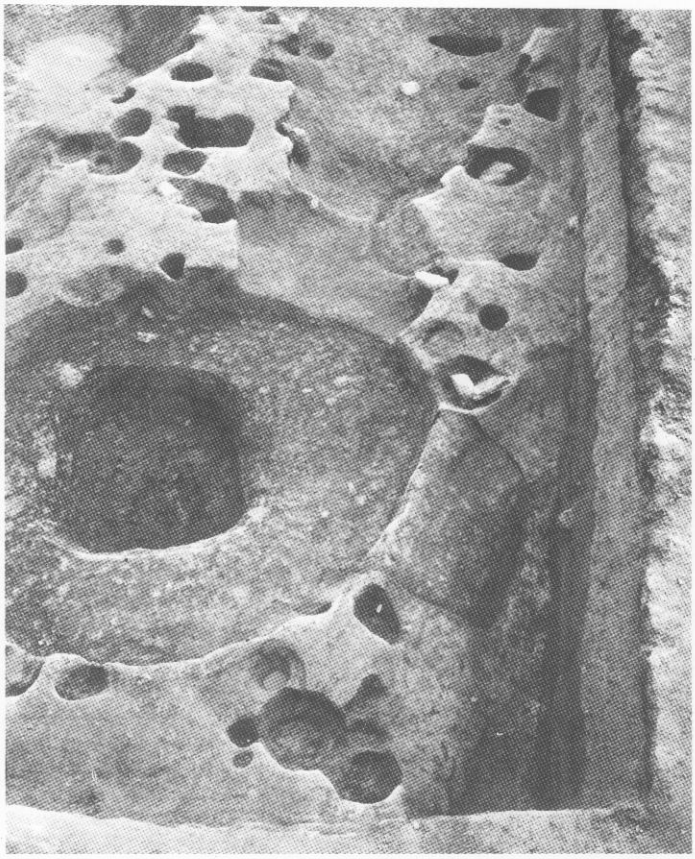


第77次調査区全景（西から）



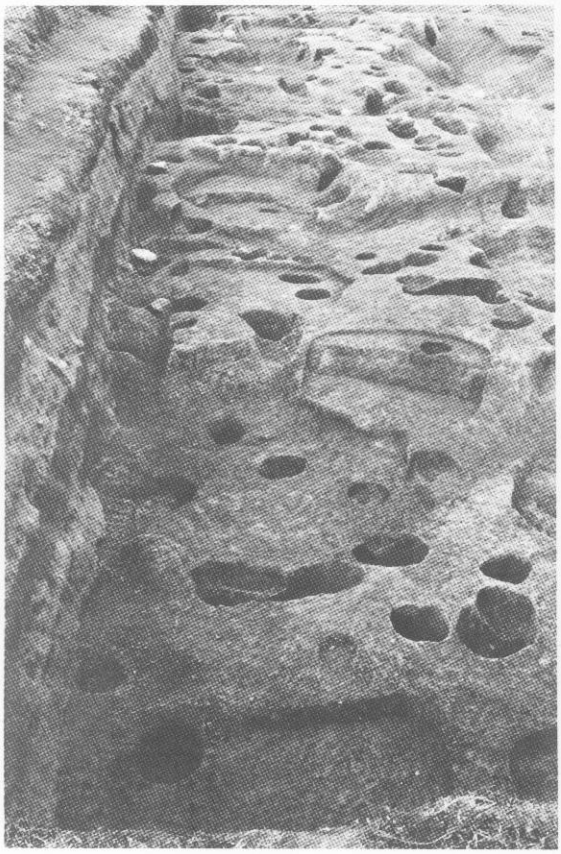
第77次調査区全景（北から）

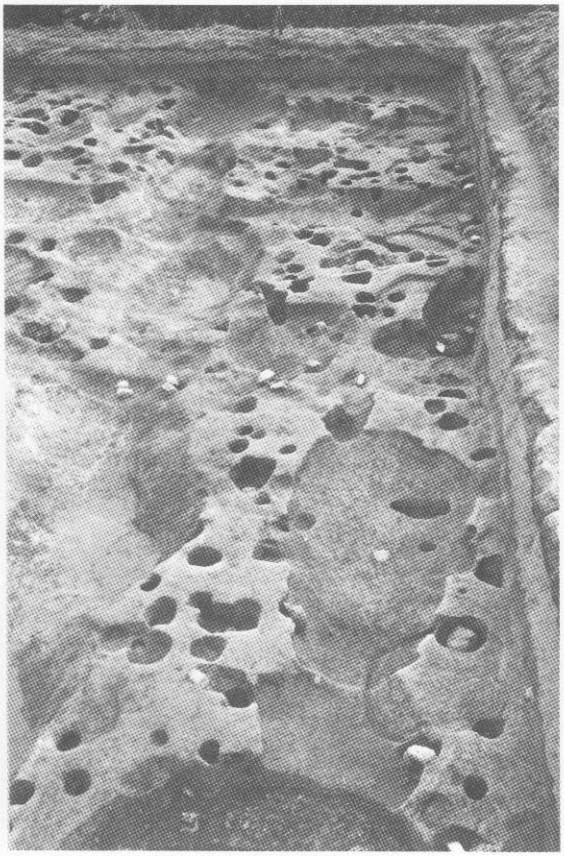
図版34



（左）柱立柱建物ＳＢ700の
東側柱の一部（北から）

（下左）掘立柱建物ＳＢ715
東側柱列（南から）
（下右）同　上（北から）







奈良期の土壙列（右列）（北から）



奈良期の土壙列ＳＫ2070・ＳＫ2071・ＳＫ2072（東から）

図版36



築地状遺構ＳＸ2020全景（北から）

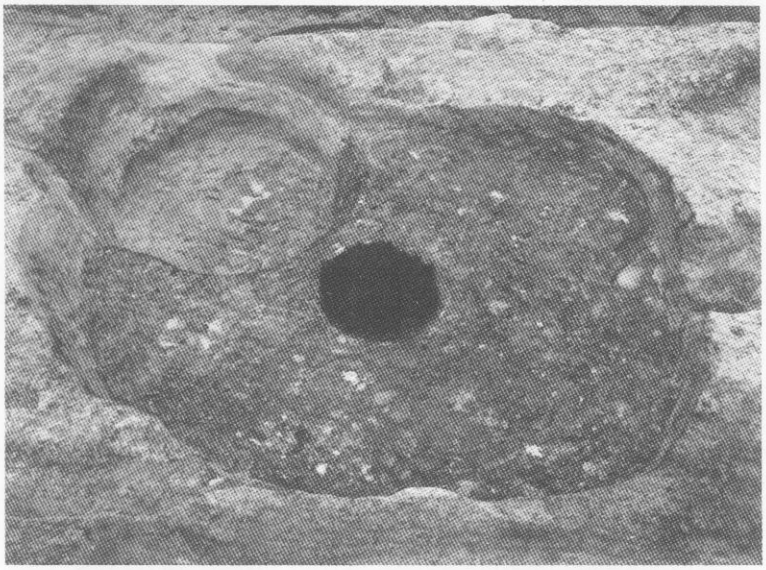


溝ＳＤ205全景（北から）

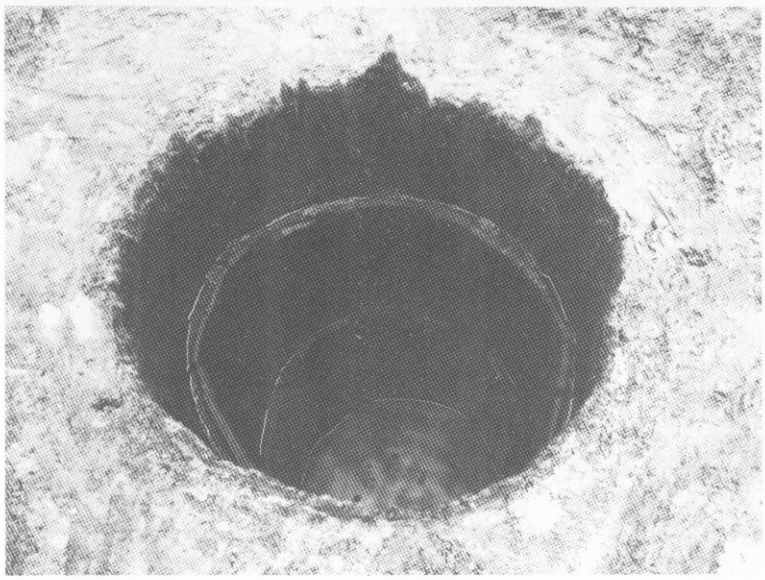
井戸ＳＥ2025全景
（北から）



井戸ＳＥ2030・
ＳＥ2035全景（西から）



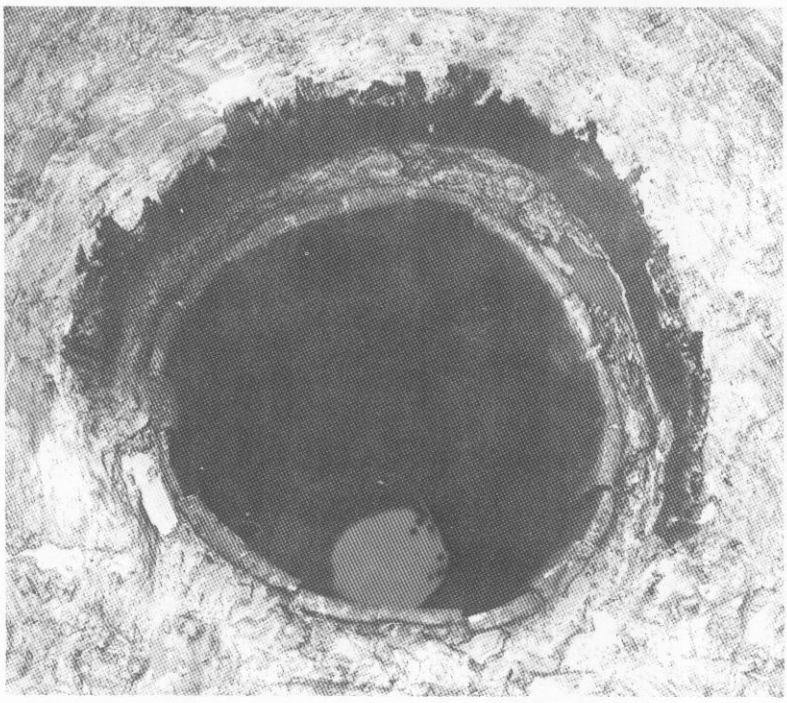
井戸ＳＥ2030



図版38

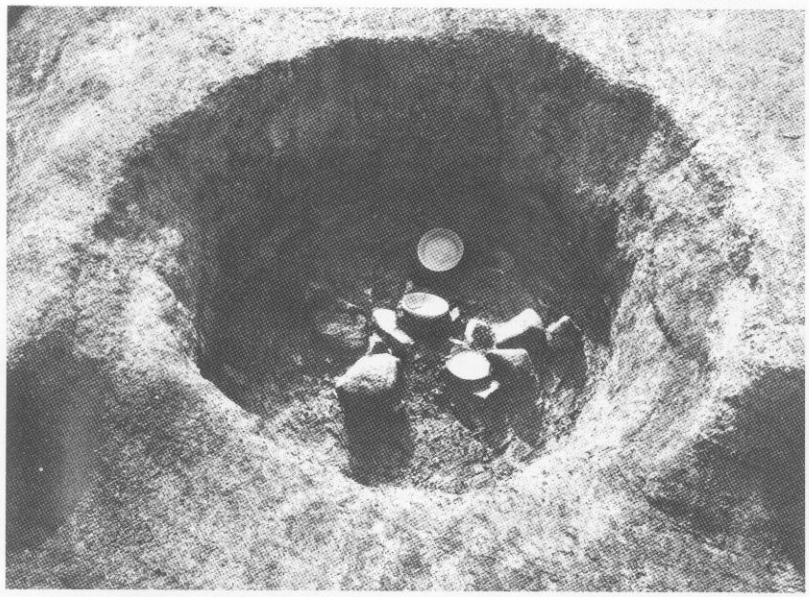


井戸ＳＥ2040全景
（東から）



井戸ＳＥ2040（東から）

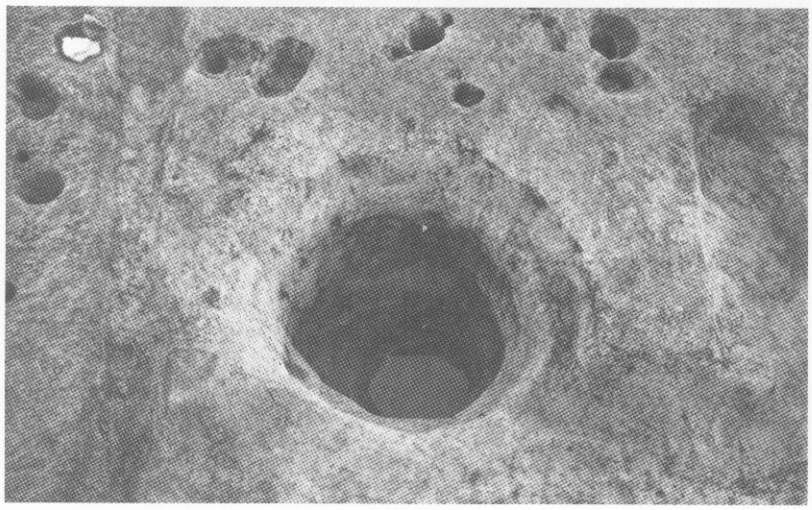
井戸ＳＥ2045の
遺物出土状態
（北から）



同上（南から）



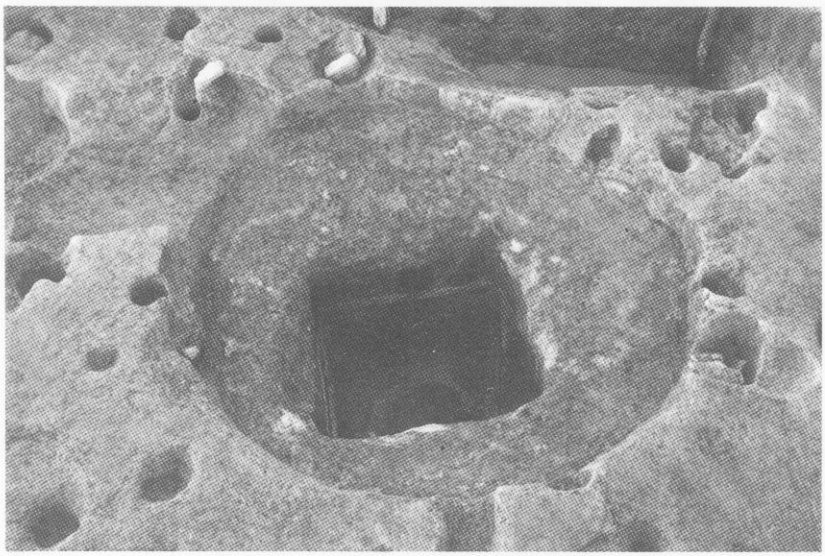
井戸ＳＥ2045全景
（北から）



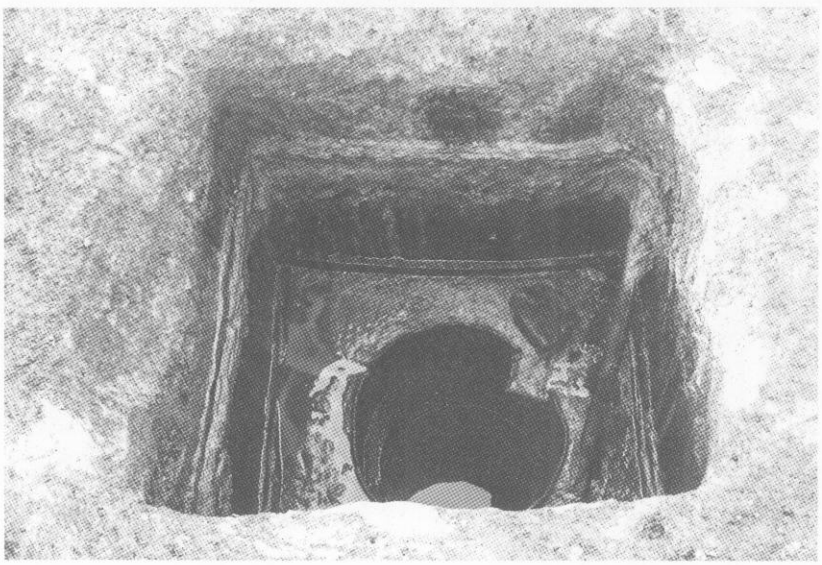
図版40



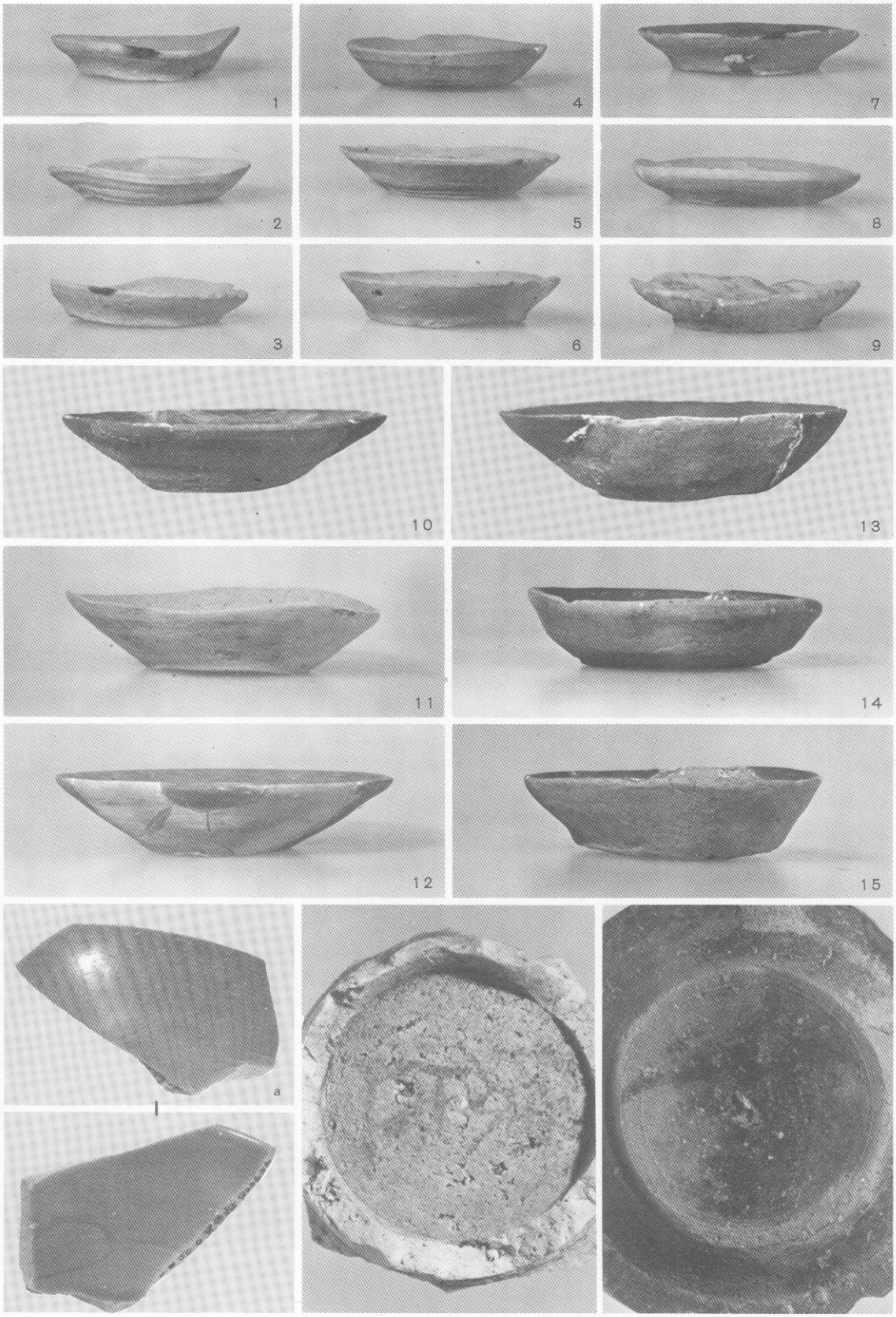
井戸ＳＥ2050全景
（北から）



井戸ＳＥ2055全景
（東から）

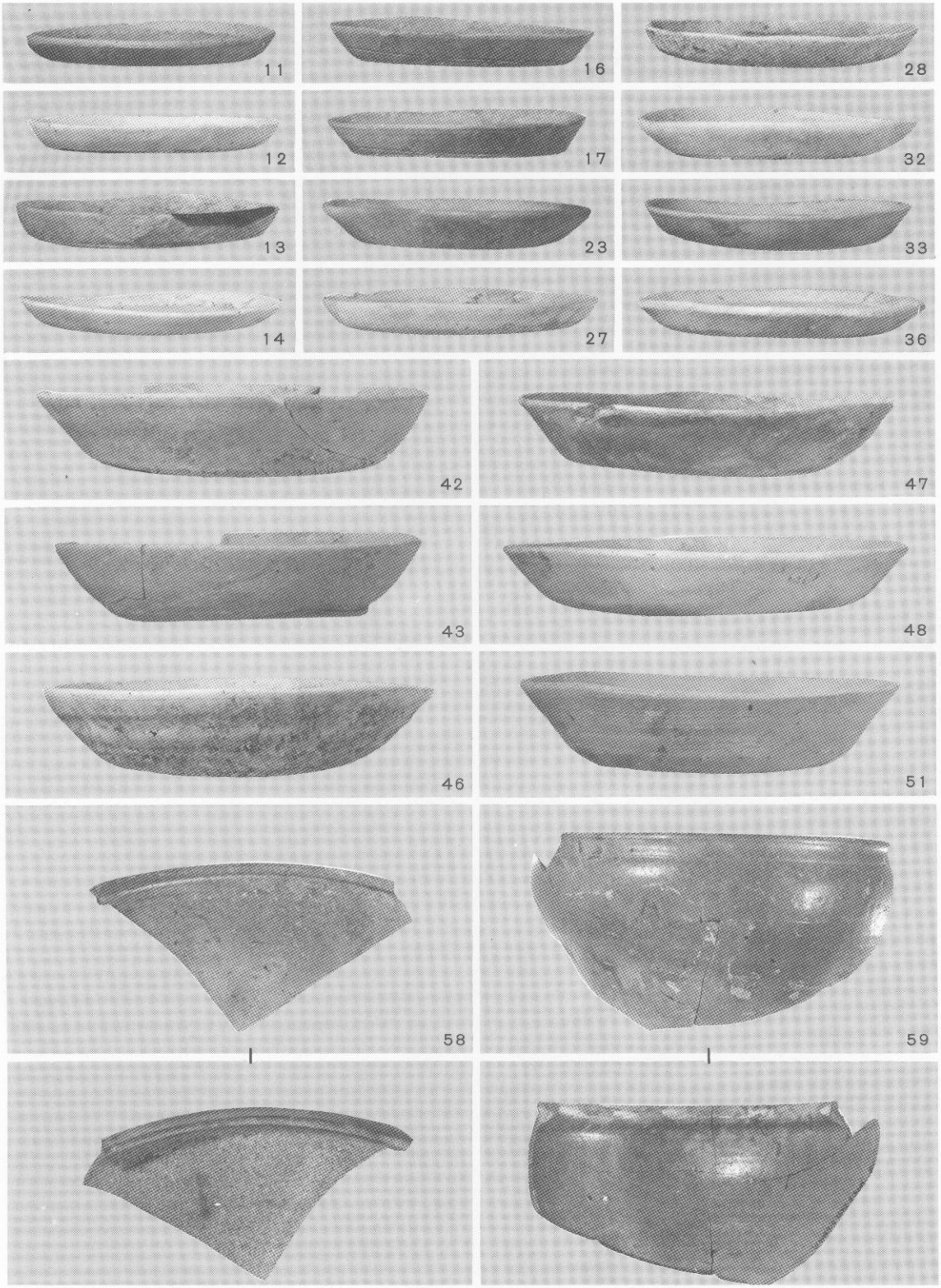


井戸ＳＥ2055
（東から）

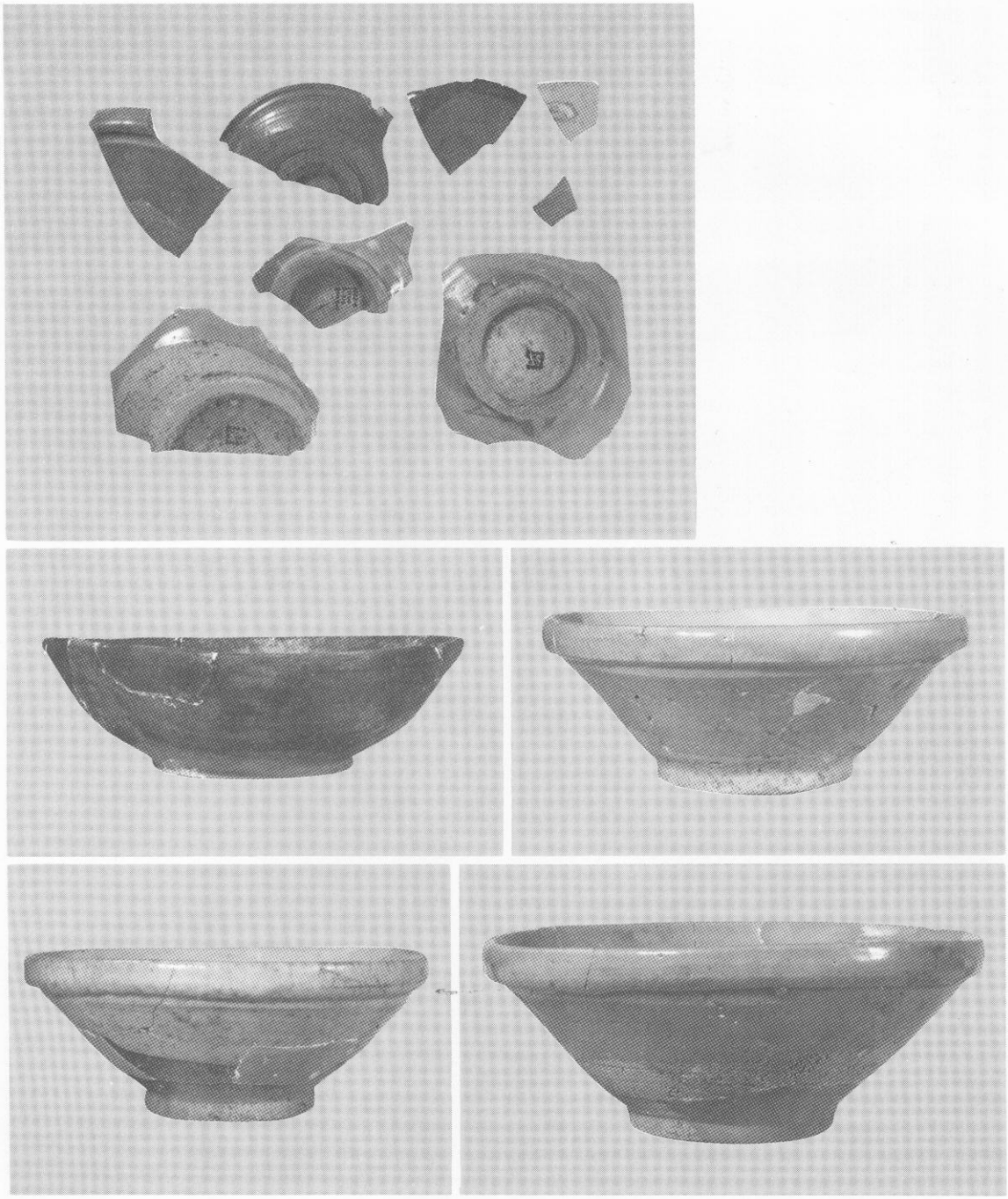


第70次調査　ＳＤ1805出土土器・陶磁器

図版42

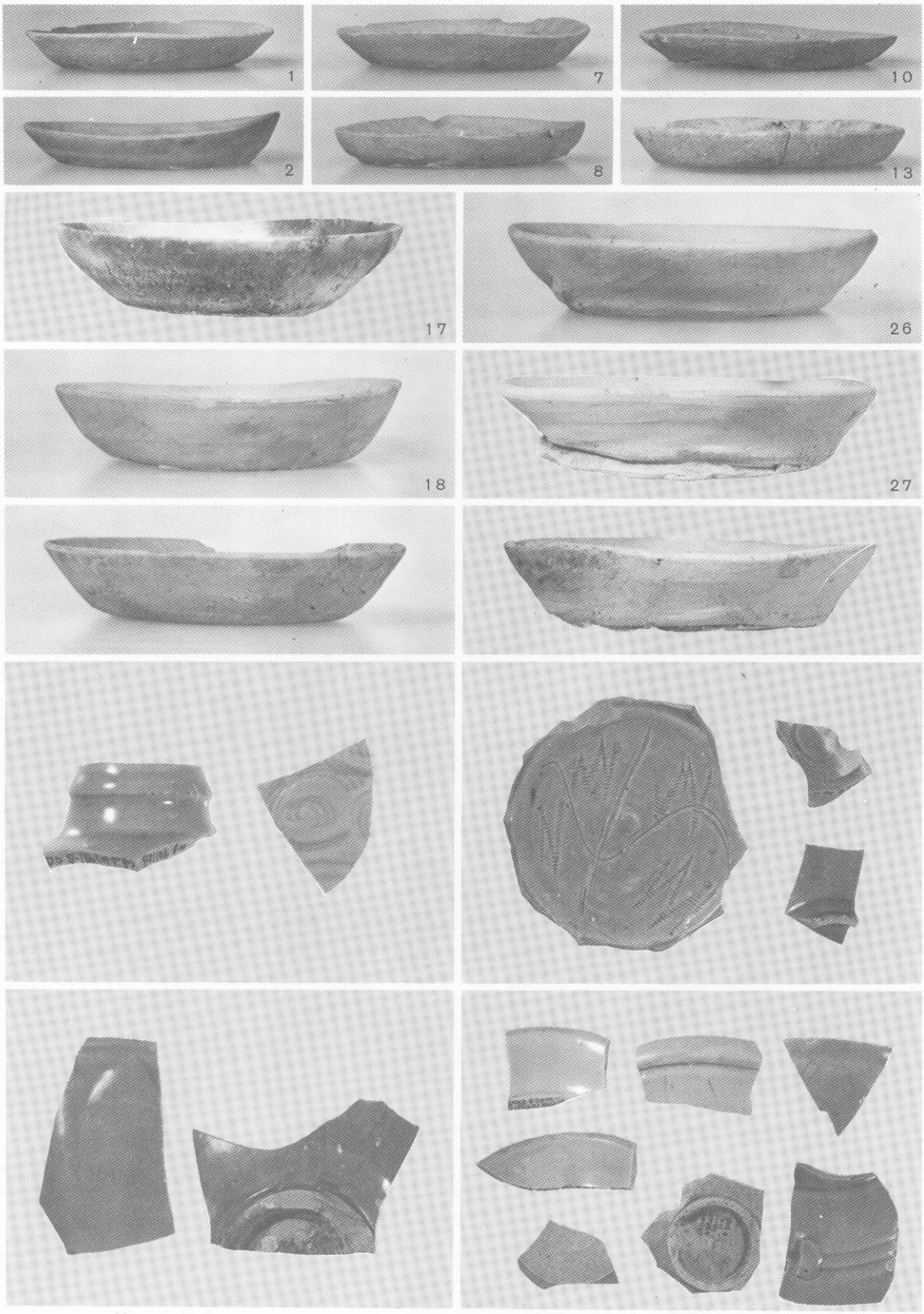


第70次調査　ＳＥ1770出土土器・陶磁器

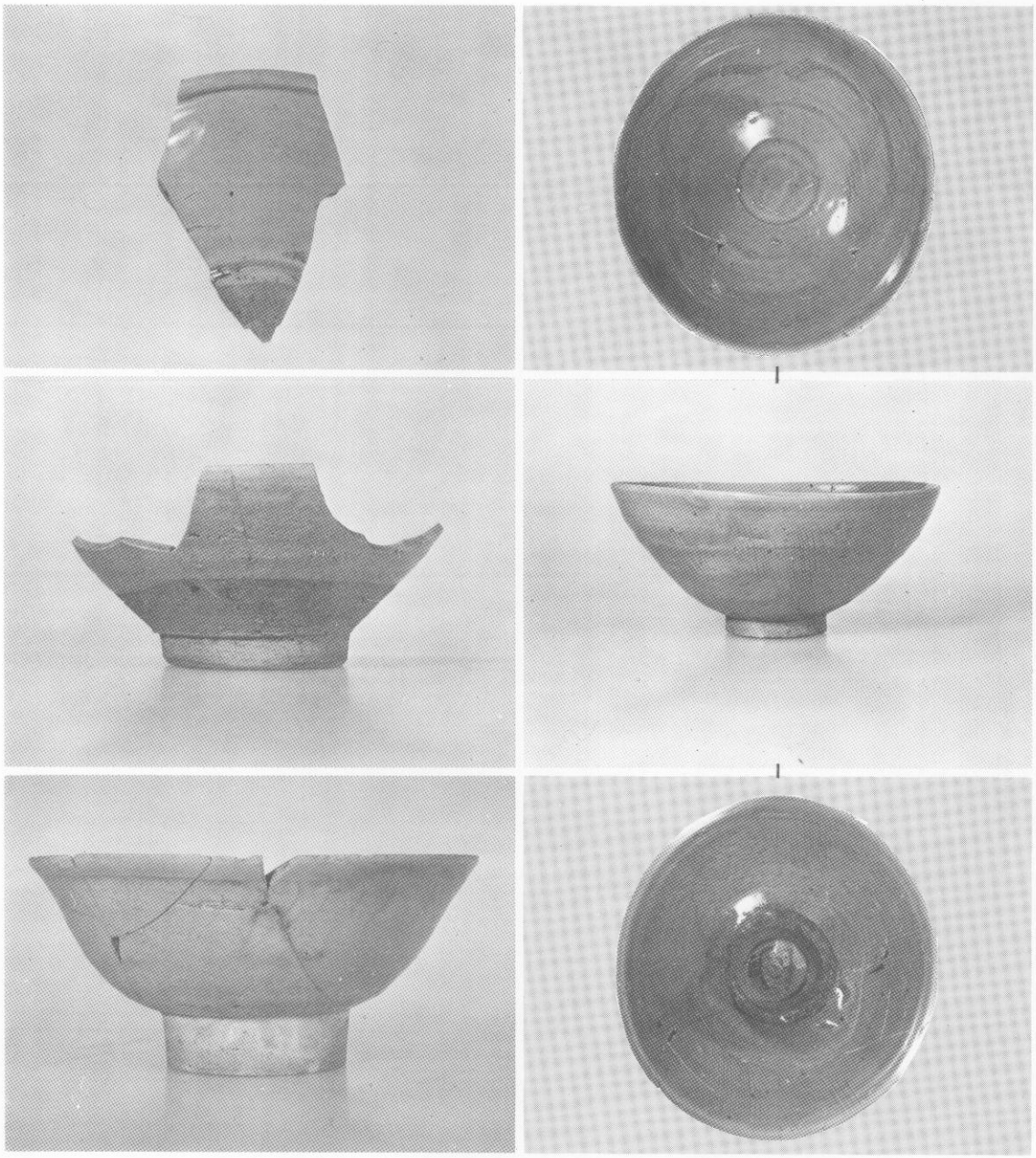


第70次調査　ＳＥ1775・ＳＥ1785出土土器・陶磁器

図版44

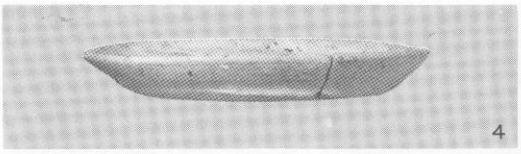


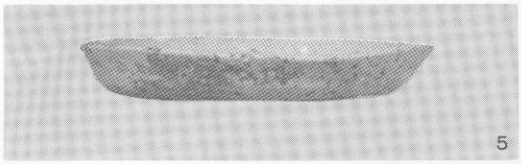
第70次調査　ＳＥ1795・ＳＥ1790出土土器・陶磁器

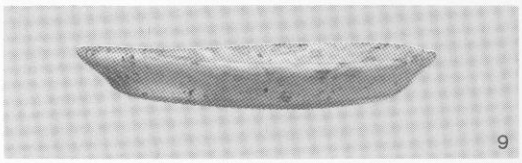


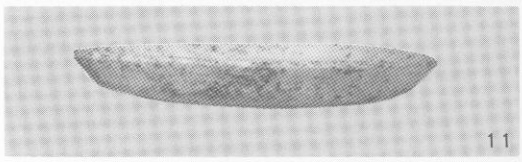
第70次調査　S K1685・S K1707・S K1782・S X1738出土陶磁器

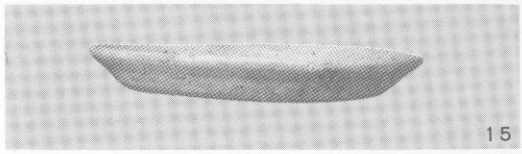
図版46

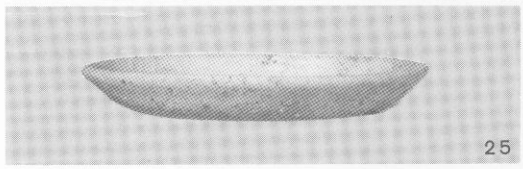


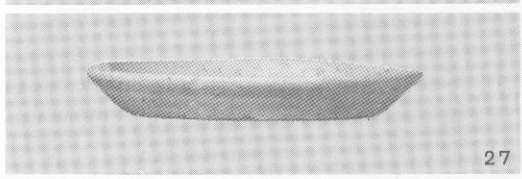


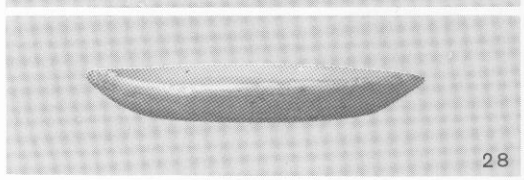




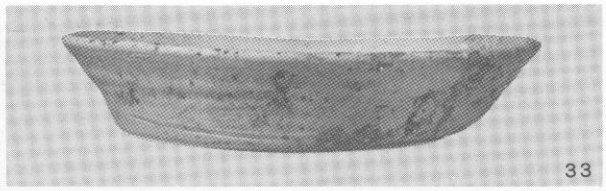


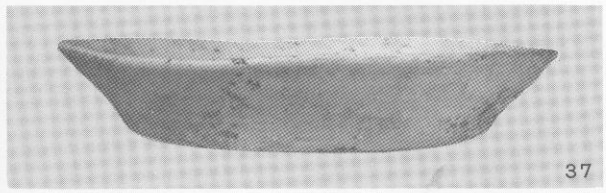


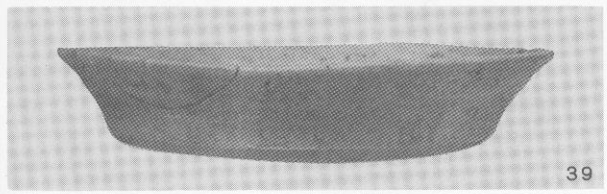


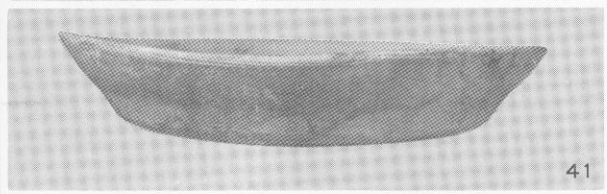


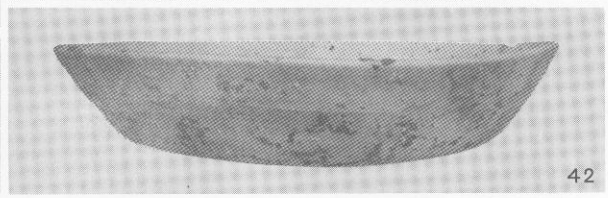


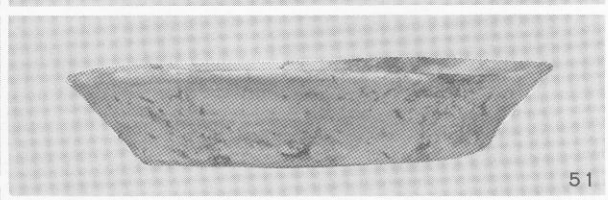


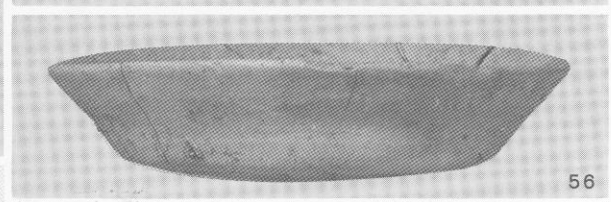


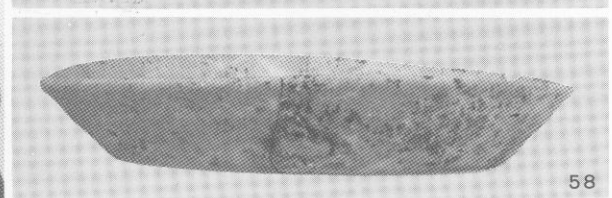






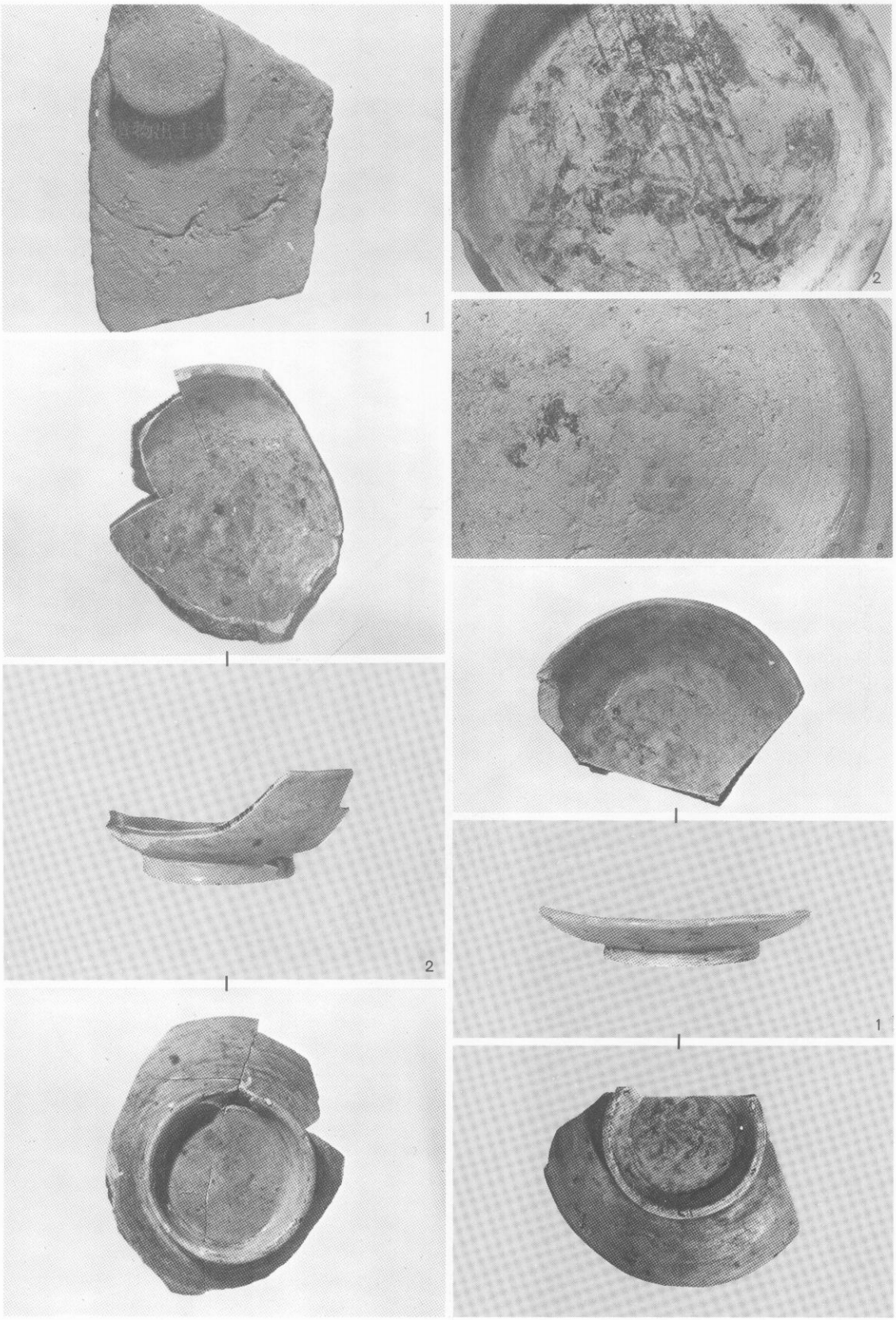






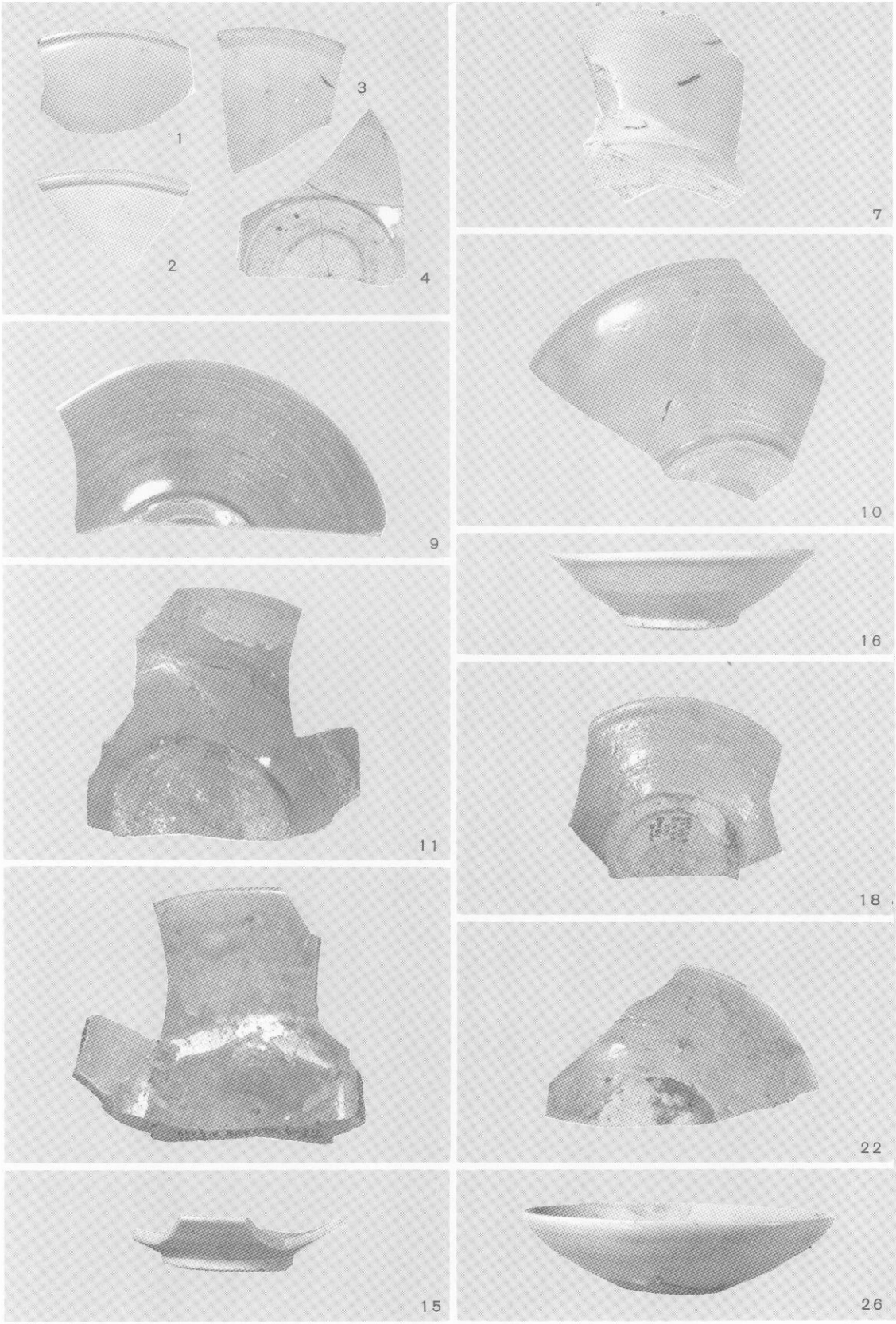


第70次調査　ＳＫ1788出土土器・陶磁器

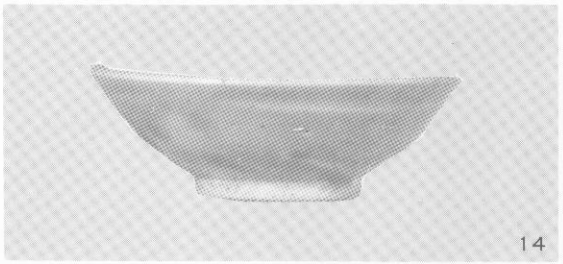


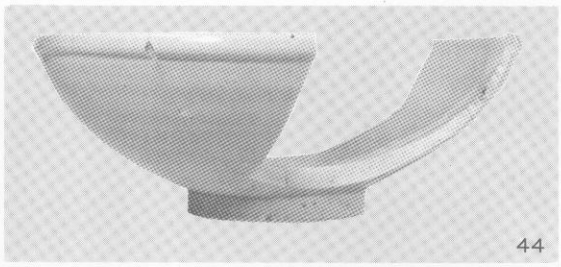
第70次調査　ＳＸ1737・暗灰色砂層・茶灰色土下層出土土器

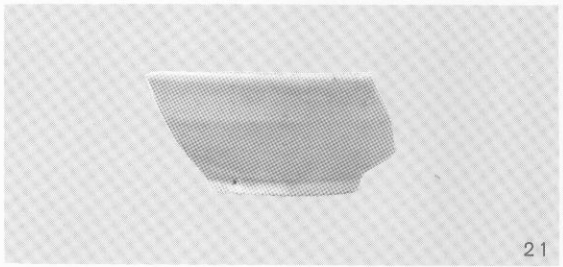
図版48

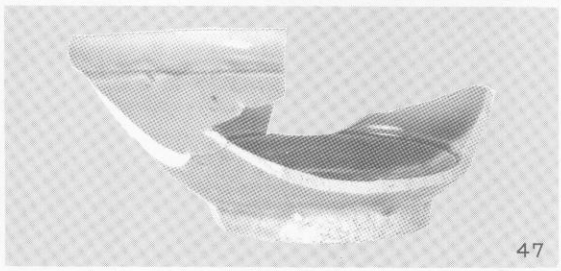


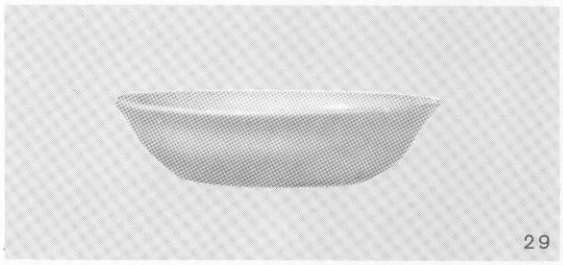
第70次調査　各層出土陶磁器(1)

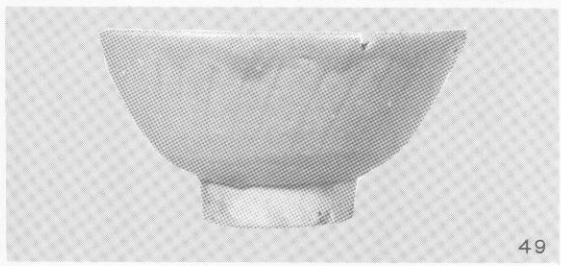

14

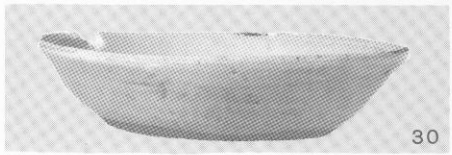

44

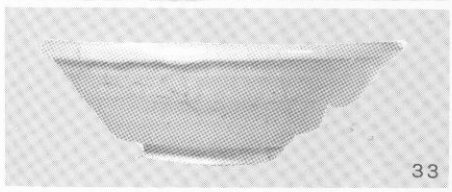

21

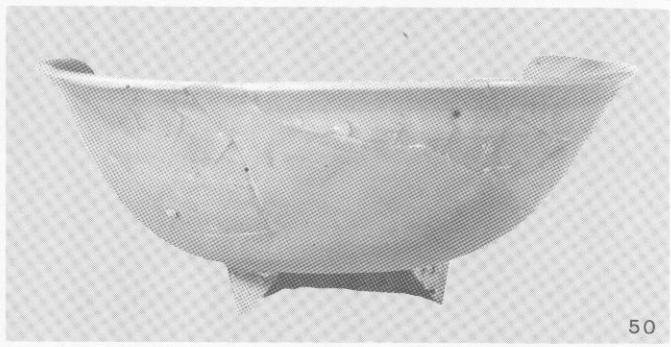

47

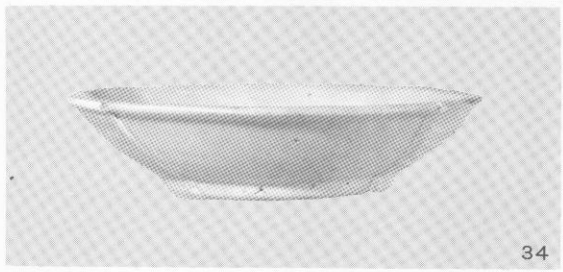

29

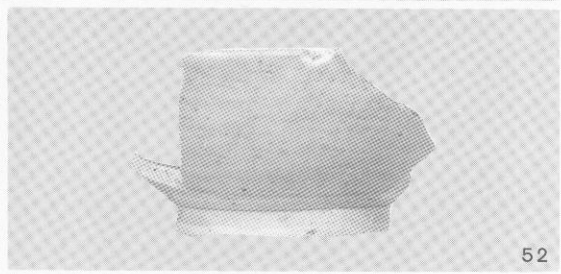

49

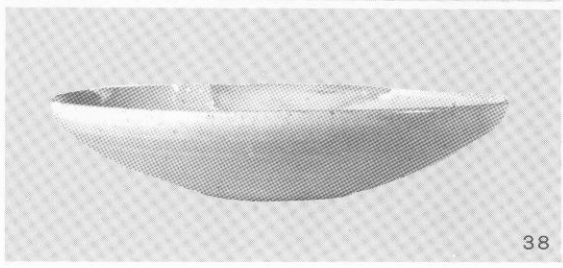

30

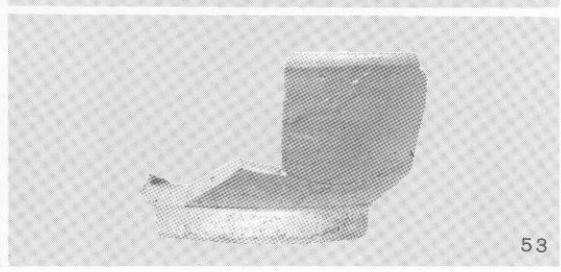

33


50


34

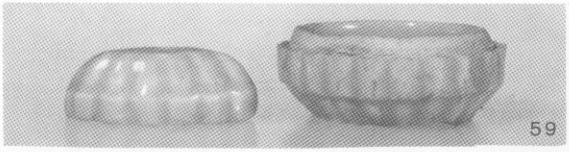

52

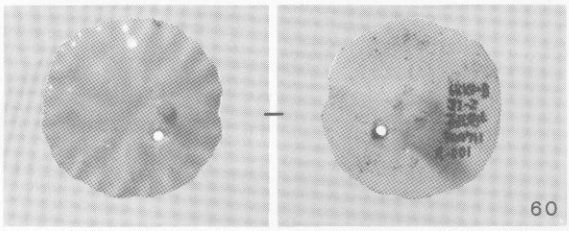

38

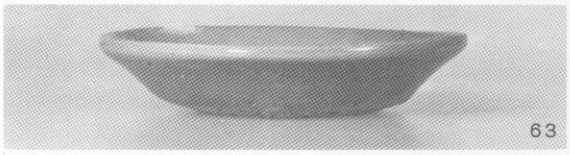

53

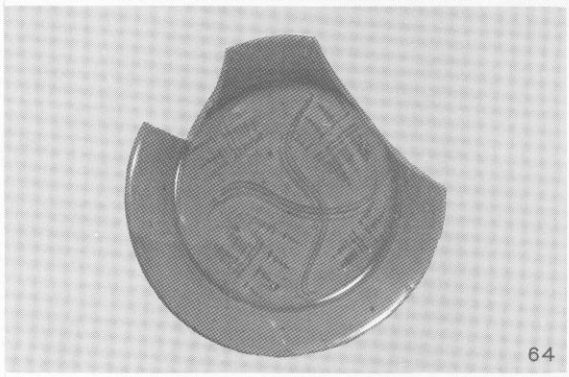
第70次調査　各層出土陶磁器 (2)

図版50

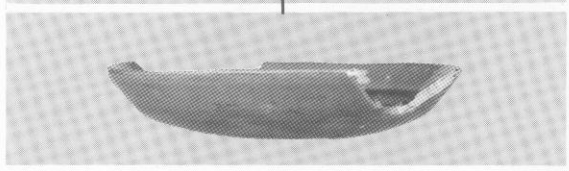

59


60

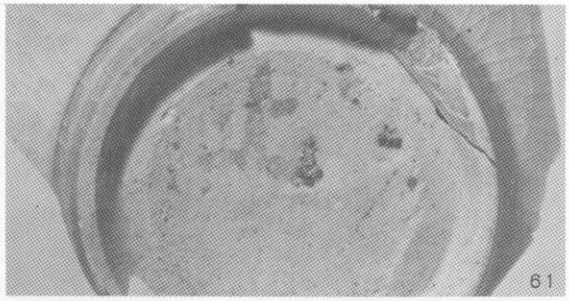

63

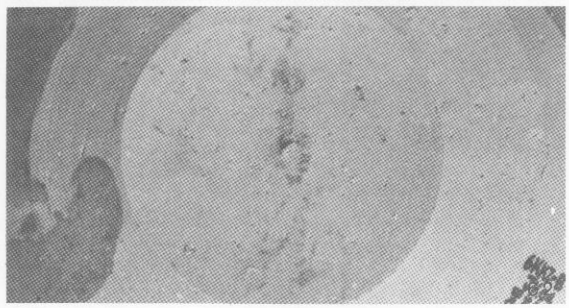

64

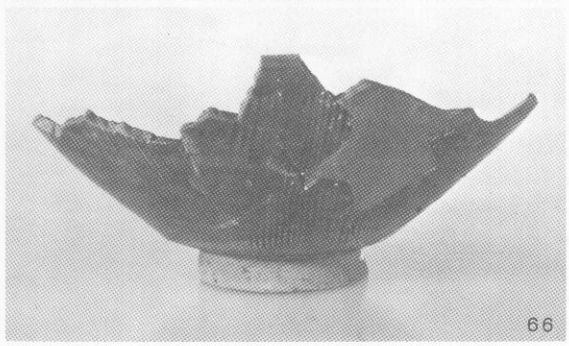

65

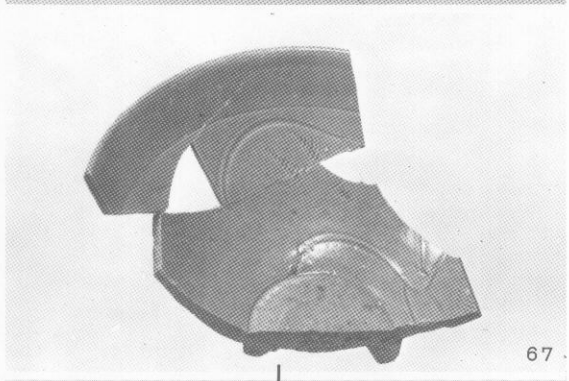


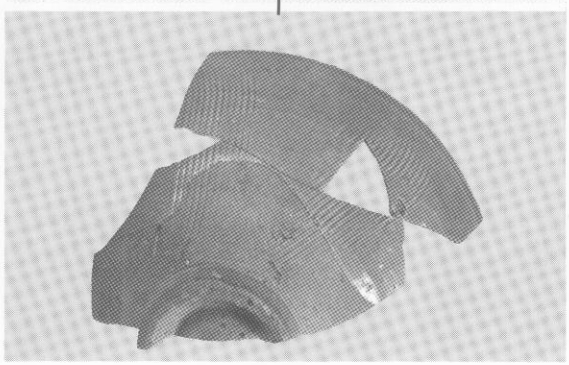

68


61

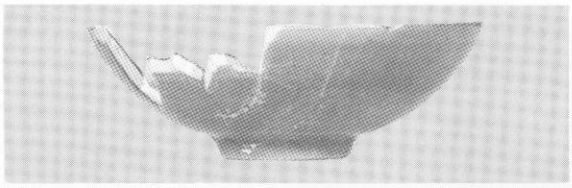


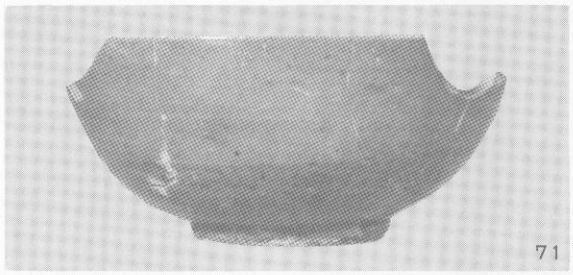

66

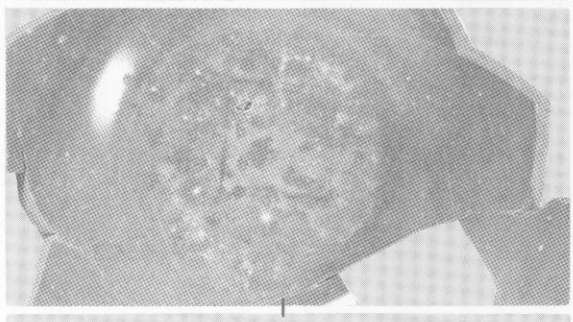

67

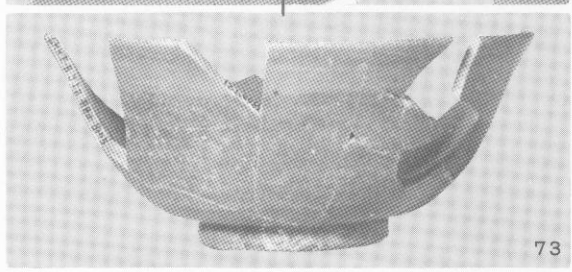


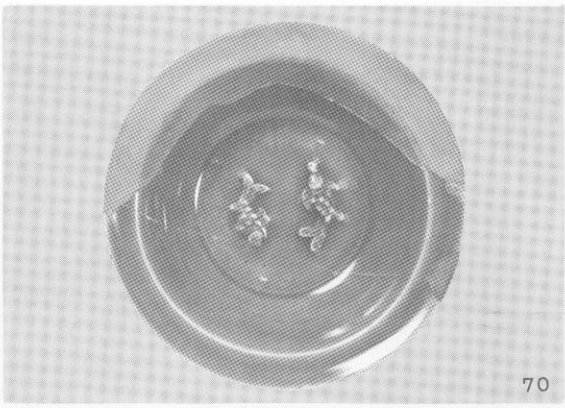
第70次調査　各層出土陶磁器(3)

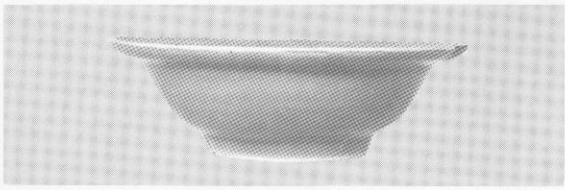


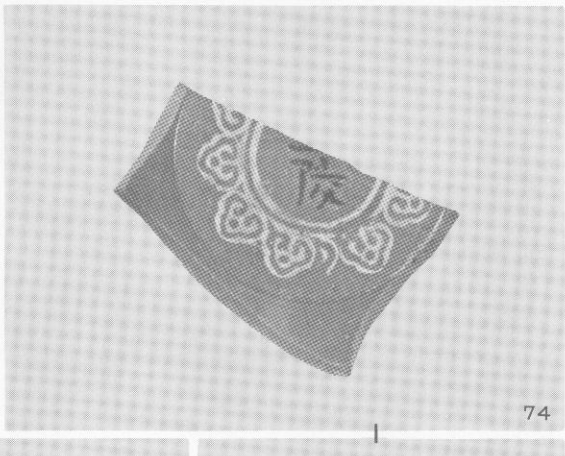


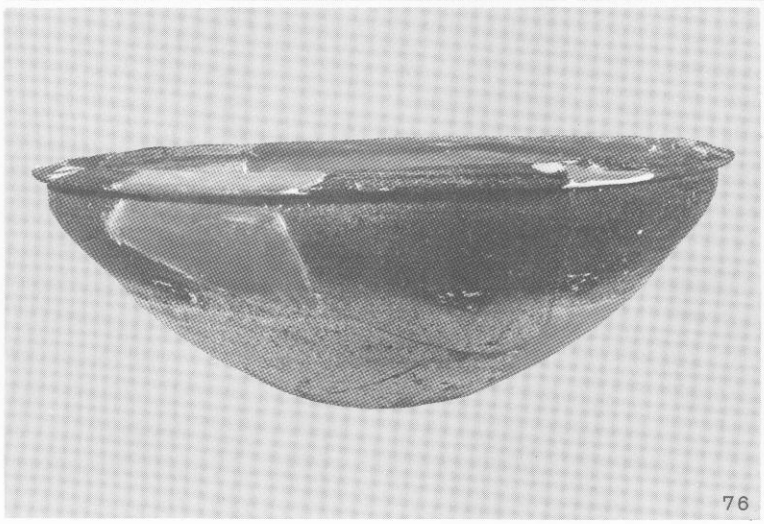


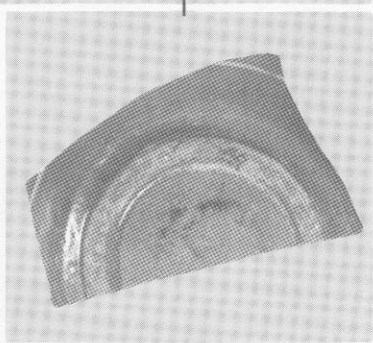


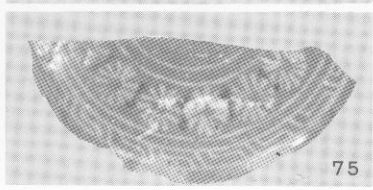






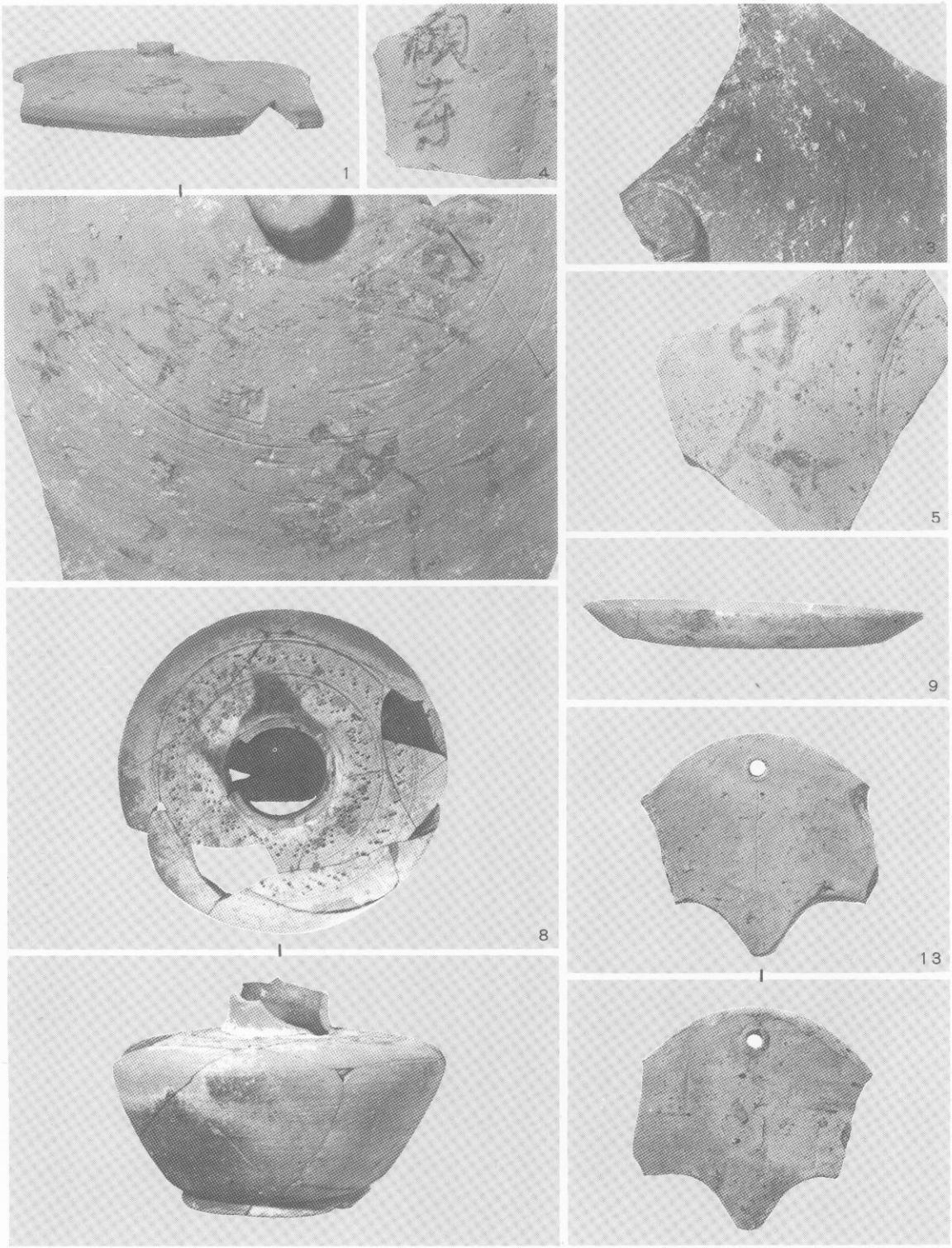






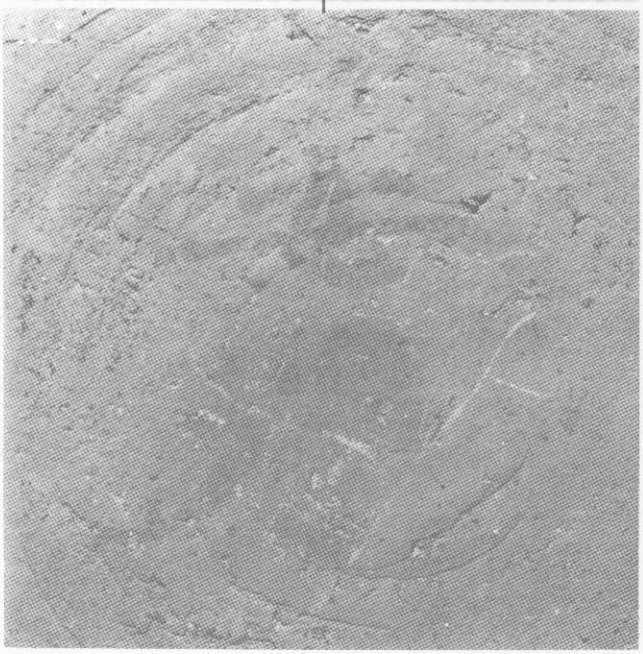
第70次調査　各層出土陶磁器(4)

図版52



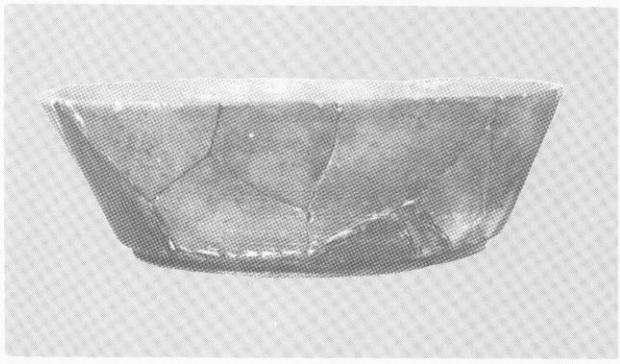
第70次調査　ＳＤ1830出土土器・土製風招



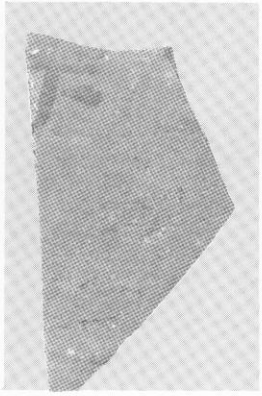


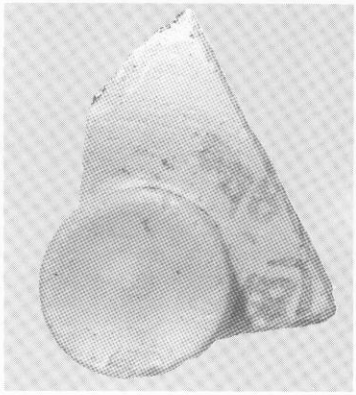


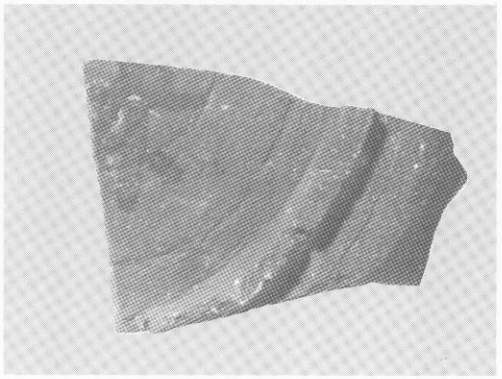




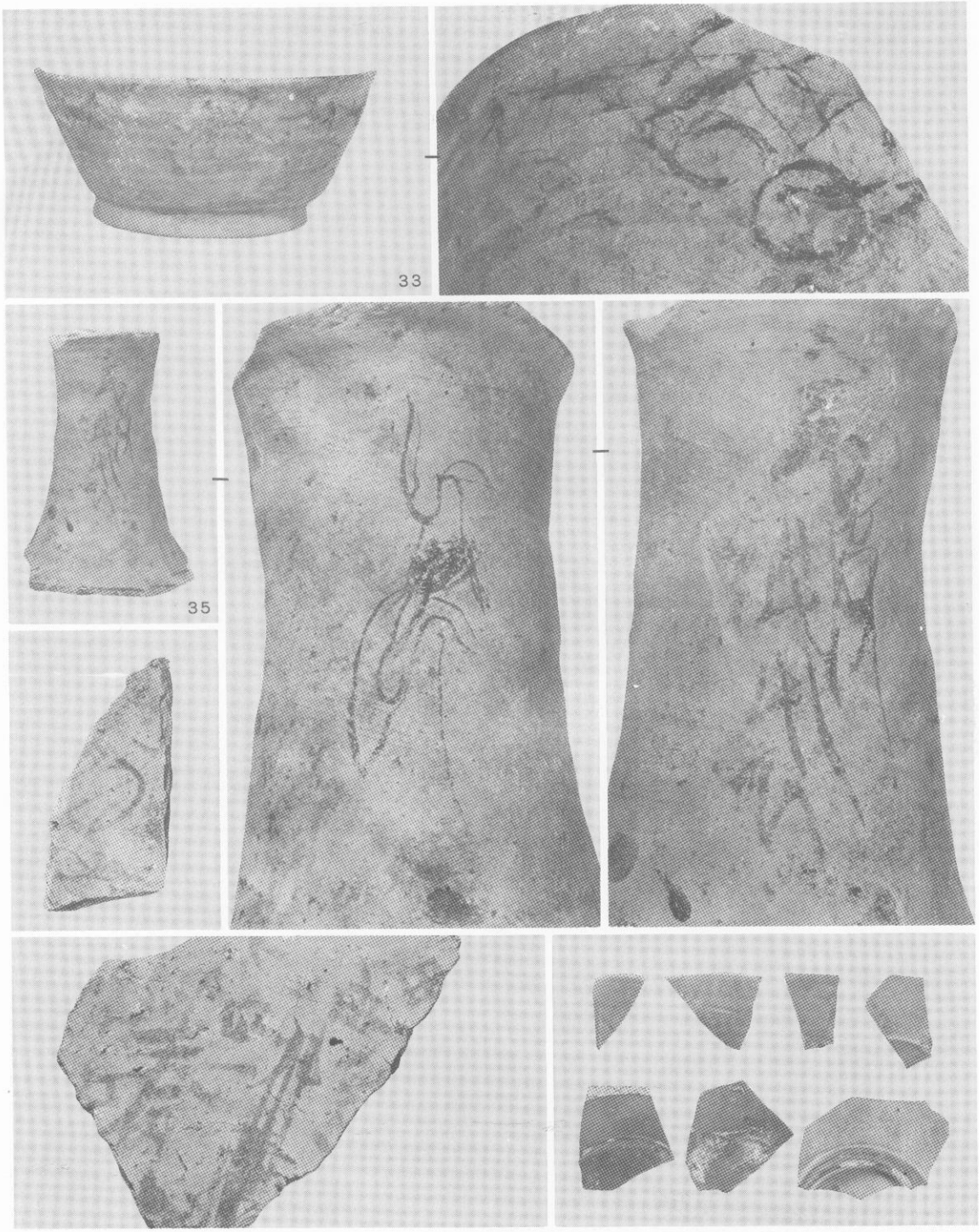




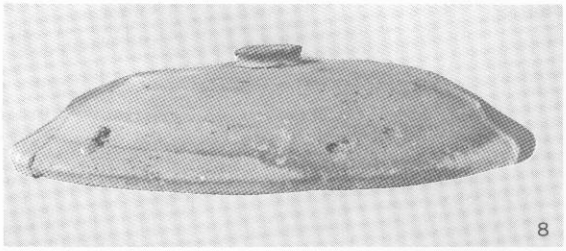


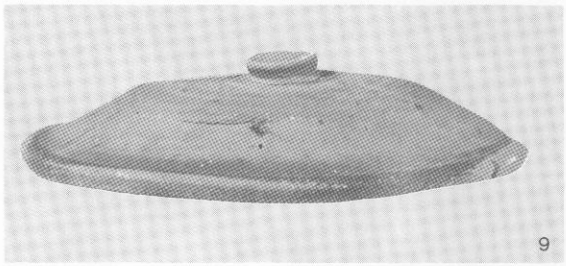


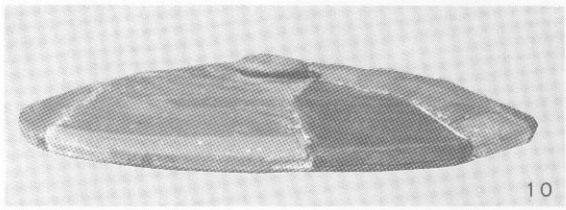
第70次調査　ＳＤ1830・ＳＤ1825出土土器

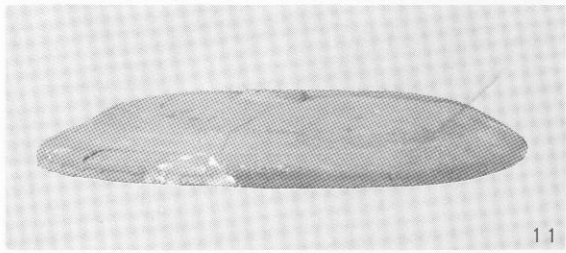


第70次調査　ＳＫ1772出土土器・陶磁器

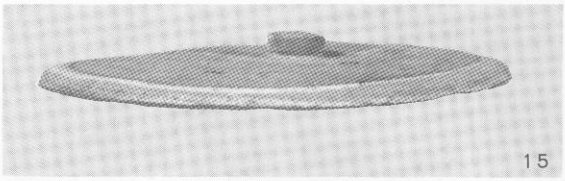

8

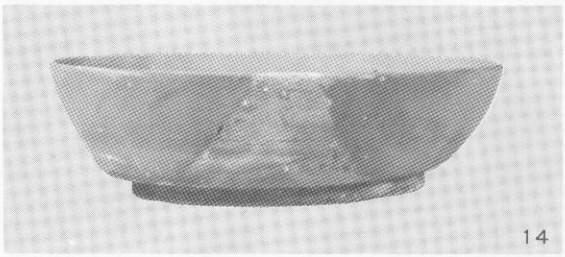

9


10

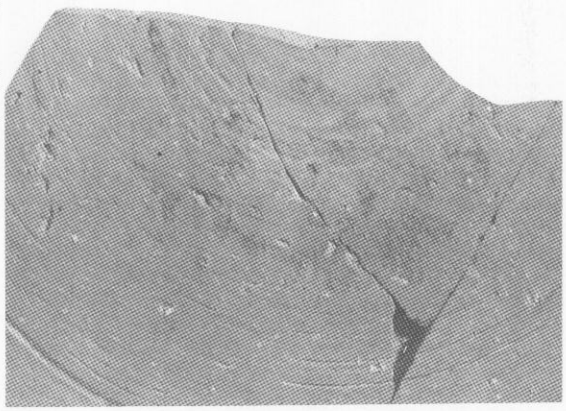

11

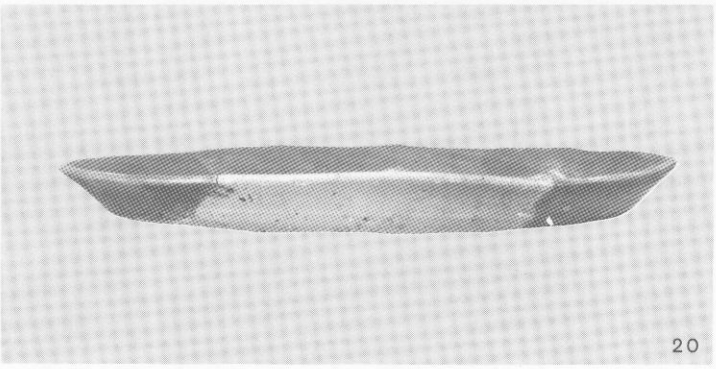



15


14

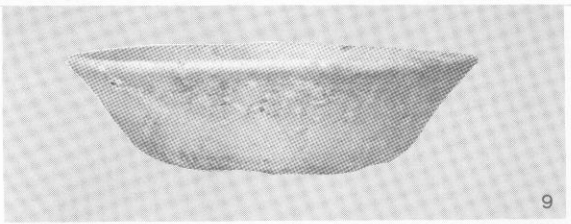

19

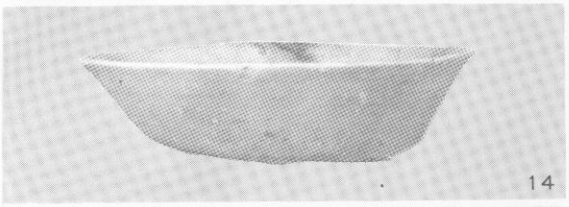


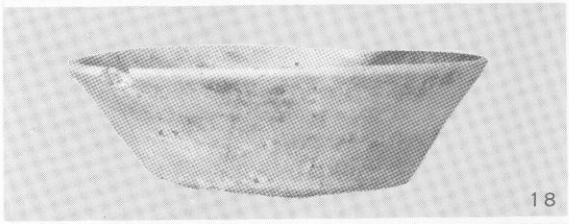

20

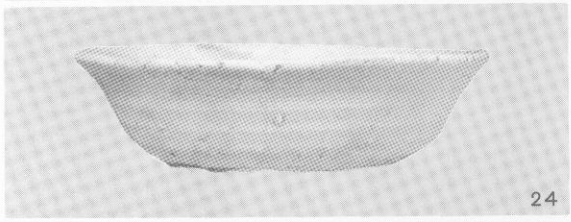
第70次調査　ＳＫ1774・ＳＫ1787出土土器

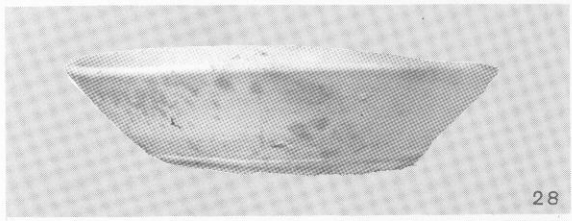
図版56

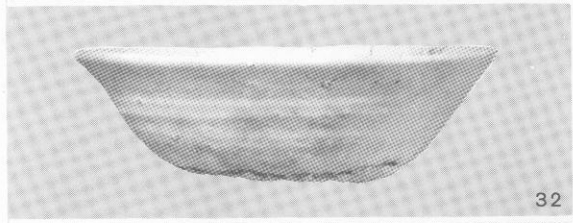

9

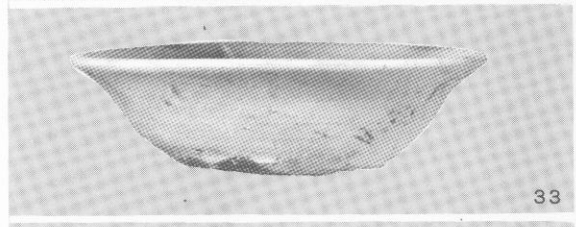

14

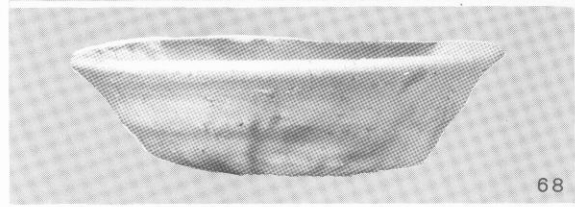

18

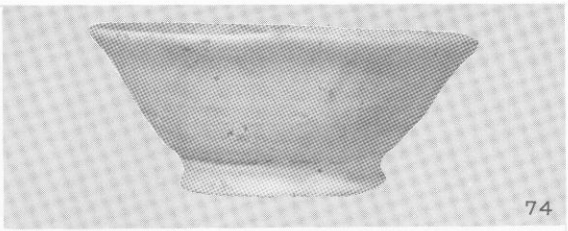

24

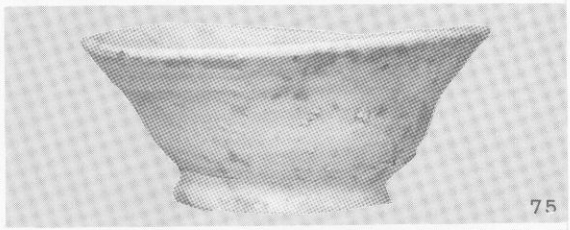

28

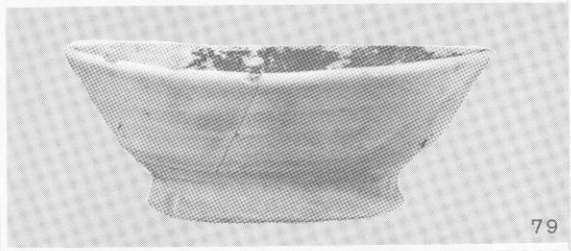

32

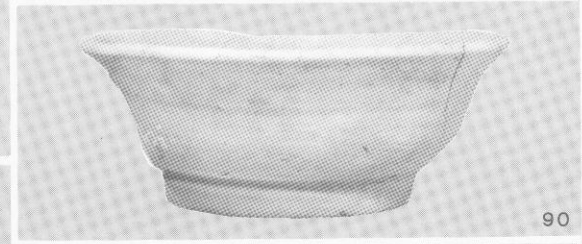

33

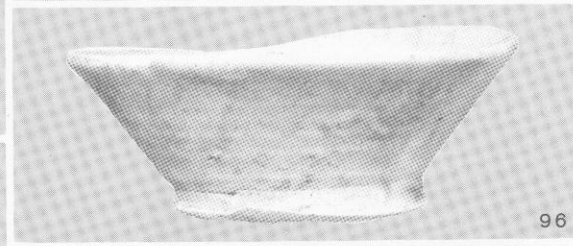

68

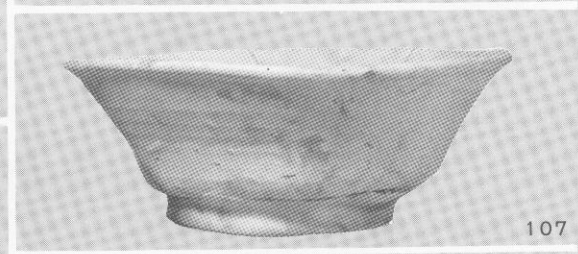

74


75


79

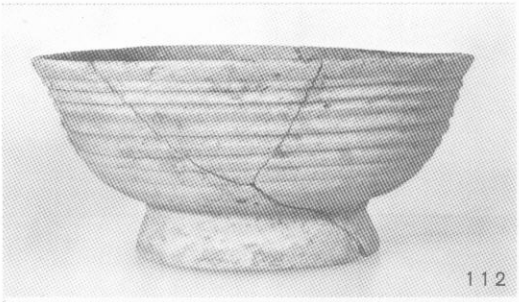

90


96


107

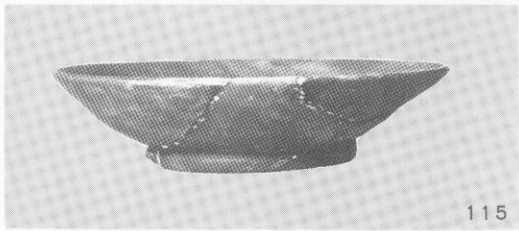

108

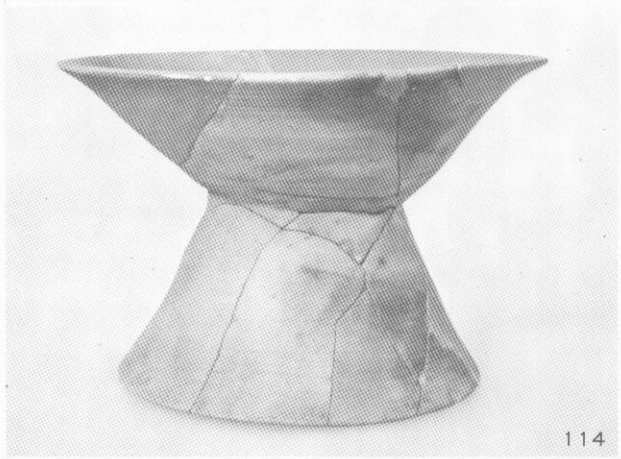
第70次調査　ＳＫ1800出土土器(1)

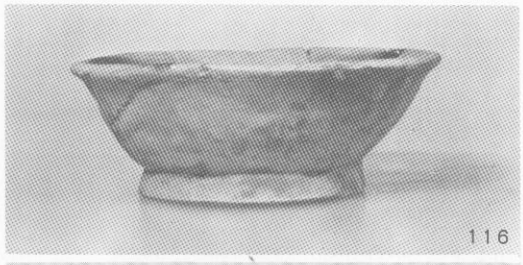

112


119


113


115


114


116


117


120

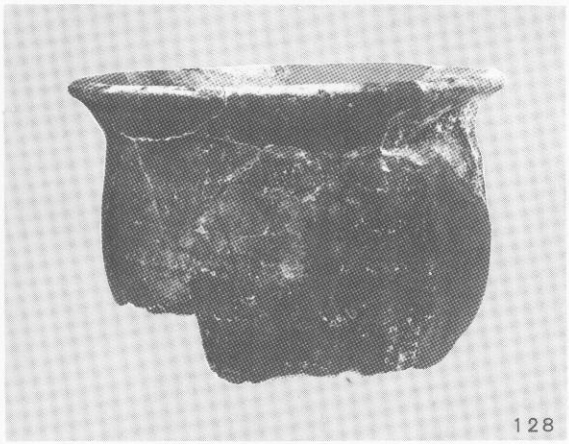

118

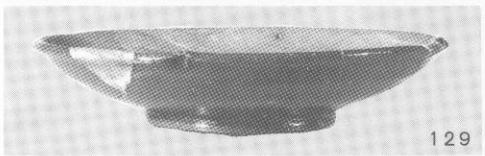
第70次調査　ＳＫ1800出土土器(2)

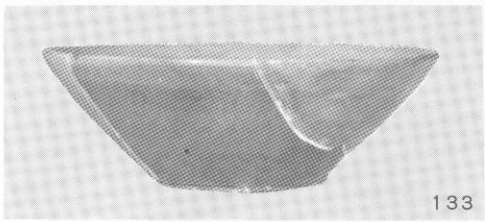

123

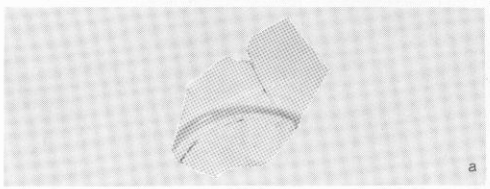

127

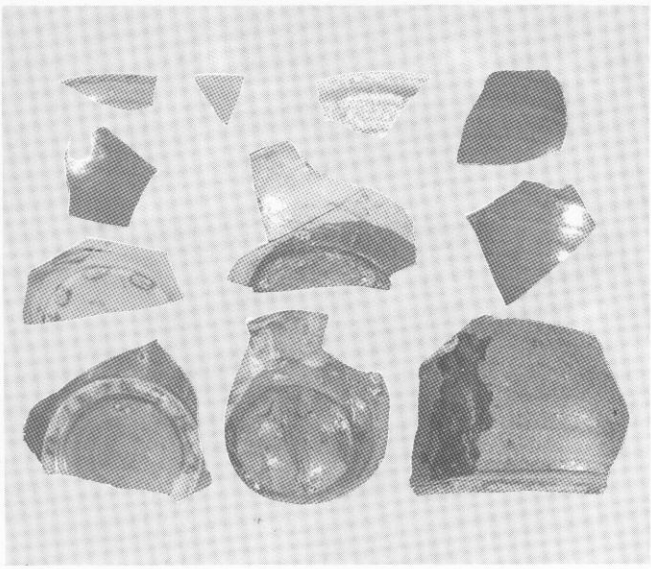

125


128


129


133


a



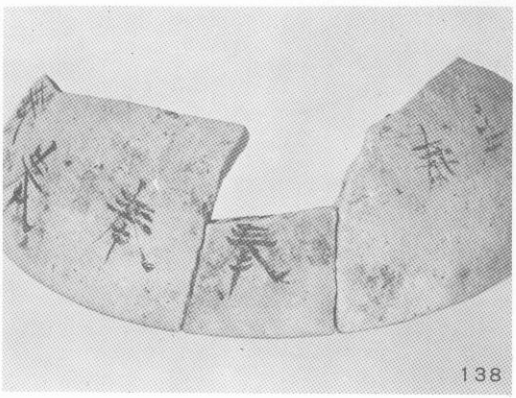
第70次調査　ＳＫ1800出土土器・陶磁器





135





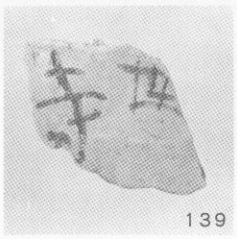
138



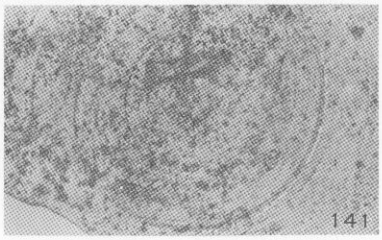
136



137

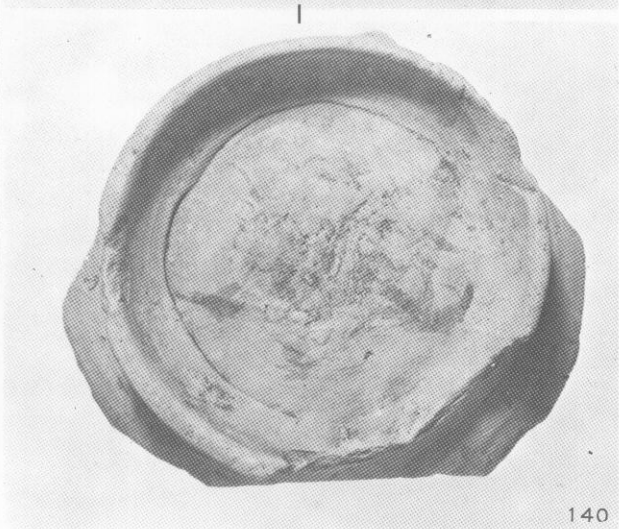


139



141

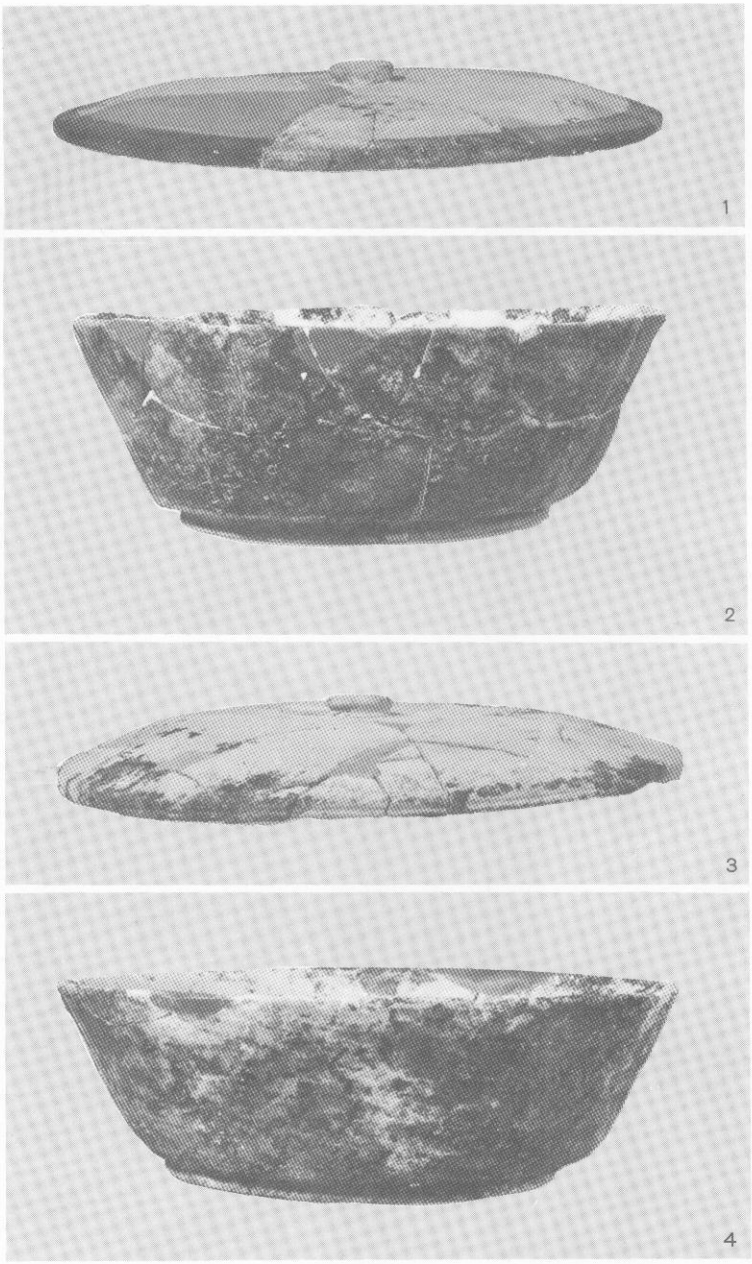




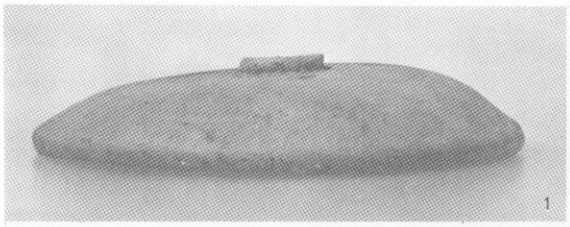
140

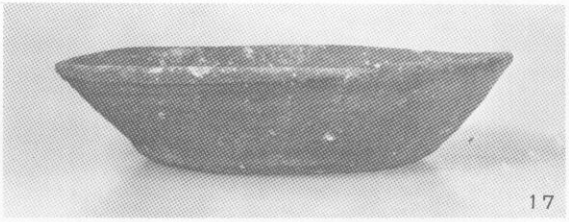
第70次調査　ＳＫ1800出土墨書土器

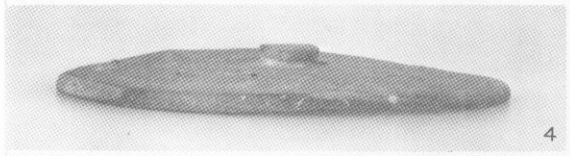
図版60

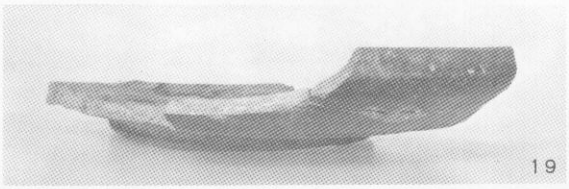


第70次調査　ＳＸ1810・ＳＸ1815出土土器

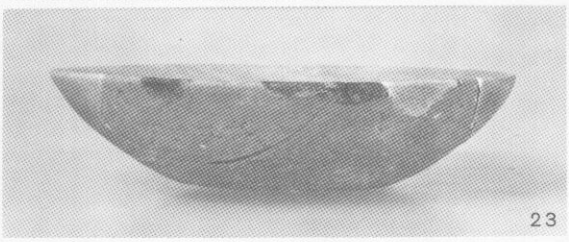

1


17

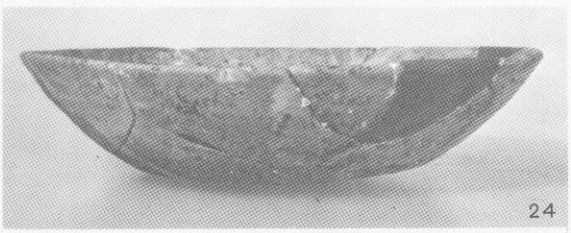

4

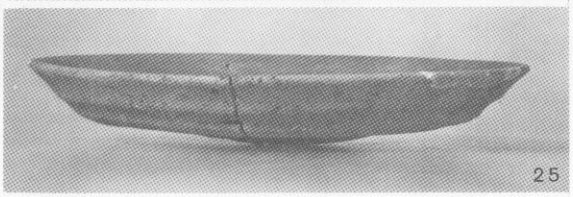

19

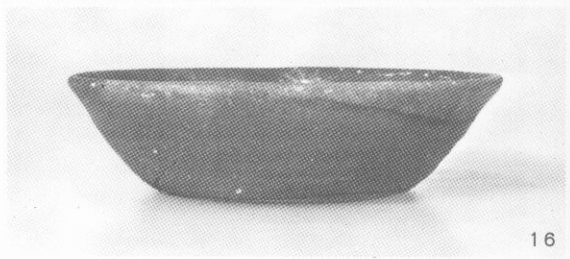

10

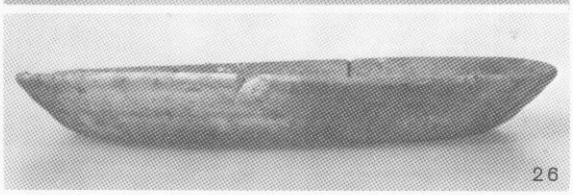

23


14


24


25

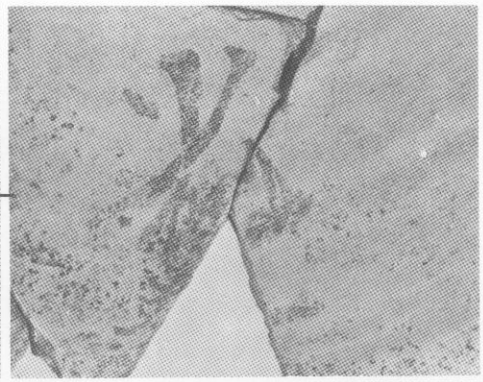

16

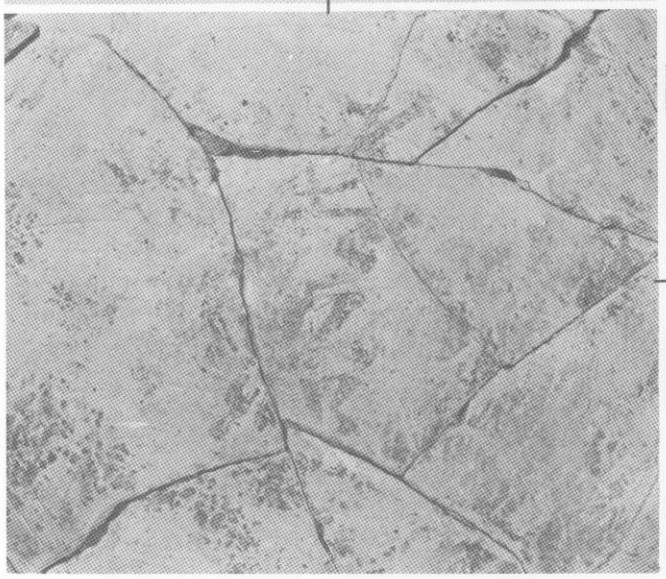

26

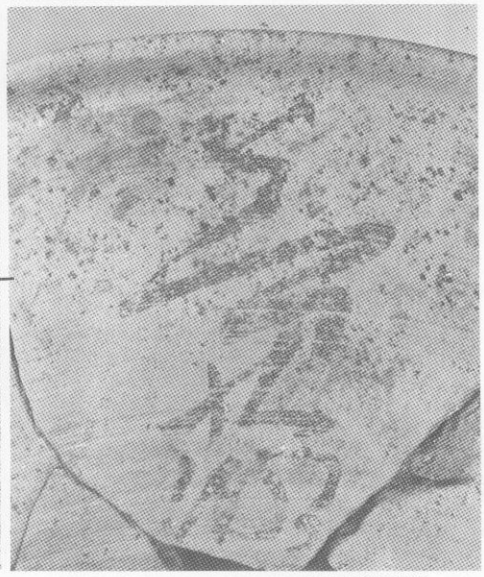
第70次調査　整地層・濁茶色土層出土土器

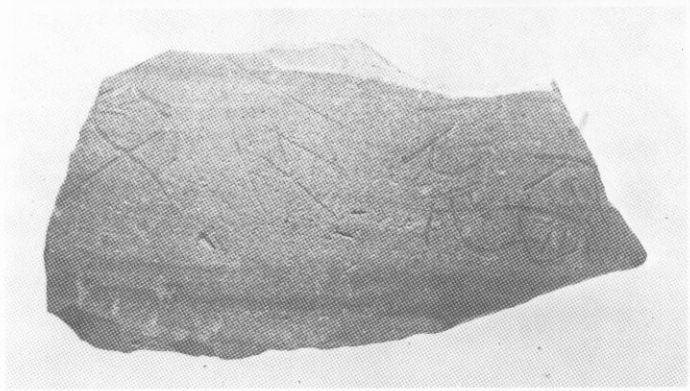
図版62

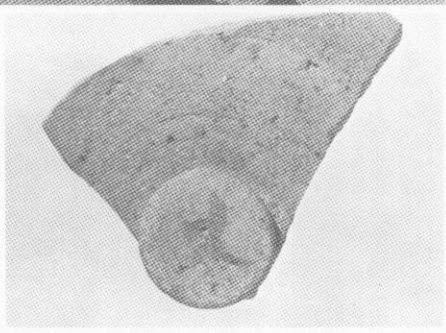


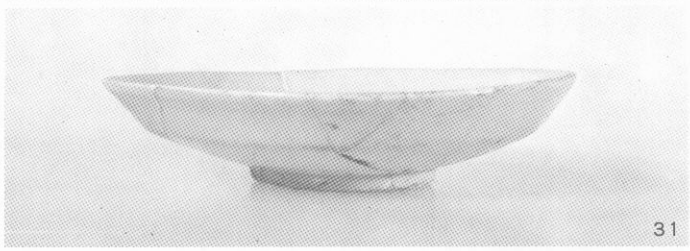


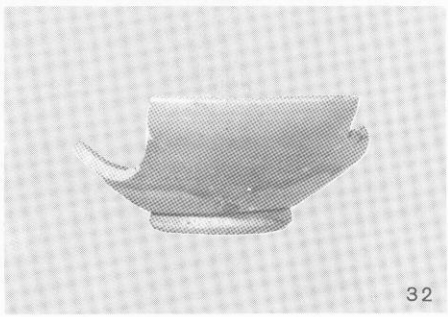




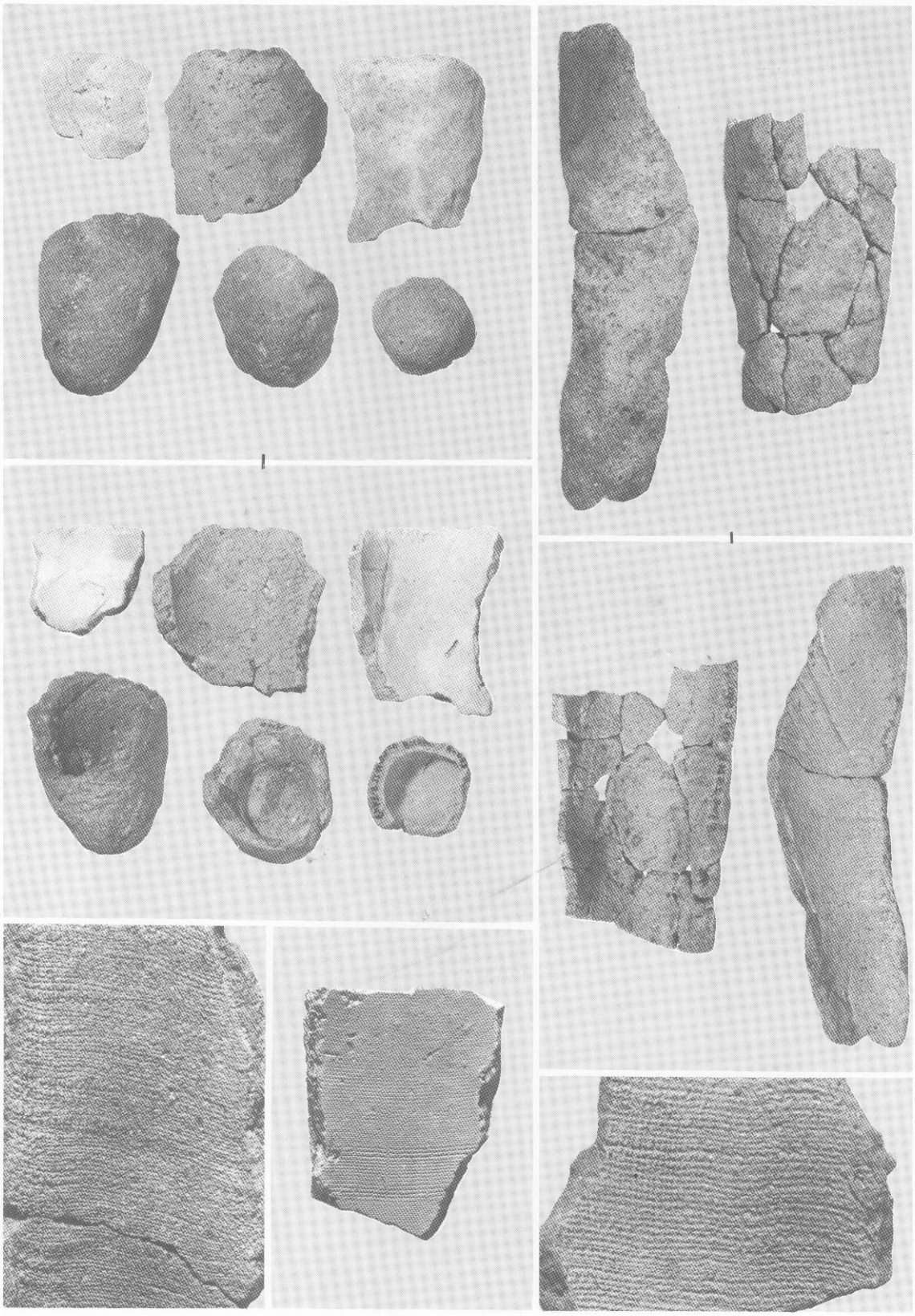




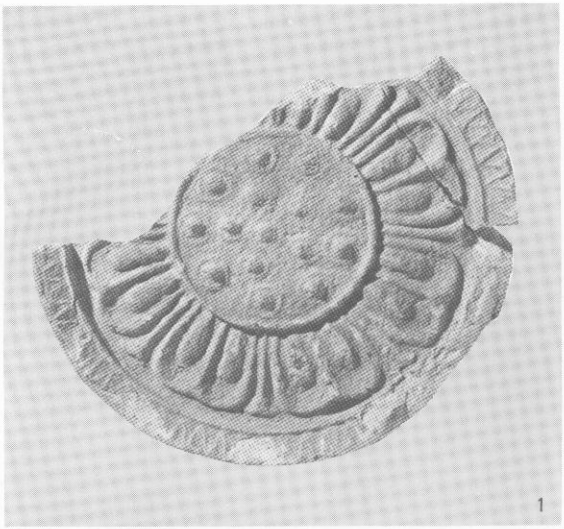


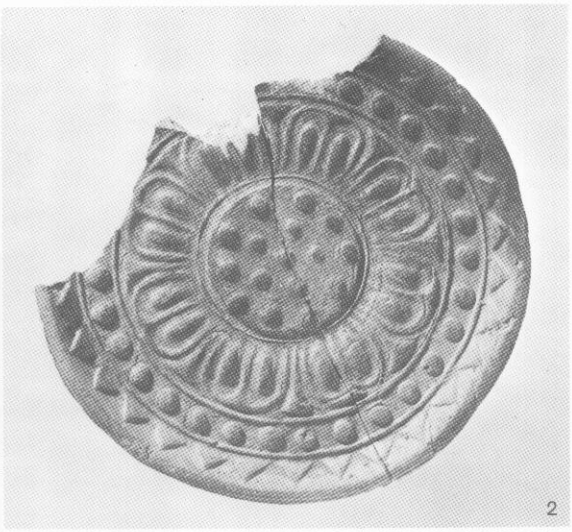


第70次調査　整地層・濁茶色土層出土土器

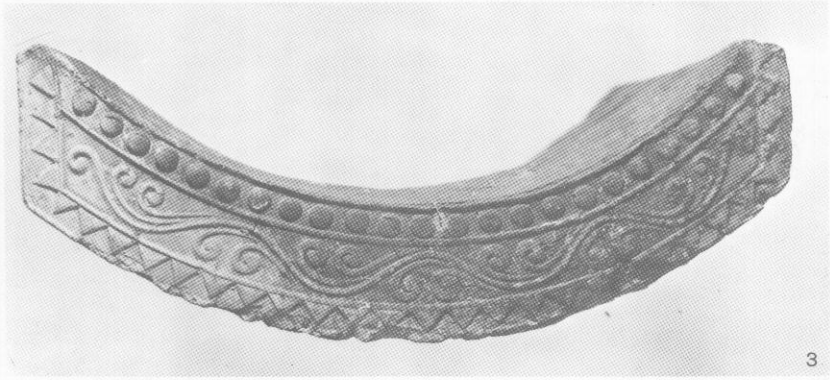


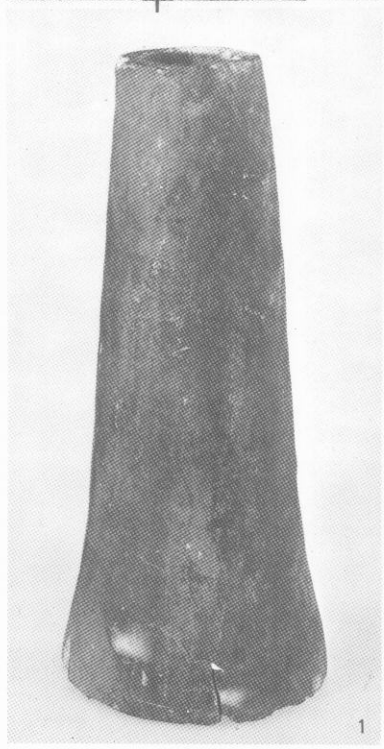
第70次調査　出土塩壺

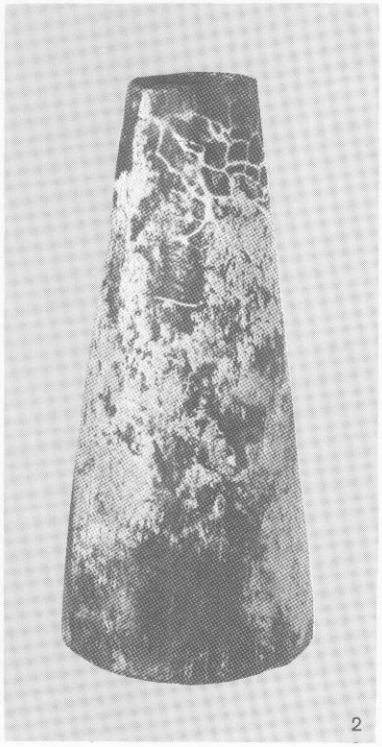


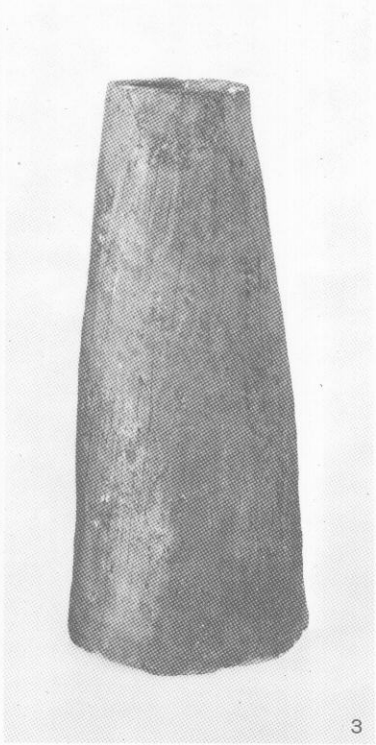




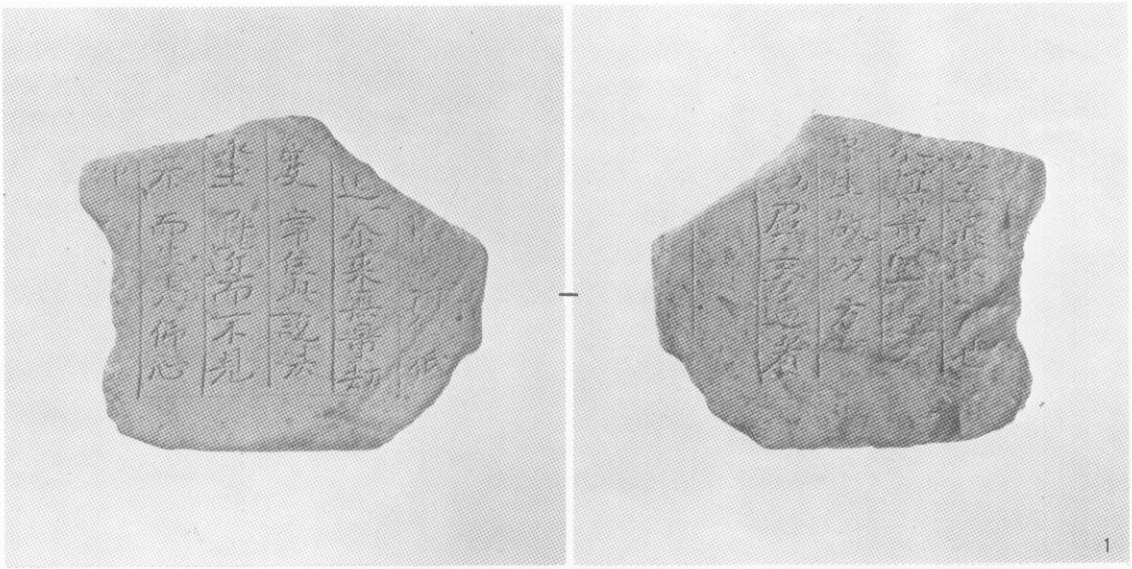




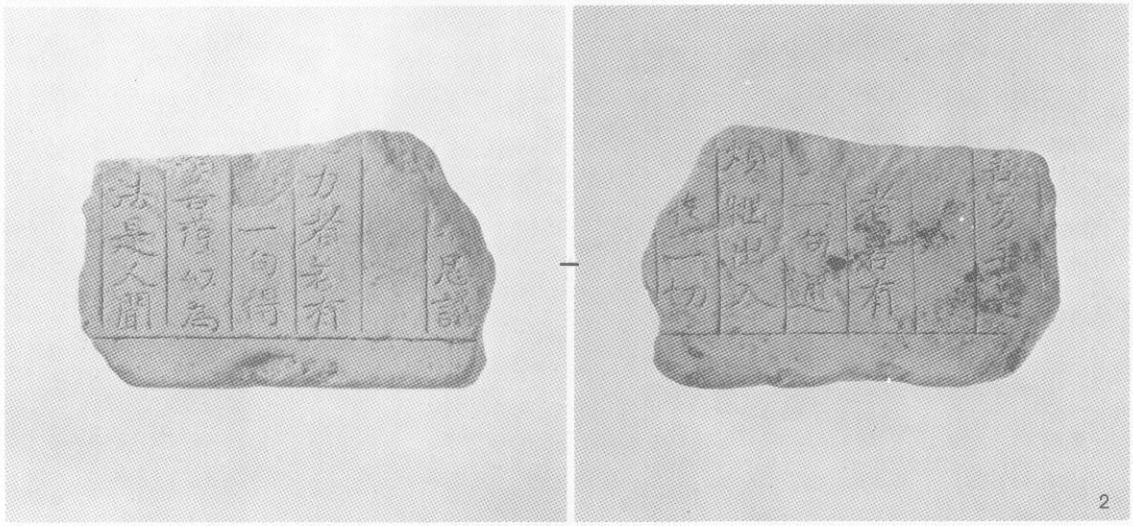




第70次調査　出土軒先瓦・土管



1



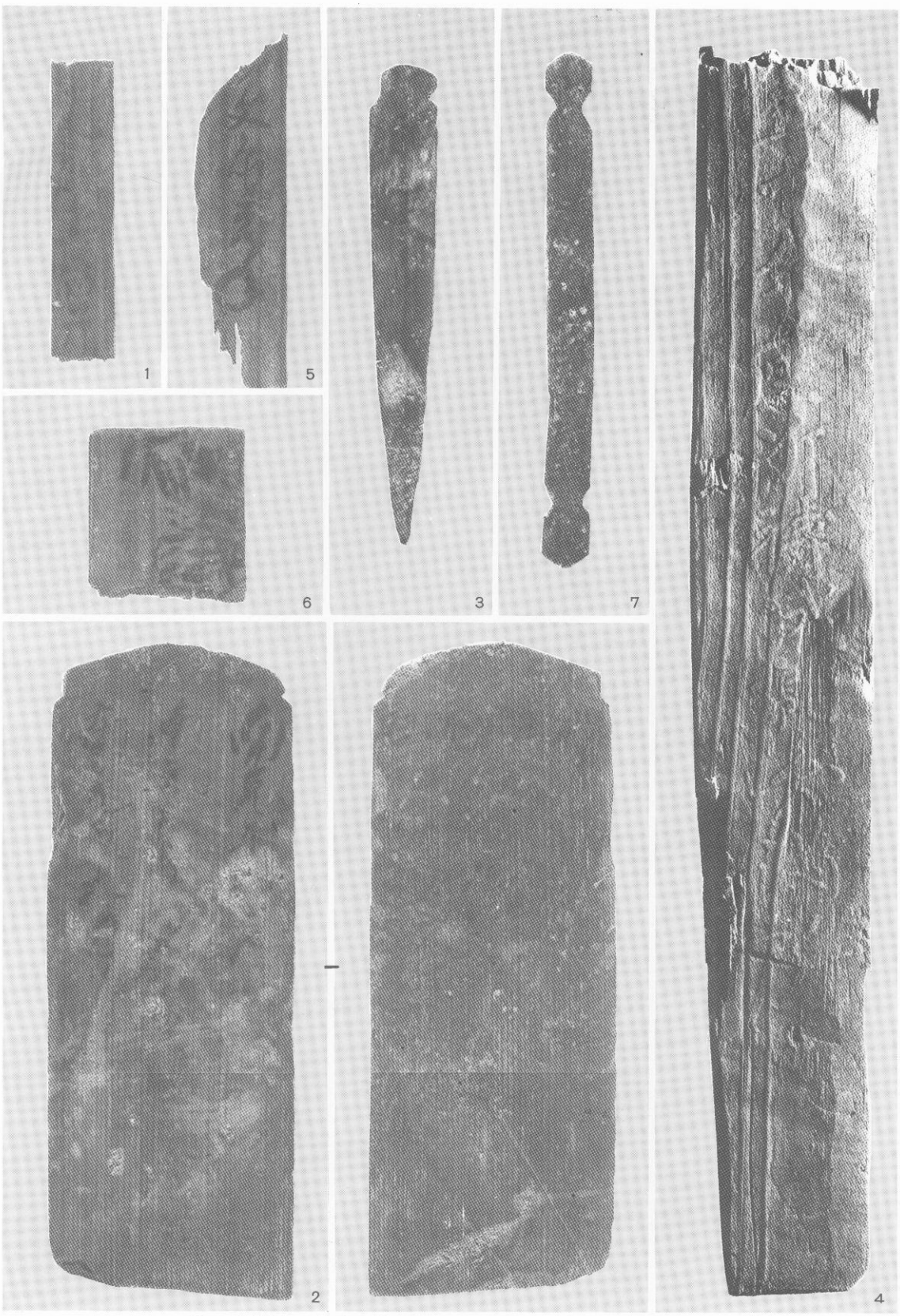
2



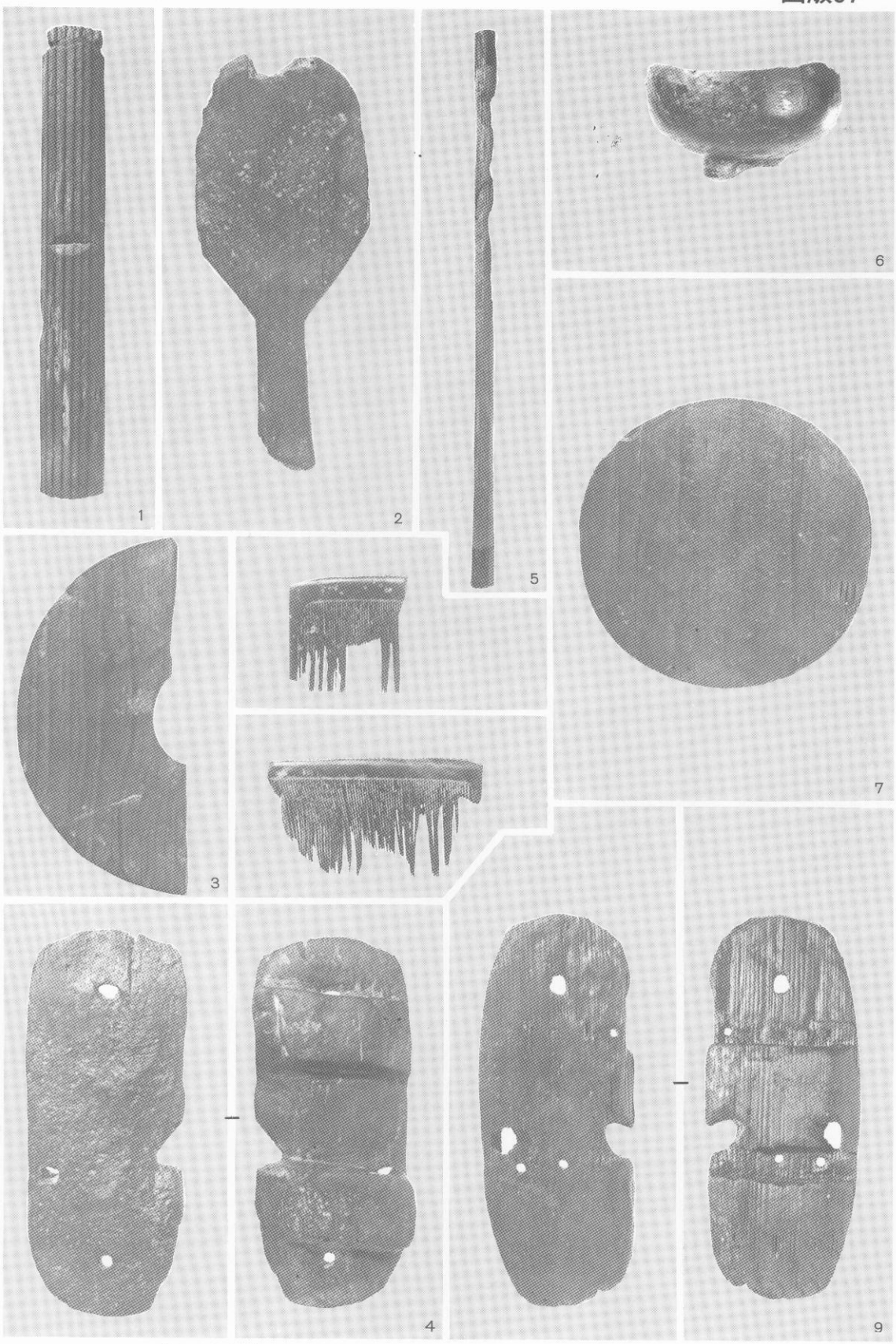
3

第70次調査　出土瓦経

図版66

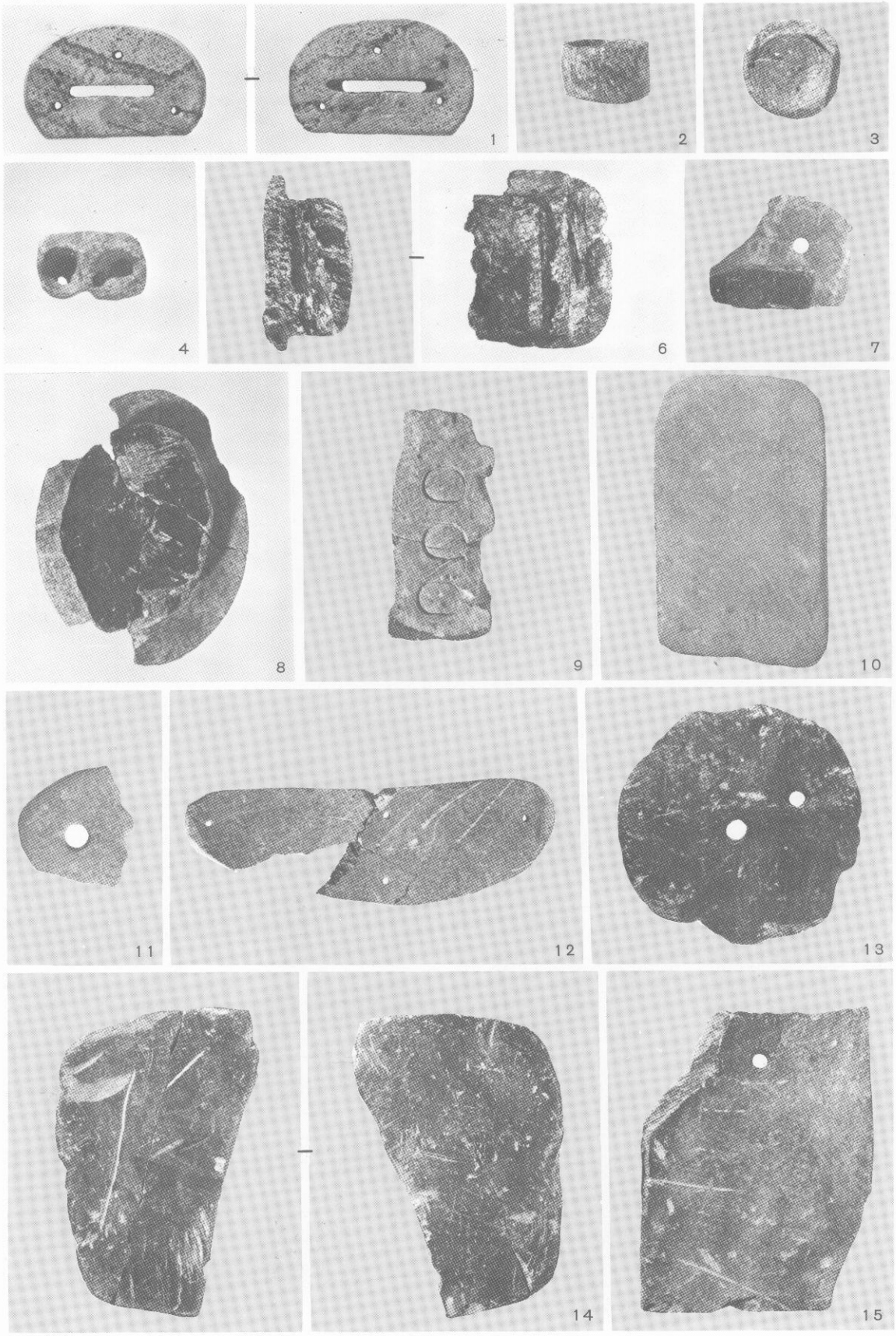


第70次調査　出土木簡

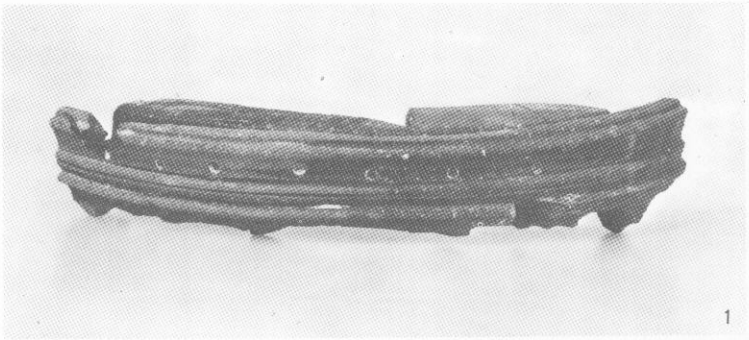


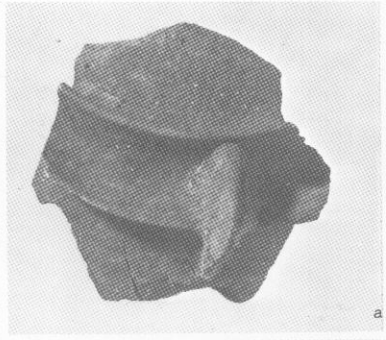
第70次調査　ＳＤ1805・ＳＥ1790・ＳＫ1769・ＳＫ1800出土木製品

図版68

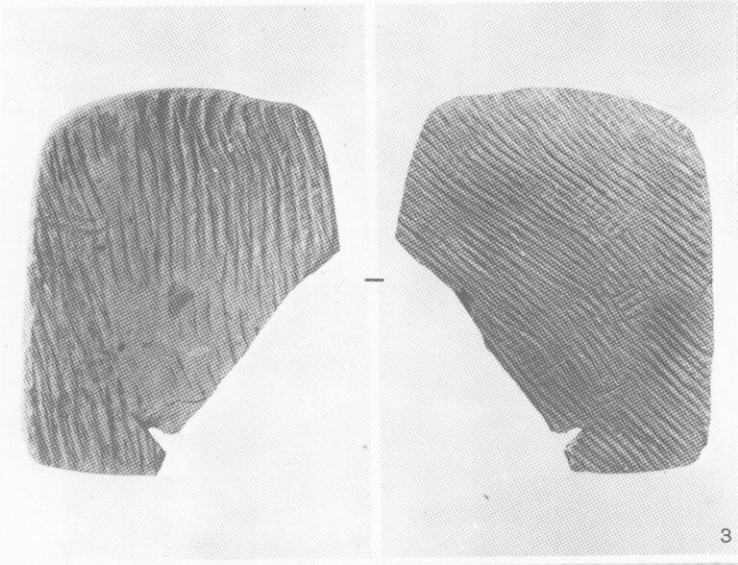


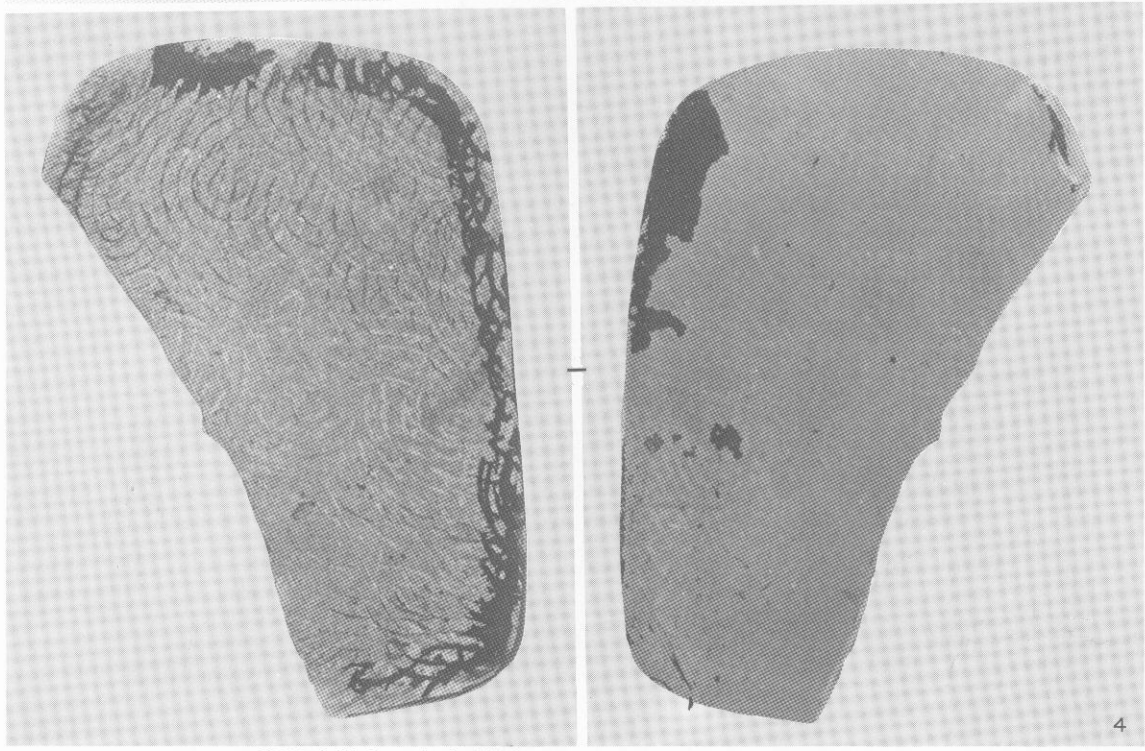
第70次調査　出土石製品





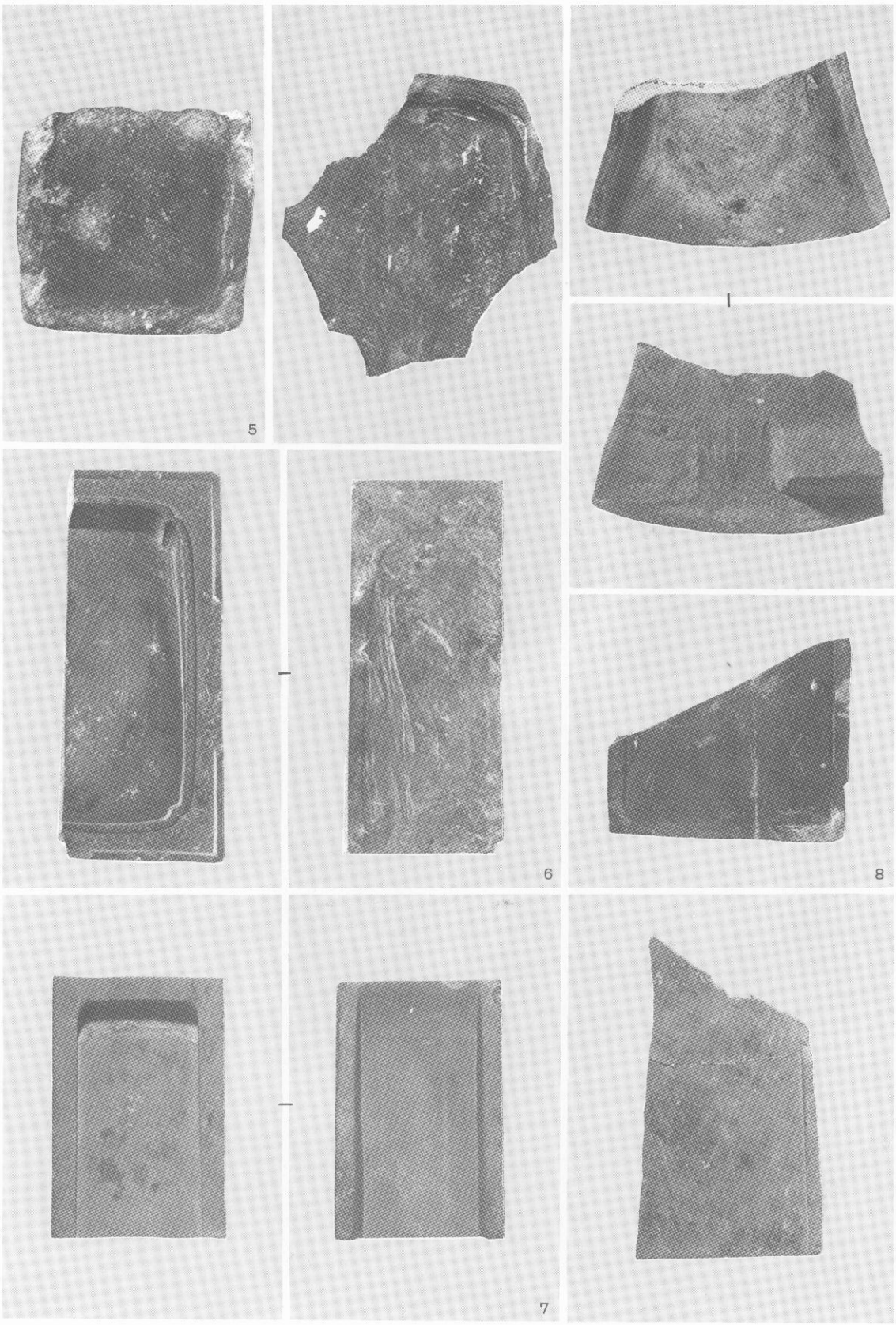




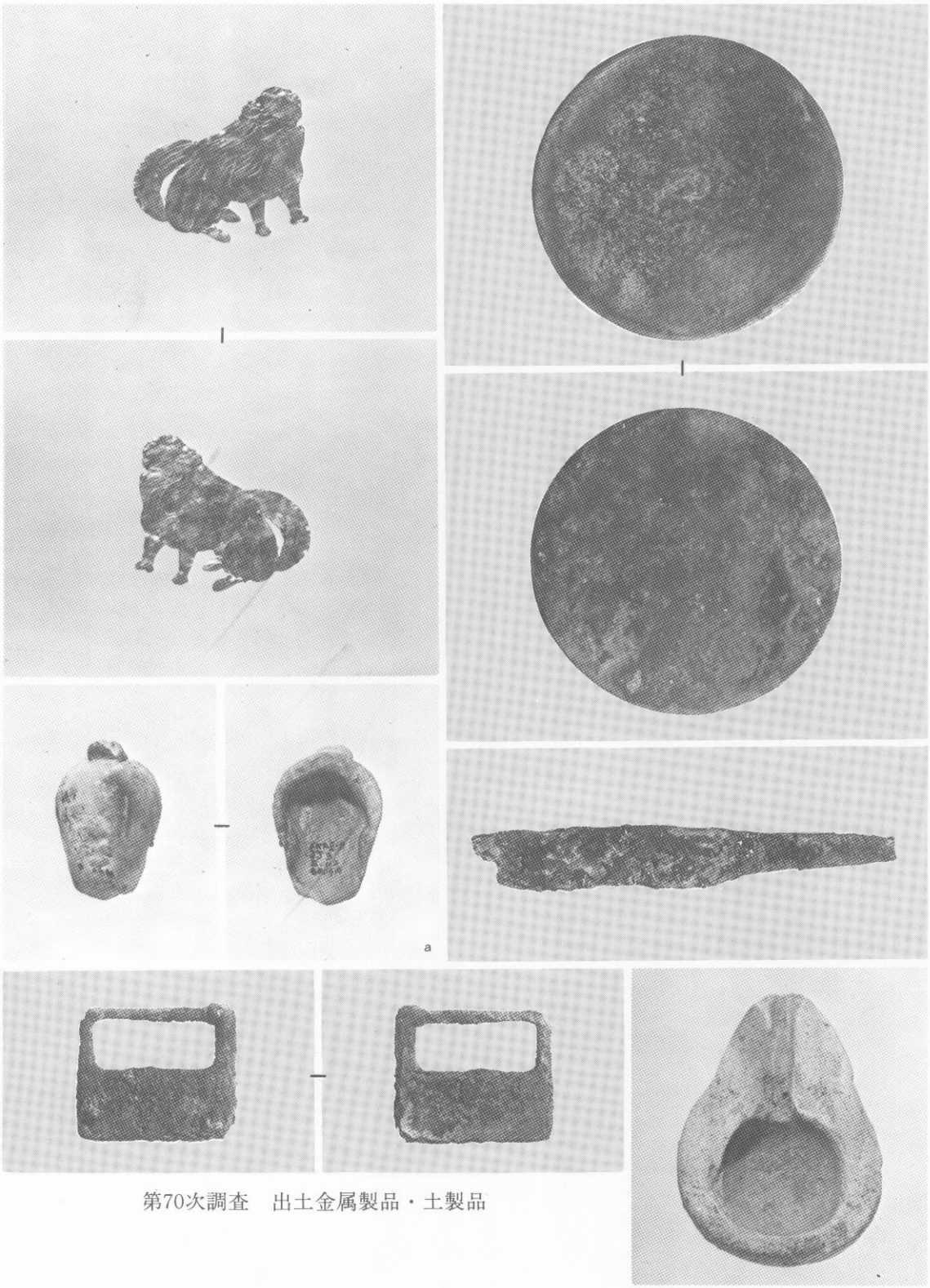


第70次調査　出土硯(1)

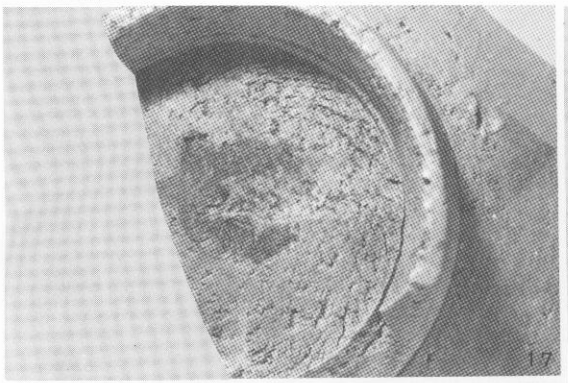
図版70

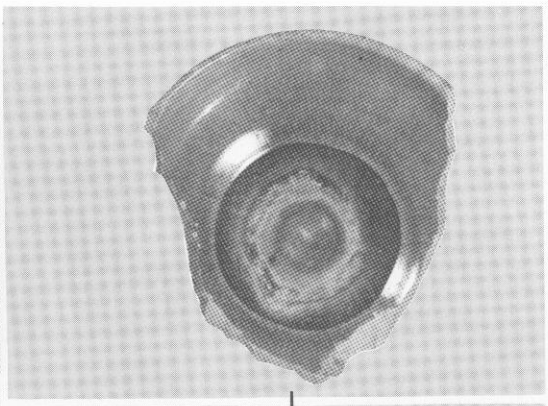


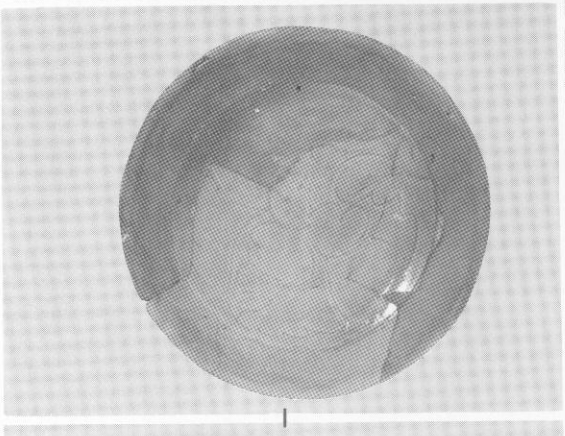
第70次調査　出土硯(2)



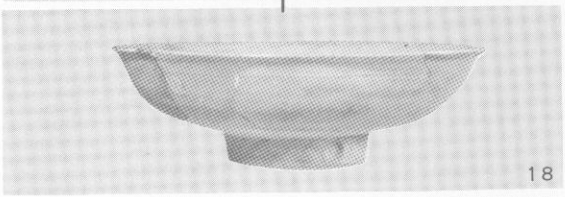
第70次調査　出土金属製品・土製品

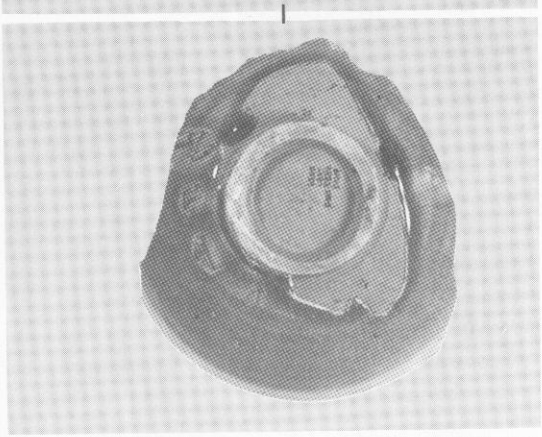

17

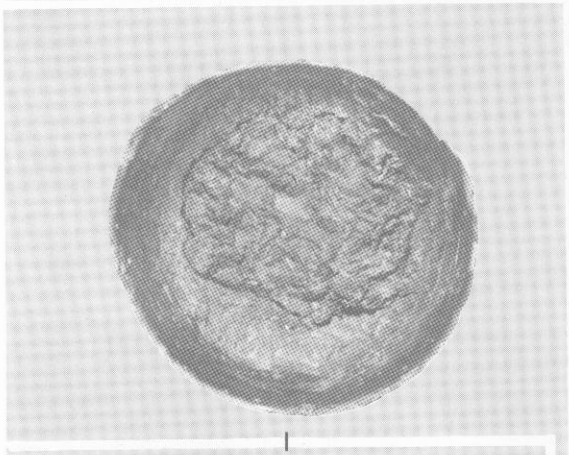


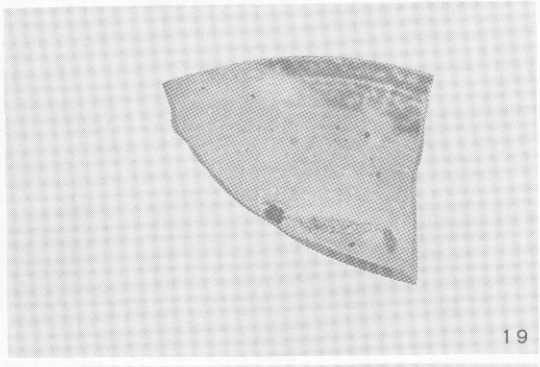



20

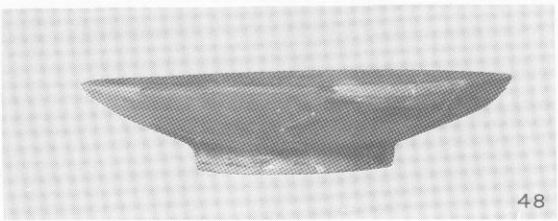

18



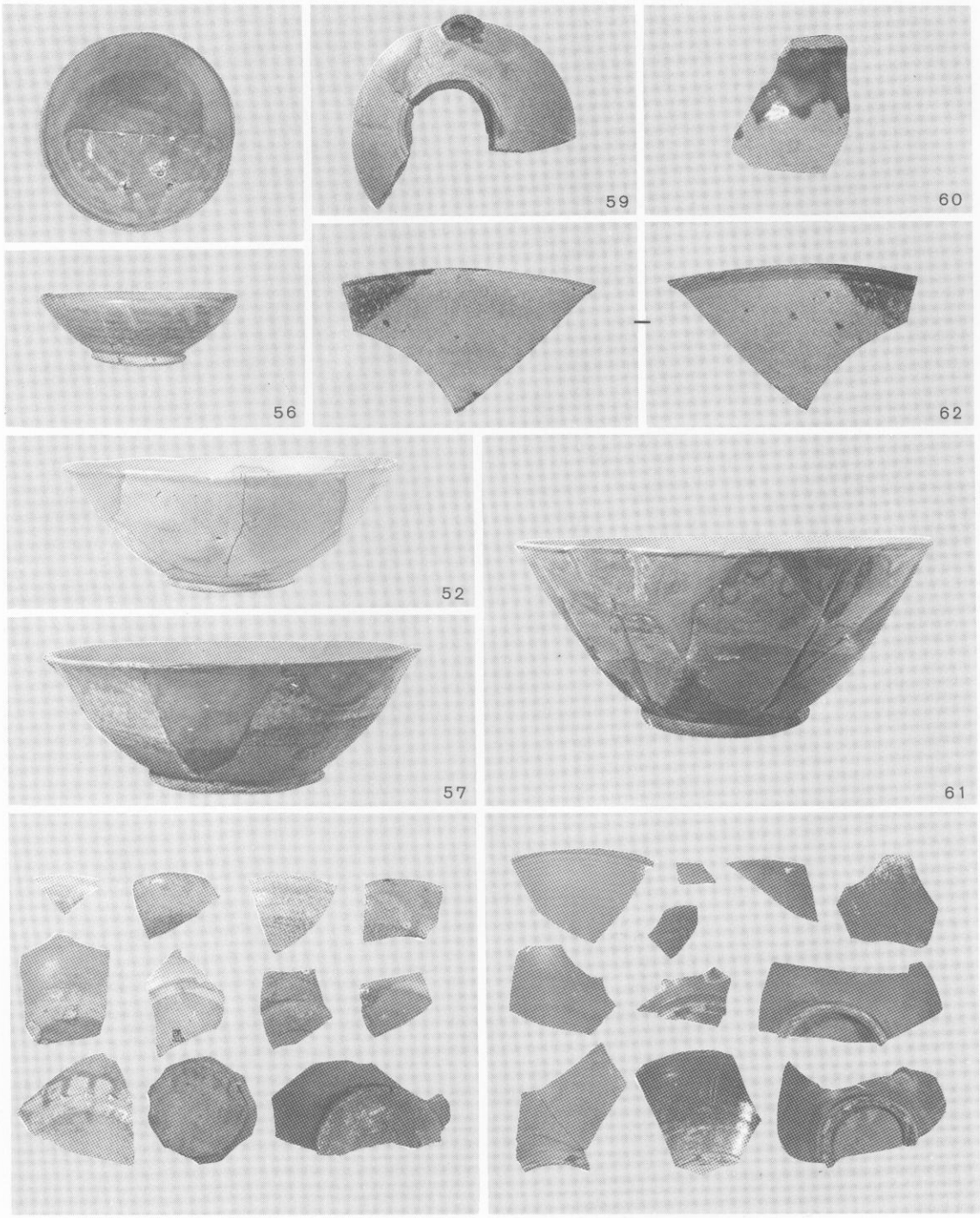



19


38

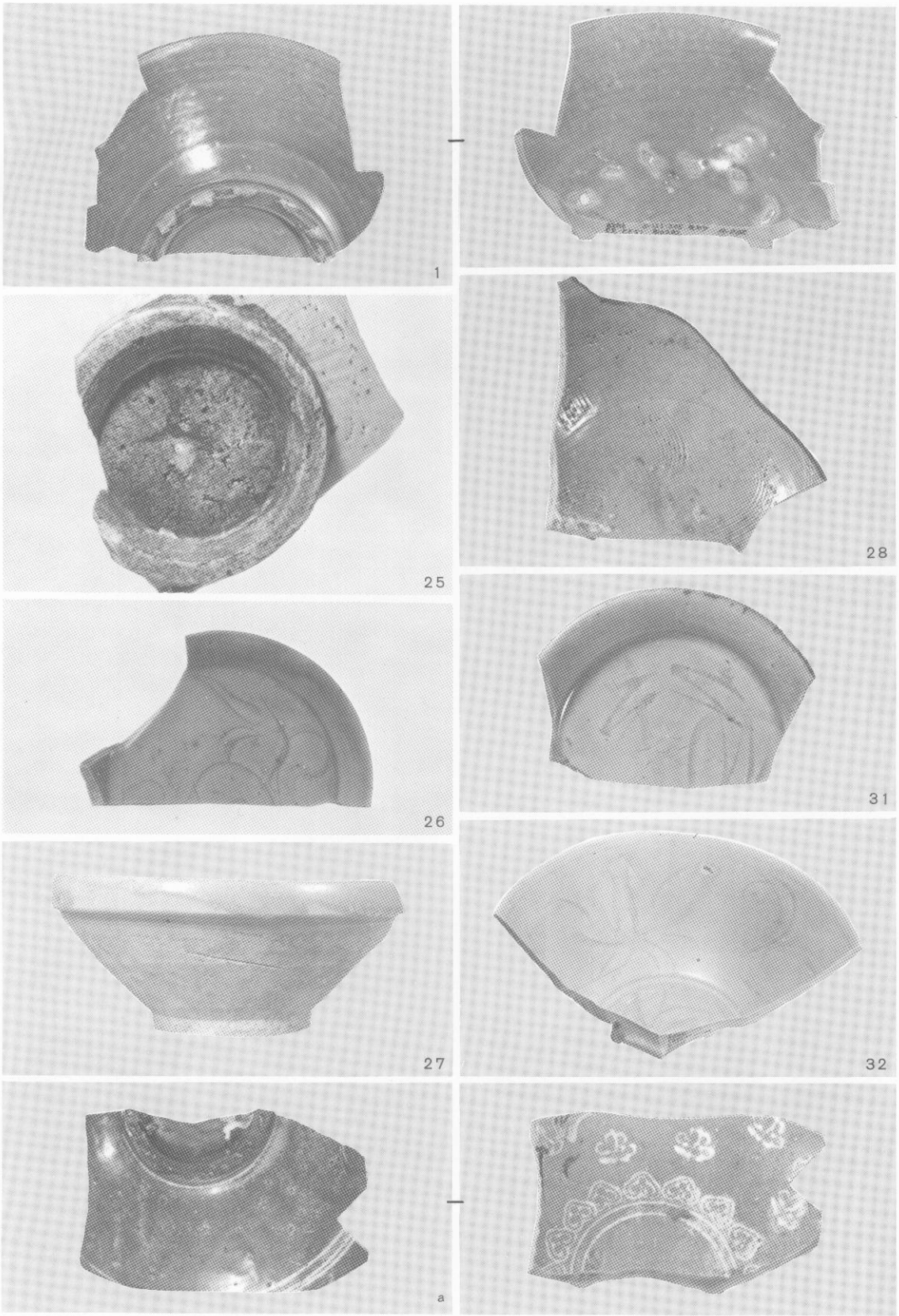

48

第74次調査　ＳＤ205・ＳＤ205Ａ出土土器・陶磁器

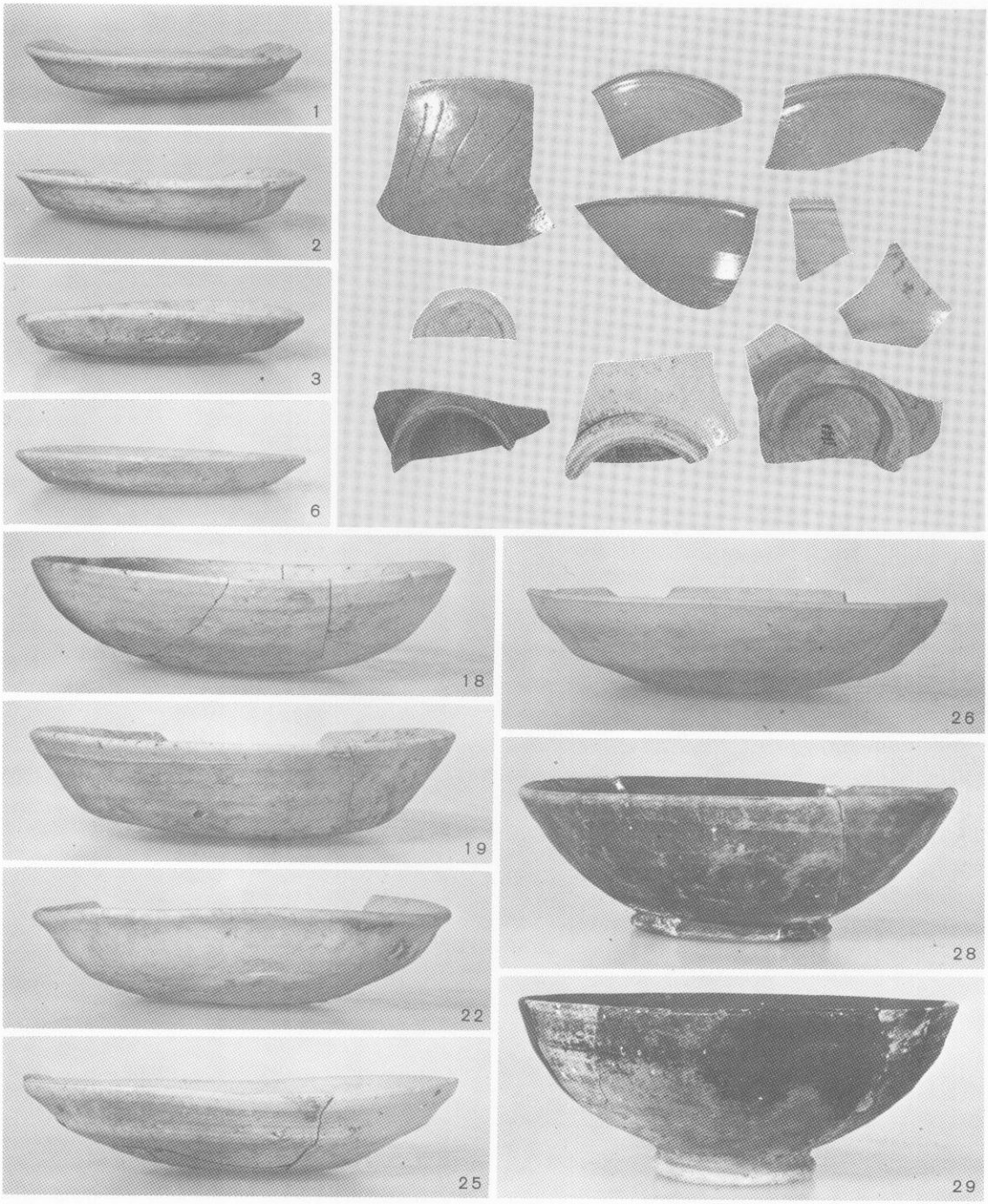


第74次調査　ＳＤ205Ａ出土陶磁器

図版74

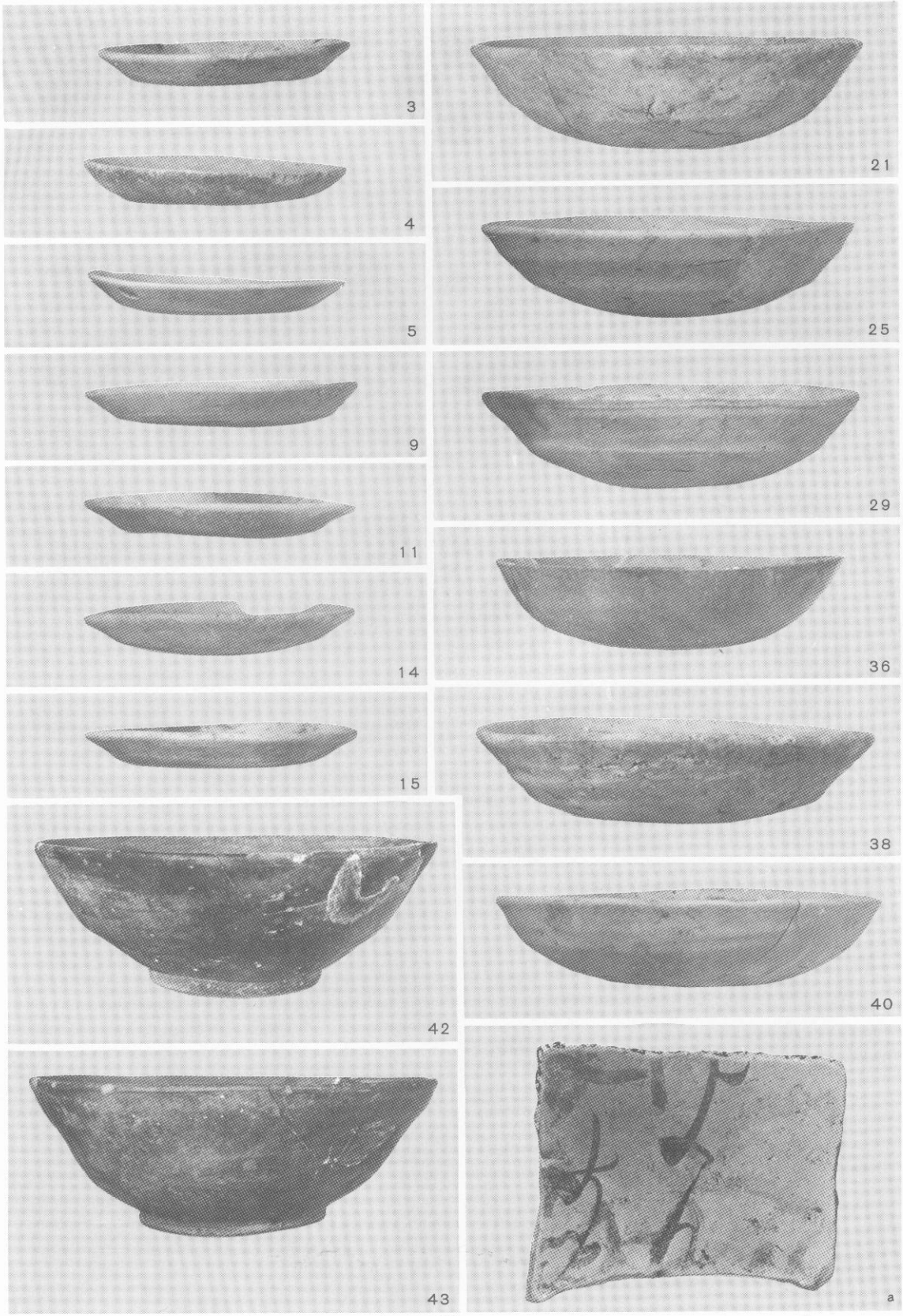


第74次調査　ＳＤ205Ｂ・ＳＤ205Ｄ出土陶磁器

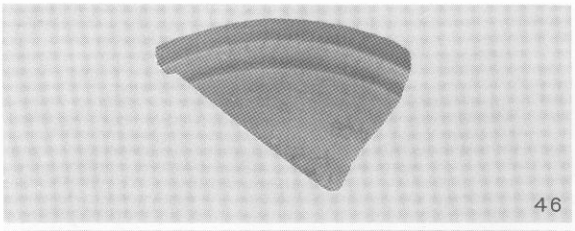


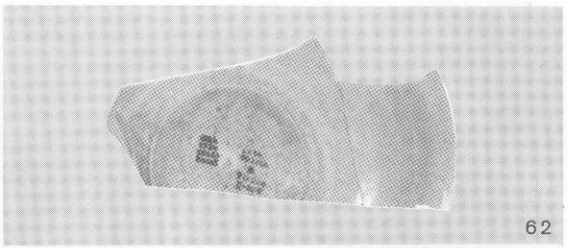
第74次調査　ＳＤ207出土土器・陶磁器

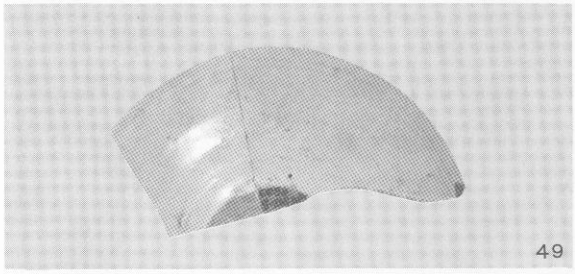
図版76

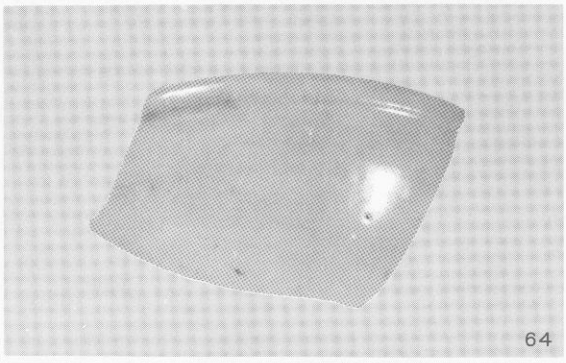


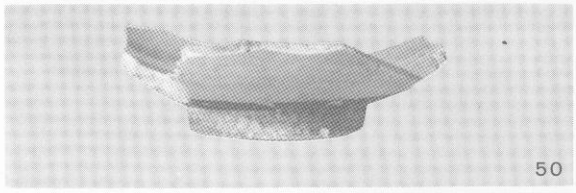
第74次調査　ＳＤ215Ａ出土土器

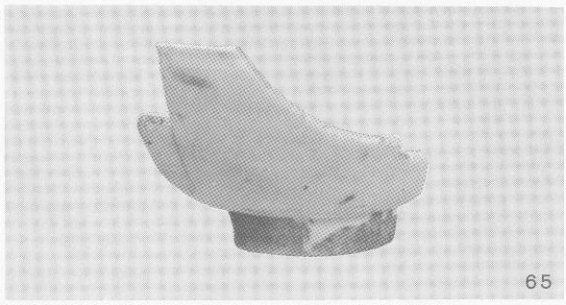






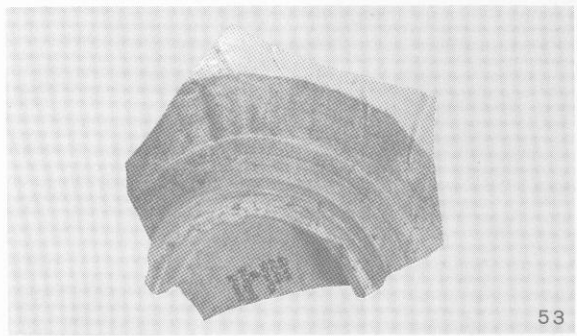


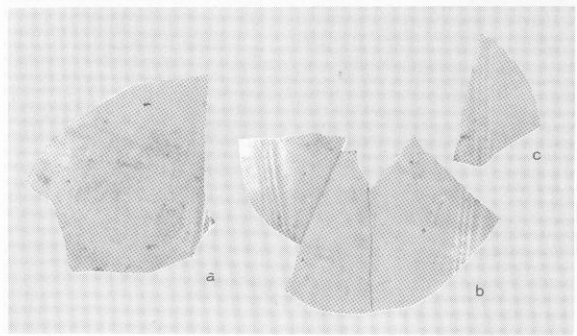


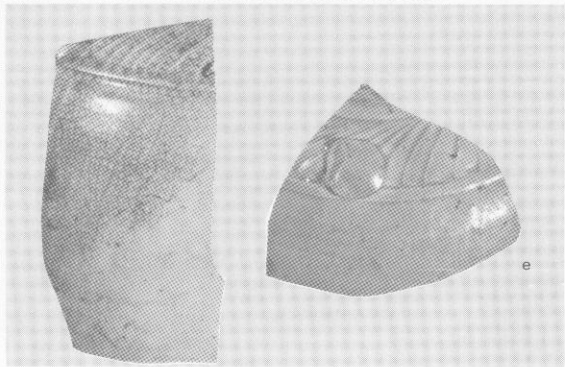






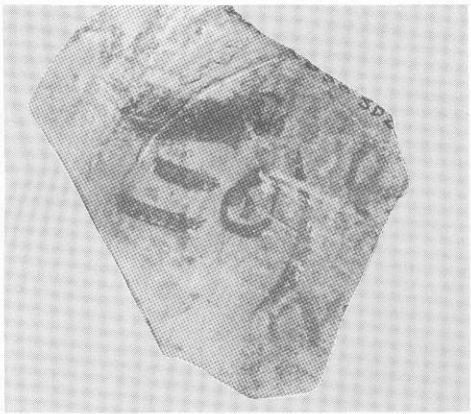




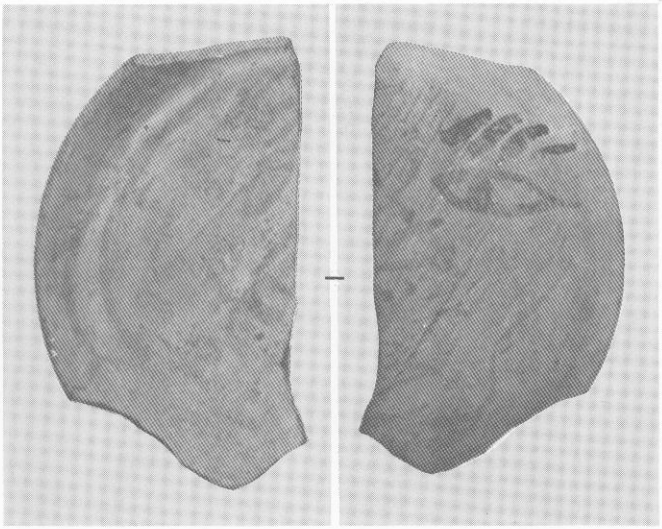


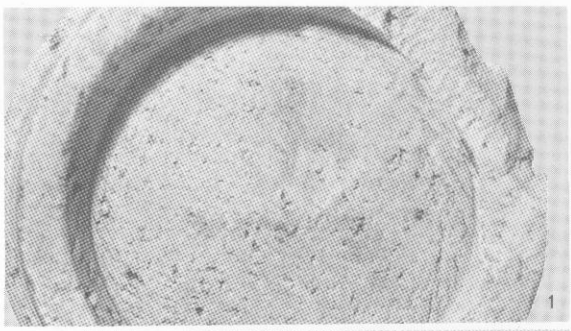
第74次調査　ＳＤ215Ａ出土陶磁器

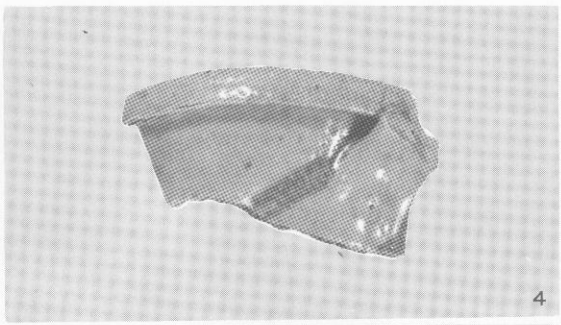
図版78



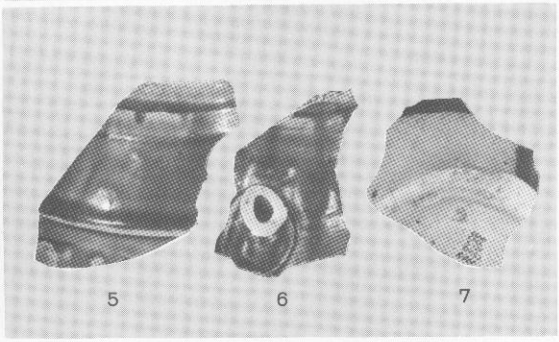
（参考）第38次調査
学校院跡ＳＤ860出土▶







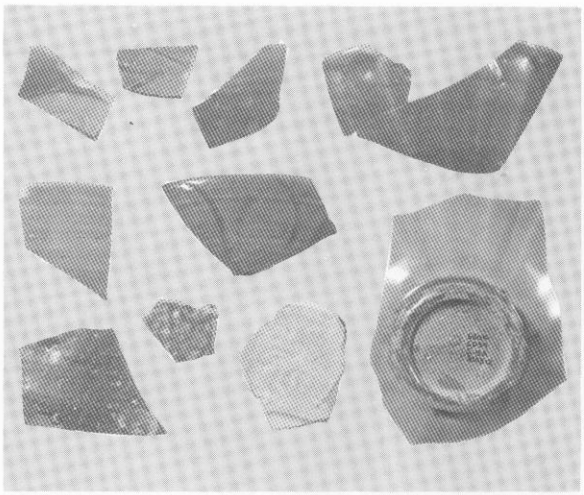


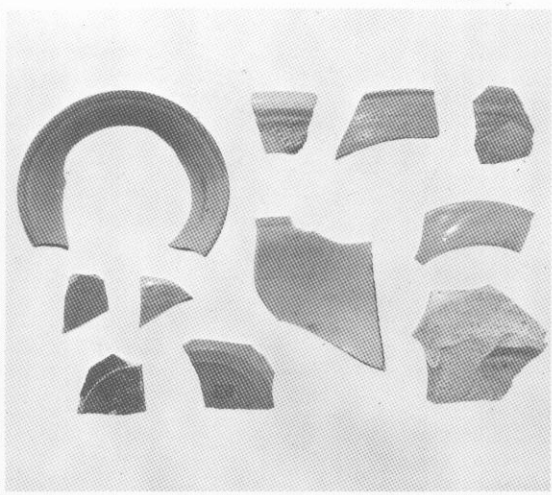


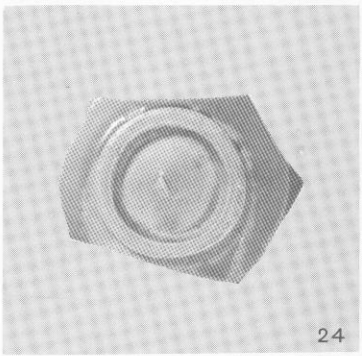




第74次調査　ＳＤ215Ａ出土土器および各層・各遺構出土の陶磁器

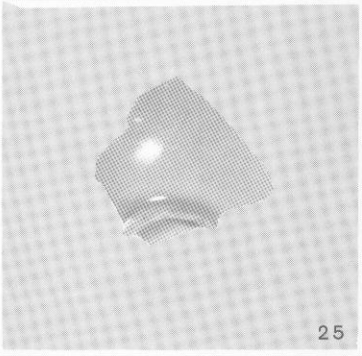


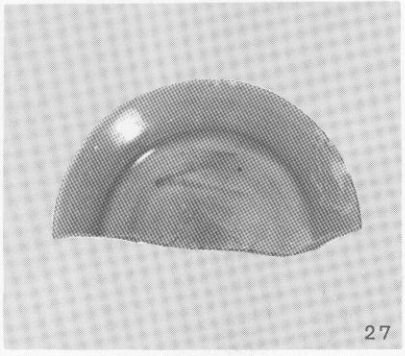


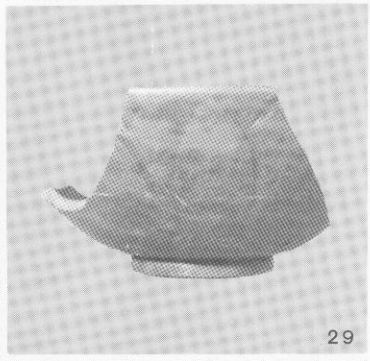


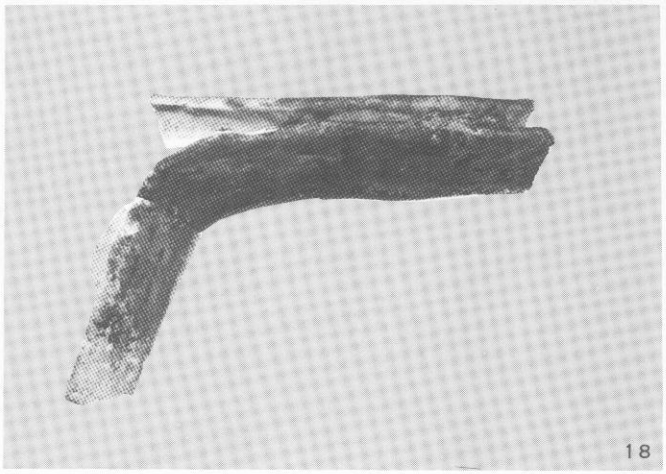


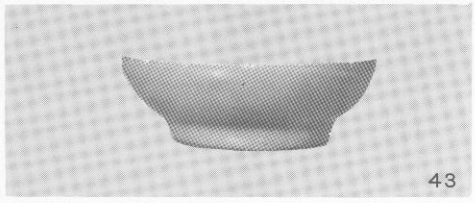


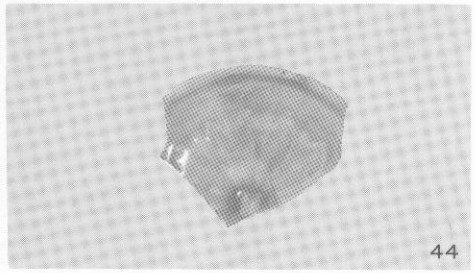




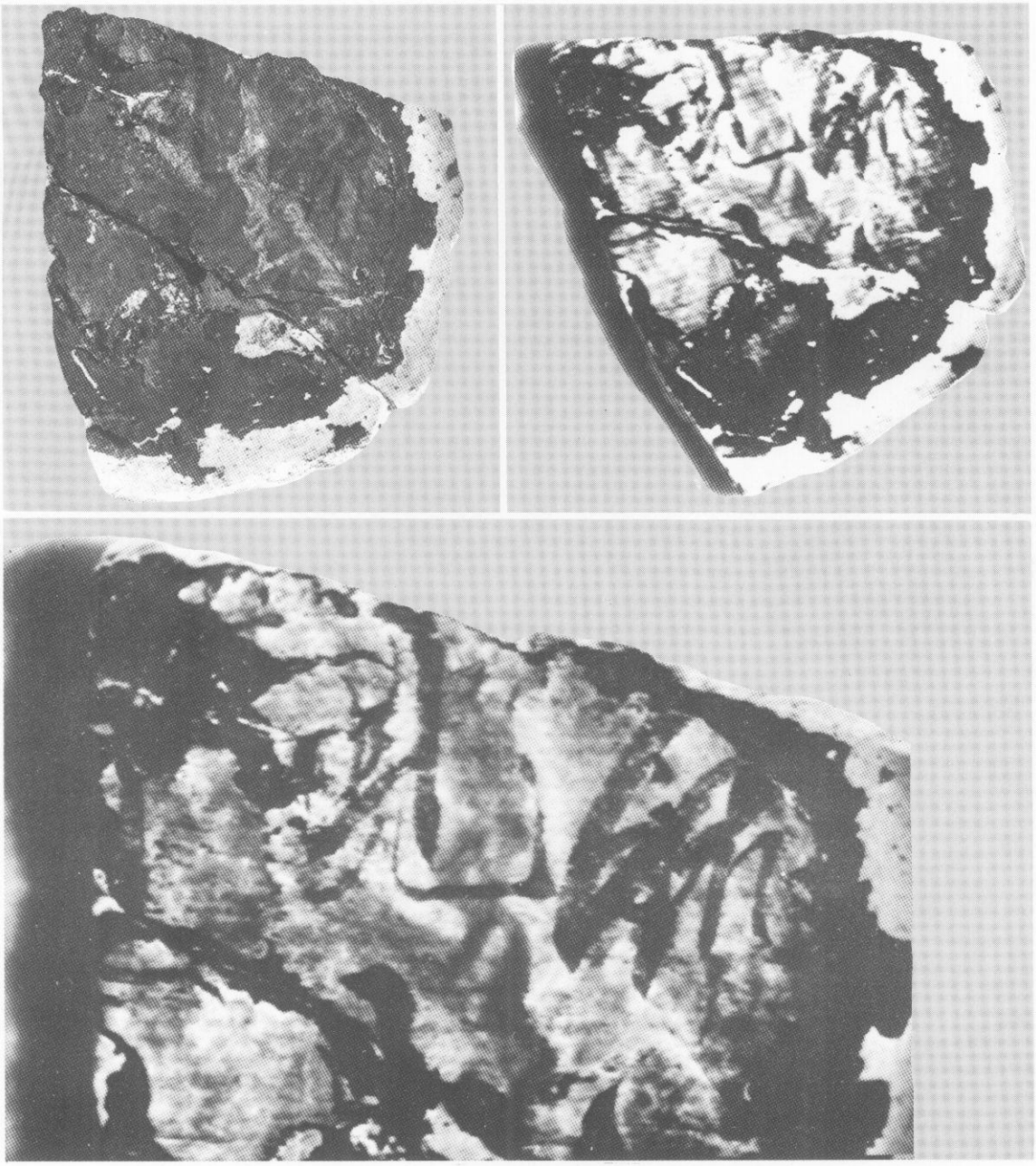




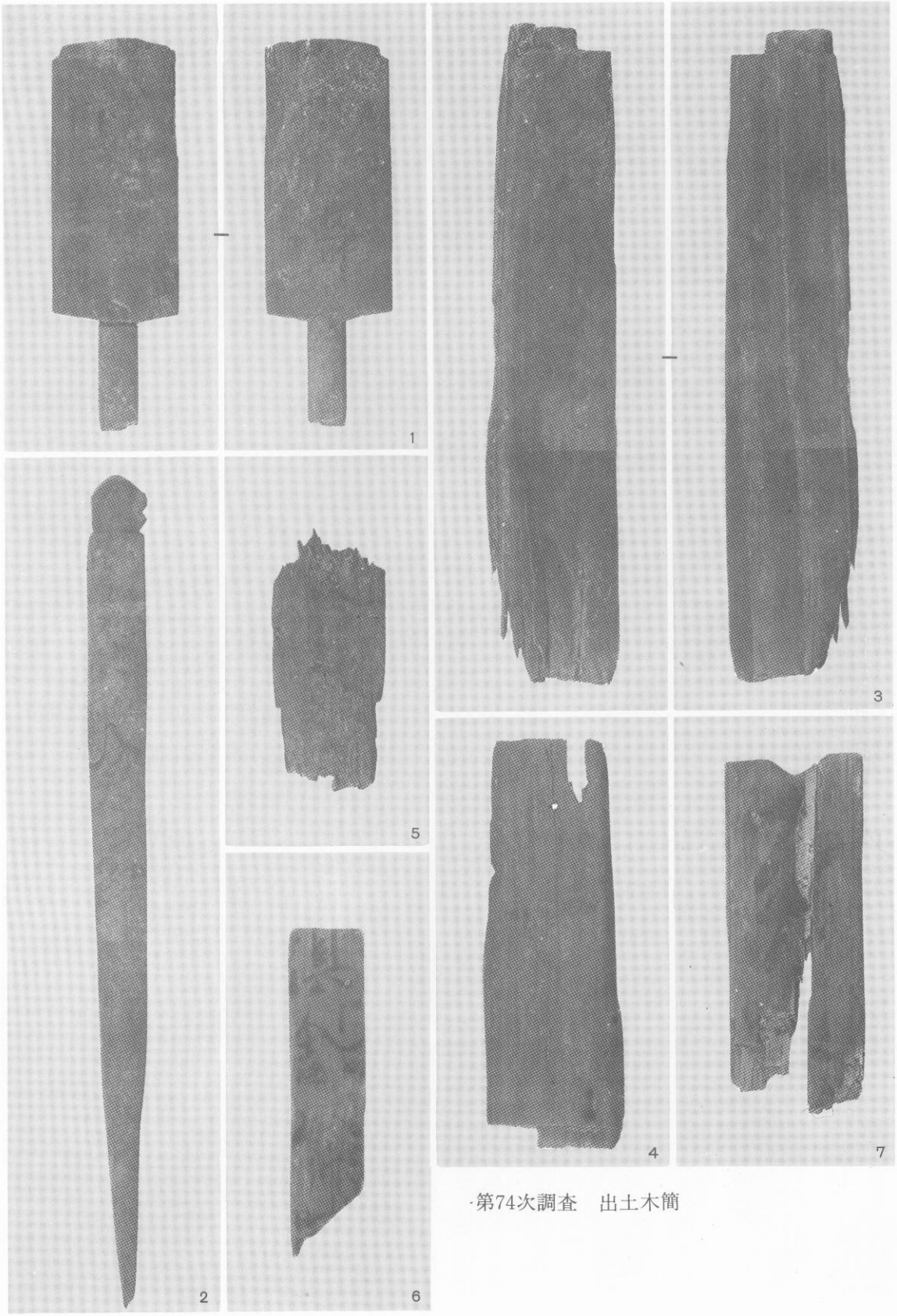




第74次調査　ＳＥ1935・ＳＥ1940・ＳＫ1950・ＳＫ1952・ＳＫ1953 出土陶磁器・竈

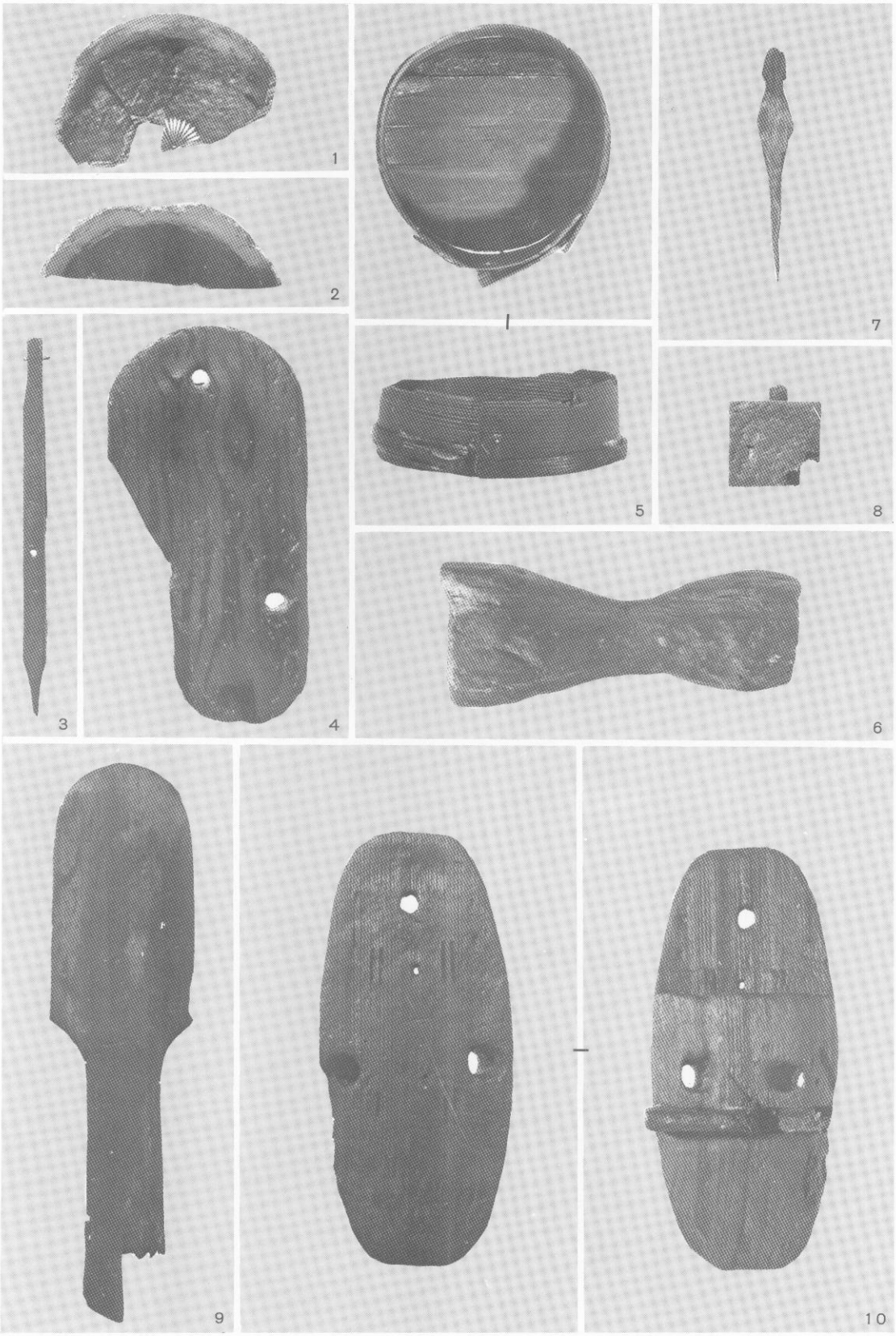


第74次調査　出土漆紙文書（赤外線テレビ撮影による）

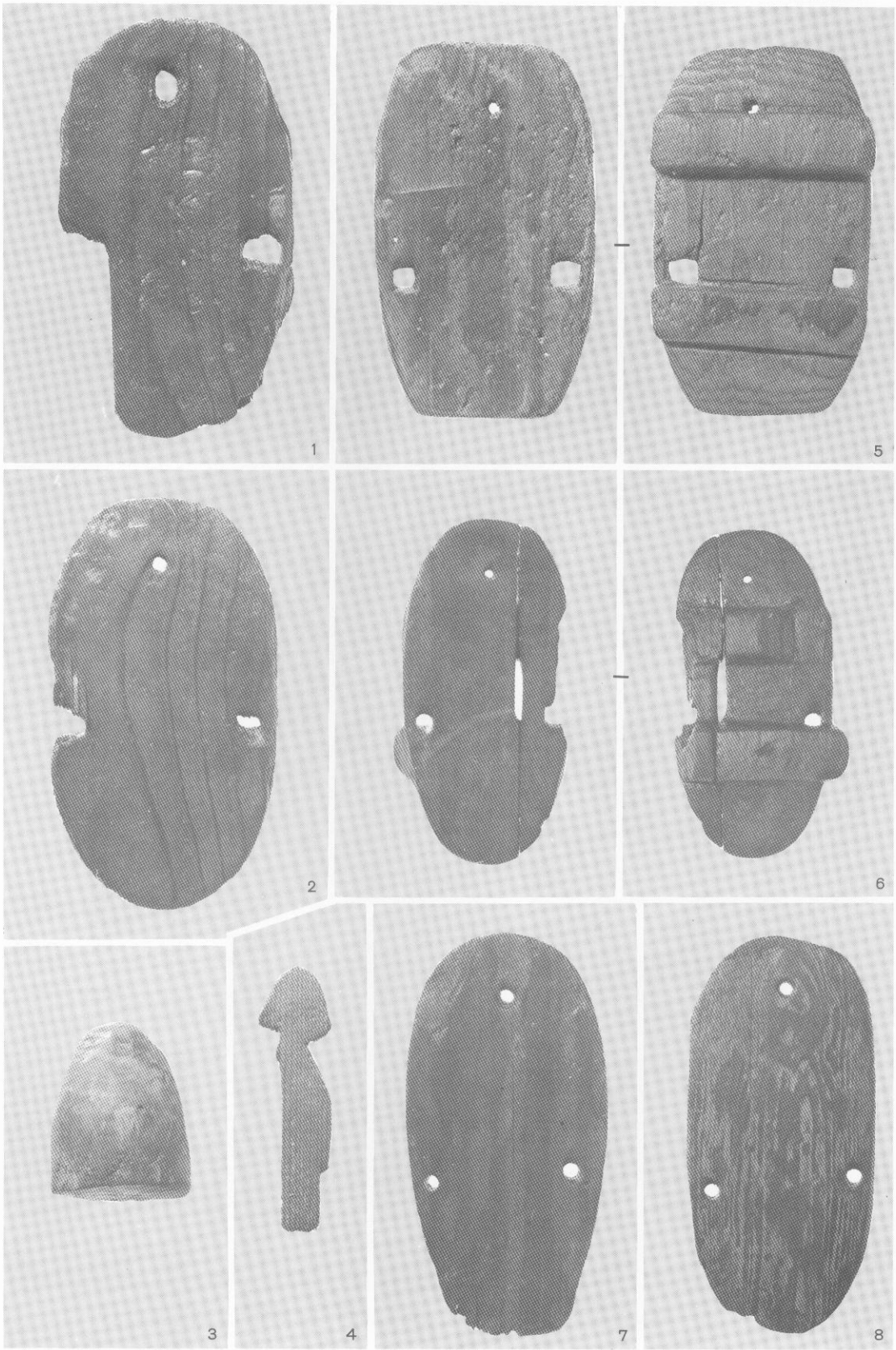


·第74次調査　出土木簡

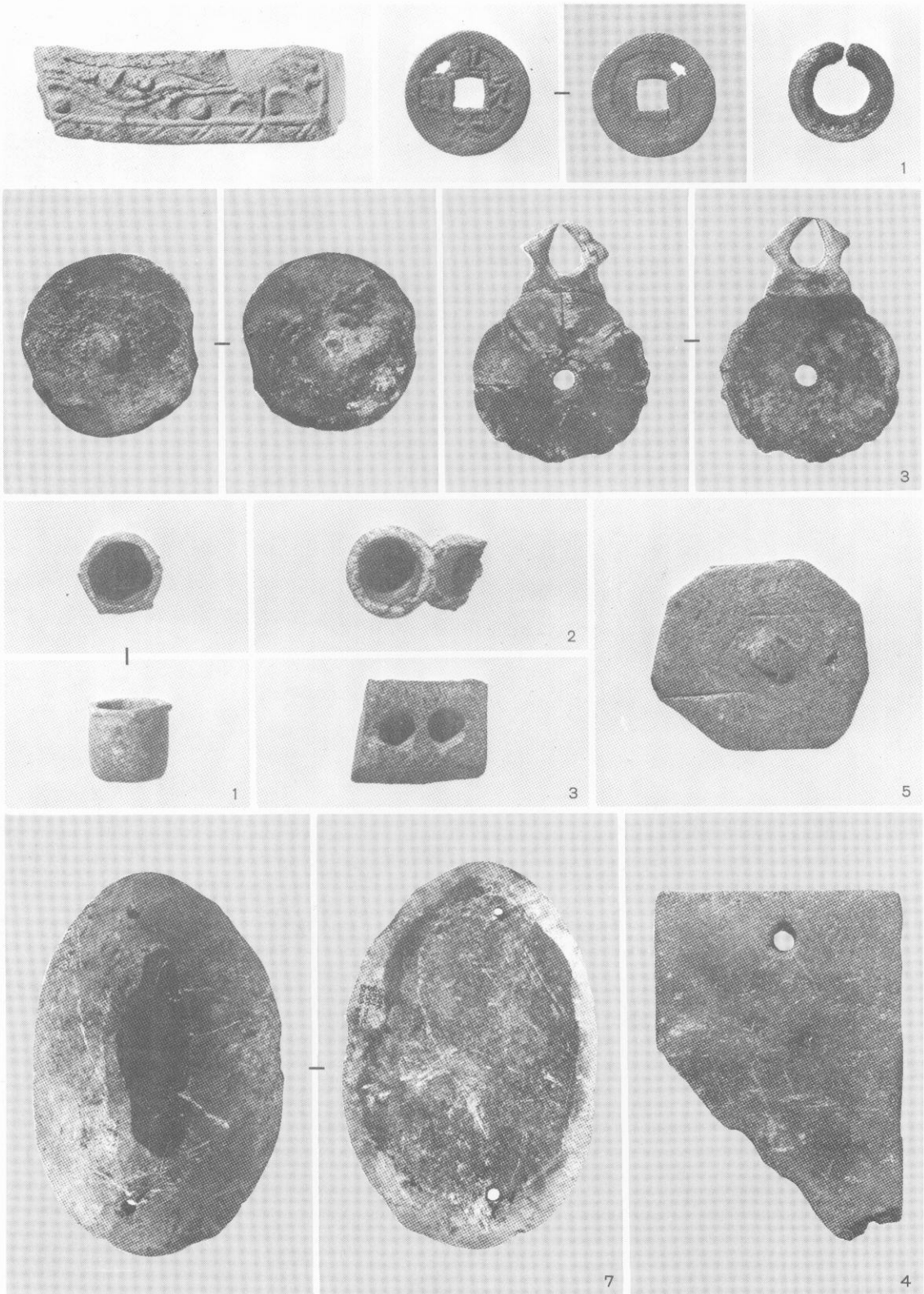
図版82



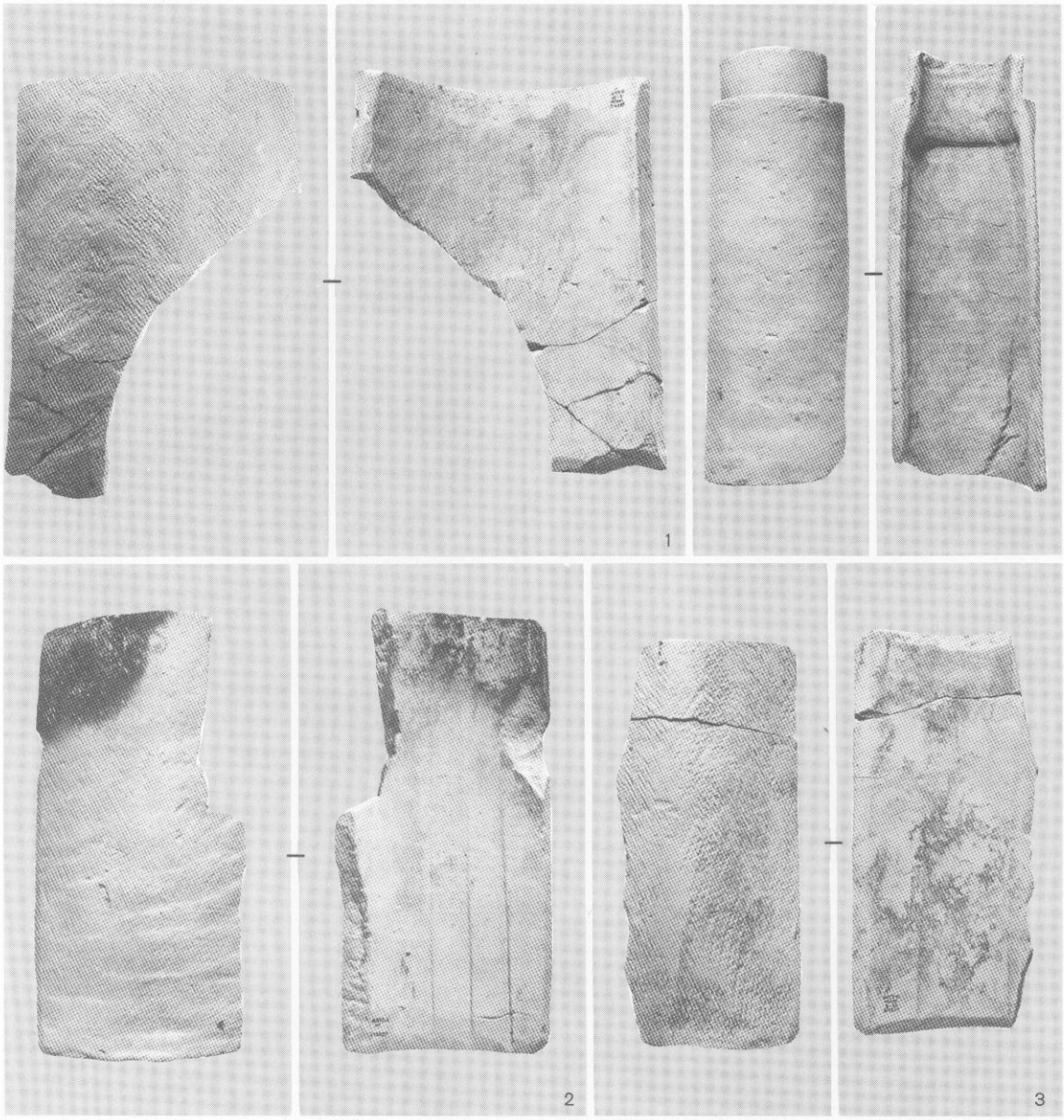
第74次調査　ＳＤ205・ＳＤ205(Ａ・Ｂ・Ｄ)・黒色砂質土層出土木製品



第74次調査　ＳＤ215Ａ・Ｂ出土木製品

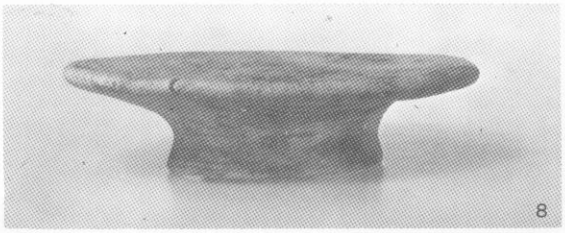


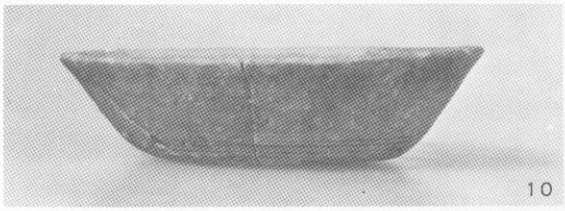
第74次調査　出土軒平瓦・乾元大寶・金属製品・石製品



第75次調査　出土丸瓦・平瓦

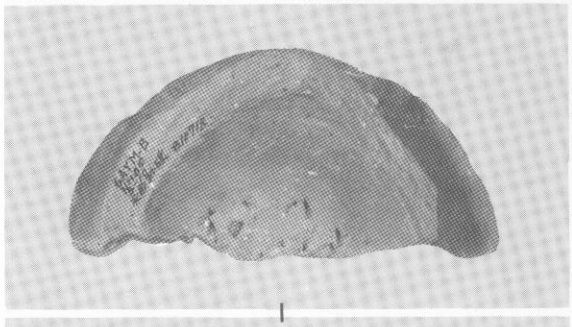
図版86

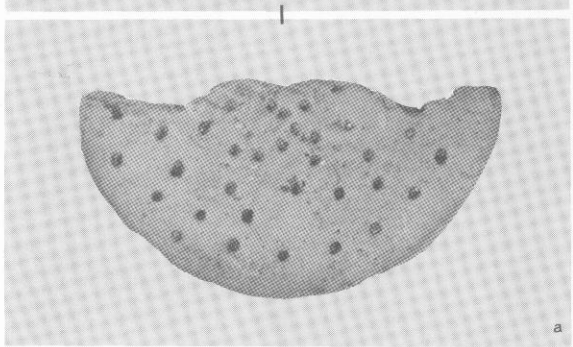














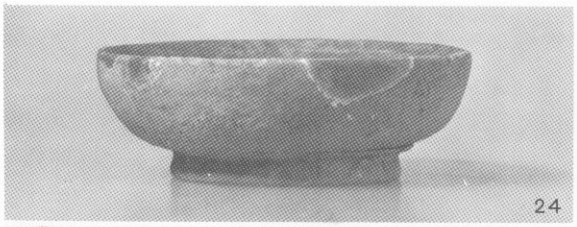


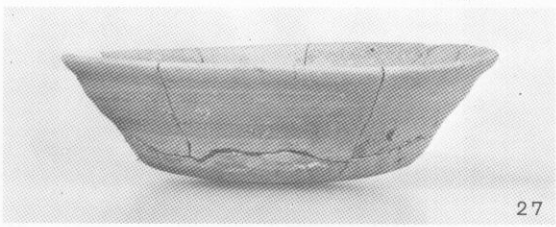


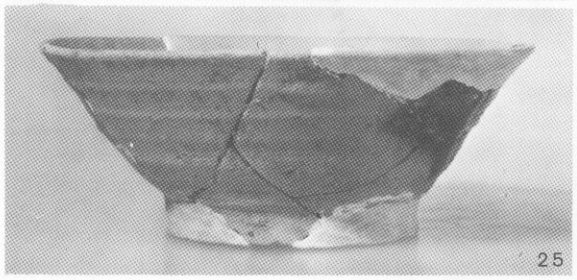


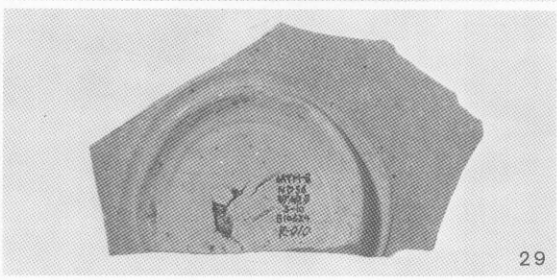


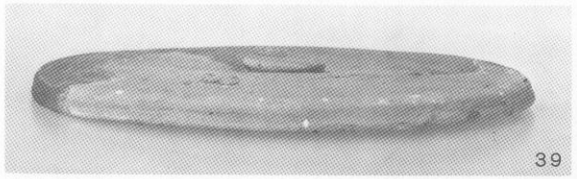
第76次調査　ＳＤ320上層出土土器・陶磁器

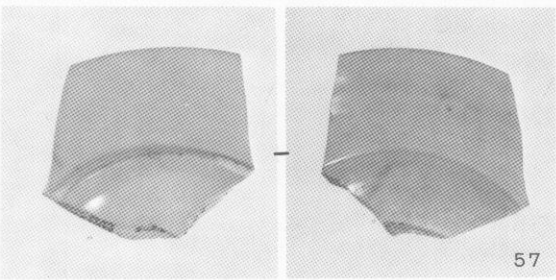

24


27

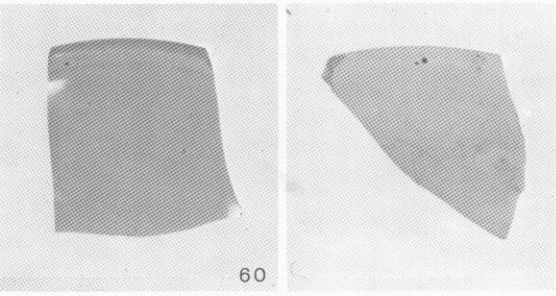

25


29

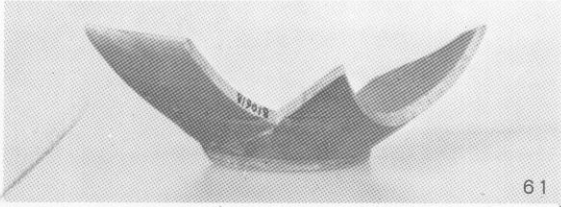

39


57


55

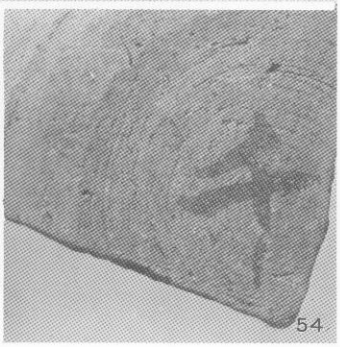

60


56

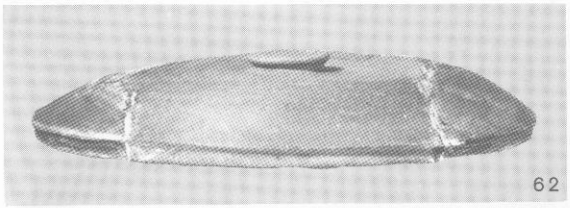

61

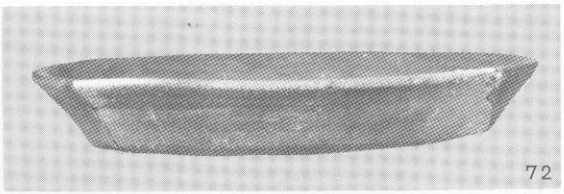

45

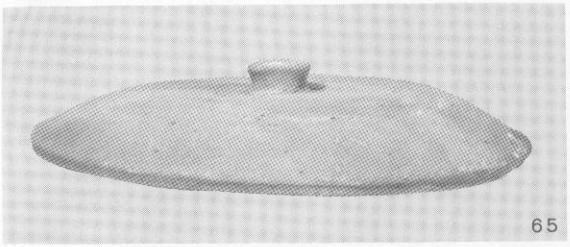

46


54

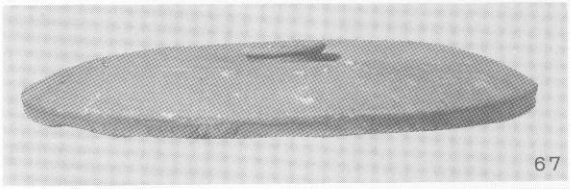
第76次調査　ＳＤ320中層・下層出土土器・陶磁器

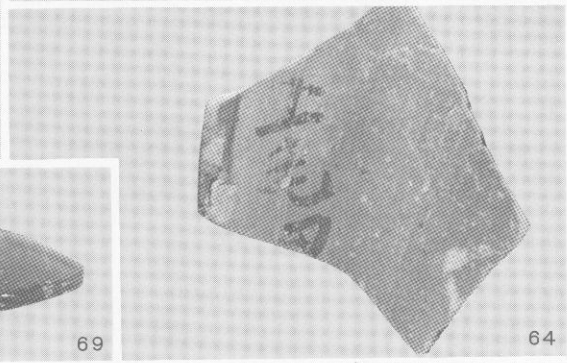

62

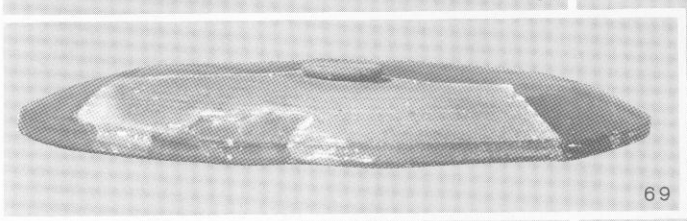

72

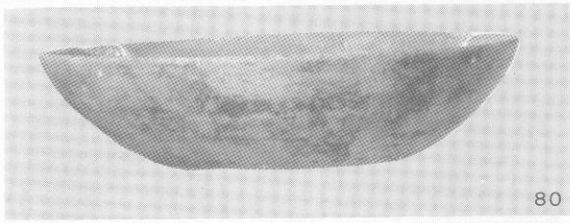

65

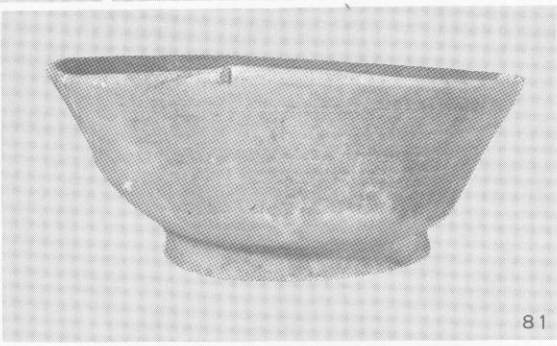

74

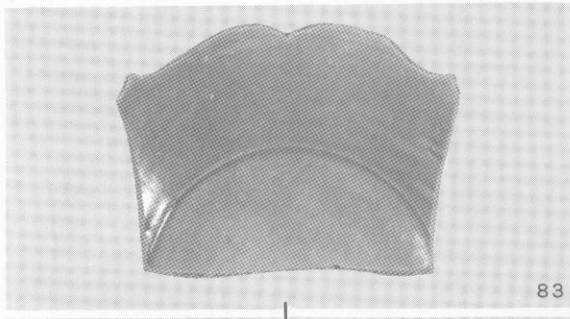

67

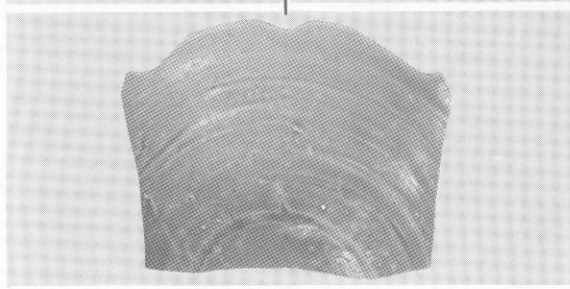

64


69


80

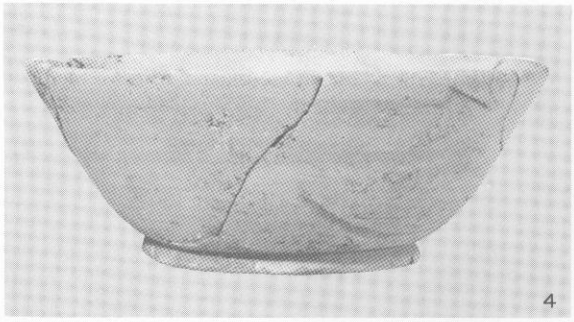

81

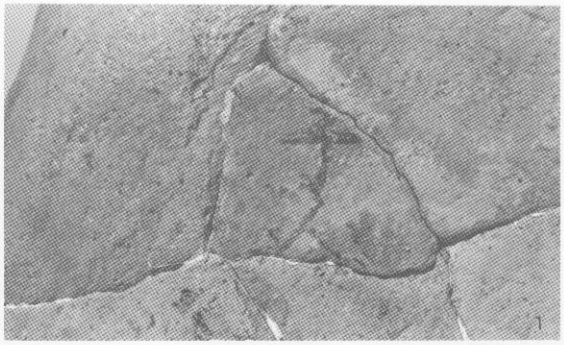

83

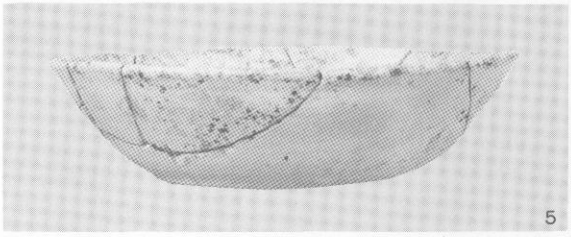



a

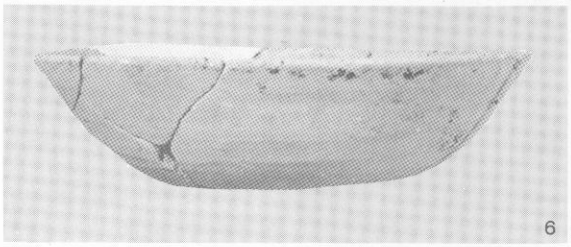
第76次調査　ＳＤ320出土土器・陶磁器

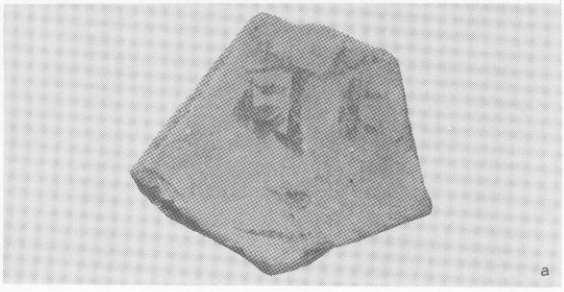

4


1

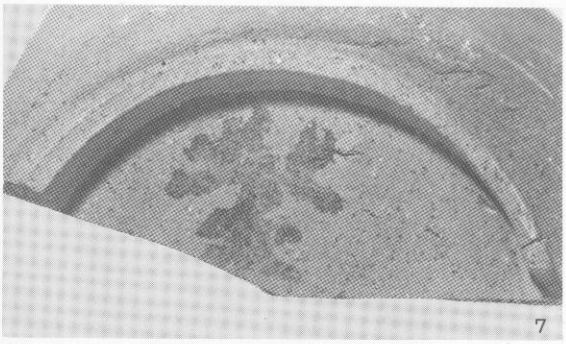

5


2

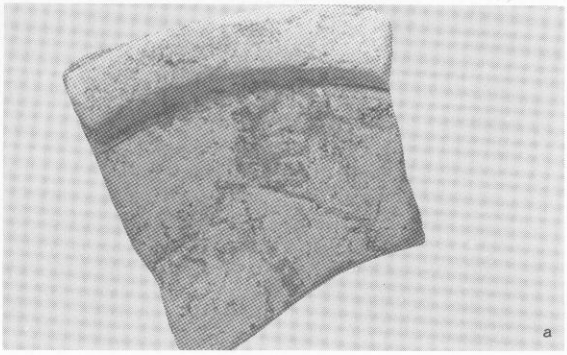

6

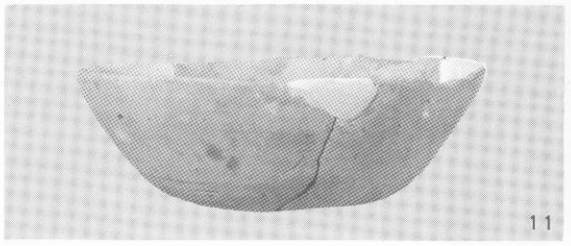

a


8


7

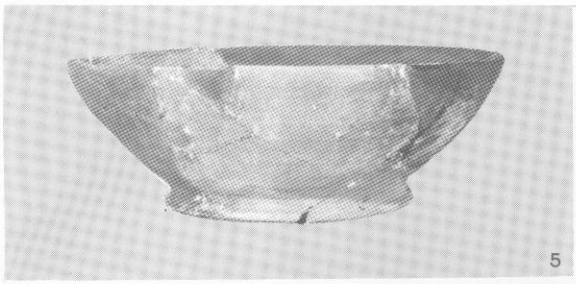

10

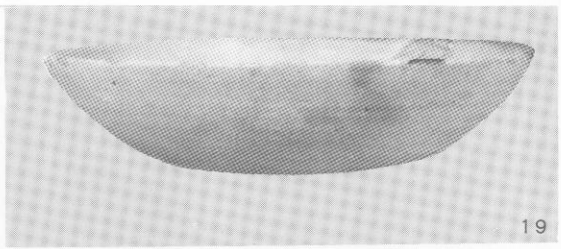

a

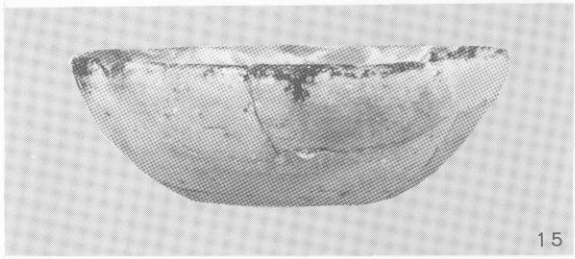

11

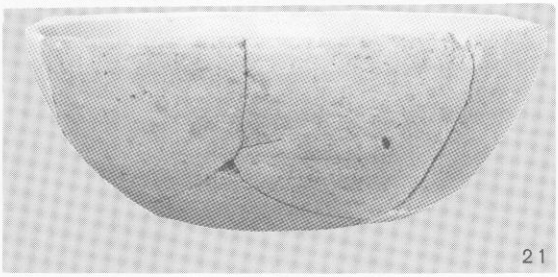
第76次調査　ＳＤ2015Ａ出土土器

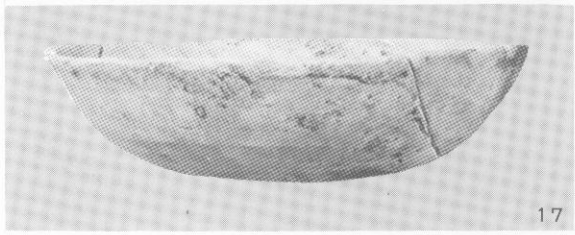
図版90

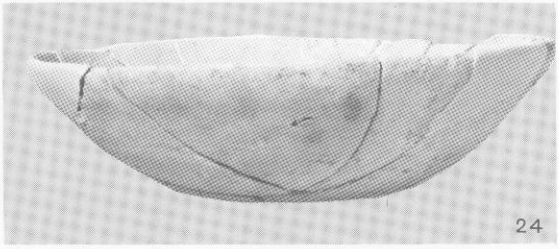

5

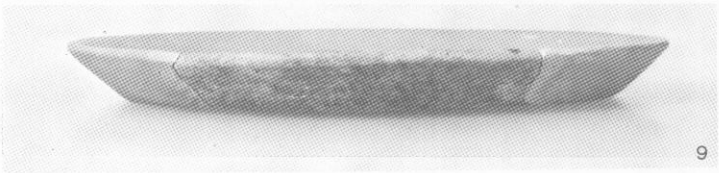

19


15

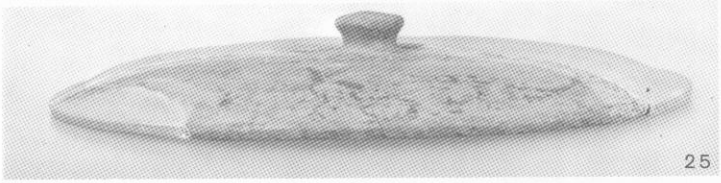

21


17

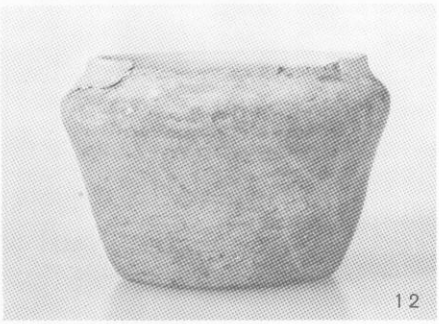

24


9


14


25

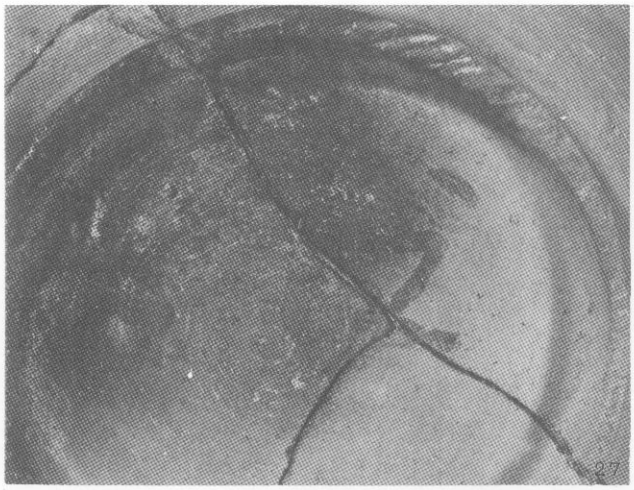

26

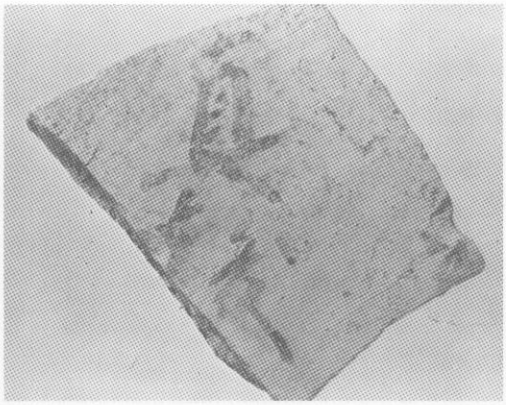

12

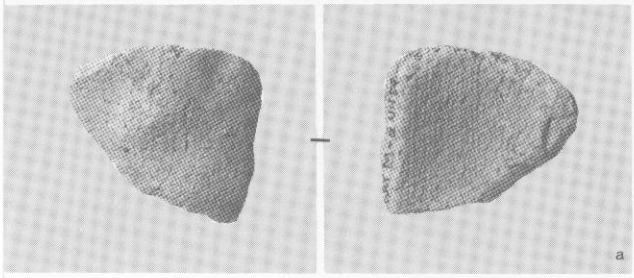

27

第76次調査

ＳＤ2015Ｂ上層出土土器

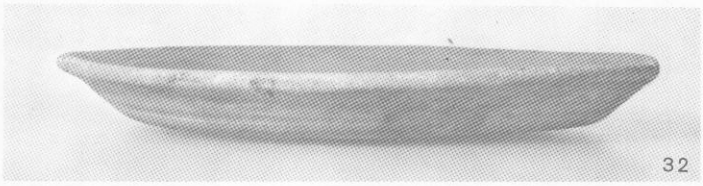




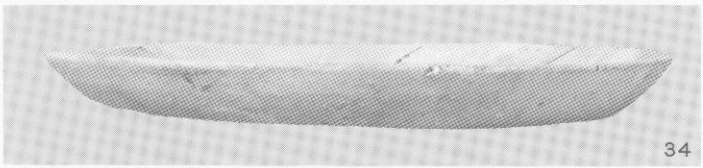


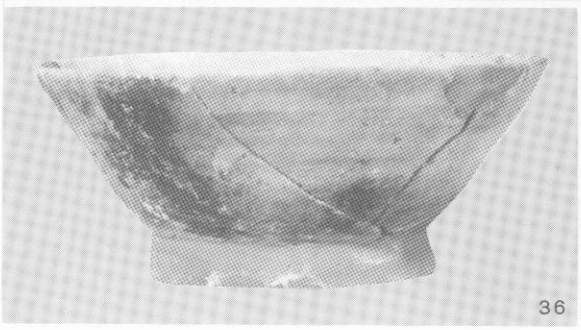


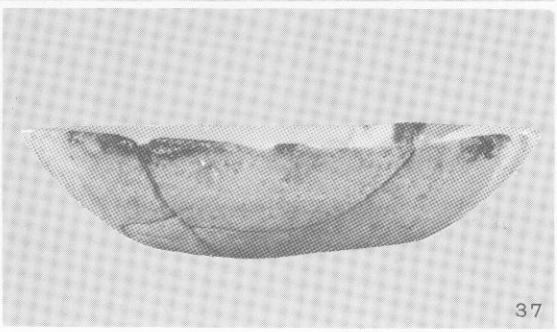






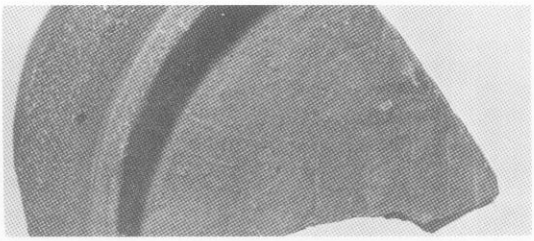




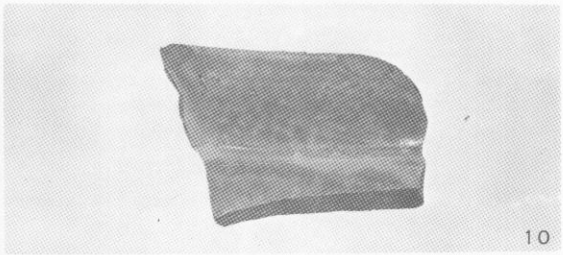


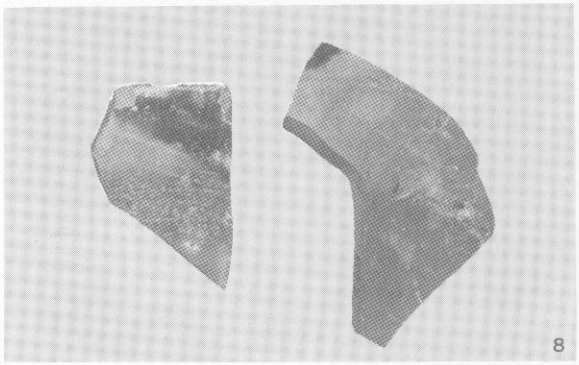
第76次調査　ＳＤ2015Ｂ上層・下層出土土器

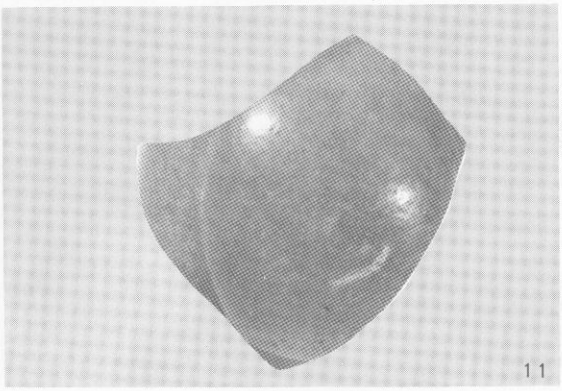


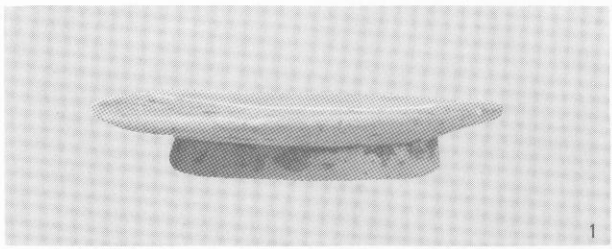


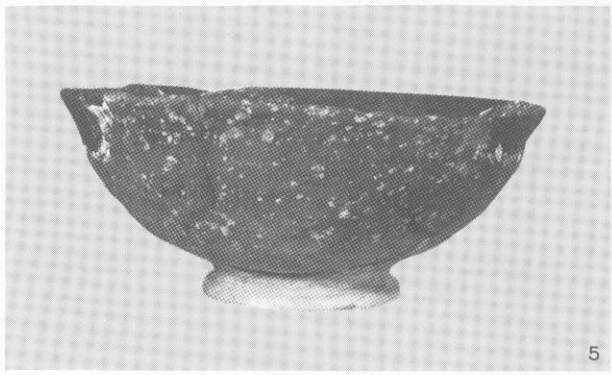


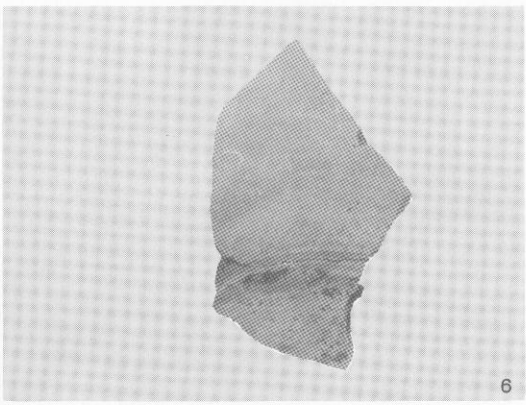


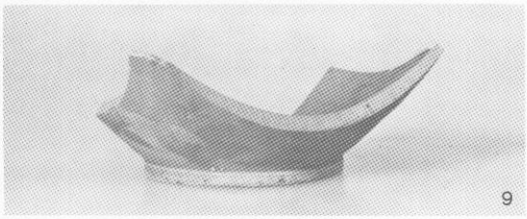




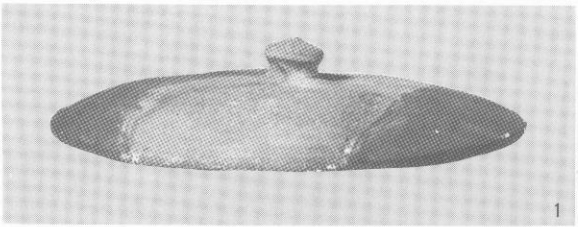


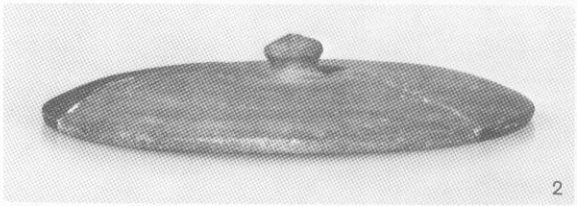


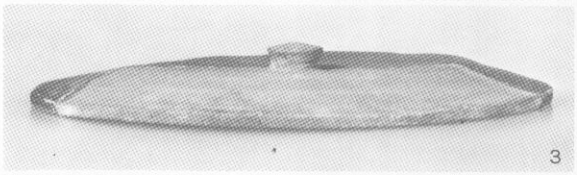


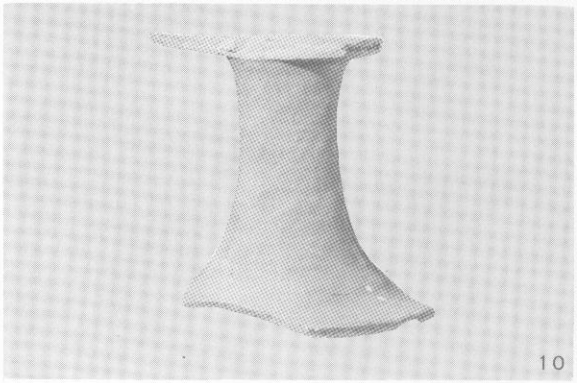


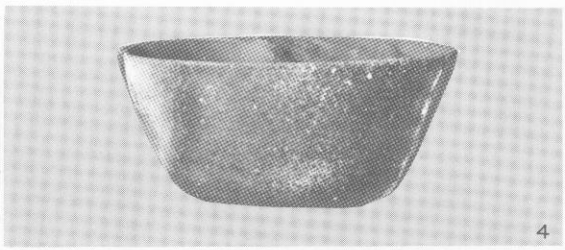
第76次調査　ＳＤ2010・ＳＤ2011・ＳＤ2012出土土器・陶磁器

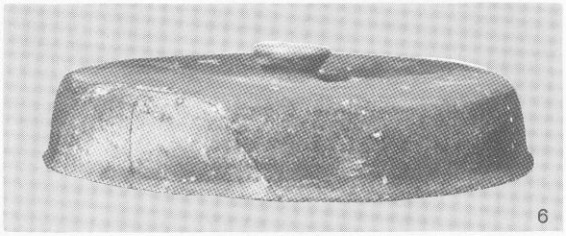

1

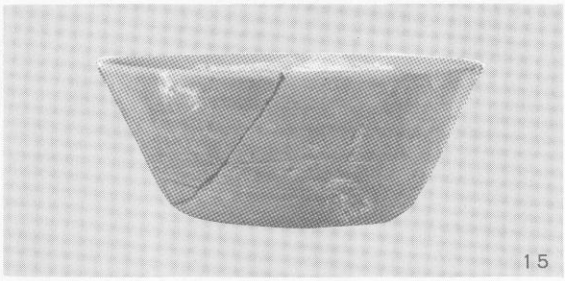

2

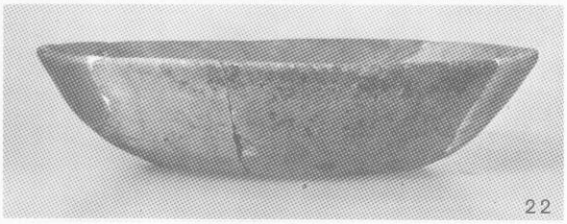

3

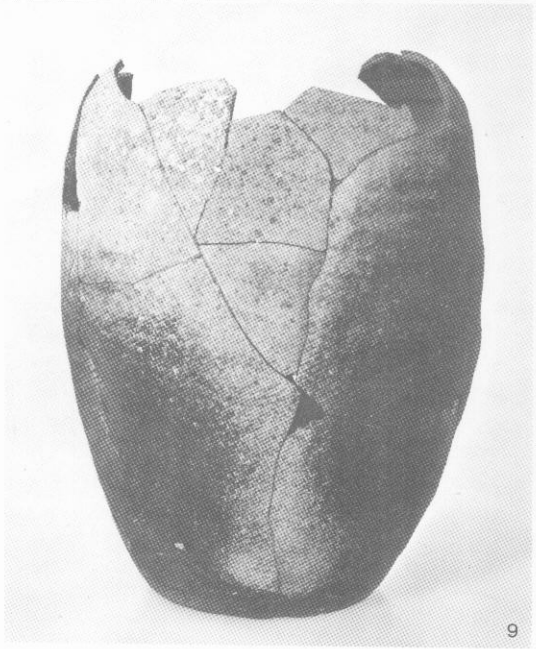

10


4


6


15

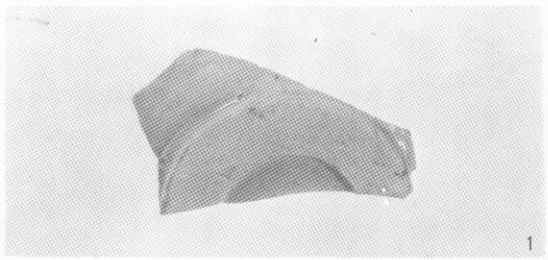

22


9


25

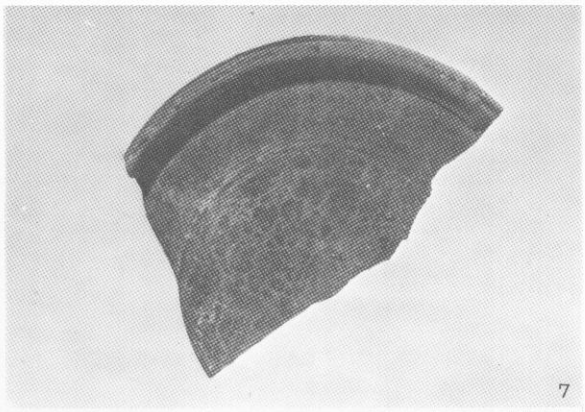

26

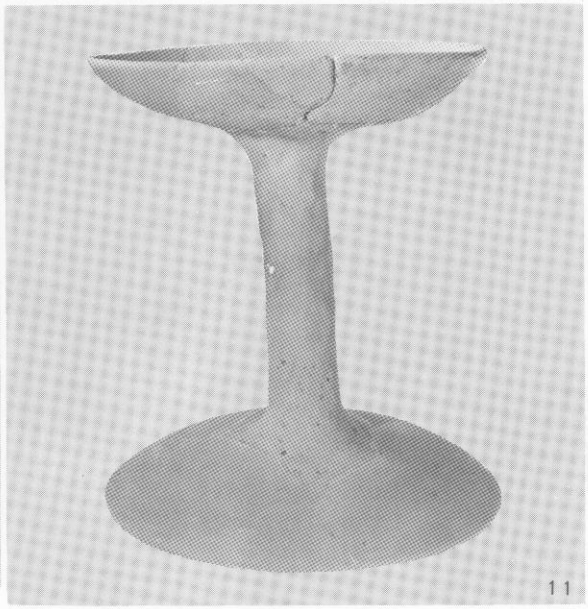
第76次調査　ＳＫ2007出土土器

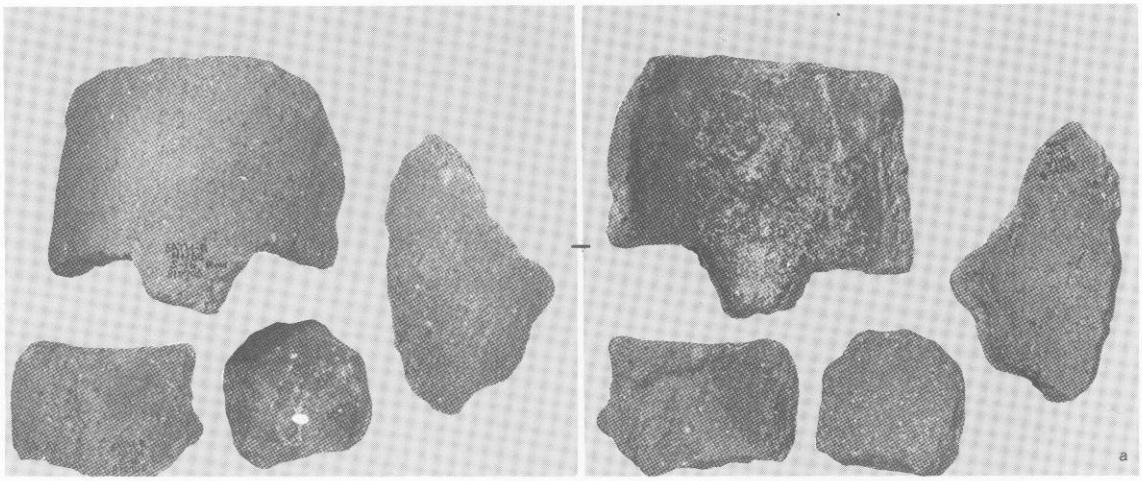




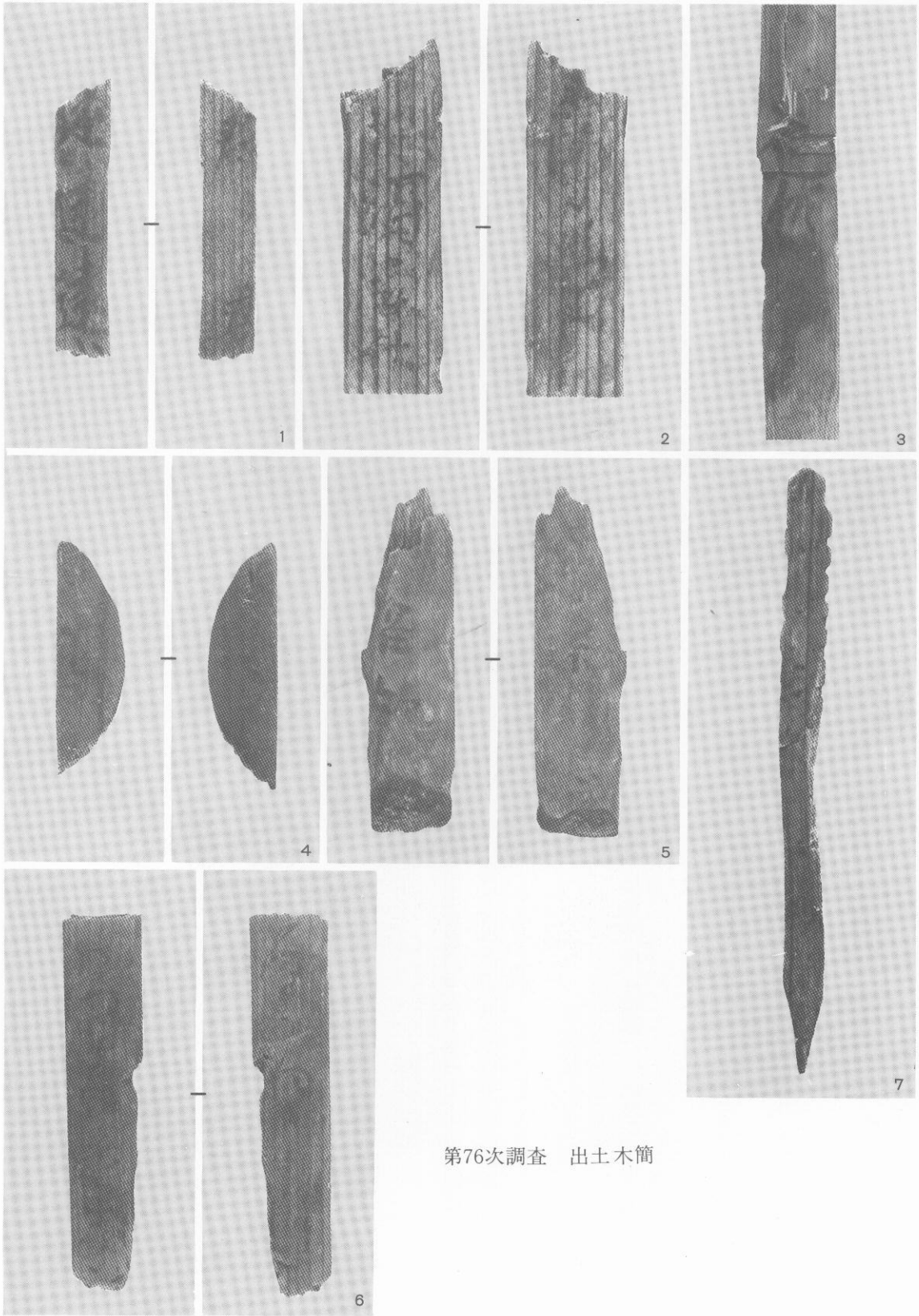




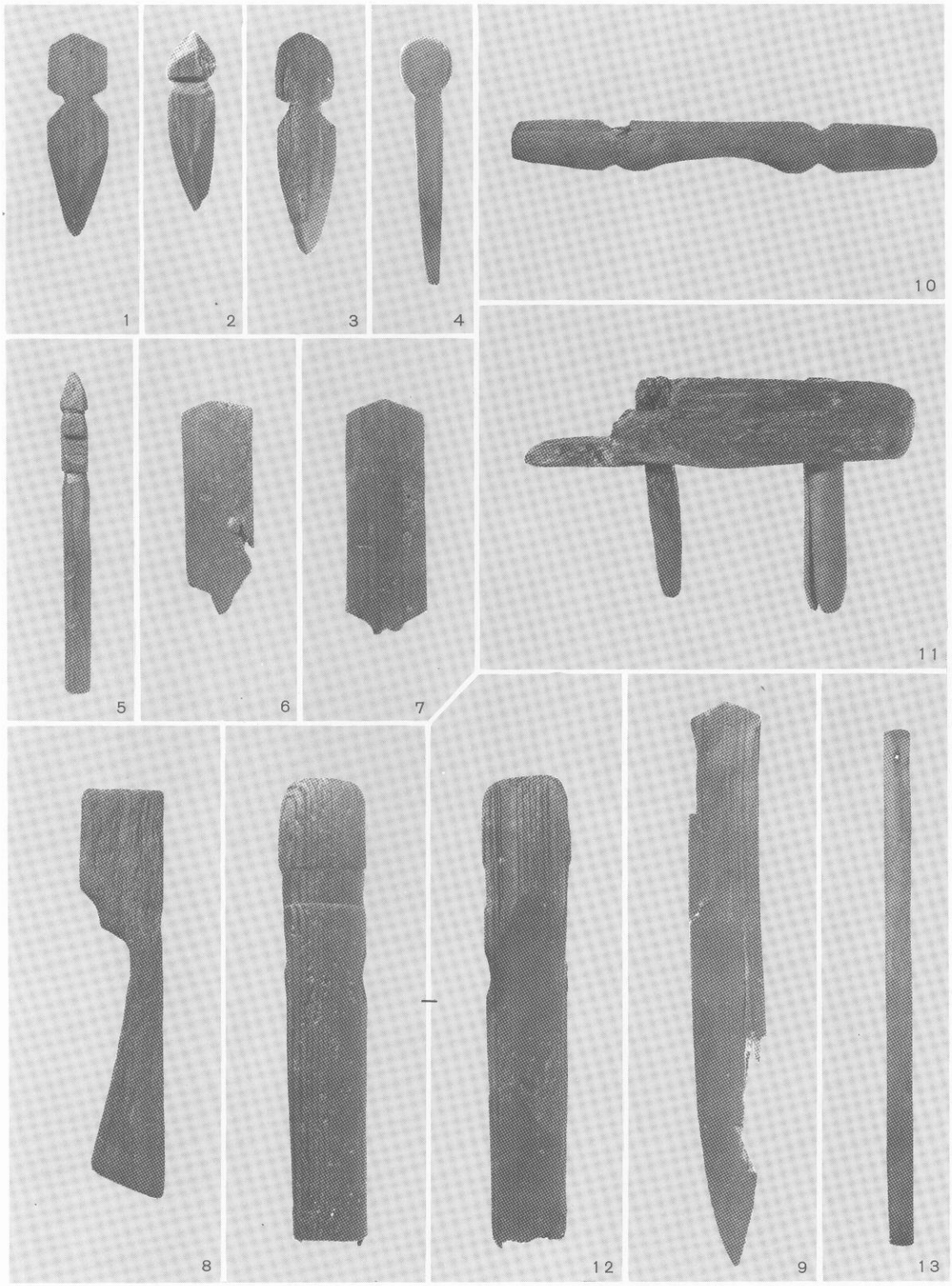




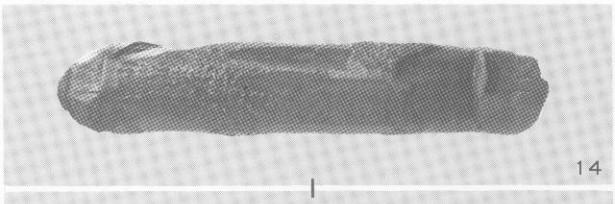
第76次調査　各層出土土器・硯・陶磁器・ＳＫ2007出土塩壺

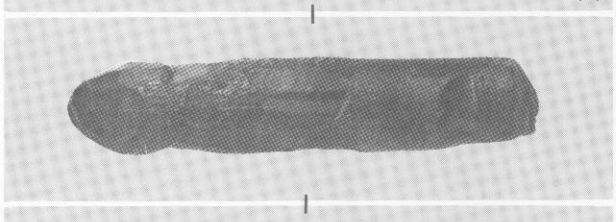


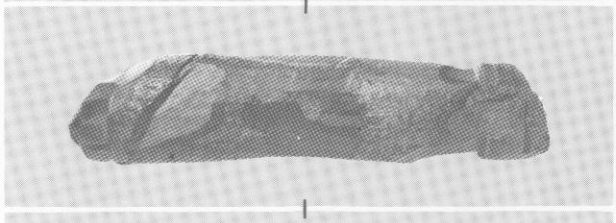
第76次調査　出土木簡

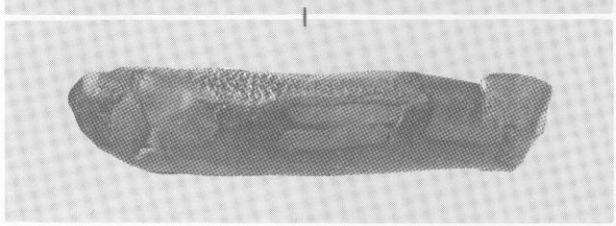


第76次調査　ＳＤ320出土木製品(1)

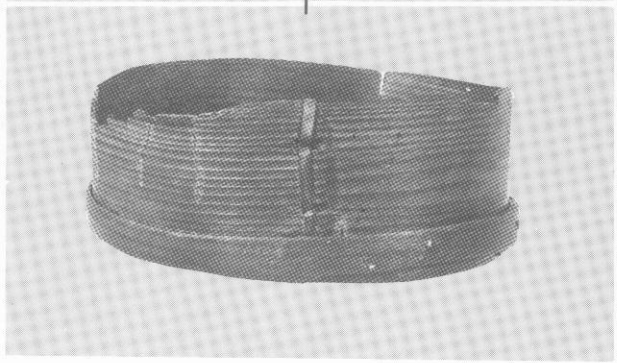

14

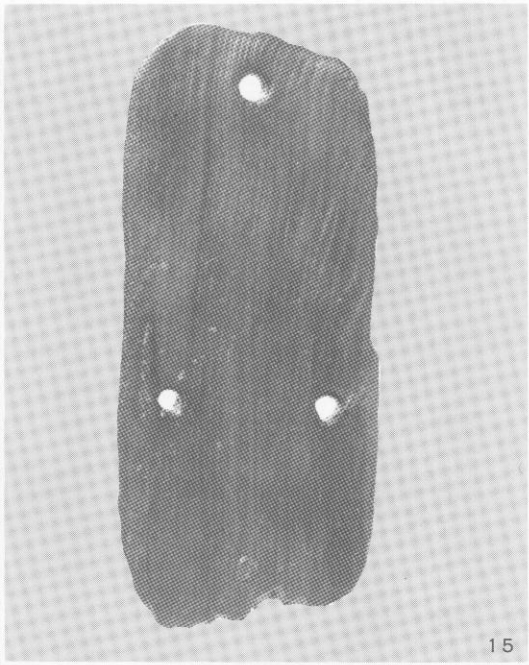


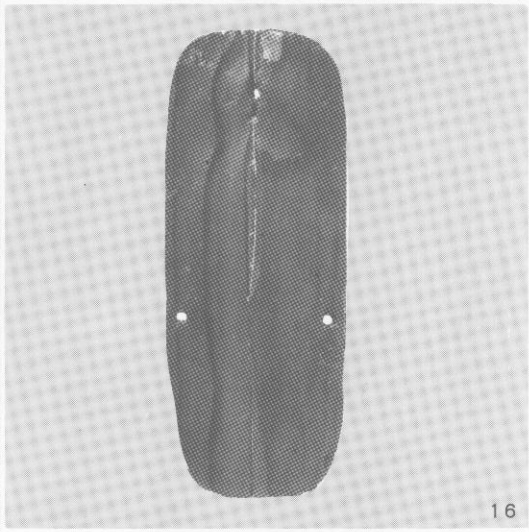


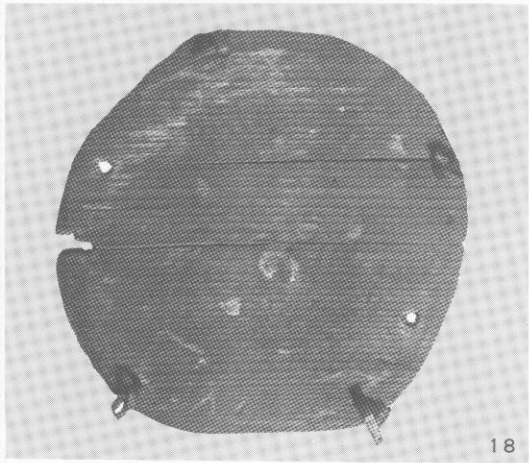



17

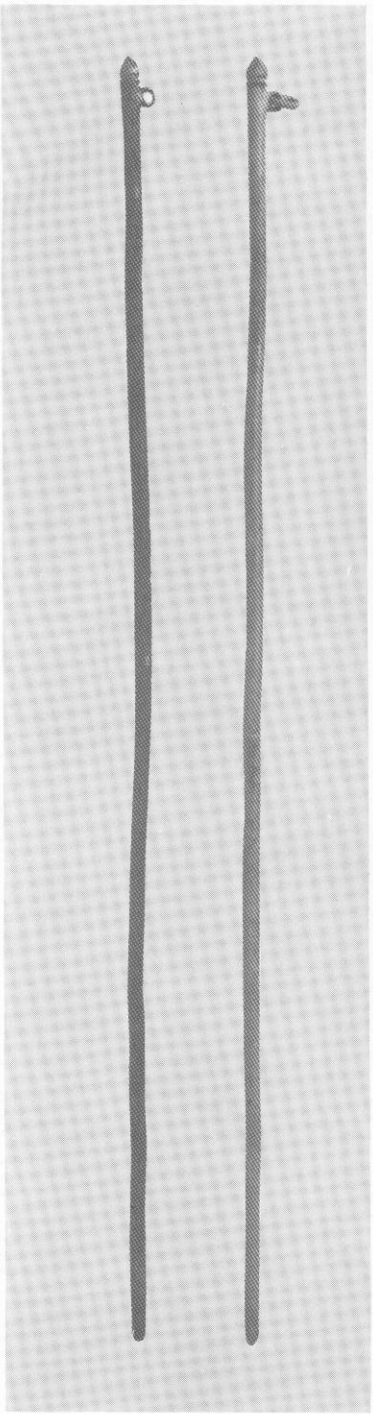


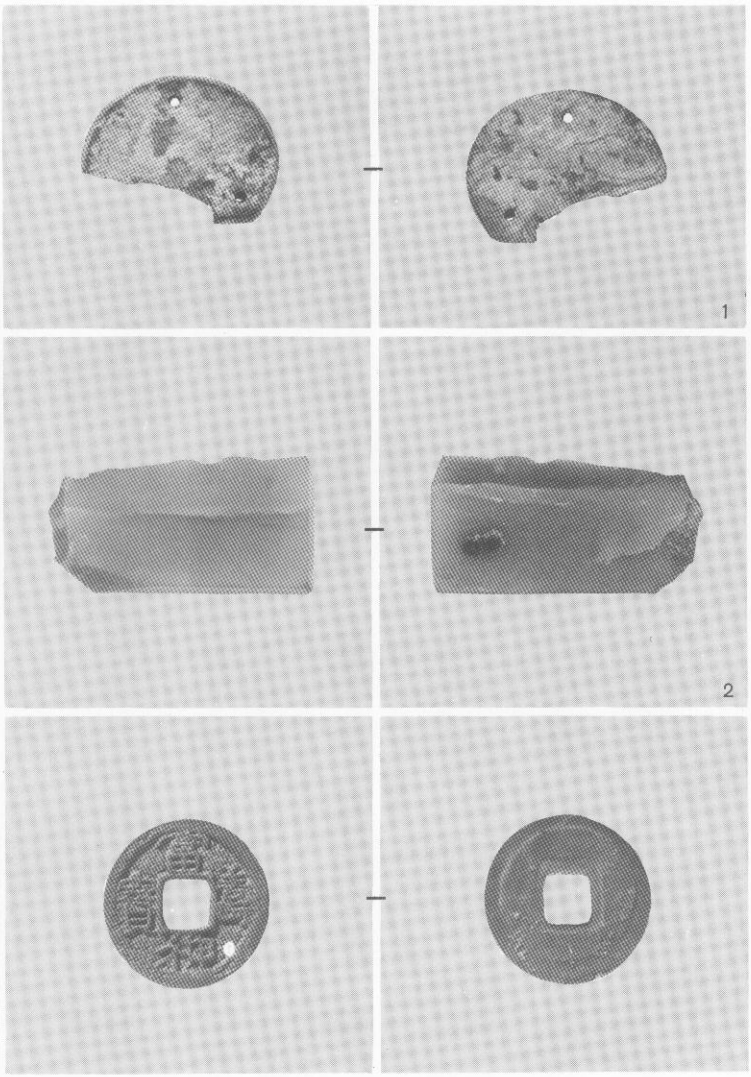

15


16

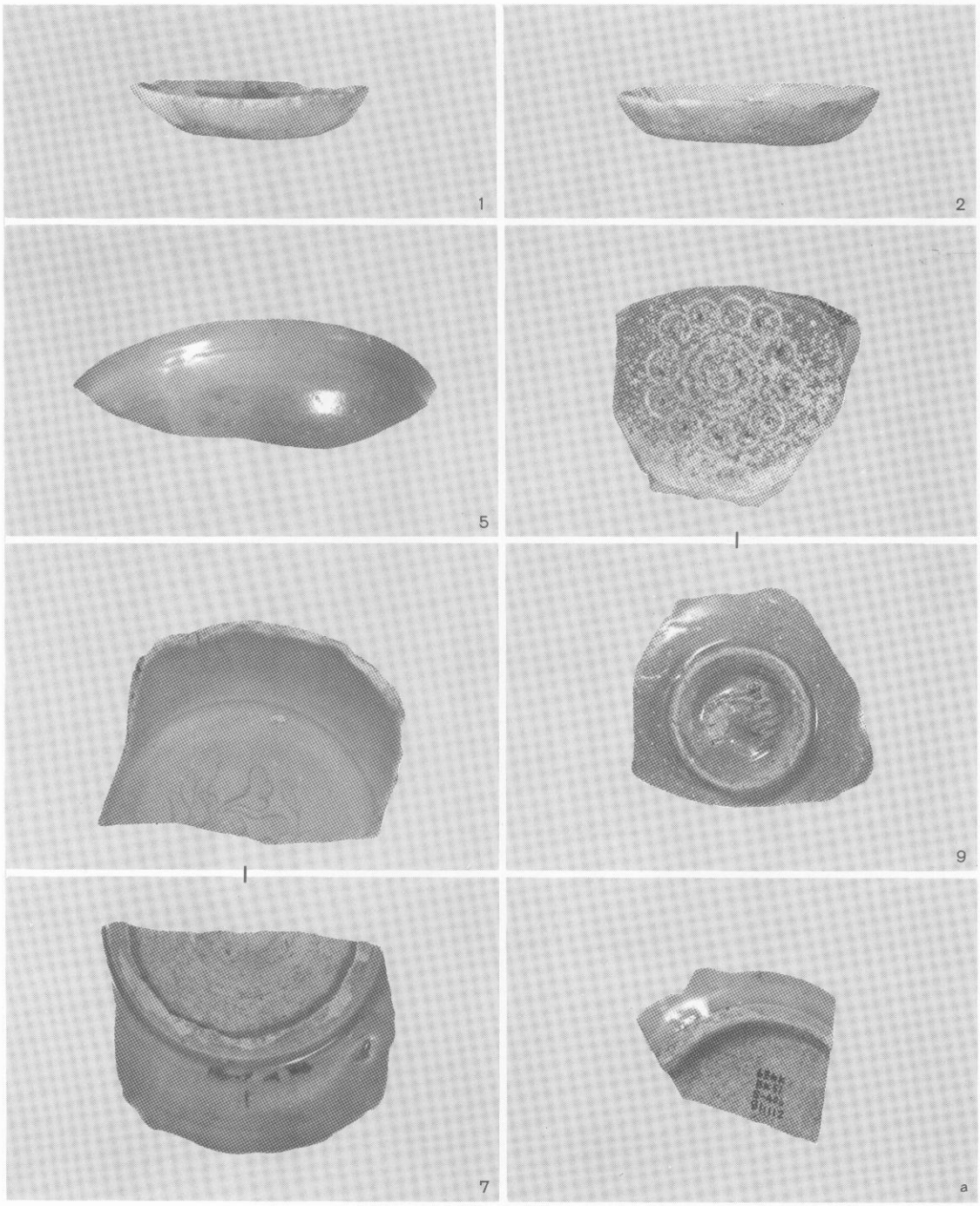

18

第76次調査　ＳＤ320出土木製品(2)

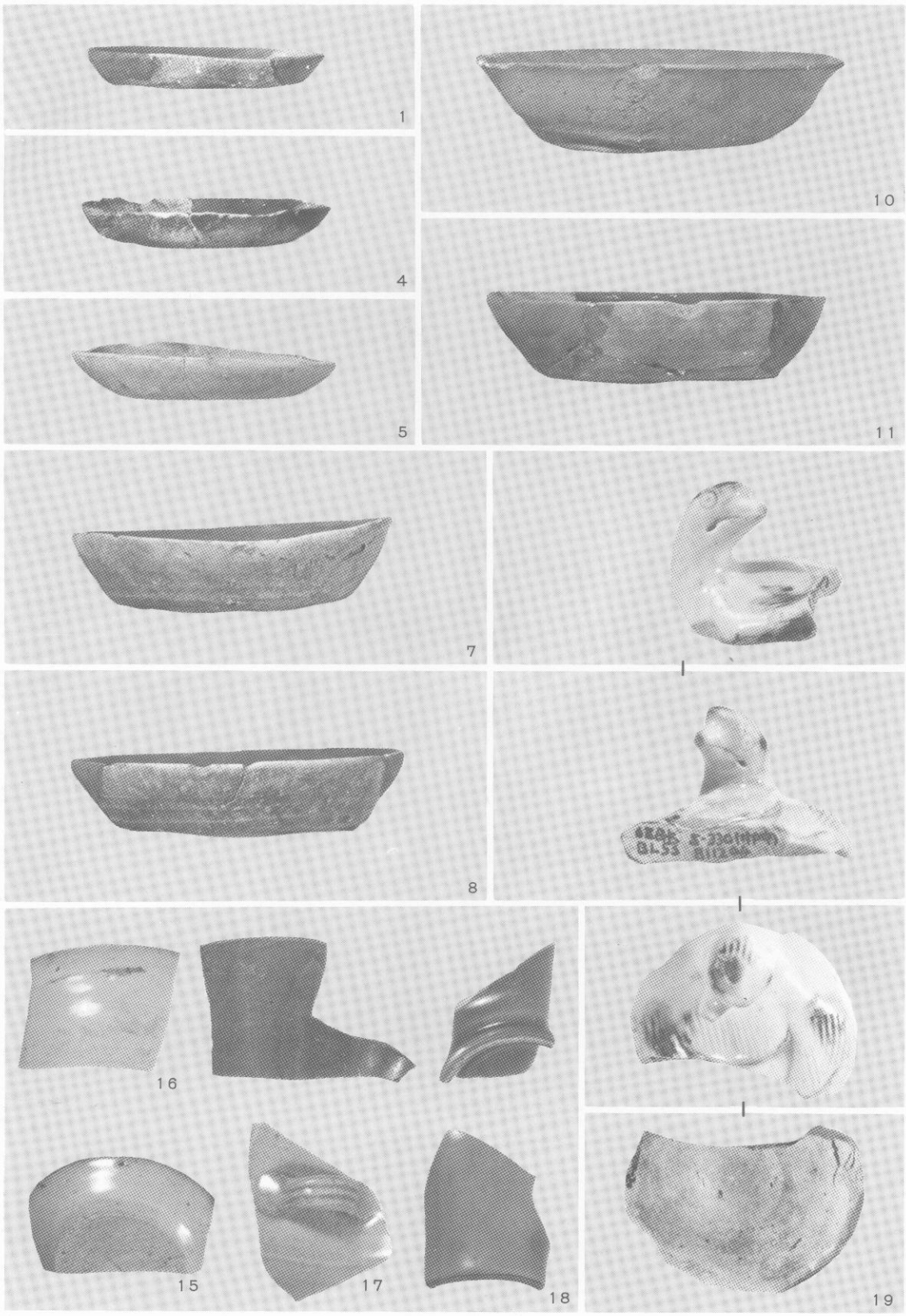




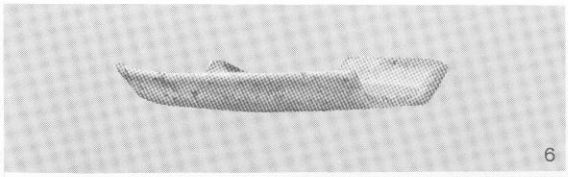
第76次調査　出土金銅製箸・石帯・富壽神寶

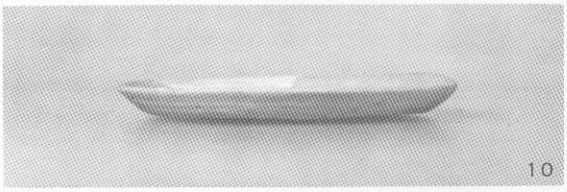


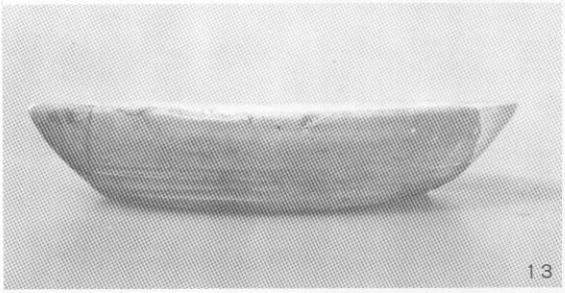
第77次調査　ＳＤ205出土土器・陶磁器

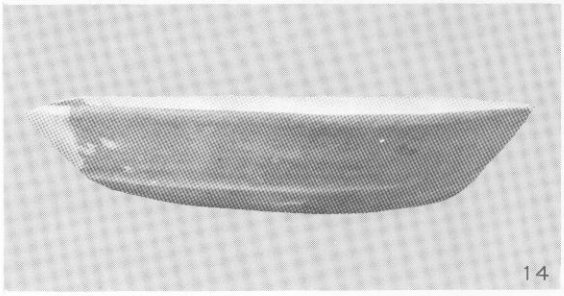


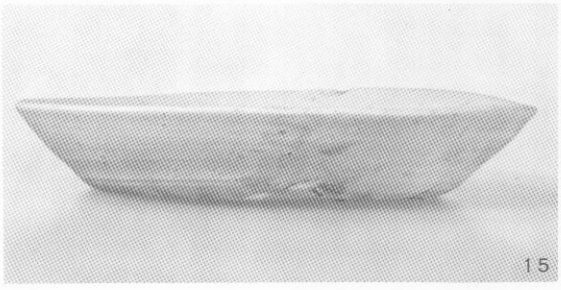
第77次調査　ＳＥ2030出土土器・陶磁器

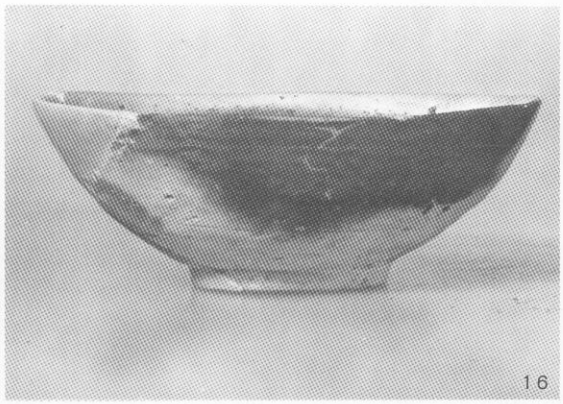

6


10


13

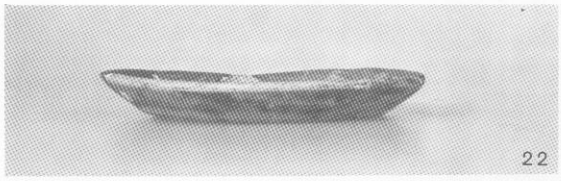

14

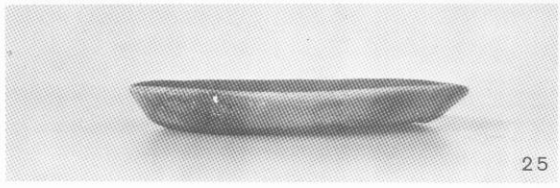

15

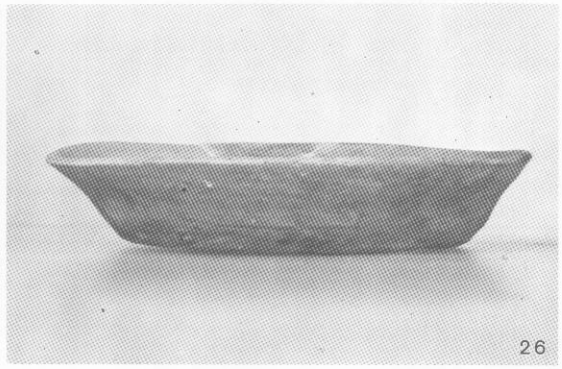

16


18


19

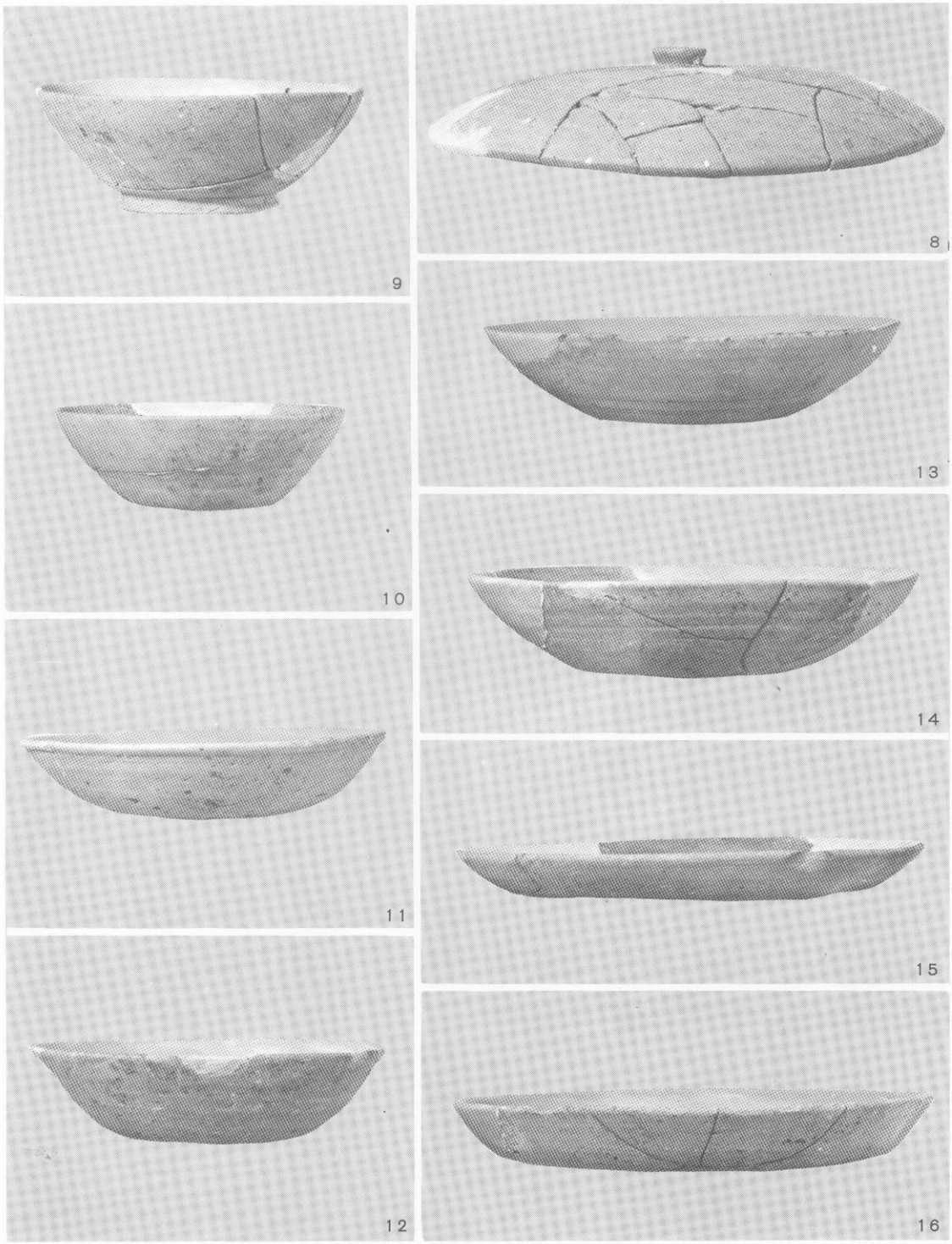

22


25

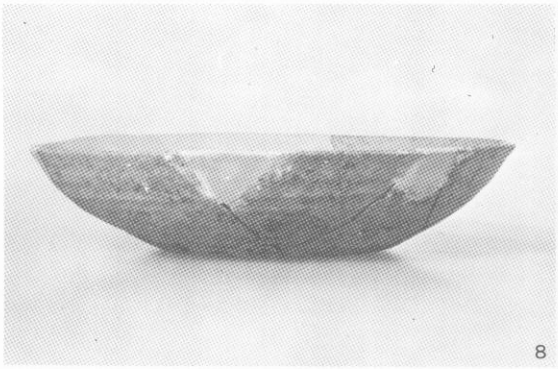

26

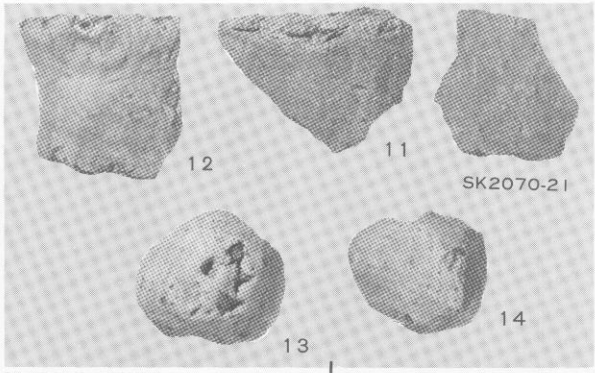
第77次調査　ＳＥ2045・ＳＥ2055出土土器・陶磁器

図版102

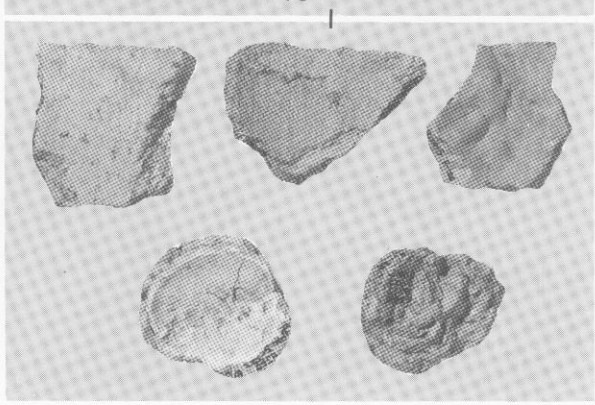


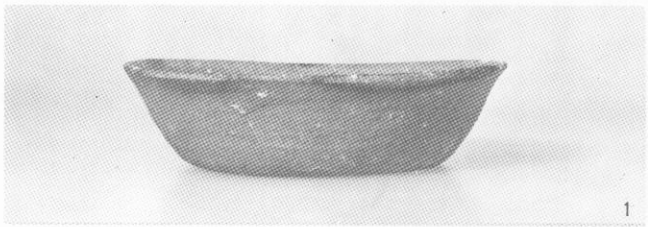
第77次調査　ＳＫ2070出土土器

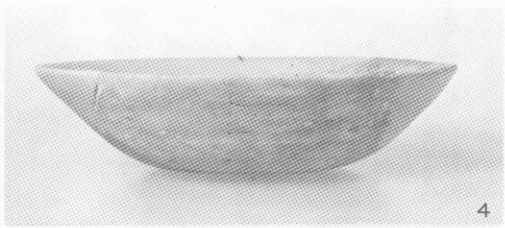

8

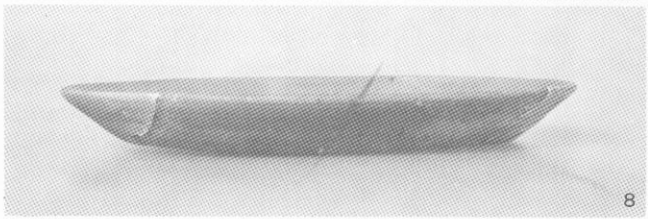


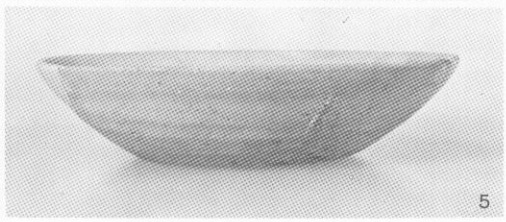

9



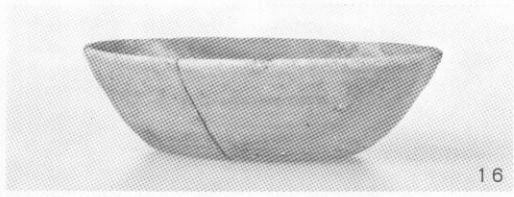

1

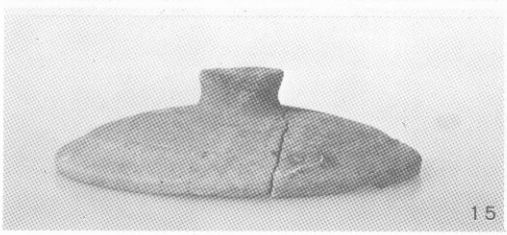

4


8


5

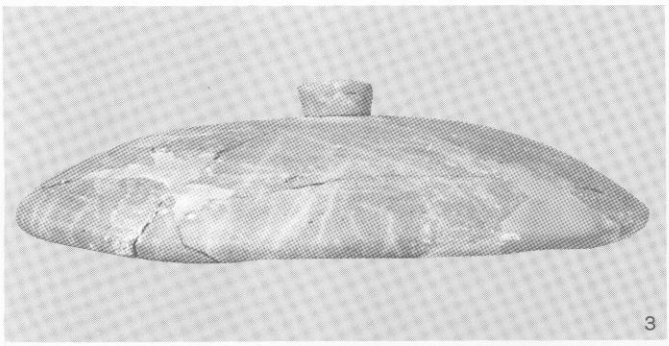

14

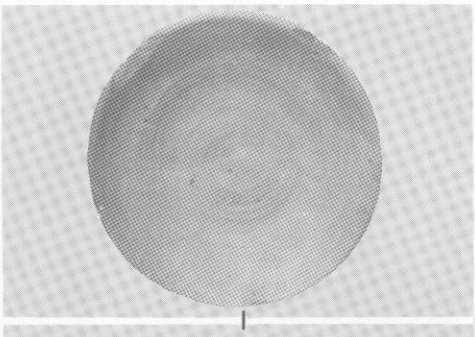

16

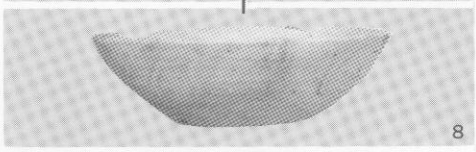

15


17

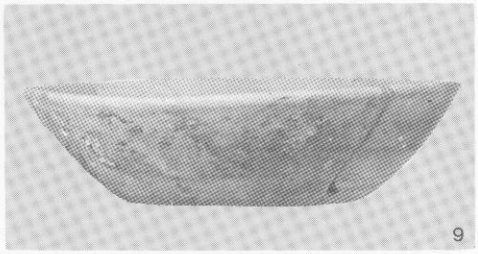
第77次調査　ＳＫ2071・ＳＫ2072・ＳＫ2074出土土器

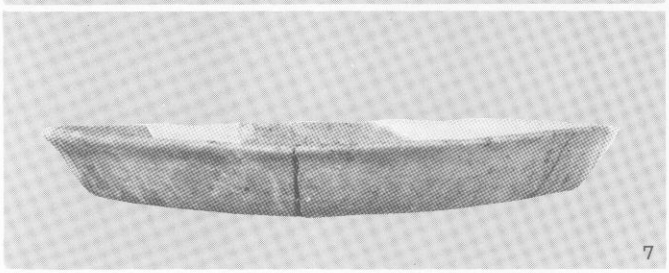

3

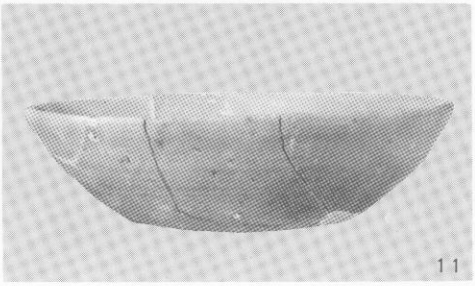


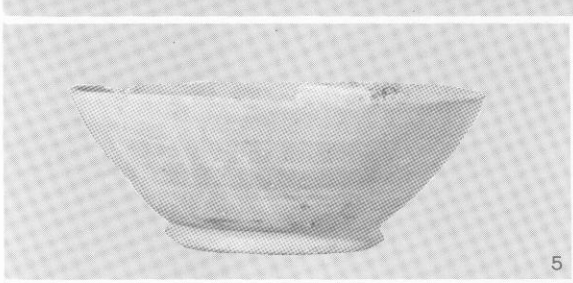

8

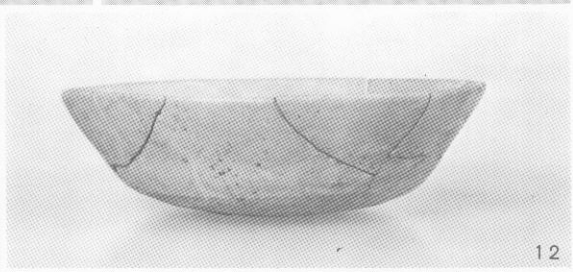

6


9


7


11

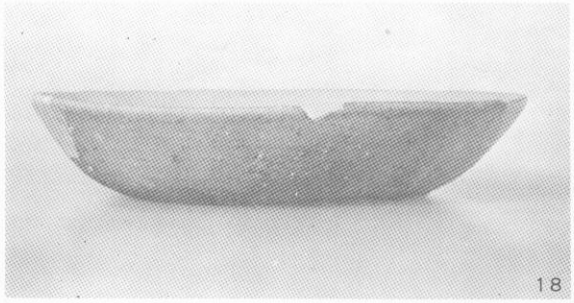

5


12

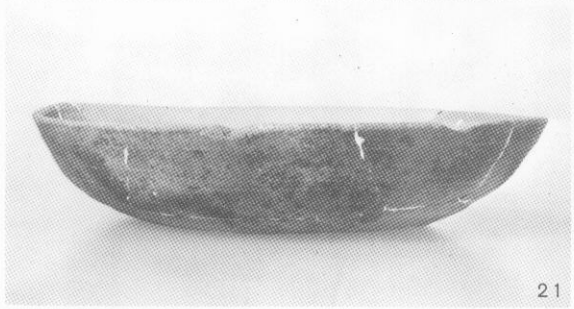

a

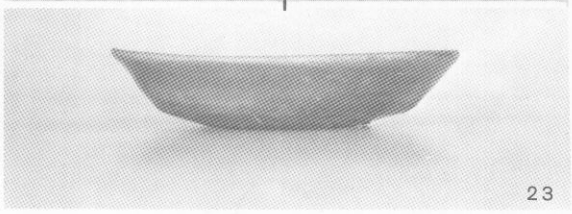

13

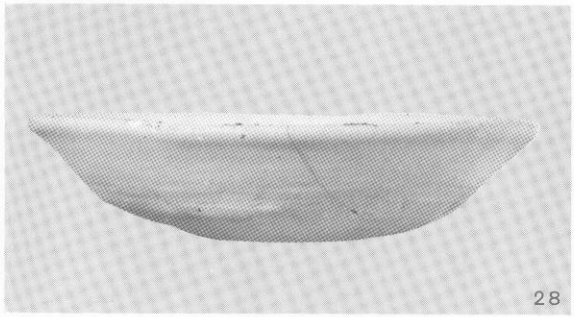
第77次調査　ＳＫ2073出土土器・陶器

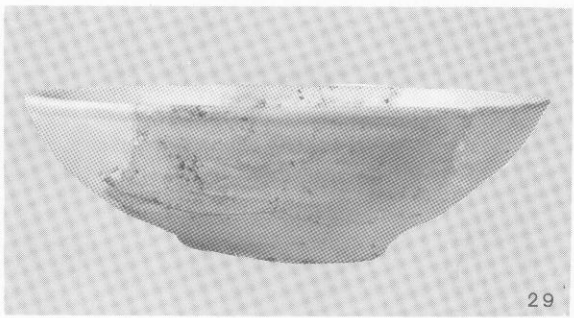

18

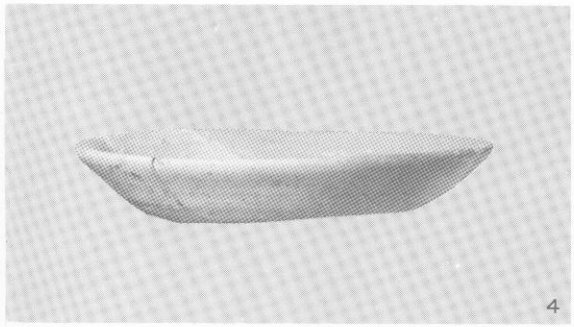



21


23


28


29


4


9


7


19

第77次調査　ＳＫ2083・ＳＫ2065・ＳＫ2077・ＳＫ2084出土土器・陶磁器

大　宰　府　史　跡

昭和56年度発掘調査概報

昭和57年3月

発行　九州歴史資料館
筑紫郡太宰府町大字太宰府字太郎左近1025

印刷　秀英社印刷株式会社
筑紫野市二日市1084－3